

茨城県教育財団文化財調査報告第50集

一般国道6号改築工事地内
埋蔵文化財調査報告書

奥谷遺跡
小鶴遺跡
(上)

平成元年3月

財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第50集

一般国道6号改築工事地内
埋蔵文化財調査報告書

おくのや 奥谷 遺跡
こづる 小鶴 遺跡
(上)

平成元年3月

財団法人茨城県教育財団

序

建設省は、一般国道6号線の交通量の増加による交通渋滞の緩和をはかるため、「茨城町バイパス」の建設を進めております。

財団法人茨城県教育財団は、建設省関東地方建設局と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、国道6号線「茨城町バイパス」建設用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

本書は、昭和61年4月から昭和62年3月にかけて発掘調査を実施した奥谷遺跡・小鶴遺跡の調査の成果を収録したものであります。

本書が、学術的な資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深め教育・文化の向上の一助としてより多くの方々に活用されることを希望いたします。

最後に、発掘調査及び整理にあたり、委託者である建設省から寄せられた御協力に対し、深く感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会、茨城町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導御協力を賜りましたことに対しまして、心より謝意を表します。

平成元年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 儀 田 勇

例 言

- 1 本書は、建設省の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和61年度に発掘調査を実施した東茨城郡茨城町に所在する奥谷遺跡及び小鶴遺跡の調査報告書である。
- 2 奥谷遺跡・小鶴遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長		川又友三郎	昭和61年4月～昭和63年5月
		磯田 勇	昭和63年6月～
副 理 事 長		磯田 勇	昭和61年4月～昭和63年3月
		小林 元	昭和63年4月～
常 務 理 事		滑川 貞雄	昭和61年4月～
事 務 局 長		堀井 昭生	～昭和62年3月
		坂場 庸克	昭和62年4月～
調 査 課 長		青木 義夫	昭和59年4月～
企 画 管 理 班	班 長	北島 健	～昭和62年3月
	〃	水飼 敏夫	昭和62年4月～
	主任調査員	山本 静男	昭和61年4月～
	係 長	田所多佳男	～昭和62年3月
	〃	園部 昌俊	昭和63年4月～
	主 任	山崎 初雄	昭和60年4月～
	主 事	富永 明	昭和62年4月～昭和63年3月
	〃	大部 章	昭和61年4月～
調 査 第 三 班	班 長	石井 毅	昭和61年度
	主任調査員	川井 正一	昭和61年度調査
	調 査 員	鯉淵 和彦	昭和61年度調査・昭和62・63年度整理・執筆
整 理 班 長		倉本富美男	昭和62年度
		沼田 文夫	昭和63年度

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、鯉淵和彦が執筆・編集を行った。
- 4 本書の作成にあたり、人骨の鑑定については、国立科学博物館人類研究部の馬場悠男氏、石器の石質鑑定については、茨城県立土浦工業高等学校校長蜂須紀夫氏、陶器の鑑定については、茨城県立歴史館学芸部長後藤道雄氏、墨書土器については、茨城キリスト教大学学長志田諄一氏に御指導をいただいた。
- 5 本書で使用した記号等については、第4章遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。

目 次

— 上 卷 —

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査方法	12
第1節 地区設定	12
第2節 遺構確認	12
第3節 遺構調査	12
第4章 遺構・遺物の記載方法	14
第1節 遺構の記載方法	14
第2節 遺物の記載方法	18
第5章 奥谷遺跡	21
第1節 遺跡の概要	21
第2節 遺構と遺物	22
1 住居跡	22

— 下 卷 —

2 掘立柱建物跡	409
3 集石遺構	433
4 土坑・地下式坑	436
5 溝	521
6 堀	541

7	井戸	545
8	柵列跡	554
9	道路跡	556
10	性格不明遺構	558
11	ピット群について	563
12	古銭一覧表	575
第3節	まとめ	578
1	縄文時代について	578
2	古墳時代について	580
3	奈良時代について	591
4	平安時代について	595
5	中世について	614
6	その他	620
第6章	小鶴遺跡	623
第1節	遺跡の概要	623
第2節	遺構と遺物	623
第3節	まとめ	627
終章	むすび	629
写真	図版	

插图目次

上 卷

第1图	奥谷遺跡周辺地形図 ……………	5	第26图	第13・14号住居跡実測図・遺物 出土位置図 ……………	56
第2图	小鶴遺跡周辺地形図 ……………	6	第27图	第13・14号住居跡カマド実測図 ……	57
第3图	奥谷・小鶴遺跡周辺遺跡位置図 ……	9・10	第28图	第13号住居跡出土遺物実測図 ……	59
第4图	調査区呼称方法概念図 ……………	12	第29图	第14号住居跡出土遺物実測図 ……	61
第5图	第1号住居跡実測図 ……………	23	第30图	第15号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………	63
第6图	第2号住居跡実測図 ……………	26	第31图	第15号住居跡出土遺物実測図 ……	64
第7图	第2号住居跡出土遺物実測図 ……	27	第32图	第16・17号住居跡実測図・遺物 出土位置図 ……………	66
第8图	第3号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………	29	第33图	第16号住居跡出土遺物実測図 ……	67
第9图	第3号住居跡出土遺物実測図 ……	31	第34图	第17号住居跡出土遺物実測図 ……	69
第10图	第4号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………	32	第35图	第18号住居跡実測図 ……………	71
第11图	第4号住居跡出土遺物実測図 ……	33	第36图	第18号住居跡出土遺物実測図(1) …	74
第12图	第5・6号住居跡実測図 ……………	35	第37图	第18号住居跡出土遺物実測図(2) …	75
第13图	第5号住居跡出土遺物実測図 ……	37	第38图	第19号住居跡実測図 ……………	76
第14图	第6号住居跡出土遺物実測図 ……	38	第39图	第19号住居跡出土遺物実測図 ……	77
第15图	第7・8・50号住居跡実測図 ……	39	第40图	第20号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………	79
第16图	第7号住居跡出土遺物実測図 ……	41	第41图	第20号住居跡出土遺物実測図 ……	79
第17图	第8号住居跡出土遺物実測図 ……	42	第42图	第21号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………	81
第18图	第9号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………	44	第43图	第21号住居跡出土遺物実測図 ……	83
第19图	第9号住居跡出土遺物実測図(1) …	46	第44图	第22号住居跡出土遺物実測図 ……	85
第20图	第9号住居跡出土遺物実測図(2) …	47	第45图	第22・32号住居跡実測図・遺物 出土位置図 ……………	86
第21图	第10号住居跡実測図 ……………	48	第46图	第32号住居跡出土遺物実測図 ……	88
第22图	第11号住居跡実測図 ……………	50	第47图	第23号住居跡実測図 ……………	88
第23图	第11号住居跡出土遺物実測図 ……	50			
第24图	第12号住居跡実測図 ……………	52			
第25图	第12号住居跡出土遺物実測図 ……	55			

第48図	第23号住居跡出土遺物実測図 …… 89	位置図 ……………129
第49図	第24号住居跡出土遺物実測図 …… 90	第76図 第40号住居跡出土遺物実測図 ……131
第50図	第24号住居跡実測図 …………… 91	第77図 第41・42・43号住居跡実測図・ 遺物出土位置図 ……………132
第51図	第25号住居跡実測図 …………… 93	第78図 第41・43号住居跡カマド実測図 ……133
第52図	第25号住居跡出土遺物実測図 …… 94	第79図 第41号住居跡出土遺物実測図 ……134
第53図	第26・27号住居跡実測図 …………… 95	第80図 第43号住居跡出土遺物実測図 ……136
第54図	第26号住居跡出土遺物実測図 …… 97	第81図 第44号住居跡実測図 ……………139
第55図	第28・29号住居跡実測図 …………… 99	第82図 第44号住居跡出土遺物実測図 ……140
第56図	第28号住居跡出土遺物実測図 ……100	第83図 等45号住居跡実測図 ……………142
第57図	第29号住居跡出土遺物実測図 ……101	第84図 第45号住居跡出土遺物実測図(1) …143
第58図	第30号住居跡出土遺物実測図 ……104	第85図 第45号住居跡出土遺物実測図(2) …144
第59図	第30号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………105	第86図 第46号住居跡実測図 ……………147
第60図	第31号住居跡出土遺物実測図 ……107	第87図 第46号住居跡出土遺物実測図(1) …148
第61図	第31号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………108	第88図 第46号住居跡出土遺物実測図(2) …149
第62図	第31号住居跡掘り方実測図 ……109	第89図 第47号住居跡実測図 ……………154
第63図	第33号住居跡出土遺物実測図 ……110	第90図 第47号住居跡出土遺物実測図 ……155
第64図	第33号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………112	第91図 第48号住居跡出土遺物実測図 ……156
第65図	第34号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………114	第92図 第48号住居跡実測図 ……………157
第66図	第34号住居跡出土遺物実測図 ……116	第93図 第49号住居跡実測図 ……………159
第67図	第35号住居跡実測図 ……………117	第94図 第49号住居跡出土遺物実測図 ……160
第68図	第35号住居跡出土遺物実測図 ……118	第95図 第47・48・49・51号住居跡切り 合い関係実測図 ……………161
第69図	第36号住居跡実測図 ……………119	第96図 第50号住居跡出土遺物実測図 ……163
第70図	第37・38号住居跡実測図 ……………120	第97図 第51号住居跡実測図 ……………164
第71図	第38号住居跡出土遺物実測図 ……121	第98図 第51号住居跡出土遺物実測図 ……165
第72図	第39号住居跡実測図 ……………124	第99図 第52・53号住居跡実測図 ……………167
第73図	第39号住居跡掘り方実測図 ……125	第100図 第52号住居跡出土遺物実測図 …168
第74図	第39号住居跡出土遺物実測図 ……127	第101図 第53号住居跡出土遺物実測図 ……168
第75図	第40号住居跡実測図・遺物出土	第102図 第54号住居跡実測図 ……………169
		第103図 第55号住居跡出土遺物実測図 ……170
		第104図 第56号住居跡実測図・遺物出土

	位置図 ……………172	第129図	第68号住居跡出土遺物実測図(1) ……208
第105図	第56号住居跡出土遺物実測図 ……174	第130図	第68号住居跡出土遺物実測図(2) ……209
第106図	第57・58号住居跡実測図・遺物 出土位置図 ……………176	第131図	第68号住居跡掘り方実測図 ……210
第107図	第57号住居跡出土遺物実測図 ……177	第132図	第69号住居跡出土遺物実測図 ……211
第108図	第58号住居跡出土遺物実測図(1) ……179	第133図	第69号住居跡実測図 ……211
第109図	第58号住居跡出土遺物実測図(2) ……180	第134図	第70号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………213
第110図	第59号住居跡実測図 ……182	第135図	第70号住居跡出土遺物実測図 ……214
第111図	第60号住居跡実測図 ……183	第136図	第71号住居跡実測図 ……216
第112図	第60号住居跡出土遺物実測図 ……184	第137図	第71号住居跡出土遺物実測図 ……218
第113図	第61号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………185	第138図	第72号住居跡出土遺物実測図 ……219
第114図	第61号住居跡出土遺物実測図 ……185	第139図	第72号住居跡実測図 ……220
第115図	第62号住居跡実測図 ……187	第140図	第73号住居跡実測図 ……222
第116図	第62号住居跡出土遺物実測図 ……188	第141図	第73号住居跡出土遺物実測図 ……223
第117図	第63号住居跡実測図 ……189	第142図	第74号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………227
第118図	第63号住居跡出土遺物実測図 ……189	第143図	第74号住居跡出土遺物実測図(1) ……228
第119図	第64号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………190	第144図	第74号住居跡出土遺物実測図(2) ……229
第120図	第64号住居跡出土遺物実測図 ……191	第145図	第75号住居跡実測図 ……233
第121図	第65号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………193	第146図	第75号住居跡出土遺物実測図 ……234
第122図	第65号住居跡出土遺物実測図 ……194	第147図	第76号住居跡出土遺物実測図 ……235
第123図	第66号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………195	第148図	第76号住居跡実測図 ……236
第124図	第66号住居跡出土遺物実測図 ……197	第149図	第77号住居跡実測図 ……238
第125図	第67号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………200	第150図	第77号住居跡出土遺物実測図 ……239
第126図	第67号住居跡出土遺物実測図 ……201	第151図	第78号住居跡実測図 ……240
第127図	第68号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………203	第152図	第78号住居跡出土遺物実測図 ……241
第128図	第68号住居跡カマド実測図 ……204	第153図	第79号住居跡出土遺物実測図 ……242
		第154図	第79号住居跡実測図 ……243
		第155図	第80号住居跡実測図 ……246
		第156図	第80号住居跡出土遺物実測図 ……247
		第157図	第81号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……………248

第158図	第81号住居跡出土遺物実測図 ……250	第185図	第99号住居跡実測図 ……280
第159図	第82号住居跡出土遺物実測図 ……251	第186図	第100号住居跡出土遺物実測図 ……280
第160図	第82号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……252	第187図	第100号住居跡実測図 ……281
第161図	第83号住居跡出土遺物実測図 ……253	第188図	第101号住居跡実測図 ……282
第162図	第83・84号住居跡実測図・遺物 出土位置図 ……254	第189図	第102号住居跡出土遺物実測図 ……283
第163図	第84号住居跡出土遺物実測図 ……255	第190図	第102号住居跡実測図 ……284
第164図	第85号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……257	第191図	第103号住居跡実測図 ……286
第165図	第85号住居跡出土遺物実測図 ……257	第192図	第103号住居跡出土遺物実測図 ……287
第166図	第86号住居跡実測図 ……259	第193図	第104号住居跡実測図 ……288
第167図	第86号住居跡掘り方実測図 ……260	第194図	第105号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……290
第168図	第86号住居跡出土遺物実測図 ……260	第195図	第105号住居跡出土遺物実測図 ……292
第169図	第87号住居跡実測図 ……262	第196図	第106号住居跡実測図 ……294
第170図	第88号住居跡実測図 ……263	第197図	第106号住居跡出土遺物実測図 ……295
第171図	第88号住居跡出土遺物実測図 ……264	第198図	第107号住居跡出土遺物実測図 ……295
第172図	第89号住居跡実測図 ……265	第199図	第107号住居跡実測図 ……296
第173図	第90・91号住居跡実測図 ……266	第200図	第108号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……298
第174図	第90号住居跡出土遺物実測図 ……267	第201図	第108号住居跡炉実測図 ……299
第175図	第92号住居跡実測図 ……269	第202図	第108号住居跡出土遺物実測図 ……300
第176図	第93号住居跡実測図 ……270	第203図	第109号住居跡出土遺物実測図 ……301
第177図	第93号住居跡出土遺物実測図 ……270	第204図	第109号住居跡実測図 ……302
第178図	第94号住居跡実測図 ……271	第205図	第110号住居跡実測図 ……303
第179図	第95号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……273	第206図	第111号住居跡実測図 ……304
第180図	第95号住居跡出土遺物実測図 ……274	第207図	第111号住居跡出土遺物実測図 ……305
第181図	第96・97号住居跡出土遺物実測 図 ……276	第208図	第112号住居跡実測図 ……306
第182図	第96号住居跡実測図 ……277	第209図	第113・114・115号住居跡実測図 ……308
第183図	第97号住居跡実測図 ……278	第210図	第113号住居跡出土遺物実測図 ……309
第184図	第98号住居跡実測図 ……279	第211図	第116号住居跡実測図 ……312
		第212図	第117号住居跡実測図 ……314
		第213図	第117号住居跡出土遺物実測図(1) ……315
		第214図	第117号住居跡出土遺物実測図(2) ……316

第215图	第118号住居跡実測図 ……321	第240图	第131号住居跡出土遺物実測図 ……358
第216图	第118号住居跡出土遺物実測図 ……322	第241图	第132号住居跡出土遺物実測図 ……361
第217图	第119号住居跡実測図 ……324	第242图	第132号住居跡実測図 ……362
第218图	第120号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……326	第243图	第133号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……364
第219图	第120号住居跡出土遺物実測図 ……327	第244图	第133号住居跡出土遺物実測図 ……365
第220图	第121号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……329	第245图	第134号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……367
第221图	第121号住居跡出土遺物実測図 ……331	第246图	第134号住居跡出土遺物実測図(1) ……368
第222图	第122号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……332	第247图	第134号住居跡出土遺物実測図(2) ……369
第223图	第122号住居跡出土遺物実測図 ……334	第248图	第135号住居跡実測図 ……373
第224图	第123号住居跡出土遺物実測図 ……335	第249图	第135号住居跡出土遺物実測図 ……374
第225图	第123号住居跡実測図 ……336	第250图	第136号住居跡実測図 ……376
第226图	第124号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……338	第251图	第136号住居跡出土遺物実測図 ……377
第227图	第124号住居跡出土遺物実測図 ……339	第252图	第137号住居跡実測図 ……378
第228图	第125号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……342	第253图	第137号住居跡出土遺物実測図 ……380
第229图	第125号住居跡出土遺物実測図 ……343	第254图	第138号住居跡出土遺物実測図 ……381
第230图	第126号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……345	第255图	第138号住居跡実測図 ……382
第231图	第126号住居跡出土遺物実測図 ……347	第256图	第139号住居跡実測図 ……384
第232图	第127号住居跡出土遺物実測図 ……348	第257图	第139号住居跡出土遺物実測図 ……385
第233图	第127号住居跡実測図 ……349	第258图	第140号住居跡実測図 ……386
第234图	第128号住居跡実測図 ……351	第259图	第140号住居跡出土遺物実測図 ……387
第235图	第128号住居跡出土遺物実測図 ……353	第260图	第141号住居跡実測図 ……388
第236图	第129号住居跡出土遺物実測図 ……353	第261图	第142号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……389
第237图	第129号住居跡実測図 ……354	第262图	第142号住居跡出土遺物実測図 ……390
第238图	第130号住居跡実測図 ……355	第263图	第143号住居跡実測図 ……392
第239图	第131号住居跡実測図・遺物出土 位置図 ……357	第264图	第143号住居跡出土遺物実測図 ……393
		第265图	第144号住居跡出土遺物実測図 ……394
		第266图	第144号住居跡実測図 ……395
		第267图	第145号住居跡実測図 ……398
		第268图	第145号住居跡出土遺物実測図・

拓影图	399	第270图	第146号住居跡実測图	401	
第269图	第146号住居跡出土遺物実測图	400	第271图	第147号住居跡実測图	402

— 下 卷 —

第272图	第1号掘立柱建物跡実測图	415	第299图	土坑実測图(9)	458
第273图	第2号掘立柱建物跡実測图	416	第300图	土坑実測图(10)	459
第274图	第3号掘立柱建物跡実測图	417	第301图	土坑実測图(11)	460
第275图	第4号掘立柱建物跡実測图	418	第302图	土坑実測图(12)	461
第276图	第5号掘立柱建物跡実測图	419	第303图	土坑実測图(13)	462
第277图	第6号掘立柱建物跡実測图	420	第304图	土坑実測图(14)	463
第278图	第7・8号掘立柱建物跡実測图	421	第305图	土坑実測图(15)	464
第279图	第9号掘立柱建物跡実測图	422	第306图	土坑実測图(16)	465
第280图	第10号掘立柱建物跡実測图	423	第307图	土坑実測图(17)	466
第281图	第11号掘立柱建物跡実測图	424	第308图	土坑実測图(18)	467
第282图	第12号掘立柱建物跡実測图	425	第309图	土坑実測图(19)	468
第283图	第13・14号掘立柱建物跡実測图	426	第310图	土坑実測图(20)	469
第284图	第15号掘立柱建物跡実測图	427	第311图	土坑実測图(21)	470
第285图	第16号掘立柱建物跡実測图	428	第312图	土坑実測图(22)	471
第286图	第17・18号掘立柱建物跡実測图	429	第313图	土坑実測图(23)	472
第287图	第19号掘立柱建物跡実測图	430	第314图	土坑実測图(24)	473
第288图	第20号掘立柱建物跡実測图	431	第315图	土坑実測图(25)	474
第289图	第21号掘立柱建物跡実測图	432	第316图	土坑実測图(26)	475
第290图	第1・2・3・4・5号集石遺 構実測图	435	第317图	土坑実測图(27)	476
第291图	土坑実測图(1)	450	第318图	土坑実測图(28)	477
第292图	土坑実測图(2)	451	第319图	土坑実測图(29)	478
第293图	土坑実測图(3)	452	第320图	土坑実測图(30)	479
第294图	土坑実測图(4)	453	第321图	土坑実測图(31)	480
第295图	土坑実測图(5)	454	第322图	土坑出土遺物実測图	482
第296图	土坑実測图(6)	455	第323图	地下式坑実測图(1)	506
第297图	土坑実測图(7)	456	第324图	地下式坑実測图(2)	507
第298图	土坑実測图(8)	457	第325图	地下式坑実測图(3)	508
			第326图	地下式坑実測图(4)	509

第327図	地下式坑実測図(5) ……………	510	第358図	性格不明遺構出土遺物実測図 ……	559
第328図	地下式坑実測図(6) ……………	511	第359図	第1号性格不明遺構実測図 ……	560
第329図	地下式坑実測図(7) ……………	512	第360図	第2号性格不明遺構実測図 ……	561
第330図	地下式坑実測図(8) ……………	513	第361図	第3号性格不明遺構実測図 ……	562
第331図	地下式坑実測図(9) ……………	514	第362図	ピット第Ⅰ・Ⅴ群実測図 ……	571
第332図	地下式坑実測図(10) ……………	515	第363図	ピット第Ⅱ群実測図 ……	572
第333図	地下式坑実測図(11) ……………	516	第364図	ピット第Ⅲ群実測図 ……	573
第334図	地下式坑実測図(12) ……………	517	第365図	ピット第Ⅳ群実測図 ……	574
第335図	地下式坑実測図(13) ……………	518	第366図	古銭拓影図(1) ……	576
第336図	地下式坑実測図(14) ……………	519	第367図	古銭拓影図(2) ……	577
第337図	地下式坑実測図(15) ……………	520	第368図	奥谷遺跡遺構分布図(1)・卷末折込	
第338図	地下式坑出土遺物実測図 ……	521	第369図	奥谷遺跡遺構分布図(2)・卷末折込	
第339図	溝出土遺物実測図(1) ……	528	第370図	時期別住居跡規模・主軸方向(1) …	589
第340図	溝出土遺物実測図(2) ……	529	第371図	時期別住居跡規模・主軸方向(2) …	590
第341図	第1・2号溝実測図 ……	533	第372図	時期別住居跡規模・主軸方向(3) …	603
第342図	第3・4・6号溝実測図 ……	534	第373図	時期別住居跡規模・主軸方向(4) …	604
第343図	第5号溝(居館跡)実測図 ……	535	第374図	土器編年図(1) ……	605
第344図	第7・8号溝実測図 ……	536	第375図	土器編年図(2) ……	606
第345図	第9号溝実測図 ……	537	第376図	土器編年図(3) ……	607
第346図	第10・11・13号溝実測図 ……	538	第377図	土器編年図(4) ……	608
第347図	第12・14号溝実測図 ……	539	第378図	土器編年図(5) ……	609
第348図	第15・16・17号溝実測図 ……	540	第379図	土器編年図(6) ……	610
第349図	堀出土遺物実測図 ……	542	第380図	地割と第1号堀遺構 ……	615
第350図	第1号堀実測図……………	543~544			
第351図	井戸出土遺物実測図(1) ……	549		小 鶴 遺 跡	
第352図	井戸出土遺物実測図(2) ……	550			
第353図	第1・3・4・5号井戸実測図 ……………	552	第381図	第1号住居跡・第1号溝実測図 …	624
第354図	第2号井戸実測図 ……	552	第382図	第1号住居跡出土遺物実測図・ 拓影図 ……	626
第355図	第6・7号井戸実測図 ……	553			
第356図	第1・2号柵列跡実測図 ……	555			
第357図	第1・2号道路跡実測図 ……	557			

表 目 次

表 1	奥谷遺跡周辺遺跡一覧表	11	表 5	古銭一覧表	575
表 2	住居跡一覧表	403	表 6	墨書土器一覧表	612
表 3	土坑一覧表	436	表 7	地下式坑一覧表	618
表 4	ピット一覧表	564	表 8	掘立柱建物跡一覧表	621

写 真 目 次

PL 1	遺構全景	PL 13	第15号住居跡, 第15号住居跡掘り方, 第16・17号住居跡遺物出土状況
PL 2	調査前風景, 調査前風景, 調査前風景	PL 14	第16・17号住居跡, 第18号住居跡遺物出土状況, 第18号住居跡カマド内遺物出土状況
PL 3	遺構確認状況, 遺構確認状況, 遺構確認状況	PL 15	第18号住居跡掘り方, 第19号住居跡, 第20号住居跡
PL 4	作業風景, 見学者風景, 現地説明会	PL 16	第21号住居跡, 第22・32号住居跡遺物出土状況, 第22号住居跡
PL 5	発掘後の全景, 発掘後の全景, 発掘後の全景	PL 17	第23号住居跡, 第24号住居跡遺物出土状況, 第24号住居跡
PL 6	第1号住居跡, 第2号住居跡, 第3号住居跡遺物出土状況	PL 18	第25号住居跡, 第26・27号住居跡遺物出土状況, 第28・29号住居跡遺物出土状況
PL 7	第3号住居跡, 第4号住居跡遺物出土状況, 第5・6号住居跡	PL 19	第29号住居跡, 第30号住居跡掘り方, 第31号住居跡遺物出土状況
PL 8	第7・8・50号住居跡遺物出土状況, 第7・8・50号住居跡, 第8号住居跡	PL 20	第31号住居跡カマド内遺物出土状況, 第31号住居跡, 第31号住居跡掘り方
PL 9	第9号住居跡遺物出土状況, 第9号住居跡カマド内遺物出土状況, 第9号住居跡	PL 21	第32号住居跡, 第33号住居跡, 第33・34・35号住居跡
PL 10	第10号住居跡, 第11号住居跡遺物出土状況, 第11号住居跡	PL 22	第34号住居跡遺物出土状況, 第34号住居跡, 第36号住居跡
PL 11	第12号住居跡遺物出土状況, 第12号住居跡, 第13号住居跡		
PL 12	第14号住居跡遺物出土状況, 第14号住居跡, 第15号住居跡遺物出土状況		

- PL 23 第37・38号住居跡, 第38号住居跡カマド内遺物出土状況, 第39号住居跡遺物出土状況
- PL 24 第39号住居跡, 第39号住居跡掘り方, 第40号住居跡遺物出土状況
- PL 25 第41号住居跡遺物出土状況, 第43号住居跡遺物出土状況, 第43号住居跡
- PL 26 第44号住居跡遺物出土状況, 第44号住居跡遺物出土状況, 第44号住居跡
- PL 27 第45号住居跡, 第45号住居跡遺物出土状況, 第46号住居跡遺物出土状況
- PL 28 第46号住居跡, 第47号住居跡遺物出土状況, 第47号住居跡
- PL 29 第48号住居跡, 第49号住居跡遺物出土状況, 第49号住居跡
- PL 30 第50号住居跡遺物出土状況, 第52・53号住居跡遺物出土状況, 第54号住居跡
- PL 31 第56号住居跡, 第57号住居跡遺物出土状況, 第57号住居跡カマド内遺物出土状況
- PL 32 第57号住居跡, 第58号住居跡遺物出土状況, 第58号住居跡遺物出土状況
- PL 33 第58号住居跡カマド内遺物出土状況, 第58号住居跡, 第61号住居跡遺物出土状況
- PL 34 第61号住居跡, 第62号住居跡遺物出土状況, 第62号住居跡
- PL 35 第64号住居跡, 第65号住居跡遺物出土状況, 第65号住居跡
- PL 36 第66号住居跡遺物出土状況, 第66号住居跡カマド, 第66号住居跡
- PL 37 第67号住居跡, 第68号住居跡遺物出土状況, 第68号住居跡
- PL 38 第68号住居跡掘り方, 第69号住居跡遺物出土状況, 第70号住居跡
- PL 39 第71号住居跡, 第72号住居跡遺物出土状況, 第72号住居跡
- PL 40 第73号住居跡遺物出土状況, 第73号住居跡, 第74号住居跡遺物出土状況
- PL 41 第74号住居跡, 第75号住居跡遺物出土状況, 第75号住居跡カマド
- PL 42 第75号住居跡, 第76号住居跡, 第77号住居跡
- PL 43 第78・79号住居跡遺物出土状況, 第78・79号住居跡, 第80号住居跡
- PL 44 第81号住居跡, 第82号住居跡, 第83・84号住居跡
- PL 45 第85号住居跡, 第86号住居跡遺物出土状況, 第86号住居跡
- PL 46 第86号住居跡掘り方, 第88号住居跡, 第89号住居跡
- PL 47 第90・91号住居跡遺物出土状況, 第90・91号住居跡, 第92号住居跡
- PL 48 第93号住居跡遺物出土状況, 第95号住居跡遺物出土状況, 第95号住居跡遺物出土状況
- PL 49 第95号住居跡, 第96号住居跡, 第97号住居跡
- PL 50 第100号住居跡遺物出土状況, 第101号住居跡, 第102号住居跡
- PL 51 第103号住居跡, 第104号住居跡, 第105号住居跡遺物出土状況
- PL 52 第105号住居跡, 第106号住居跡, 第

- 107号住居跡
- PL 53 第108号住居跡遺物出土状況, 第108号住居跡, 第109号住居跡
- PL 54 第111号住居跡, 第112号住居跡, 第113・114・115号住居跡
- PL 55 第116号住居跡, 第117号住居跡遺物出土状況, 第117号住居跡遺物出土状況
- PL 56 第117号住居跡カマド内遺物出土状況, 第117号住居跡, 第118号住居跡
- PL 57 第119号住居跡, 第120号住居跡遺物出土状況, 第120号住居跡
- PL 58 第121号住居跡遺物出土状況, 第121号住居跡カマド内遺物出土状況, 第121号住居跡
- PL 59 第122号住居跡遺物出土状況, 第122号住居跡, 第123号住居跡
- PL 60 第124号住居跡遺物出土状況, 第124号住居跡, 第125号住居跡遺物出土状況
- PL 61 第125号住居跡, 第126号住居跡遺物出土状況, 第126号住居跡カマド内遺物出土状況
- PL 62 第126号住居跡, 第127号住居跡, 第128号住居跡
- PL 63 第129号住居跡, 第130号住居跡, 第131号住居跡
- PL 64 第132号住居跡遺物出土状況, 第133号住居跡遺物出土状況, 第133号住居跡
- PL 65 第134号住居跡, 第135号住居跡遺物出土状況, 第135号住居跡
- PL 66 第136号住居跡遺物出土状況, 第136号住居跡, 第137号住居跡遺物出土状況
- PL 67 第137号住居跡, 第138号住居跡, 第139号住居跡
- PL 68 第140号住居跡, 第141号住居跡, 第142号住居跡遺物出土状況
- PL 69 第142号住居跡, 第143号住居跡, 第144号住居跡
- PL 70 第145号住居跡遺物出土状況, 第145号住居跡, 第146号住居跡
- PL 71 第1号掘立柱建物跡, 第1号掘立柱建物跡掘り方, 第1・2号掘立柱建物跡
- PL 72 第3号掘立柱建物跡, 第4号掘立柱建物跡, 第5号掘立柱建物跡
- PL 73 第6号掘立柱建物跡, 第8号掘立柱建物跡, 第9号掘立柱建物跡
- PL 74 第10号掘立柱建物跡, 第11号掘立柱建物跡, 第12号掘立柱建物跡
- PL 75 第16号掘立柱建物跡, 第16号掘立柱建物跡掘り方, 第18号掘立柱建物跡
- PL 76 第1号集石, 第1号集石掘り方, 第2号集石遺構土層断面, 第2号集石, 第3号集石, 第4号集石, 第5号集石遺構土層断面, 第5号集石
- PL 77 第31号土坑, 第33号土坑, 第36号土坑, 第37号土坑, 第38号土坑, 第41号土坑, 第42号土坑, 第43号土坑
- PL 78 第44・51号土坑, 第45号土坑, 第46号土坑, 第48・52号土坑, 第49号土坑, 第50号土坑, 第58・59・60号土坑,

- 第62号土坑
- PL 79 第64号土坑, 第65号土坑, 第69号土坑, 第72号土坑, 第75号土坑, 第86号土坑, 第87号土坑, 第88号土坑
- PL 80 第89号土坑, 第90号土坑, 第95·96号土坑, 第95号土坑, 第104号土坑, 第105号土坑, 第106·209号土坑, 第107号土坑
- PL 81 第109号土坑, 第110号土坑, 第114号土坑, 第116号土坑, 第122号土坑, 第123号土坑, 第125号土坑
- PL 82 第124号土坑, 第126号土坑, 第131号土坑, 第132号土坑, 第133号土坑, 第134号土坑, 第135号土坑
- PL 83 第138号土坑, 第139号土坑, 第140号土坑, 第141号土坑, 第142号土坑, 第143号土坑, 第145号土坑, 第146号土坑
- PL 84 第147号土坑, 第151号土坑, 第154号土坑, 第155号土坑, 第179号土坑, 第192号土坑, 第212号土坑, 第215号土坑
- PL 85 第218号土坑, 第226号土坑, 第230号土坑, 第233号土坑, 第234号土坑, 第235·236号土坑, 第237号土坑, 第240号土坑
- PL 86 第254·268·269号土坑, 第255号土坑, 第256号土坑, 第273号土坑, 第274号土坑, 第282号土坑, 第283号土坑, 第284号土坑
- PL 87 第285·301·306号土坑, 第286号土坑, 第294号土坑, 第295号土坑, 第297号土坑
- 土坑遺物出土狀況, 第304·305号土坑, 第306号土坑, 第308号土坑
- PL 88 第309号土坑, 第311号土坑, 第315·317·318·319·321号土坑, 第326号土坑, 第334号土坑, 第335号土坑, 第356号土坑, 第357号土坑
- PL 89 第358号土坑, 第359·363号土坑, 第361号土坑, 第363号土坑, 第365号土坑, 第368号土坑, 第374号土坑
- PL 90 第375号土坑, 第376号土坑, 第378号土坑遺物出土狀況, 第379号土坑, 第385号土坑, 第386号土坑, 第389号土坑, 第390号土坑
- PL 91 第394号土坑, 第395号土坑, 第398号土坑, 第399号土坑, 第401号土坑, 第402号土坑, 第403号土坑, 第408号土坑
- PL 92 第409号土坑, 第420号土坑, 第421号土坑, 第423·424号土坑, 第424号土坑, 第425号土坑, 第438号土坑, 第441号土坑
- PL 93 第442号土坑, 第444号土坑, 第479号土坑, 第535号土坑, 第545号土坑, 第552·553·554·555·556号土坑, 第567号土坑, 第568号土坑
- PL 94 第573号土坑, 第582号土坑, 第583号土坑, 第584号土坑, 第585号土坑, 第645号土坑, 第646号土坑, 第647号土坑
- PL 95 第649号土坑, 第653号土坑, 第661号土坑, 第662号土坑, 第669·670号土坑, 第671号土坑, 第672号土坑, 第

- 681号土坑
- PL 96 第744号土坑, 第746号土坑, 第753・754号土坑, 第756号土坑, 第757号土坑, 第765号土坑, 第770号土坑, 第788・789号土坑
- PL 97 第790号土坑, 第791号土坑, 第808号土坑, 第809号土坑, 第812号土坑, ピット群, ピット群, ピット群
- PL 98 第1号地下式坑, 第3号地下式坑土層断面, 第4・5号地下式坑, 第5号地下式坑, 第5号地下上坑, 第7号地下式坑, 第8号地下式坑, 第9号地下式坑土層断面
- PL 99 第10号地下式坑, 第12号地下式坑, 第13号地下式坑, 第14号地下式坑土層断面, 第15号地下式坑, 第17号地下式坑, 第19号地下式坑, 第20号地下式坑
- PL 100 第21号地下式坑, 第22号地下式坑土層断面, 第24号地下式坑, 第25号地下式坑土層断面, 第28号地下式坑土層断面, 第29号地下式坑, 第30号地下式坑, 第32号地下式坑
- PL 101 第33号地下式坑土層断面, 第34号地下式坑土層断面, 第35・36号地下式坑土層断面, 第37号地下式坑土層断面, 第38号地下式坑土層断面, 第38号地下式坑, 第39号地下式坑, 第42号地下式坑
- PL 102 第1号溝, 第2号溝, 第4号溝土層断面, 第4号溝, 第6号溝, 第9号溝
- PL 103 第10号溝, 第2号柵列跡, 第12号溝, 第12号溝土層断面, 第14号溝, 第17号溝, 第16号溝土層断面, 第15号溝
- PL 104 第5号溝張り出し部B付近遺物出土状況, 第5号溝張り出し部B, 第5号溝遺物出土状況(C3c6区), 第5号溝張り出し部A, 第5号溝土層断面(J-J'), 第5号溝土層断面(I-I'), 第5号溝土層断面(D-D'), 第5号溝全景
- PL 105 第1号堀(G3h6区~G2g9区), 第1号堀(G2g9区~G3h6区), 第1号堀(G2g9区~J2d6区), 第1号堀(G2g9区~J2d6区), 第1号堀土層断面(A-A'), 第1号堀土層断面(C-C'), 第1号堀土層断面(G-G'), 第1号堀段差(H2c8区)
- PL 106 第2号井戸, 第2号井戸土層断面, 第3号井戸, 第4号井戸, 第5号井戸, 第6号井戸, 第7号井戸, 第7号井戸断面
- PL 107 第1号性格不明遺構遺物出土状況, 第1号性格不明遺構, 第1号道路跡土層断面, 第1号道路跡
- PL 108 住居跡出土土器(1)
- PL 109 住居跡出土土器(2)
- PL 110 住居跡出土土器(3)
- PL 111 住居跡出土土器(4)
- PL 112 住居跡出土土器(5)
- PL 113 住居跡出土土器(6)
- PL 114 住居跡出土土器(7)
- PL 115 住居跡出土土器(8)
- PL 116 住居跡出土土器(9)

- PL 117 住居跡出土土器(10)
- PL 118 住居跡出土土器(11)
- PL 119 住居跡出土土器(12)
- PL 120 住居跡出土土器(13)
- PL 121 住居跡出土土器(14)
- PL 122 住居跡出土土器(15)
- PL 123 住居跡出土土器(16)
- PL 124 住居跡出土土器(17)
- PL 125 住居跡出土土器(18)
- PL 126 住居跡出土土器(19)
- PL 127 住居跡出土土器(20)
- PL 128 住居跡出土土器(21)
- PL 129 住居跡出土土器(22)
- PL 130 住居跡出土土器(23)
- PL 131 住居跡出土土器(24)
- PL 132 住居跡出土土器(25)
- PL 133 住居跡出土土器(26)
- PL 134 住居跡出土土器(27)
- PL 135 住居跡出土土器(28)
- PL 136 住居跡出土土器(29)
- PL 137 住居跡出土土器(30)
- PL 138 住居跡出土土器(31)
- PL 139 住居跡出土土器(32)
- PL 140 住居跡出土土器(33)
- PL 141 住居跡出土土器(34)
- PL 142 住居跡出土土器(35)
- PL 143 住居跡出土土器(36)
- PL 144 住居跡出土土器(37)
- PL 145 住居跡出土土器(38)
- PL 146 住居跡出土土器(39)
- PL 147 住居跡出土土器(40)
- PL 148 住居跡出土土器(41)
- PL 149 住居跡出土土器(42)
- PL 150 住居跡出土土器(43)
- PL 151 住居跡出土土器(44)
- PL 152 住居跡出土土器(45)
- PL 153 住居跡出土土器(46)
- PL 154 住居跡出土土器(47)
- PL 155 住居跡出土土器(48)
- PL 156 土坑出土土器(1)
- PL 157 土坑出土土器(2)
- PL 158 地下式坑出土土器
- PL 159 溝出土土器
- PL 160 溝・堀出土土器
- PL 161 井戸出土土器
- PL 162 井戸・性格不明遺構出土土器
- PL 163 石製品(1)
- PL 164 石製品(2)
- PL 165 石製品(3)
- PL 166 土製品(1)
- PL 167 土製品(2)
- PL 168 土製品(3)
- PL 169 土製品(4)
- PL 170 鉄・青銅製品
- PL 171 鉄製品
- PL 172 古銭
- 小鶴遺跡
- PL 173 発掘前風景, 小鶴遺跡全景, 第1号住居跡土層断面
- PL 174 第1号住居跡・第1号溝土層断面, 第1号住居跡遺物出土状況, 第1号住居跡・第1号溝
- PL 175 住居跡出土土器

第 1 章 調査経緯

第 1 節 調査に至る経過

一般国道 6 号線は東京都日本橋を起点とし、千葉県を通り、本県を南北に縦断し、福島・宮城県に至っている。

近年の産業・経済の発展，車社会の発展から，本国道の交通量の増加は著しいが，現在の国道の沿線には市街地が広がり，道路の拡幅は極めて困難な状況となっている。

建設省は，増大する交通量の緩和を図るため一般国道 6 号線「茨城町バイパス」の建設を計画し，昭和53年 1 月12日に計画を決定した。

これに伴い，昭和60年12月27日，建設省関東地方建設局常陸工事事務所は，茨城県教育委員会に，建設用地内における埋蔵文化財の有無，その位置，取り扱いについて照会を求めた。

昭和61年 2 月13日，茨城県教育委員会は分布調査の結果，建設省関東地方建設局常陸工事事務所（以下，常陸工事事務所と言う）に，建設用地内に奥谷遺跡・小鶴遺跡が所在することを回答した。協議の結果，現状保存が困難であるため，発掘による記録保存の措置を講ずることとなった。茨城県教育委員会は調査機関として，財団法人茨城県教育財団（以下，茨城県教育財団と言う）を紹介した。

昭和61年 3 月 3 日，常陸工事事務所は茨城県教育財団と発掘調査実施の協議を行い，その後，茨城県教育財団では常陸工事事務所と詳細な調整を重ね，建設用地内の 2 遺跡について，昭和61年 4 月 1 日から昭和62年 3 月31日までの期間で，埋蔵文化財発掘調査を実施することで委託契約を締結した。

茨城県教育財団は，常陸工事事務所との委託契約に基づき，茨城県教育委員会の指導のもとに昭和61年 4 月から発掘調査を開始した。

第2節 調査経過

1 奥谷遺跡

奥谷遺跡は、昭和61年4月1日から昭和62年3月31日まで発掘調査を実施した。調査面積は、20,312㎡である。以下、月毎に調査経過を記載する。

- 4 月 本年度調査する区域を踏査し、調査計画を練った。茨城町教育委員会、当該地区の区長の協力を得て作業員を募集した。
- 調査のために必要な事務所、倉庫等を設置し、発掘用器材を搬入して準備を進めた。
- 5 月 6日に奥谷・小鶴遺跡合同の鍬入れ式を実施し、幅2mのトレンチ試掘を実施した。その結果、土師器片・須恵器片・陶器片・人骨等が出土した。
- 6 月 2日から重機による表土除去を県道北側部分より開始した。表土除去後、順次遺構確認作業を行い、住居跡約110軒、溝5条、土坑250基、掘立柱建物跡5棟、堀1条を検出した。住居跡の何軒かは、重複しており、また、カマドを有するものも多数認められた。
- 第1号堀から掘削を開始して堀の広がりを確認した。
- 7 月 第1～15号住居跡の調査を行った。第5・6号住居跡や第7・8号住居跡、第13・14・15号住居跡は重複しており、新旧関係の把握に手間取った。また、第15号住居跡では拡張が行われた痕跡が床面から検出された。
- 8 月 引き続き第16～19・21～30号住居跡の調査を行った。第16・17号住居跡、第26・27・28・29号住居跡は重複しており、第26・27・28・29号住居跡においては新旧関係の把握に手間取り、遺存状態も悪く、第27・28号住居跡では床面の一部、第26・29号住居跡では床面とカマドの一部しか残っていなかった。第18号住居跡では貼り床を検出した。
- 9 月 第31～44号住居跡、第1～2号掘立柱建物跡、第1～3号溝、井戸2基、土坑30基（地下式坑を含む）の調査を行った。第31号住居跡も貼り床で、北壁には砂質粘土の大型カマドを検出した。また、第33・34・35号住居跡と第15号地下式坑、第40・41・42・43・45号住居跡が重複していた。第41号住居跡から「^{かぶとがね}胃金」が出土した。
- 調査区域の東端部に建設省が工事用道路を敷設するため、住居跡39軒、土坑30基、掘立柱建物跡2棟、溝3条、井戸2基の調査を終了させ、その区域を建設省に返還した。

- 10 月 第45～54号住居跡，第4～5号溝，第1～4号集石遺構，土坑70基の調査を行った。第45号住居跡の北西壁直下の床面から横刀が切先を北へ向けて出土した。また，第47・48・49・51号住居跡と第52・53号住居跡が重複していた。耕作による攪乱がひどいため，新旧関係の究明が困難であった。
- 11 月 第55～63号住居跡，第6～8号溝，第3～6号掘立柱建物跡，土坑20基（地下式坑を含む），井戸2基の調査を行った。地下式坑を除いた多くの土坑は，時期不明であった。
- 12 月 第64～93号住居跡，土坑160基（地下式坑を含む），第7～9号掘立柱建物跡，第5号溝の調査を行った。数多くの地下式坑を県道の南西側から検出した。また，第5号溝は一辺約50mの隅丸方形を呈するもので，辺の中央に台形状の張り出し部を確認した。
- 1 月 第94～106号住居跡，土坑270基（地下式坑を含む），第10～14号掘立柱建物跡，第5号集石遺構，第5～9号溝，井戸3基の調査を行った。26日までに県道北部の住居跡98軒，土坑390基，掘立柱建物跡8軒，溝9条，井戸7基の調査を終了して31日に現地説明会を実施し，建設省に返還した。
- 2 月 第107～129号住居跡，第10～15号溝，土坑160基（地下式坑を含む），第1号堀，第15～17号掘立柱建物跡，柵列跡2条，道路跡2条の調査を行った。県道の南西直下より地下式坑が重複しているのを検出した。第1号堀内の人骨，馬骨の処理を開始した。多数の土坑を検出したが，多くは時期不明であった。
- 3 月 第130～147号住居跡，第16・17号溝，土坑70基，第18～21号掘立柱建物跡，第1号堀の調査を行った。第1号堀内から人骨・馬骨・古銭等が多く出土した。第145号住居跡から縄文式土器片が多数出土したり，第132・133・134号住居跡や第135・137号住居跡は重複していて，覆土から多量の土器片が出土した。25日には県道南部の航空写真撮影を実施し，表土埋め戻しを行って建設省に返還した。

2 小鶴遺跡

小鶴遺跡は，64m²と調査面積が少ないため，奥谷遺跡の調査の進行にあわせて，主に5月と2月に調査を実施した。以下5月と2月の調査経過を記載する。

- 5 月 6日に小鶴・奥谷遺跡合同の鍬入れ式を実施し，試掘調査を行った結果，弥生式土器片や石器の剝片等が出土し，さらに住居跡1軒，溝1条を検出した。
- 2 月 13日から第1号住居跡と第1号溝を調査した。隅丸長方形の住居跡と東西にはしっている溝が重複しており，溝は住居跡より新しいようであるが時期不明である。なお，昭和62年3月31日に建設省に返還した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

茨城町は茨城県のほぼ中央で、昭和30年の合併によって人口2万8000余の新しい町となり、東は常澄村・大洗町・旭村、南は鉾田町・小川町・美野里町、西は岩間町・友部町・内原町、北は水戸市に隣接し、県都水戸市の南方に位置している。

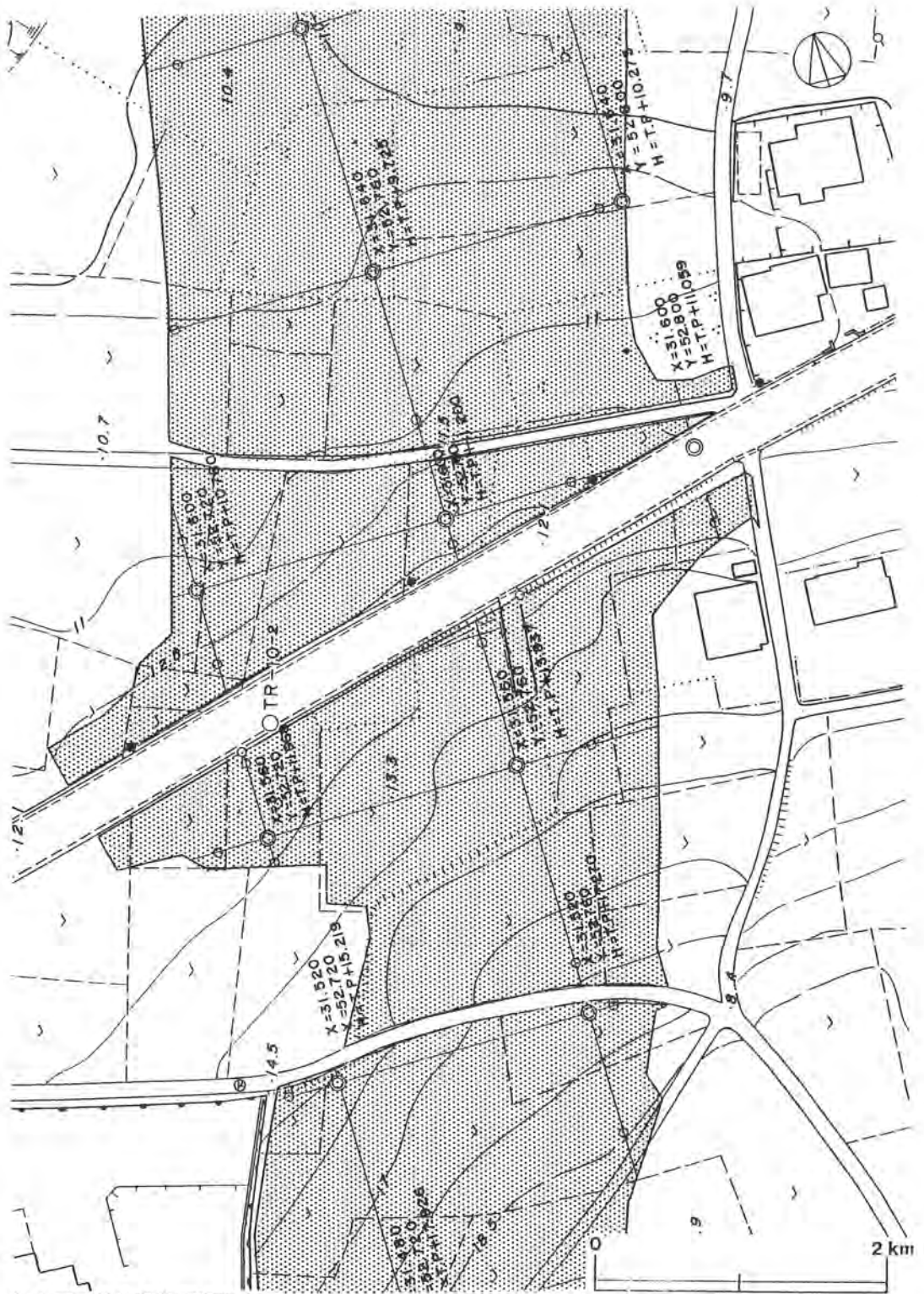
面積は約121km²と広く、涸沼川沿岸の肥沃な土地を中心に水戸街道の宿場町として発展し、長岡・小鶴・奥谷の三地区に商店街が形成されている。地域的には、北部は涸沼川・涸沼前川が流れ、その周辺部は低地で水利に恵まれ、水田がひらけ、いわば穀倉地区となっている。

西南部の上野合・小幡地区は、台地と山林で、畑地は陸稲・麦類・野菜類を中心にたばこ耕作も一部で行われている。果樹栽培も盛んで、特に栗の生産が多く、最近では野菜とともに專業化の傾向が強まっている。また、北東部の石崎地区は、台地の畑作と涸沼沿岸の半農半漁経営に特色を示し、大洗の漁業関連産業につとめている農家も多いが、近年漁獲量の減少により、資源保護に努めながら、レジャーブームによって釣客相手の舟宿を経営する家も多くなっている。

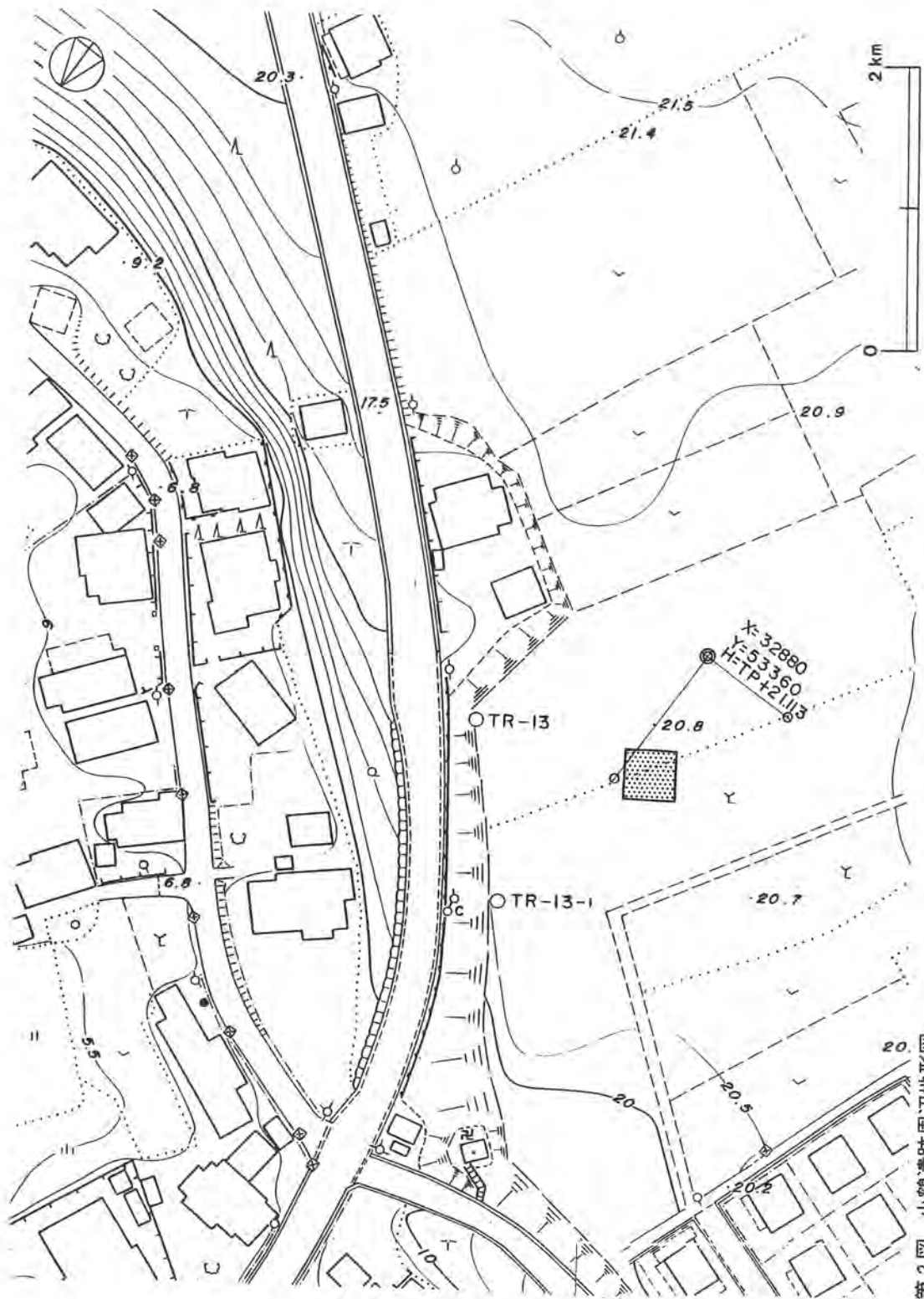
町の地形を概観すると、ほぼ中央部を西から東へ流れる涸沼川とその東に展開する涸沼によって、南北に二分されている。北部の台地は、水戸の南東台地の先端部を成し、北西から涸沼前川を含む大小の支谷が涸沼に南面して開口している。南部に発達する台地は、東から大谷川・寛政川が涸沼に流入し、その間に大小無数の支谷が台地深くまで侵入し、北部台地に比べて起伏も多く一層複雑な地勢を成している。

奥谷遺跡は、茨城町役場の西方約0.5kmの地点にあり、一般国道6号線と交差している茨城岩間線を岩間方向に右折して約200mの両側に位置し、東流して涸沼に注ぐ涸沼川右岸の標高8～18mの台地上に所在している。この遺跡が所在する付近は、涸沼川の沖積面から緩やかな高さを増し、遺跡の中央部で最も高くなり、西側へ向かってやや低くなっている。水田と台地中央部の比高は10mである。調査面積は20,312m²である。遺跡の調査前の現況は畑で、一部宅地として利用されていた。

小鶴遺跡は、一般国道6号線と交差している大洗友部線を友部方向に右折した約150mの地点右側の台地上で、茨城町役場の北側を東流する涸沼前川と南側を東流する涸沼川に挟まれた標高20mの台地先端部に位置している。調査面積は64m²で、調査前の現況は、畑として利用されていた。



第1図 奥谷遺跡周辺地形図



第2図 小鶴遺跡周辺地形図

第2節 歴史的環境

茨城町には、縄文時代から中世にかけて多数の遺跡が所在している。当町周辺は涸沼をはじめ、涸沼川・涸沼前川など水運に恵まれ、古代から舟運の中継地として重要な役割を果たしていた。ここでは、各時代にわたって人々が残した主な遺跡について述べることにする。

当町には現在までのところ先土器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代になると、県内各地に貝塚が形成されるようになり、当町でもこの時代の貝塚が確認されている。しかし、各貝塚とも発掘調査はほとんどなされておらず、以下に述べる各遺跡についても正式な調査はなされていない。唯一調査が実施された貝塚として、小堤貝塚⁽¹⁾(3)がある。当貝塚は井上義安氏によって昭和59年8月に調査され、出土土器から縄文時代後期・晩期の遺跡であることが判明した。検出された貝類はヤマトシジミが主で、他に各種の魚骨やイノシシ・シカ・キジ・カモ等の鳥獣骨も検出されている。その他、小規模であるが、涸沼川両岸に所在する越安貝塚(1)・赤坂南坪遺跡(2)をはじめ、東畑遺跡(4)・下土師遺跡(9)などでも当時代の遺物が採集されている。

弥生時代の遺跡⁽²⁾には、涸沼前川の北岸に今回調査した小鶴遺跡をはじめ、複合口縁状の土器で知られる長岡式土器の標式となっている長岡遺跡(10)が所在する。他に、寺台遺跡(5)、台畑遺跡(6)、見取遺跡(7)、寺山遺跡(8)、若宮遺跡(11)等が確認されている。現在のところ調査はされていないが、周辺には弥生式土器片の散布がみられるので付近に集落の存在が推定される。

古墳時代になると遺跡⁽³⁾の数も増加し、主な遺跡としては、5世紀初めの野曾の宝塚古墳(12)、6世紀後半に造られた東畑と内原町境近辺のドンドン塚古墳(13)等が知られており、その他、詳細は不明であるが、木部(14)、飯沼(15)、小山台(16)、神塚(17)、中石崎(18)の古墳群、下土師、東永寺の横穴(19)などがあり、特に涸沼川・涸沼沿岸に数多く点在している。また、墳頂部や墳丘に立てられた埴輪を焼いたと考えられる大窯跡群が小幡の北山(20)にある。

律令制下の奈良・平安時代の茨城町は、那賀郡八部郷、茨城郡島田・安俣・白川郷、鹿島郡宮前郷⁽⁴⁾に所属していたようである。この時代の遺跡は、今回発掘調査した奥谷遺跡をはじめとして、鳩内(21)、植農(22)、東畑(4)、小山台(16)、権現峯(23)、北宮(24)等の外、町内全域に分布がみられる。遺跡の存在と時期をうらづける資料として、『土師神主・そ』『塔上仁口』(下土師)、『西』(奥谷)、『南寺』『ちい口』(馬渡)、『里口』(海老沢)等⁽⁵⁾と墨書された土師器や須恵器が採集されている。

中世になると遺跡も少なくなり、城館跡が主である。現存する町内の城館の中では小幡城(25)が最大級の規模である。初期の城主については、小田知重の子光重、あるいは大掾氏の一族など

の説⁽⁶⁾がある。他に、片喰（26）、大戸神宮寺（27）、小堤館（28）、海老沢館（29）等が所在している。

近世になると、茨城町は町の中心部を南北に走る水戸街道に沿って長岡・小幡は宿駅⁽⁷⁾として発展した。水戸街道はいうまでもなく五街道につぐ重要路として、徳川期には22藩の大名が参勤交代のつどこの道を通じた。また、海老沢・網掛は水上交通の要所としても河岸を中心に栄え、水戸藩をはじめ、仙台藩など奥州諸藩と江戸を結ぶ輸送経路の中継基地としてきわめて重要な役割を果たしていた。

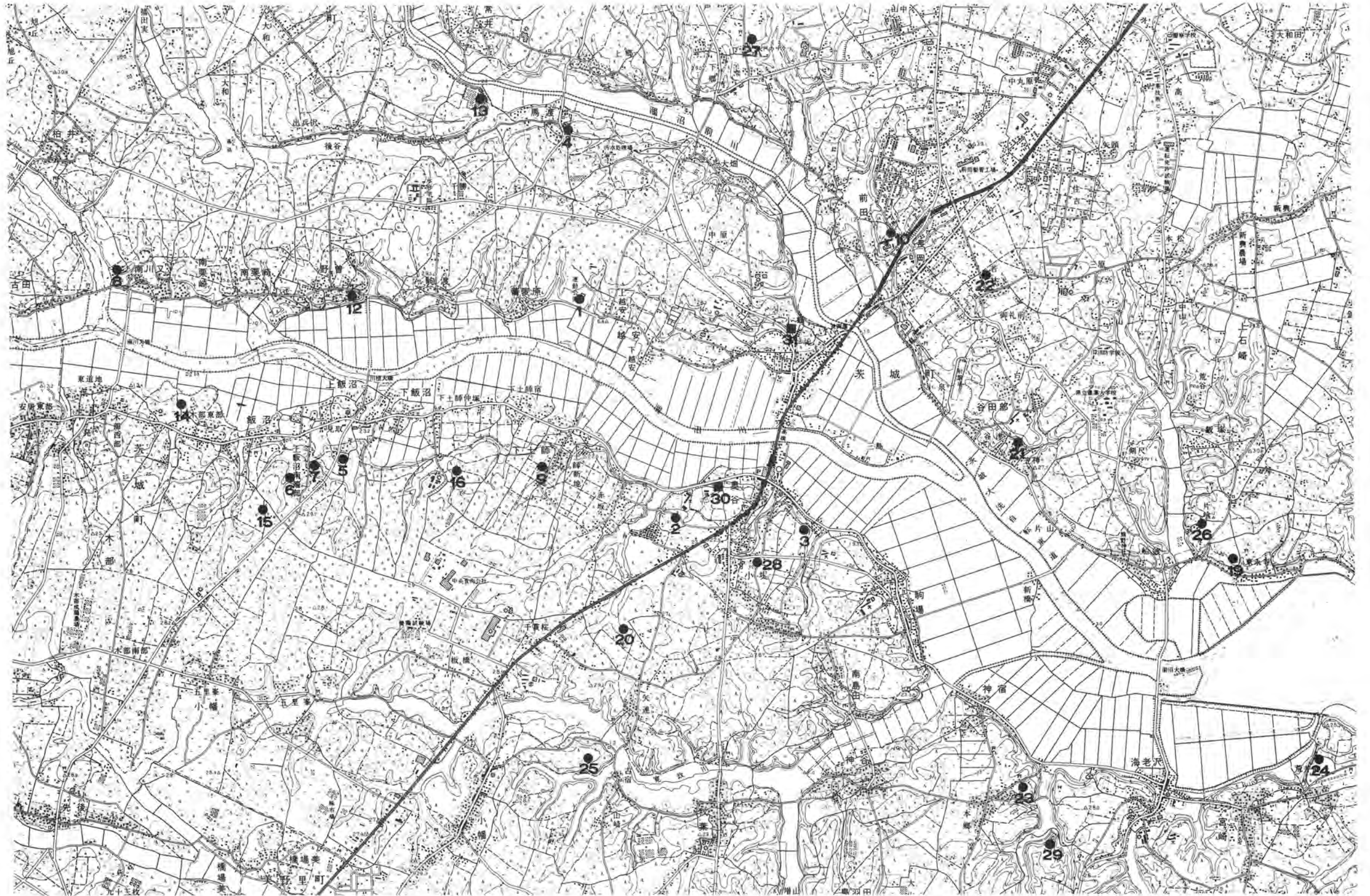
このように茨城町は、涸沼と涸沼川の水の便を擁し、古代から水運の中継地として重要な役割を果たすことにより、早くから経済的に重要な位置をしめていたことが窺える。

注

- (1) 「小堤貝塚」 茨城町教育委員会 1986年
- (2) 「茨城県史料」 原始古代編 茨城県 1985年
- (3) 「茨城県史料」 考古資料編 古墳時代 茨城県 1974年
- (4) 「新編常陸国誌」 崙書房 1979年
- (5) (6) 「水戸市史」 上巻 水戸市教育委員会
- (7) 「茨城県史料」 市町村編Ⅰ 茨城県 1972年

参考文献

- 「茨城県遺跡地図」 茨城県教育委員会 1987年



第3図 奥谷・小鶴遺跡周辺位置図

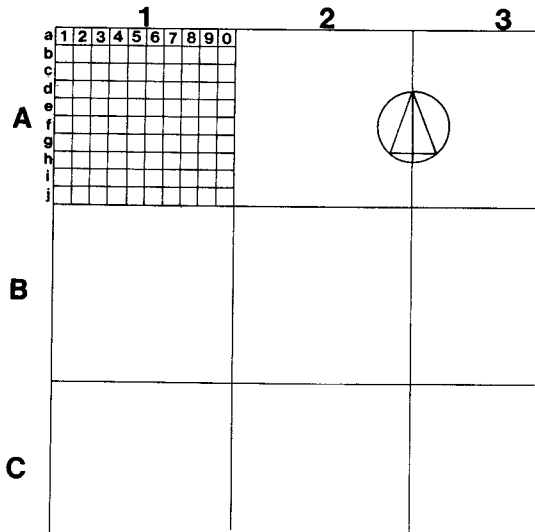
表1 奥谷・小鶴遺跡周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺跡名	時 代				図中 番号	遺跡名	時 代			
		縄文	弥生	古墳	奈,平 以降			縄文	弥生	古墳	奈,平 以降
1	越安貝塚	○				16	小山台群 古墳			○	
2	赤坂南坪 遺跡	○				17	神塚古墳群			○	
3	小堤貝塚	○	○	○		18	中石崎 古墳群			○	
4	東畑遺跡	○	○	○	○	19	東永寺の 横穴			○	
5	寺台遺跡		○	○		20	小幡北山 跡 窠群			○	
6	台畑遺跡		○	○		21	鳩内遺跡	○			
7	見取遺跡		○	○		22	植農遺跡				○
8	寺山遺跡	○	○	○	○	23	権現峯遺跡				○
9	下土師遺跡			○		24	北宮遺跡				○
10	長岡遺跡		○	○		25	小幡城遺跡				○
11	若宮遺跡	○			○	26	片喰遺跡	○	○	○	
12	宝塚古墳			○		27	大戸神宮寺 遺跡				○
13	ドンドン塚 古墳			○		28	小堤館				○
14	木部古墳群			○		29	海老沢館				○
15	飯沼古墳群			○		30	奥谷遺跡	○	○	○	○
						31	小鶴遺跡		○		

第3章 調査方法

第1節 地区設定

各遺跡の地区設定は、日本平面直角座標・第IX系、X軸（南北）、Y軸（東西）を基準線として、40m 四方の大調査区に分割し、さらに大調査区を4 m 方眼の小調査区に細分割した。調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、大調査区においては、北から南へ大文字で「A」・「B」・「C」……とし、西から東へ大文字で、「1」・「2」・「3」……とし、「A1区」・「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は北から南へa, b, c……j, 西から東へ1, 2, 3……0とし、小調査区の名称は大調査区の名称を冠し「A1b₂」, 「B2j₃」……のように呼称した。



第4図 調査区呼称方法概念図

名遺跡における基準点は次のとおりである。

- (1)奥谷遺跡……X軸（南北）-31.480 Y軸（東西）+52.720
- (2)小鶴遺跡……X軸（南北）-32.880 Y軸（東西）+53.360

第2節 遺構確認

遺構の確認作業は、遺跡全体に幅2 mの東西トレンチを入れ、遺構が存在する範囲を確認し、重機による表土除去を実施し、ローム層上面で遺構確認を実施した。

表土からの出土遺物は、出土位置、層位、出土年月日等を記録して取り上げた。

第3節 遺構調査

当遺跡における遺構の調査方法は、次のように実施した。

竪穴住居跡の調査は、平面プラン確認後、長軸方向とそれに直交する方向に、土層観察用ベルトを設け、1～4区に分割して掘り込む四分画法で実施し、地区の名称は北から時計回りに1～4区とした。

土坑の調査は、平面プラン確認後長径で二分する「二分画法」で実施し、まず、南側または東側を掘り込み、土層観察後残りの2分の1を掘り込むことを原則とした。大形のもの住居跡の調査法に準じた。井戸の調査は、土坑の調査に準じた。

溝の調査は、適宜な位置に土層観察用のベルトを設定し、掘り込んだ。

土層観察は、色相、含有物の大きさ、種類、量、硬さ、締まり、粘性等を観察した。色相の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物は、柱状に出土位置を残し、遺構の掘り下げ終了後、遺構平面と共に位置を図化し、レベルを測定後取り上げた。

遺構平面図は、遺跡内の大調査区坑を基準に、水糸で1 m 方眼を地割し、錘を使って測量した。

土層断面・遺構断面の実測は、標高を用いて水糸を水平にセットし、水糸を基準として実測した。

記録の過程は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順を基本とした。図面、写真等に記録できない事項については、遺構調査カードに記録した。

第4章 遺構・遺物の記載方法

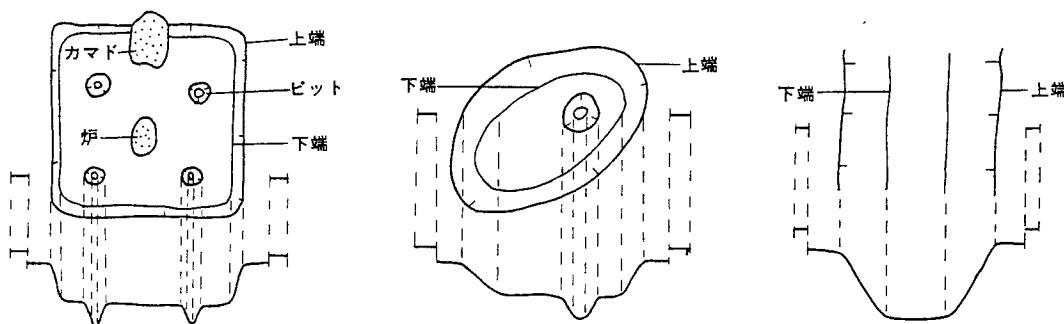
第1節 遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は、下記の要領で統一した。

(1) 使用記号

名 称	記号	名 称	記号	名 称	記号
住 居 跡	SI	柵	SA	土 器	P
土 坑	SK	道 路	SF	土 製 品	DP
堀 ・ 溝	SD	掘立柱建物跡	SB	石 製 品	Q
井 戸	SE	地 下 式 坑	SY	鉄 製 品	M
集 石	SS	性 格 不 明	SX		

(2) 遺構に伴う施設等の表示方法



(3) 土層の分類

土層観察は、『新版標準土色帳』（小山忠正・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し、整理の段階で土層を次のように分類記号化し、図中にその記号をもって載せた。

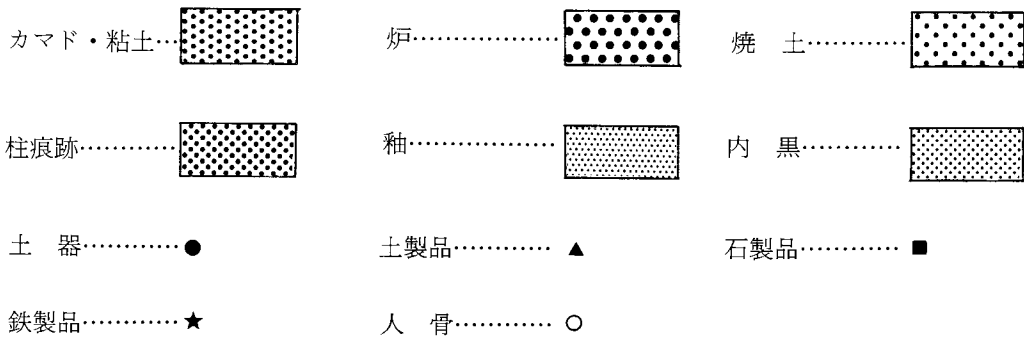
番号	土色名	色相 明度/彩度	含 有 物	粘性 締まり 硬さ
1	黒 褐 色	Hue 10YR 2/2 2/3 3/1 3/2	A ロームブロック	a しまりよく粘性あり
		Hue 7.5YR 2/2 3/1 3/2	B ローム粒子	b しまりやや弱く粘性ない
		Hue 5YR 2/1 2/2 3/1	C ハードロームブロック	c しまり弱く粘性ない

番号	土色名	色相	明度/彩度	含有物	粘性	締まり	硬さ
2	暗褐色	Hue 10YR	3/3 3/4	D ソフトロームブロック	d	しまりやや弱く粘性ややあり	
		Hue 7.5YR	3/3 3/4	E 炭化物粒子	e	しまり粘性ない	
3	褐色	Hue 10YR	4/4 4/6	F 炭化物	f	しまりよく粘性ない	
		Hue 7.5YR	4/3 4/4 4/6	G 焼土粒子	g	しまりなく粘性弱い	
4	にぶい黄褐色	Hue 10YR	4/3 5/3 5/4	H 焼土ブロック	h	しまり粘性弱い	
		Hue 2.5YR	6/3 6/4	I 粘土粒子	i	しまりなく粘性あり	
5	黒色	Hue 10YR	2/1 1.7/1	J 粘土ブロック	j	しまりなく粘性ややあり	
		Hue 7.5YR	2/1 1.7/1	K ローム粒子・焼土粒子	k	しまりよく粘性弱い	
6	灰黄褐色	Hue 10YR	4/2 5/2 6/2	L ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子	l	しまりややあり粘性弱い	
		Hue 2.5Y	6/2 7/2	M 焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子	m	やや砂質でしまりなく粘性ない	
7	明黄褐色	Hue 10YR	6/6 6/8 7/6	N 焼土粒子・炭化物粒子	n	やや砂質でしまりやや弱く粘性ない	
		Hue 2.5Y	6/6 7/6 6/8	O 焼土粒子・粘土粒子	o	やや砂質でしまりやや弱く粘性ややあり	
8	黄橙色	Hue 10YR	7/8 8/8	P 焼土粒子・炭化物粒子	p	やや砂質でしまりよく粘性あり	
9	黄褐色	Hue 10YR	5/6 5/8	Q 粘土粒子・炭化物粒子	q	やや砂質でしまりよく粘性弱い	
		Hue 2.5Y	5/3 5/4 5/6	R 黒褐色土粒子・ブロック	r	砂質でやわらかい	
10	にぶい黄橙色	Hue 10YR	6/3 6/4 7/2 7/3 7/4	S 木炭粒子	s	砂質でしまりなく粘性ない	
11	極暗褐色	Hue 7.5YR	2/3	T 灰	t	砂質でしまり粘性あり	
12	灰褐色	Hue 7.5YR	4/2	U あわ土・粒子	u	やわらかい	
		Hue 5YR	4/2 5/2	V 礫・砂礫	v	しまっている	
13	にぶい褐色	Hue 7.5YR	5/3 5/4	W 砂	w	硬い	
14	明褐色	Hue 7.5YR	5/6 5/8	X 小石	x	火をうけてさらさらしている	
15	にぶい橙色	Hue 7.5YR	6/4	Y 表土	y	もろくやわらかい	
		Hue 5YR	6/3 6/4	Z 攪乱	z	しめり気あり	
		Hue 2.5YR	6/4				
16	橙色	Hue 7.5YR	6/6 6/8				
		Hue 5YR	6/6				
		Hue 2.5YR	6/6 6/7				
17	極暗赤褐色	Hue 5YR	2/3 2/4				
		Hue 2.5YR	2/2 2/3				
18	暗・赤褐色	Hue 5YR	3/2 3/3 3/4 3/6				
		Hue 2.5YR	3/2 3/3 3/4 3/6				
19	褐灰色	Hue 5YR	4/1				
20	にぶい赤褐色	Hue 5YR	4/3 4/4 5/4 5/3				
		Hue 2.5YR	4/3 4/4 5/3 5/4				
21	赤褐色	Hue 5YR	4/6 4/8				
		Hue 2.5YR	4/6 4/8				
22	明赤褐色	Hue 5YR	5/8 5/6				
		Hue 2.5YR	5/6 5/8				
23	赤黒色	Hue 2.5YR	2/1				
24	暗赤灰色	Hue 2.5YR	3/1				
25	灰赤色	Hue 2.5YR	4/2 5/2				

番号	土色名	色相	明度/彩度	含有物	粘性 締まり 硬さ
26	淡赤橙色	Hue 2.5YR	7/3 7/4		
27	淡黄色	Hue 2.5Y	8/4 8/3		
28	赤	Hue 10R	4/6		
29	暗灰	N	3/		
30	灰白	Hue 7.5YR	8/1 8/2		
		Hue 2.5Y	7/1 8/1 8/2		
31	浅黄	Hue 2.5Y	7/3 7/4		
32	明褐灰	Hue 7.5YR	7/1 7/2		
33	オリーブ褐	Hue 2.5Y	4/3 4/4 4/6		
34	灰	Hue 5Y	4/1 5/1 6/1		
35	オリーブ黄	Hue 5Y	6/3 6/4		

(4) 遺構実測図の作成方法

本書における遺構実測図の作成方法は、次のとおりである。



・住居跡は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに4分の1、3分の1に縮小して掲載した。

・土坑・井戸は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。

・カマドは、縮尺10分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに4分の1、3分の1に縮小して掲載した。

・溝・堀は、その規模に応じて縮尺20分の1の原図を2分の1、3分の1、4分の1、8分の1に縮小したものを浄書して版組みし、それをさらに3分の1、4分の1に縮小して掲載した。

・住居跡からの出土遺物は、住居跡の断面図に出土位置を下記のドットで表示し、接合できた土器は実線で結んだ。出土遺物に付したP・DP・Q・M番号は、遺物実測図の番号を指す。

(5) 一覧表の見方について

① 住居跡一覧表

住居 番号	位置	主軸方法 (長軸方法)	平面形	規 模		床面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							

- ・住居跡番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。
- ・位置は、遺構が占める面積の割合が最も大きい小調査区で記した。
- ・主軸方向は、座標北と主軸のなす角度で記した。
- ・平面形は、掘り込み上面の形状を記した。推定のは()書きをし、不明のものは空欄とした。
- ・規模の長軸×短軸は上面の計測値、壁高は残存壁高の計測値を記した。
- ・床面は「平坦」、「凹凸」、「やや起伏」、「搦鉢状」に分類した。
- ・柱穴数は、その住居跡に伴うと考えられる柱穴数を記入し、検出されないものは空欄とした。
- ・炉とカマドは、その位置を記し、検出されない住居跡については空欄とした。
- ・覆土は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」、攪乱を受けている場合は「攪乱」と記した。
- ・出土遺物は、その遺構から出土した主な遺物名を記した。
- ・時期は、出土遺物から時期判定の可能な範囲で土器型式を記した。不明のものは空欄とした。
- ・備考は、重複関係等について記した。

②土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	出 土 遺 物	備 考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						

- ・土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で遺構でないと判断したものは欠番とした。
- ・平面形は、円形・楕円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。
 1. 円形 (短径：長径 = 1 : 1.2未満のもの)
 2. 楕円形 (短径：長径 = 1 : 1.2以上のもの)
- ・規模の欄の深さは、確認面から坑底の最も深い場合までの計測値である。
- ・壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の分類基準を設けて表示した。

- 1.垂直 (86°~90°の傾き) 2.外傾 (60°~85°の傾き) 3.緩斜 (60°未満の傾き) 4.段状
- 底面は、下記の基準を設けて表示した。
 - 1.平坦 (—) 2.皿状 (∪) 3.凸凹 (〰) 4.傾斜 (↘)
- 地下式坑は、土坑一覧表から除外し、文章で記述した。
- ピット一覧表は、土坑一覧表から除外し、土坑一覧表の項目にほぼ準じた。

第2節 遺物の記載方法

遺跡によって遺物の出土量は異なるが、可能なかぎり復元、実測、拓本等をして、できるだけ多く掲載した。

(1) 実測図の作成方法と掲載方法

① 作成方法

- 土器は、四分画法を用いて実測し、中心線を挟んで左側に外面、右側に内面及び断面を掲載した。
- 石器・石製品は、展開図法を基本とした。
- 上記以外の遺物については、効果的と思われる方法で実測した。

② 掲載方法

- 実測図の掲載にあたっては、縮尺3分の1を基本としたが、遺物の大きさによっては、2分の1、4分の1の縮尺で掲載した。
- 土器拓影図は、右側に断面を載せ、縮尺3分の1で掲載した。なお、繊維を混入するものについては、断面に点を付加した。
- 敲きの範囲は、←□□→(==)で表し、磨りの範囲は、←○○→(====)で表した。

(2) 出土遺物観察表・解説表について

遺構ごとの遺物を、次のような表にまとめた。なお、遺物解説にあたっては、下記のような名称を用いて解説した。

① 出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

- 図版番号は、実測図中の番号と同じものである。

・法量は、口径—A、器高—B、底径—C、高台径—D、高台高—E、つまみ径—G、つまみ高—Hとし、単位はcmである。なお、()は推定値である。

・胎土・色調・焼成の欄は、上から胎土、色調、焼成の順で記した。焼成については、良好、普通、不良に3分類し、焼き締まって硬いものは良好、焼成があまく手でこすると器面が剥落するものを不良とし、その中間のものを普通とした。色調については、前節の土層の分類と同じ色帖を使用した。

・備考は、完存率や付着物、その他必要と思われる事項を記した。

なお、この表で解説できない土器については、文章で解説した。

②出土土製品・石製品・鉄製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		

・図版番号は、実測図中の番号である。

・名称は、遺物の種類名を表示した。

・台帳番号は、遺物の個別番号である。

・大きさの欄の長さ・幅・厚さは、それぞれ最大長・最大幅・最大厚の計測値である。また、大きさ、重量の欄の()内数値は欠損した土製品・石製品・鉄製品の現存値である。

・備考の欄は、孔径・色調・石質・完存率等を表示した。

③古銭一覧表

図版番号	鑄 名	初 鑄 年	鑄造地名	出土地点	大きさ (cm)	重量 (g)	台帳番号

・番号は、拓影図中の番号と同じものである。

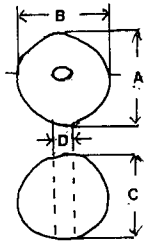
・鑄名・初鑄年・鑄造地名は、『日本貨幣型録』（日本貨幣商協同組合・1987）を参照して、表示した。

・出土地点は、出土した遺構名を記した。

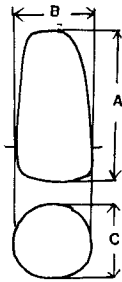
・台帳番号は、遺物の個別番号である。

・遺物の法量は、次のように計測した。

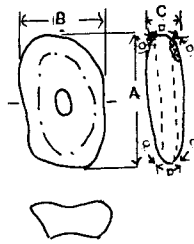
球状土錘



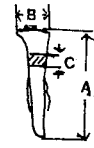
支脚



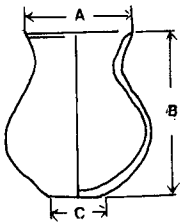
石製品



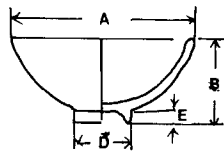
鉄製品



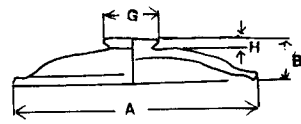
甕



高台付坏



蓋



第5章 奥谷遺跡

第1節 遺跡の概要

当遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町奥谷字小柄前1105ほかに所在し、面積は20,312㎡、東流して涸沼に注ぐ涸沼川の右岸、標高8～18mの台地上に位置している。調査の結果、堅穴住居跡147軒、土坑447基（地下式坑42基を含む）、掘立柱建物跡21棟、井戸7基、集石5基、溝17条、堀1条、道路2条、柵列2条、ピット156基、性格不明遺構3基を検出した。その内訳は次のとおりである。

縄文時代住居跡3軒（2軒は前期と思われるが、他の1軒は出土遺物が少なく不明確である。）

古墳時代住居跡26軒

奈良時代住居跡8軒

平安時代住居跡82軒

時期不明住居跡28軒

掘立柱建物跡 21棟（5基は中世以降と思われるが、他は不明である。）

溝 17条（1条は古墳時代前期と思われるが、他は不明なものが多い。）

堀 1条（中世に比定される。）

土 坑 447基（大部分は性格不明で、その中で他遺跡等における類例から室町時代のものとみられる深さ0.3～2.4mほどの地下式坑42基も含まれる。）

ピ ッ ト 156基

道 路 跡 2基（時代は、地下式坑と同時期と思われる。）

柵 列 跡 2基

井 戸 7基（3基は中世以降と思われるが、他は不明である。）

集 石 5基（縄文時代前期に比定される。）

これらの遺構の覆土中や包含層から出土している遺物は、土器類、土製品、石器、石製品、金属製品、人骨等があり、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）で381箱程出土している。土器類は、土師器、須恵器が主で、ほかに縄文式土器、弥生式土器、灰釉陶器、土師質土器、陶器なども少量出土している。器種は、日常使用されている坏、壺、甕などが主である。土師器や須恵器の坏類には、『西』、『東』などと墨で文字が書かれたものとみられる。そして、文字に伴うものとして、須恵器の円面硯が1点出土している。

土製品には、網のおもりとみられる土玉、カマド内で土器を支えるために用いられた支脚などがある。

石製品には、糸を紡ぐ時に用いられたと考えられる紡錘車、砥石などがある。

金属製品には、横刀、刀子、鋏、鎌などの鉄製品と青金（刀装具）の銅製品がある。

以上が当遺跡の概要であり、遺構・遺物の事実記載については次節以降にゆずるが、当遺跡は縄文時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世にかけて長期間にわたり、連続的あるいは断続的に集落が営まれた遺跡である。

第2節 遺構と遺物

1 住居跡

第1号住居跡（第5図）

本跡は、A5h₂区を中心に確認され、第2号住居跡の北西側3.3m、第3号住居跡の北東側2.3mに位置している。

平面形は、北東壁から北西壁にかけて攪乱を受けており、全体的に遺存状態が悪いため明確ではないが、調査した部分から推定すると、長軸5.8m・短軸5.35mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-29°-Wを指すものと思われる。残存する南東・南西壁高は3～7cmで、比較的締まりのあるロームで外傾気味に立ち上がっている。床面は全体的に平坦で、東側半分は攪乱を受けているが、攪乱を受けていない床面はロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されていたと推定されるが、カマド本体は残っておらず、極わずかの砂質粘土を検出しただけである。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、いずれも径は44～85cm、深さは45～85cmでしっかりしており、配列から支柱穴と思われる。

覆土は、全体的に攪乱を受けているため堆積状況は不明で、やや砂質でローム粒子が多量に混じる暗褐色土で、軟らかい状態である。

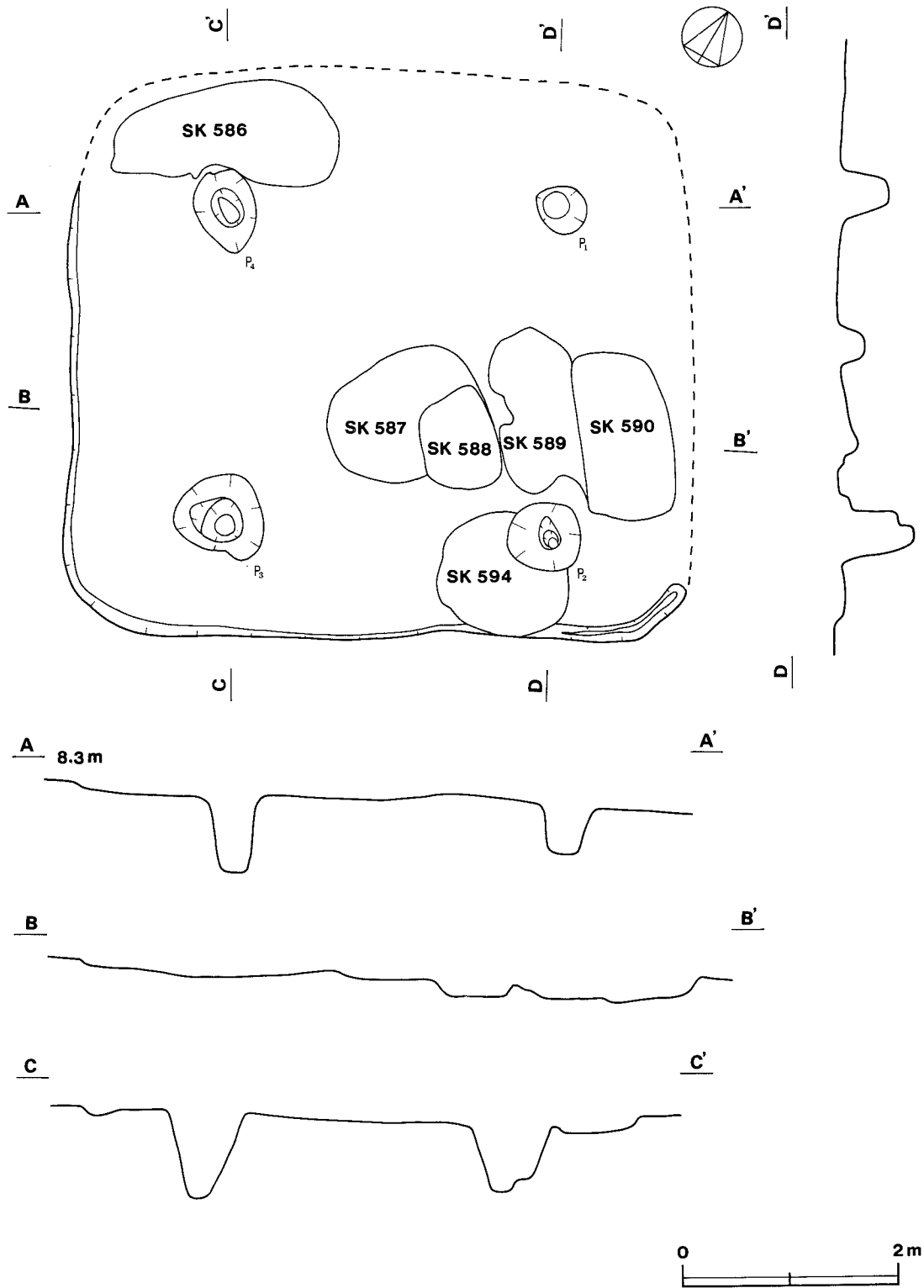
遺物は、P₂とP₃の覆土及び中央部東寄りの床面直上の3か所から各々、小石が1点づつ出土しただけである。

本跡は、時期判定する遺物は出土しなかったが、形状及びカマドを有することなどから古墳時代の鬼高期以降に比定されるものと思われる。

第2号住居跡（第6図）

本跡は、A5j₃区を中心に確認され、第1号住居跡の南東側3.3m、第3号住居跡の東側7.5mに位置している。

平面形は、本跡の中央部から東側半分がエリア外にかかっているため不明確であるが、西壁の長さは5.8mで、北西壁コーナーと南西壁コーナーが隅丸形を呈し、主軸方向はN-1°-Wを指している。壁高は41cmで、壁は締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。壁下には、上幅



第5图 第1号住居跡実測図

17~22cm・深さ5~12cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面はややゆるやかな起伏がみられ、カマドの手前及びピットに囲まれた内側は、ロームが硬くよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部は攪乱を受けて崩れている。袖部は一部しか検出できなかったが、粘土に山砂を混ぜて構築し、内側は熱を受けて焼土粒子を多量に含み、やや締まり良く焼土化している。平面形・規模等の詳細は不明である。ピットはP₁~P₅の5か所検出され、いずれも径は23~35cm、深さは9~57cmである。配列や規模からP₂・P₃は支柱穴と思われる。

覆土は、3層で、黒褐色土を主体とし、各層ともローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含み、自然堆積の様相を呈している。また、ほぼ床面全域に炭化物と焼土が検出され、火災を受けていると推定される。

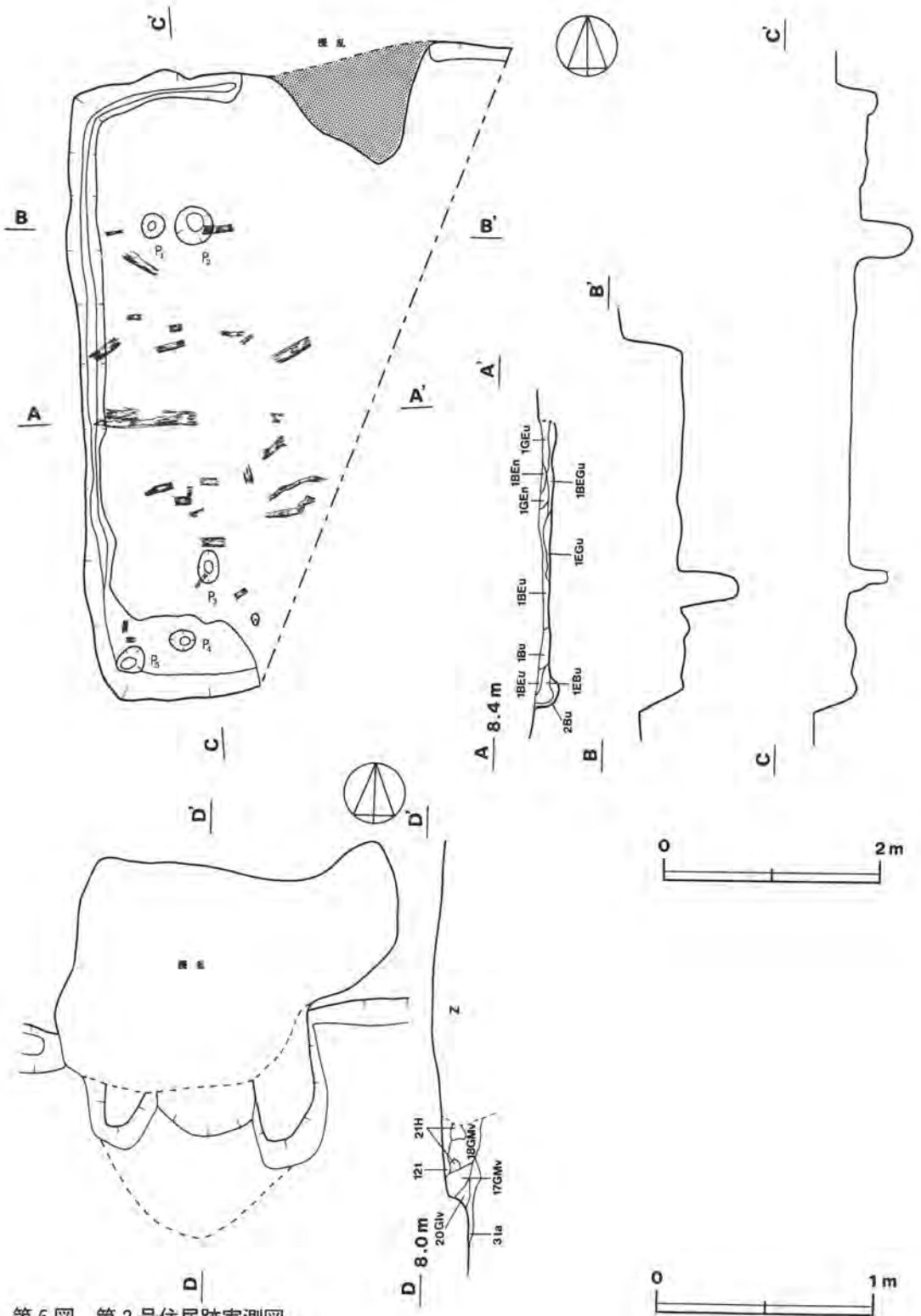
遺物は、土師器を主に、石製品等が比較的多く出土しているが、大半は覆土中からの出土である。土師器は、南壁下西寄りの床面直上から正位で坏形土器(第7図8)が出土し、その他、カマド手前の覆土下層から坏形土器11点(第7図1~7・9~12)・小型甕形土器(第7図15)・甕形土器2点(第7図14・16)が出土している。また、同所から石製の紡錘車(第7図18)・砥石(第7図17)が出土している。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

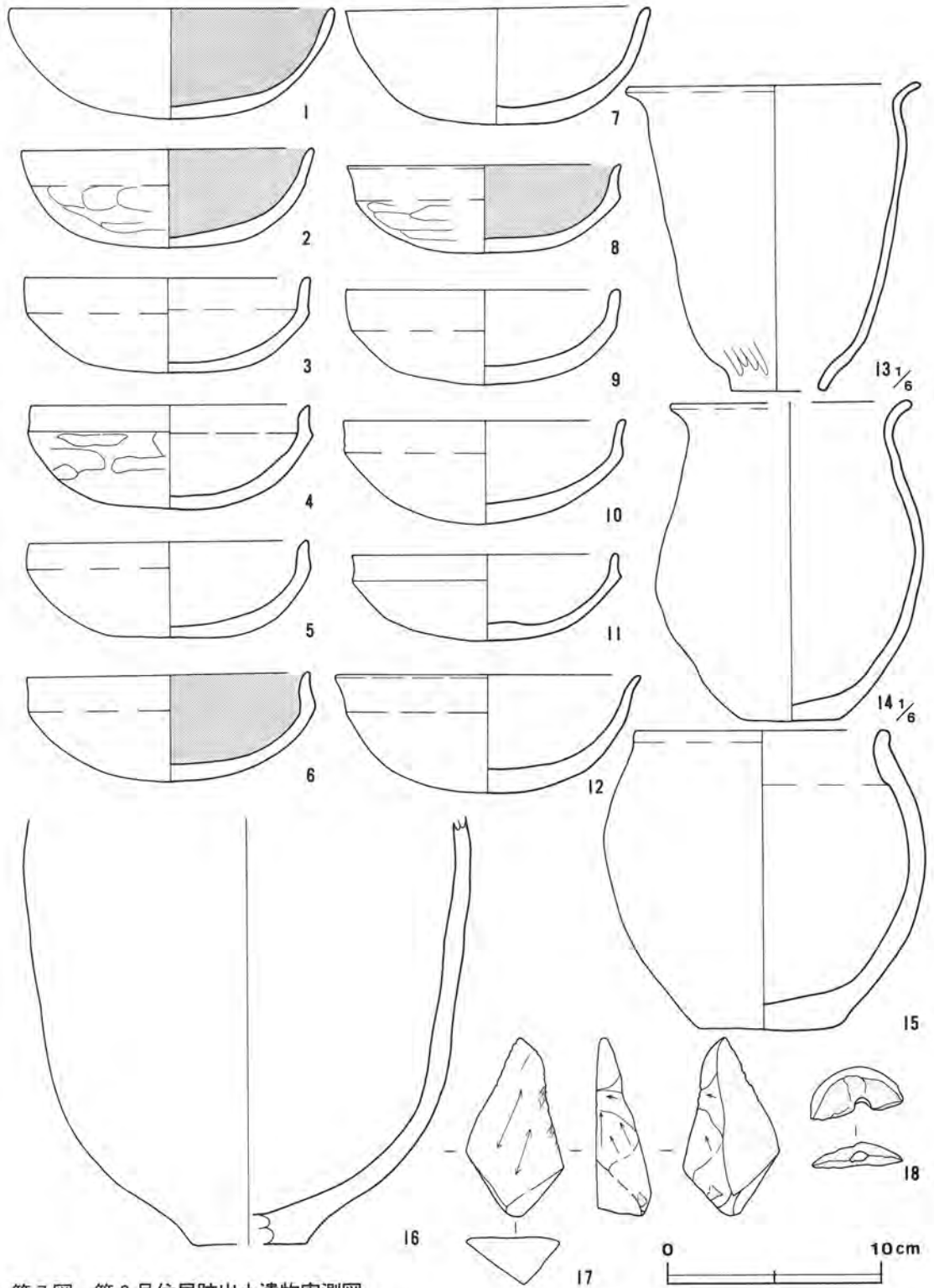
第2号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図1	坏形土器 土師器	A 15.1 B 5.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へら磨き、外面へら削り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 6 内面黒色処理 100%
2	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.7	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面へら削り。	砂粒 黒褐色 普通	P 9 内面黒色処理 100%
3	坏形土器 土師器	A 13.4 B 4.5	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。内・外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へら磨き、外面へら削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 7 100%
4	坏形土器 土師器	A 13.0 B 4.9	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面横ナデ、外面へら削り。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P 13 90%
5	坏形土器 土師器	A 13.0 B 4.5	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へら磨き、外面へら削り。	砂粒 褐色 普通	P 8 100%

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
6	坏形土器 土 師 器	A 13.3 B 5.2	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面へラ削り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 12 内面黒色処理 95%
7	坏形土器 土 師 器	A 14.2 B 5.6	底部は丸底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫・雲母 橙色 普通	P 16 85%
8	坏形土器 土 師 器	A 12.8 B 4.2	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 5 内面黒色処理 100%
9	坏形土器 土 師 器	A 12.9 B 3.5	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	砂粒・礫・雲母 黒褐色 普通	P 11 95%
10	坏形土器 土 師 器	A 13.1 B 4.6	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	砂粒・礫 黒褐色 普通	P 14 95%
11	坏形土器 土 師 器	A 12.5 B 4.1	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫・石英 灰褐色 普通	P 15 85%
12	坏形土器 土 師 器	A 14.4 B 5.5	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ後、横位のへラ磨き。 体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P 10 90%
13	甌形土器 土 師 器	A 27.6 B 28.7 C 8.7	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反しながら開く。底部は正円状に抜け、外面の頸部と胴部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫 明褐色 普通	P 17 95%
14	甕形土器 土 師 器	A (21.8) B 29.9 C 9.0	底部は平底で、胴部は中位に最大径を持ち、頸部はほぼ直立し、口縁部は外反しながら開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒・雲母・礫 にぶい赤褐色 普通	P 2 75%
15	小型甕形土器 土 師 器	A 11.5 B 14.1 C 6.0	底部は平底で、胴部はほぼ球形を呈し、上位はやや張っている。口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫・石英 にぶい赤褐色 普通	P 1 80%
16	甕形土器 土 師 器	B (20.0) C (5.4)	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P 3 45%



第 6 图 第 2 号住居跡実測図



第7图 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第7図 17	砥 石	Q26	8.4	4.6	2.2	69.8	砂岩
18	紡 錘 車	Q39	—	4.3	(1.2)	(7.9)	孔径0.7cm, 流紋岩, 50%

第3号住居跡 (第8図)

本跡は、A4₁₀区を中心に確認され、第101号住居跡の南側に接して位置している。

平面形は、一辺6.7mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-7°-Wを指している。壁高は15~40cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅15~20cm・深さ10~30cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で、カマドの手前及びピットに囲まれた内側は、ロームが硬くよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されている。天井部・東側袖部はトレンチャーによる攪乱を受けているため、規模等は不明である。調査した部分から推定すると、規模は長さ140cm・幅60cmで、壁外へ50cm掘り込んでいる。ピットはP₁~P₉の9か所検出された。規模や配置等からP₁・P₂・P₃・P₄が支柱穴と思われ、いずれも径は40~50cm、深さは43~69cmである。P₅は径60cm・深さ54cmで、規模や配置から出入口施設に関するピットと思われる。なお、P₆・P₇・P₈・P₉は位置から補助柱穴と思われ、長径40~48cm・短径35~45cm・深さ17~26cmの規模を有している。

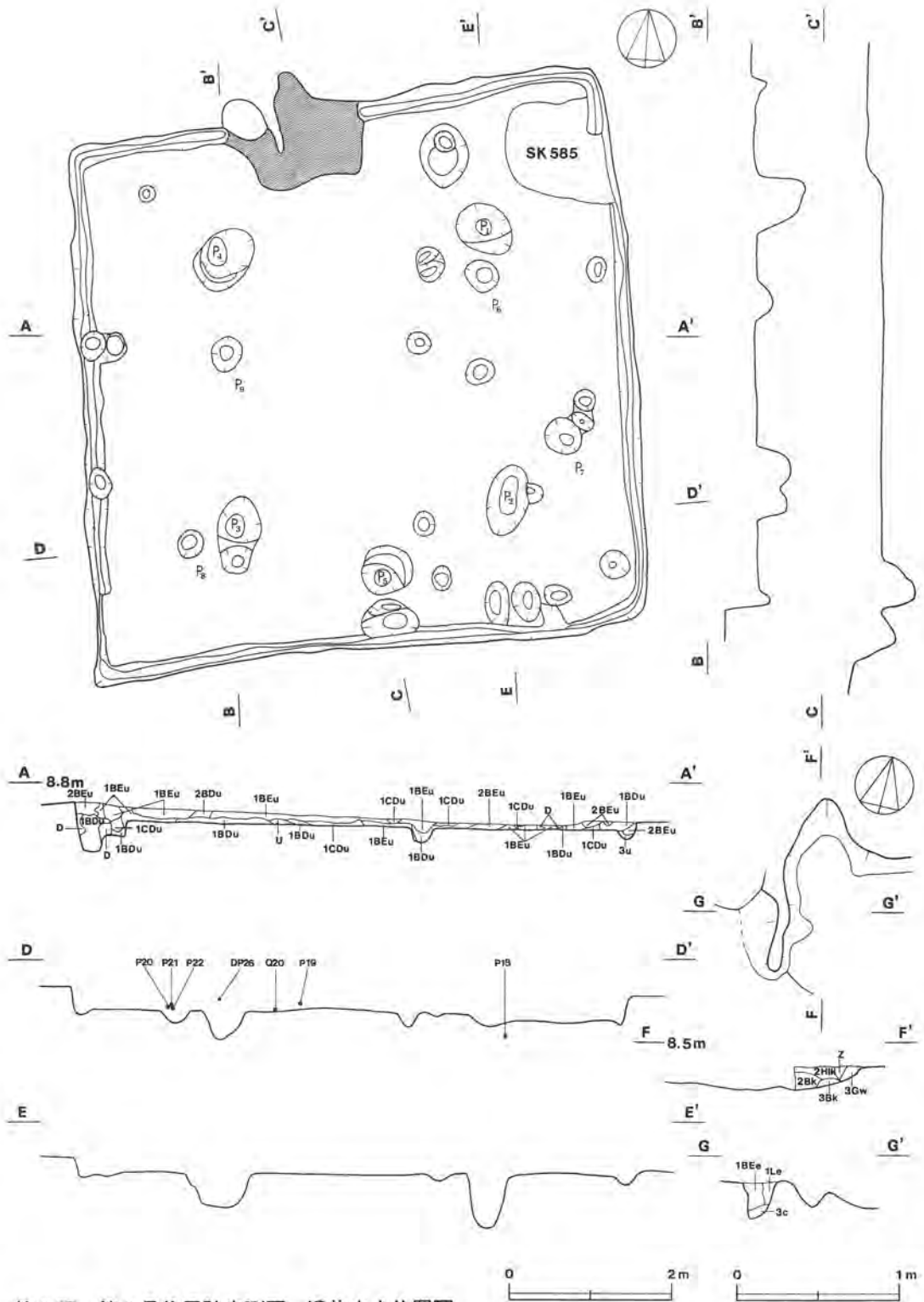
覆土は、黒褐色土を主体とし、各層ともローム粒子・炭化粒子を含み、トレンチャーによる攪乱部分を除き、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域の覆土中や床面直上から多量の土師器とともに、土製品、石製品等が出土している。カマドの手前と北西コーナー部の床面直上から土師器の甕形土器3点(第9図1・2・4)・甌形土器(第9図3)が出土し、また、同北西コーナー部の床面直上から球状土錘(第9図7)も出土している。他に、カマド手前の床面直上から凹石(第9図6)が出土している。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第3号住居跡出土土器観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第9図 1	甕形土器	A 17.9	胴部は長胴を呈し、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫にふい褐色普通	P18 60%
	土師器	B (18.6)				
2	甕形土器	A (19.2)	胴部は長胴を呈し、ほとんど張りがなく、頸部にはくびれがなく、口縁部は外反しながら開いている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫にふい橙色普通	P20 20%
	土師器	B (20.0)				



第 8 图 第 3 号住居跡実測図・遺物出土位置図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	甗形土器 土師器	A (23.5) B 22.8 C (10.2)	胴部は内彎気味に開いて立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラナデ。	砂粒・礫・スコリア に多い黄橙色 普通	P21 20%
4	甗形土器 土師器	A (18.7) B (8.5)	口縁部は外反しながら開き、外面の胴部と頸部の境に稜を有している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒・礫 に多い橙色 普通	P19 20%

第3号住居跡出土土製品・石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第9図 5	砥石	Q 27	11.7	6.4	2.2	217.5	流紋岩
6	凹石	Q 20	(1.1)	9.2	7.1	603.9	流紋岩
7	球状土錘	DP26	2.3	2.9	—	16.8	孔径0.8cm, 橙赤灰色, 100%

第4号住居跡 (第10図)

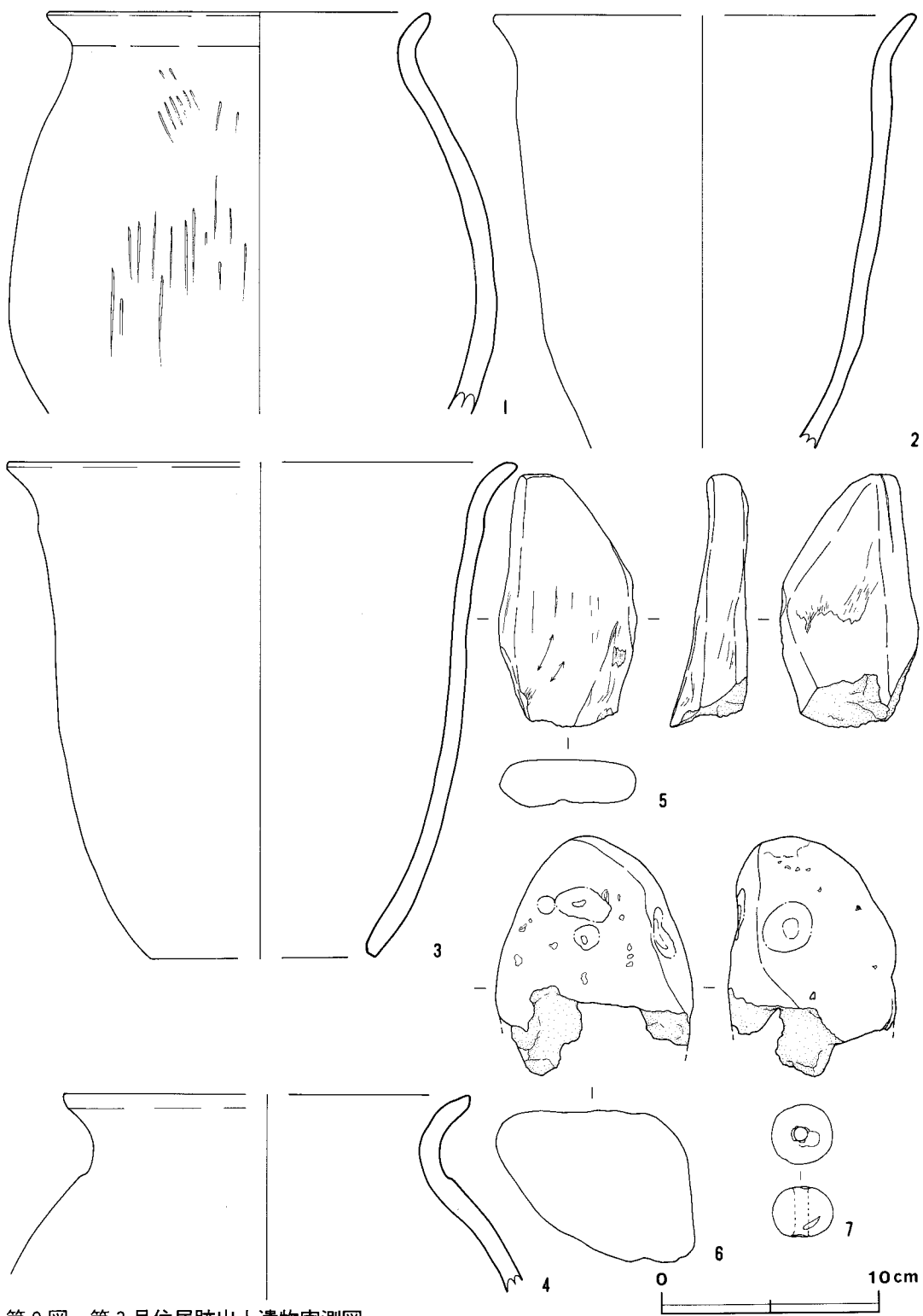
本跡は、A4g₉区を中心に確認され、第101号住居跡の北西側1.7m、第5号住居跡の南東側1mに位置している。

平面形は、長軸3.3m・短軸2.75mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-1°-Wを指している。壁高は10~20cmで、壁は締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。壁下には、上幅15cm・深さ4~6cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面はロームで、ほぼ平坦であり、カマドの手前が硬く、中央部にかけてよく踏み固められている。カマドは北壁の北西コーナー部に付設されており、天井部・袖部は攪乱されているため規模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると、規模は長さ96cm・幅94cm、壁外へ50cm掘り込んでいる。ピットはP₁~P₄の4か所検出され、いずれも径は26~38cm、深さは15~21cmの規模を有しているが、配置に規則性がなく支柱穴ではないと思われる。

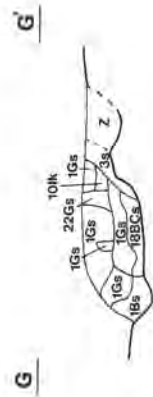
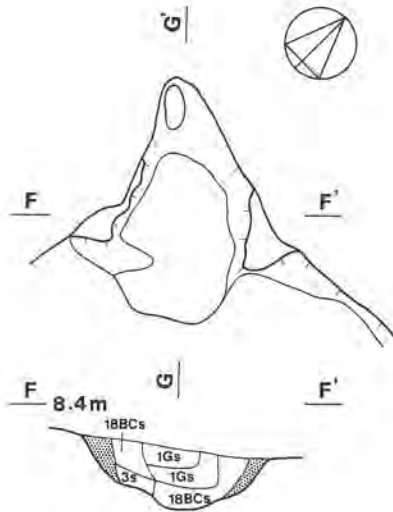
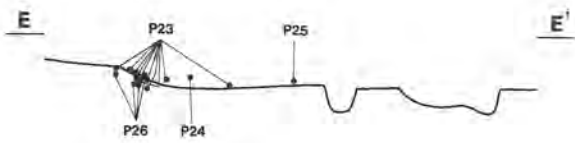
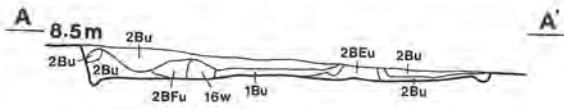
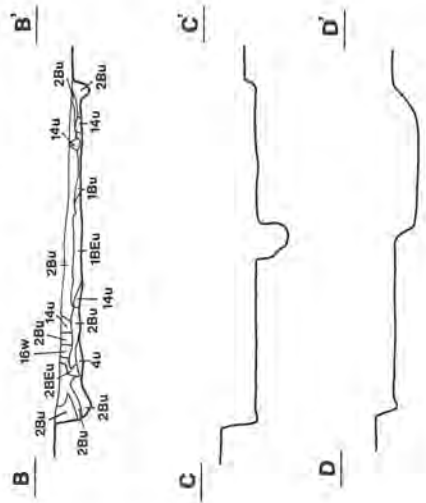
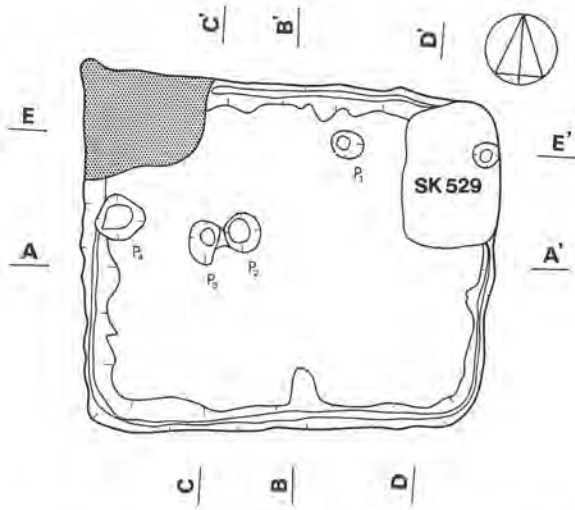
覆土は、攪乱を受けている部分も多いが、ローム粒子を多量に含む暗褐色土を主体とし、下層は炭化粒子も極少量含み、自然堆積の様相を呈している。東壁の北東コーナーに確認されている土坑状ピットは、覆土がローム小ブロックやローム粒子を多量に、しかも均一に含み、軟らかいので後世に掘削されたものとみられる。

遺物は、覆土中や床面直上から少量の土師器とともに、須恵器の破片が出土している。土師器は、中央部から西壁寄りの床面直上から甗形土器(第11図2)、西壁南寄りの覆土下層から坏形土器(第11図4)が正位で出土している。須恵器も同所から坏(第11図4)や甗(第11図3)が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



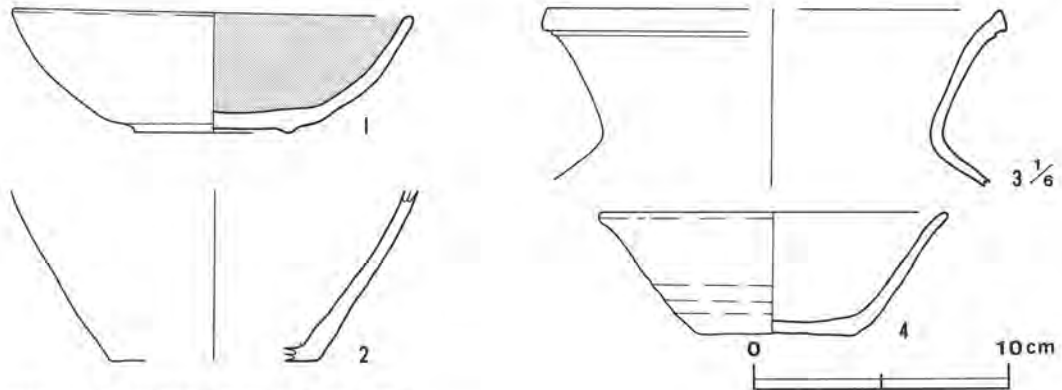
第9図 第3号住居跡出土遺物実測図



第10图 第4号住居跡実測図・遺物出土位置図

第4号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	高台付坏形土器 土師器	A 15.9 B 4.9 C 6.4	底部は平底で、高台は短く外下方へのび、体部は内彎しながら大きく開く。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	砂粒・礫 黒褐色 普通	P24 内面黒色処理 90%
2	甕形土器 土師器	B (6.7) C (8.2)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 暗赤褐色 普通	P23 10%
3	甕 須恵器	A (35.6) B (13.6)	頸部は外反気味に開き、口縁端部は外下方に突出する。	水挽き成形。	砂粒・細砂・礫 灰黄褐色 普通	P25 15%
4	坏 須恵器	A 13.4 B 4.9 C 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外反する。	水挽き成形。 底部不定方向の手持ちヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 に お い い 黄 色 普 通	P26 85%



第11図 第4号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡 (第12図)

本跡は、A4f₈区を中心に確認され、第4号住居跡の北西側1.0m、第100号住居跡の東側0.5mに位置している。本跡は北側で第6号住居跡と重複しており、6号住居跡が本跡の床面を切っていることと出土遺物から、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、重複やトレンチャーによる攪乱のため推定で、長方形を呈すものと思われ、南壁の長さが5.3mで、主軸方向はN-5°-Eを指している。壁は攪乱を受けている部分が多く、北壁から北西壁及び北東壁にかけては確認できなかった。残存している南壁高は28cmで、縮まりのあるルームで外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、攪乱を受けていない部分は明瞭なルームで、硬くよく踏み固められている。カマドは西壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は少量の山砂を含む粘土で構築されており、内側は熱を長期間受けたため赤化し、覆土からは多量の焼土粒子が検出されている。規模は長さ120cm・幅80cm、壁外へ35cm掘り込んでい

る。火床は床面を4cmほど掘り込んでいる。ピットは検出できなかった。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を多量に含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、覆土中から土師器を主に、土製品等が出土している。東壁下や中央部の覆土下層から土師器の小型甕形土器（第13図2）・甕形土器6点（第13図1・3・4・6～8）が出土し、土製品はカマド周辺から支脚（第13図10）が出土している。

本跡は、出土遺物から奈良時代の真間期に比定されるものと思われる。

第6号住居跡（第12図）

本跡は、A4e区を中心に確認され、第4号住居跡の北西側3.2m、第100号住居跡の北東側2.3mに位置している。本跡は南側で第5号住居跡と重複しており、本跡が第5号住居跡の床面を切っていることと出土遺物から、本跡の方が新しい遺構と判断される。

平面形は、長軸3.55m・短軸3.5mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを指している。壁高は9cmで、北壁の立ち上がりはほとんど確認できなかったが、その他の壁は縮まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。床面は南壁直下からカマドに向かって幅80cmほど凹んでいるが、その他の床面はほぼ平坦で、住居跡全域にわたってロームが硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は砂質粘土で構築されており、内側は熱を受けて赤化している。覆土からは多量の焼土粒子が検出されている。規模は長さ90cm・幅74cm、壁外へ43cm掘り込んでいる。火床は床面を12cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、いずれも径は20cm、深さは20cmである。配置に規則性はないが、支柱穴の一部と思われる。

覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積し、ローム粒子を多量に含み、焼土粒子や炭化粒子も少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、カマドの覆土から土師器のほか、須恵形、磨石が出土している。土器の大半は破片で、まとまった器形をなしているものは少ない。カマドの燃焼部から土師器の甕形土器（第14図1）と坏形土器（第14図2）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第5号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図 1	甕形土器 土師器	A (15.8) B (14.8)	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反して直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 普通	P29 60%
2	小型甕形土器 土師器	A 10.2 B 10.4 C 6.0	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり、胴部上位から内傾する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P30 85%
3	甕形土器 土師器	B (5.2) C (8.0)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 褐色 普通	P33 5%
4	甕形土器 土師器	A (20.8) B (9.8)	口縁部は外反して外上方に開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・礫 褐色 普通	P27 15%
5	甕形土器 土師器	A (18.0) B (3.4)	口縁部は外上方に開いている。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 浅黄褐色 普通	P28 5%
6	甕形土器 土師器	B (4.4) C 9.4	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P31 10%
7	甕形土器 土師器	B (3.8) C 8.8	底部は平底で、胴部は僅かに内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P32 15%
8	甕形土器 土師器	B (2.2) C (11.0)	底部は平底で、胴部は外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P34 5%

第5号住居跡出土土製品解説表

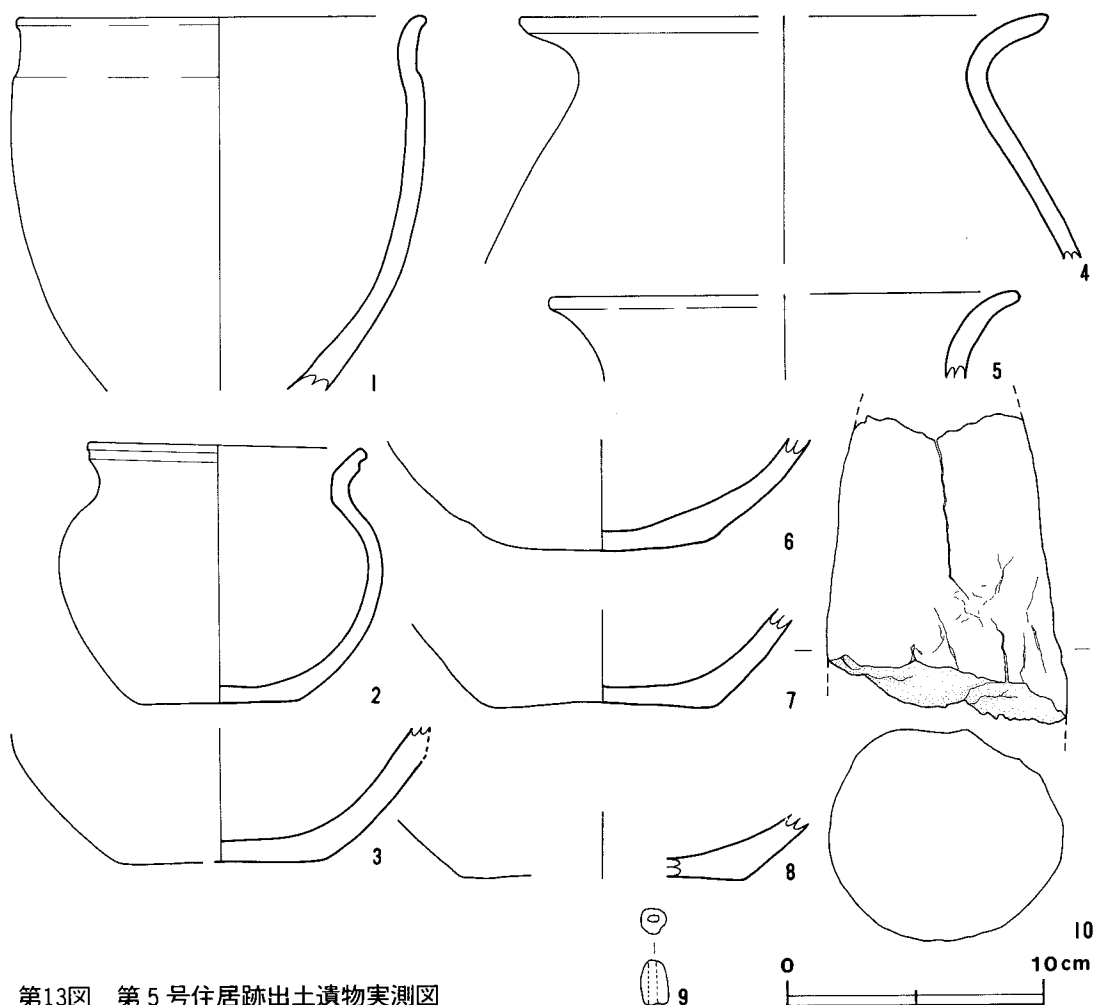
図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第13図 9	管状土錘	DP96	1.8	1.1	—	(12.0)	孔径0.3cm, 橙色, 100%
10	支脚	DP 1	(12.3)	9.4	—	(796.7)	にぶい橙色

第6号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	甕形土器 土師器	A (22.8) B (10.4)	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面ヘラナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P35 15%
2	環形土器 土師器	A (13.0) B 4.6 C (6.0)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P36 25%

第6号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第14図 3	磨石	Q 5	12.9	7.3	4.2	517.4	流紋岩

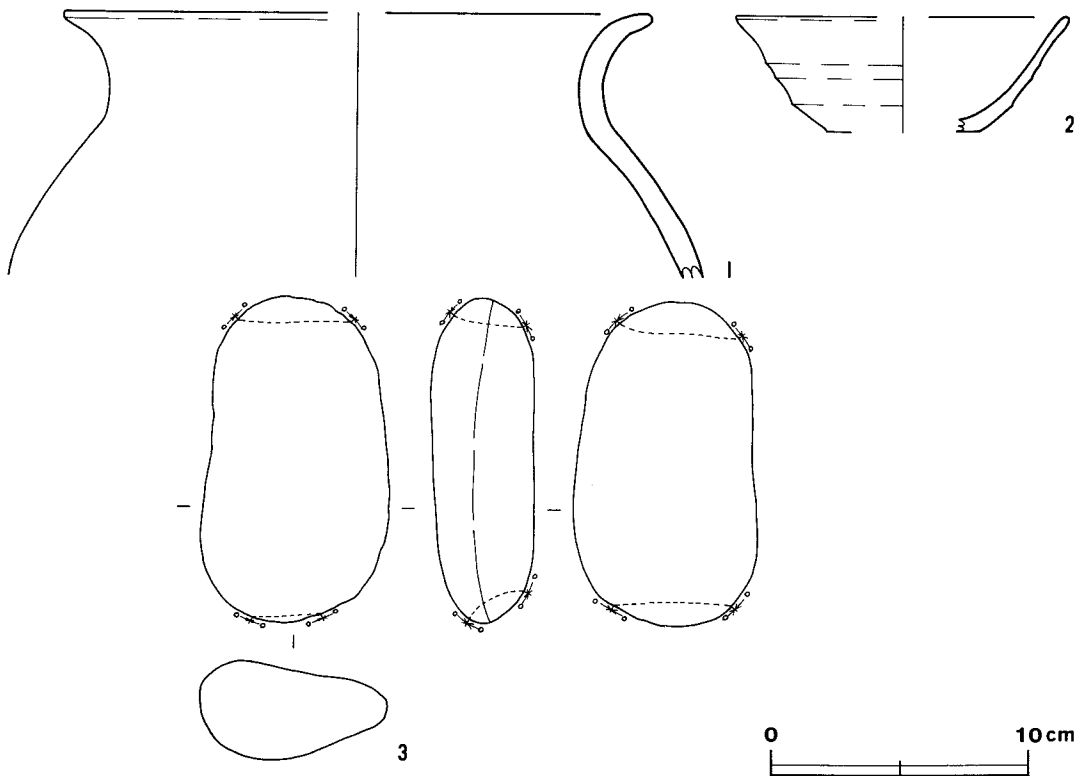


第13図 第5号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡（第15図）

本跡は、A4e₆区を中心に確認され、第9号住居跡の北側1.2m、第100号住居跡の北側0.5mに位置している。本跡は西側で第8号住居跡・第50号住居跡と重複しており、本跡が第8号住居跡・第50号住居跡の床面を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸4.4m・短軸4.2mの方形を呈し、主軸方向はN-24°-Eを指している。なお、本跡の北西コーナーは調査エリア外にかかっている。壁は縮まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は東・南・西壁下に検出され、上幅12~14cm・深さ5~10cmの規模を有している。床面はほぼ平坦で、特にピットに囲まれた内側は、ロームが硬くよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は粘土に山砂を混ぜて構築されており、内側は熱を受けて焼土化している。覆土から焼土粒子が多量に検出されている。規



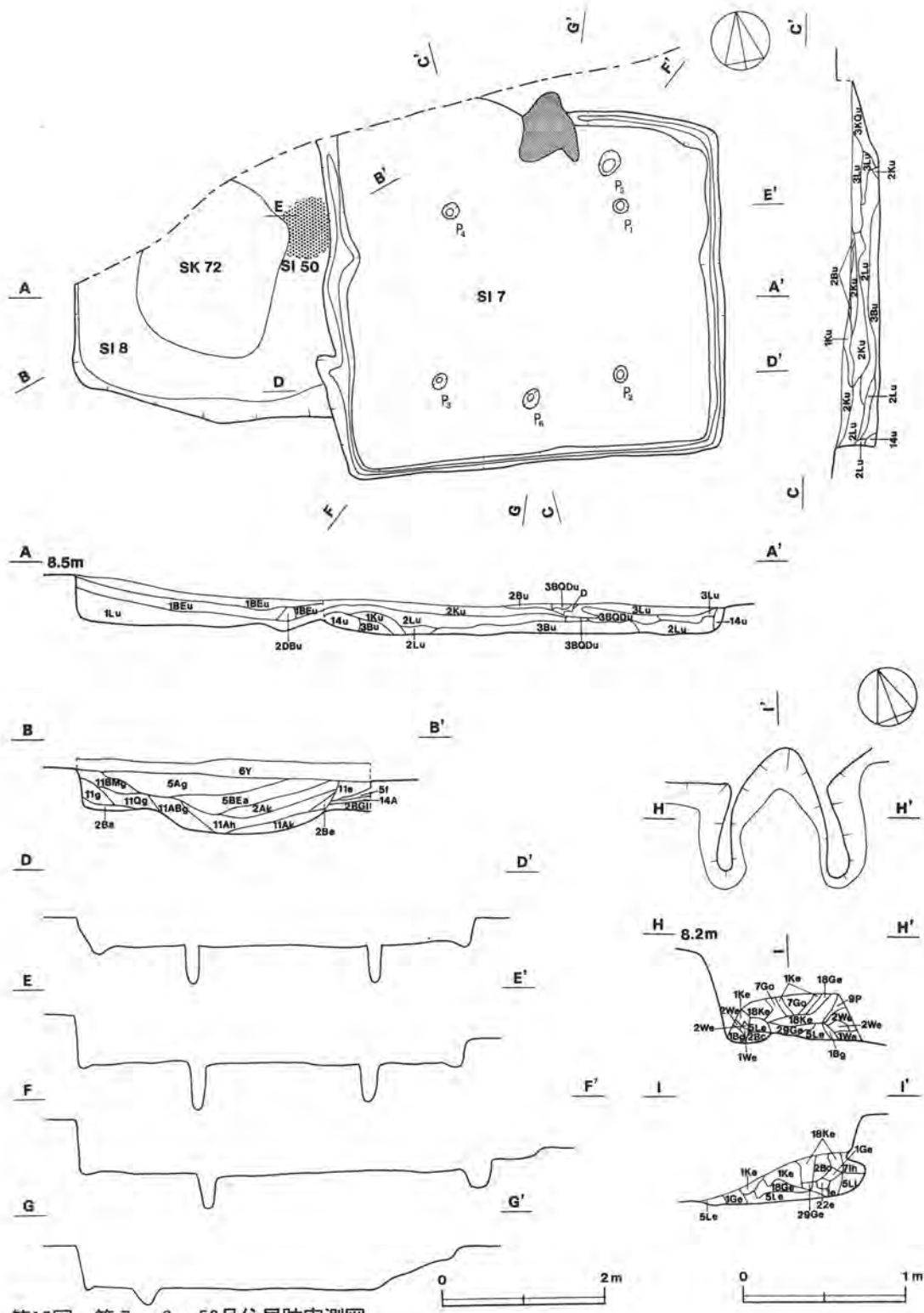
第14図 第6号住居跡出土遺物実測図

模は長さ100cm・幅120cm，壁外へ21cm掘り込んでいる。火床は床面を3cmほど掘り込み，熱を受けて赤化し，焼土粒子を多量に含んでいる。ピットはP₁～P₆の6か所検出され，規模や配列からP₁・P₂・P₃・P₄が主柱穴と思われ，いずれも径は18～22cm，深さは45～60cmの規模を有している。P₆は出入口部に伴うピットと考えられ，径は35cm，深さは20cmの規模を有している。また，P₅は配列から補助柱穴と考えられ，径は35cm，深さは20cmの規模である。

覆土は，上層に暗褐色土，中層に黒褐色土，下層に褐色土が堆積し，いずれもローム粒子・炭化粒子を多量に含み，自然堆積の様相を呈している。また，中央部東寄りの部分に径約1.0mにわたりロームを多量に含んだ層が覆土中層にみられる。

遺物は，覆土中や床面直上から土師器のほか，土製品等が出土している。カマドの東側床面直上から碗形土器（第16図3），カマドの両側床面直上から坏形土器2点（第16図4・5），カマド手前や中央部の覆土中層から甕形土器2点（第16図1・2）が出土している。また，中央部の覆土下層から支脚4点（第16図7～10）が出土している。

本跡は，出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第15图 第7·8·50号住居跡実測図

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	甕形土器	A (21.3)	胴部は丸く張り、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ調整後、ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒・礫にぶい赤褐色普通	P37
	土師器	B (11.7)				15%
2	甕形土器	B (9.9)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・石英にぶい橙色普通	P38
	土師器	C (8.3)				15%
3	壺形土器	A 15.2	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部近くでやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫にぶい赤褐色普通	P39
	土師器	B 8.1				95%
4	坏形土器	A 12.4	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・長石にぶい橙色普通	P40 内面黒色処理 100%
	土師器	B 3.7				
5	坏形土器	A (12.2)	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 浅黄褐色 普通	P41
	土師器	B 2.9				80%
6	坏形土器	A 11.5	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・石英にぶい橙色普通	P42
	土師器	B 4.2				100%

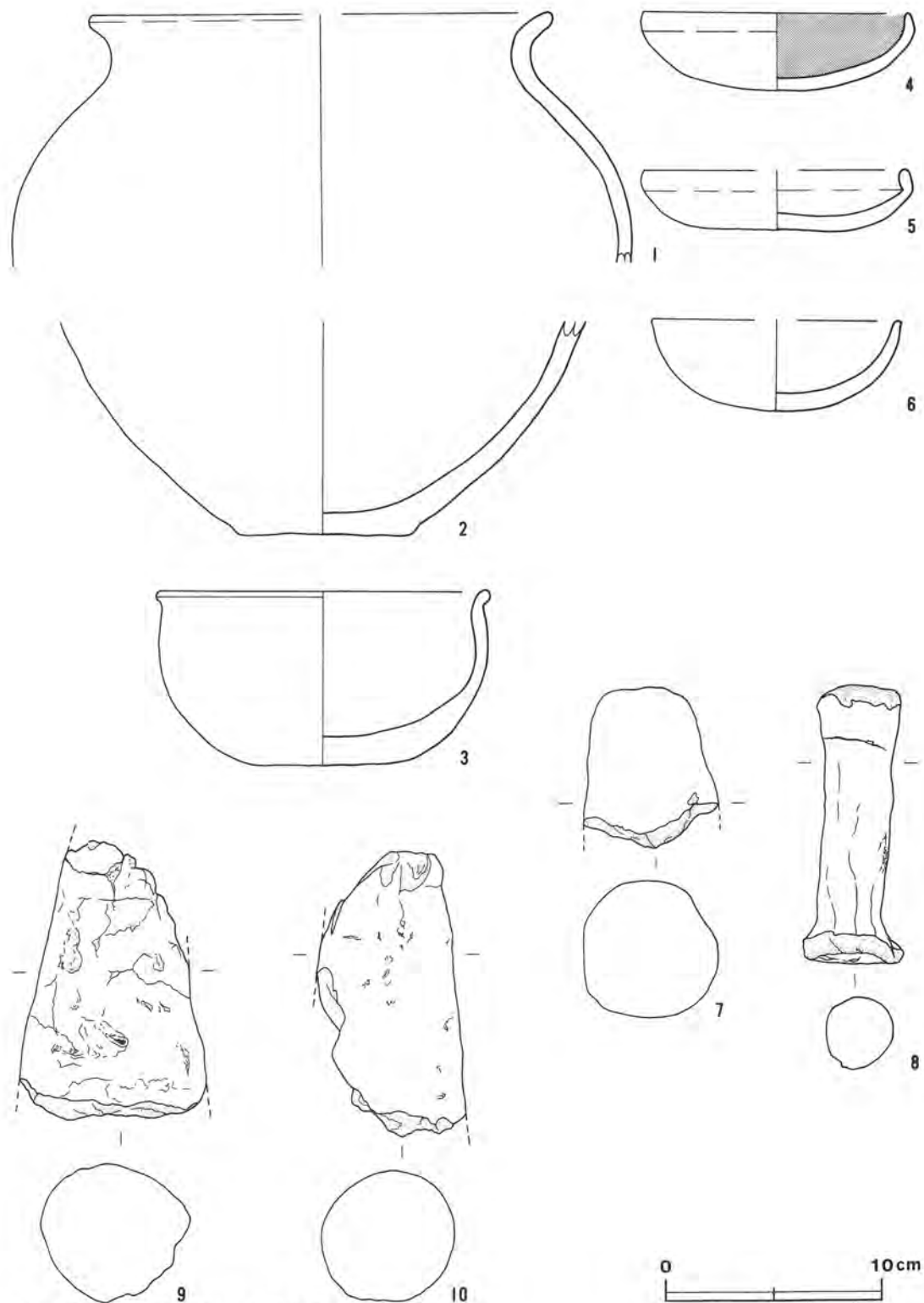
第7号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第16図 7	支脚	DP4	(7.5)	(6.4)	—	(240.2)	浅黄色
8	支脚	DP5	13.0	(4.6)	—	(195.8)	橙色
9	支脚	DP2	(13.0)	8.7	—	(506.4)	橙色
10	支脚	DP3	(13.3)	(8.2)	—	(498.5)	橙色

第8号住居跡 (第15図)

本跡は、A4es区を中心に確認され、第9号住居跡の北側2.2mに位置している。本跡は、東側で第7・50号住居跡、北側で第72号土坑と重複している。土層断面や床面及び出土遺物から検討した結果、第7号住居跡より本跡の方が古い遺構で、第50号住居跡より新しい遺構である。本跡は、北側がエリア外にかかっているため平面形・規模等は不明である。調査した部分から推定すると、平面形は南壁の長さが3.25mで、方形かまたは長方形を呈し、長軸方向はN-2°-Eを指すものと思われる。残存する壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は中央部が第72号土坑によって攪乱されているが、他は平坦で、ロームは硬く踏み固められている。カマド及びピットは検出されなかった。

覆土は、上層にローム粒子・ローム粒子・ロームブロックを多量に含む暗褐色土が、下層にローム粒子・焼土粒子を多量に含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。また、上層から下層に

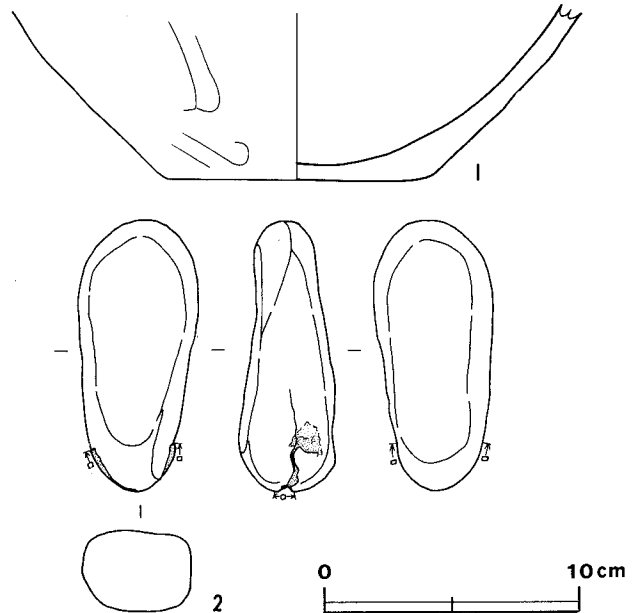


第16図 第7号住居跡出土遺物実測図

かけて炭化粒子を少量含んでいる。

遺物は、覆土中から僅かに土師器と敲石が出土している。南壁下西寄りの覆土下層から甕形土器の底部（第17図1）が出土し、他に南西コーナー部の床面直上から横位で敲石（第17図2）が出土している。敲石は周囲から流れ込んだものと思われる。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第8号住居跡出土土器観察表

第17図 第8号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	甕形土器 土師器	B (6.6) C 10.8	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面へラナゲ、外面へラ削り。	砂粒・礫 極暗褐色 普通	P888 5%

第8号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第17図 2	敲石	Q13	10.7	4.7	3.2	236.5	流紋岩

第9号住居跡（第18図）

本跡は、A4g5区を中心に確認され、第7・8号住居跡の南側1.4m、第100号住居跡の西側2.3mに位置している。本跡は南西側コーナー部で第9号住居跡と重複している。出土遺物から、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸5.1m・短軸5.0mの方形を呈し、主軸方向はN-8°-Eを指している。壁高は、北壁がやや浅く10cm前後で、その他の壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっており、45cmである。床面は全体に平坦で、カマドの手前及びピットに囲まれた内側は非常に硬く、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は山砂を混ぜた粘土により構築され、内側は熱を受けて焼土化している。規模は長さ120cm・幅140cm、壁外へ35cm掘り込んでいる。火床は床面15cmほど掘り込んだ地床炉である。覆土は熱を受けて焼土粒子を多量に含み、締まりがない。ピットはP₁~P₆の6か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄は、いずれも径は18~44cm、深さは42~60cmで、ほぼ方形に配列され、規模からも支柱穴と

考えられる。P₆は径20cm、深さは21cmの規模で、位置から出入口施設に関するピットと思われる。

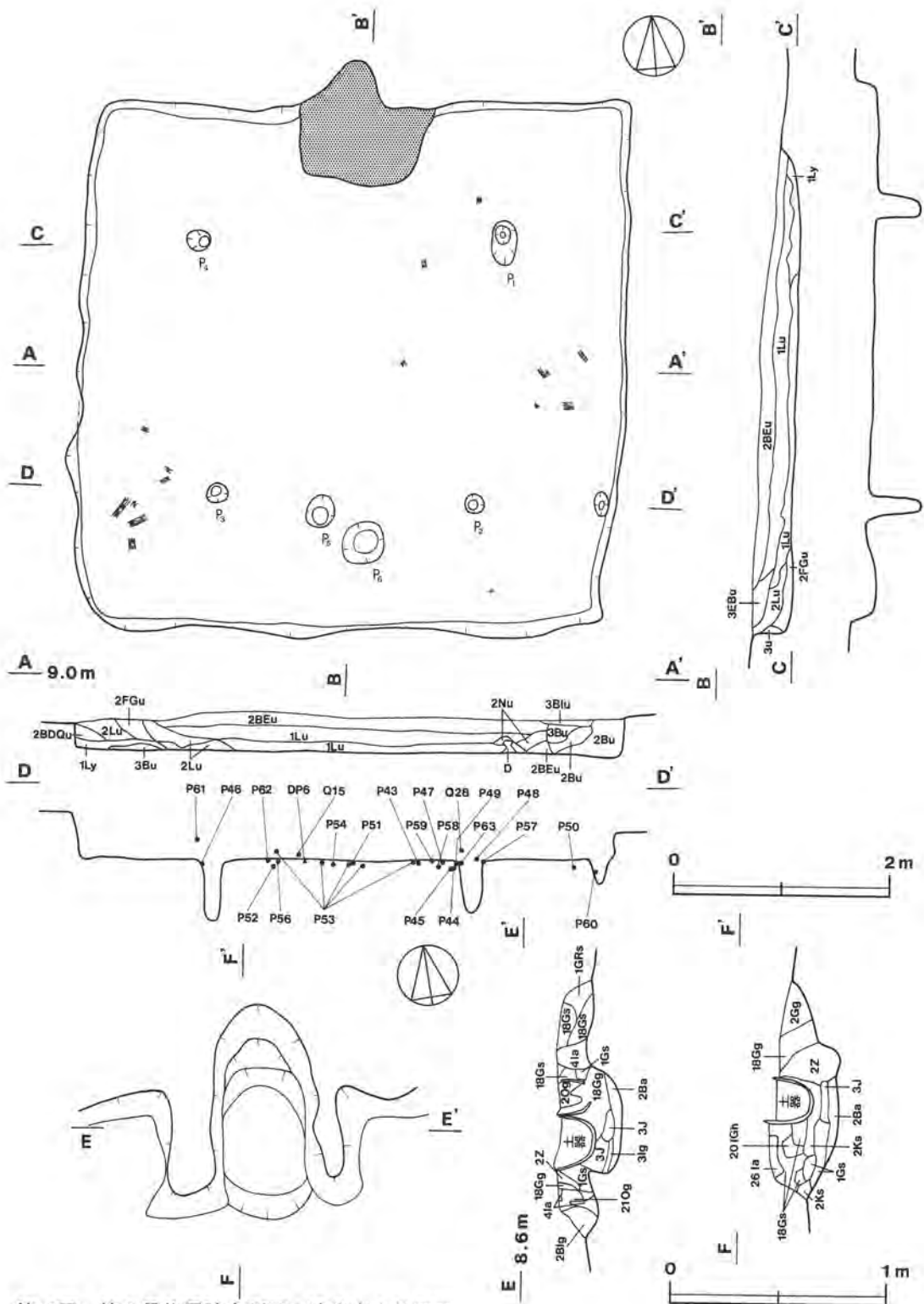
覆土は、上層にローム粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土、中層から下層にかけてローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を多量に含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、多量の土師器のほかに、須恵器、縄文式土器が出土している。土師器は、カマド手前の床面直上からまとまって坏形土器8点（第19図2・3・6～8・13～15）・つぶれた状態で甑形土器（第19図17）と、中央部の床面直上から坏形土器（第19図12）・手捏土器（第19図16）が出土している。その他、カマド周辺やカマドの覆土中から甕形土器2点（第19図9）・（第20図20）・小型甕形土器2点（第19図4・5）が出土している。また、中央部の床面直上から須恵器の坏（第20図21）、砥石（第20図23）が出土している。縄文式土器は破片で、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

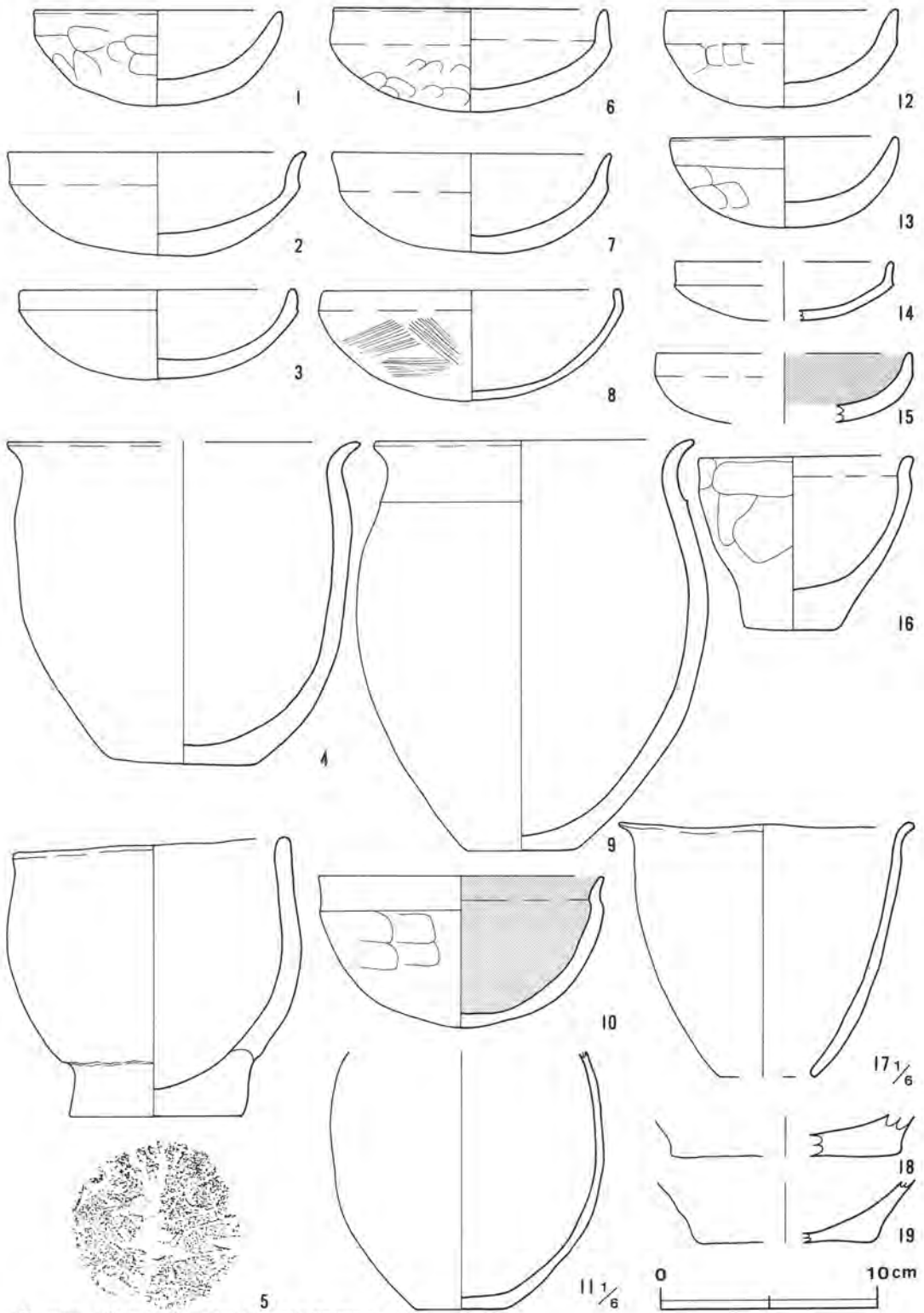
第9号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第19図 1	坏形土器 土師器	A 11.5	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫・石英 暗赤褐色 普通	P49 100%
		B 4.4				
2	坏形土器 土師器	A 13.7	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外反している。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P44 100%
		B 4.8				
3	坏形土器 土師器	A 12.6	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。外面の体部と口縁部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P45 100%
		B 4.1				
4	小型甕形 土器 土師器	A (16.2)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、胴部上位から内傾する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒 赤橙色 普通	P52 65%
		B 15.0				
		C 6.7				
5	小型甕形 土器 土師器	A 12.8	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、胴部中位から内傾する。口縁部は僅かに外反して直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面横位へラナデ、外面 雑なへラナデ。	砂粒 にぶい橙色 良好	P43 底部木葉痕 100%
		B 12.8				
		C 7.8				
6	坏形土器 土師器	A 12.7	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫・雲母 明赤褐色・黒褐色 普通	P47 95%
		B 4.8				
7	坏形土器 土師器	A 13.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒 にぶい橙色 良好	P58 95%
		B 4.7				

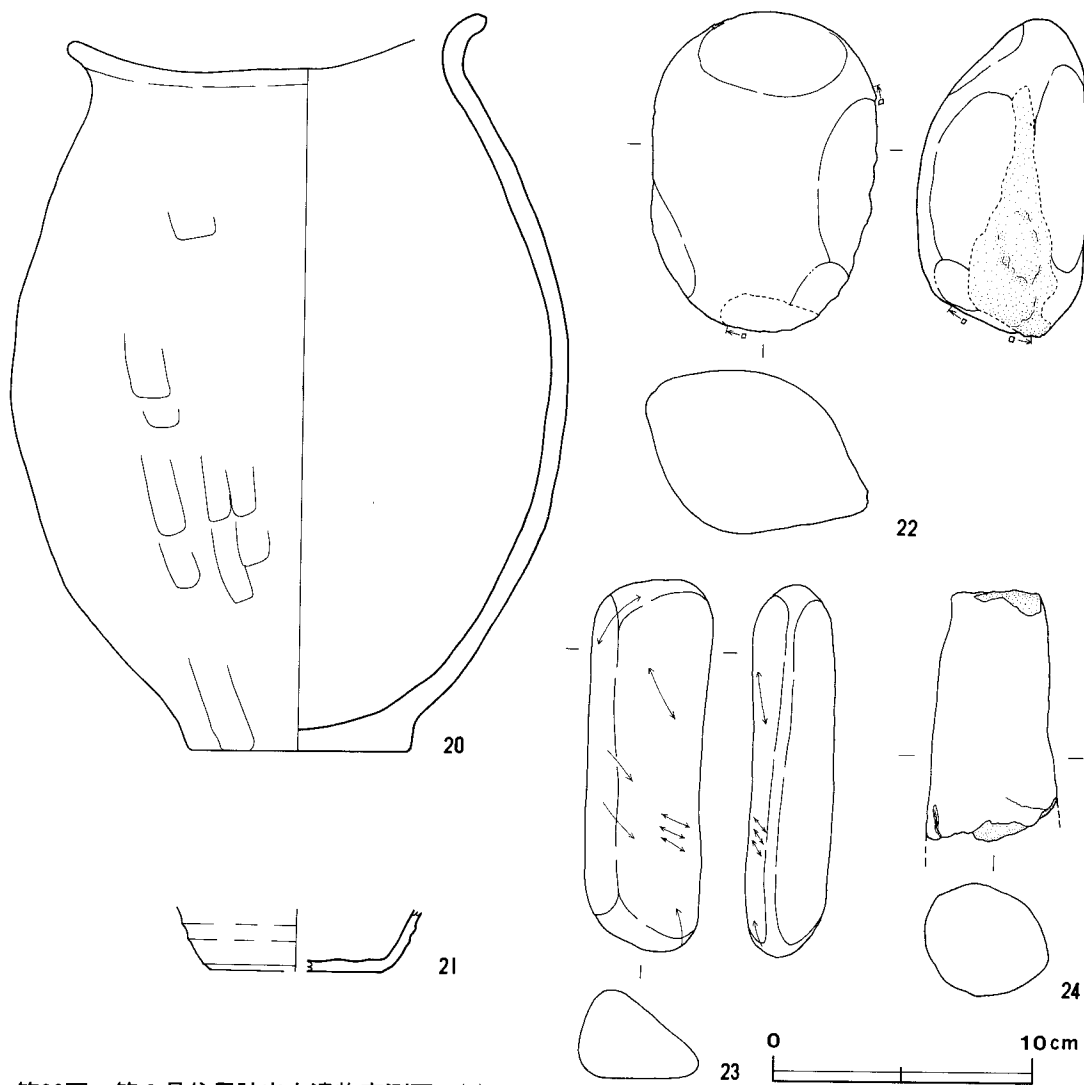


第18图 第9号住居跡実測図・遺物出土位置図

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
8	坏形土器 土 師 器	A 13.7 B 5.1	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短くほぼ直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 黒褐色 良好	P59 95%
9	甕形土器 土 師 器	A 14.9 B 18.8 C 5.0	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、胴部上位から内傾する。口縁部は外反して立ち上がる。外面の胴部と頸部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P51 90%
10	埴形土器 土 師 器	A 13.0 B 7.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反気味に直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒・砂礫 橙色 普通	P57 内面黒色処理 95%
11	甕形土器 土 師 器	B (23.7) C 8.4	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり、胴部上位から内傾する。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 灰褐色 普通	P54 65%
12	坏形土器 土 師 器	A 10.8 B 4.5	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 明赤褐色 良好	P46 100%
13	坏形土器 土 師 器	A 10.6 B 4.2	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫・石英 赤褐色 普通	P48 100%
14	坏形土器 土 師 器	A (10.0) B 2.8	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P60 10%
15	坏形土器 土 師 器	A (12.0) B (3.3)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒 灰赤色 普通	P61 内面黒色処理 10%
16	手捏土器 土 師 器	A 10.0 B 8.0 C 4.5	底部は平底で、胴部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、胴部上位から僅かに内傾する。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色・黒褐色 普通	P50 100%
17	甗形土器 土 師 器	A 27.3 B 23.4 C (8.5)	底部は正円状に抜け、胴部は緩やかに内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部は外反して外上方へ開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 暗赤褐色 普通	P63 70%
18	甕形土器 土 師 器	B (1.8) C (10.5)	底部は平底で、体部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	P55 5%
19	甕形土器 土 師 器	B (2.8) C (8.0)	底部は平底で、胴部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 浅黄褐色 普通	P56 5%



第19图 第9号住居跡出土遺物実測図 (1)



第20図 第9号住居跡出土遺物実測図 (2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 20	壺形土器	A 16.4	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、胴部中位がやや張っている。口縁部は外反しながら開いている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ，外面縦位のヘラ削り。	砂粒 にふい 橙色 普通	P53 80%
	B 29.4					
	C 8.8					
21	坏 須恵器	B (2.5) C (7.0)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部不定方向へ手持ちヘラ削り。	砂粒・雲母 褐灰色 内面灰黄褐色 普通	P62 20%

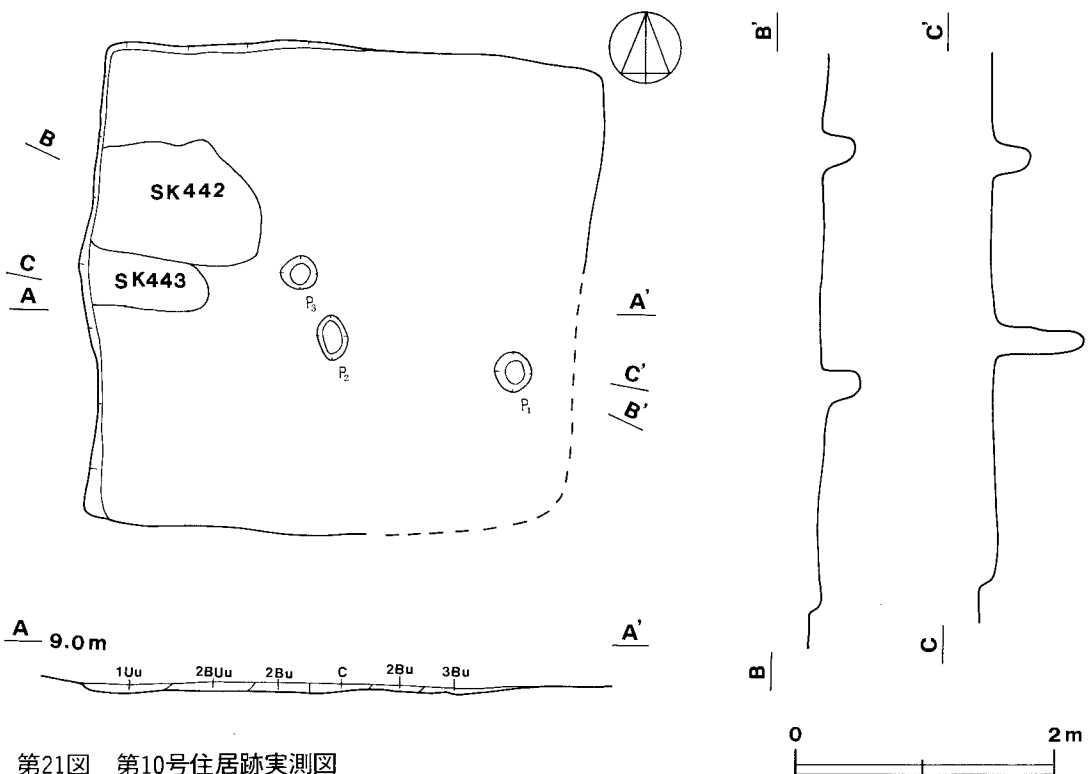
第9号住居跡出土土製品・石製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第20図 22	敲 石	Q 15	12.7	8.9	6.5	1019.9	流紋岩
23	砥 石	Q 28	14.7	4.8	3.5	326.6	流紋岩
24	支 脚	DP 6	(10.1)	5.1	—	(238.4)	橙色

第10号住居跡 (第21図)

本跡は、A4h₇区を中心に確認され、第100号住居跡の南側7.8mに位置している。本跡は西側で第442・443・550号土坑と重複している。出土遺物から、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、トレンチャーによる攪乱のため平面形・規模等の詳細は不明であるが、調査した部分から推定すると、一辺3.9mほどの方形を呈し、長軸方向はN-2°-Eを指すものと思われる。壁は北東壁から南壁にかけて攪乱を受けて確認できなかったけれども、確認された壁高は11cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は攪乱されている部分が多いため、凹凸がみられる。攪乱を受けていない床面は、ロームがよく踏み固められている。ピットはP₁~P₃の3か所検出されたが、本跡に伴うピットはP₁・P₃で、いずれも径は26~28cm、深さは28cmの規模である。



第21図 第10号住居跡実測図

覆土は、攪乱のため堆積状況は不明で、ローム粒子やあわ土の粒子が混じり、軟らかい状態である。

遺物は、床面直上から土師器片や須恵器片が僅かに出土しているが、全域にわたって耕作による攪乱を受けているため、これらの遺物は本跡に伴うものかどうか不明である。

第11号住居跡（第22図）

本跡は、B4c6区を中心に確認され、第12号住居跡の西側1.7mに位置している。本跡の東側で第2号土坑、北側で第1号性格不明遺構とそれぞれ重複しているが、いずれも本跡の床面が切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、性格不明遺構や土坑との重複のため平面形・規模等の詳細は不明であるが、一辺が3.45mの方形を呈し、長軸方向はN-8°-Eを指すものと思われる。壁は北壁から東壁にかけて性格不明遺構や土坑によって切られているため不明であるが、残存する壁は北西壁が22cm、南西壁は第2号土坑と重複しているため10cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。南西コーナー壁下には、上幅10cm・深さ11cmの壁溝が残存する。床面は北西壁寄りが残存し、ほぼ平坦で、ロームが硬く踏み固められている。ピットはP₁～P₉の9か所検出されているが、本跡に伴うピットはP₇のみと思われ、径は30cm、深さは36cmの規模を有している。カマドは検出することができなかった。

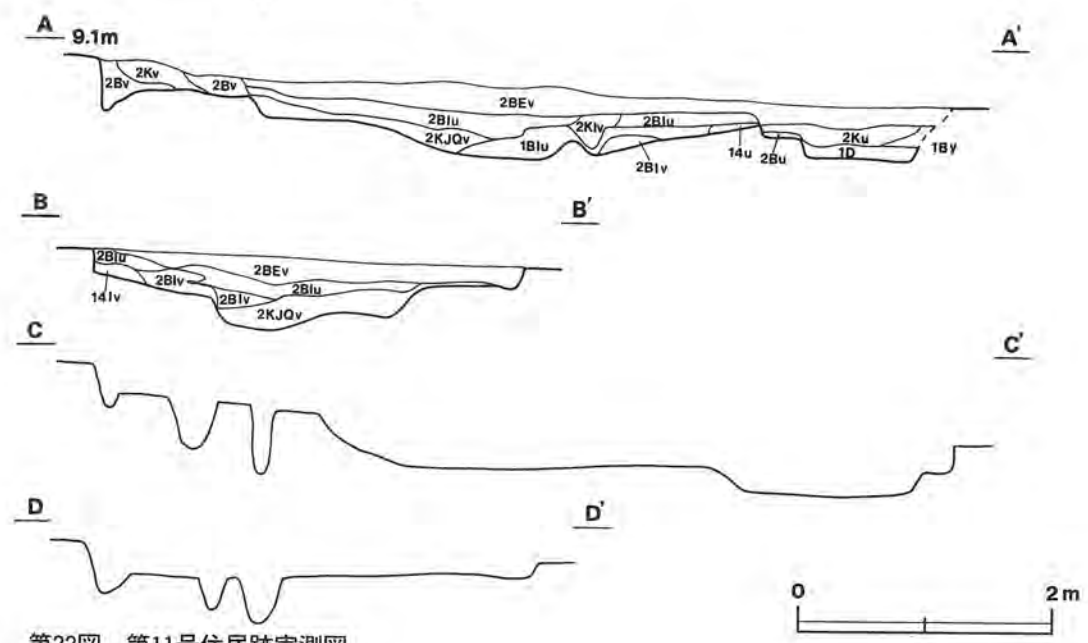
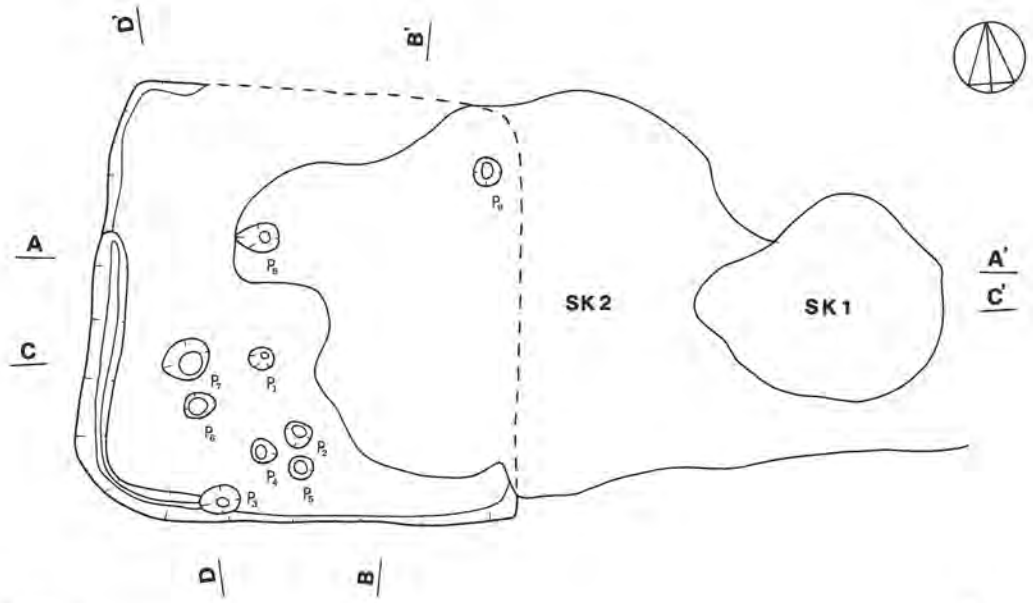
覆土は、東側が第2号土坑によって攪乱を受けているが、ローム粒子を多量に含む暗褐色土を主体に、焼土粒子や炭化粒子も極少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、少量の土師器とともに、鉄片が出土している。西壁南寄りの覆土下層から高台付皿形土器（第23図1）が出土し、その他、鉢形土器や甕形土器の破片、鉄片が覆土中層から下層にかけて出土している。

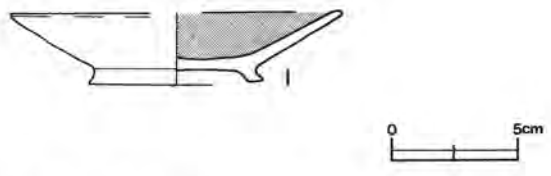
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第11号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	高台付皿形土器 土師器	A (13.1) B 2.8 C 6.8 D 0.6	体部は直線的に外上方に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けて、「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P64 内面黒色処理 50%



第22图 第11号住居跡実測図



第23图 第11号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡（第24図）

本跡は、B4c8区を中心に確認され、第11号住居跡の東側3.5m、第35号住居跡の西側2.4mに位置している。本跡は南東コーナーから北東コーナーにかけて第3・4・5・45号土坑と重複しており、いずれも本跡の床面が切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸5.85m・短軸5.5mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-5°-Eを指している。壁下には、上幅25cm・深さ10~15cmの壁溝がカマドを除いて周回している。壁高は25~35cmで、壁は締めりのあるロームで外傾して立ち上がっている。北東から南東にかけての床面は、第3・4・5・45号土坑により切られているため検出できなかったが、残存する床面はほぼ平坦で、ロームが硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されているが、天井部・袖部はトレンチャーによって崩壊しているため、規模・構造等の詳細は不明である。長さ217cm・幅150cmで、壁外へ60cm掘り込んでいる。ピットはP₁~P₇の7か所検出され、規模や配列からP₁~P₄が主柱穴と思われる。P₁は長径68cm・短径45cm・深さ60cm、P₂・P₃は長径85・90cm・短径45cm・深さ58cm、P₄は長径55cm・短径38cm・深さ58cmで、いずれも楕円形を呈している。P₄の南側わきに掘られているP₇は径30cm、床面から斜傾した柱穴の底面までの深さは45cmで補助柱穴と思われる。P₅は長径80cm・短径70cm・深さ45cmで、規模や配列から出入口施設に関するピットと思われる。また、P₆は径75cmの円形を呈し、深さ48cmで配列から本跡に伴うものではないと思われる。

覆土は、暗褐色土を主体に自然堆積している。覆土に焼土粒子・炭化粒子が含まれ、さらに床面上からも焼土粒子や少量の炭化材が検出されていることから、本跡は焼失家屋と考えられる。

遺物は、本跡全域にわたって多量の土師器とともに、須恵器、土製品、内耳形土器が出土している。土師器は、東壁中央部の壁際から2つに割れた状態で坏形土器（第25図9）、中央部床面直上から鉢形土器（第25図11）・甕形土器（第25図12）、カマド周辺の床面直上から正位で坏形土器3点（第25図6~8）・高台付皿形土器（第25図2）・甕形土器（第25図13）、P₄の覆土から高台付皿形土器（第25図3）が出土している。土製品は、カマド手前の覆土下層から球状土錘（第25図17）・支脚（第25図18）が出土している。内耳形土器は破片で、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。須恵器も破片で、覆土中層から下層にかけて出土しているが、器形の窺えるものは見られなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第12号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第25図 1	高台付皿形 土器 土 師 器	A 12.9 B 3.0 D 7.0 E 1.2	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けて、「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P 79 体部外面墨書 「口」 内面黒色処理 100%
2	高台付皿形 土器 土 師 器	A (13.3) B (2.9) D (6.6) E 0.9	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は僅かに水平にのび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けて、「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 75 内面黒色処理 60%
3	高台付皿形 土器 土 師 器	A (13.5) B 2.2 D 6.2 E 0.9	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は僅かに水平にのび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けて、「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P 76 内面黒色処理 40%
4	高台付坏 須 恵 器	A (12.1) B 4.1 D (6.2) E 1.1	体部はやや内彎気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒 灰白色 普通	P 67 35%
5	坏形土器 土 師 器	A 14.0 B 4.2 C 5.5	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 69 内面黒色処理 90%
6	坏形土器 土 師 器	A 13.7 B 4.5 C 5.9	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 72 内面黒色処理 90%
7	坏形土器 土 師 器	A 13.6 B 4.0 C 6.6	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい褐色 普通	P 70 体部外面墨書 「口」 内面黒色処理 95%
8	坏形土器 土 師 器	A 13.7 B 3.7 C 5.6	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P 73 底部・体部外面墨書「西」 内面黒色処理 95%
9	坏形土器 土 師 器	A 13.5 B 4.0 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、軽く手持ちヘラ削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 71 体部外面墨書 「大」 95%
10	坏形土器 土 師 器	A (15.8) B (4.3)	体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり、そのまま口縁部へ至る。	水挽き成形。 体部内面ヘラ磨き、外面下端回転ヘラ削り。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	P 74 内面黒色処理 30%
11	鉢形土器 土 師 器	A 16.5 B 9.5 C (9.3)	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・砂礫 橙色 普通	P 80 70%
12	甕形土器 土 師 器	B (2.4) C 7.0	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 褐色 普通	P 66 5%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
13	甕形土器 土師器	B (4.3) C 6.1	底部は平底で、胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P65 10%
14	高台付皿形土器 土師器	A (12.7) B 1.7 C 6.4	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。貼り付け高台は欠損。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。体部内面ヘラ磨き。	細砂・スコリア 淡赤橙色 普通	P77 40%
15	高台付坏形土器 土師器	B (2.1) D 7.2 E 1.3	高台は外下方へのび、端部は丸い。	高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P68 10%
16	器台形土器 土師器	B (4.6) D (13.5)	脚部は「ハ」の字状に開き、脚部上位3か所に孔が穿たれている。	脚部内面ナデ、外面縦位のヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P78 20%

第12号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第25図 17	球状土錘	DP27	1.7	2.1	—	6.9	孔径0.7cm, 黒色, 100%
18	支脚	DP 7	(11.1)	7.3	—	(496.8)	橙色

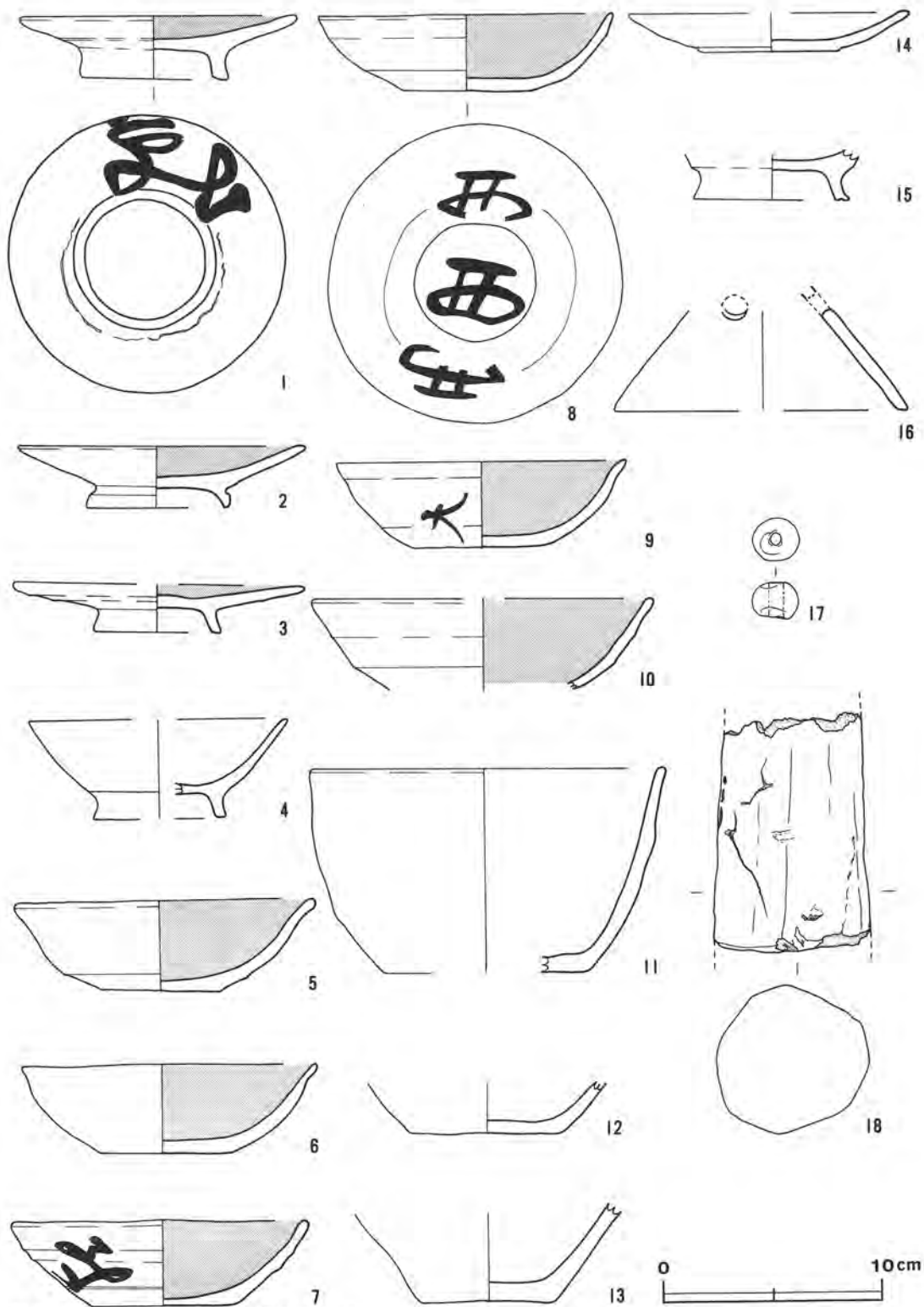
第13号住居跡 (第26図)

本跡は、B5b₁区を中心に確認され、第15号住居跡の北側に隣接している。本跡は北東コーナ一部で第14号住居跡と重複しているが、土層断面図や出土遺物から、本跡の方が古い遺構である。

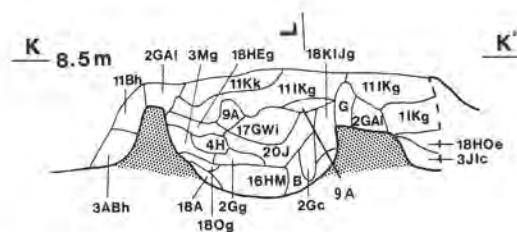
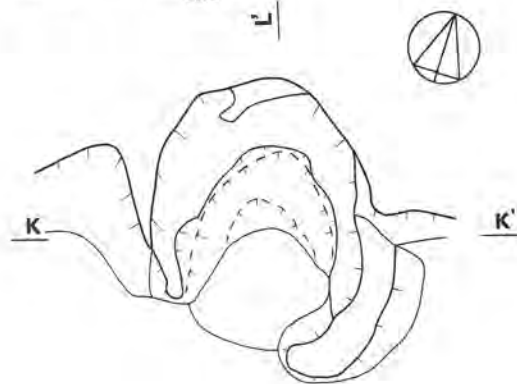
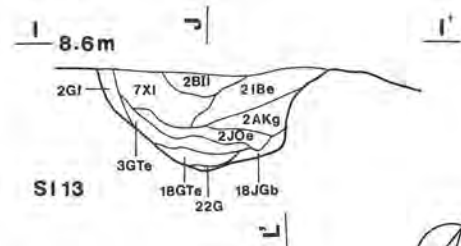
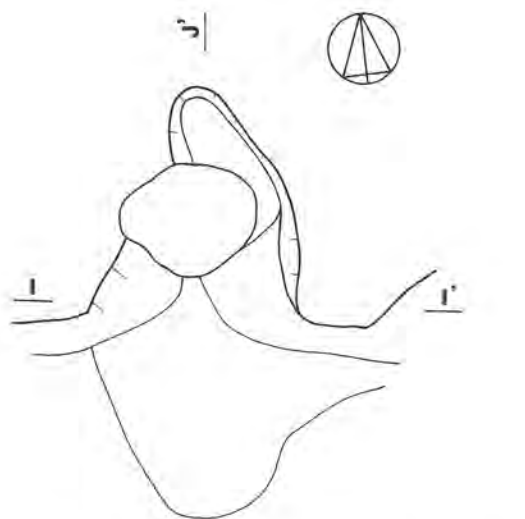
平面形は、長軸3.5m・短軸3.4mの方形を呈し、主軸方向はN-25°-Eを指している。壁高は31cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立に上がっている。床面はほぼ平坦で、ロームが硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部・袖部は崩壊し、煙道部は攪乱されているため、規模等は不明である。袖部は粘土に山砂を混ぜて構築されていると思われる、内側は焼土粒子・灰を多量に含んでいる。規模は推定で、長さ110cm・幅80cmで、壁外へ45cm掘り込んでいる。ピットはP₁~P₃の3か所検出され、P₁は直径26cm・深さ60cm、P₂・P₃は直径30cm・深さ30cmである。P₁は配置に規則性はないが、P₂・P₃よりも深く、規模から支柱穴かと思われる。

覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土を主体とし、中層に焼土粒子や炭化粒子を含み、自然堆積の様相を呈している。

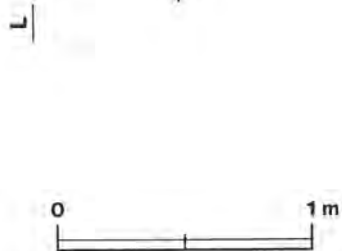
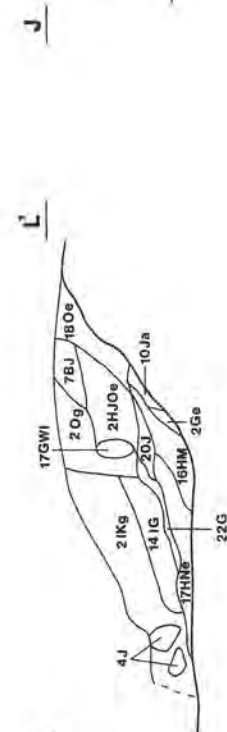
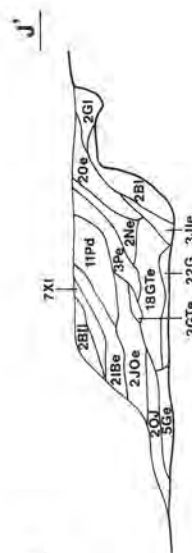
遺物は、多くの土師器のほかに、須恵器、土製品が出土している。土師器は、カマド手前の床面直上とカマドの覆土中から甕形土器4点(第28図1~3・11)、西壁中央部の床面直上から正位で坏形土器2点(第28図4・5)が出土している。須恵器は、東壁中央部の床面直上から蓋(第28図8)が出土している。その他、覆土中層から下層にかけて土師器の高台付坏形土器(第28図



第25图 第12号住居跡出土遺物実測図



SI 14



第27図 第13・14号住居跡カマド実測図

9) や球状土錘 (第28図12) が出土している。

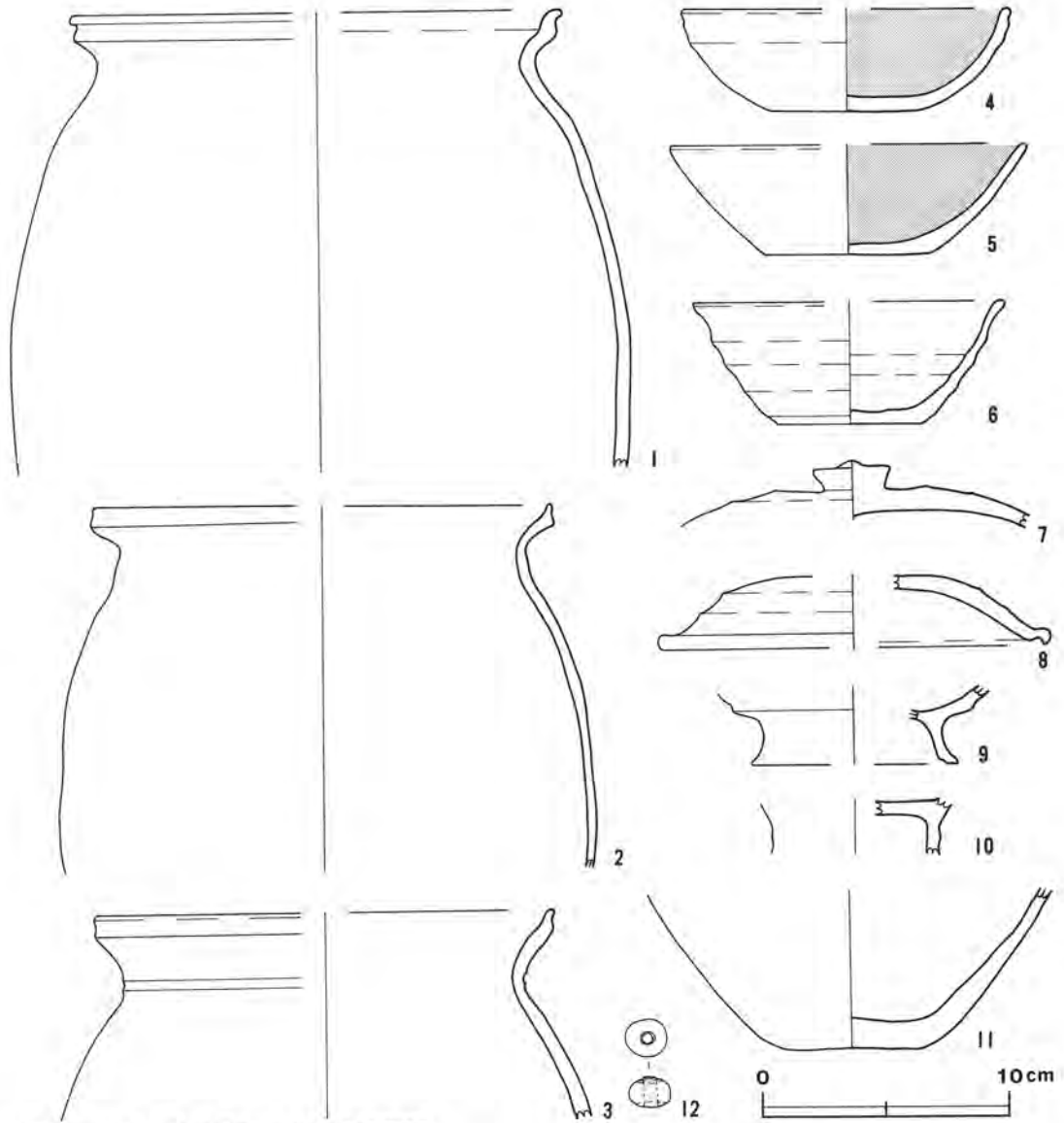
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	甕形土器	A (20.0)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に外上方に開き、口唇部はやや外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P82
	土師器	B (18.7)				15%
2	甕形土器	A (18.5)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P81
	土師器	B (14.8)				20%
3	甕形土器	A (18.4)	口縁部は「く」の字状に外上方に開き、口唇部はやや外上方につまみ上げられている。外面の頸部に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 内面黒褐色 普通	P83
	土師器	B (8.4)				20%
4	坏形土器	A (13.3)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P88
	土師器	B 4.2 C 5.8				内面黒色処理 45%
5	坏形土器	A (14.5)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P87
	土師器	A 4.5 C 6.6				内面黒色処理 75%
6	坏	A (12.6)	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向右。	細砂・長石 黄灰色 普通	P89
	須恵器	B 5.0 C 5.8				40%
7	蓋	B (2.9)	天井部中央の中心が高く、周囲が凹むつまみが付く。天井部は扁平である。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P90
	須恵器	G 3.2 H 1.2				30%
8	蓋	A (16.0)	天井部は扁平であるが、口縁部に向かってなだらかに下降する。口縁部は下方向に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。	細砂・礫 褐灰色 普通	P91
	須恵器	B (3.0)				25%
9	高台付坏形土器	B (3.0)	高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P86
	土師器	D (8.4) E 1.8				5%
10	高台付坏形土器	B (2.2)	高台は外下方へのびる。	底部回転糸切り。 高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P85
	土師器	E (1.4)				5%
11	甕形土器	B (6.5)	底部は平底で、胴部は僅かに内彎しながら外上方に立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P84
	土師器	C 5.6				10%

第13号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第28図 12	球状土錘	DP28	1.2	1.7	—	2.6	孔径0.5cm, 橙色, 100%



第28図 第13号住居跡出土遺物実測図

第14号住居跡 (第26図)

本跡は、B5b₂区を中心に確認され、第2号住居跡の南側3.2m、第83号住居跡の東側5.7mに位置している。北西側で第13号住居跡、南西側で第15号住居跡と重複しており、いずれも本跡の床面を切っていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、南東コーナー部を含む東側の一部がエリア外に延びているが、平面形は一辺5.2mの隅丸方形を呈するものと思われ、主軸方向はN-21°-Wを指している。壁高は52cmで、壁は締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、ロームが硬く踏み固められてい

る。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は山砂を多量に含む粘土で構築され、内側はよく焼けて焼土粒子や焼土小ブロックが付着している。規模は長さ150cm・幅100cm、壁外へ25cm掘り込んでいる。ピットはP₁～P₅の5か所検出され、配列や規模からP₁・P₂・P₃・P₄が支柱穴と考えられる。いずれも径は40～53cm、深さは25～50cmの規模である。P₅は径30cm・深さ40cmの規模を有し、位置などから出入口施設に関連するピットと考えられる。

覆土は、上・中層に黒褐色土、下層に暗褐色土が自然堆積しており、いずれもローム粒子と少量の焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。

遺物は、多くの土師器のほかに、須恵器、磨製石斧が出土している。土師器は、中央部の覆土下層から中層にかけて甕形土器3点（第29図1～3）が出土している。須恵器は、カマドの東側の覆土下層から高台付坏（第29図7）が出土し、他に、覆土下層から中層にかけて坏3点（第29図4～6）が出土している。磨製石斧（第29図8）は、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

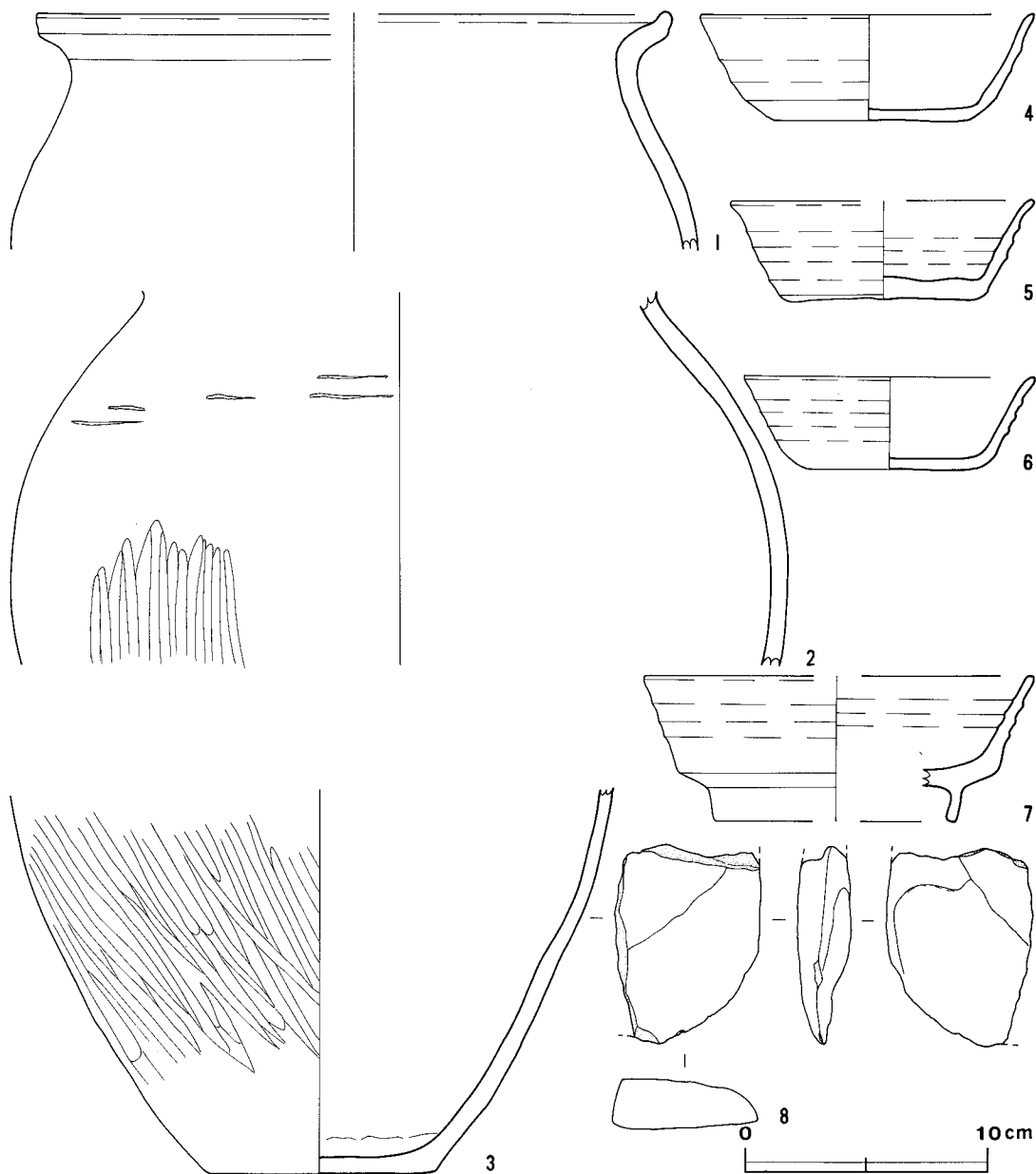
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第14号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	甕形土器	A (26.1)	口縁部は大きく外反し外上方に開き、口唇部はやや外上方につまみ上げられている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	細砂・雲母に ぶい橙色 普通	P93 20%
	土師器	B (9.9)				
2	甕形土器	B (15.5)	胴部は丸く張っている。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラナデ後、中位以下縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母に ぶい橙色 普通	P94 20%
	土師器					
3	甕形土器	B (15.8)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラナデ後、斜位のヘラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P95 30%
	土師器	C (9.5)				
4	坏 須恵器	A 13.6	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り、一部静止ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	細砂・長石 灰黄色 普通	P97 80%
		B 4.4				
		C 8.0				
5	坏 須恵器	A (12.5)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰色 普通	P98 45%
		B 4.2				
		C 8.4				
6	坏 須恵器	A 12.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒 灰色 普通	P99 50%
		B 3.9				
		C 8.0				
7	高台付坏 須恵器	A (15.7)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	細砂・砂礫 褐灰色 普通	P96 60%
		B 6.0				
		D (10.0)				
		E 1.3				

第14号住居跡出土石器解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第29図 8	磨製石斧	Q 4	8.2	6.0	2.2	129.3	紅桂石



第29図 第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡（第30図）

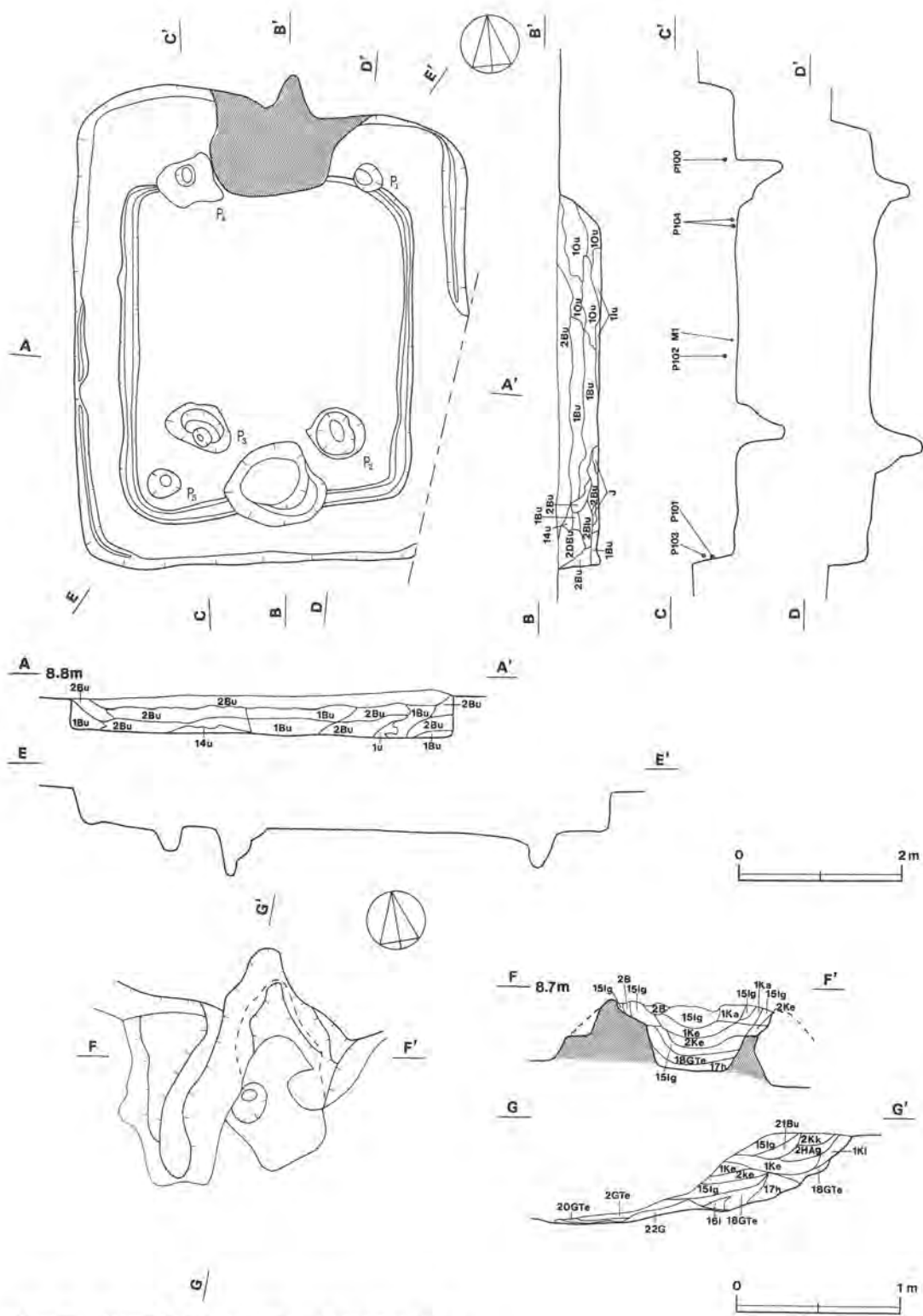
本跡は、B5c₂区を中心に確認され、第13・14号住居跡の南側0.8mに位置している。本跡の北側カマドで第14号住居跡と重複している。本跡が第14号住居跡を切っており、第14号住居跡の南西側に本跡のカマドを構築していることから、本跡の方が新しい遺構である。

本跡は、南東コーナー部を含む東側の一部がエリア外に延びているが、平面形は、長軸6.0m・短軸4.8mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-3°-Eを指している。壁高は55cmで、壁は締めりのあるロームで外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、ロームが踏み硬められているが、特に柱穴の内側は硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。東側は攪乱されていたが、袖部は山砂を混ぜた粘土で地山を削った部分に載せて袖部を構築している。内側は熱を受けて焼土粒子・焼土小ブロック・灰を多量に含み赤化している。長さ130cm・幅140cmで、壁外へ40cm掘り込んでいる。ピットはP₁～P₅の5か所検出され、配列や規模からP₁・P₂・P₃・P₄が支柱穴と思われる。いずれも径は40～60cm、深さは40～60cmの規模である。P₅は直径40cm・深さ28cmの規模で、位置等から補助柱穴と思われる。また、本跡の柱穴のすぐ外側に上幅15～25cm・深さ5cmほどの壁溝がカマドを除いて周回しているのを確認したので、本跡は拡張され、建て替えが行われたものと考えられる。貯蔵穴は南壁近くに検出され、平面形は長径130cm・短径100cmの楕円形で、床面を20cmほど掘り込んでいる。貯蔵穴の覆土は上層にローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土、下層にローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土が自然堆積している。

覆土は、上層に暗褐色土、下層に黒褐色土が自然堆積している。覆土には、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・粘土粒子を含んでいる。住居跡のカマド手前から南壁下付近に幅2.9m・長さ4.5mの範囲の床面が焼けており、火災を受けていると推定される。

遺物は、多くの土師器のほかに、須恵器、陶器、鉄製品が出土している。多くの遺物は破片で、覆土中層から下層にかけて出土している。土師器は、南壁中央部の覆土中層から坏形土器（第31図1）、中央部の覆土中層から高台付皿形土器（第31図2）が出土している。須恵器は、南壁下の覆土下層から円面硯（第31図4）・坏（第31図3）が出土している。陶器は、カマド手前の床面直上から長頸壺の口縁部（第31図5）が出土している。鉄製品は、中央部の覆土下層から横位で刀子（第31図6）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



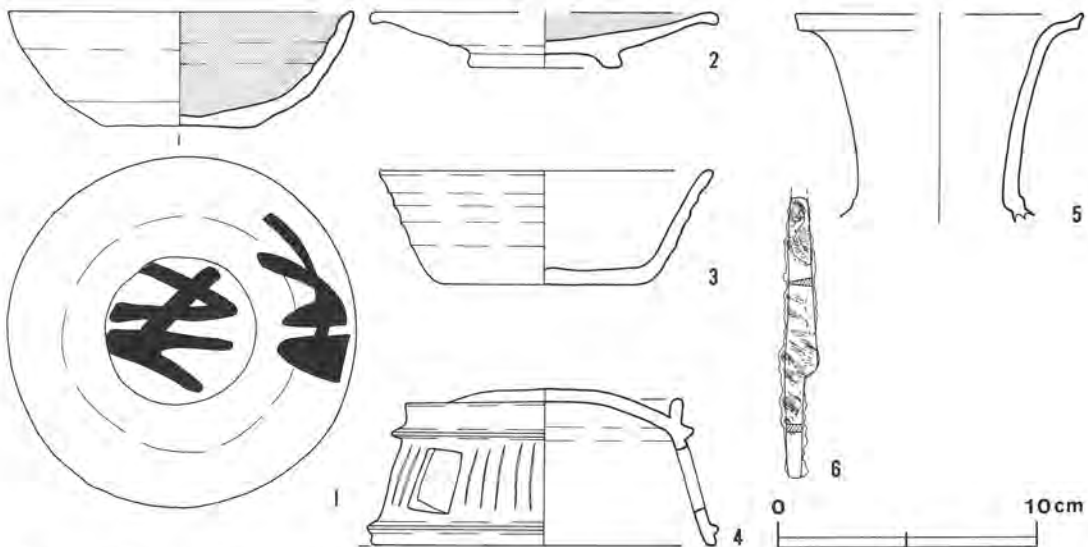
第30图 第15号住居跡実測図・遺物出土位置図

第15号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	环形土器 土師器	A 13.6 B 4.5 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びている。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P101 底部・体部外面 墨書「口・口」 内面黒色処理 95%
2	高台付皿形 土器 土師器	A (13.6) B 2.2 D 5.9 E 0.6	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開いている。口縁部は水平にのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付けて「ハ」の字状に外下方にのびる。	底部回転ヘラ削り。高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P102 内面黒色処理 55%
3	坏 須恵器	A 13.0 B 4.5 C 8.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びている。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒 にぶい橙色 普通	P100 90%
4	円面硯 須恵器	A 10.8 B 6.2 C 13.5	脚部上位に1条、下位に1条の隆帯が見られる。2.0cm×2.5cmのスカシ窓が4ヶ所で、0.7cm間隔に5本の刻みを入れている。外提は断面四角形。外周は浅い溝が一周する。	水挽き成形。 硯部・外提・隆帯とも接合。 スカシ窓ヘラ切り。 内・外面横ナデ。	細砂・長石 褐灰色 普通	P103 硯面に墨付着 80%
5	長頸壺 陶器	A (11.2) B (8.2)	頸部はほぼ垂直に立ち上がるが、上位につれて外反が強くなる。口縁部は外反し、口縁端部は直立する。	水挽き成形。 口縁部内・外面横ナデ。	細砂・長石粒・鉄 灰白色 普通	P104 10% 口縁部に自然釉 がかかっている。

第15号住居跡出土鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第31図 6	刀子	M1	(11.0)	1.4	0.4	(13.1)	



第31図 第15号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡（第32図）

本跡は、B4i₀区を中心に確認され、第18号住居跡の北側1.8m、第68号住居跡の東側3.3mに位置している。本跡の北側で第17号住居跡、北壁の北東側で第25号土坑と重複している。本跡は第17号住居跡の上面に床を貼って構築しているので、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸3.3m・短軸3.2mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-7°-Eを指している。残存する北東・南東壁と南西壁の一部の壁高は22cmで、締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。他の壁は重複のため不明である。床面は第17号住居跡の覆土上層に貼り床をして構築され、粘土を含む黒褐色土が硬く踏み固められている。貼り床の部分は、そうでない南東壁側の床面に比べ、若干低くなっている。南東壁側は平坦で、ロームがよく締まっている。なお、カマドの手前から中央部にかけては、特に硬く踏み硬められている。カマドは東壁中央部に付設されていたと思われるが、攪乱を受けているため天井部・袖部とも崩壊し、規模等は不明である。ただ、山砂を混ぜた粘土が熱を受けて焼土化し、20cmほど締まりなく、堆積していた。ピットはP₁～P₄の4か所検出されているが、P₂・P₃・P₄は径20～30cm・深さ50cmの規模で、配置に規則性は無いが、本跡に伴う柱穴と思われる。P₁は長径65cm・短径45cmの楕円形状に30cmほど掘り込まれている。性格は不明である。他の柱穴と比較して浅く、大きさも太く、配置から検討しても主柱穴ではないと思われる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒子を多量、焼土粒子・炭化粒子を極少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器を主に、須恵器、縄文式土器が散在して出土している。土師器は、北壁東寄りの覆土中層から下層にかけて甕形土器の口縁部（第33図1）と坏形土器（第33図3）が出土し、西壁中央部の覆土下層から高台付坏形土器（第33図4）、南西コーナー部の覆土下層から甕形土器（第33図2）が出土している。その他、東壁中央部の床面直上から横位で砥石（第33図6）が出土している。須恵器は、覆土中層から下層にかけて出土しているが、破片のためまとまった器形にならなかった。縄文式土器も破片で、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

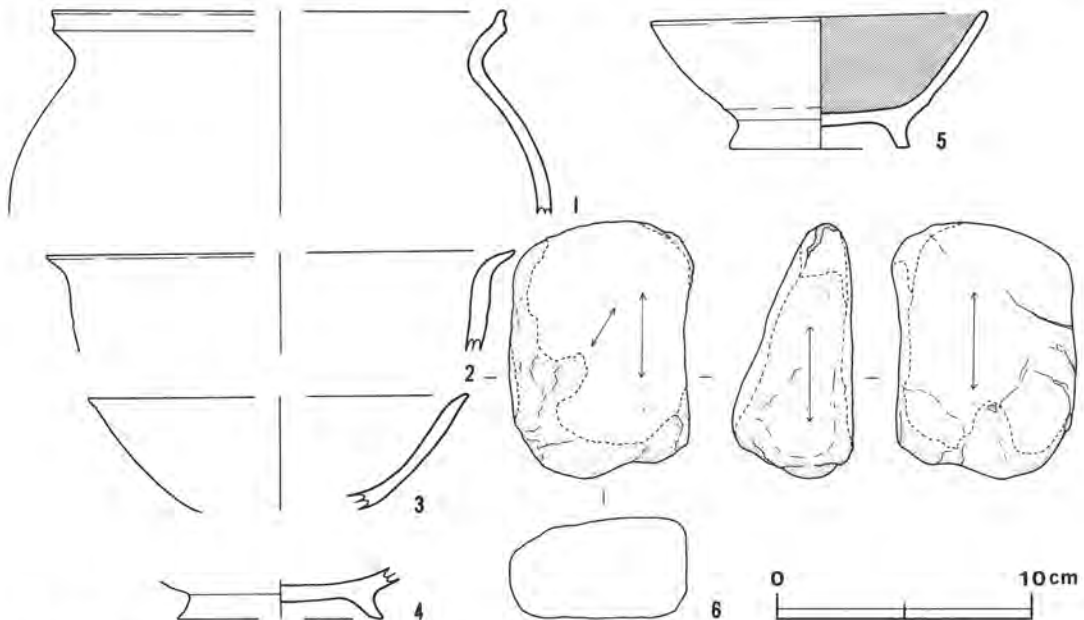
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第16号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	甕形土器 土師器	A (17.9) B (8.0)	胴部は丸く張り、口縁部は大きく外反し、口縁端部を上方につまみ出し丸くおさめている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい赤褐色 普通	P105 20%
2	甕形土器 土師器	A (18.5) B (3.9)	口縁部は外反して外上方へ開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面横ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P109 10%
3	坏形土器 土師器	A (15.0) B (4.5)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P106 75%
4	高台付坏形土器 土師器	B (2.0) D (8.0) E 1.0	高台は外下方へのびる。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 底部内面ヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 普通	P108 5%
5	高台付坏形土器 土師器	A 13.2 B 5.4 D 7.2 E 1.0	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P107 内面黒色処理 95%

第16号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第33図 6	砥石	Q16	10.1	7.3	4.0	472.2	砂岩



第33図 第16号住居跡出土遺物実測図

第17号住居跡（第32図）

本跡は、B4b区を中心に確認され、第68号住居跡の東側3.0m、第18号住居跡の東側4.0mに位置している。本跡の南側で第16号住居跡、東側壁下で第25号土坑と重複している。本跡の床面より約30cm上面に第16号住居跡の貼り床が検出されていることや、第25号土坑が本跡のカマドを切っていることから、本跡が最も古い遺構である。

平面形は、長軸3.75m・短軸3.3mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-7°-Eを指している。壁高は42cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅13~15cm・深さ10~13cmの壁溝がカマド及び北壁下を除いて周回している。床面は砂質粘土の上にローム小ブロックを多量に含む暗褐色土で床を貼り、ややゆるやかな起伏がみられ、カマドの手前及びピットに囲まれた内側は、特に硬く踏み固められている。床下からは土坑2基を検出した。土坑は西壁よりに位置している。土坑Aは長径76cm・短径70cmのほぼ円形を呈し、深さ34cmである。土坑Bは長径1.13m・短径95cmの楕円形を呈し、深さ13cmである。覆土は共にローム小ブロックを多量に含む褐色土で人為的に埋められている。貼り床下の掘り方は、南側全体が幅90cmにわたり12cm前後高くなっている。カマドは東壁中央部に付設され、天井部・袖部は砂質粘土で構築されている。重複のため南側袖部を残して他の部分は崩れており、規模や平面形等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると、長さ130cm・幅75cmほどの規模であったと思われる。掘り方は壁外へ50cm掘り込んでいる。火床は床面を5cmほど掘り込み、ロームが熱を受けて焼土ブロック化している。ピットはP₁~P₆の6か所検出されているが、P₁・P₂はそれぞれ北東・南東コーナー付近に位置し、P₁・P₂の規模は長径75・116cm・短径65・80cm・深さ46・30cmの楕円形である。P₃は長径30cm・短径25cm・深さ5cmの楕円形で、規模・配置等から出入口施設に関連するものと思われる。P₄は中央部に位置し、径40cm・深さ36cmで配置・規模等から支柱穴と思われる。P₅・P₆は長径30・35cm・短径22cm・深さ5cmの楕円形で、配置から補助柱穴と思われる。

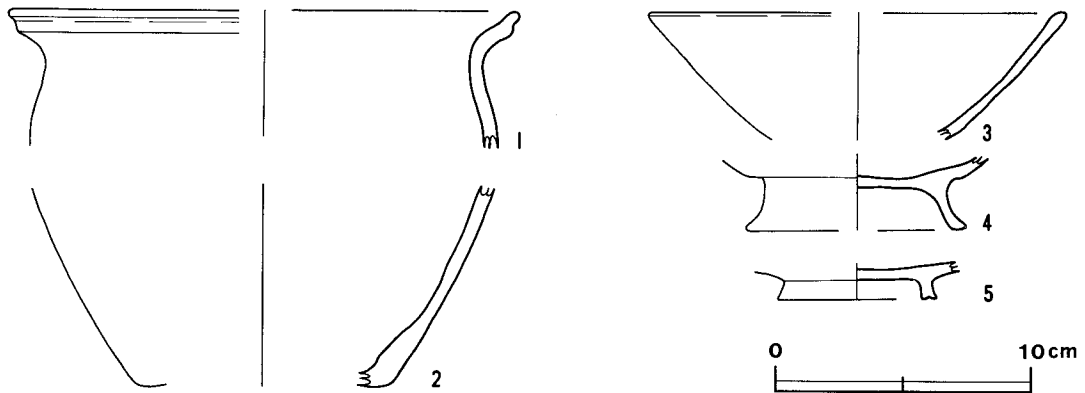
覆土は、攪乱を受けている部分がみられるが、全体として、暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。上層には多量のローム粒子、極少量の焼土粒子・炭化粒子、下層には多量の粘土粒子、中量のローム粒子、焼土粒子、極少量の炭化粒子を含んでいる。

遺物は、多くの土師器と、須恵器、土製品、縄文式土器が出土している。土師器は、北壁東寄りの覆土下層から甕形土器の口縁部（第34図1）・坏形土器（第34図3）、中央部の覆土下層から高台付坏形土器（第34図4）、南壁中央部の覆土中層から甕形土器（第34図2）、P₁の覆土中から高台付皿形土器（第34図5）が出土している。須恵器は、覆土中層から下層にかけて出土しているが、破片のためまとまった器形にならなかった。縄文式土器も破片で、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第17号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	甕形土器	A (19.6)	口縁部は短く外反し、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ナデ。	砂粒・礫・スコリア 橙色 普通	P110
	土師器	B (5.4)				10%
2	甕形土器	B (7.9)	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 にふい赤褐色 普通	P111 5%
3	坏形土器	A (16.0)	底部欠損。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部へ至る。	水挽き成形。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にふい褐色 普通	P112 30%
	土師器	B (5.0)				
4	高台付坏形土器	B (2.9)	高台は外下方へのびる。	底部回転ヘラ削り。 高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	P113
	土師器	D (8.5)				15%
		E 2.0				
5	高台付皿形土器	B (1.4)	高台は外下方へ短くのびる。	底部回転ヘラ削り。 高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。	砂粒・礫・スコリア 橙色 普通	P114
	土師器	D 6.2				10%
		E 0.7				



第34図 第17号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡 (第35図)

本跡は、B4_j区を中心に確認され、第16号住居跡の南側1.8m、第68号住居跡の南東側3.2mに位置している。

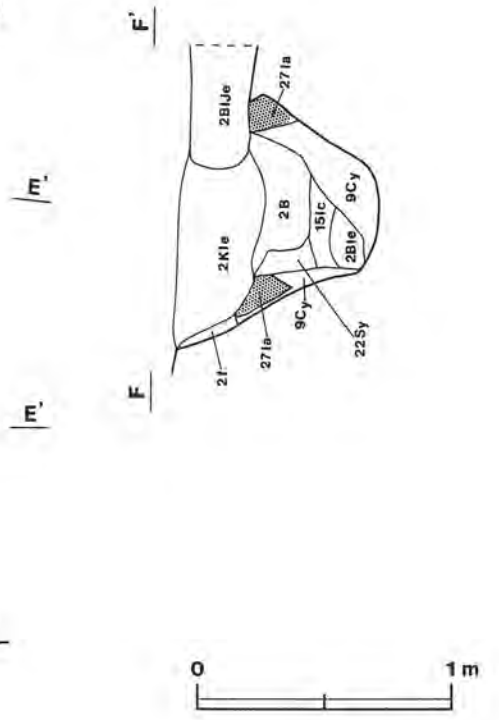
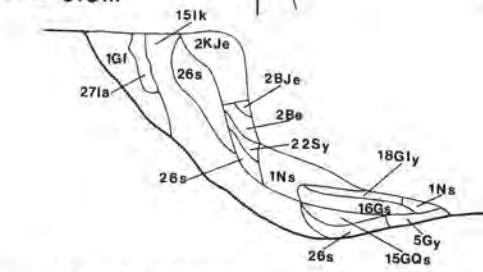
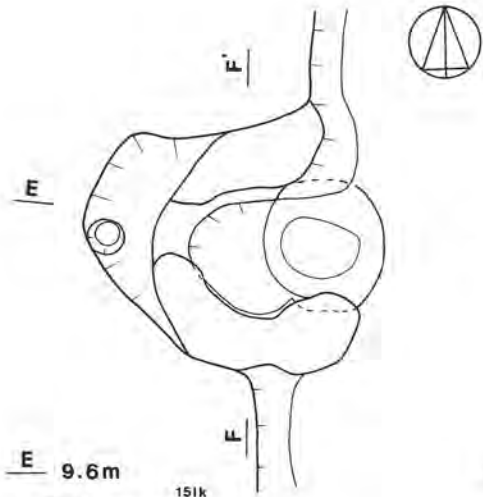
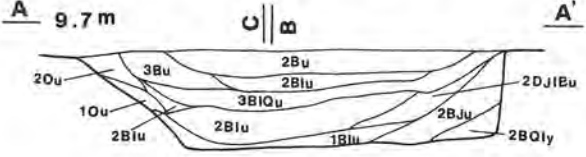
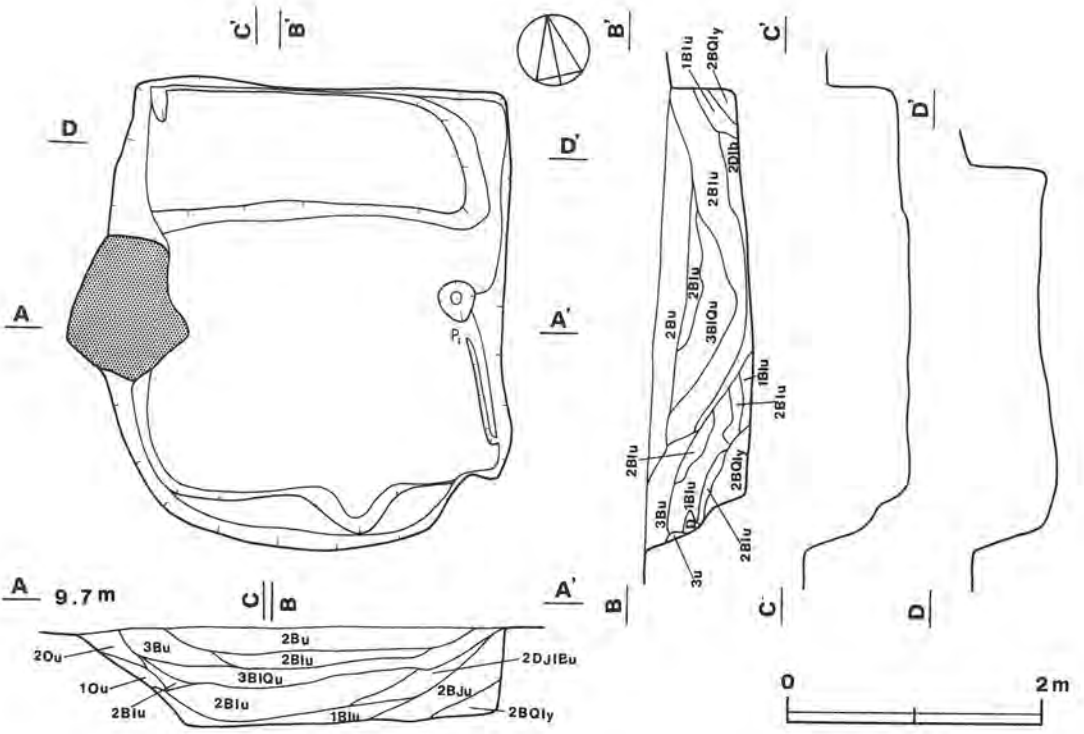
平面形は、長軸3.6m・短軸3.0mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-13°-Eを指している。壁高は72cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。床面は北壁下が幅1.0m・長さ2.65mの範囲で10cmほど高くなっている。その他の場所は砂質粘土の上にハードローム小ブロックやローム粒子を含む黒褐色土で、平に床を貼り、カマドの手前から南壁にかけて、幅1.8m・

長さ2.6mの範囲は硬く踏み固められている。床下からは、土坑2基とピット5か所(P₂~P₆)が発見された。土坑Aはカマド北側に位置し、長径90cm・短径70cmの楕円形を呈し、深さは25cmである。土坑Bは南壁下中央に位置し、長径100cm・短径80cmの不整楕円形を呈し、深さは30cmである。また、P₂~P₆はカマド手前付近に位置し、P₂・P₃は長径45cm・短径40cm・深さ15・14cmである。P₅は長径30cm・短径20cm・深さ15cmである。いずれも楕円形を呈している。P₄・P₆は径20・32cm・深さ22・15cmである。いずれも円形を呈している。さらに、北壁下から南東壁下コーナー部にかけて、上幅10cm・深さ5cmの壁溝が周回している。貼り床下の掘り方は、カマドの周囲が全体的に5cmほど高くなっている。性格は不明である。カマドは西壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は砂質粘土で構築され、内側は熱を受けて赤化し、覆土から多量の焼土粒子が発見されている。長さ160cm・幅102cm・焚口部幅50cmほどで、壁外へ60cm掘り込んでいる。ピットは1か所発見され、径25cm・深さ15cmの規模を有し、その周囲が硬く踏み固められていることやカマドの反対側に位置することなどから出入口施設に関連するピットと考えられる。

覆土は、ローム粒子・砂質粘土小ブロックを含む暗褐色土を主体とし、中層はローム粒子・砂質粘土を含む褐色土で、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、多量の土師器のほかに、須恵器、土製品、鉄製品が出土している。土師器は、南東コーナー部の床面直上から埴形土器(第36図7)、カマド内から支脚として使用されたと思われる高台付坏形土器(第36図8)と坏形土器(第36図6)が伏せた状態で重なり、さらに、その上に坏形土器(第36図4)・甕形土器3点(第36図3)・(第37図13・16)が載った状態で出土している。また、同所から高台付皿形土器(第36図10)や須恵器の坏(第36図5)も出土している。鉄製品は、北東コーナー部の床面直上から刀子2点(第37図19・20)が出土している。その他、カマド手前の覆土下層から管状土錘(第37図17)や砥石(第37図18)も出土している。さらに、貼り床下の土坑Aの覆土中から土師器の高台付坏形土器(第36図11)・坏形土器(第37図14)・鉢形土器(第36図2)・甕形土器の口縁部(第37図12)が出土している。これらは、出土状態から床を貼る前に、意図的に混入されたと思われる。須恵器も覆土下層から出土しているが、器形の窺えるものは見られなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第35图 第18号住居跡実測図

第18号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第36図 1	甕形土器	A (19.0)	胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P115 30%
	土師器	B (18.3)				
2	鉢形土器	A (24.5)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、胴部上位でほぼ直立する。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P129 40%
	土師器	B 18.1				
		C (17.0)				
3	甕形土器	A (18.6)	胴部上位が僅かに張り、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫・スコリア にぶい橙色 普通	P117 15%
	土師器	B (15.8)				
4	坏形土器	A (16.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 内面一部黒褐色 普通	P125 45%
	土師器	B (5.5)				
5	坏 須恵器	A (14.1)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒 灰褐色 普通	P130 55%
		B 5.3				
		C 6.8				
6	坏形土器	A 15.2	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラナデ、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P124 100%
	土師器	B 5.2				
		C 8.2				
7	壺形土器	A (11.8)	体部は内彎しながら外上方へのび、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 口縁部内・外面横ナデ。 体部内面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P121 20%
	土師器	B (5.5)				
8	高台付坏形土器	A 12.9	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	底部回転ヘラ削り。 高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P122 100%
	土師器	B 5.1				
		D 6.6				
		E 1.0				
9	高台付皿形土器	A (14.9)	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は水平にのび、端部を丸くおさめている。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部回転ヘラ削り。 高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P127 内面黒色処理 65%
	土師器	B 2.7				
		D 5.9				
		E 0.5				
10	高台付皿形土器	A (17.6)	体部は外上方へ大きく開き、口縁部は僅かに水平にのび、口縁端部は丸くおさめている。高台は「ハ」の字状に外下方にのびている。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P128 60%
	土師器	B 4.3				
		D (9.4)				
		E 2.0				
11	高台付坏形土器	B (2.5)	高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部回転ヘラ削り。 底部内面ヘラ磨き。 高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P123 20%
	土師器	D 8.2				
		E 1.2				
第37図 12	甕形土器	A (20.6)	胴部は僅かに張り、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P119 15%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
13	甕形土器 土師器	A (20.9) B (10.0)	胴部上位が僅かに張り、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 橙褐色 普通	P118 20%
14	坏形土器 土師器	A (15.7) B (3.0)	体部は内彎しながら外上方へのび、口縁部は僅かに外反する。	体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P126 体部外面墨書「口・口」 内面黒色処理 10%
15	甕形土器 土師器	A (18.4) B (20.6)	胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P116 35%
16	甕形土器 土師器	B (18.0) C (15.4)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面中位平行叩き、下位ヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 にぶい赤褐色 普通	P120 35%

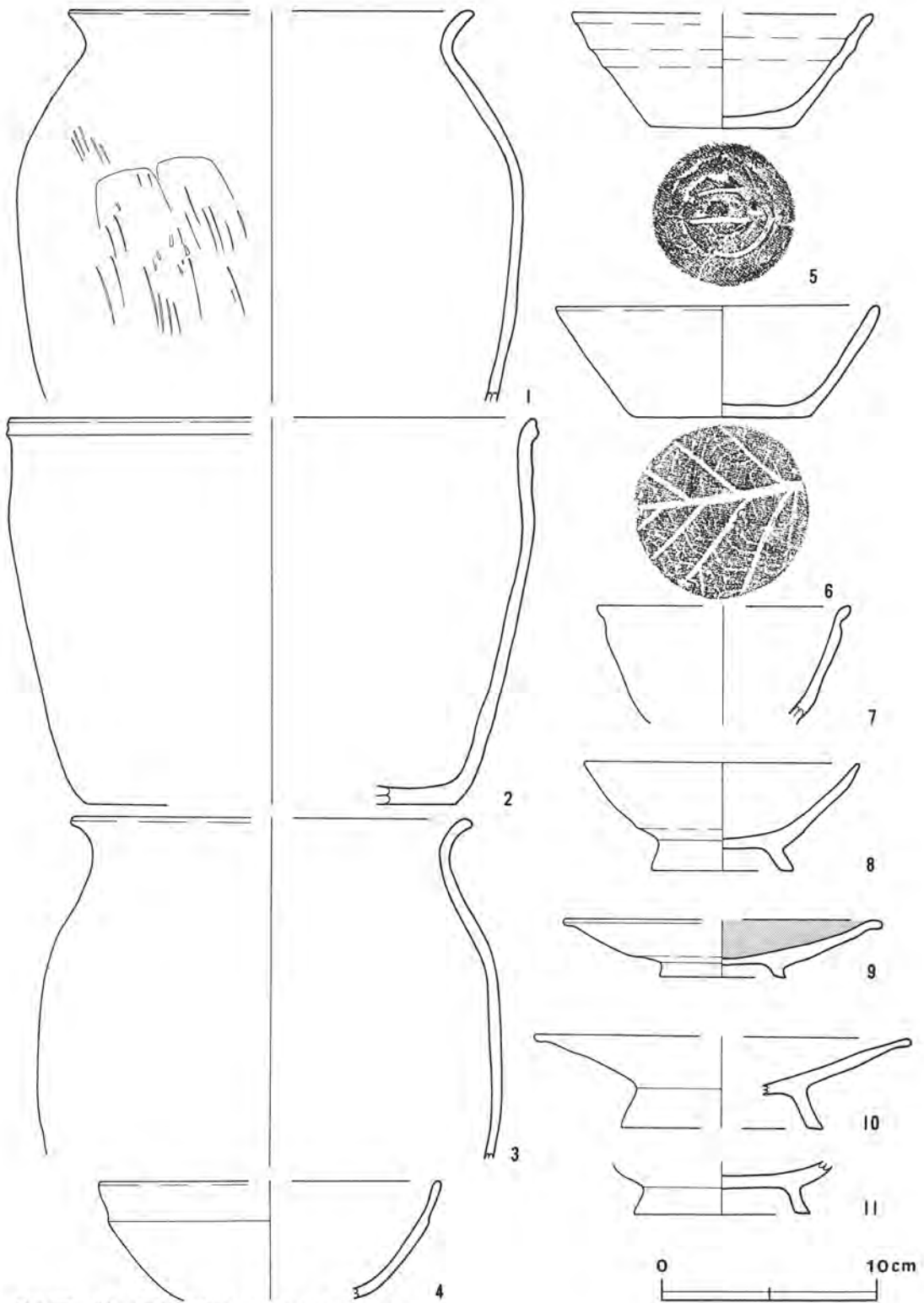
第18号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第37図 17	管状土錘	DP86	1.8	2.2	—	10.9	孔径0.8cm 灰褐色, 30%
18	砥石	Q 29	8.1	3.2	2.9	90.8	流紋岩
19	刀子	M 3	(6.4)	0.7	0.3	(7.6)	
20	刀子	M 2	(9.4)	1.0	1.0	(15.2)	

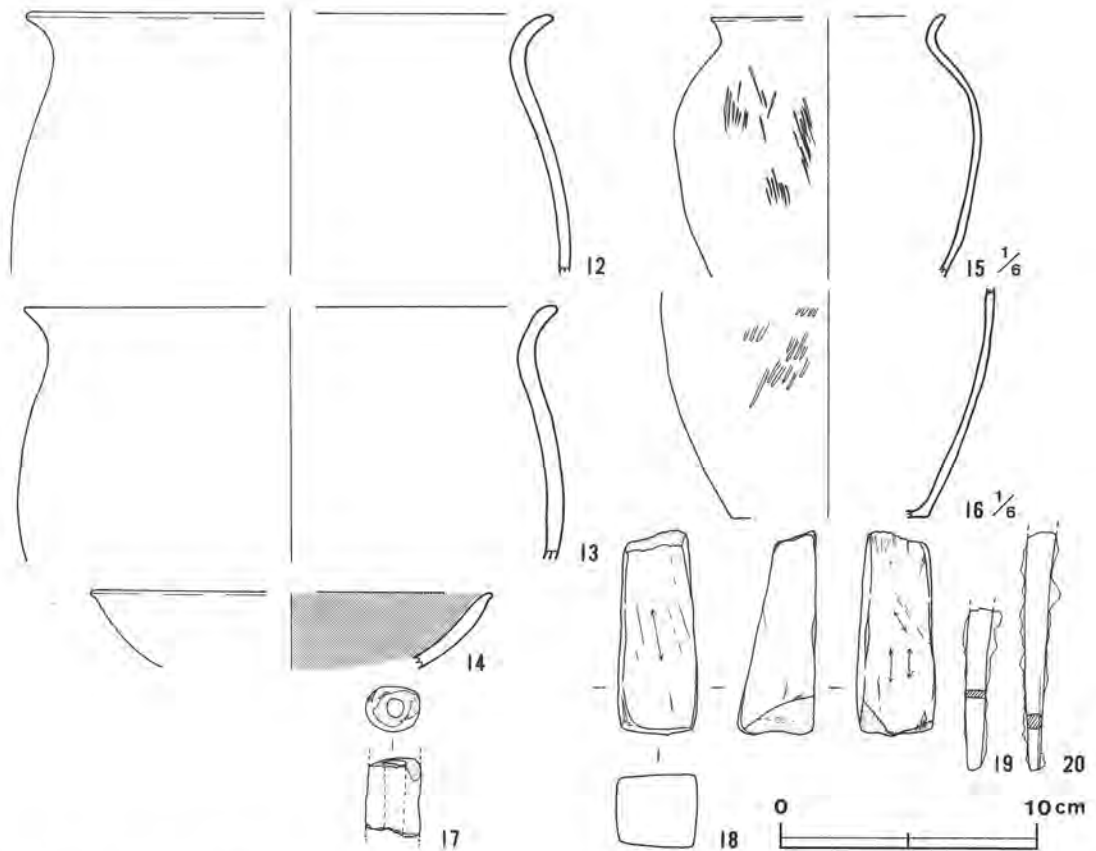
第19号住居跡 (第38図)

本跡は、C4b₀区を中心に確認され、第20号住居跡の北東側1.7m、第18号住居跡の南側4.0mに位置している。

本跡は、東側がエリア外に延びているため、平面形・規模等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると、隅丸方形を呈し、西壁の長さ4.1mで、主軸方向はN-4°-Eを指すものと思われる。壁高は25cmで、壁は締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。壁溝は南・西壁下に検出され、上幅20cm・深さ8~10cmの規模である。床面は全体的に凹凸がみられるが中央部は平坦で、ロームは硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されていたが、天井部・袖部はトレンチャーによる攪乱のため崩れて、規模・形状等の詳細は不明である。覆土は山砂を混ぜた粘土に焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。調査した部分から推定すると、長さ180cm・幅90cmで、壁外へ85cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤変硬化し、焼土・灰が35cmほど堆積している。ピットはP₁~P₆の6か所検出され、P₃・P₅は長径30・50cm・短径25・45cmの楕円形を呈し、深さは15cmの規模を有し、配置から主柱穴の一部と思われる。P₁は東側に位置し、径25cmの円形を呈し、深さは22cmである。P₁はその周囲が硬く踏み固められて凹凸がみられることから出入口の施設に伴うピットと思われる。P₂・P₄・P₆は長径24~30cm・短径22~26cmの楕円形を呈し、



第36图 第18号住居跡出土遺物実測図 (1)



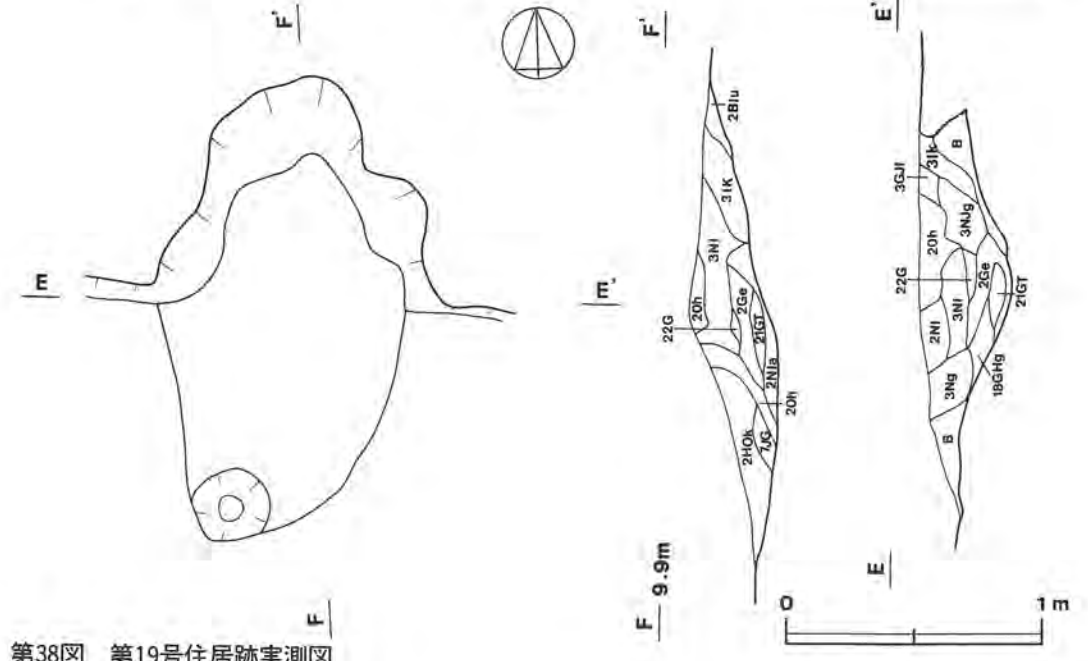
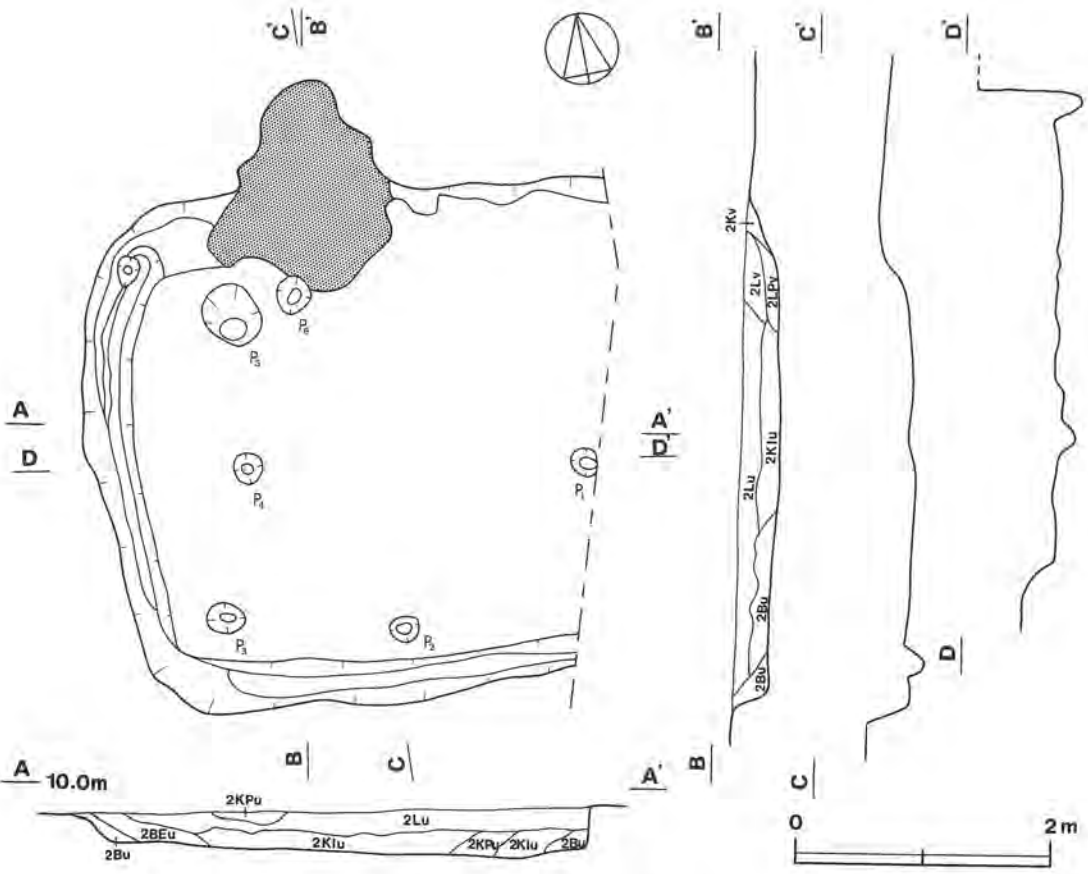
第37図 第18号住居跡出土遺物実測図 (2)

深さは15cmで、規模・配置等から補助柱穴と思われる。

覆土は、ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量含む暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって、多量の土師器、須恵器、鉄製品が出土している。土師器は、南壁中央部際から横位で高台付皿形土器(第39図4)、中央部から南西寄りの床面直上から坏形土器(第39図1)・高台付坏形土器(第39図3)が出土している。鉄製品は、中央部床面直上から釘(第39図6)が出土している。その他、覆土中層から下層にかけて土師器片や須恵器片が出土しているが、いずれもまとまった器形にならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



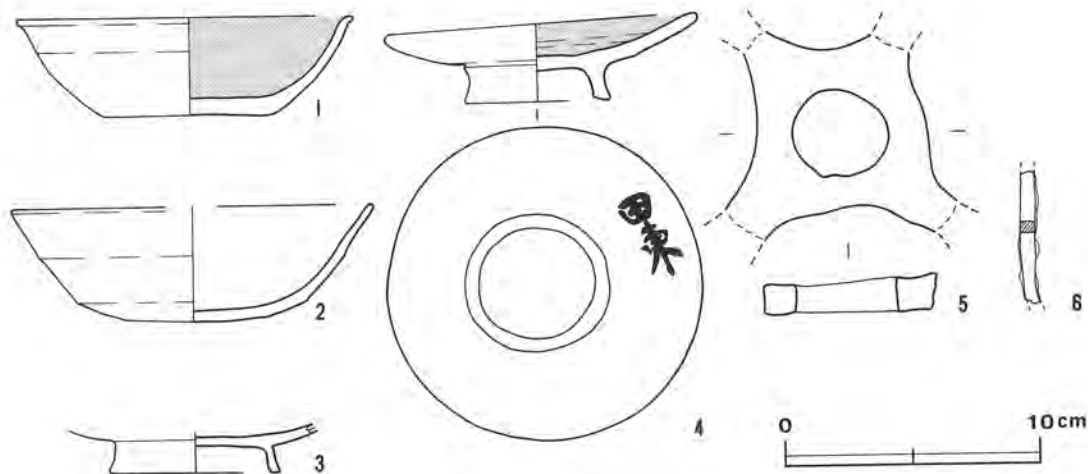
第38图 第19号住居跡実測图

第19号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	坏形土器 土師器	A 13.1 B 3.9 C 6.6	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	P132 内面黒色処理 90%
2	坏形土器 土師器	A (14.0) B 4.5 C 5.2	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 橙色 普通	P133 35%
3	高台付坏形土器 土師器	B (1.9) D 6.7 E 1.0	高台は貼り付けて、「ハ」の字状に外下方にのびる。	底部回転ヘラ削り。 底部内面へラ磨き。 高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にふい橙色 普通	P131 5%
4	高台付皿形土器 土師器	A 12.0 B 3.4 D 5.8 E 1.5	体部は内彎しながら外上方へ大きく開き、そのまま口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめている。高台は貼り付けて、外下方にのび、端部はやや丸くおさめている。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P134 体部外面墨書 「田東」 内面黒色処理 100%
5	瓶形土器 土師器		底部片は五孔式と思われる。	底部内面へラナデ、外面ナデ。	砂粒 にふい橙色 普通	P135 厚さ1.5cm 5%

第19号住居跡出土鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第39図 6	釘	M4	(5.2)	0.8	—	(5.5)	



第39図 第19号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡（第40図）

本跡は、C4d₉区を中心に確認され、第22号住居跡の東側に隣接している。第19号住居跡の南西側3.5mに位置している。本跡の南側コーナー部で第21号住居跡と重複しており、本跡の南側コーナー部上層に第21号住居跡のカマドが構築されていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸5.3m・短軸5.0mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-32°-Wを指している。壁高は28cmで、壁は締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、全域にわたり軟弱である。炉は中央部よりやや北側に位置し、長径64cm・短径54cmの楕円形を呈し、床面を2cmほど皿状に掘り込んでいる。焼土の量は少ないが、炉床はよく焼けており硬い。炉内覆土は焼土粒子を多量に含んだ暗褐色土が堆積している。ピットはP₁～P₆の6か所検出され、いずれも長径25～35cm・短径20～30cmの楕円形を呈し、深さは25～60cmの規模である。配置に規則性はみられないが、本跡に伴う柱穴と思われる。

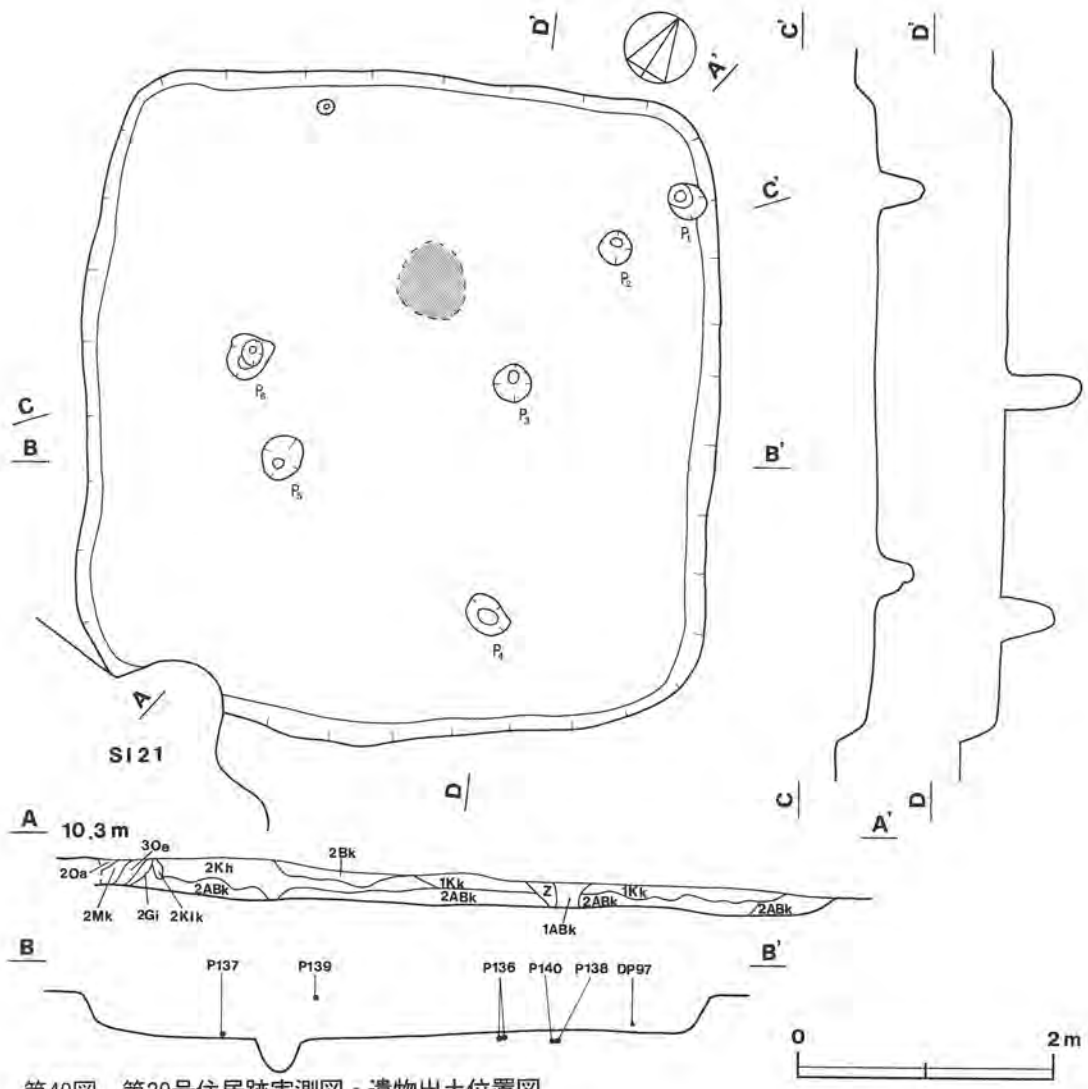
覆土は、ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土を主体とし、自然堆積を呈している。

遺物は、散在的に土師器を主にして、須恵器、石製品、鉄製品、縄文式土器、弥生式土器が出土している。土師器は、北コーナー部の床面直上から埴形土器の口縁部(第41図3)、南東壁東寄りの床面直上から壺形土器の口縁部(第41図1)、南コーナー部の床面直上から横位で小型甕形土器(第41図2)が出土している。石製品は、覆土下層から紡錘車(第41図6)が出土している。須恵器も覆土下層から散在的に出土しているが、まとまった器形にはならなかった。縄文式土器や弥生式土器は、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

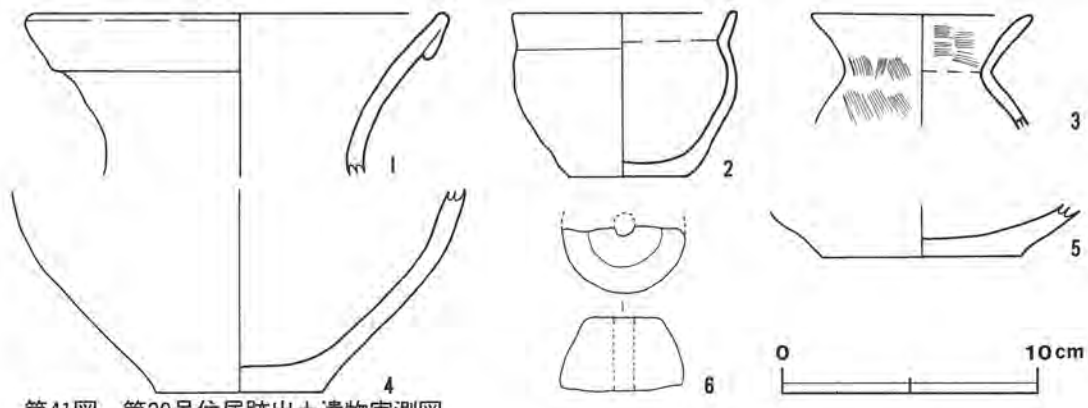
本跡は、出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものと思われる。

第20号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	壺形土器 土師器	A 16.6	口縁部は外反気味に開き、口縁端部を折り返している。	口縁部内面ヘラ磨き、外面ヘラナデ。	砂粒に ぶい 橙色 普通	P136
		B (6.5)				10%
2	小型甕形土器 土師器	A 8.8	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、胴部上位でやや張る。口縁部は外反しながら開いている。	口縁部内面横ナデ、外面ハケ目。 胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P137
		B 6.5				100%
		C 4.6				
3	埴形土器 土師器	A 8.2	口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面ハケ目。	砂粒 ぶい 橙色 普通	P140
		B (4.6)				10%
4	甕形土器 土師器	B (8.0)	底部は平底で、胴部は丸く張る。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 ぶい 赤褐色 普通	P138
		C 6.4				10%
5	甕形土器 土師器	B (2.0)	底部は平底である。	底部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 ぶい 赤褐色 普通	P139
		C 7.8				5%



第40图 第20号住居跡実測図・遺物出土位置図



第41图 第20号住居跡出土遺物実測図

第20号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第41図 6	紡 錘 車	D P 97	—	4.9	2.9	(34.7)	孔径0.8cm, におい 赤褐色, 50%

第21号住居跡 (第42図)

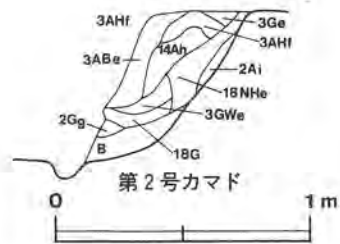
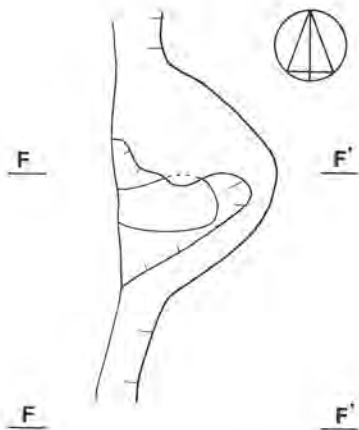
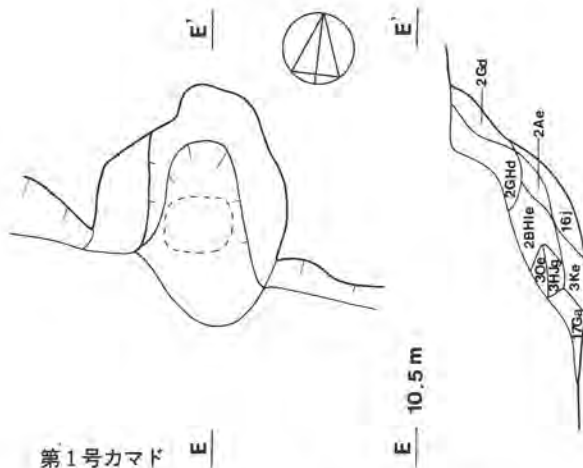
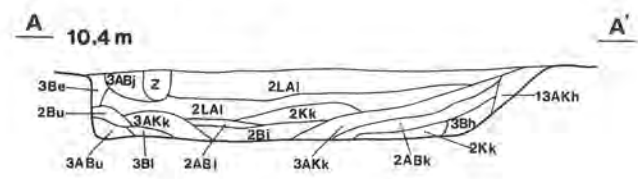
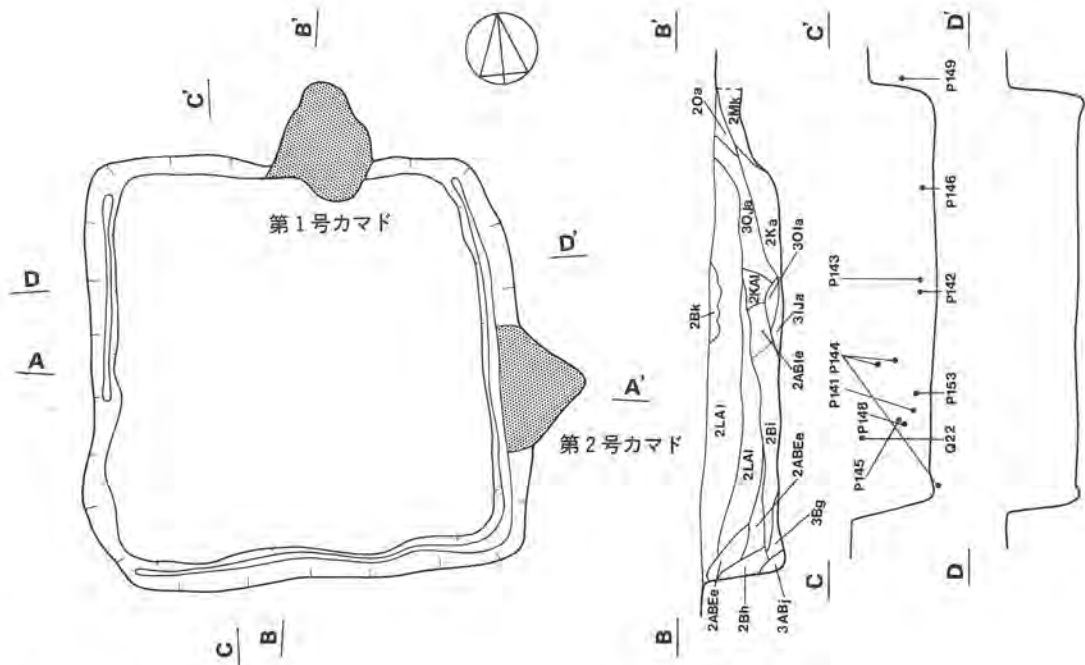
本跡は、C4es区を中心に確認され、第22号住居跡の南東側に隣接している。本跡のカマドが第20号住居跡南側コーナー部と重複しており、第20号住居跡の南側コーナー部上層に本跡のカマドを構築していることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸3.8m・短軸3.2mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-6°-Eを指している。壁高は65cmで、壁は縮まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10~20cm・深さ4~8cmの壁溝が北壁及び南西壁コーナー部を除き周回している。床面は全体的に平坦で、よく踏み固められている。カマドは北壁東側寄りと東壁南側寄りの2か所に付設されている。北壁東側寄りカマドの天井部・袖部はトレンチャーに攪乱されているため崩壊し、規模等は不明確である。調査した部分から推定すると、北壁東側寄りカマドの規模は長さ95cm・幅70cm、壁外へ65cm掘り込んでいる。残存している覆土は山砂を混ぜた粘土ブロック・粘土粒子・焼土ブロック・焼土粒子を含み、熱を受けて赤化している。火床は床面を4cmほど掘り込んでいる。東壁南側寄りカマドの天井部・袖部は人為的に取り除かれているため、煙道部しか検出できなかった。残存している煙道部の幅は95cm、壁外へ40cm掘り込んでいる。やはり、山砂を混ぜた粘土で構築されており、熱を受けて暗赤褐色を呈している。なお、北壁のカマドと東壁のカマドの新旧関係は土層断面から、最初に、東壁にカマドを構築し、後に、北壁にカマドを構築したと思われる。ピットは検出できなかった。

覆土は、ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土を主体に、壁際にローム粒子・ローム小ブロックを含む褐色土で自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から散在的に土師器を中心に、須恵器、鉄片が覆土中層から下層にかけて出土している。土師器は、第1・2号カマドや中央部の東寄りの覆土下層から坏形土器6点(第43図2・4・7~9・11)・高台付坏形土器(第43図10)・小型甕形土器の口縁部(第43図1)が出土している。須恵器は破片で、まとまった器形にはならなかった。その他、凹石(第43図13)が覆土上層から出土しているが、出土状況から周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



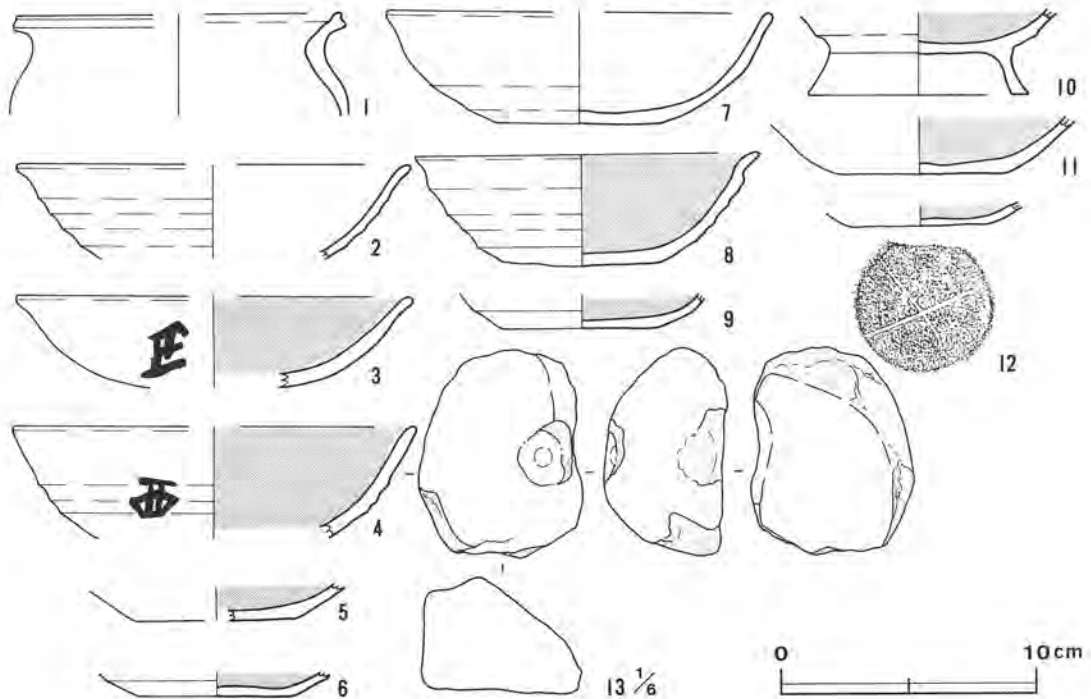
第42図 第21号住居跡実測図・遺物出土位置図

第21号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第43図 1	小型甕形土器	A (12.9) B (4.0)	口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P141 10%
	土 師 器					
2	坏形土器	A (15.5) B (3.7)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 外面にぶい橙色 内面褐色 普通	P145 20%
	土 師 器					
3	坏形土器	A (15.6) B 3.6	底部は丸底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。	体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P147 体部外面墨書「西」 内面黒色処理 10%
	土 師 器					
4	坏形土器	A (16.0) B (4.4)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P146 体部外面墨書「西」 内面黒色処理 20%
	土 師 器					
5	坏形土器	B (1.3) C (6.2)	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転へラ切り。 体部内面へラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P152 内面黒色処理 10%
	土 師 器					
6	坏形土器	B (1.0) C 6.1	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転へラ切り。 体部内面へラ磨き。	砂粒・砂礫 にぶい褐色 普通	P151 内面黒色処理 30%
	土 師 器					
7	坏形土器	A (15.2) B 4.4 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	底部から体部下端にかけて回転へラ削り。 体部内面へラ磨き、外面上位横ナデ。	砂粒 外面橙色 内面赤黒色 普通	P144 50%
	土 師 器					
8	坏形土器	A 13.5 B 4.3 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	底部回転へラ削り。 体部下端回転へラ削り。 体部内面へラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P143 内面黒色処理 75%
	土 師 器					
9	坏形土器	B (1.4) C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転へラ切り。 体部内面へラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P149 内面黒色処理 30%
	土 師 器					
10	高台付坏形土器	B (3.2) D 8.7 E 1.6	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部回転へラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 底部内面へラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P142 内面黒色処理 30%
	土 師 器					
11	坏形土器	B (2.3) C 6.7	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部回転へラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	P148 内面黒色処理 30%
	土 師 器					
12	坏形土器	B (0.9) C 5.4	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転へラ切り。 体部内面へラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P150 内面黒色処理 30%
	土 師 器					

第21号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第43図 13	凹 石	Q22	16.5	12.9	9.9	2385.7	砂岩



第43図 第21号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡（第45図）

本跡は、C4d₇区を中心に確認され、南西側に第23号住居跡、東側に第20号住居跡が隣接している。本跡は北西側で第32号住居跡と重複しており、本跡の北西側上層に第32号住居跡の貼り床が検出されているので、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸3.95m・短軸3.85mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-4°-Eを指している。壁高は北西壁を除いて15cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅30~40cm・深さ15cmの壁溝がカマド及び南東コーナーを除き周回している。床面はロームの上に厚さ約5cmほどの粘土小ブロック・粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土で、全域に貼り床を施している。カマド付近を中心に、少々凹凸がみられるが、硬く踏み固められている。カマドは東壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は一部崩れているが、ロームの上に砂質粘土を載せて構築している。内側は熱を受けて焼土化し、燃焼部付近から一部炭化材も検出されている。長さ165cm・幅135cm、壁外へ75cm掘り込んでいる。火床は床面を15cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁~P₇の7か所検出されているが、P₁・P₃・P₄・P₅・P₇は径20~25cm・深さ15~25cmの規模で、配列に規則性はないが、規模から支柱穴であると思われる。P₆は径25cm・深さ12cmの規模で、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関するピットと思われる。

覆土は、全体的に暗褐色土を主体とし、上層はローム粒子・焼土粒子を含み、自然堆積の様相を呈している。床面上層は黄褐色土が薄く堆積している。

遺物は、本跡全域から散らばって多くの土師器のほかに、須恵器、縄文式土器が出土している。土師器は、カマド手前や南東コーナー部の床面直上から高台付坏形土器3点（第44図2・5・6）・甕形土器（第44図8）・坏形土器（第44図7）が出土し、南東コーナー部の床面直上から須恵器の台付壺（第44図9）が出土している。その他、カマドの燃烧部の覆土中から土師器の高台付坏形土器（第44図3）・高台付皿形土器（第44図4）が出土している。縄文式土器は、覆土中層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

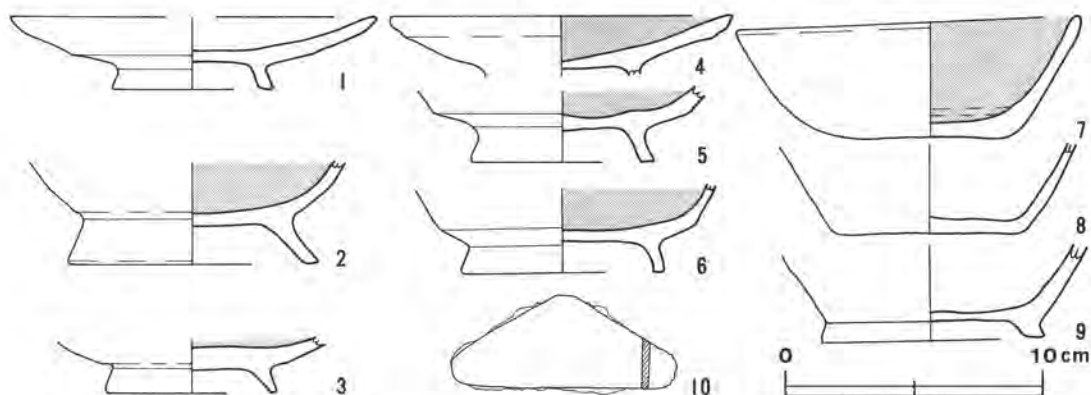
第22号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	高台付皿形土器 土師器	A (14.3) B 2.8 D 6.3 E 1.0	体部はやや内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁端部は丸くおさめられている。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部回転ヘラ切り。 高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面回転ヘラ削り。	砂粒・長石 橙色 普通	P161 50%
2	高台付坏形土器 土師器	B (4.0) D 9.8 E 1.5	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒・石英 橙色 普通	P157 内面黒色処理 30%
3	高台付坏形土器 土師器	B (2.0) D 6.7 E 1.0	高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部下層にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P158 内面黒色処理 20%
4	高台付皿形土器 土師器	A 13.3 B (2.3)	体部はやや内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。	底部回転ヘラ切り。 高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面回転ヘラ削り。	砂粒・砂礫 橙色 普通	P162 内面黒色処理 50%
5	高台付坏形土器 土師器	B (2.8) D 7.3 E 1.4	高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒・砂礫 にぶい橙色 普通	P156 内面黒色処理 30%
6	高台付坏形土器 土師器	B (3.4) D 8.0 E 1.2	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P159 内面黒色処理 25%
7	坏形土器 土師器	A 13.5 B 4.7 C 5.9	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	底部手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒 灰褐色 普通	P160 内面黒色処理 90%
8	甕形土器 土師器	B (3.5) C 7.2	底部は平底で、胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	底部・胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 灰褐色、内面にぶい 橙色 不良	P154 10%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	台付壺 須恵器	B (3.7) D 8.6 E 0.7	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。高台は短く外下方へのびる。	永挽き成形。 体部外面の下端回転ヘラ削り。高台貼り付け。 ログロ回転方向右。	細砂 褐灰色 普通	P155 10%

第22号住居跡出土鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第44図 10	不 ^明 (鉄製)	M5	(9.0)	3.9	0.8	(45.1)	



第44図 第22号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡 (第45図)

本跡は、C4c7区を中心に確認され、第20号住居跡の西側1.2m、第61号住居跡の南東側1.2mに位置している。本跡の南東側で第22号住居跡と重複している。本跡が第22号住居跡の上層に床を貼っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸5.5m・短軸4.6mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-11°-Eを指している。壁高は15cmで、壁は南壁が前述したように重複しているため不明確であるが、他の壁は締めりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は全体的に平坦でやや軟らかいが、カマド手前から西壁にかけての幅140cmの範囲は硬く踏み固められている。カマドは東壁の中央部から南寄りに付設されており、天井部・袖部は崩壊して砂質粘土が流出し、遺存状態は悪く、規模等は不明である。調査した部分から推定すると、長さ105cm・幅110cmで、壁外へ40cm掘り込んでいる。ピットはP₁~P₆の6か所検出され、いずれも径は30~40cm、深さは25cm前後の規模を有し、配列に規則性はないが本跡に伴う支柱穴と思われる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒子・焼土粒子を少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、中央部を中心に、土師器とともに、須恵器、鉄製品、土製品が出土している。これらの多くは破片である。土師器は、カマド手前の床面直上から坏形土器(第46図1)、カマドの北側の床面直上から伏せた状態で埴形土器(第46図3)が出土している。また、同所から鉄片(第46図7)が、北東コーナー部の床面直上から釘(第46図8)・銚かすがい(第46図9)が出土している。その他、中央部の覆土下層から土師器の甕形土器の胴部(第46図4)と土師質土器の皿(第46図2)が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第32号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第46図 1	坏形土器 土師器	A 9.9	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい褐色 普通	P220 内面黒色処理 70%
		B 2.6				
		C 5.8				
2	皿 土師質土器	A 9.8	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい橙色 普通	P221 45%
		B 1.8				
		C (6.2)				
3	埴形土器 土師器	A 9.4	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短くほぼ直立する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 褐色 普通	P218 内面黒色処理 95%
		B 4.3				
		C 4.6				
4	甕形土器 土師器	B (18.1)	底部は平底で、胴部は僅かに外反しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面横ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P217 50%
		C 12.6				
5	高台付坏形土器 土師器	B (3.8)	体部は内彎しながら立ち上がり、高台は外下方へのび、端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P219 50%
		D 6.9				
		E 0.8				

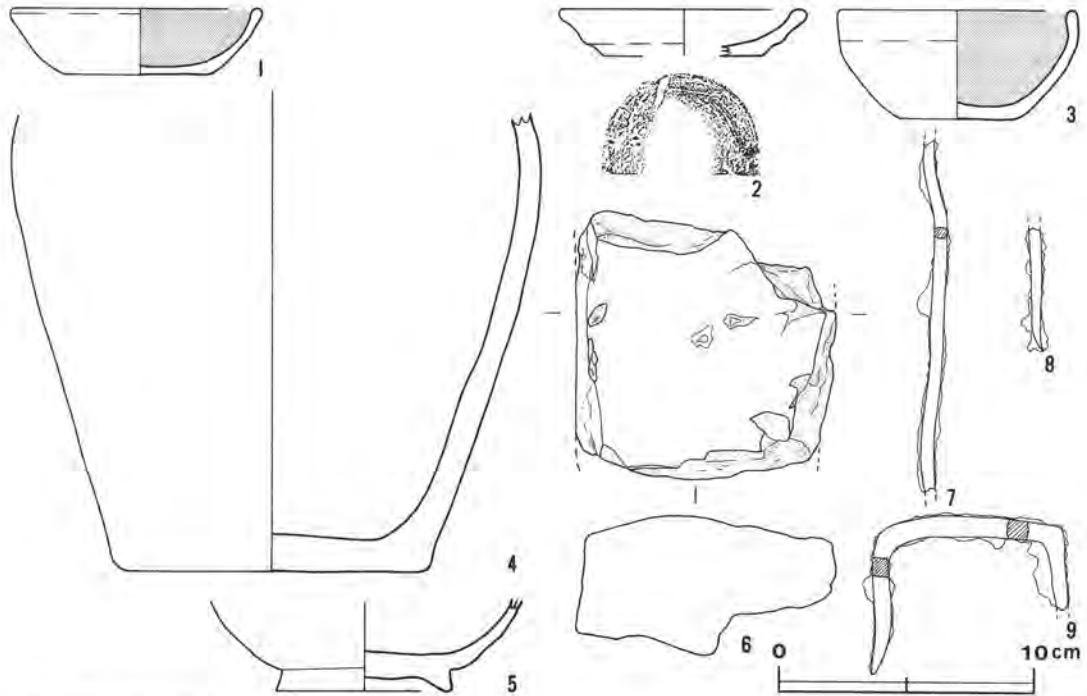
第32号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第46図 6	支脚	DP 9	(10.7)	(10.3)	—	(350.1)	にぶい橙色
7	不 <small>明</small> (鉄製)	M 11	(17.0)	0.7	—	(15.4)	
8	釘	M 13	(4.8)	0.3	—	(3.8)	
9	<small>かすがい</small> 銚	M 12	(7.7)	7.0	1.0	(35.9)	

第23号住居跡(第47図)

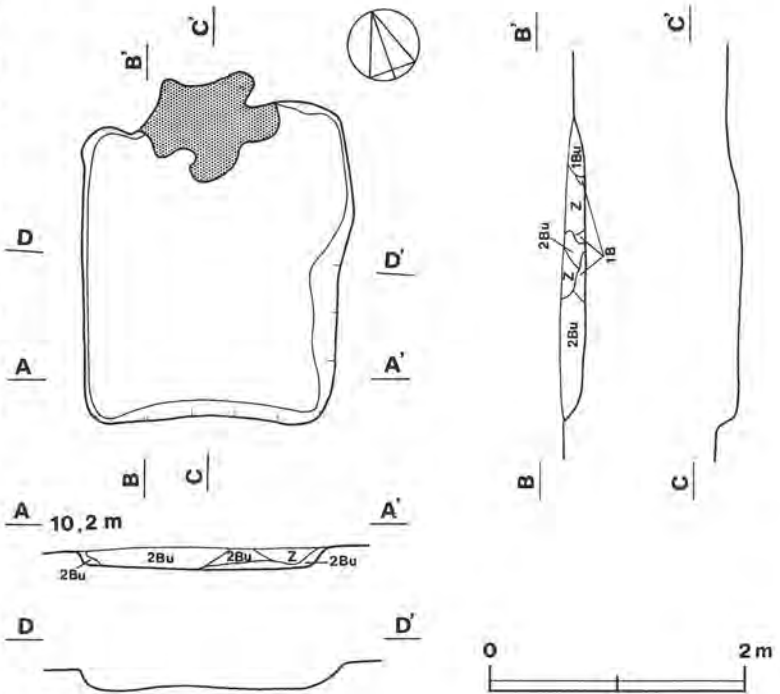
本跡は、C4e7区を中心に確認され、第22号住居跡の南西側0.2m、第32号住居跡の南側1.3mに位置している。

平面形は、長軸2.7m・短軸2.1mの隅丸長方形を呈し、当遺跡の住居跡群の中では最小規模である。主軸方向はN-20°-Eを指している。壁高は20cmで、壁は締まりのあるロームで、大半が木根による攪乱を受けているが、外傾して立ち上がっている。床面はロームで、軟弱である。カマ



第46図 第32号住居跡出土遺物実測図

ドは北壁中央部に付設されている。天井部・袖部は砂質粘土で構築されているが、遺存状態は崩れて規模・形状等の詳細は不明である。調査した部分は、長さ80cm・幅100cmで、壁外へ40cmほど掘り込んでいる。使用した痕跡は確認できなかった。ピットは検出できなかった。

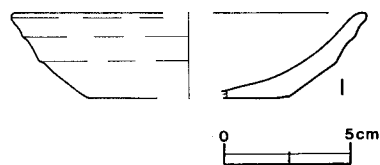


第47図 第23号住居跡実測図

覆土は、攪乱部を除き、ローム粒子を主体にソフトロームブロックを微量含む暗褐色土で、締まり

は弱い自然堆積の様相を呈している。

遺物は、僅かな土師器とともに、須恵器、弥生式土器が出土している。東壁下中央部の覆土下層から土師器の坏形土器（第48図1）が出土している。須恵器は破片で、まとまった器形にならなかった。弥生式土器も破片で、覆土上層から出土していることから、周囲からの流れ込みと思われる。



第48図 第23号住居跡
出土遺物実測図

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第23号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	坏形土器	A (14.0)	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部外面横ナデ。	砂粒・スコリア に お い い 赤 褐 色 普 通	P164
		B 3.4				
	土師器	C (8.0)				

第24号住居跡（第50図）

本跡は、C4h9区を中心に確認され、第25号住居跡の西側2mに位置している。本跡の北西側で第2号掘立柱建物跡と重複している。

本跡の南側は道路にかかっているが調査した部分から推定すると、平面形は北壁の長さ4.4mで、北と西のコーナーは隅丸形状を呈している。主軸方向はN-10°-Wを指すものと思われる。壁は南東壁から南西壁の半分ほどにかけて、前述したように道路にかかっているため検出できなかったが、他の壁は壁高40cmほどで、縮まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。壁下には、壁溝が北西壁から西壁にかけて、上幅12~20cm・深さ5cmほどの規模で検出された。床面は全体的に平坦で、よく踏み固められており、特にカマドの手前部分及び住居跡の中央部は若干高く、黒色土混じりの土を貼っている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されており、内側は熱を受けて焼土化し、覆土から焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子が検出されている。長さ110cm・幅95cm、壁外へ75cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、いずれも径は27~35cm、深さは20cmで、配列から主柱穴と思われる。

覆土は、暗褐色土を主体として自然堆積の様相を呈し、各層ともローム粒子・焼土粒子を含み、特に下層には炭化粒子や粘土粒子を少量含んでいる。

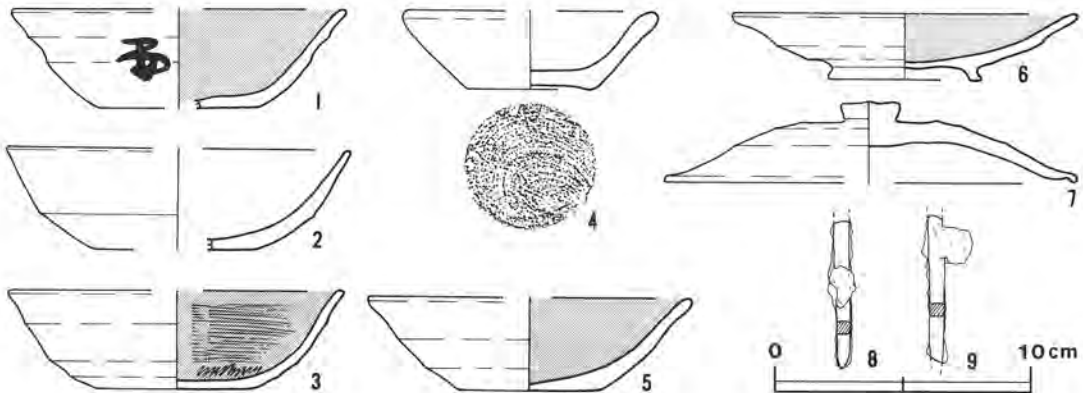
遺物は、破片が多く、中央部を中心に、多量の土師器、須恵器、陶器、鉄製品が出土している。北東コーナー部の床面直上から横位で土師質土器の皿（第49図4）が出土し、カマドの東側の床

面直上から須恵器の蓋（第49図7）が出土している。その他、中央部から西壁寄りの覆土中層から下層にかけて土師器の高台付皿形土器（第49図6）・坏形土器4点（第49図1～3・5）・釘2本（第49図8・9）が出土している。

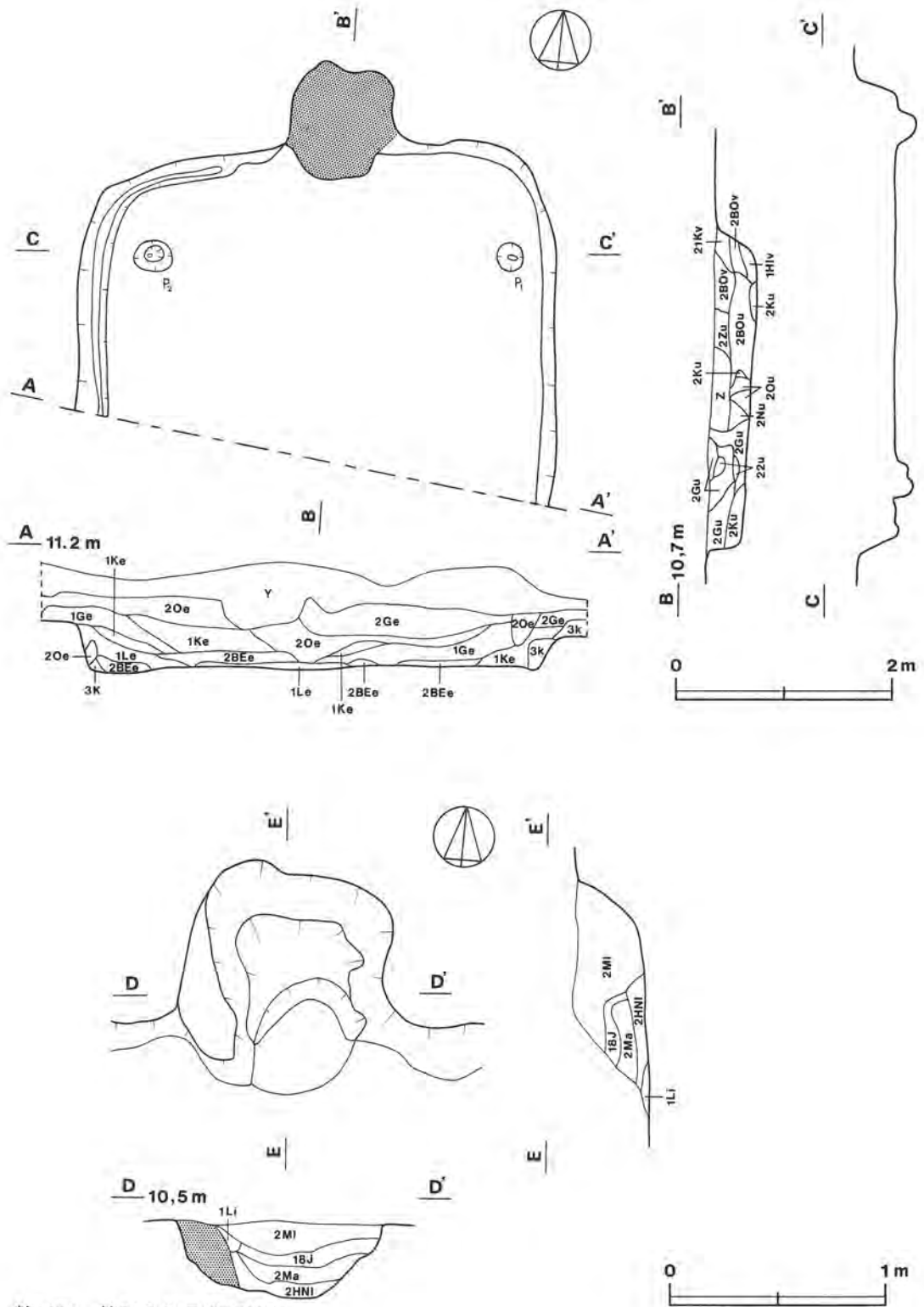
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第24号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	坏形土器	A (13.1)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P169 体部外面墨書「西」 内面黒色処理40%
	土師器	B 3.8 C (6.1)				
2	坏形土器	A (13.4)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部から体部下層にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 黄橙色 普通	P165 35%
	土師器	B 4.0 C (6.8)				
3	坏形土器	A (13.4)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁端部はやや外反する。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P168 内面黒色処理30%
	土師器	B 3.9 C 6.4				
4	皿	A (10.0)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫 浅黄橙色 普通	P166 70%
	土師質土器	B 4.1 C 5.1				
5	坏形土器	A (12.7)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P167 内面黒色処理30%
	土師器	B 3.7 C 5.4				
6	高台付皿形土器	A 13.5	体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は僅かに外反する。高台は短く外下方へのびる。	底部から体部中位にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P170 内面黒色処理90%
	土師器	B 2.6 D 6.0 E 0.5				
7	蓋	A (16.1)	天井部は弧状を呈し、口縁部は外下方に屈曲し端部は劣る。天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 ロタロ回転方向右。	礫 褐灰色 普通	P171 35%
	須恵器	B 3.1 G 2.4 H 0.7				



第49図 第24号住居跡出土遺物実測図



第50图 第24号住居跡実測图

第24号住居跡出土鉄製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第49図 8	釘	M 6	(5.3)	0.6	—	(7.3)	
9	釘	M 7	(5.8)	0.7	—	(8.7)	

第25号住居跡 (第51図)

本跡は、C4h区を中心に確認され、第24号住居跡の東側2 mに位置している。

平面形は、本跡の北側半分がエリア外に延びているため、調査した部分は、南西側の長さが4.7 mで、東と西のコーナーは隅丸形を呈している。長軸方向はN-42°-Eを指すものと思われる。検出された壁高は65cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、特に南壁下からピットに囲まれた内側は、ロームが硬く踏み固められている。なお、南東コーナー付近の床面より25cm上層に粘土と焼土が厚さ20cmほど堆積している。カマドは検出されなかった。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、いずれも径は35~40cm、深さは20cmの規模を有しているので本跡に伴う柱穴と思われる。

覆土は、上層に焼土粒子・ローム粒子を含む暗褐色土、中層に焼土粒子・焼土小ブロックを含む黒褐色土、下層にローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土、壁際にローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、散在的に本跡全域から土師器を中心として、須恵器、土製品、縄文式土器が出土している。これらの多くは、覆土中層から下層にかけて出土している。土師器は、西壁南寄りの床面直上から坏形土器(第52図1)、南西コーナー部や南壁・東壁寄りの床面直上から甕形土器3点(第52図2~4)が出土している。土製品は、覆土下層から球状土錘(第52図6)・管状土錘(第52図5)が出土している。須恵器も覆土中層から下層にかけて出土しているが、いずれも破片で、まとまった器形にはならなかった。縄文式土器は破片で、覆土上層から出土しているため、周囲から流れ込んだものと思われる。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

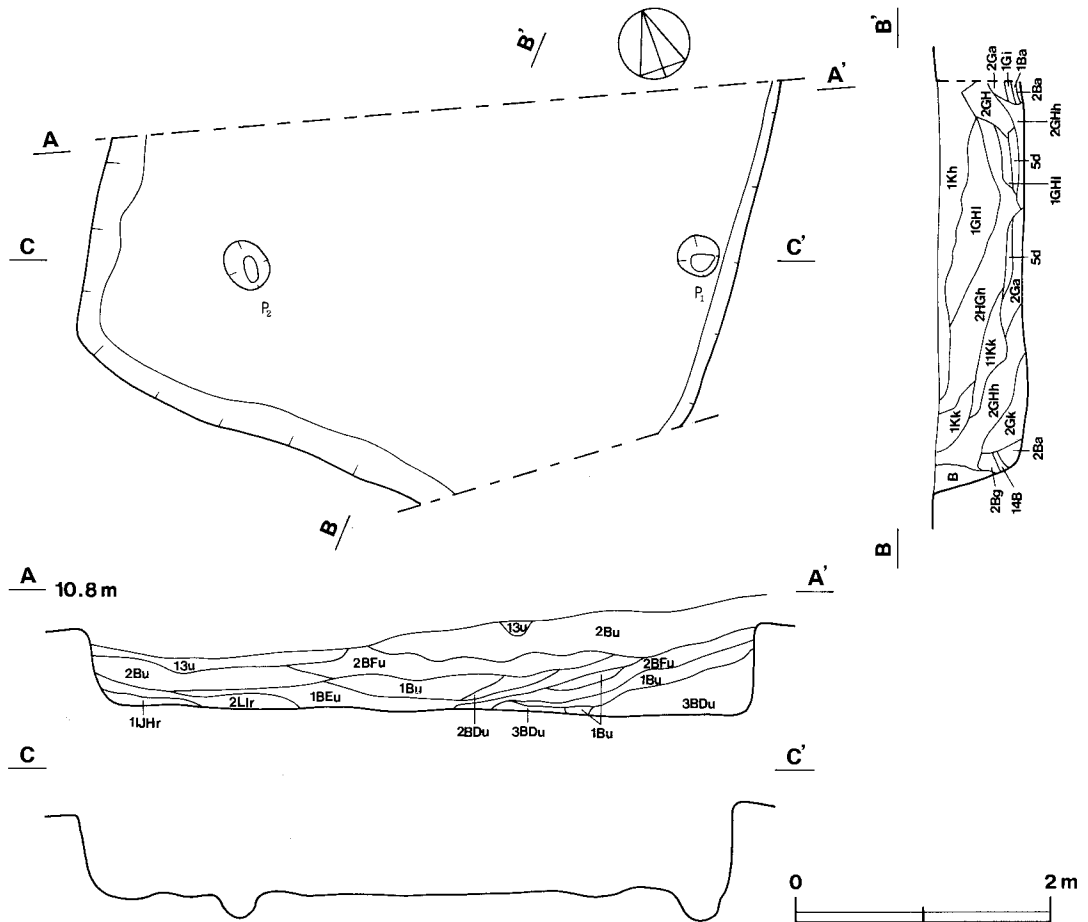
第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第52図 1	坏形土器 土 師 器	A 13.7 B 4.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へら磨き、外面へら削り。	砂粒 黒褐色 普通	P175 内面黒色処理 90%
2	甕形土器 土 師 器	B (2.8) C 7.0	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内面へらナデ、外面縦位のへら削り。	砂粒・砂礫 にぶい赤褐色 内面にぶい橙色 普通	P172 10%

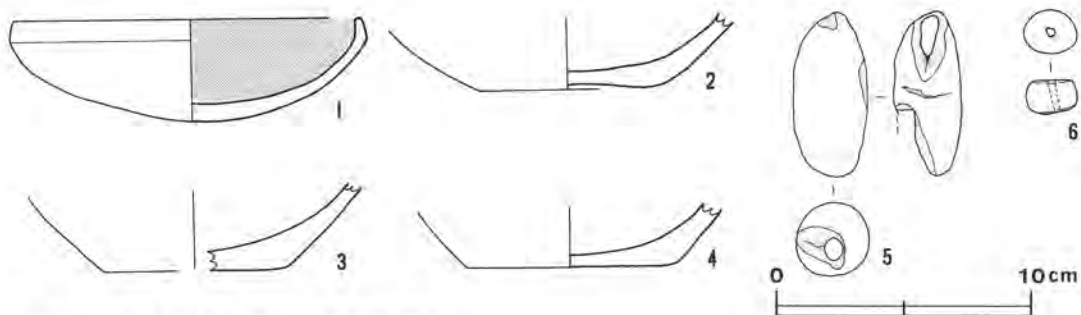
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	甕形土器 土師器	B (3.2) C (7.2)	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内面へラナデ、外面縦位のへら削り。	砂粒・砂礫にぶい黄橙色 内面黒色 普通	P173 10%
4	甕形土器 土師器	B (2.4) C 8.5	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部内面へラナデ、外面縦位のへら削り。	砂粒 黒色 内面にぶい黄橙色 普通	P174 10%

第25号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第52図 5	管状土錘	DP87	6.5	2.9	—	(38.1)	孔径0.7cm, 橙色, 60%
6	球状土錘	DP29	1.3	2.1	—	4.6	孔径0.3cm, 橙色, 100%



第51図 第25号住居跡実測図



第52図 第25号住居跡出土遺物実測図

第26号住居跡（第53図）

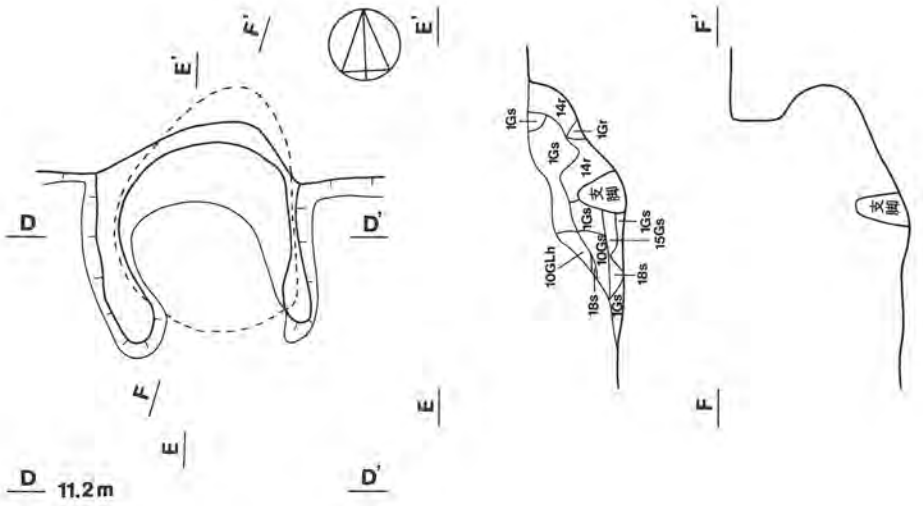
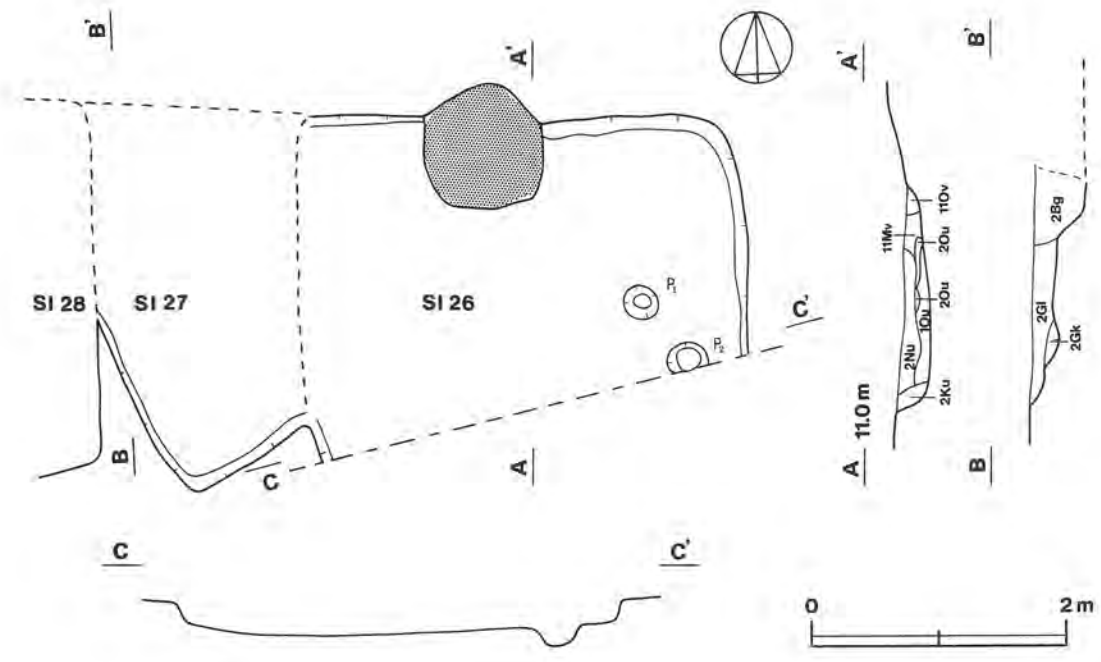
本跡は、C4j9区を中心に確認され、第25号住居跡の南西側5.0m、第24号住居跡の南側5.0mに位置している。本跡の北西側で第27号住居跡と重複している。本跡が第27号住居跡の床面を切っており、さらに出土遺物から、本跡の方が新しい遺構である。

本跡は、中央部から南側半分がエリア外に延びているため、規模・平面形の詳細は不明である。北壁の長さは3.5mで、調査した部分から推定すると、主軸方向はN-2°-Eを指すものと思われる。検出された壁高は18cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はカマドの手前部分から南側にかけて白色粘土混じりの黒褐色土で、よく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は粘土に山砂を混ぜて構築し、袖部の内側はよく焼けて焼土化している。長さ105cm・幅86cmで、壁外へ20cmほど掘り込んでいる。火床は床面を5cmほど掘り込み、熱を受けて焼土粒子を多量に含んでいる。燃焼部の西側寄りから支脚が出土している。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、いずれも径は30cm、深さは15cmで、規模から本跡に伴う柱穴と思われる。

覆土は、焼土粒子・砂質粘土粒子を多量、炭化粒子を極少量含む暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器を主に、須恵器、土製品が出土している。土師器は、カマド付近の覆土下層から高台付坏形土器（第54図7）・坏形土器4点（第54図2～5）・横位で高台付皿形土器（第54図6）・小型甕形土器（第54図1）が出土している。また、カマドの燃焼部の覆土中から支脚（第54図11）や砥石（第54図10）が出土している。須恵器も同所付近から出土しているが、破片のためまとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



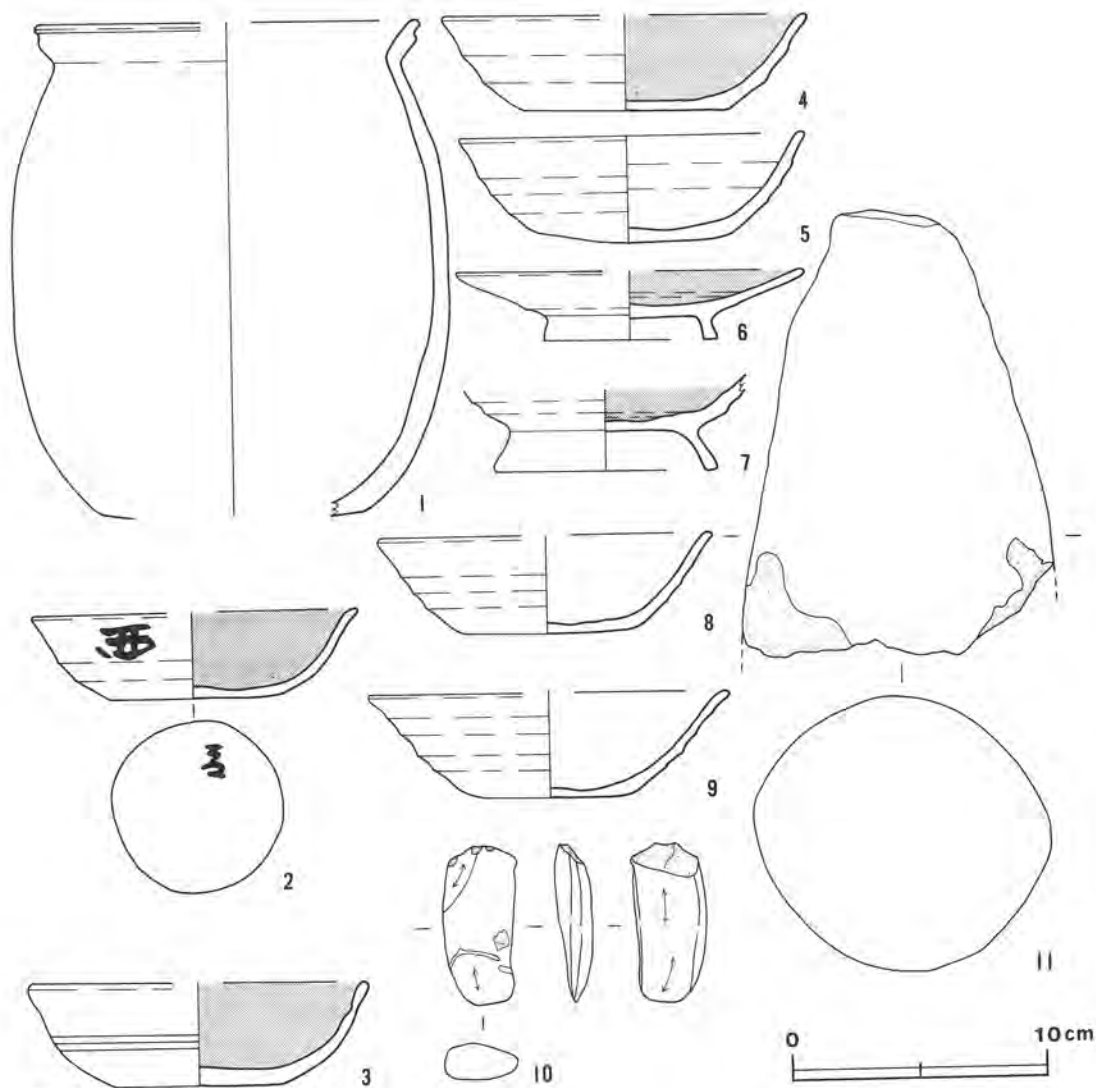
第53图 第26・27号住居跡実測図

第26号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	小型甕形土器 土師器	A (15.1) B 19.5 C (10.1)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、中位から内傾する。口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面へラナデ、外面上位縦位のへら削り、中位から下位にかけて横位のへら削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P176 30%
2	坏形土器 土師器	A (12.7) B 3.4 C 6.7	底部は平底で、体部は内彎しながら外大きく開き、口縁部は僅かに外反する。	底部から体部下端にかけて回転へら削り。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P183 体部外面墨書「西」、底部外面墨書「口」 内面黒色処理30%
3	坏形土器 土師器	A (13.4) B 4.0 C 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	底部から体部下端にかけて手持ちへら削り。体部内面へラ磨き、口縁部内・外面・体部外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P182 内面黒色処理50%
4	坏形土器 土師器	A (14.3) B 3.7 C 8.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	水挽き成形。底部回転へら切り後、手持ちへら削り。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P179 内面黒色処理50%
5	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.2 C 7.4	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。底部回転へら切り後、手持ちへら削り。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 内面赤褐色 普通	P178 100%
6	高台付皿形土器 土師器	A (13.7) B 2.7 D 6.8 E 0.9	体部は外反気味に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。高台は外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転へら削り。高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい褐色 普通	P184 内面黒色処理50%
7	高台付坏形土器 土師器	B (3.6) D (8.7) E 1.5	体部は内彎しながら立ち上がり、高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部回転へら切り後、手持ちへら削り。高台貼り付け。高台内・外面から体部外面横ナデ。体部内面へラ磨き。	細砂 にぶい橙色 普通	P177 内面黒色処理15%
8	坏須恵器	A (13.2) B 3.8 C 6.6	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて回転へら削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・砂礫 橙色・黒色 普通	P181 50%
9	坏須恵器	A (14.2) B 4.2 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。底部回転へら切り後、へらナデ。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒 橙・灰白・黒褐色 普通	P180 50%

第26号住居跡出土土製品・石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第54図 10	砥石	Q 30	6.3	3.0	1.5	33.5	頁岩
11	支脚	DP 8	(17.7)	(12.3)	—	(1817.5)	浅黄橙色



第54図 第26号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡（第53図）

本跡は、C4j9区を中心に確認され、第24号住居跡の南側5.0mに位置している。本跡の東側で第26号住居跡と、北西側で第28号住居跡とそれぞれ重複している。本跡は第26号住居跡に切られていることと出土遺物から、本跡の方が古い遺構である。また、本跡は第28号住居跡を切っていることと出土遺物から、本跡の方が新しい遺構である。

本跡は、中央部から北側にかけて農道にかかっていたり、重複しているため遺存状態が悪く、南西コーナー部を検出しただけで、規模や平面形とも不明である。平面形は推定で、方形かまたは長方形を呈するものと思われる。残存壁高は16cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上

がっている。床面はほぼ平坦で、第26号住居跡と重複している部分は検出できなかったが、第28号住居跡と重複している部分はやや砂質粘土のローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土で、硬く踏み固められている。ピットやカマドは検出できなかった。

覆土は、焼土粒子を含む暗褐色土で、自然堆積を呈している。

遺物は、覆土から土師器片や須恵器片が出土しているが、第26号住居跡と重複しているため、直接本跡に伴う遺物であるか否かは不明である。

第28号住居跡（第55図）

本跡は、C4is区を中心に確認され、第24号住居跡の南西5mに位置している。本跡の東側で第27号住居跡と、南側で第29号住居跡、北西コーナー側で溝と重複している。本跡の大半は、トレンチャー等による攪乱を受けているため、他の住居跡との新旧関係は土層断面から把握することは難かしかったが、出土遺物から検討すると、他の2住居跡より本跡の方が古い遺構である。

本跡は、第27・29号住居跡に切られていることや攪乱のため、平面形・規模等は不明である。床面は黒褐色土がよく踏み固められている。残存する南東壁コーナーは壁高が20cmで、締めりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。

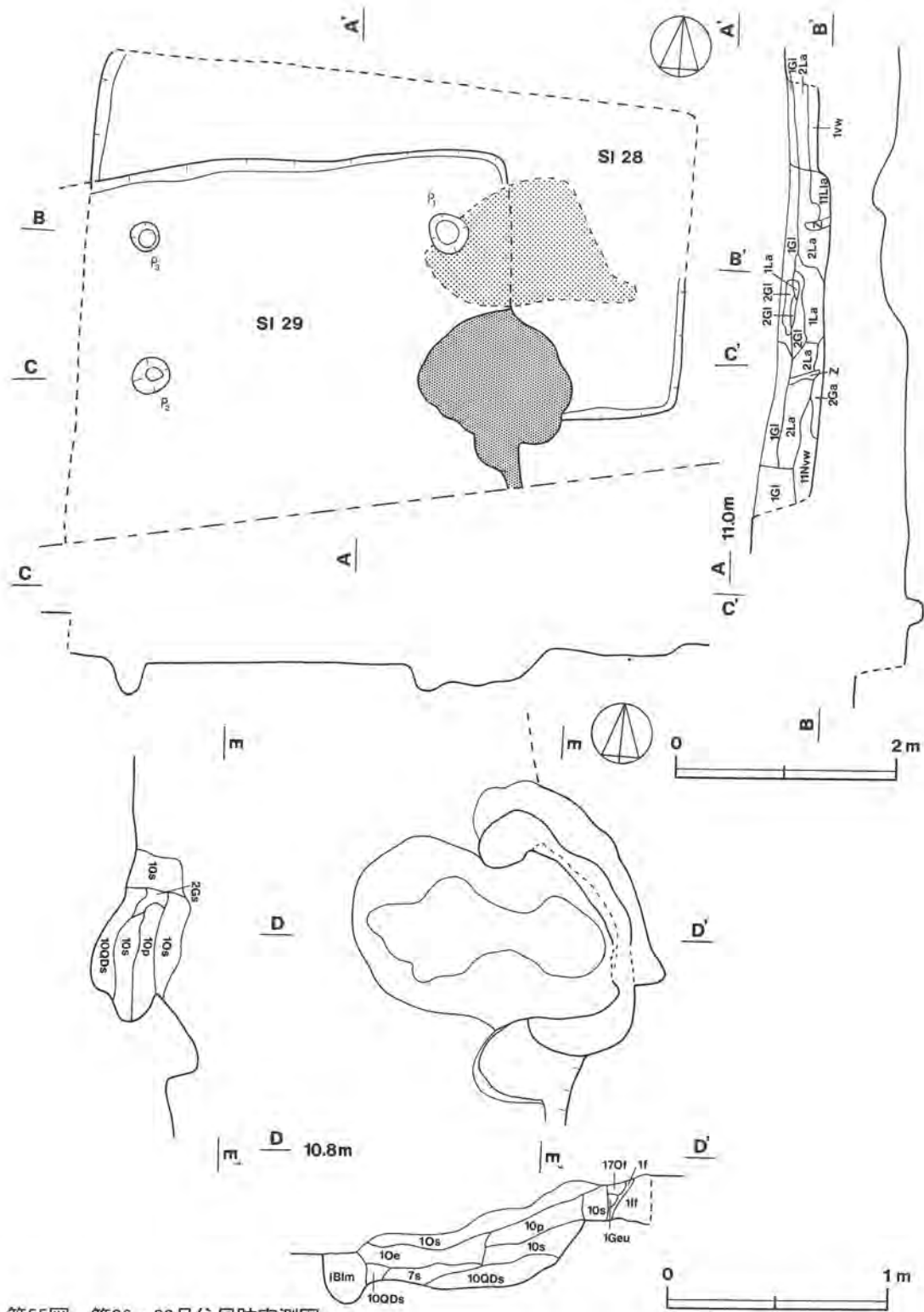
覆土は、焼土粒子を含む黒褐色土で、自然堆積の様相を呈している。なお、南東コーナー寄りに長さ1.6m・幅1.2mの範囲で不整形に床面が焼けている。性格は不明である。

遺物は、少量の土師器片とともに、須恵器片が出土している。土師器片は、中央部から北西側の床面直上から坏形土器（第56図3）、また、同所の覆土下層から高台付坏形土器（第56図1）が出土している。須恵器の坏（第56図2）も同所から出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第28号住居跡出土土器観察表

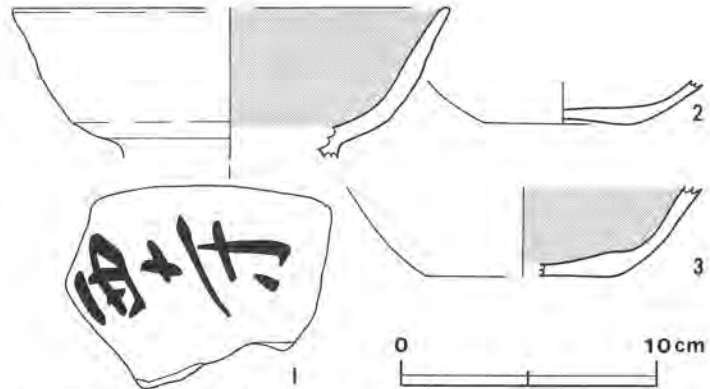
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	高台付坏形土器	A (17.0) B (5.9)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、端部は丸い。高台欠損。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P185 底部外面墨書 「西寺」 内面黒色処理 25%
	土師器					
2	坏	B (1.6) C 6.0	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒 灰白色 普通	P186 20%
	須恵器					
3	坏形土器	B (3.4) C (9.3)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P187 内面黒色処理 25%
	土師器					



第55图 第28・29号住居跡実測图

第29号住居跡（第55図）

本跡は、C4j7区を中心に確認され、第39号住居跡の東側3.8mに位置している。本跡の北東側で第28号住居跡と重複している。本跡が第28号住居跡の床面を切っているため、本跡の方が新しい遺構である。



第56図 第28号住居跡出土遺物実測図

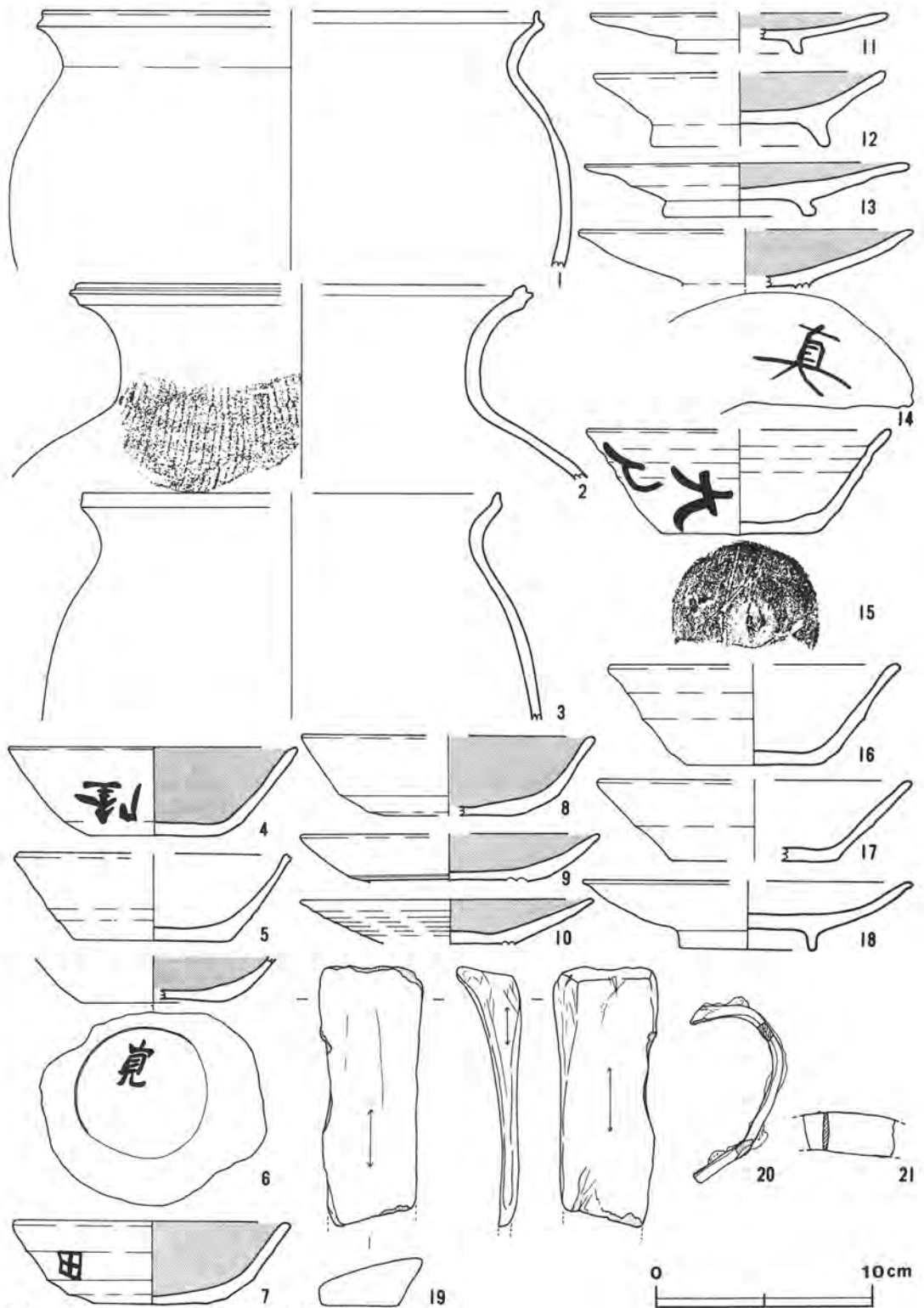
本跡の南東部と南半分は、エリア外で未調査のため、規

模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると、平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向はN-12°-Wを指すものと思われる。検出された壁高は40cmを測り、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、カマドの手前から西側中央にかけて、幅1.5m・長さ3.1mの範囲は白色粘土混じり土で、よく踏み固められている。カマドは東壁中央部に付設されており、天井部は崩壊しているが、袖部は山砂を含む粘土で構築されている。長さ145cm・幅140cm、壁外へ55cm掘り込んでいる。火床は床面を30cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁~P₃の3か所検出され、P₁・P₃はいずれも直径30・35cm・深さ15・20cmで、位置から支柱穴と思われる。また、P₂は直径35cm・深さ30cmの規模を有し、位置などから出入口施設に関するピットと考えられる。

覆土は、上層に焼土粒子を含む暗褐色土、下層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域の覆土下層から多くの土師器のほか、須恵器、鉄製品、弥生式土器が出土している。土師器は、カマド手前から中央部にかけての床面直上から甕形土器の口縁部片2点（第57図2・3）・倒立の状態を高台付皿形土器（第57図10）が出土している。須恵器は、北壁西寄りの床面直上から坏（第57図15）、カマドの北側の床面直上から正位で坏（第57図5）が出土している。また、カマド周辺の覆土下層から土師器の高台付皿形土器（第57図11）・坏形土器3点（第57図6~8）・甕形土器の口縁部（第57図1）、砥石（第57図19）、鉄製品2点（第57図20・21）が出土している。弥生式土器は破片で、覆土中層から出土しているので流れ込んだと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第57図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	甕形土器	A (22.9) B (12.0)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P188 15%
	土師器					
2	甕形土器	A (21.2) B (9.0)	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面上位は縦位の平行叩き。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P191 10%
	須恵器					
3	甕形土器	A (19.2) B (10.6)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P190 10%
	土師器					
4	坏	A 14.0	底部は平底で、体部は直線的に外上へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・砂礫 灰黄褐色 普通	P194 体部外面墨書「隆」、内面黒色処理 90%
		B 4.2				
		C 6.4				
5	坏	A (12.7)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰オリーブ色 普通	P203 70%
		B 4.0				
		C 7.0				
6	坏形土器	B (2.0)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 におい橙色 普通	P195 底部外面墨書「真」、内面黒色処理 30%
		C (6.6)				
7	坏形土器	A 12.8	底部は平底で、内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P192 体部外面墨書「田」、内面黒色処理 90%
		B 3.7				
		C 5.2				
8	坏形土器	A (13.6)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 におい橙色 普通	P193 内面黒色処理 40%
		B 3.7				
		C (5.6)				
9	高台付皿形土器	A (13.7) B (3.1)	体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がり、口縁部に至る。	底部から体部中位にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面上位横ナデ。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P201 内面黒色処理 50%
	土師器					
10	高台付皿形土器	A 13.7 B (2.0)	体部は外上方に大きく開き、口縁部は丸い。高台は短く「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P202 内面黒色処理 95%
	土師器					
11	高台付皿形土器	A (13.8)	体部は直線的に大きく開き、口縁端部は丸い。高台は短く「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面と体部外面横ナデ、体部内面ヘラ磨き。	砂粒・礫 におい黄褐色 普通	P198 内面黒色処理 35%
		B 2.1				
		D (6.1)				
		E 0.6				
12	高台付皿形土器	A (13.4)	体部は外上方に大きく開き、口縁端部は丸くおさめている。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面と体部外面横ナデ、体部内面ヘラ磨き。	細砂 褐灰色 普通	P199 内面黒色処理 30%
		B 3.4				
		D (8.3)				
		E 1.0				
13	高台付皿形土器	A 14.9	体部は内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部は丸い。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部下端にかけてヘラ削り。 高台貼り付け。 高台内・外面と体部外面横ナデ、体部内面ヘラ磨き。	砂粒 橙色・黒色 普通	P197 65%
		B 2.4				
		D 7.0				
		E 0.6				
14	高台付皿形土器	A (15.4) B (2.6)	体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は外反している。	底部から体部中位にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面上位横ナデ。	細砂 浅黄褐色 普通	P200 体部外面墨書「真」、内面黒色処理 25%
	土師器					

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
15	坏 須恵器	A (14.1) B 4.8 C 7.2	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方へのび、口縁部は外反している。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	細砂 灰白色 普通	P206 体部外面墨書 「大人」 40%
16	坏 須恵器	A (13.5) B 4.7 C 6.4	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	礫 灰色 普通	P204 35%
17	坏 須恵器	A (14.5) B 3.8 C (7.6)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめている。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P205 35%
18	高台付皿形 土器 土師器	A (15.3) B 3.1 D 6.4 E 0.9	体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は外反する。高台は外下方へのび、端部は丸くおさめている。	底部回転糸切り後、高台貼り付け。 高台内・外面と体部内面横ナデ。	細砂 灰黄色 普通	P196 65%

第29号住居跡出土石製品・鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第57図 19	砥石	Q31	12.0	4.9	2.3	110.3	凝灰岩
20	不明(鉄製)	M8	(8.3)	0.9	0.6	(15.8)	
21	不明(鉄製)	M9	(4.3)	1.8	0.3	(7.4)	

第30号住居跡 (第59図)

本跡は、C4g4区を中心に確認され、第31号住居跡の南側に隣接している。第4号掘立柱建物跡と重複している。本跡の床が柱穴によって切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸3.5m・短軸3.05mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-4°-Eを指している。壁高は30cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は全体的に凸凹がみられ、よく踏み固められて硬く締まっている。カマドは北壁中央に付設され、天井部・袖部は崩壊しており、規模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分から推定すると、規模は長さ140cm・幅85cmで、壁外へ85cm掘り込んでいる。火床は床面を5cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、いずれも径は25.7cm、深さは10.25cmである。P₁はカマドの反対側に位置することと周囲が硬く踏み固められていることから出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、上層にローム小ブロック・焼土粒子を極少量含む暗褐色土、下層にローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

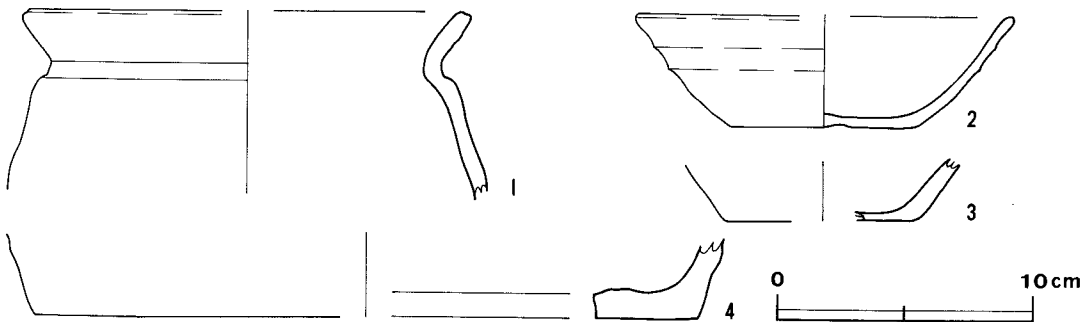
遺物は、本跡全域にわたり多量の土師器とともに、須恵器、縄文式土器が出土している。これらの多くは破片で、覆土下層からの出土がほとんどである。中央部から西寄りの覆土下層から土師器の甕形土器片(第58図3)、須恵器の甕(第58図4)が出土し、カマドの覆土中からも土師器の

甕形土器の口縁部片（第58図1）・坏形土器（第58図2）が出土している。縄文式土器は破片で、覆土の上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

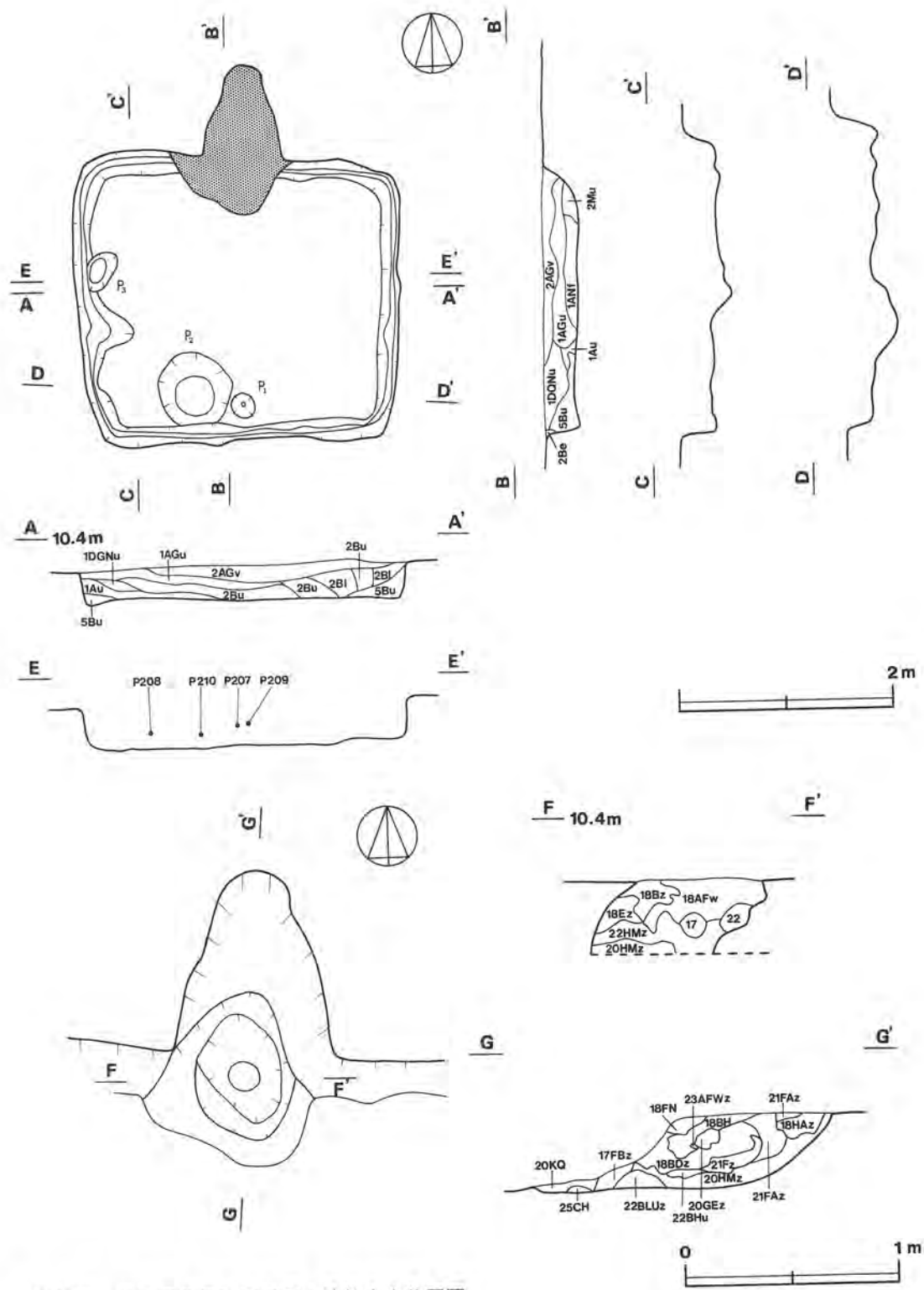
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第30号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	甕形土器	A (17.1)	口縁部は外反しながら開き、外面の頸部に凹を有する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P207 5%
	土師器	B (7.5)				
2	坏形土器	A (15.1)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P209 25%
	土師器	B 4.5				
		C 7.5				
3	甕形土器	B (2.4)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P208 5%
	土師器	C (7.4)				
4	甕	B (3.2)	胴部は内彎気味に立ち上がる。	底部から胴部下端にかけてヘラ削り。胴部内面ナデ。	砂粒・礫 褐灰色 普通	P210 5%
	須恵器	C (26.0)				



第58図 第30号住居跡出土遺物実測図



第59图 第30号住居跡実測図・遺物出土位置図

第31号住居跡（第61図）

本跡は、C4f4区を中心に確認され、第30号住居跡の北側に隣接している。

平面形は、長軸5.15m・短軸4.9mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-21°-Wを指している。壁高は55cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。南東壁下から北東壁下にかけて、上幅10cm・深さ10cmほどの壁溝が周回している。床面は平坦で、ロームの上にローム小ブロック混じりの黒褐色土で床を貼り、よく踏み固められている。床下からは土坑2基、ピット2個（P₆・P₇）を検出した。土坑は、カマドの左右両脇近くに位置する。平面形は、土坑1が不整長方形、土坑2が不整楕円形を呈し、深さはそれぞれ44～46cmである。また、P₆はP₂に接し、P₇はP₄に接して位置する。P₆は長径43cm・短径28cm・深さ30cm、P₇は長径38cm・短径30cm・深さ32cmである。掘り方は、床下土坑・ピット以外にも浅い窪みが南東・南西コーナーやP₃付近にみられる。また、カマドの周囲が高くなっており、底面は全体的に凹凸である。カマドは北壁中央部に付設されていたが、天井部が崩壊し、多量の砂質粘土がカマドの手前に流出していた。焼土粒子を含む黒褐色土がカマド上部に残存していた。袖部は砂質粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土粒子を多量に含み焼土化している。長さ150cm・幅130cmで、壁外へ70cm掘り込んでいる。ピットはP₁～P₅の5か所検出され、P₁～P₄は径75～110cm、深さは55～70cmの規模を有し、配置にも規則性があるので本跡に伴う支柱穴と思われる。P₅は長径40cm・短径33cm・深さ25cmの規模で、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、ローム粒子多量、焼土粒子を含む黒褐色土が主体で、西壁側は炭化粒子も極少量含んでおり、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域の覆土中から、土師器を主に、須恵器、鉄製品が出土している。土師器は、カマド手前の覆土下層から高台付皿形土器（第60図3）、カマドの焚口部から甕形土器2点（第60図1・2）が横位に並んで出土している。また、同所から須恵器の台付盤（第60図4）・坏（第60図5）が出土し、さらに、中央部の覆土下層から鎌（第60図7）も出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

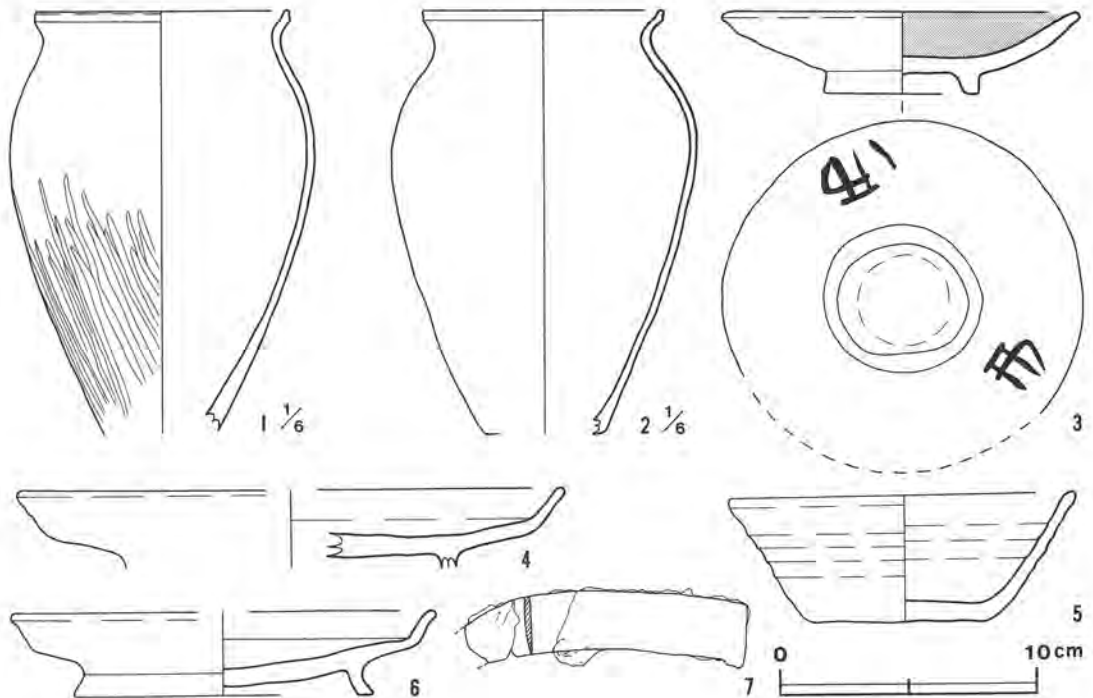
第31号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	甕形土器 土師器	A 19.8 B (33.3)	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、中位がやや張っている。口縁部は「く」の字状に開き、端部を内屈させて外上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面上位ヘラ削り、中位から下位にかけて縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P211 95%
2	甕形土器 土師器	A 19.0 B 33.2 C (9.4)	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、中位がやや張っている。口縁部は「く」の字状に開き、端部を外上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P212 80%

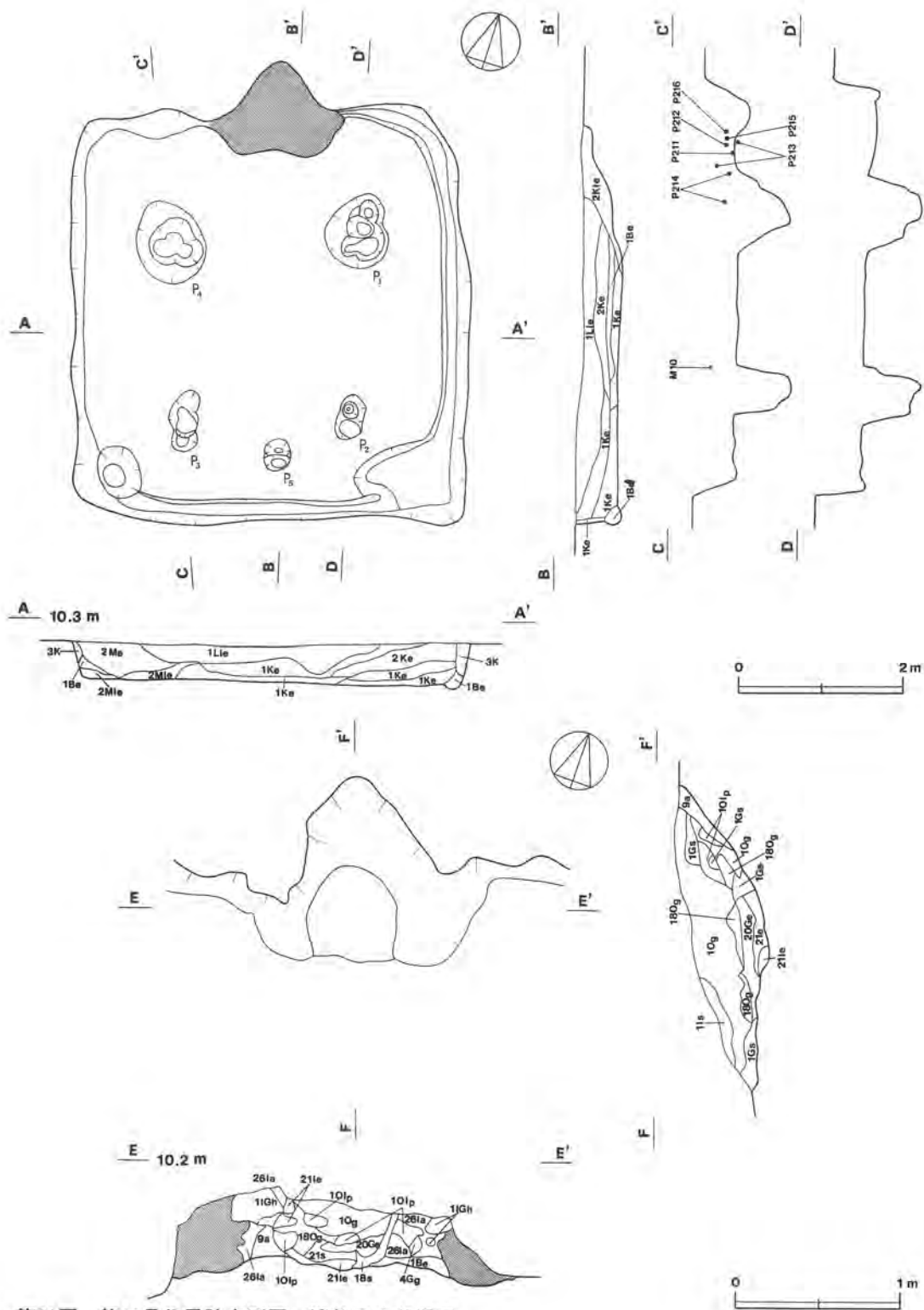
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	高台付皿形土器 土師器	A 13.9 B 3.2 C 6.1 E 0.8	体部は内彎しながら大きく開き、そのまま口縁部に至る。口縁部は丸い。高台は外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り、高台貼り付け。高台内・外面・体部外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。	細砂 にぶい橙色 普通	P213 体部外面墨書「西」 内面黒色処理70%
4	台付盤 須恵器	A (21.5) B (3.1)	底部は平底で、体部は内彎気味に開き、高台は下方へのびる。	水挽き成形。底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け。高台内・外面・体部内・外面横ナデ。	砂礫 褐灰色 普通	P215 70%
5	坏 須恵器	A 13.6 B 4.9 C 7.3	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り。ロクロ回転方向右。	細砂・礫 褐灰色 普通	P216 70%
6	台付盤 須恵器	A (16.7) B 3.3 D (11.8) E 1.0	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。底部は平底で、高台は外下方へのびている。	水挽き成形。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面・体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P214 50%

第31号住居跡出土鉄製品解説表

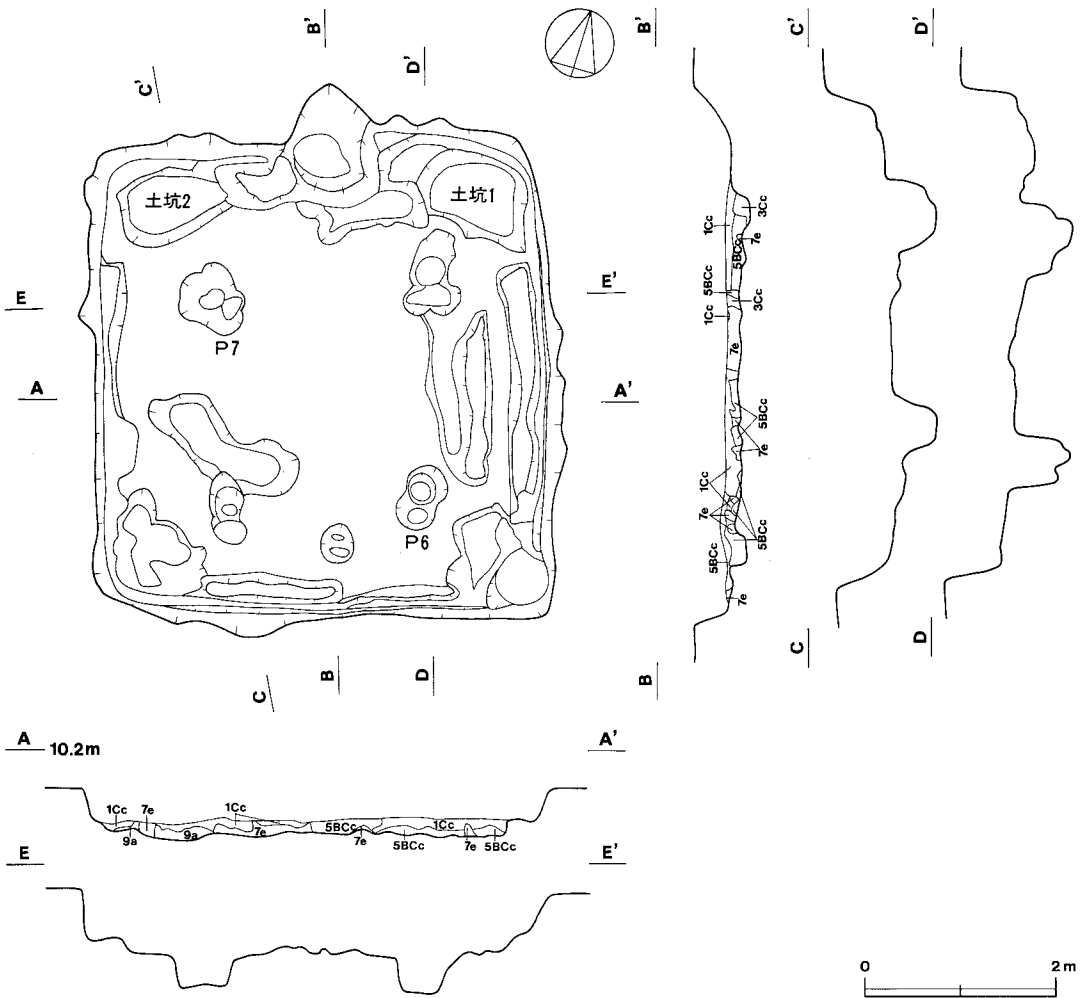
図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第60図 7	鎌	M10	(11.1)	3.2	0.4	(29.5)	



第60図 第31号住居跡出土遺物実測図



第61图 第31号住居跡実測図・遺物出土位置図



第62図 第31号住居跡掘り方実測図

第33号住居跡（第64図）

本跡は、B4d0区を中心に確認され、第12号住居跡の東側4.3m、第15号住居跡の西側3.4mに位置している。本跡の北側で第34・35号住居跡、南東コーナー側で第1号地下式坑と重複している。本跡が第34・35号住居跡の床面を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。また、本跡は第1号地下式坑に切られている。

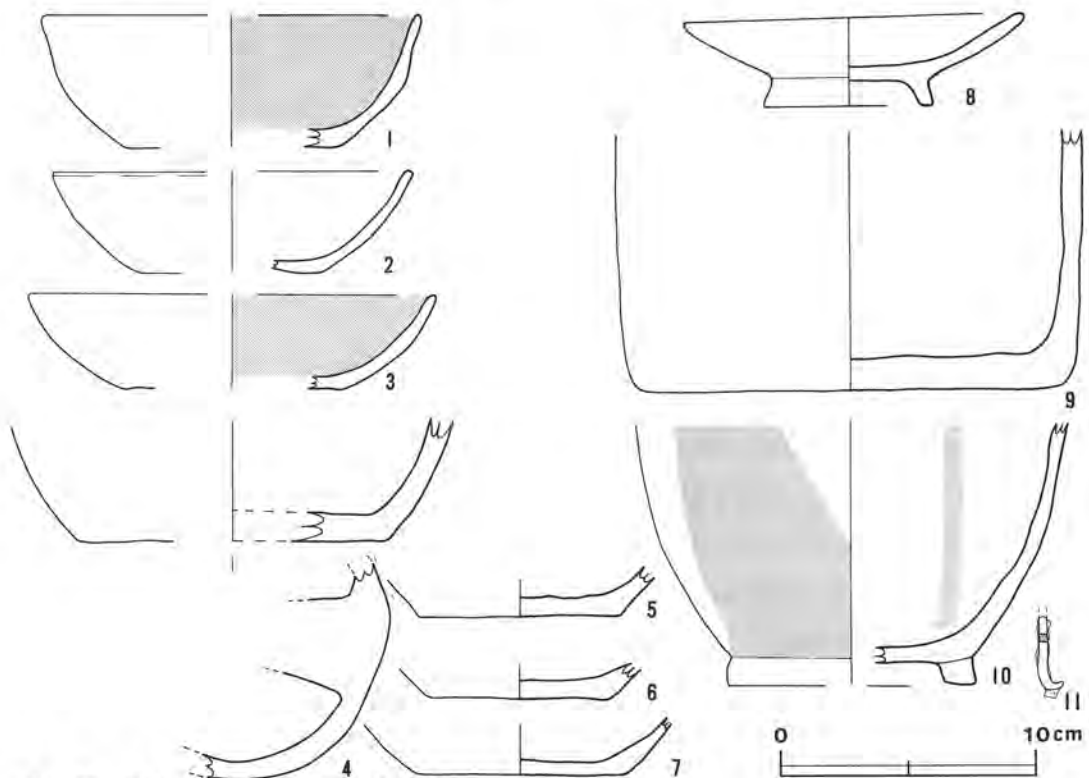
平面形は、長軸3.6m・短軸3.3mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-12°-Eを指している。壁高は25cmで、壁は南西壁が締めりのあるロームで、その他の壁は重複のため暗褐色土でほぼ垂直に立ち上がっている。床面は重複しているため、多少凹凸がみられ、ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土で床を貼っているが、特にカマドの手前からピットの内側にかけてよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されていた。天井部・袖部は砂質粘土で構築されていたが、崩

れて規模等の詳細は不明である。調査した部分は、長さ160cm・幅80cm、壁外へ65cm掘り込んでい
る。燃焼部は床面を6cmほど掘り込んでおり、ロームが熱を受けて焼土化している。ピットはP₁
～P₄の4か所検出され、配置や規模からP₁・P₂・P₄が主柱穴と考えられる。いずれも長径25～30
cm・短径18～25cmの楕円形を呈し、深さは25～42cmである。P₃は長径27cm・短径22cmの楕円形を
呈し、深さは23cmの規模で、位置などから出入口施設に関連するピットと考えられる。

覆土は、焼土粒子を含む暗褐色土を主体とし、壁際はローム粒子を含む暗褐色土、カマド付近
は焼土粒子・灰・炭化材を含む明赤褐色土で、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、南東と北西コーナー部付近を中心とする覆土中から土師器とともに、須恵器片、鉄製
品、縄文式土器片が出土している。土師器は、中央部から南壁にかけての覆土下層から坏形土器
(第63図1)・鉢形土器(第63図9)・高台付皿形土器(第63図8)、北西コーナー部の覆土下層か
ら坏形土器2点(第63図2・3)・甑形土器(第63図4)が出土し、鉄製品(第63図11)も中央部
から南壁にかけての覆土下層から出土している。陶器片は覆土下層から台付長頸壺(第63図10)
も出土している。須恵器はまとまった器形にはならなかった。縄文式土器は破片で、覆土の中層
から出土しており、周囲から流れ込んだものと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



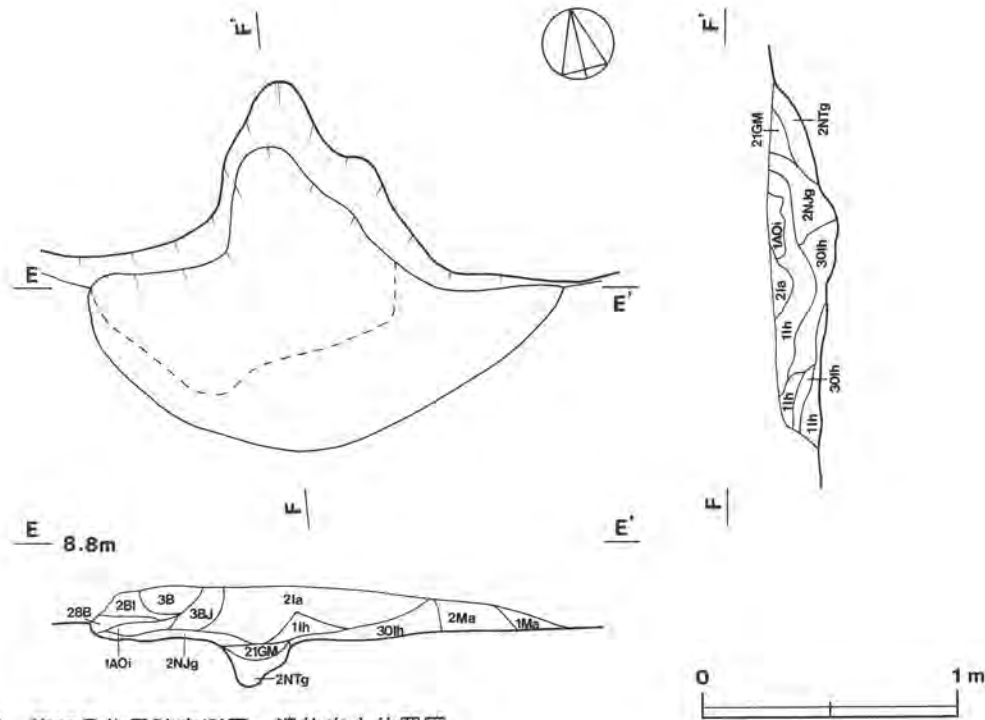
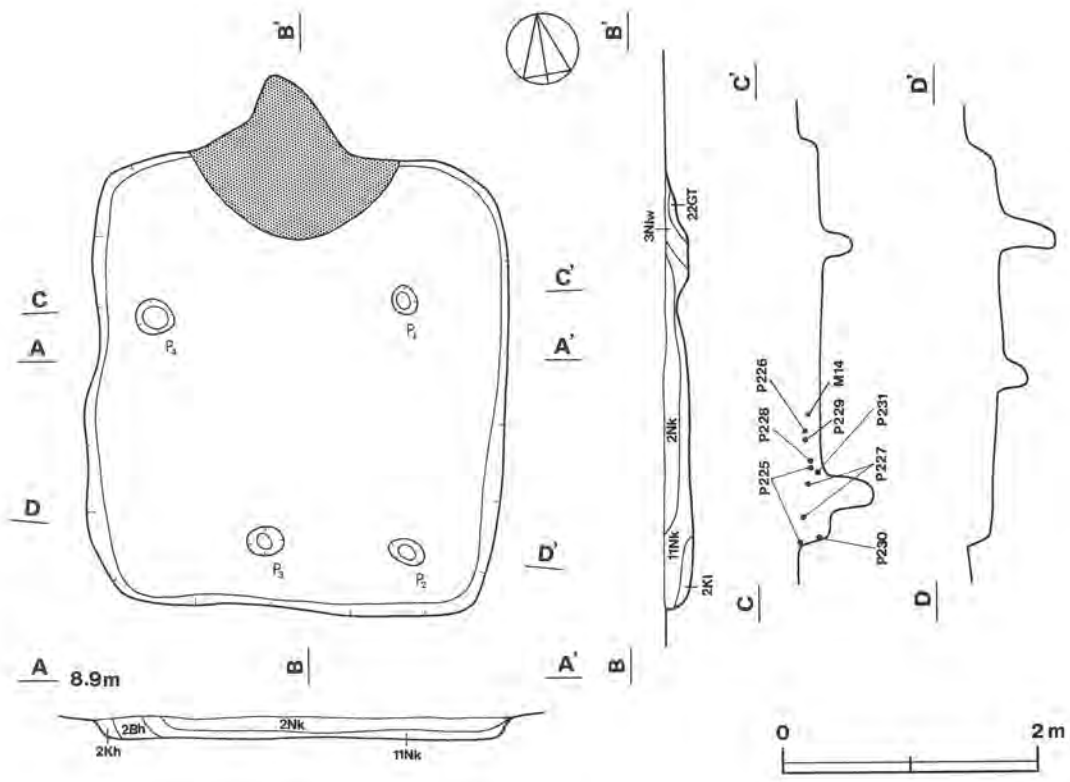
第63図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第63図 1	坏形土器	A (15.0)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P226 内面黒色処理 5%
	土師器	B 5.2 C (8.4)				
2	坏形土器	A (14.5)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P227 5%
	土師器	B 3.9 C (7.0)				
3	坏形土器	A (16.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P225 内面黒色処理 25%
	土師器	B 3.7 C (8.2)				
4	甗形土器	B (4.7)	底部は五孔式と思われる。胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P230 15%
	土師器	C (12.7)				
5	甗形土器	B (1.9)	底部は平底で、胴部は外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 胴部内面横ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P223 5%
	土師器	C 8.0				
6	甗形土器	B (1.4)	底部は平底で、胴部は外上方へ立ち上がる。	胴部内面横ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P224 5%
	土師器	C (7.0)				
7	甗形土器	B (2.3)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P222 5%
	土師器	C 8.2				
8	高台付皿形土器	A 13.4	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。 口縁端部は丸く、高台は外下方へびげる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台は貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P228 55%
	土師器	B 3.6 D 6.7 E 1.1				
9	鉢形土器	B (12.2)	底部は平底で、胴部は直立する。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 橙色・一部分黒褐色 普通	P229 15%
	土師器	C 17.0				
10	台付長頸壺	A (17.8)	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。高台は下方に短くのび、端部は面をなす。	底部回転糸切り後、高台貼り付け。 台部内・外面と胴部下端横ナデ。	細砂・砂粒 灰白色 普通	P231 胴部外面に自然釉が見られる。 30%
	陶 器	B (10.3) D (9.6) E 1.1				

第33号住居跡出土鉄製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大 き さ (cm)			重 量 (g)	備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
第63図 11	不明(鉄製)	M14	(2.9)	0.6	—	(1.6)	



第64图 第33号住居跡実測図・遺物出土位置図

第34号住居跡（第65図）

本跡は、B5d1区を中心に確認され、第12号住居跡の東側4.6m、第15号住居跡の西側0.6mに位置している。本跡の南西側で第33号住居跡、北西側で第35号住居跡、南東側で第1号地下式坑と重複している。本跡は第35号住居跡の床面を切っていることから、本跡の方が新しい遺構であるが、第33号住居跡と第1号地下式坑に切られている。

平面形は、一辺が5.0mの方形を呈し、主軸方向はN-15°-Wを指している。残存している壁高は47cmで、壁は南東壁から北東壁にかけて締まりのあるロームで、その他の壁は重複のため暗褐色土でほぼ垂直に立ち上がっている。また、カマドの西側壁下から北壁下にかけて、上幅15cm・深さ5cmほどの壁溝が周回している。床面は中央部から南東壁にかけて締まりのあるロームで、その他の床面はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土で床を貼り、多少凹凸がみられ、特にカマドの手前からピットの内側にかけて非常に硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊している。袖部は山砂混じりの粘土で構築し、内側は熱を受けて焼土化し、多量に焼土粒子を含んでいる。調査した部分は、長さ105cm・幅120cm、壁外へ27cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を6cmほど掘り込んでおり、焼土粒子や炭化物が堆積している。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、長径28～35cm・短径25～30cmの楕円形を呈し、深さは56～70cmの規模を有し、配置からいずれも主柱穴と思われる。また、北西コーナー下に長さ290cm・幅130cmの不整長方形を呈し、深さ90cmの規模の土坑を検出した。土坑内は砂質でハードローム・ローム粒子を多量に含むにふい黄褐色土を主体とし、上層にはカマドから流れ込んだと思われる焼土粒子・粘土粒子を少量含んでいる。

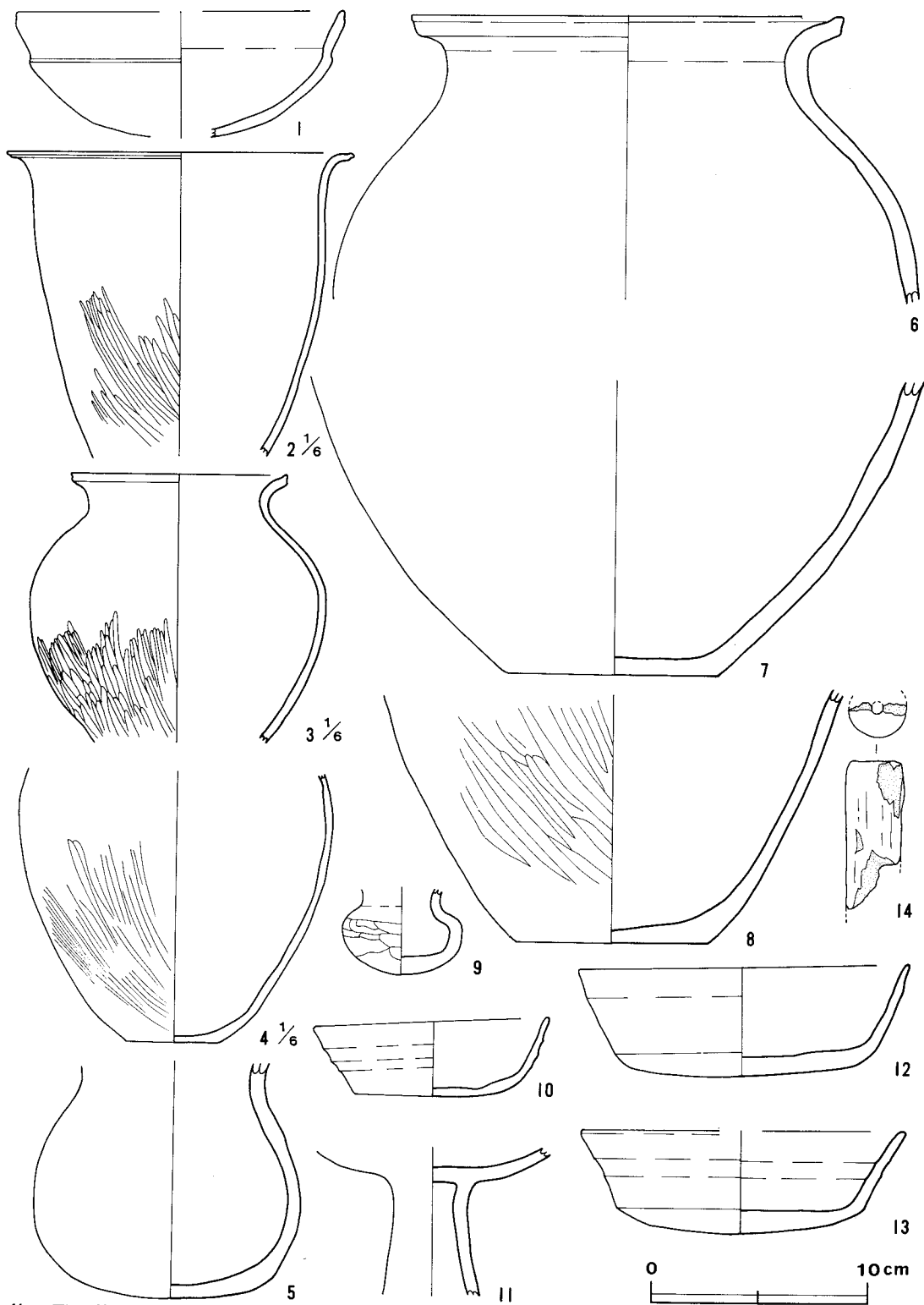
覆土は、暗褐色土を主体とし、上層にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含み、下層にはローム粒子・粘土粒子・焼土粒子を少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたる覆土下層に集中し、多量の土師器のほかに、須恵器、土製品、縄文式土器片が出土している。土師器は、西壁南寄りの床面直上から环形土器(第66図1)、カマドの両袖部付近の覆土中から甕形土器5点(第66図3・4・6～8)・甕形土器(第66図2)が出土している。また、須恵器は、カマドの東側の床面直上から伏せた状態で坏(第66図10)が出土している。その他、北西コーナー部や中央部及び東壁下南寄りの覆土下層から土師器の壺形土器(第66図5)・小型壺形土器(第66図9)や須恵器の坏2点(第66図12・13)・高盤(第66図11)が出土している。土製品は、カマドの覆土中から管状土錘(第66図14)が出土している。この管状土錘は、出土状況から判断すると、周囲から流れ込んだと思われる。

本跡は、出土遺物から奈良時代の真間期に比定されるものと思われる。

第34号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第66図 1	坏形土器 土師器	A (15.2) B (5.9)	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外傾する。外面の口縁と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面横ナデ、外面横位のヘラ削り。 底部不定方向に手持ちヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P239 35%
2	甗形土器 土師器	A 23.0 B (28.2)	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、胴部上位ではほぼ直立する。口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面上位ヘラ削り、中位から下位にかけて縦位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P240 70%
3	甗形土器 土師器	A 20.3 B (25.0)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P233 55%
4	甗形土器 土師器	B (25.3) C 8.8	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、上位から内傾する。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラナデ後、縦位のヘラ磨き。	砂粒・礫・雲母・ 石英 にぶい褐色 普通	P234 30%
5	壺形土器 土師器	B (11.0)	底部は丸底で、胴部は丸く張り、胴部中位から内傾する。口縁部は僅かに外反して直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面ヘラナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P237 85%
6	甗形土器 土師器	A 19.8 B (13.3)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 灰黄褐色 普通	P232 25%
7	甗形土器 土師器	B (13.8) C 9.6	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 褐色、内面にぶい 褐色 普通	P236 20%
8	甗形土器 土師器	B (11.9) C 8.9	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラナデ後、縦位のヘラ磨き。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P235 30%
9	小型壺形土器 土師器	B (4.1)	底部は丸底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、胴部中位から内傾する。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P238 95%
10	坏 須恵器	A 10.8 B 3.6 C 7.2	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向に手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫・雲母・ 石英 灰黄色 普通	P241 95%
11	高 盤 須恵器	B (6.5)	脚部は外下方へのび、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 体部内・外面横ナデ。 脚部内面ナデ、外面横ナデ。 脚部貼り付け。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 褐灰色 普通	P244 15%
12	坏 須恵器	A 15.2 B 5.2 C 10.3	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 灰白色 普通	P242 80%
13	坏 須恵器	A (14.9) B 4.8 C 8.3	底部は扁平な丸底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 黄灰色 普通	P243 50%



第66图 第34号住居跡出土遺物実測図

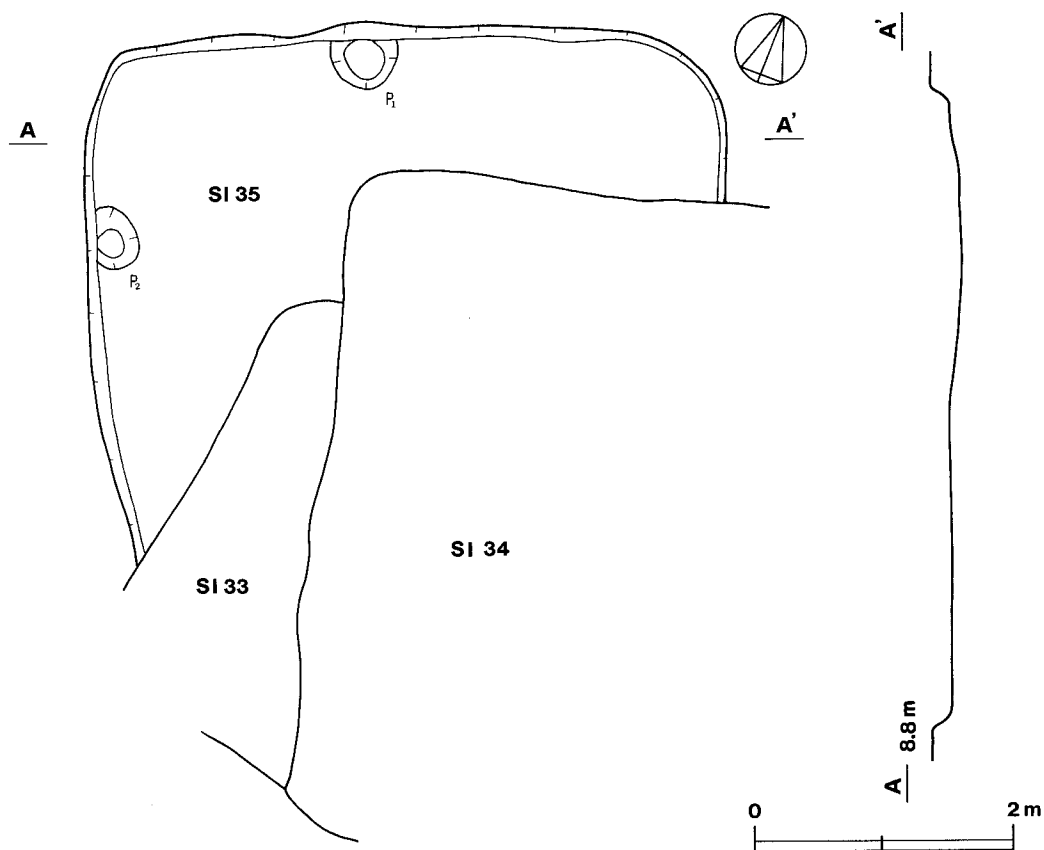
第34号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大 き さ (cm)			重 量 (g)	備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
第66図 14	管状土錘	DP88	(6.9)	2.6	—	(27.1)	孔径0.4cm, におい黄橙色, 40%

第35号住居跡 (第67図)

本跡は、B4c0区を中心に確認され、第12号住居跡の東側2.3m、第84号住居跡の南側3.2mに位置している。本跡は中央部より南側で第33号住居跡と、東側で第34号住居跡と重複している。本跡は両住居跡によって床面を切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、重複のため平面形・規模等の詳細は不明である。調査した部分から北壁の長さは5.0mで、北西・北東コーナーは隅丸形を呈し、長軸方向はN-24°-Wを指している。壁は重複しているため、北東コーナーから西壁にかけてしか検出できなかった。残存している壁高は15cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は北壁下・西壁下付近しか検出できず、比較的軟弱である。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、いずれも径は50cm、深さは10cmの規模



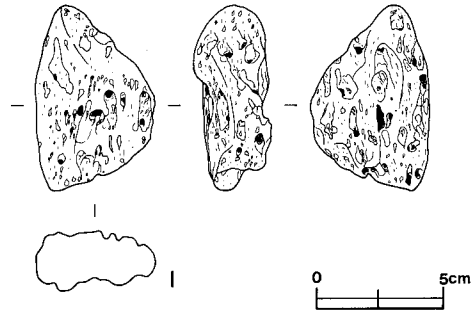
第67図 第35号住居跡実測図

で、それぞれ北壁・西壁を切っていることから本跡に伴う主柱穴とは認められない。

覆土は、極暗褐色土を主体とし、ローム粒子・焼土粒子を含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は少なく、土師器片と土製品が出土しただけで、中央部から北壁下西寄りの床面直上から坏形土器片や甕形土器片、浮子（第68図1）が出土している。土器片はすべて破片のため、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものと思われる。



第68図 第35号住居跡出土遺物実測図

第35号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第68図 1	浮子	Q24	7.3	4.7	2.4	13.8	軽石

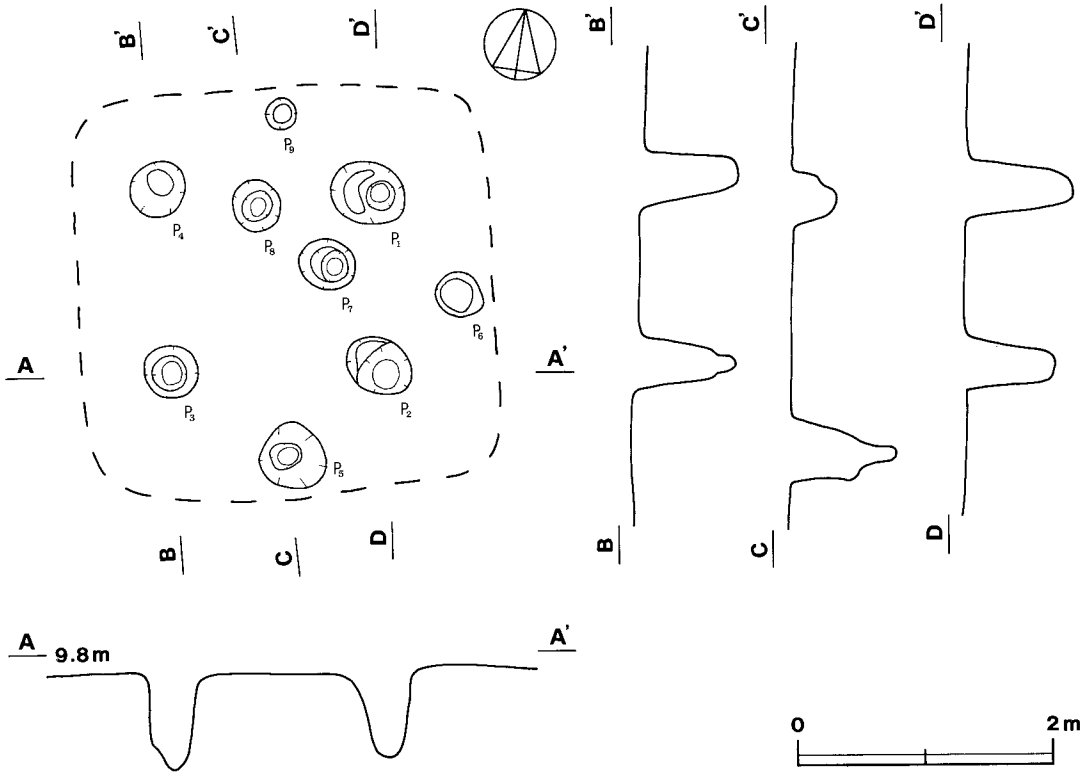
第36号住居跡（第69図）

本跡は、C4b8区を中心に確認され、第18号住居跡の南西側3.3m、第19号住居跡西側2.1mに位置している。

本跡は、攪乱のため平面形・規模等の詳細は不明であるが、調査した部分から推定すると、一辺3.2mほどの方形を呈し、主軸方向はN-16°-Wを指すものと思われる。床面が露出して検出されたため、壁の立ち上がりは認められず、床面は平坦で、全体的に硬い。ピットはP₁～P₉の9か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄は長径42～60cm・短径40～45cmの楕円形を呈し、深さは65～85cmの規模を有し、配置からいずれも主柱穴と考えられる。P₅は長径52cm・短径48cmの楕円形を呈し、深さ35cmで、規模や配置から出入口施設に関連するピットと考えられる。P₆・P₇・P₈・P₉は長径25～45cm・短径20～40cm・深さ80～85cmで、規模・配置から補助柱穴と考えられる。

覆土は、攪乱が著しく、堆積状況は不明である。

本跡に伴う遺物は全く出土しなかったため、時期は不明である。



第69図 第36号住居跡実測図

第37号住居跡 (第70図)

本跡は、C4is区を中心に確認され、第29号住居跡の北西側7m、第30号住居跡の南東側9mに位置している。本跡は南側で第38号住居跡と重複している。本跡が第38号住居跡の上層に床を貼っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

本跡は、重複と北側が道路にかかっているため平面形・規模等の詳細は不明である。残存している東壁と西壁間の長さは3.45mで、主軸方向は不明である。壁は極わずかに残存している東壁・西壁の一部しか検出できず、壁高はそれぞれ20cm前後で、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はローム粒子を含む暗褐色土で床を貼り、よく踏み固められている。

覆土は、ローム粒子を含む極暗褐色土、壁際にはローム粒子を微量含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

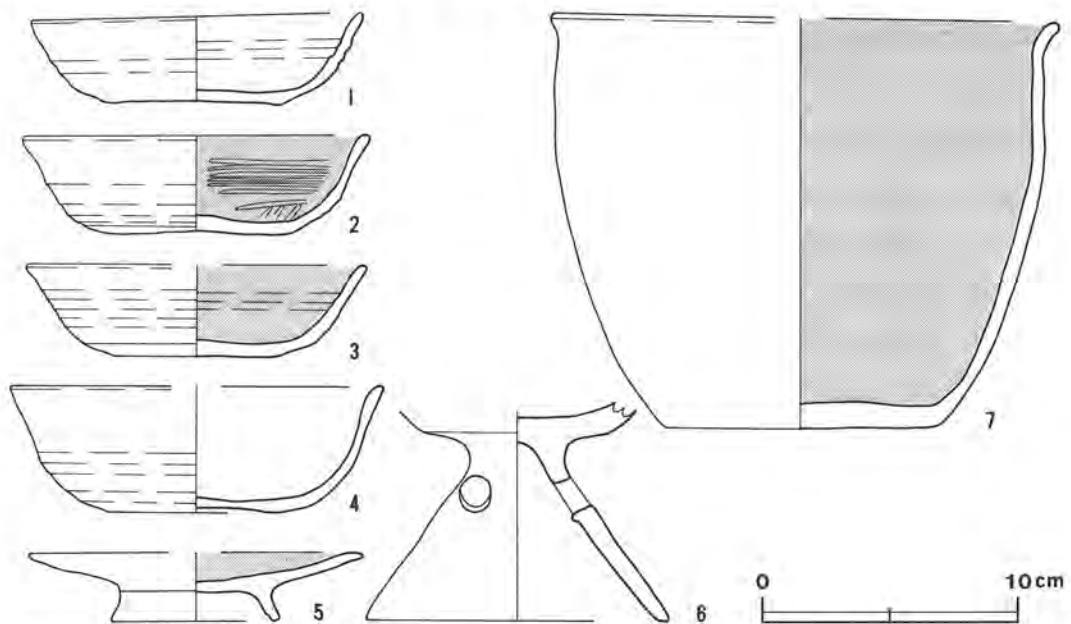
遺物は、南西コーナー部壁際から須恵器の高台付坏片と土師器の坏形土器片が出土しているだけである。

部分から南東・南西コーナーは隅丸形を呈し、南壁の長さは3.6mで、主軸方向はN-2°-Eを指すものと思われる。壁は北側が重複と道路にかかっているため検出できなかった。南壁及び残存している東壁・西壁の壁高は29cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、ロームが硬く踏み固められている。カマドは東壁に付設されており、天井部・袖部の大半は崩壊されているが、残存している袖部は山砂を含む粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ100cm・幅80cm、壁外へ75cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を4cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には焼土粒子と灰白色土粒子が混じりあって含まれている。ピットはP₁~P₃の3か所検出され、径は20~50cm、深さは10~20cmの規模を有し、配置からいずれも本跡に伴う支柱穴と思われる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、上層にはローム粒子・粘土粒子を微量含み、下層にはローム粒子・ロームブロック・粘土粒子・焼土粒子を少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、少量の土師器片のほかに、須恵器片が南東コーナー部付近に集中して出土している。土師器は、南東コーナー部壁際から坏形土器(第71図1)、カマドの手前の床面直上から伏せた状態で高台付皿形土器(第71図5)、カマドの覆土中から伏せた状態で坏形土器3点(第71図2~4)、P₂から横位で鉢形土器(第71図7)が出土している。須恵器片はまとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第71図 第38号住居跡出土遺物実測図

第38号住居跡出土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第71図 1	坏形土器 土 師 器	A 13.1	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内・外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P245
		B 3.5				100%
		C 7.2				
2	坏形土器 土 師 器	A 13.6	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい赤褐色 普通	P246 内面黒色処理 95%
		B 3.9				
		C 6.2				
3	坏形土器 土 師 器	A (13.4)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい赤褐色 普通	P248 内面黒色処理 45%
		B 3.6				
		C 6.4				
4	坏形土器 土 師 器	A (14.6)	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P247 30%
		B 5.0				
		C 7.0				
5	高台付皿形 土器 土 師 器	A (13.1)	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台は貼り付け。 高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい橙色 普通	P249 内面黒色処理 60%
		B 2.7				
		D 6.1				
		E 1.0				
6	器台形土器 土 師 器	B (8.2)	坏部は欠損している。脚部は直線的に「ハ」の字状に開き、上位に3孔を穿っている。	脚部内面横ナデ、外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・礫 橙色 普通	P250 40%
		D (11.8)				
7	鉢形土器 土 師 器	A (20.0)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。頸部はややくびれ、口縁部は短く外反する。	口縁部外面横ナデ、口縁部から胴部内面ヘラ磨き、外面中位まで横位のヘラ削り、下位は縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P251 内面黒色処理 55%
		B 16.4				
		C 10.8				

第39号住居跡（第72図）

本跡は、C4j6区を中心に確認され、第29号住居跡の西側3.4m、第52号住居跡の東側7.0mに位置している。西側で第11号地下式坑と、北側で第38号住居跡と重複している。本跡は第11号地下式坑と第38号住居跡によって切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、南東コーナーを含む南側の一部が道路にかかっているが、調査した部分から北東・北西・南西コーナーは隅丸形を呈し、西壁の長さは4.6mで、主軸方向はN-8°-Wを指している。南壁と北壁の重複している部分を除いて、壁高は45cmで、締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。床面はロームの上にロームブロック・ローム粒子・粘土ブロック・粘土粒子を含む暗褐色土で床を貼り、非常に硬く踏み固められている。床下からカマドの反対側のP₅に接して、長径110cm・短径100cm・深さ25cmの不定形をなす土坑を検出した。覆土はローム粒子多量、粘土粒子・焼土粒子中量を含む黒褐色土が堆積していた。掘り方は、床下土坑以外にも北東・北西コーナー付近にピット状の凹地がみられるが、いずれも深さが3cm未満であるので、ここでは取り扱

わなかった。また、床面全体を焼土が覆っていて、カマド付近でも焼土と砂質粘土が混じり合い散在していた。カマドは北壁中央部に付設されていたが、攪乱を受けて崩れているため天井部・袖部は不明で、僅かに袖部の痕跡と思われる粘土の塊りが一部残存するだけである。調査した部分は、長さ99cm・幅70cm、壁外へ30cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を20cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁～P₅の5か所検出され、P₁～P₄は、いずれも径は33～50cm、深さは46～90cmの規模を有し、配列から支柱穴と考えられる。P₅は長径70cm・短径50cmの楕円形を呈し、深さ45cmで、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。

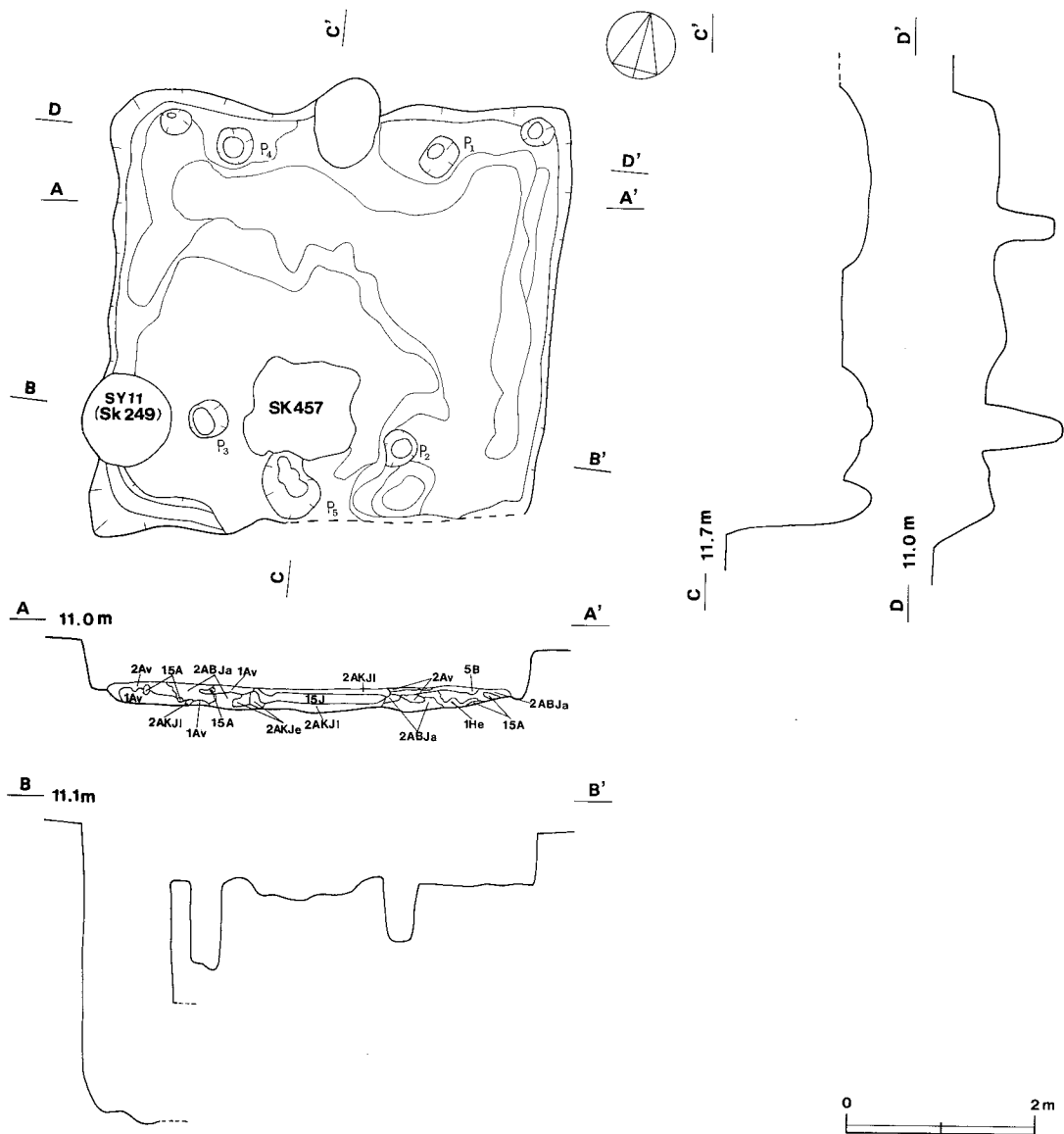
覆土は、本跡が火災に遭い廃棄されたものと思われ、焼土粒子・ローム粒子多量、炭化粒子少量含む黒褐色土を主体とし、壁際はロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器のほか、須恵器、陶器、鉄片、縄文式土器片が出土している。これらの多くは破片で、覆土下層に集中している。土師器は、カマドの西側の床面直上から正位で坏形土器（第74図17）・甕形土器（第74図13）、中央部の床面直上から高台付皿形土器5点（第74図14・18～21）、南西コーナー部や西壁中央部の床面直上から坏形土器3点（第74図15～16）が出土している。また、須恵器は、カマドの手前や東壁・西壁・南壁中央部と中央部の床面直上から坏10点（第74図1～10）、中央部から南西寄りの床面直上から台付長頸壺（第74図12）が出土している。その他、同所から砥石（第74図25）も出土している。さらに、カマド周辺の覆土下層から釘（第74図24）や陶器片が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第39号住居跡出土土器観察表

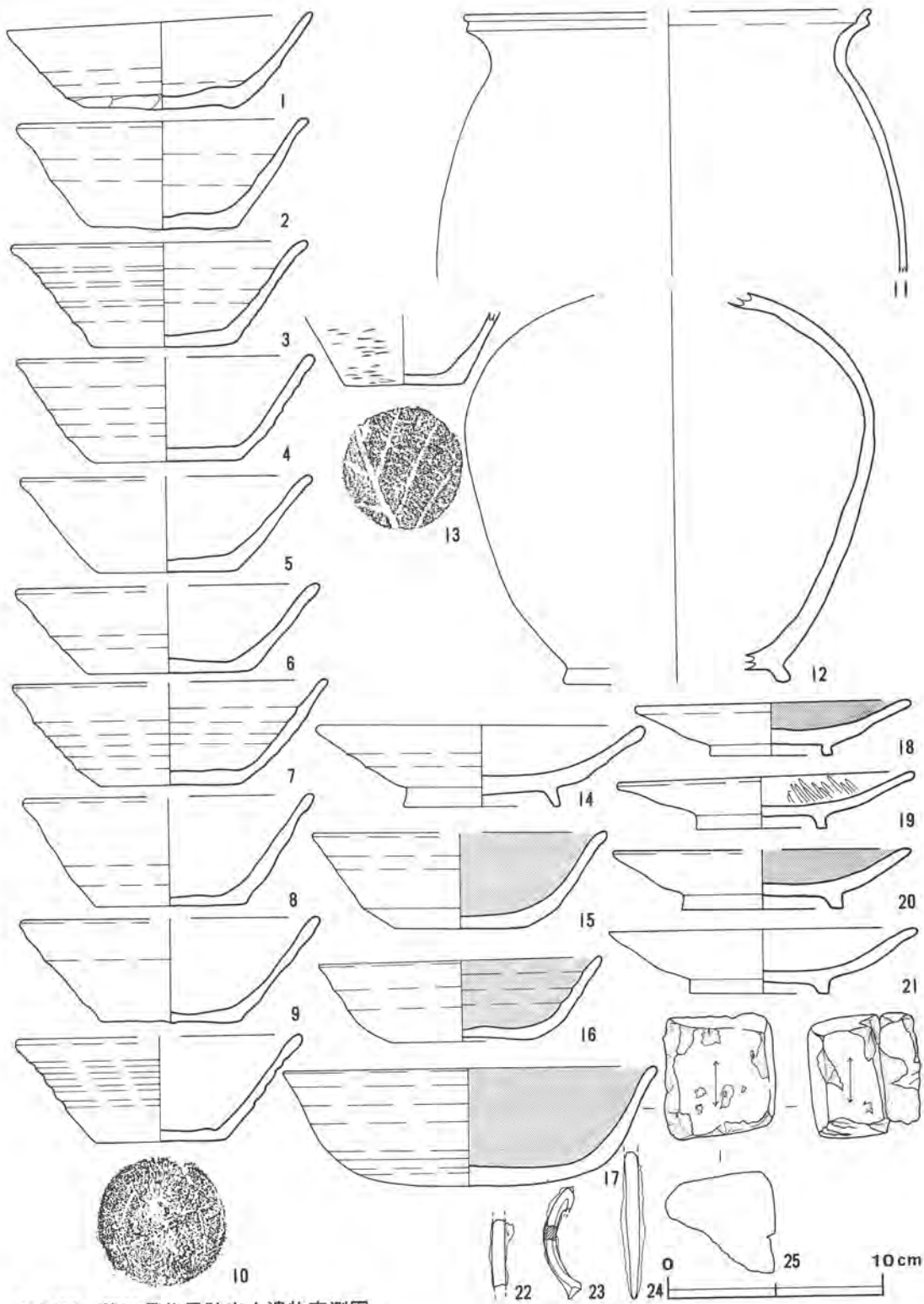
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	坏 須恵器	A 14.1 B 4.4 C 7.0	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部にかけて手持ちへら削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 におい褐色 普通	P263 95%
2	坏 須恵器	A 13.6 B 5.1 C 7.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転へら切り後、不定方向の手持ちへら削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰色 普通	P264 60%
3	坏 須恵器	A 13.5 B 4.9 C 6.5	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転へら切り後、不定方向の手持ちへら削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 黄灰色 普通	P265 70%
4	坏 須恵器	A (14.0) B 4.9 C 6.8	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転へら切り後、不定方向の手持ちへら削り。体部内・外面横ナデ。	細砂・礫 褐灰色 普通	P266 50%



第73図 第39号住居跡掘り方実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	坏 須恵器	A (13.4) B 4.5 C 6.6	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・細砂・礫 灰オリーブ色 普通	P 267 40%
6	坏 須恵器	A (14.2) B 4.1 C 7.6	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰色 普通	P 268 30%

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
7	坏 須 惠 器	A (14.6) B 4.8 C 6.5	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り、体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 外面にぶい黄橙色 内面灰白色 普通	P269 30%
8	坏 須 惠 器	A (13.6) B 5.1 C 7.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰色 普通	P270 30%
9	坏 須 惠 器	A (14.1) B 4.8 C 6.7	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰色 普通	P271 50%
10	坏 須 惠 器	A (13.4) B 4.9 C 6.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰色 普通	P272 60%
11	甕形土器 土 師 器	A (18.8) B (12.3)	胴部は丸く張り、口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫・雲母・ 石英 にぶい橙色 普通	P252 20%
12	台付長頸壺 須 惠 器	B (18.2) D (10.6) E 0.7	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、肩部で内傾する。高台は外下方へのび、端部に面をなす。	胴部外面・下端回転ヘラ削り。 高台貼り付け。	砂粒・細砂・礫 黄灰色 普通	P276 30%
13	甕形土器 土 師 器	B (3.2) C 6.2	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P254 底部木葉痕 5%
14	高台付皿形 土器 土 師 器	A 15.4 B 3.9 D 7.3 E 0.9	体部は内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部は丸い。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂礫 灰色 普通	P275 60%
15	坏形土器 土 師 器	A (13.8) B 4.5 C 6.2	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へのび、口縁部は僅かに外反している。端部は丸い。	水挽成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P256 内面黒色処理 50%
16	坏形土器 土 師 器	A 13.1 B 3.8 C 6.5	底部は扁平な丸底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色 普通	P258 内面黒色処理 100%
17	坏形土器 土 師 器	A 17.2 B 5.6	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P255 内面黒色処理 95%
18	高台付皿形 土器 土 師 器	A 12.6 B 2.5 D 5.7 E 0.5	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は僅かに外反している。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P259 内面黒色処理 100%



第74图 第39号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
19	高台付皿形土器	A 13.6 B 2.6 D 6.0 E 0.7	体部は外上方に大きく開き、口縁部は水平にのび、端部は丸く、高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P261 60%
	土師器					
20	高台付皿形土器	A (14.0) B 2.8 D 7.6 E 0.7	体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P262 内面黒色処理 50%
	土師器					
21	高台付皿形土器	A 14.4 B 3.1 D 6.6 E 0.6	体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は僅かに外反している。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 灰褐色 普通	P260 95%
	土師器					

第39号住居跡出土石製品・鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第74図 22	不明(鉄製)	M15	(3.2)	0.7	0.4	(3.1)	
23	不明(鉄製)	M16	(5.3)	0.7	0.4	(6.9)	
24	釘	M17	(6.9)	1.0	—	(8.2)	
25	砥石	Q32	5.9	5.3	4.7	169.0	凝灰岩

第40号住居跡 (第75図)

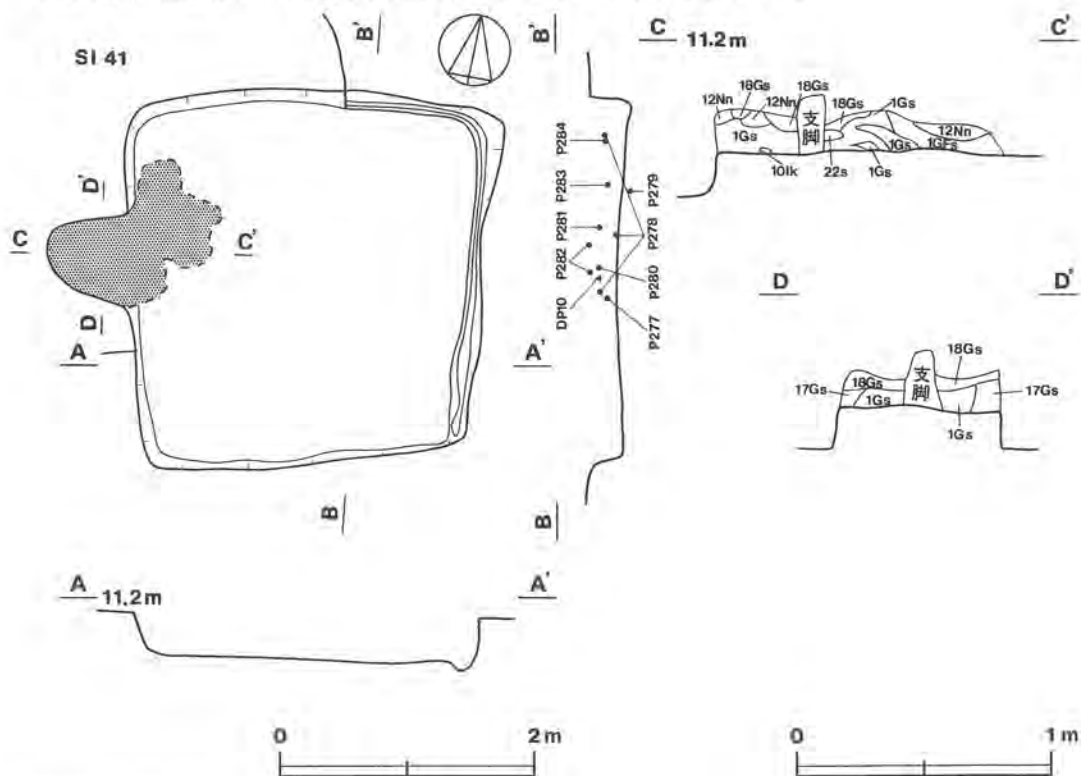
本跡は、D4a1区を中心に確認され、第53号住居跡の西側2.7mに位置している。本跡の西側で第41・43号住居跡、北側で第42号住居跡と重複している。土層から判断すると、本跡が第41・42・43号住居跡を切っていることから、本跡が最も新しい遺構である。

本跡は、重複のため平面形・規模等の詳細は不明であるが、調査した部分から推定すると、残存している東壁の長さは2.6mで、北側コーナーが隅丸形を呈しており、主軸方向はN-7°-Wを指すものと思われる。壁は北・西壁の半分を除いて、壁高は35cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は北側コーナー付近から北東壁下にかけて、上幅10~16cm・深さ5~8cmの規模で周回している。第41号住居跡の覆土上にみられる本跡の床面は、白色粘土と焼土粒子を含む灰褐色土で床を貼り、硬く踏み固められており、南東壁下から北東壁下の床面はロームで、前述した貼り床面より若干高くなっている。カマドは西壁中央部と思われる所に付設されているが、攪乱を受けて天井部・袖部は崩壊し、平面形・規模等は不明である。僅かに袖部の痕跡と思われる焼土粒子を含んだ砂質粘土と支脚が残存するだけである。本跡に伴うピットは検出されなかった。

覆土は、ローム粒子・焼土粒子多量、炭化物少量を含む黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって土師器を主に、須恵器、土製品が出土している。これらの多くは破片で、覆土下層に集中して出土している。土師器は、中央部の床面直上から坏形土器2点（第76図5・6）・高台付坏形土器（第76図4）・甕形土器2点（第76図1・2）が出土している。また、同所から正位で須恵器の高台付坏（第76図8）が出土している。その他、カマドの燃焼部から正位で支脚（第76図9）が出土し、同所の覆土中から土師器の坏形土器2点（第76図3・7）も出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第75図 第40号住居跡実測図・遺物出土位置図

第40号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	甕形土器 土師器	A (25.0) B (5.4)	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ 削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P277 5%
2	甕形土器 土師器	B (17.9) C (10.4)	底部は平底で、胴部は内彎気味に 外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位 のヘラ削り。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P278 25%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	坏形土器 土師器	A (16.9) B (4.9)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色・黒褐色 普通	P282 30%
4	高台付坏形土器 土師器	B (2.9) D 9.0 E 1.1	高台外下方へのびる。	底部内面へラ磨き、外面回転へラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒 淡橙色 普通	P279 内面黒色処理 10%
5	坏形土器 土師器	B (0.9) C 5.1	底部は平底である。	底部回転へラ削り、内面へラ磨き。	砂粒 橙色 普通	P283 底部外面墨書 「西」 内面黒色処理 5%
6	坏形土器 土師器	A (13.5) B 4.0 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 浅黄褐色 普通	P281 内面黒色処理 35%
7	坏形土器 土師器	A (13.1) B 4.5 C 7.3	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転へラ削り後、不定方向の手持ちへラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P280 50%
8	高台付坏 須恵器	A (15.5) B 4.5 D 8.0 E 0.8	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は短く外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転へラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部外面に水挽き痕を僅かに残す。	細砂・長石粒 灰白色 普通	P284 器面に自然釉 付着 60%

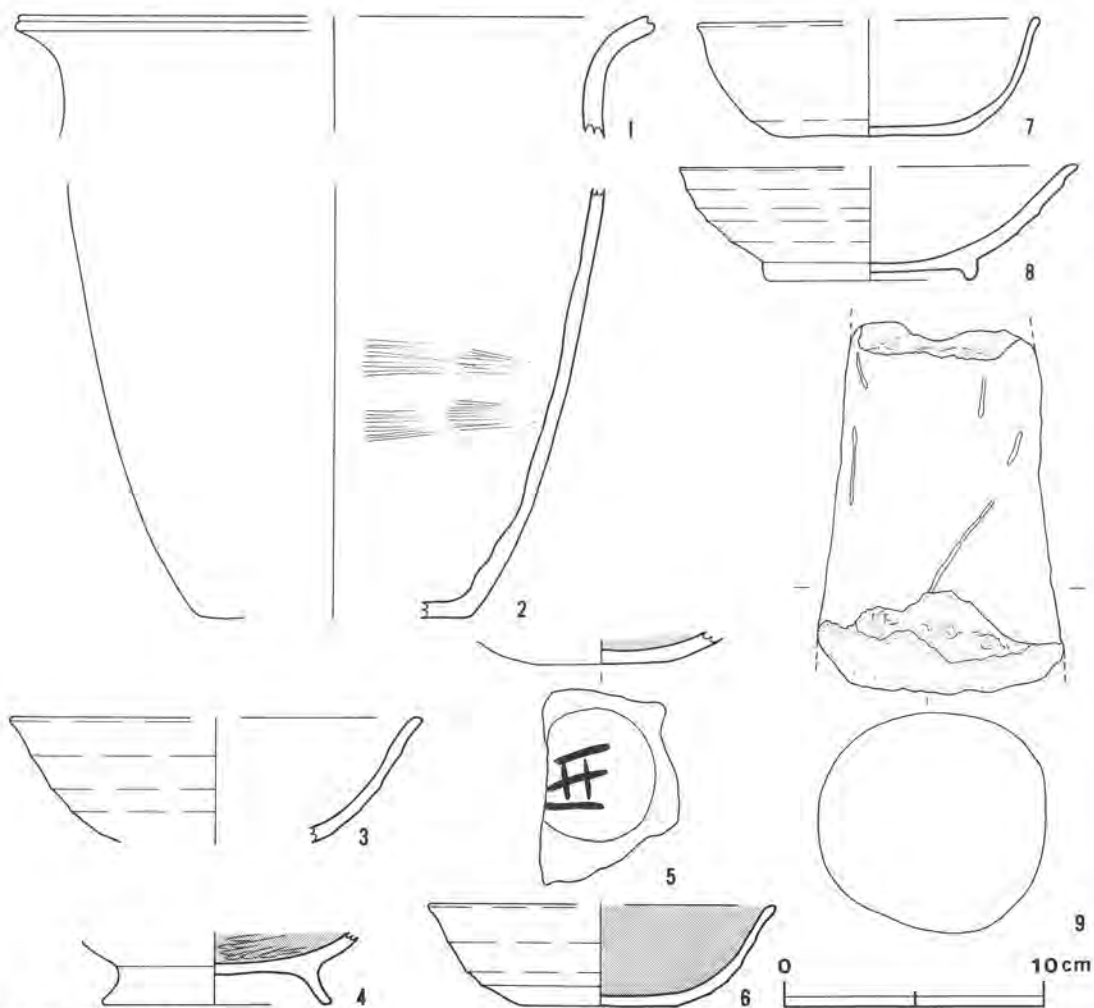
第40号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第76図 9	支脚	DP10	(14.7)	9.5	—	(1029.4)	橙色

第41号住居跡 (第77図)

本跡は、D4a1区を中心に確認され、第53号住居跡の西側3.5mに位置している。本跡の東側で第40号住居跡、西側から北側で第43号住居跡と重複している。土層から判断すると、本跡は第40号住居跡より古く、第43号住居跡の床面から約3cm上層に貼り床をしていることから、本跡の方が新しい遺構である。本跡の西側の大半は攪乱がひどいため、十分な観察ができなかった。

平面形は、調査した部分から南壁の長さは5.6mで、推定で長方形を呈し、主軸方向はN-22°-Wを指しているものと思われる。残存している南壁高は20cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、ローム小ブロックや砂質粘土を多量に含む暗褐色土で床を貼り、よく踏み固められている。カマドは東壁中央部に付設され、天井部・袖部の大半は崩れているため、規模・形状等の詳細は不明である。残存している袖部は山砂混じりの粘土で構築され、内側はよく焼けて焼土化している。調査した部分は、長さ110cm・幅120cm、壁外へ80cmは

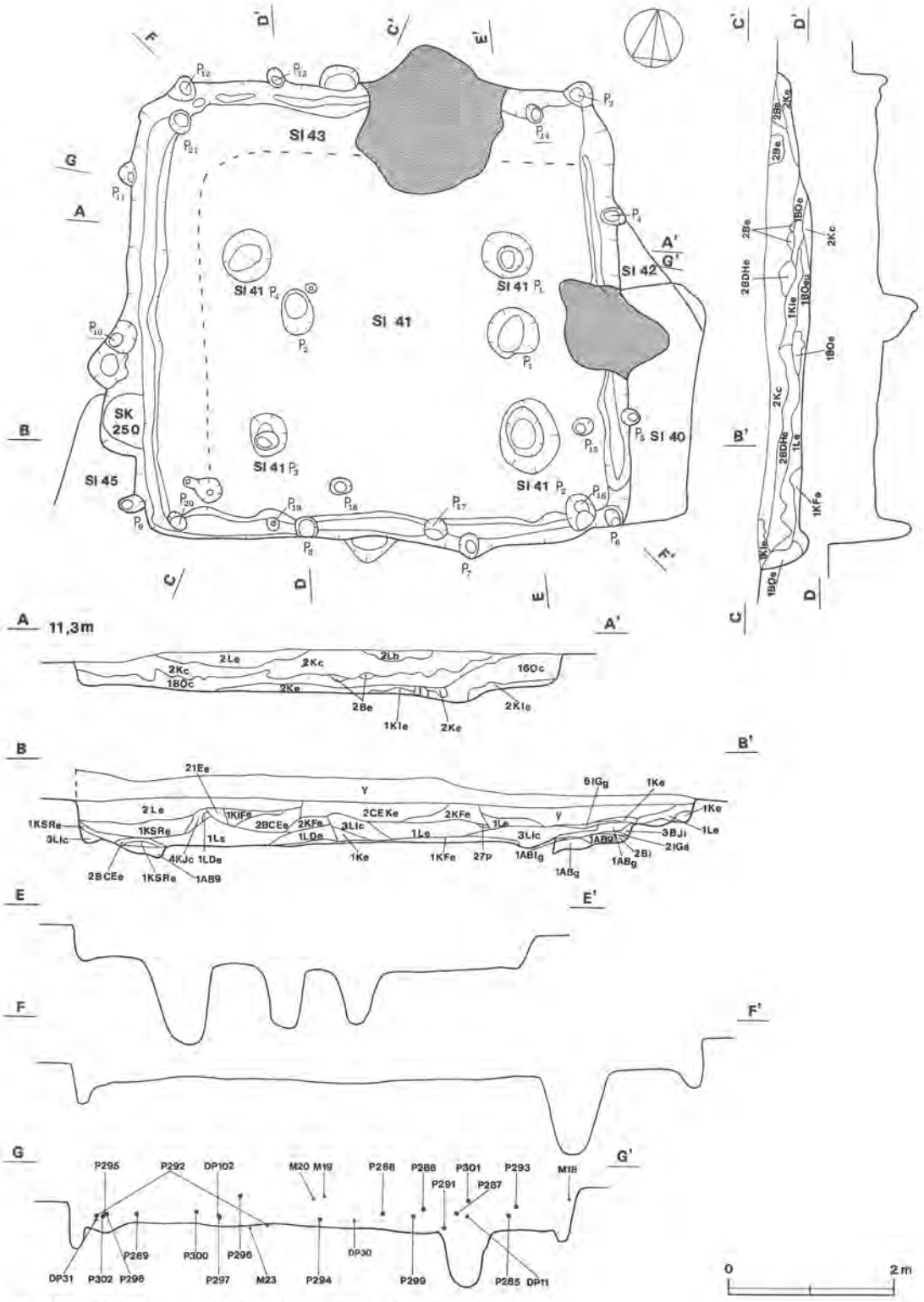


第76図 第40号住居跡出土遺物実測図

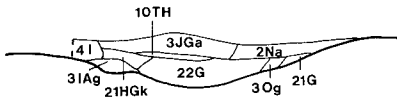
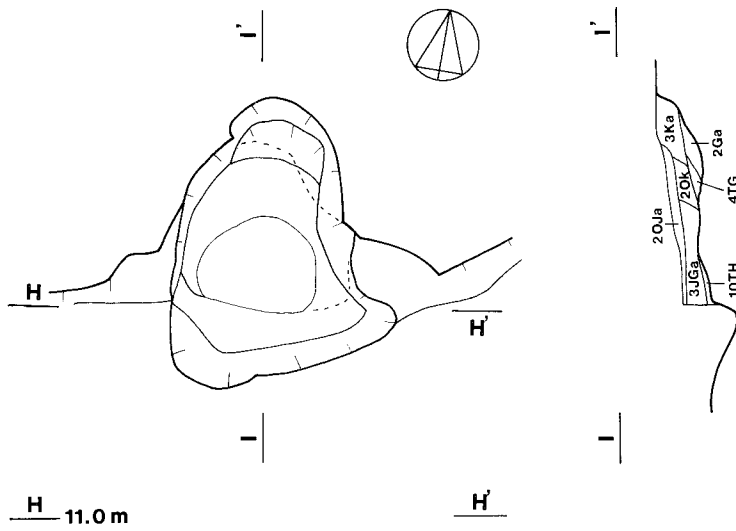
ど掘り込んでいる。燃焼部は床面を12cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、いずれも支柱穴で長径60～80cm・短径40～70cmの楕円形を呈し、深さ80～105cmである。P₁とP₂、P₃とP₄の間は2.3m、P₁とP₄、P₂とP₃の間は3.3mで、4か所を結ぶと平面形と同じ長方形になる。

覆土は、ローム粒子・焼土粒子多量、炭化物少量を含む黒褐色土を主体として、自然堆積の様相を呈している。

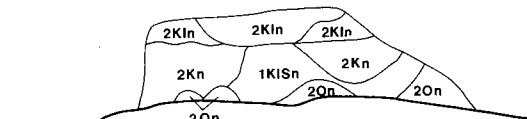
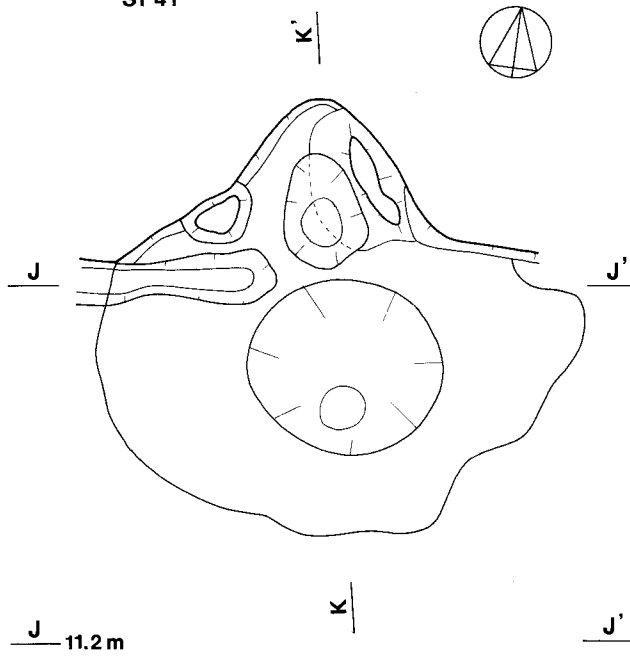
遺物は、本跡全域にわたって散在し、多量の土師器といっしょに、須恵器、金属製品、土製品、縄文式土器片が出土している。これらの多くは破片で、床面から若干浮いた状態で出土している。土師器は、カマドの南側床面直上から高台付坏形土器(第79図4)、南壁中央部の覆土下層から伏せた状態で高台付皿形土器(第79図1)、カマドの手前の覆土下層から横位で坏形土器(第79図2)が出土している。金属製品は、南壁中央部の覆土中層から鉄製の鉸具(第79図6)・鉄製品(第79図7)、カマドの北側の覆土中層から青銅製の柄頭(第79図5)が出土している。その他、覆土下



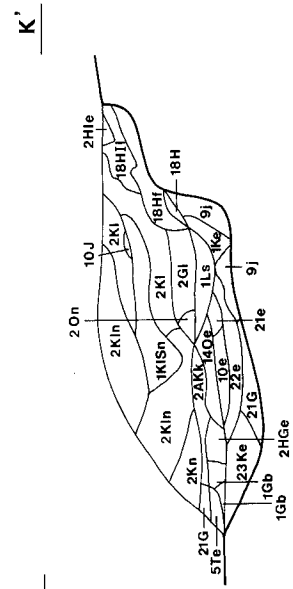
第77图 第41・42・43号住居跡実測図・遺物出土位置図



SI 41



SI 43



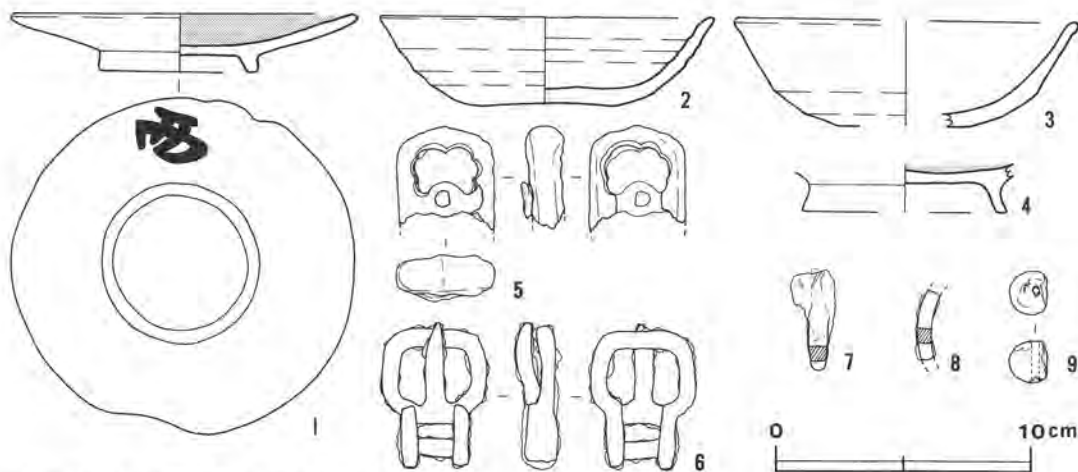
第78図 第41・43号住居跡・カマド実測図

層から球状土錘（第79図9）や須恵器の破片も出土している。須恵器はすべて破片で、まとまった器形にならなかった。縄文式土器片は、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第41号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	高台付皿形土器 土師器	A 13.5 B 2.3 D 6.2 E 0.6	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。高台は外下方へのびる。	底部外面回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母にぶい橙色 普通	P288 外面墨書「西」 内面黒色処理 100%
2	坏形土器 土師器	A 13.2 B 3.5 C 5.8	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 外面浅黄橙色・内面明褐灰色 普通	P286 100%
3	坏形土器 土師器	A (13.5) B 4.2 C (5.0)	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P287 20%
4	高台付坏形土器 土師器	B (1.9) D (8.0) E 1.2	高台は「ハ」の字状に外下方にのびる。	高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒・礫にぶい橙色 普通	P285 内面黒色処理 10%



第79図 第41号住居跡出土遺物実測図

第41号住居跡出土土製品・金属製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第79図 5	柄頭(青銅製)	M 18	4.1	3.9	1.9	17.2	
6	鉸具(鉄製)	M 19	5.8	4.3	1.9	41.7	
7	不明(鉄製)	M 20	(4.0)	0.8	1.4	(6.2)	
8	不明(鉄製)	M 21	(3.3)	0.7	0.4	(3.3)	
9	球状土錘	D P30	1.7	1.7	—	(4.3)	孔径0.3cm, におい 橙色・黒褐色, 70%

第42号住居跡 (第77図)

本跡は、D4a1区を中心に確認され、第53号住居跡の西側4mに位置している。本跡の南東側は第40号住居跡、中央部は第41・43号住居跡と重複しており、本跡の床は第40・41・43号住居跡に切られていることから、本跡が最も古い遺構である。

本跡は、第40・41・43号住居跡に北東壁の一部分を残して大半を切られているため、規模や平面形等の詳細は不明である。残存する壁高は5cmで、縮まりのあるロームで垂直に立ち上がっており、床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。ピットやカマドは検出できなかった。

覆土は、全面にわたり攪乱を受けていて、堆積状況は不明である。

遺物は全く出土しなかったため、時期は不明である。

第43号住居跡 (第77図)

本跡は、D4a1区を中心に確認され、第53号住居跡の西側3.9mに位置している。本跡の東側で第40号住居跡、中央部で第41・42号住居跡、南西コーナー部で第45号住居跡と重複している。

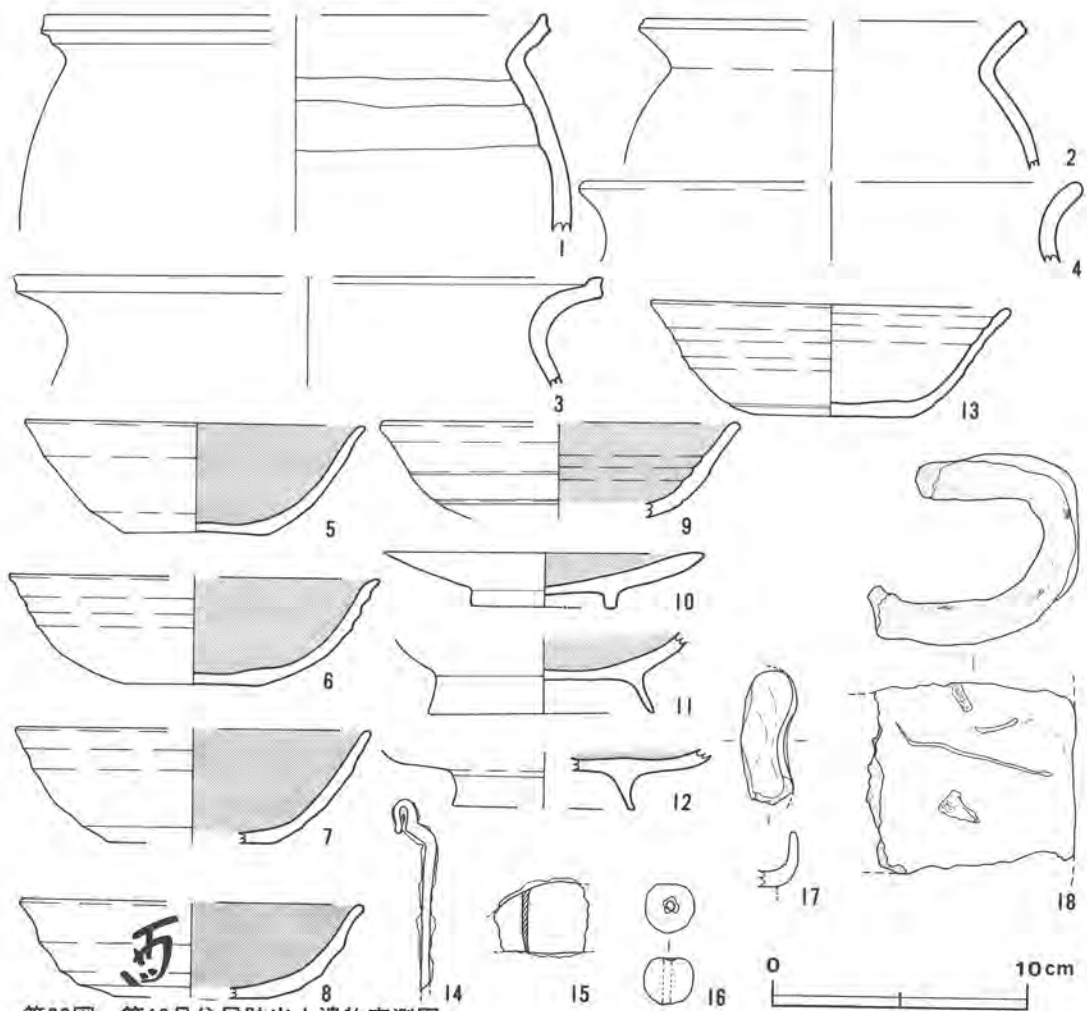
平面形は、長軸6.2m・短軸5.7mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-15°-Wを指している。壁高は25~40cmで、壁は縮まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、全面にわたってロームが非常に硬く踏み固められている。壁下には、カマドを除き、上幅20~30cm・深さ4~12cmの壁溝が周回している。カマドは北壁中央部に付設され、砂質粘土で構築されているが、攪乱を受けているため、袖部・天井部は崩れており、規模や平面形の詳細は不明である。調査した部分から推定すると、長さ165cm・幅150cm、壁外へ45cm掘り込んでいる。燃焼部は床面を18cmほど掘り込み、火床は熱を受けた焼土粒子・焼土小ブロックが攪乱のため散乱している。ピットはP₁~P₈の8か所検出され、P₁・P₂は長径63・53cm・短径60・35cm、深さは72・75cmの規模を有し、配置から支柱穴と思われる。P₃~P₆は各コーナー部に位置し、径は20~30cm、深さは24~34cmで補助柱穴と考えられる。また、P₇とP₈はカマドの反対側の南壁に位置し、径25~30cm・深さ43cmで、出入口施設に関するピットと思われる。その他検出したピットは、規模や配置から

本跡に伴うピットではないと思われる。

覆土は、ローム粒子多量、焼土粒子少量を含む暗褐色土を主体とし、下層では炭化物・粘土粒子も極少量含み、自然堆積を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって散在し、多量の土師器とともに、須恵器、鉄製品、土製品が出土している。これらの多くは破片で、床面から若干浮いた状態で出土しているものが多い。土師器は、中央部の床面直上から坏形土器3点（第80図6～8）・甕形土器の口縁部片3点（第80図1・3・4）・高台付皿形土器（第80図12），西壁中央部の壁際から正位で坏形土器（第80図5）・高台付皿形土器（第80図10）が出土している。また、中央部の床面直上から須恵器の坏（第80図13）・鎌（第80図15）が出土している。その他、カマドの燃烧部から支脚（第80図18）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第80図 第43号住居跡出土遺物実測図

第43号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第80図 1	甕形土器	A (19.5) B (8.5)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面横ナデ、外面横位の ヘラ削り。	砂粒 灰褐色 普通	P289 10%
	土 師 器					
2	甕形土器	A (15.3) B (5.8)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面横ナデ、外面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P290 5%
	土 師 器					
3	甕形土器	A (23.1) B (4.3)	口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 明褐色 普通	P291 5%
	土 師 器					
4	甕形土器	A (19.8) B (3.1)	口縁部は外反している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P292 5%
	土 師 器					
5	坏形土器	A 13.3 B 4.3 C 5.7	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P295 内面黒色処理 85%
	土 師 器					
6	坏形土器	A (14.6) B 4.3 C 5.5	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P297 内面黒色処理 40%
	土 師 器					
7	坏形土器	A (14.0) B 4.5 C (6.5)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P299 内面黒色処理 30%
	土 師 器					
8	坏形土器	A (13.5) B 3.7 C (6.0)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P300 体部内面墨書 「西」 内面墨色処理 25%
	土 師 器					
9	坏形土器	A (14.2) B (3.7)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 褐色 普通	P301 内面黒色処理 20%
	土 師 器					
10	高台付皿形土器	A 12.6 B 2.1 D 5.7 E 0.7	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P302 内面黒色処理 100%
	土 師 器					
11	高台付皿形土器	B (3.0) D 9.0 E 1.5	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部内面ヘラ磨き、外面回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P293 内面黒色処理 20%
	土 師 器					
12	高台付皿形土器	B (2.6) D (7.1) E 1.2	高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部内面ヘラ磨き、外面回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P294 内面黒色処理 30%
	土 師 器					
13	坏	A 14.1 B 4.4 C 6.2	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反している。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、不定方向の手持ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫・雲母 褐色・一部にぶい橙色 普通	P298 70%
	須 恵 器					

第43号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

図面番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第80図 14	不明(鉄製)	M 22	(7.6)	0.8	—	(5.3)	
15	鎌	M 23	(3.7)	3.1	0.5	(9.6)	
16	球状土錘	DP 31	1.9	1.9	—	6.8	孔径0.3cm, 橙色, 100%
17	耳 皿	DP 102	5.8	1.5	2.2	12.6	浅黄橙色
18	支 脚	DP 11	(7.6)	(8.3)	—	(268.3)	橙色

第44号住居跡 (第81図)

本跡は、D3b6区を中心に確認され、第43号住居跡の西側12m、第46号住居跡の東側13mに位置している。東壁で第62・169・179号土坑と重複しており、土層から判断すると、本跡はこれらの土坑に切られており、本跡の方が古い遺構である。

本跡の平面形は、重複とトレンチャーによる攪乱のため推定となるが、方形を呈し、北西壁の長さが6.7mで、主軸方向はN-33°-Wを指すものと思われる。壁の立ち上がりは攪乱のため検出できなかったが、上幅10~15cm・深さ5~10cmの壁溝が北東側を除いて周回している。床面はトレンチャーによって格子状に攪乱されているが、攪乱を受けてない所は締まりのあるロームで、特に中央付近は硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されていたと思われるが、トレンチャーによる攪乱がひどいため、カマドの痕跡として若干の焼土を残すのみである。ピットはP₁~P₄の4か所検出され、径は80cm、深さは25~70cmの規模を有し、配置からいずれも支柱穴と思われる。

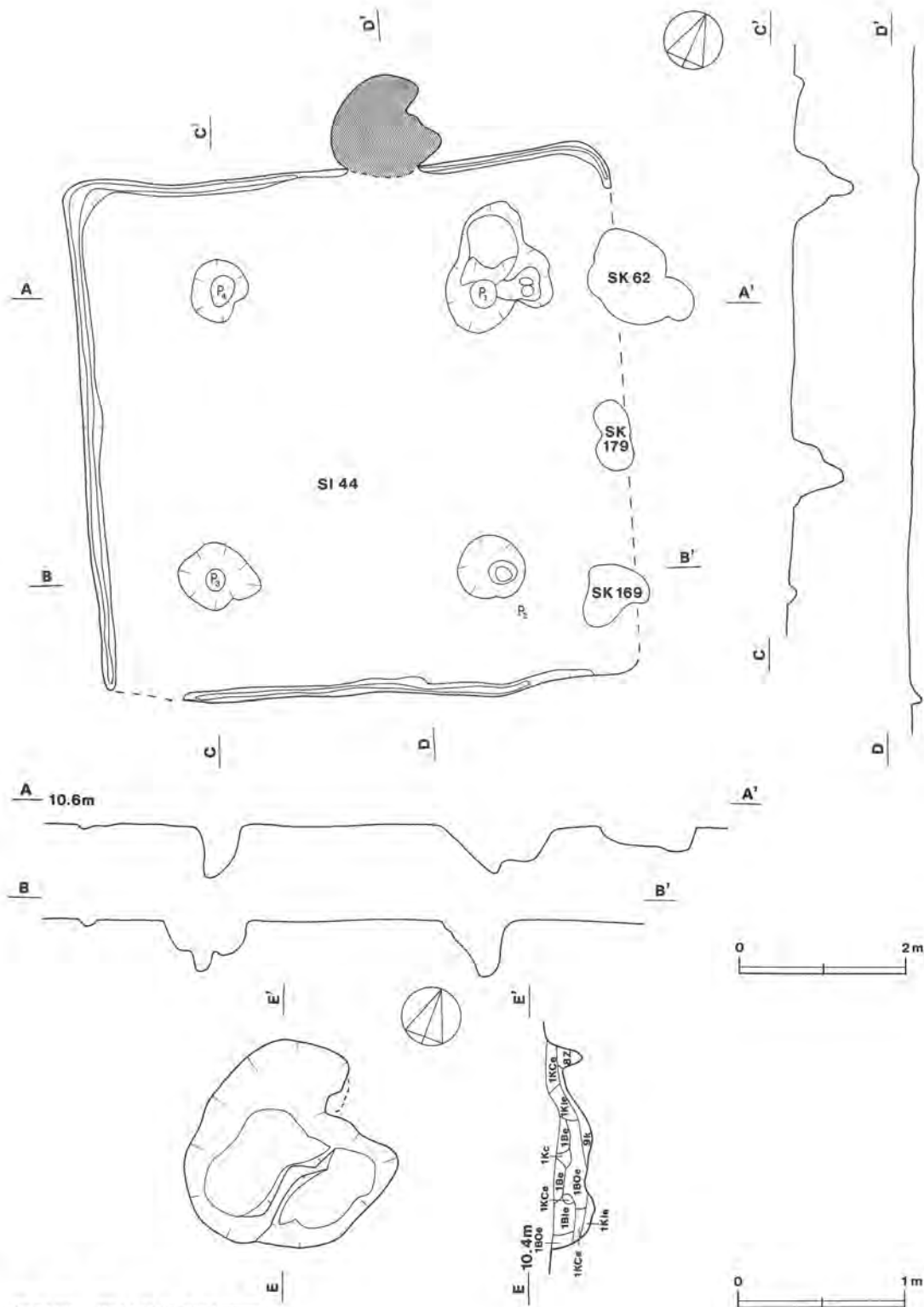
覆土は、攪乱されているため堆積状況は不明である。

遺物は、散在的に、ピット内や床面直上から僅かに土師質土器や土師器が出土している。P₁の覆土中から甕形土器 (第82図1)、P₂とP₃の覆土中から坏形土器2点 (第82図4・5)、P₄の覆土中から埴形土器 (第82図2)、中央部の床面直上から横位で土師質土器の皿 (第82図3) が出土している。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

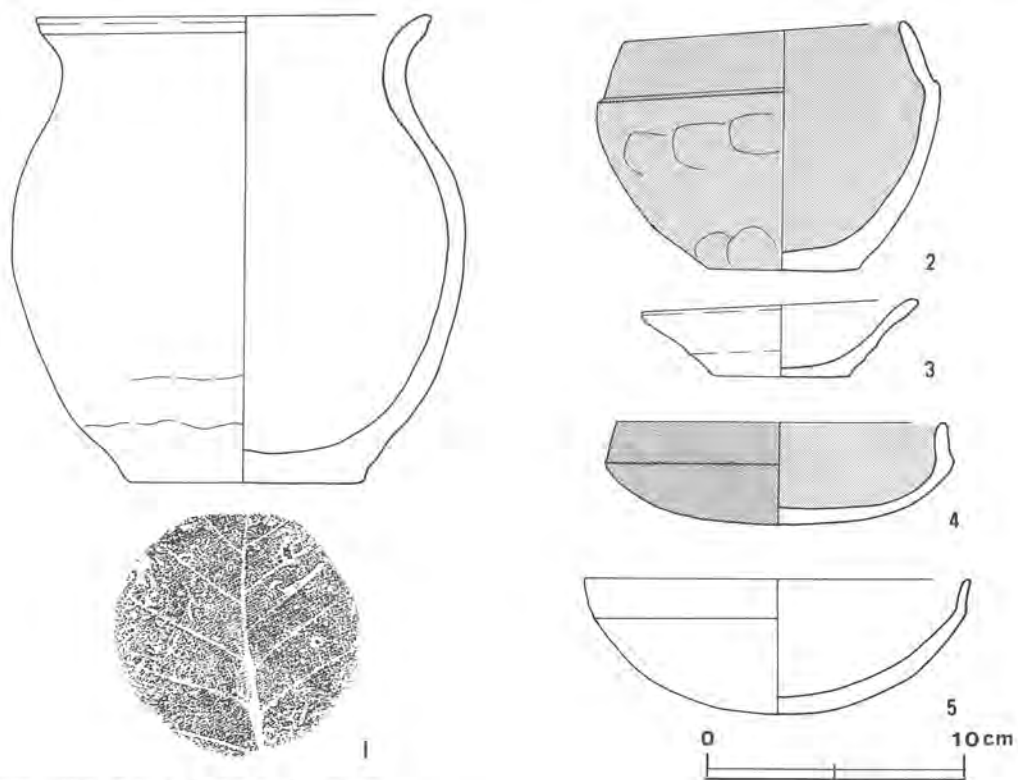
第44号住居跡出土土器観察表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第82図 1	甕形土器 土師器	A 15.5	底部は平底で、胴部は丸く張り、 口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P 303 底部木葉痕 100%
		B 18.5				
		C 9.5				
2	埴形土器 土師器	A 10.6	底部は平底で、体部は内彎しながら 外上方へ立ち上がり、口縁部は 内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横位 のへラ削り。	砂粒・礫 黒色 普通	P 304 内・外面黒色処理 95%
		B 9.4				
		C 5.6				



第01图 第44号住居跡実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	皿 土師質土器	A 10.9 B 3.2 C 5.3	底部は平底で、体部は外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P307 95%
4	坏形土器 土師器	A 12.8 B 4.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	砂粒 橙色 普通	P306 内・外面黒色処理 100%
5	坏形土器 土師器	A 15.0 B 5.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	砂粒 灰褐色 普通	P305 95%



第82図 第44号住居跡出土遺物実測図

第45号住居跡（第83図）

本跡は、D3b0区を中心に確認され、第44号住居跡の東側8.2m、第53号住居跡の西側9.4mに位置している。本跡の北東側で第43号住居跡、西側で第160号土坑と重複しており、本跡は第43号住居跡の南西壁コーナー上層に床を貼り、カマドを付設していることから、本跡の方が新しい遺構である。

本跡は、中央部から南側が道路にかかっているため、平面形や規模等の詳細は不明である。調査した部分から、北東コーナー部から北西コーナー部までの長さは3.15mで隅丸形を呈し、主軸方

向はN-2°-Eを指していると思われる。壁高は45cmで、壁は締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。上幅14cm・深さ8cmの壁溝が東壁・西壁下から検出された。床面は全体的に平坦で、北東コーナーから北壁にかけて第43号住居跡と重複しているため、ローム粒子・焼土粒子・砂質粘土を混ぜた暗褐色土で床を貼り、硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部・袖部の一部が崩れているが、袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。内側は熱を受けて焼土化し、一部炭化材も検出されている。調査した部分は、長さ130cm・幅110cm、壁外へ50cm掘り込んでいる。燃焼部は床面を11cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。ピットは検出できなかった。

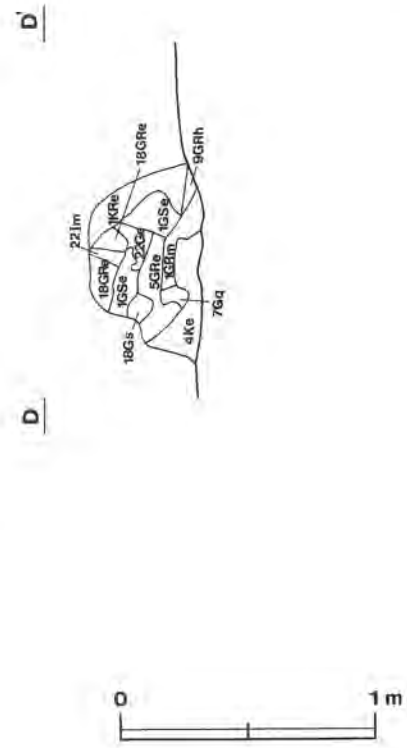
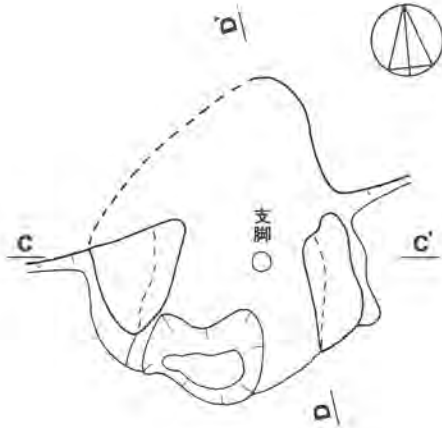
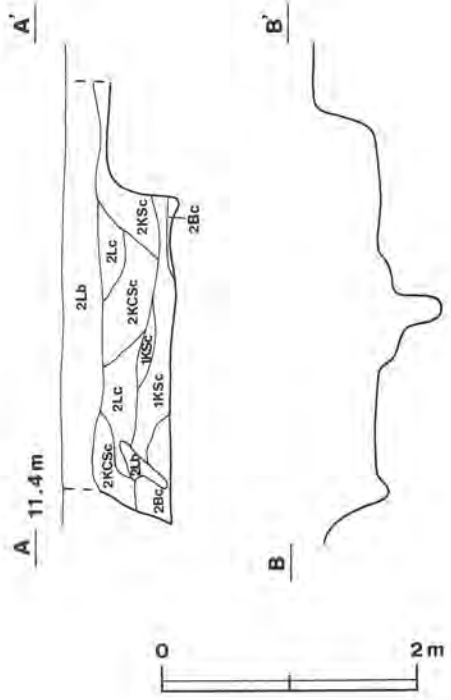
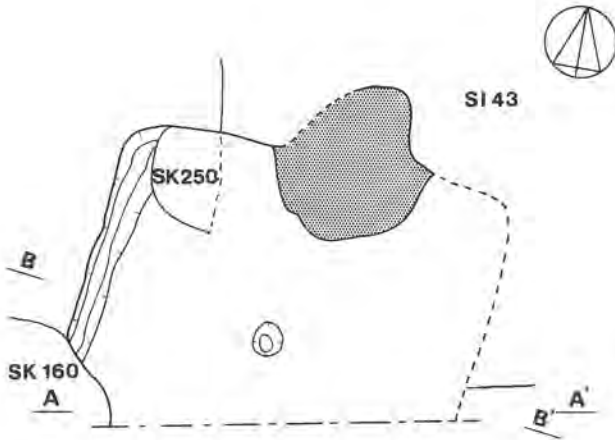
覆土は、上層にローム粒子中量、焼土粒子・炭化物粒子少量を含む暗褐色土、下層にはローム粒子・木炭小ブロック多量、焼土粒子少量を含む黒褐色土が堆積しており、本跡は火災に遭い廃棄されたと思われる。

遺物は、カマド周辺を中心に散在し、土師器を主として、須恵器、石製品、土製品、鉄製品が出土している。土師器は、東壁中央部壁際から横位で甕形土器(第84図1)、カマドの手前と北西コーナー部の床面直上から坏形土器3点(第84図3・4・11)、カマドの覆土中から甕形土器3点(第84図7～9)・高台付坏形土器(第84図5)が出土し、また、同所から正位で支脚(第84図12)が出土している。その他、カマドの手前の床面直上から球状土錘(第84図13)が出土し、東壁中央部の床面直上から石製の紡錘車(第84図14)と、北西コーナー部の床面直上から横刀(第85図15)が出土している。須恵器も出土しているが、破片ばかりでまとまったものにはならなかった。

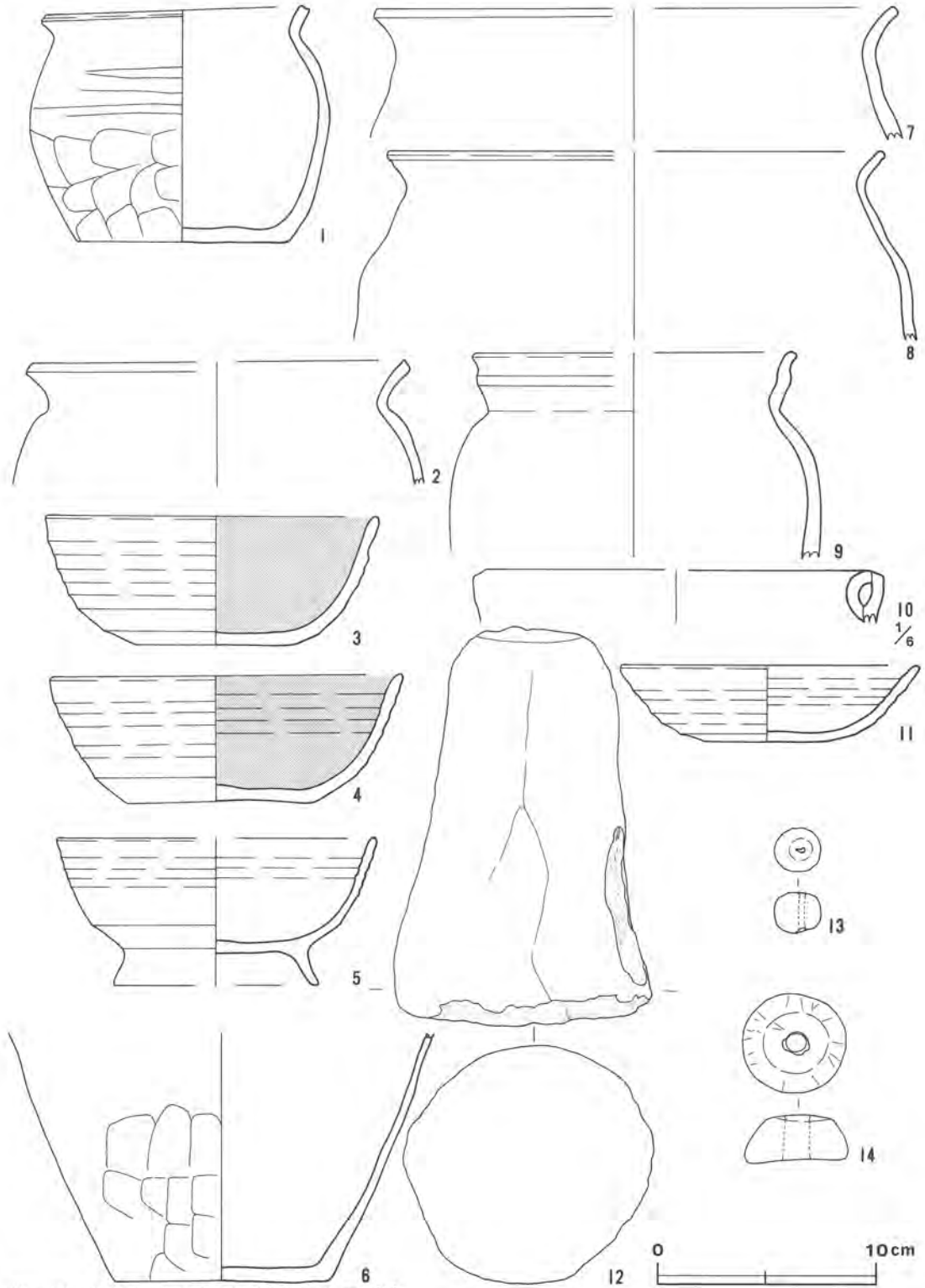
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第45号住居跡出土土器観察表

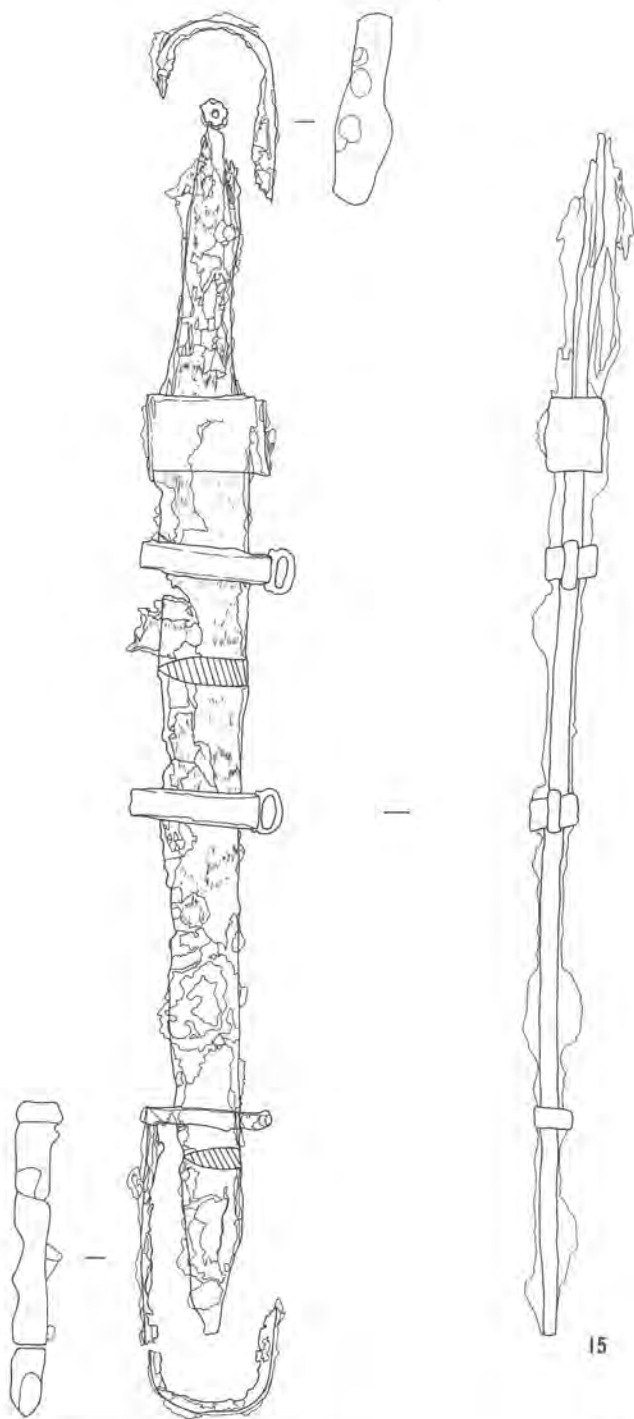
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	甕形土器 土師器	A 12.5	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、胴部中位から内傾する。口縁部は外反しながら外上方に開き、短い。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面横ナデ、外面中位から下端にかけて横位のヘラ削り、上位は横ナデ。	砂粒・礫 明赤褐色、内面赤 黒色 普通	P308 100%
		B 10.5				
		C 9.5				
2	甕形土器 土師器	A (17.4)	口縁部は「く」の字状に開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面横ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 灰褐色 普通	P312 5%
		B (5.7)				
3	坏形土器 土師器	A 15.6	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。 下端回転ヘラ削り。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	P315 内面黒色処理 50%
		B 6.0				
		C 7.5				
4	坏形土器 土師器	A (16.5)	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。 下端回転ヘラ削り。	砂粒 ぶい橙色 普通	P316 内面黒色処理 40%
		B 6.0				
		C 8.5				



第83图 第45号住居跡実測图



第84图 第45号住居跡出土遺物実測図(1)



第85図 第45号住居跡出土遺物実測図(2)

0 10 cm

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	高台付坏形土器 土師器	A (15.0) B 6.9 D (9.5) E 1.5	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	体部内面へラ磨き、下端回転へラ削り、外面横ナデ。高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P314 70%
6	甕形土器 土師器	B (11.7) C 10.0	底部は平底で、胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部内面へラナデ、外面中位縦位のへラ削り、下端横位のへラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色・黒色 普通	P313 20%
7	甕形土器 土師器	A (24.3) B (6.2)	口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P311 5%
8	甕形土器 土師器	A (23.0) B (8.8)	口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P309 10%
9	甕形土器 土師器	A (15.0) B (9.6)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫 にぶい黄橙色・一部黒褐色 普通	P310 20%
10	内耳形土器 土師質土器	A (38.0) B (4.8)	口縁部は内彎気味に直立する。口縁端部は面をなす。内面の口縁部に内耳が1か所付されている。	口縁部内・外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P319 5%
11	坏形土器 土師器	A 13.8 B 3.5 C 5.6	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は僅かに外反して端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転系切り。 体部内面へラ磨き、外面下端手持ちへラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P318 40%

第45号住居跡出土土製品・石製品・鉄製品解説表

図面番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第84図 12	支脚	D P 12	(18.8)	12.0	—	(1995.3)	にぶい黄橙色
13	球状土錘	D P 32	1.9	3.0	—	7.7	孔径0.3cm, 橙色, 100%
14	紡錘車	Q 40	—	4.7	2.3	72.1	孔径1.2cm, 滑石, 黒褐色, 100%
第85図 15	横刀	M 47	全長 64.0 刀長 33.8	3.5	0.7	刀身 502.2	足金物の佩き表に線刻あり(花カ)

第46号住居跡 (第86図)

本跡は、D3c2区を中心に確認され、第44号住居跡の西側13m、第47号住居跡の東側3.0mに位置している。本跡の南東側で第3号井戸と重複している。本跡は第3号井戸に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、南側が道路にかかっているため、調査した部分から北壁の長さは6.3mで、北東・北西コーナーは隅丸形を呈し、主軸方向はN-16°-Wを指すものと思われる。壁は耕作によるトラクタのため攪乱されているが、残存する壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は北壁から西壁にかけて60cm、東壁は55cmである。壁下には、上幅10~30cm・深さ10~15cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は全体的に砂質粘土・焼土・炭化物等が混じりあった暗褐色土で覆われていたが、特にピットに囲まれた内側は、ロームがよく踏み固められて非

常に硬く、多少凹凸がみられる。カマドは北壁中央部に付設されていた。天井部・袖部の一部はトレンチャー等による攪乱を受けて崩壊しているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。調査した部分の長さは200cm、幅は140cm、壁外へ120cm掘り込んでいる。燃焼部は床面を3cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、径は75cm、深さは60～100cmの規模で、配置からいずれも支柱穴と思われる。

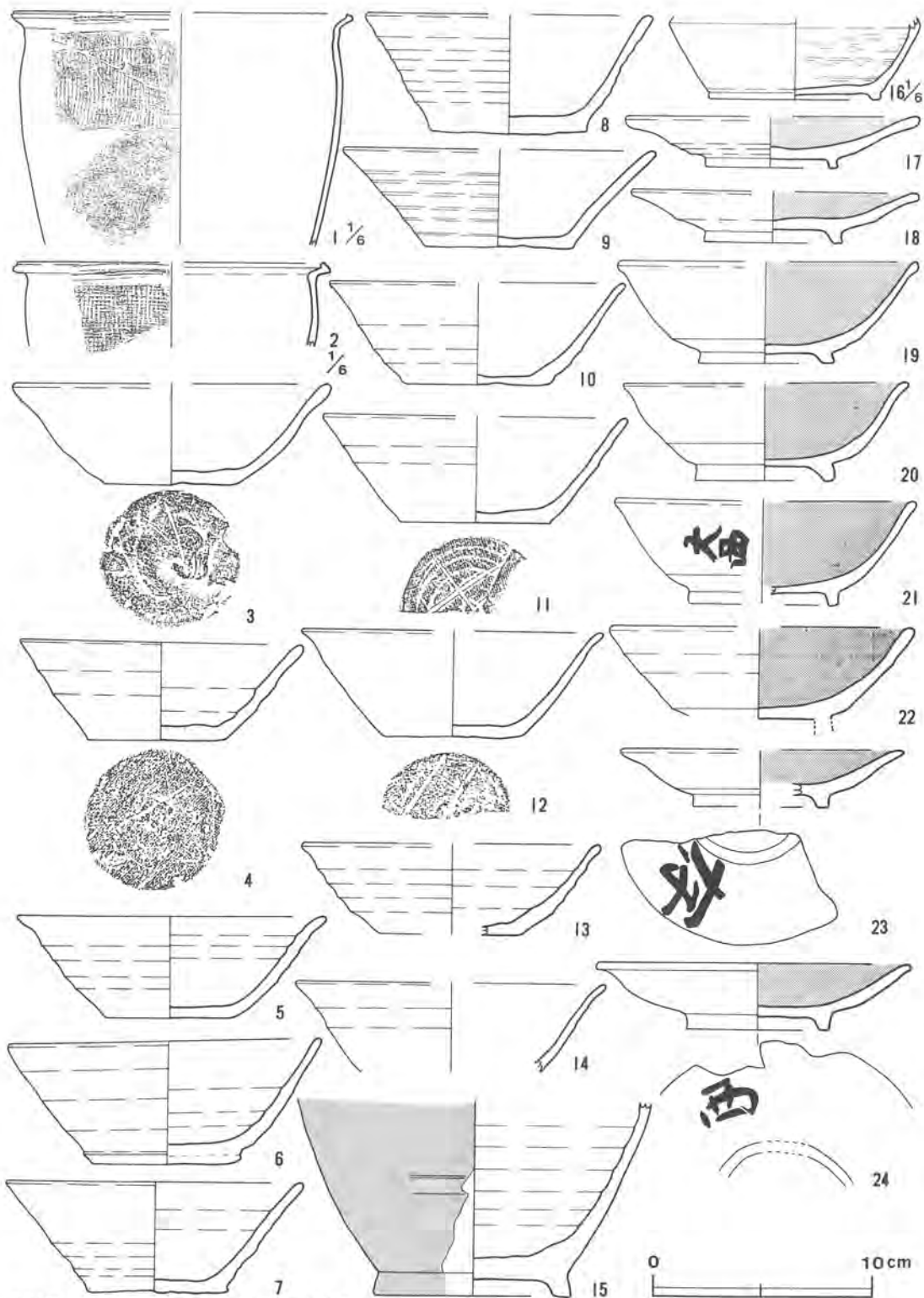
覆土は、トレンチャーによる攪乱を受けているため、上層の堆積状況は不明である。下層は焼土粒子・ローム粒子多量、炭化粒子少量を含む黒褐色土が堆積しており、本跡は火災に遭い廃棄されたと思われる。

遺物は、本跡全域にわたって、多量の土師器や須恵器、鉄製品、土製品が出土している。土器は破片となっているものが多く、覆土下層に集中している。土師器は、カマド周辺から中央部にかけての床面直上から坏形土器4点（第88図30～32・34）・伏せた状態で高台付皿形土器2点（第87図17）・（第88図36）・高台付坏形土器（第87図19）が出土し、北東コーナー部の床面直上からも坏形土器（第88図30）・甕形土器（第88図29）が出土している。須恵器は、カマドの手前から中央部にかけての床面直上から坏5点（第87図4～8）が出土し、同所から陶器の台付長頸壺（第87図15）や球状土錘5点（第88図42～46）も出土している。その他、中央部付近を中心とする覆土下層から土師器の甕形土器（第88図33）・甕形土器の口縁部片（第88図25）・高台付坏形土器（第87図22）や須恵器の坏（第87図13）とともに、鎌（第88図40）・釘2本（第88図38・39）が出土している。また、カマドの覆土中から甕形土器3点（第88図26～28）も出土している。

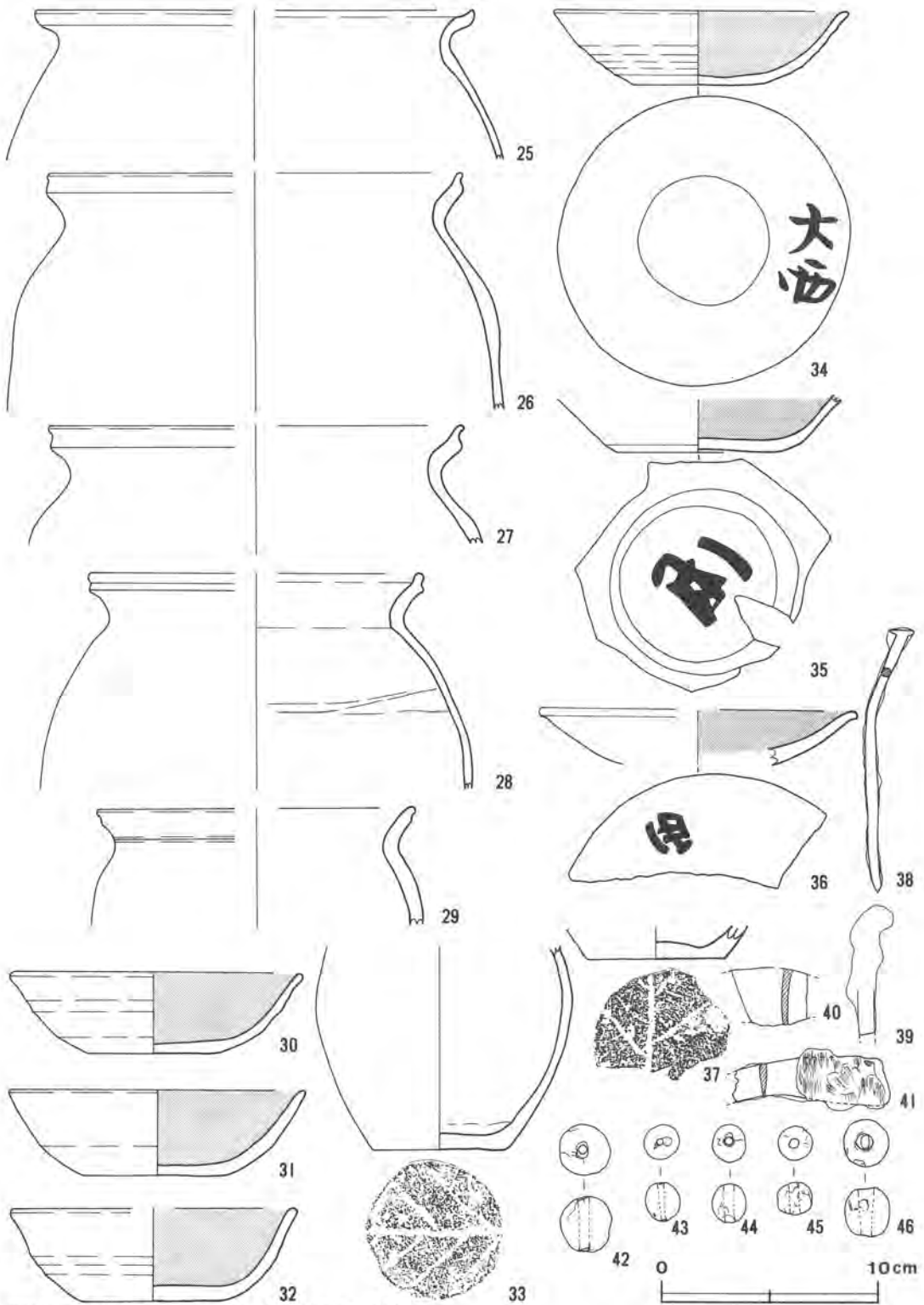
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第46号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

図面番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第88図 38	釘	M 24	(12.1)	0.5	—	(13.3)	
39	釘	M 25	(6.0)	1.2	—	(15.5)	
40	鎌	M 26	(3.6)	2.5	0.3	(11.1)	
41	鎌	M 27	(7.3)	2.9	0.5	(22.6)	
42	球状土錘	DP 33	2.6	2.4	—	13.9	孔径0.5cm, におい 橙色, 100%
43	球状土錘	DP 34	1.8	1.6	—	4.6	孔径0.35cm, 橙色, 100%
44	球状土錘	DP 35	1.8	17.5	—	4.7	孔径0.5cm, におい 橙色, 100%
45	球状土錘	DP 36	1.5	1.6	—	3.6	孔径0.5cm, におい 黄橙色, 100%
46	球状土錘	DP 37	2.3	2.1	—	10.5	孔径0.8cm, 橙色, 100%



第87图 第46号住居跡出土遺物実測図(1)



第88図 第46号住居跡出土遺物実測図(2)

第46号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第87号 1	甕	A (31.5)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦位の平行叩き、下端へラ削り。	砂粒・礫・雲母にぶい橙色普通	P 320
	須恵器	B (21.7)				30%
2	甕	A (28.3)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は横に短く開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面格子の叩き。	砂粒・礫・雲母にぶい橙色普通	P 321
	須恵器	B (7.9)				20%
3	坏	A (14.9)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。底部回転へラ切り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰褐色 普通	P 339
		B 4.7				45%
		C 6.4				
4	坏	A 12.2	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部回転へラ切り後、ナデ。ロクロ回転方向右。	砂礫 灰褐色 普通	P 350
		B 4.6				70%
		C 6.3				
5	坏	A 14.4	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部回転へラ切り後、不定方向の手持ちへラ削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・砂礫 褐灰色 普通	P 351
		B 4.8				100%
		C 6.0				
6	坏	A 14.4	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部回転へラ切り後、不定方向の手持ちへラ削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 灰色 普通	P 352
		B 6.0				80%
		C 6.9				
7	坏	A 13.9	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部回転へラ切り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P 353
		B 5.1				100%
		C 6.6				
8	坏	A (13.3)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部回転へラ切り。体部内・外面横ナデ。	細砂・礫 褐灰色 普通	P 354
		B 5.5				60%
		C 7.0				
9	坏	A (14.2)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部回転へラ切り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰オリブ色 普通	P 355
		B 4.6				45%
		C 6.8				
10	坏	A (13.6)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。底部回転へラ切り後、不定方向の手持ちへラ削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 暗灰褐色 普通	P 356
		B 4.8				30%
		C 6.6				
11	坏	A (14.1)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部回転へラ切り。体部内・外面横ナデ。	細砂 褐灰色 普通	P 357
		B 5.0				20%
		C 6.9				
12	坏	A (14.0)	底部は平底で、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。底部回転へラ切り後、手持ちへラ削り。体部内・外面横ナデ。	細砂・礫 灰色 普通	P 358
		B 5.0				40%
		C 6.4				
13	坏	A (13.9)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。口縁端部は丸い。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて回転へラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂礫 黄灰色 普通	P 359
		B 4.3				30%
		C (6.5)				
14	坏	A (14.4)	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄褐色 普通	P 360
		B (4.2)				15%

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
15	台付長頸壺 陶 器	B (9.1) D 9.2 E 0.8	高台は外下方へのびる。胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。胴部中位から口縁部にかけては欠損している。	水挽き成形。 底部から胴部外面下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。	砂礫 灰白色・オリーブ・灰色 普通	P 348 胴部外面に自然釉が見られる。 40%
16	台付長頸壺 須 恵 器	B (7.6) D (15.6) E 0.6	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。胴部内面横ナデ、外面ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P 349 20%
17	高台付皿形土器 土 師 器	A (13.6) B 2.4 D 6.0 E 0.4	底部は平底で、体部は外反しながら大きく開いて立ち上がる。高台は短く外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P 343 内面黒色処理 60%
18	高台付皿形土器 土 師 器	A (13.2) B 2.4 D 6.2 E 0.5	底部は平底で、体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は僅かに外反する。高台は短く外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P 344 内面黒色処理 50%
19	高台付环形土器 土 師 器	A (13.6) B 4.7 D 6.1 E 0.5	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は短く外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P 329 内面黒色処理 45%
20	高台付环形土器 土 師 器	A (13.1) B 4.6 D 6.3 E 0.8	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は短く外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P 330 内面黒色処理 60%
21	高台付环形土器 土 師 器	A (7.8) B 4.9 D (6.8) E 0.6	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は丸い。高台は短く外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫・スコリア 橙色 普通	P 331 体部外面墨書「大西」 内面黒色処理 45%
22	高台付环形土器 土 師 器	A (14.2) B 4.3	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸い。高台欠損。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい橙色 普通	P 332 内面黒色処理 60%
23	高台付皿形土器 土 師 器	A (13.0) B 2.7 D (6.2) E 0.6	底部は平底で、体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は外反する。高台は短く外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい橙色 普通	P 346 体部外面墨書「存」 内面黒色処理 20%
24	高台付皿形土器 土 師 器	A 14.5 B 3.1 D 6.5 E 0.8	底部は平底で、体部は内彎気味に大きく開き、口縁部は僅かに外反する。高台は短く外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P 345 体部外面墨書「西」 内面黒色処理 95%
第88図 25	甕形土器 土 師 器	A (20.3) B (6.9)	口縁部は外反して立ち上がり、口縁部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面へラ削り。	砂粒・雲母・礫 浅黄橙色 普通	P 322 10%
26	甕形土器 土 師 器	A (19.3) B (11.0)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面へラナデ後、雑な斜位のへラ磨き。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P 325 10%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
27	甕形土器 土師器	A (19.2) B (5.5)	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P 324 5%
28	甕形土器 土師器	A (15.2) B (10.0)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 323 20%
29	甕形土器 土師器	A (14.7) B (5.5)	丸く張った胴部から口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 326 5%
30	環形土器 土師器	A 13.6 B 3.7 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P 335 内面黒色処理 95%
31	環形土器 土師器	A 13.6 B 4.0 C 7.1	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 336 内面黒色処理 100%
32	環形土器 土師器	A (13.0) B 4.3 C 6.6	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・スコリア・ 礫 橙色 普通	P 338 内面黒色処理 60%
33	甕形土器 土師器	B (9.5) C 6.1	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、上位から内傾する。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色・一部 分黒褐色 普通	P 327 底部木葉痕 35%
34	環形土器 土師器	A 13.6 B 3.3 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 橙色 普通	P 337 体部外面墨書 「大西」 内面黒色処理 100%
35	環形土器 土師器	B (2.4) C 7.5	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P 342 底部外面墨書 「西」 内面黒色処理 30%
36	高台付皿形土器 土師器	A (14.7)	体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は丸い。	体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	細砂 にぶい橙色 普通	P 347 10% 体部外面墨書 「西」 内面黒色処理
37	甕形土器 土師器	B (1.5) C (6.4)	底部は平底で、胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫・石英 灰褐色 普通	P 328 底部木葉痕 5%

第47号住居跡（第89図）

本跡は、D2c0区を中心に確認され、第46号住居跡の北西側3mに位置している。本跡の西側は第49・51号住居跡と重複している。土層断面や出土遺物を検討した結果、本跡の方が新しい遺構である。

本跡は、重複やトレンチャーによる攪乱を受けているため、平面形の詳細は不明である。調査した部分から北東・南東コーナーは隅丸形を呈し、残存している東壁の長さは4mで、主軸方向はN-15°-Wを指していると思われる。壁は重複やトレンチャーの攪乱を受けて消失した部分もある。

るが、他は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はトレンチャーによる攪乱を受けているところと重複しているところを除いてはロームで、特にカマドの手前からピットの内側はよく踏み固められて非常に硬く、多少凹凸がみられる。カマドは北壁中央部に付設され、砂質粘土で構築されているが、トレンチャーによる攪乱を受けて、天井部・袖部は崩壊しており、規模や平面形の詳細は不明である。調査した部分からみると、長さ115cm・幅100cm、壁外へ75cm掘り込んでいる。ピットはP₁～P₃の3か所検出され、径は45～55cm、深さは25～40cmの規模で、配置からいずれも支柱穴と思われる。

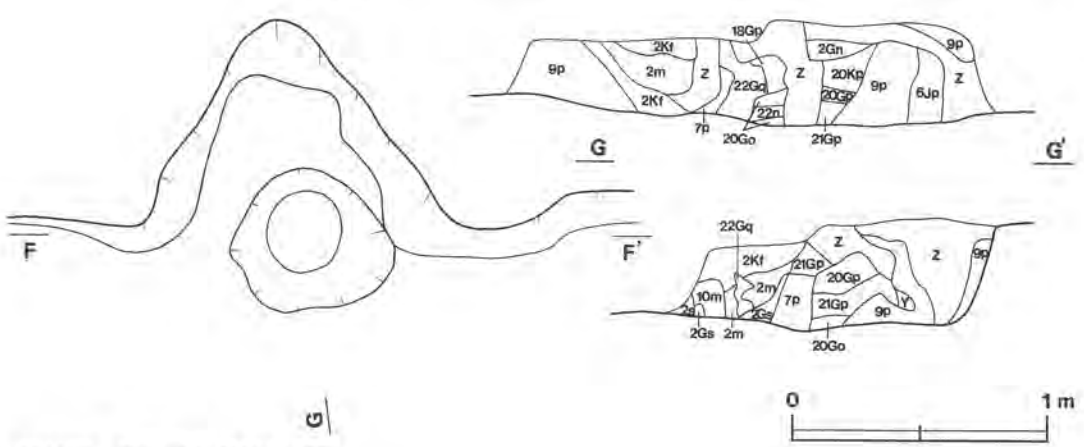
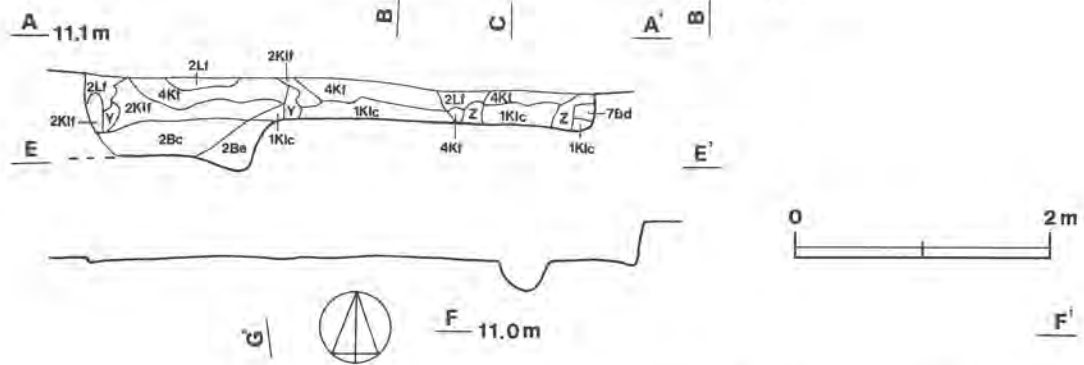
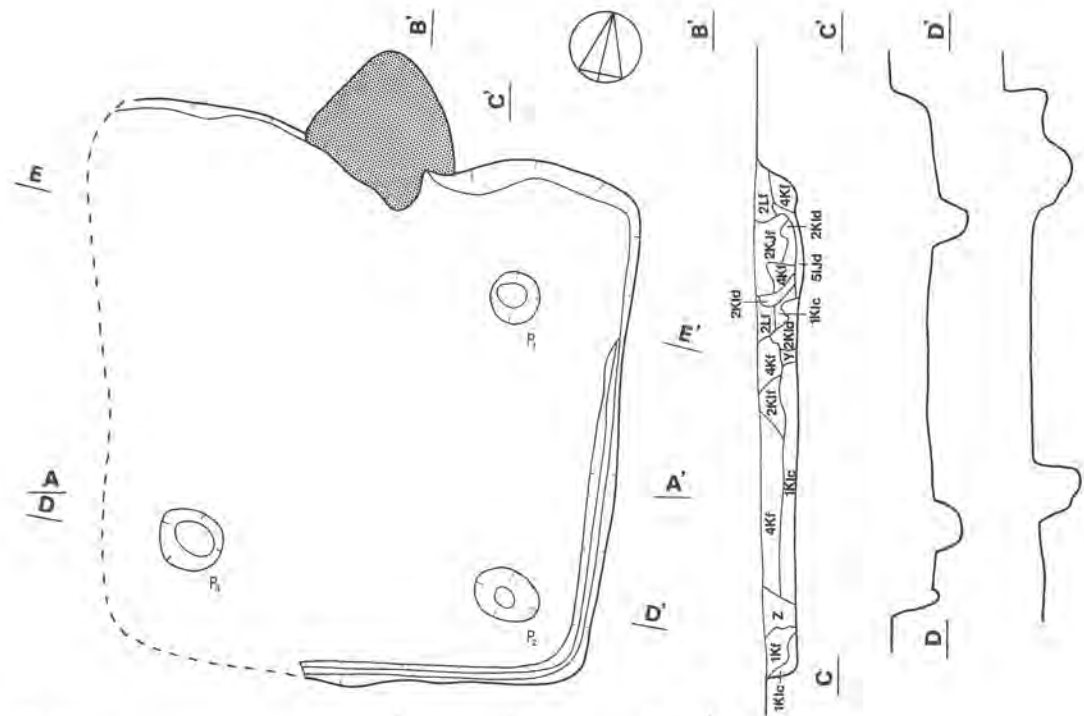
覆土は、攪乱のため堆積状況は不明で、ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・炭化粒子が多量に混じり、軟らかい状態である。

遺物は、本跡全域の覆土中から土師器を主として、須恵器、鉄製品、弥生式土器片が出土している。土器の多くは破片で、散在して出土している。土師器は、カマドの手前から中央部にかけたの床面直上から坏形土器（第90図3）・高台付皿形土器（第90図2）・鉢形土器（第90図1）が出土しており、また、同所から須恵器の坏（第90図5）が出土している。その他、中央部の覆土下層から鎌（第90図8）・鉄鏝（第90図7）が出土している。弥生式土器片は、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第47号住居跡出土土器観察表

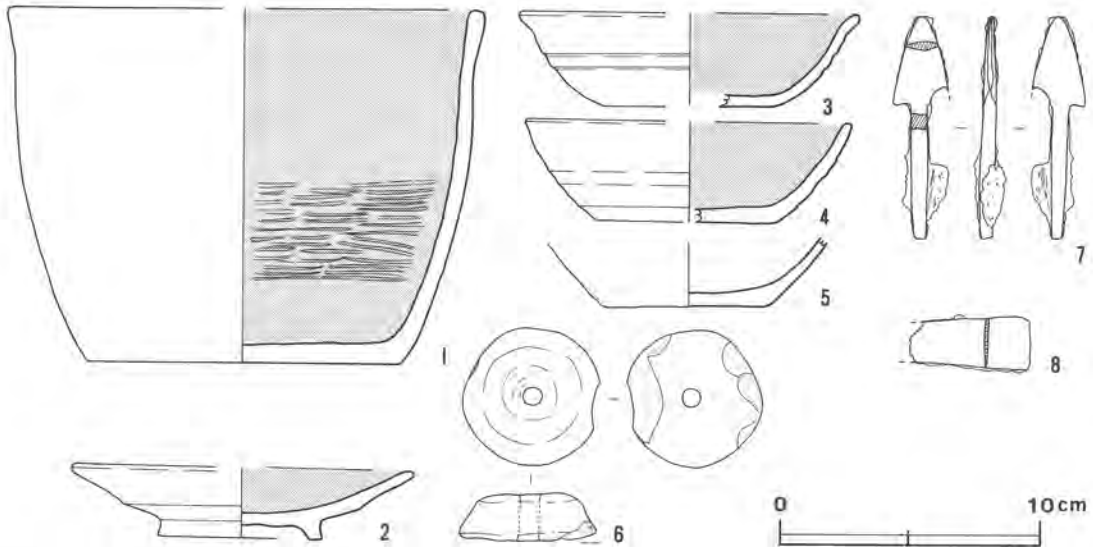
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	鉢形土器 土師器	A (18.6) B 14.0 C 12.3	底部は平底で、胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内面へラ磨き、外面横ナデ。胴部内面へラ磨き、外面ナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P361 内面黒色処理 65%
2	高台付皿形土器 土師器	A (13.5) B 2.8 D (6.4) E 0.8	体部外上方に大きく開き、口縁端部は丸くおさめている。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に外下方にのびる。	底部から体部下端にかけて回転へラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P365 内面黒色処理 35%
3	坏形土器 土師器	A (13.0) B 3.7 C (6.6)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P362 内面黒色処理 20%
4	坏形土器 土師器	A (12.8) B 4.0 C (7.0)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂・雲母 褐灰色 普通	P363 内面黒色処理 15%
5	坏 須恵器	B (2.5) C 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転へラ切り後、不定方向の手持ちへラ削り。 クロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 灰黄褐色 普通	P364 15%



第89图 第47号住居跡実測図

第47号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

図面番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第90図 6	紡 錘 車	D P 98	—	5.4	2.0	(49.8)	孔径0.8cm, 橙色, 95%
7	鉄 鍬	M 28	(8.8)	2.1	1.2	(12.9)	
8	鎌	M 29	(4.7)	2.2	0.4	(8.4)	



第90図 第47号住居跡出土遺物実測図

第48号住居跡 (第92図)

本跡は、D2c9区を中心に確認され、第46号住居跡の北西側8.4mに位置している。本跡の南東側で第49号住居跡、東側で第51号住居跡と重複している。土層断面や出土遺物を検討した結果、本跡は最も古い遺構である。

本跡は、前述したように第49・51号住居跡と重複しているため、調査した部分からの推定で、西壁の長さ3.7m、北西・南西コーナーは隅丸形を呈し、主軸方向はN-8°-Wを指すものと思われる。壁はトレンチャーによる部分的な攪乱や重複のため、南西コーナーから北西コーナーにかけてしか検出できず、壁高は40cmで、縮まりあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はトレンチャーによって格子状に切られているが、残存している床面はロームで、特に中央部はよく踏み固められて非常に硬く平坦である。カマドは北壁中央部に付設されていたと思われるが、天井部・袖部はトレンチャー等の攪乱のため山砂・焼土粒子が残っていただけで、調査した部分から推定すると、長さ95cm・幅90cm、壁外へ55cm掘り込んでいる。燃烧部は床面を7cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁～P₃の3か所検出され、径は40～45cm、深さは30～47cmの規模を有し、配置からいずれも主柱穴と思われる。

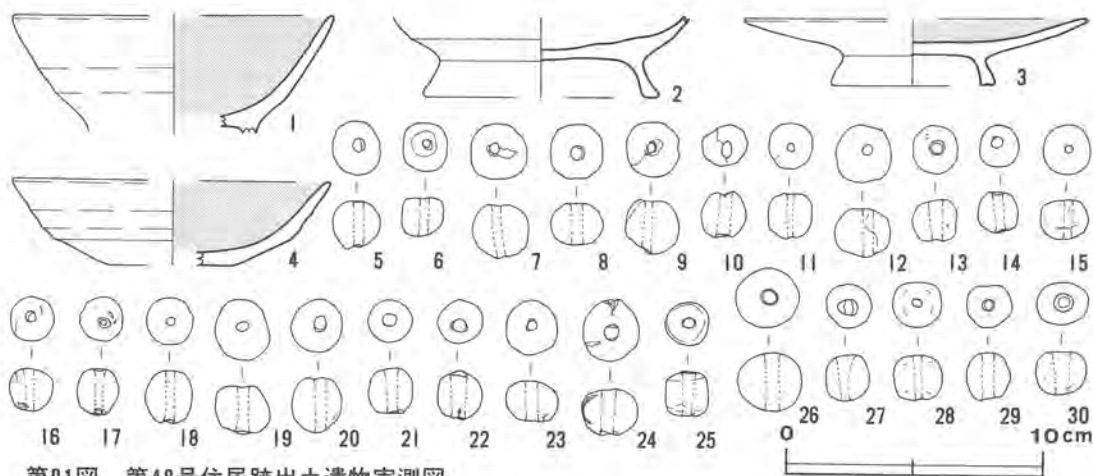
覆土は、全面にわたり、攪乱を受けて堆積状況は不明で、多量のローム粒子と少量の焼土粒子・炭化粒子が混じり、軟らかい状態である。

遺物は、本跡全域にわたって散在し、土師器といっしょに、須恵器、多数の球状土錘、鉄片、弥生式土器片が出土している。いずれの土器も破片が多く、覆土下層に集中している。土師器は、カマドの手前の床面直上から高台付坏形土器（第91図1）が出土し、また、カマドの覆土中からも高台付坏形土器（第91図2）が出土している。その他、中央部の覆土下層から球状土錘26点（第91図5～30）が出土している。須恵器も出土しているが、すべて破片で、まとまった器形は見られなかった。弥生式土器片は、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

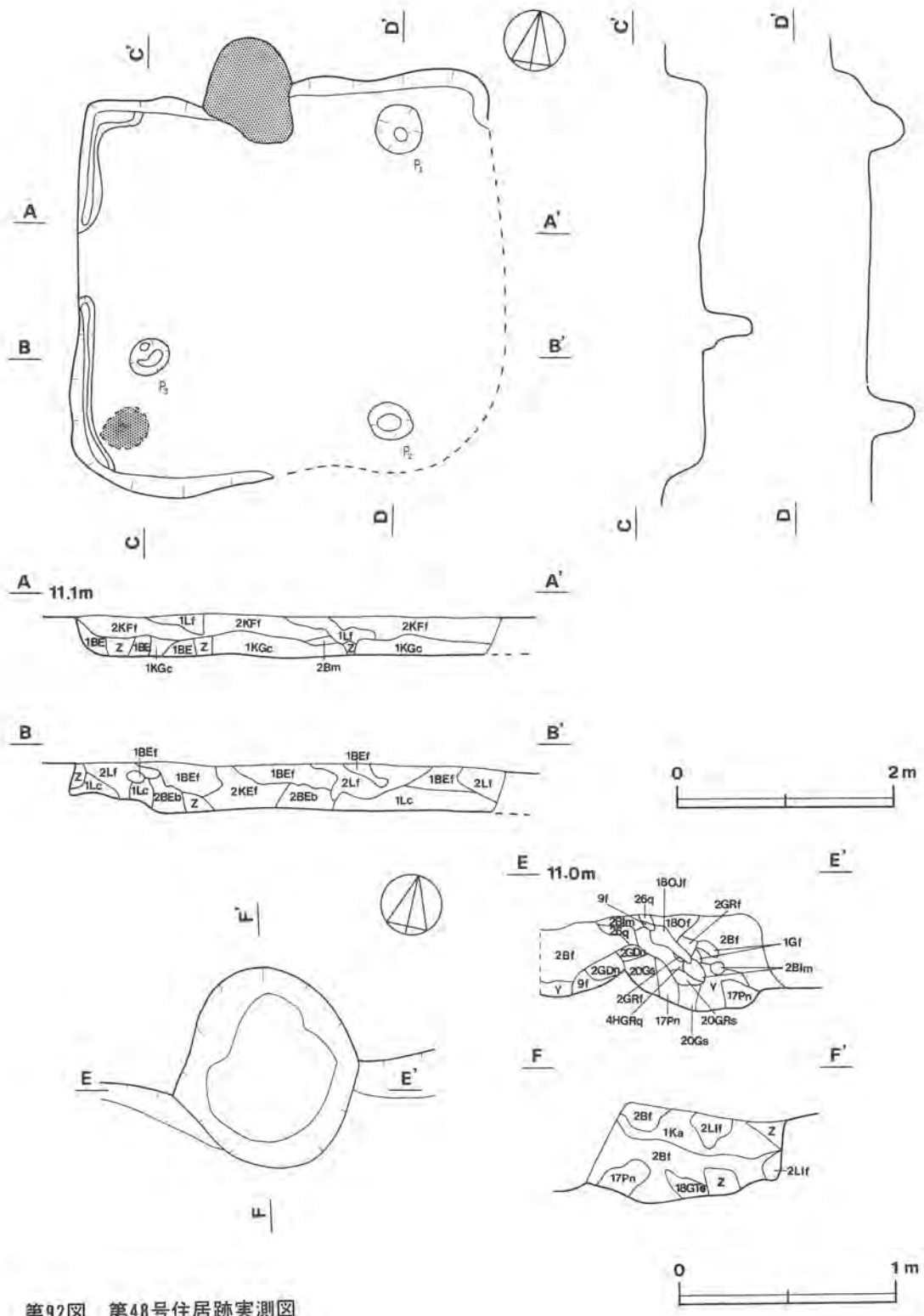
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第48号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 1	高台付坏形土器 土師器	A (12.6) B (4.7)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい褐色 普通	P366 内面黒色処理 15%
2	高台付坏形土器 土師器	A (3.2) D (9.0) E 1.4	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P369 30%
3	高台付皿形土器 土師器	A (13.2) B 2.7 D 6.4 E 1.2	体部は外上方に大きく開き、口縁端部を丸くおさめている。高台は貼り付いで、「ハ」の字状に外下方にのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 褐色 普通	P368 内面黒色処理 40%
4	坏形土器 土師器	A (12.5) B 3.3 C (4.7)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのび、端部は丸くおさめている。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい黄褐色 普通	P367 内面黒色処理 30%



第91図 第48号住居跡出土遺物実測図



第92图 第48号住居跡実測图

第48号住居跡出土土製品解説表

図面番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第91図 5	球状土錘	DP38	1.9	2.2	—	6.8	孔径0.5cm, 灰褐色, 100%
6	球状土錘	DP39	1.6	1.7	—	5.2	孔径0.4cm, 浅黄橙色, 100%
7	球状土錘	DP40	2.1	2.2	—	10.0	孔径0.4cm, 橙色, 100%
8	球状土錘	DP41	1.6	2.1	—	6.9	孔径0.5cm, 灰黄色, 100%
9	球状土錘	DP42	2.2	2.2	—	9.3	孔径0.4cm, 明褐灰色, 100%
10	球状土錘	DP43	1.8	1.8	—	4.7	孔径0.4cm, 橙色, 100%
11	球状土錘	DP44	1.8	1.8	—	5.6	孔径0.3cm, にぶい橙色, 100%
12	球状土錘	DP45	1.9	2.3	—	9.6	孔径0.4cm, 褐灰色, 100%
13	球状土錘	DP46	1.7	1.9	—	5.3	孔径0.6cm, にぶい橙色, 100%
14	球状土錘	DP47	1.6	1.7	—	3.4	孔径0.5cm, にぶい橙色, 100%
15	球状土錘	DP48	1.5	2.0	—	5.5	孔径0.3cm, にぶい橙色, 100%
16	球状土錘	DP49	1.7	1.8	—	4.7	孔径0.4cm, 浅黄橙色, 100%
17	球状土錘	DP50	1.9	1.8	—	5.1	孔径0.5cm, 浅黄橙色, 100%
18	球状土錘	DP51	2.1	1.9	—	6.9	孔径0.3cm, にぶい橙色, 100%
19	球状土錘	DP52	1.9	2.4	—	9.9	孔径0.5cm, 浅黄橙色, 100%
20	球状土錘	DP53	2.2	2.2	—	8.3	孔径0.5cm, にぶい橙色, 100%
21	球状土錘	DP54	1.8	1.8	—	5.1	孔径0.5cm, にぶい橙色, 100%
22	球状土錘	DP55	2.0	1.8	—	4.9	孔径0.7cm, にぶい橙色, 100%
23	球状土錘	DP56	1.6	2.2	—	6.9	孔径0.4cm, 灰褐色, 100%
24	球状土錘	DP57	1.9	2.5	—	8.8	孔径0.6cm, 橙色, 100%
25	球状土錘	DP58	1.8	1.7	—	4.9	孔径0.5cm, にぶい橙色, 100%
26	球状土錘	DP59	2.3	2.4	—	10.9	孔径0.6cm, 灰褐色, 100%
27	球状土錘	DP60	1.8	1.8	—	4.2	孔径0.4~0.8cm, 橙色, 100%
28	球状土錘	DP61	1.8	1.9	—	6.2	孔径0.4cm, 橙色, 100%
29	球状土錘	DP62	1.8	1.8	—	4.4	孔径0.5cm, 橙色, 100%
30	球状土錘	DP63	1.7	1.9	—	4.8	孔径0.6cm, にぶい黄橙色, 100%

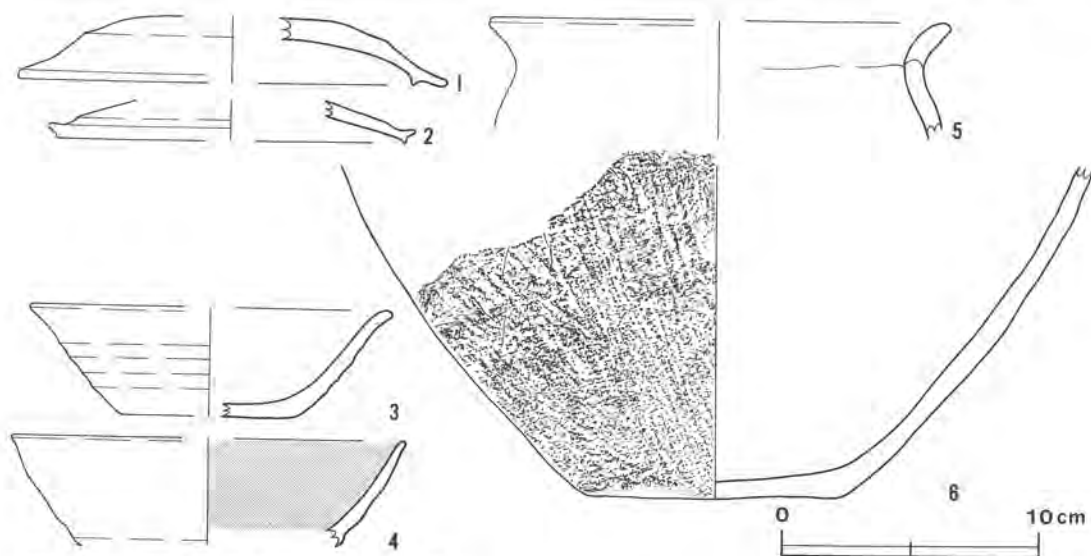
第49号住居跡 (第93図)

本跡は、D2d0区を中心に確認され、第46号住居跡の西側6.0mに位置している。本跡の北東側で第47・48号住居跡、北側で第51号住居跡と重複している。本跡の覆土上層に第47・51号住居跡の貼り床の一部が検出され、第48号住居跡の南東コーナー部上層に本跡のカマドを構築している。このことから、本跡は第48号住居跡より新しく、第47・51号住居跡より古い遺構である。

平面形は、長軸4.20m・短軸3.95mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-19°-Wを指している。壁高は50cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁の中央部に付設されており、天井部・西側の袖部は重

第49号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 1	蓋	A (16.8) B (2.6)	天井部はなだらかに下降し、口縁部は外反して外下方にのびる。口縁内部にかえりを有する。	水挽き成形。 天井部回転ヘラ削り、内面全体横ナデ。	細砂・礫 黄灰色 普通	P375 45%
	須恵器					
2	蓋	A (13.5) B (1.6)	天井部はなだらかに下降し、天井部と口縁部の境界に明瞭な稜を有し、口縁部は下方方向に屈曲してやや内傾する。	水挽き成形。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・細砂 灰褐色 普通	P374 5%
	須恵器					
3	坏	A (14.2) B 4.3 C (6.8)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へのび、口縁部は外反している。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内・外面横ナデ。	細砂・礫 黄灰色 普通	P372 40%
	須恵器					
4	坏形土器	A (15.4) B (4.2)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	体部下端回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい橙色 普通	P373 内面黒色処理 20%
	土師器					
5	小型甕形土器	A (17.6) B (4.3)	口縁部は外反しながら開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P370 5%
	土師器					
6	甕形土器	B (13.0) C 9.8	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面斜位のヘラ磨き。	砂粒・礫 橙色 普通	P371 25%
	土師器					



第94図 第49号住居跡出土遺物実測図

複やトレンチャーによる攪乱のため崩壊しているが、残存している袖部は砂質粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ95cm・幅90cm、壁外へ40cm掘り込んでいる。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、径は15～25cm、深さは20～40cmの規模で、配置からいづれも主柱穴と思われる。

覆土は、重複や攪乱を受けている上層を除いて、ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土を主体とし、壁際にはローム粒子・ソフトロームを含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器とともに、須恵器、陶器片、弥生式土器片が出土している。

本跡は、第7・8号住居跡に床・壁面とも切られているため、平面形・規模等の詳細は不明である。床面の一部と炉だけを検出したもので、残存している床面はロームで、よく踏み固められている。炉は床面を5cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉で、平面形は長径80cm・短径65cmの楕円形状を呈し、炉内には焼土粒子・ローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。炉床はロームが熱を受けて赤く焼けている。

覆土は、ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、縄文時代前期に比定される深鉢形土器（第96図1）が炉床からつぶれた状態で出土している。

本跡は、出土遺物から縄文時代の花積下層式期に比定されるものと思われる。

第50号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第96図	深鉢形土器	A 40.0 B 52.4	底部は無文の尖底で、胴部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部は内傾している。口縁部には、4か所の把手があり、その把手間には4つの小突起が付いている。口縁部に刺突文を施し、胴部には羽状縄文が施文されている。	砂粒・繊維 明赤褐色 普通	P376
1	縄文式土器				70%

第50号住居跡出土石器解説表

図面番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第97図 2	敲石	Q14	12.2	7.3	5.6	804.1	流紋岩
3	磨製石斧	Q3	6.9	6.2	2.4	144.3	流紋岩
4	凹石	Q21	11.0	8.1	4.5	411.2	流紋岩

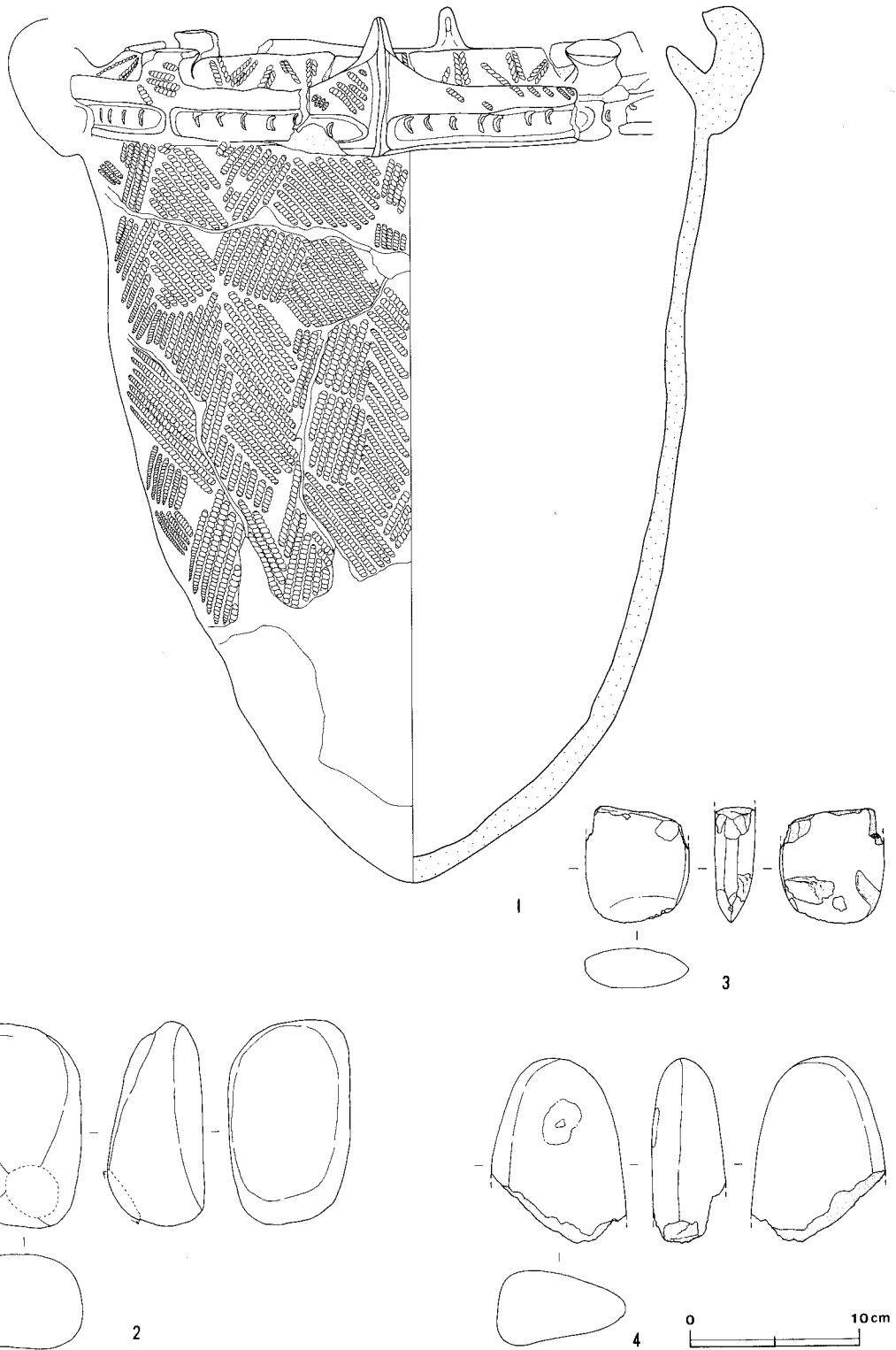
第51号住居跡（第97図）

本跡は、D2c0区を中心に確認され、第46号住居跡の北西側5.6mに位置している。本跡の東側は第47号住居跡、西側は第48号住居跡、南側は第49号住居跡と重複している。出土遺物から、本跡が最も新しい遺構である。

本跡は、トレンチャーによる攪乱のため壁は不明で、ピットも検出されず、カマドと床面の一部が検出されただけで、平面形・規模等は不明である。残存している床面は暗褐色土で、よく踏み固められている。カマドは北壁に付設されていたが、天井部・袖部は攪乱のため崩壊しており、粘土ブロックや焼土を残すだけで、規模・形状等の詳細は不明である。

覆土は、攪乱のため堆積状況は不明で、ローム粒子中量、焼土粒子少量が混じり、軟らかい状態である。

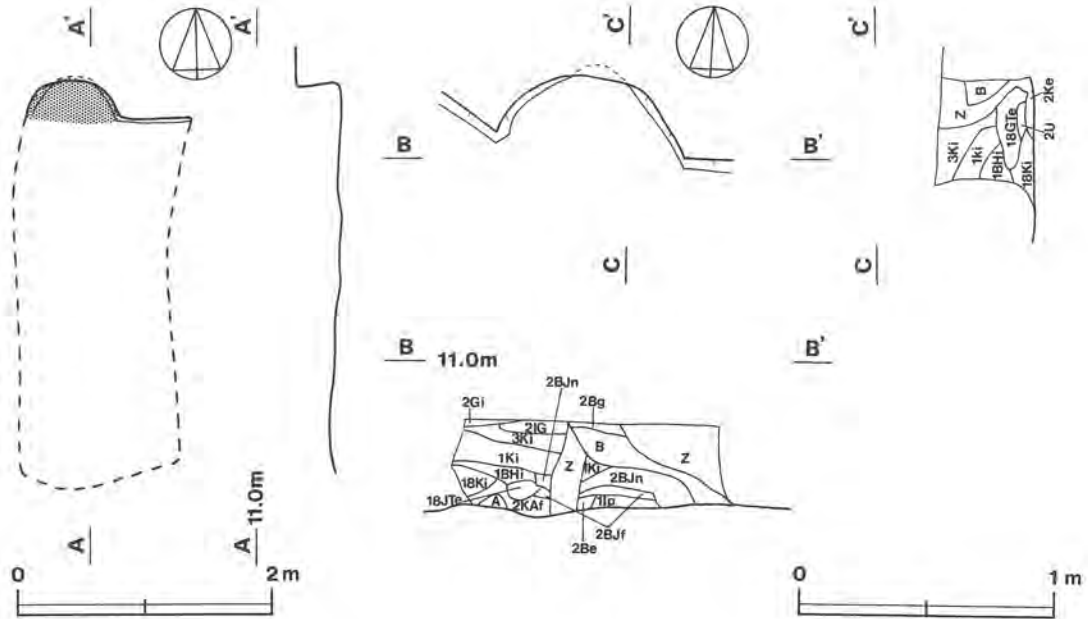
遺物は少なく、土師器片や須恵器片が出土している。土師器は、カマドの覆土中から甕形土器の口縁部3点（第98図1・2・4）・高台付坏形土器（第98図5）・坏形土器（第98図3）が出土し



第96图 第50号住居跡出土遺物実測図

ている。須恵器片も出土しているが、まとまった器形にならなかった。

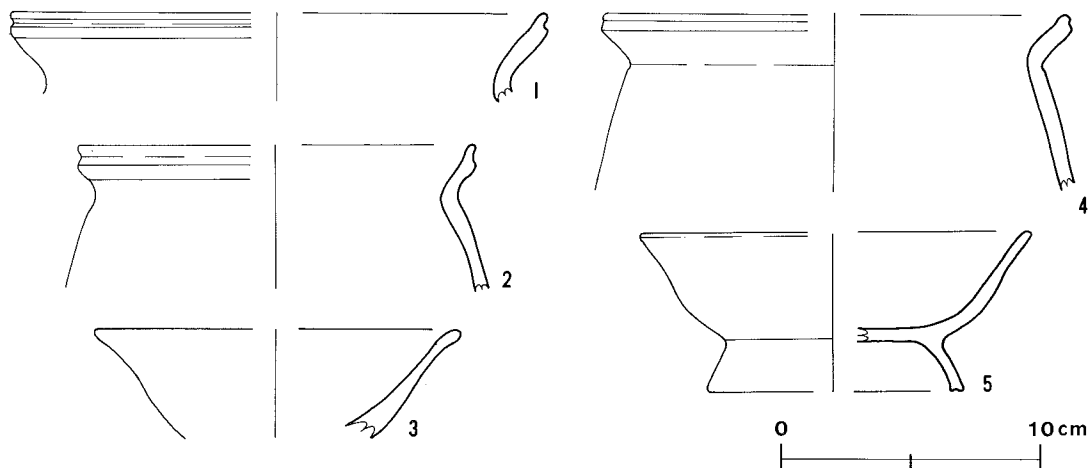
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第97図 第51号住居跡実測図

第51号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	甕形土器 土師器	A (19.8) B (3.5)	口縁部は外反しながら外上方へ開き、端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P379 5%
2	甕形土器 土師器	A (15.4) B (5.7)	口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P377 15%
3	坏形土器 土師器	A (14.0) B (4.3)	体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P381 20%
4	甕形土器 土師器	A (17.8) B (7.0)	口縁部は外反しながら外上方へ開き、端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P378 10%
5	高台付坏形土器 土師器	A (15.2) B 6.3 D (9.9) E 2.0	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい橙色 普通	P380 20%



第98図 第51号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡（第99図）

本跡は、D4a3区を中心に確認され、第40号住居跡の東側5.0m、第29号住居跡の西側5.5mに位置している。本跡の西側は第53号住居跡と重複しており、土層断面や出土遺物から、本跡の方が新しい遺構である。

本跡の南側が道路にかかっており、平面形は調査した部分から東壁の長さが3.2m、北壁の長さは3.0mで、北西・北東コーナーが隅丸形を呈し、主軸方向はN-17°-Wを指すものと思われる。壁は前述したように南側が道路にかかっているため、南壁から南西コーナー付近は検出できなかったが、残存している壁高は15cmで、縮まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅12cm・深さ4~8cmほどの壁溝が北東コーナー下から西壁下にかけて周回している。床面は全体的に平坦で、カマドの手前部分から西壁にかけて、ロームが硬く踏み固められている。カマドは東壁中央部に付設されているが、崩壊しており、天井部・袖部の構造等は不明である。調査した部分は、長さ85cm・幅95cm、壁外へ55cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁~P₅の5か所検出され、P₁・P₂・P₃はいずれも径25~48cm、深さは15~20cmの規模で、配置から支柱穴と思われる。なお、P₄は配置から補助柱穴と思われ、長径26cm・短径20cm・深さ12cmの規模である。

覆土は、上層にローム粒子を多量、焼土粒子・粘土粒子を少量含む黒褐色土、下層にローム粒子・焼土粒子・炭化物を中量含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は少なく、土師器、須恵器、土製品が点在的に出土している。西壁の床面直上から土師器の高台付坏形土器（第100図5）、南東コーナー部の壁際から土師器の高台付皿形土器（第100図6）、カマドの手前の床面直上から土師器の坏形土器（第100図4）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

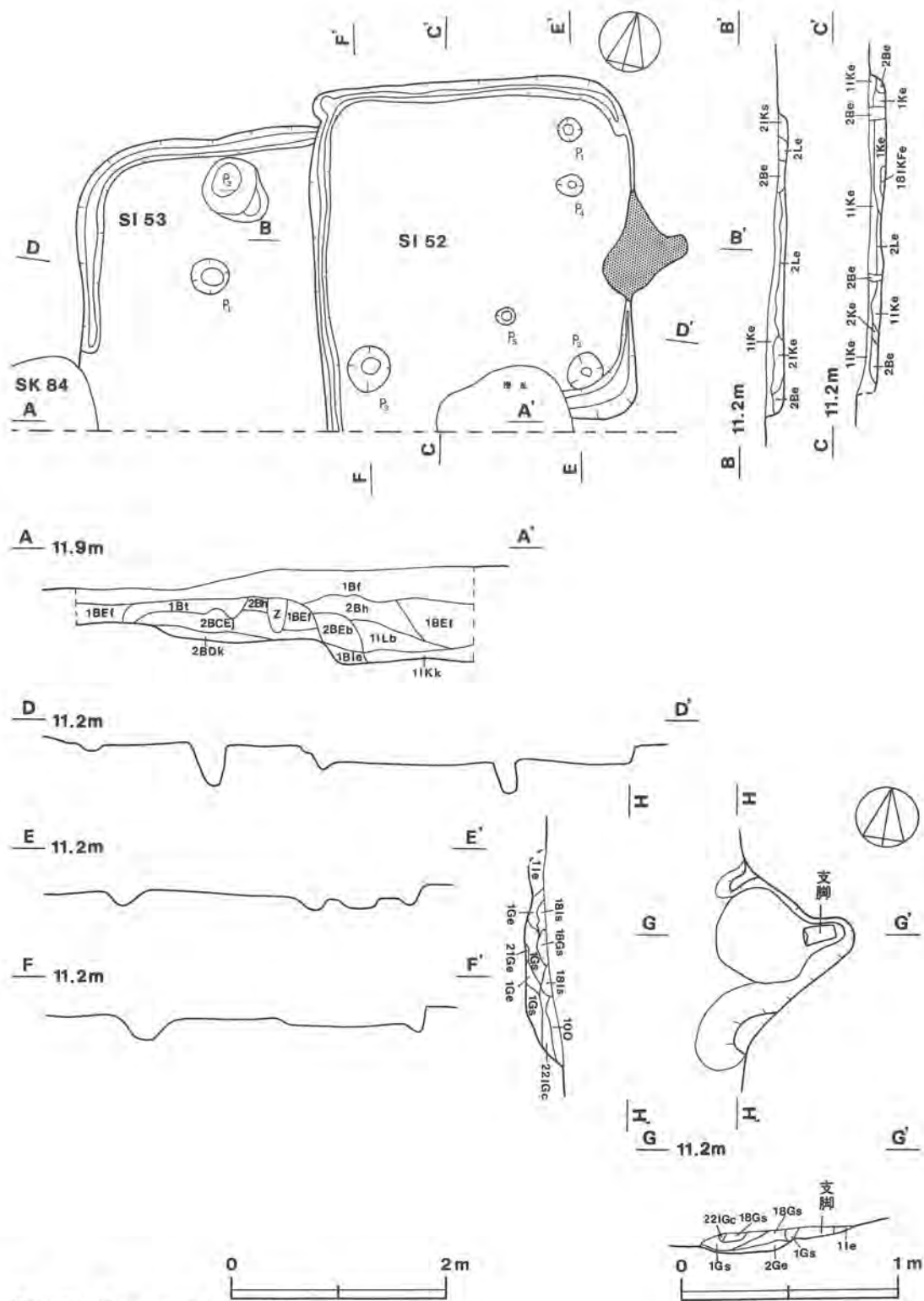
第52号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第100図 1	甕形土器	A (21.8) B (8.1)	口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P383 5%
	土師器					
2	甕形土器	A (19.2) B (8.3)	口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P384 10%
	土師器					
3	甕形土器	A (16.3) B (8.3)	口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 におい橙色 普通	P382 5%
	土師器					
4	坏形土器	A 13.2 B 4.2 C 6.1	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・スコリア におい橙色 普通	P386 体部外面墨書「東」 内面黒色処理100%
	土師器					
5	高台付坏形土器	A (15.0) B 6.0 D 9.7 E 1.7	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は「ハ」の字状に外下方へびる。	水挽き成形。底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 におい橙色 普通	P385 内面黒色処理60%
	土師器					
6	高台付皿形土器	B (1.7)	体部は内彎気味に立ち上がり、高台は外下方へびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 におい橙色 普通	P387 底部外部墨書「口」 内面黒色処理10%
	土師器					
7	台付盤	B (2.2) D (10.4) E 1.3	高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦である。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	細砂 灰色 普通	P389 10%
	須恵器					

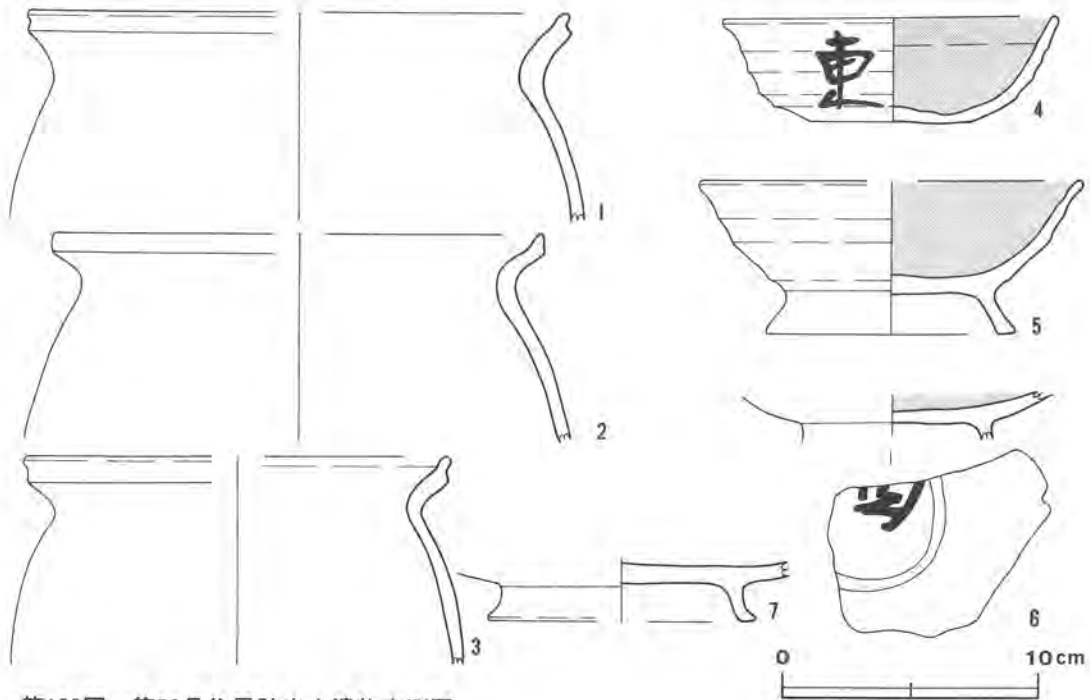
第53号住居跡（第99図）

本跡は、D4a3区を中心に確認され、第40号住居跡の東側2.8mに位置している。本跡の北東側は第52号住居跡と重複し、本跡の床面が切られていることと出土遺物から、本跡の方が古い遺構である。

本跡の南側寄りには道路にかかっており、第52号住居跡に切られているため、平面形や規模等は不明である。調査した部分から北西コーナーは隅丸形を呈し、主軸方向はN-18°-Wを指すものと思われる。床面が露出して確認されたため壁の立ち上がりはない。壁溝は西壁のカマドを除いて、西・北側の壁下に検出され、規模は上幅16cm・深さ12cmである。床面はロームで、やや軟らかく、ほぼ平坦である。カマドは南西壁中央部に付設されていたと思われるが、天井部・袖部は第84号土坑に切られているため崩壊し、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を含む砂質粘土を検出ただけである。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、P₁は径35cm・深さ40cmの規模を有し、配置から支柱穴の一部と思われる。



第99图 第52・53号住居跡実测图



第100図 第52号住居跡出土遺物実測図

覆土は、攪乱のため堆積状況は不明で、ローム粒子多量、炭化粒子極少量が混じり、軟らかい状態である。

遺物は少なく、土師器と須恵器の破片が出土しているだけである。器形の窺えるものでは、カマドの北側の床面直上から須恵器の坏（第101図1）が出土している。その他の土器片は、床面から若干浮いた状態で出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

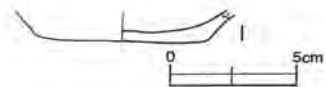
第53号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第101図 1	坏 須恵器	B (1.2) C 6.6	底部は平底で、体部は内鬚気味に外上方へ立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	細砂 灰黄色 普通	P391 10%

第54号住居跡（第102図）

本跡は、C3i8区を中心に確認され、第44号住居跡の北東側10.0m、第43号住居跡の北西側12.6mに位置している。

平面形は本跡の北側が道路にかかっており、推定となるが、方形か長方形を呈するものと思われる。壁はトレンチャー等に

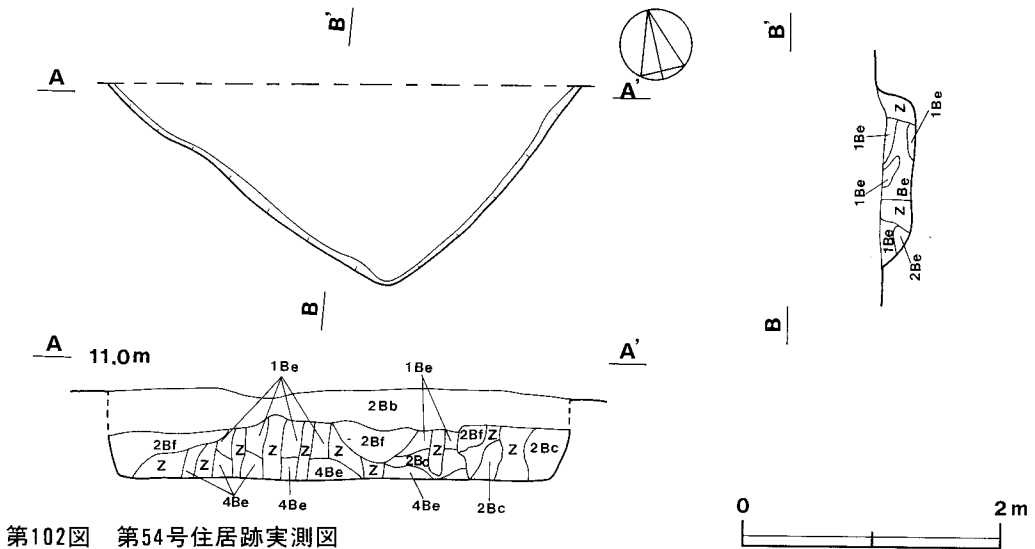


第101図
第53号住居跡出土遺物実測図

よる攪乱を受けているが、壁高は22cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はトレンチャーによる攪乱以外のところはよく踏み固められている。ピットは検出できなかった。

覆土は、トレンチャーによる攪乱のため堆積状況は不明瞭で、多量のローム粒子とロームブロックが混じり合っており、軟らかい状態である。

遺物は少なく、土師器の坏形土器や甕形土器の破片が出土しているだけである。これらの遺物は、攪乱のためかなり移動していると思われるので、本跡に伴うものかどうか不明である。



第102図 第54号住居跡実測図

第55号住居跡（第103図）

本跡は、C4h5区を中心に確認され、第30号住居跡の南東側4.6mに位置している。本跡の北側は第6号溝、北東側は第244号土坑と重複している。新旧関係は、土層断面から第6号溝と第244号土坑が本跡の覆土を切って掘り込んでいることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、南側の大半が道路にかかっているうえ、第6号溝・第244号土坑によって切られているため、平面形・規模等は不明である。床面の一部しか検出できず、残存している部分はロームをよく踏み固めている。

覆土は、攪乱のため堆積状況は不明である。

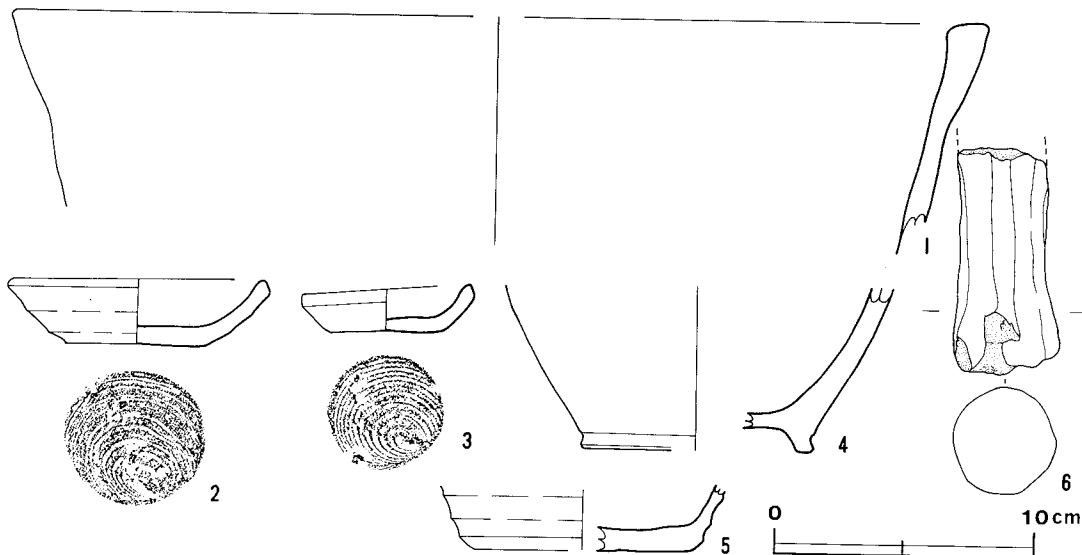
遺物は、土師質土器とともに、須恵器、内耳形土器が出土しているが、いずれも破片である。主な器種としては、土師質土器の皿2点（第103図2・3）、須恵器の坏（第103図5）・台付長頸壺（第103図4）、内耳形土器（第103図1）、支脚（第103図6）である。これらはすべて、耕作によって攪乱を受けているため、正確な位置は不明である。また、本跡の時期についても不明である。

第55号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	内耳形土器 土師質土器	A (38.2) B (9.0)	口縁部は外反気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 外面黒色, 内面暗 赤褐色 普通	P 394 10%
2	皿 土師質土器	A 9.7 B 2.6 C 5.3	底部は平底で, 体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部右回転利用の回転糸切り。	砂粒 明褐色 普通	P 392 75%
3	皿 土師質土器	A 6.5 B 1.8 C 4.3	底部は平底で, 体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部右回転利用の回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 良好	P 393 100%
4	台付長頸壺 須恵器	B (6.5) D (9.1) E 0.6	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり, 高台は外下方へ短くのび, 端部は面をなす。	水挽き成形。 胴部外面下端回転ヘラ削り。 高台貼り付け。	細砂 灰褐色 普通	P 395 5%
5	坏 須恵器	B (2.2) C (8.6)	底部は平底で, 体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部手持ちヘラ削り。	細砂 灰白色 普通	P 396 10%

第55号住居跡出土土製品解説表

図面番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第103図 6	支脚	DP 13	(8.9)	4.2	—	(153.2)	にぶい橙色



第103図 第55号住居跡出土遺物実測図

第56号住居跡（第104図）

本跡は、C4b6区を中心に確認され、第66号住居跡の南側に隣接して位置している。本跡の南側は第61号住居跡と重複しており、土層断面から本跡が第61号住居跡の床面を切っているため、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸3.5m・短軸3.1mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを指している。壁高は33cmで、壁は締まりのある暗褐色土でほぼ垂直に立ち上がっている。床面はカマドの手前から南側へ1.0m・幅1.4mの範囲にわたって、ロームの上に粘土と焼土の混じりあった暗褐色土の床を貼り、さらに南側へ1.2m・幅1.2mの範囲はよく踏み固められて凹んでいる。P₁の西側から南壁下にかけての径58cmぐらゐは、ロームが固められて一段高くなっている。カマドの位置からすれば、出入口施設に関するものと思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが、天井部・袖部は崩壊しており、規模や平面形の詳細は不明である。調査した部分から推定すると、長さ100cm・幅80cm、壁外へ55cmほど掘り込んでいる。内側は熱を受けて焼土化している。ピットはP₁～P₂の2か所検出され、径は55cm、深さは35～45cmの規模で、配置からいずれも支柱穴の一部と思われる。

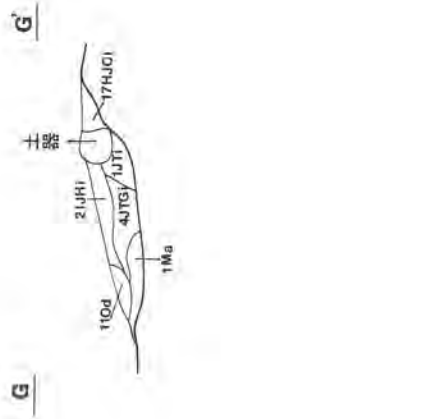
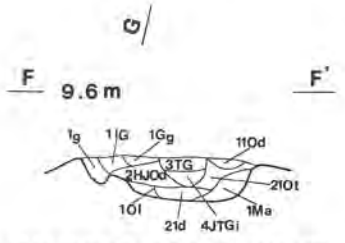
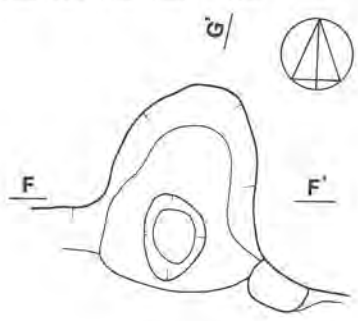
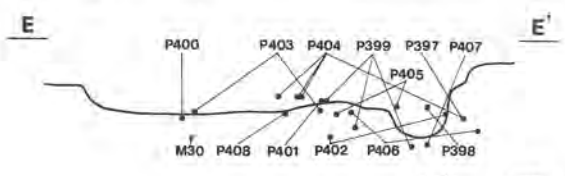
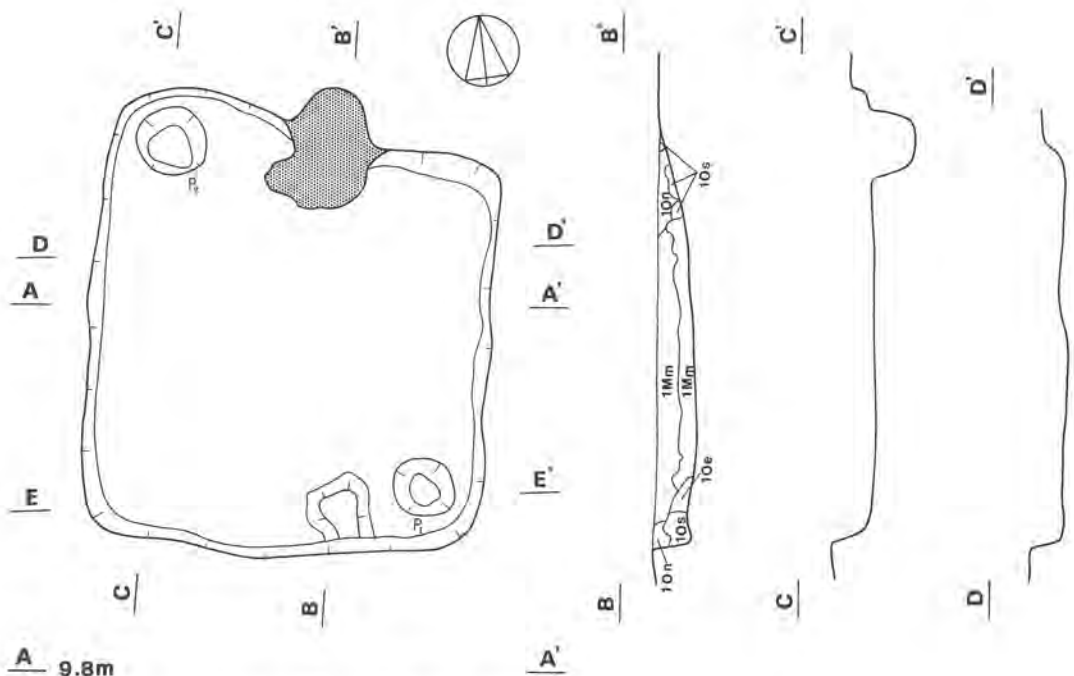
覆土は、粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量を含む黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって散在し、土師器、須恵器、鉄製品、縄文式土器片が出土している。これらの多くは破片で、まとまった器形になったものは少ない。須恵器の坏（第105図12）は、東壁の床面直上から横位で出土し、同所から土師器の甕形土器（第105図8）・高台付坏形土器（第105図9）が出土し、中央部の床面直上から坏形土器（第105図6）・甕形土器（第105図3）、P₁の覆土中から甕形土器の口縁部片（第105図7）・高台付皿形土器（第105図4）が出土している。その他、カマドの燃烧部付近から逆位で土師器の甕形土器（第105図2）・坏形土器2点（第105図10・11）や同所の焚口部から横位で土師器の高台付皿形土器（第105図5）が出土し、P₂の覆土中から鉄製の鉸具（第105図13）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第56号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図1	甕形土器 土師器	A (18.0) B (12.5)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P398 10%
2	甕形土器 土師器	A 12.4 B (13.3)	胴部は内彎しながら立ち上がり、胴中位から内傾する。口縁部は外反している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面上位ナデ、中位から下位にかけてヘラ削り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P397 75%

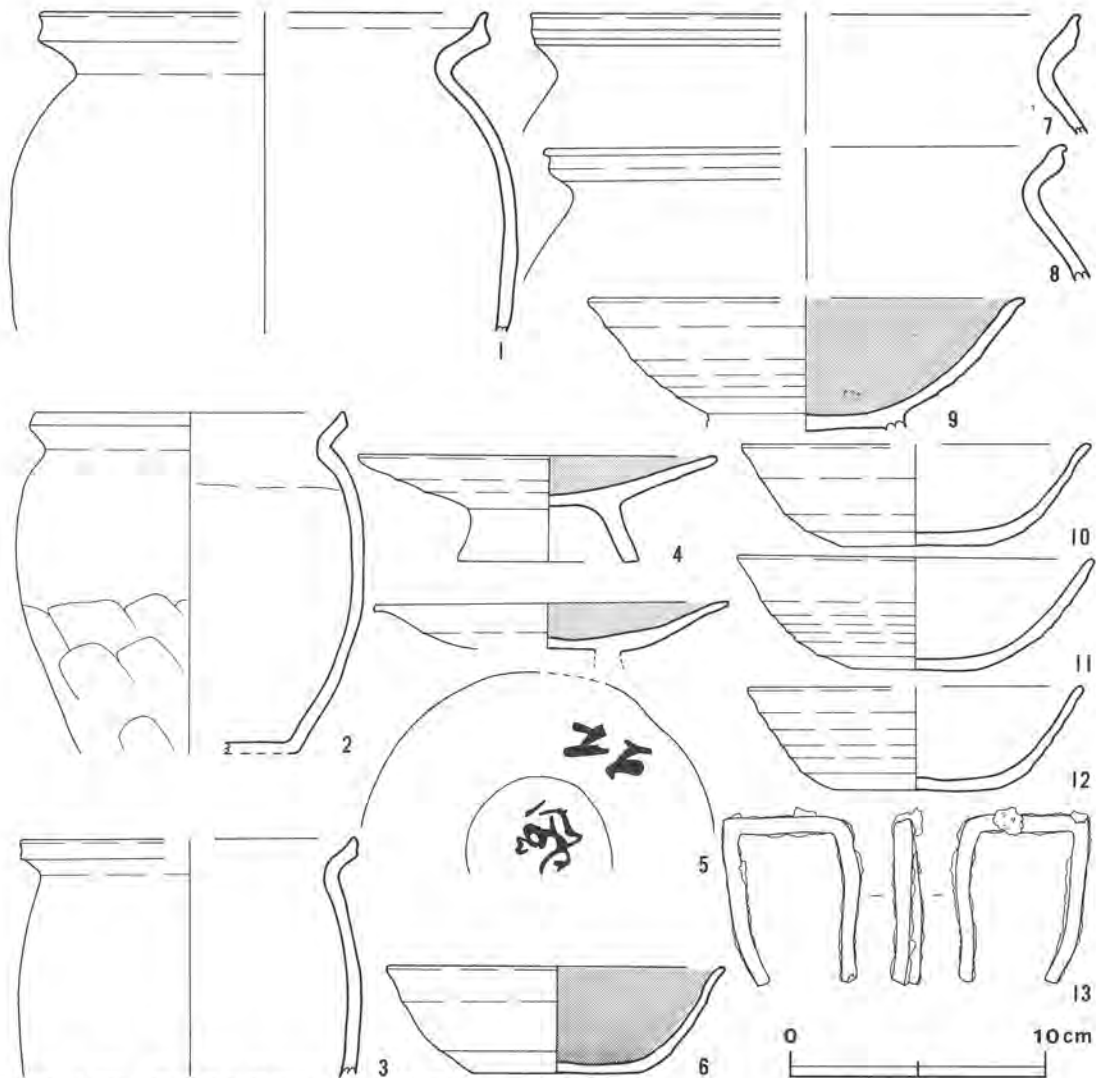


第104図 第56号住居跡実測図・遺物出土位置図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	甕形土器 土師器	A (14.3) B (9.5)	口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P400 10%
4	高台付皿形土器 土師器	A 14.1 B 4.2 D 7.1 E 2.1	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。高台は「ハ」の字状に外下方へびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 外面にふい橙色 内面黒褐色 普通	P407 100%
5	高台付皿形土器 土師器	A (14.0) B (2.0)	体部は、やや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は水平にのび端部を丸くおさめている。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にふい橙色 普通	P408 体部外面墨書「口」 底部外面墨書「口」 55%
6	坏形土器 土師器	A 13.3 B 4.1 C 6.6	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へのび、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にふい橙色 普通	P403 内面黒色処理 100%
7	甕形土器 土師器	A (21.5) B (4.8)	口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 にふい橙色 普通	P399 10%
8	甕形土器 土師器	A (20.6) B (5.7)	口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面斜位のヘラ削り。	砂粒 にふい赤褐色 普通	P401 5%
9	高台付坏形土器 土師器	A (17.0) B (5.0)	体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は外反して端部を丸くおさめている。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P402 内面黒色処理 50%
10	坏形土器 土師器	A (13.8) B 4.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にふい橙色 普通	P405 30%
11	坏形土器 土師器	A 14.3 B 4.2 C 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 淡橙色 普通	P406 50%
12	坏 須恵器	A (13.3) B 4.1 C 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反している。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・雪母 明褐色 普通	P404 50%

第56号住居跡出土鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第105図 13	か 鉸 こ 具	M30	6.9	5.6	1.4	28.5	



第105図 第56号住居跡出土遺物実測図

第57号住居跡（第106図）

本跡は、C4b4区を中心に確認され、第61号住居跡の西側7.6m、第64号住居跡の南東側6.0mに位置している。本跡の北側は第58号住居跡・第6号掘立柱建物跡・第264号土坑と重複しており、土層断面と出土遺物から、本跡は第58号住居跡より新しく、第6号掘立柱建物跡や第264号土坑よりも古い遺構である。

平面形は、長軸3.2m・短軸3.1mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-72°-Eを指している。壁高は15~25cmで、壁は重複している北壁を除いて、締めりのある暗褐色土でほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10~12cm・深さ5~10cmの壁溝がカマドの付設されている東壁を除いて周回

している。床面は全体的に平坦で、暗褐色土がよく踏み固められている。カマドは東壁中央部に付設され、天井部・袖部は山砂混じりの粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化しているが、袖部の大半と天井部は崩れている。調査した部分からみると、長さ130cm・幅60cm、壁外へ85cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁～P₆の6か所検出されたが、深さは5～10cmと浅く、しかも配列も不規則で、いずれも支柱穴とは考えられない。

覆土は、上層にローム粒子少量、焼土粒子極少量含む暗褐色土、下層にローム粒子中量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器を主に、須恵器、石製品が出土している。土師器は、中央部の床面直上からつぶれた状態で甕形土器（第107図5）、カマドの反対側の西壁の覆土下層から正位で坏形土器（第107図4）、P₁の覆土中から逆位で高台付坏形土器（第107図6）が出土している。その他、カマドの手前の床面直上から甕形土器の口縁部片（第107図2）や甕形土器片（第107図3）も出土している。石製品は、北東コーナー寄りの覆土下層から紡錘車（第107図8）が出土している。須恵器は破片で、まとまったものにはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

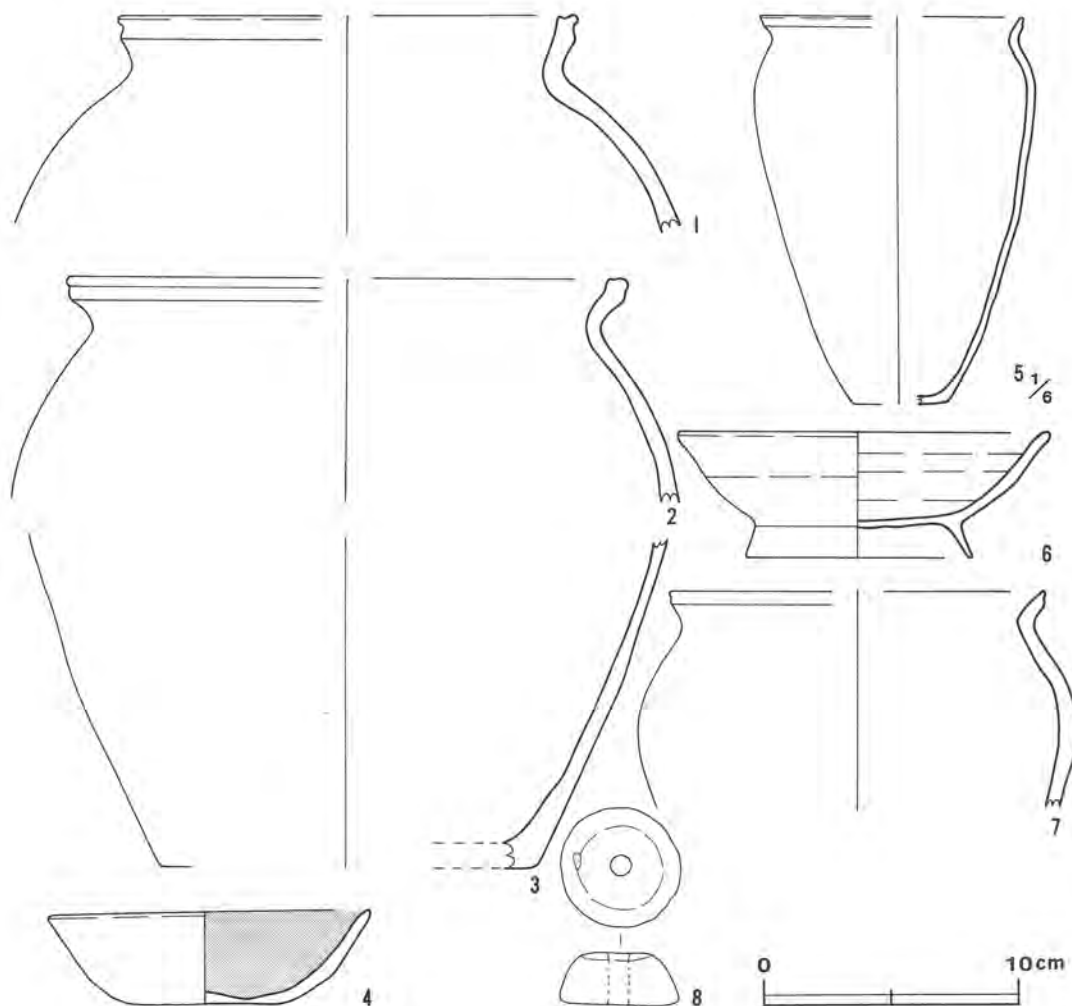
第57号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	甕形土器 土師器	A (18.1) B (8.6)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P410 10%
2	甕形土器 土師器	A (22.0) B (8.0)	胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 一部分黒褐色 普通	P412 10%
3	甕形土器 土師器	B (13.0) C (14.8)	胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面中位ヘラナデ、下位横位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P413 20%
4	坏形土器 土師器	A 12.4 B 3.6 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P415 内面黒色処理 80%
5	甕形土器 土師器	A (20.8) B 30.5 C (7.3)	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P409 50%
6	高台付坏形土器 土師器	A 14.4 B 5.0 C 8.8 E 1.4	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P414 100%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	壺形土器 土師器	A (14.7) B (8.7)	胴部は丸く張り、口縁部は外反している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P411 10%

第57号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第107図 8	紡錘車	Q41	—	4.8	2.1	63.8	孔径0.8cm, 滑石, 黒褐色, 100%



第107図 第57号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡（第106図）

本跡は、C4b4区を中心に確認され、第61号住居跡の北西側6.6m、第64号住居跡の南東側3.0mに位置している。本跡の南側は第57号住居跡・第6号掘立柱建物跡と重複しており、土層断面から第57号住居跡より古く、第6号掘立柱建物跡によって東壁の一部が切られていることから、本跡が最も古い遺構である。

平面形は、長軸3.0m・短軸2.8mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-2°-Wを指している。壁高は25~30cmで、壁は締まりのあるロームではほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は上幅14~20cm・深さ10cmで、北壁下を除いて周回している。床面は全体的に平坦で、カマドの手前から南側1.8m・幅1.5mの範囲にわたって白色粘土を含む暗褐色土で床を貼り、よく踏み固めている。カマドは北壁中央部に付設されており、袖部は砂質粘土で構築されていたが、天井部・袖部の一部は崩れている。内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ110cm・幅95cm、壁外へ80cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、P₂は径50cm・深さ20cmの規模で、配置から主柱穴の一部と思われる。

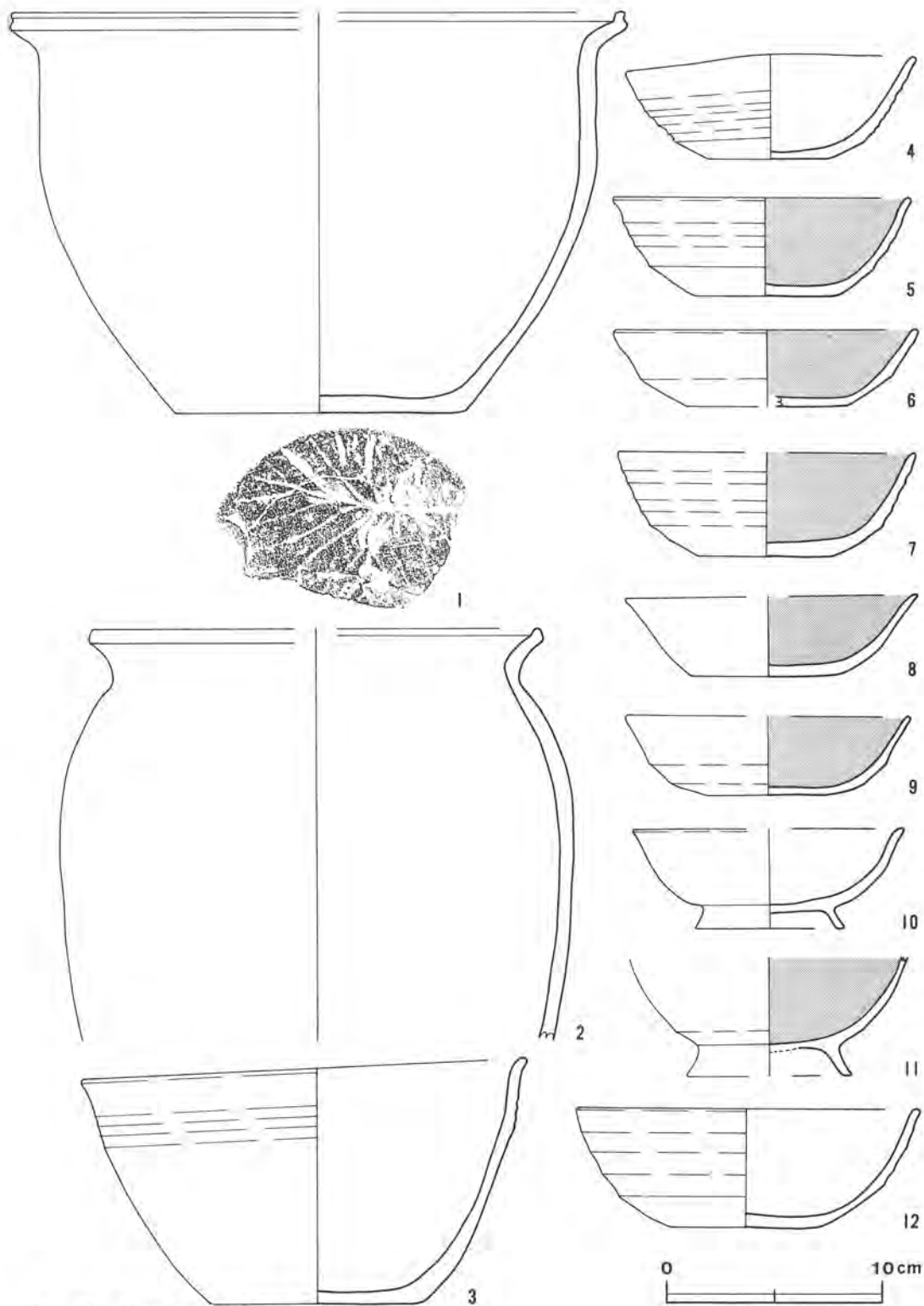
覆土は、トレンチャーによる攪乱を受けている部分がみられるが、上層は暗褐色土で、下層は焼土粒子・ローム粒子を少量含む黒褐色土で、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、多量の土師器とともに、須恵器が出土している。土師器は、北東コーナー部や中央部の床面直上から坏形土器3点（第108図4・7・12）、つぶれた状態で甕形土器3点（第109図13・14・15）を出土している。須恵器の甕（第109図17）は、南東コーナー部床面から土師器の鉢形土器（第108図1）とともに出土している。その他、カマドの燃烧部から土師器の坏形土器（第108図9）や甕形土器（第108図2）といっしょに多くの土師器片も出土している。この他にも、覆土下層を中心に土師器と須恵器の破片が多量に出土している。

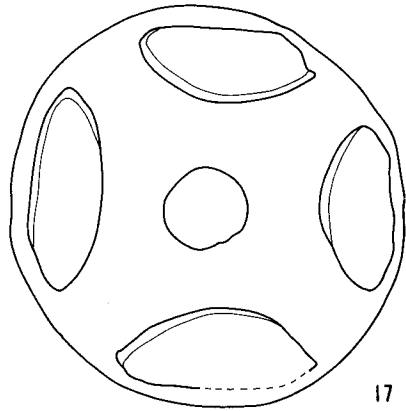
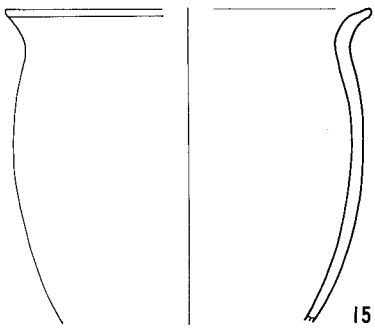
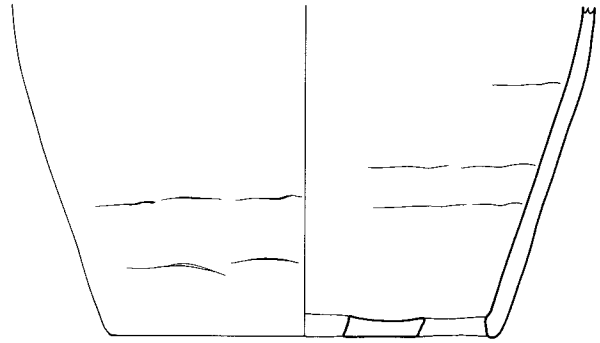
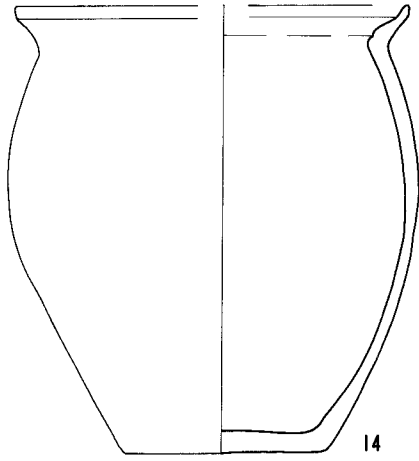
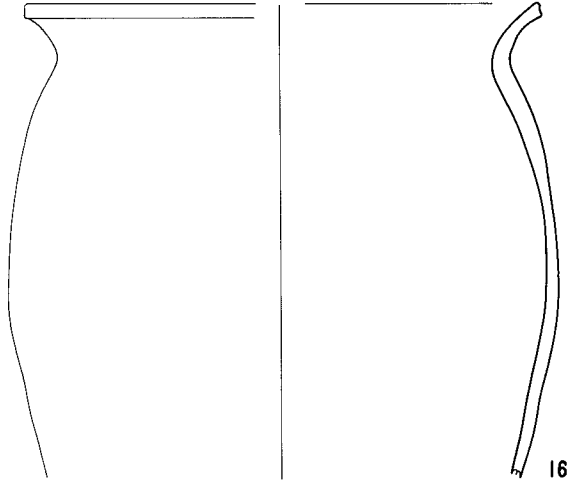
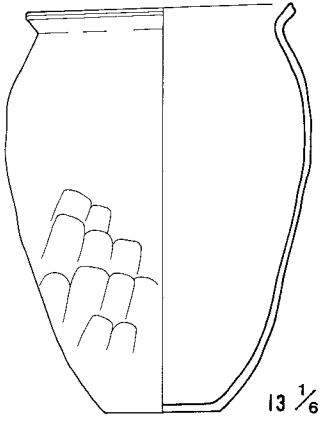
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第58号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第108図 1	鉢形土器 土師器	A (28.6) B 18.7 C 13.4	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反しながら開き、口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 灰褐色 普通	P432 底部木葉痕 25%
2	甕形土器 土師器	A (20.9) B (19.2)	胴部は卵形を呈し、口縁部は外反している。口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P420 20%
3	鉢形土器 土師器	A 20.6 B 11.3 C 10.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色・黒色 普通	P431 75%



第108図 第58号住居跡出土遺物実測図(1)



第109图 第58号住居跡出土遺物実測図(2)

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
4	坏形土器 土師器	A 93.3 B 4.8 C 5.4	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 外面浅黄褐色・黒色 内面赤色・黒色 普通	P 425 80%
5	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.5 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 淡褐色 普通	P 426 内面黒色処理 90%
6	坏形土器 土師器	A 14.0 B 3.7 C (7.8)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。	底部から体部下端にかけて不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 427 内面黒色処理 60%
7	坏形土器 土師器	A (13.9) B 4.8 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P 428 内面黒色処理 60%
8	坏形土器 土師器	A (13.7) B 3.8 C 6.7	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方にのび、そのまま口縁部に至る。	底部から体部下端にかけて不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色・黒褐色 普通	P 429 内面黒色処理 65%
9	坏形土器 土師器	A (12.8) B 3.8 C 5.6	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へのび、そのまま口縁部に至る。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P 430 内面黒色処理 50%
10	高台付坏形土器 土師器	A (12.5) B 4.6 D 6.9 E 1.1	体部は内彎しながら外上方へのび、口縁部はやや外反する。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂 浅黄褐色 普通	P 422 45%
11	高台付坏形土器 土師器	B (5.0) D (7.7) E 1.3	体部は内彎しながら外上方へのび、そのまま口縁部に至る。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 423 内面黒色処理 30%
12	坏形土器 土師器	A 15.0 B 5.0 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色・にぶい橙色 普通	P 424 60%
13	甕形土器 土師器	A 20.0 B 32.2 C 9.6	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、上位がやや張る。口縁部は外反しながら開き、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・石英 外面にぶい橙色 内面灰褐色 普通	P 416 65%
14	甕形土器 土師器	A (15.5) B (17.8) C 7.8	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、胴部中位から内傾する。口縁部は「く」の字状に開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面へラ削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P 417 60%
15	甕形土器 土師器	A (15.2) B (12.6)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は外反している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 灰黄褐色・黒色 普通	P 418 40%
16	甕形土器 土師器	A (20.2) B (18.5)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、胴部中位から内傾する。口縁部は「く」の字状に開いている。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫 橙色・にぶい橙色 普通	P 419 30%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
17	甌 須恵器	B (13.0) C 15.5	底部は五孔式で、胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。	体部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 灰黄褐色 普通	P433 40%

第59号住居跡 (第110図)

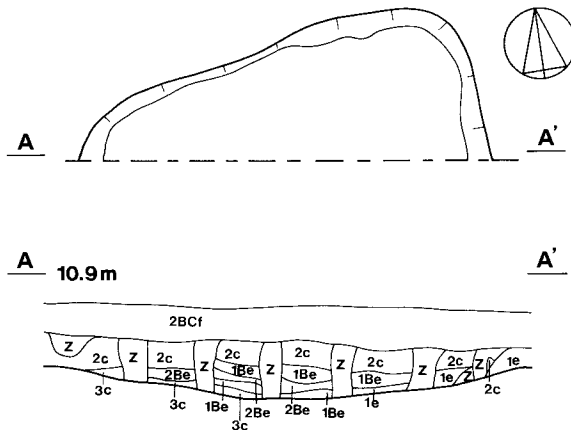
本跡は、C3g0区を中心に確認され、第60号住居跡の南東側1.4mに位置している。本跡の南側が道路にかかっているため、規模等は不明である。また、調査した部分も耕作のトレンチャーによって格子状に攪乱を受けている。

平面形は、調査した部分から推定すると、北壁の長さが3.1mの隅丸形を呈している。主軸方向は不明である。壁は大半がトレンチャー等による攪乱を受けているが、残存している壁は締まったロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は10~14cmである。床面もトレンチャーで攪乱を受けているが、攪乱されていない部分はロームであるが、軟らかい状態である。

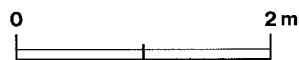
覆土は、攪乱を受けているため堆積状況は不明で、ローム粒子を少量含み、軟らかい状態である。

調査した部分からは、カマドや柱穴も検出されず、しかも床面も軟らかいため、本跡は、他の住居跡群とは性格の異なる住居跡状遺構と考えられる。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

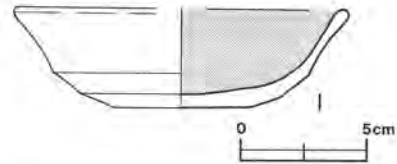


第110図 第59号住居跡実測図



が出土しているだけである。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されると思われる。



第60号住居跡出土土器観察表

第112図 第60号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 1	坏形土器 土師器	A (13.3) B 3.7 C 5.6	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒にふい橙色普通	P434 内面黒色処理30%

第61号住居跡 (第113図)

本跡は、C4c6区を中心に確認され、第32号住居跡の北西側に接して位置している。本跡の北東側は第56号住居跡と重複しており、第56号住居跡に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸4.4m・短軸4.3mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-12°-Wを指している。壁高は20~30cmで、壁は暗褐色土でほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、暗褐色土がよく踏み固められている。炉は床面の中央部より東側に位置し、平面形は長径50cm・短径40cmの楕円形を呈し、焼土粒子を多量に含む明赤褐色土が薄く堆積している。ピットはP₁~P₄の4か所検出されているが、本跡に伴うピットはP₂・P₃・P₄の3か所と思われ、いずれも径は30~40cm、深さは10~13cmの規模である。

覆土は、上層にローム粒子・焼土粒子を微量含む黒色土、下層にはローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む黒褐色土で、自然堆積の様相を呈している。

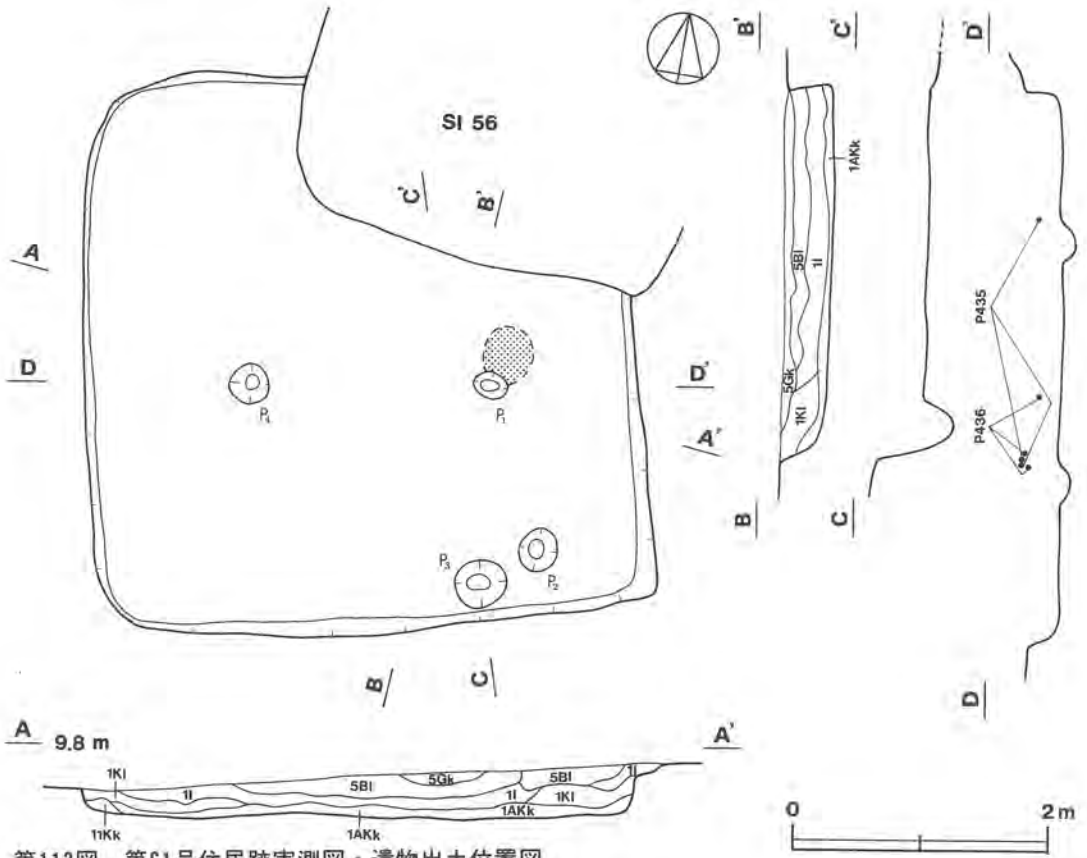
遺物は、土師器片が散在的に覆土下層から出土している。まとまった器形として、中央部の覆土中層から甕形土器の口縁部 (第114図1)・器台形土器 (第114図2) が出土しているだけである。

本跡は、出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものと思われる。

第61号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	甕形土器 土師器	A (19.0) B (11.7)	胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面へらナデ。	砂粒・雲母・石英にふい橙色普通	P435 30%

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
2	器台形土器 土 師 器	A 8.9 B (4.5)	脚部は直線的に開き、一段に3個の円形の透し孔が穿たれている。器受部は短く直線的に開き、中央に脚部へ貫通する孔が穿たれている。	脚部内・外面へラナダ。	砂粒 褐色 普通	P436 15%



第113図 第61号住居跡実測図・遺物出土位置図

第114図 第61号住居跡出土遺物実測図

第62号住居跡（第115図）

本跡は、B3f4区を中心に確認され、第63号住居跡の東側に接して位置している。本跡は耕作のため格子状に攪乱を受けている。

平面形は、長軸4.1m・短軸3.9mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-40°-Wを指している。壁高は28cmで、壁は大半がトレンチャーによる攪乱を受けているが、他は締めりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、幅12～20cm・深さ6～10cmの壁溝がカマド及びカマドの北東壁や南西壁の一部を除いて周回している。床面は平坦で、よく踏み固められているが、トレンチャーによる攪乱部は凹んでいる。カマドは、北西壁中央部に付設され、砂質粘土で構築されているが、トレンチャーによる攪乱を受けているため天井部・袖部は崩れて規模や形状の詳細は不明である。調査した部分から推定すると、規模は長さ67cm・幅90cmを有し、燃焼部は床面を7cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、径は30～35cm、深さは10～25cmの規模を有し、いずれも本跡に伴う支柱穴の一部と思われる。

覆土は、トレンチャーによる攪乱を受けているため堆積状況は不明で、ローム粒子混じりの軟らかい状態である。

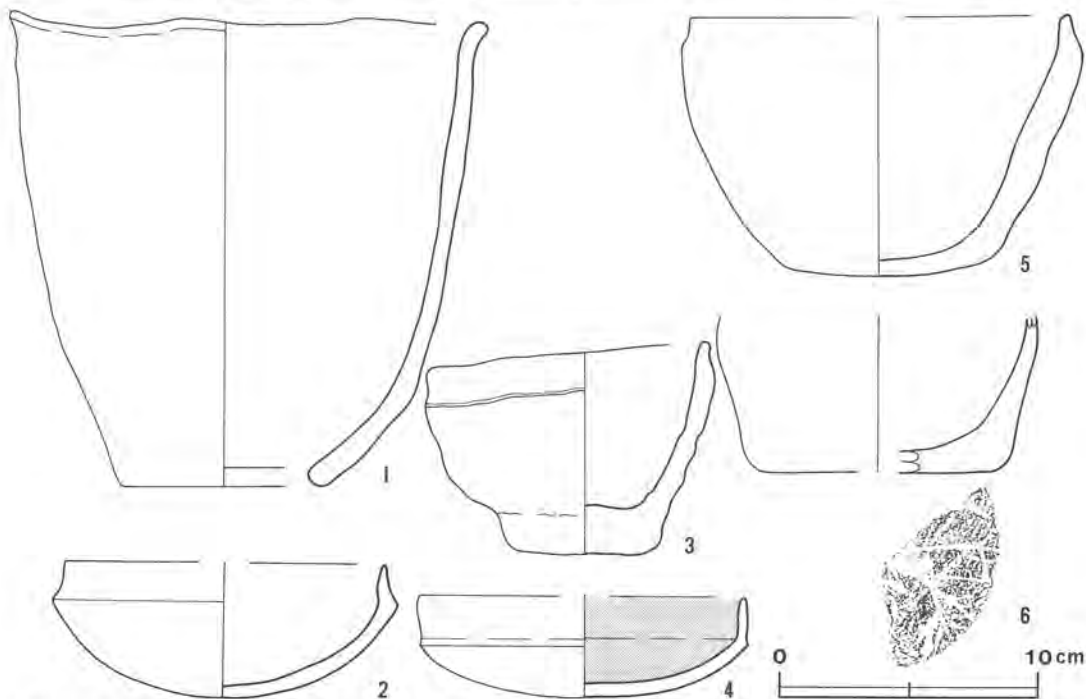
遺物は、土師器が出土しているが、いずれも破片である。カマド手前の床面直上からつぶれた状態で甑形土器（第116図1）、南壁東寄りの壁際から甕形土器（第116図6）が出土している。その他、中央部の覆土下層から鉢形土器（第116図5）・坏形土器（第116図2）・横位で手捏土器（第116図3）も出土している。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第62号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	甑形土器 土師器	A 18.7 B 18.4 C 8.1	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反している。底部は正円状に抜ける。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ削り、外面へラ磨き。	砂粒・礫にぶい橙色普通	P440 95%
2	坏形土器 土師器	A (12.5) B 5.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	砂粒・礫にぶい褐色外面一部分黒褐色普通	P438 45%
3	手捏土器 土師器	A 10.6 B 8.5 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は短く直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ナデ。	砂粒・雲母にぶい橙色普通	P442 95%
4	坏形土器 土師器	A (12.9) B 4.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ磨き、外面へラ削り。	細砂灰褐色普通	P439 内面黒色処理 15%

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
5	鉢形土器 土師器	A (14.9) B 10.3	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は短く直立する。	体部内・外面へラナデ。	砂粒・礫にぶい褐色不良	P441 50%
6	菱形土器 土師器	B (6.2) C (9.0)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面へラ磨き、外面ナデ。	砂粒・礫にぶい赤褐色普通	P437 底部木葉痕 5%



第116図 第62号住居跡出土遺物実測図

第63号住居跡（第117図）

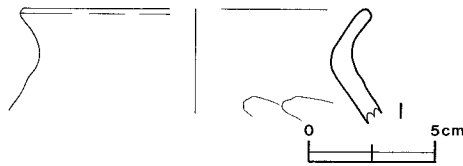
本跡は、B3g4区を中心に確認され、第62号住居跡の西側に接して位置している。

本跡は、北西コーナー部を含む西側がエリア外に延びており、調査した部分は住居跡全体の約2分の1のため、平面形・規模等の詳細は不明である。調査した部分から東壁の長さは3.1mで、南東・北東・北西コーナーは隅丸形を呈し、長軸方向はN-30°-Wを指している。壁高は25cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はトレンチャーによって格子状に攪乱されているため全体的に凹凸である。攪乱を受けていない床面は明瞭なロームで、やや軟らかい状態である。ピットは検出できなかった。カマドはおそらくエリア外の北西壁に設けられているものと思われる。

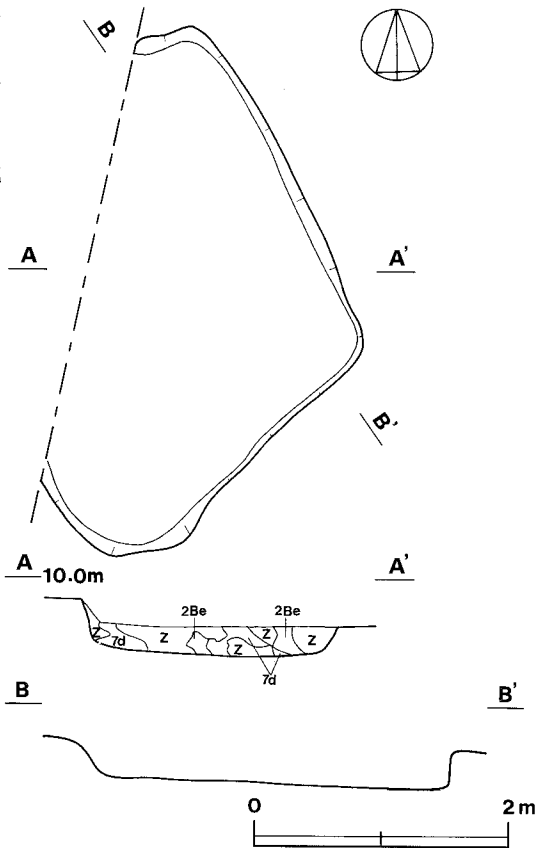
覆土は、耕作によるトレンチャーで攪乱を受けているため堆積状況は不明であるが、ローム粒子が少量混じり、軟らかい状態である。

遺物は、南東コーナー部の覆土下層から土師器の甕形土器の口縁部(第118図1)と、甕形土器片が出土しているだけである。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第118図 第63号住居跡出土遺物実測図



第117図 第63号住居跡実測図

第63号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第118図 1	甕形土器 土師器	A (13.6) B (4.5)	口縁部は短く外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒 外面黒褐色、内面 にぶい橙色 普通	P443 10%

第64号住居跡 (第119図)

本跡は、B4j3区を中心に確認され、第65号住居跡の南側2.0m、第66号住居跡の西側8.0mに位置している。

本跡は、トレンチャーによる攪乱のため、平面形・規模等の詳細は不明であるが、調査した部分から東壁の長さは2.6m、南壁の長さは2.5mで、南東・北東コーナーは隅丸形を呈し、主軸方向はN-87°-Eを指すものと思われる。壁高は南壁21.5cm・東壁10cmで、壁は大半がトレンチャー等による攪乱を受けているが、南壁から北東壁コーナー部にかけては締めりのある暗褐色土がほぼ垂直に立ち上がっている。床面は全体的に凹凸がみられ、南壁下半分と南東コーナー部付近を除いて、攪乱を受けない床面は暗褐色土でよく踏み固められている。カマドは東壁中央部に付設され

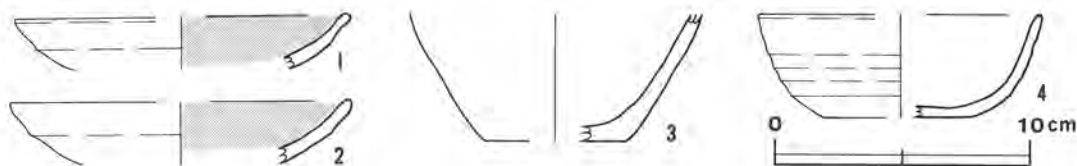
覆土は、攪乱を受けているため堆積状況は不明で、粘土粒子・焼土粒子が少量混じり、軟らかい状態である。

遺物は、破片で少なく、カマドの手前付近を中心とする覆土下層から土師器の坏形土器や甕形土器が出土している。カマドの北側の床面直上から坏形土器片2点（第120図1・2）、カマドの燃焼部から坏形土器片（第120図4）・甕形土器の底部（第120図3）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第64号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 1	坏形土器 土師器	A (13.0) B (2.0)	体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P446 内面黒色処理 5%
2	坏形土器 土師器	A (13.5) B (2.5)	体部は内彎しながら大きく開き、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい褐色 普通	P447 内面黒色処理 5%
3	甕形土器 土師器	B (5.0) C (5.6)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P444 5%
4	坏形土器 土師器	A (11.2) B 4.0 C (5.8)	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい褐色 普通	P445 5%



第120図 第64号住居跡出土遺物実測図

第65号住居跡（第121図）

本跡は、B4ia区を中心に確認され、第64号住居跡の北側2.4m、第82号住居跡の南西側2.8mに位置している。

平面形は、長軸3.45m・短軸3.25mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-15°-Eを指している。壁高は18～30cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10～12cm・深さ6cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は暗褐色土で、中央部付近が非常に硬く踏み固められている。カマドは東壁南東コーナー部付近に付設されていたが、天井部・袖部の大半が崩れている。残存している袖部は山砂混じりの粘土で構築され、内側はよく焼けて焼土化している。調査した部分は、長さ113cm・幅70cm、壁外へ60cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面

を8cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には焼土粒子が含まれている。ピットはP₁～P₂の2か所検出され、P₁は径36cm・深さ24cmで、規模や位置から本跡に伴う支柱穴の一部と思われる。P₂は径25cm・深さ24cmで、配置から補助柱穴と思われる。

覆土は、黒褐色土を主体とし、壁際は焼土粒子多量、木炭粒子極少量含む暗褐色土で、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から土師器とともに、須恵器、縄文式土器片が出土している。土師器は、東壁中央部の床面直上から高台付坏形土器（第122図8）、中央部の床面直上から伏せた状態で高台付皿形土器（第122図6）、南西コーナー部の床面直上から甕形土器（第122図3）、カマドの燃焼部から支脚として使用されたと思われる高台付坏形土器（第122図7）・坏形土器2点（第122図4・5）が出土している。須恵器も覆土下層から出土しているが、すべて破片で、まとまった器形にならなかった。縄文式土器片は覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

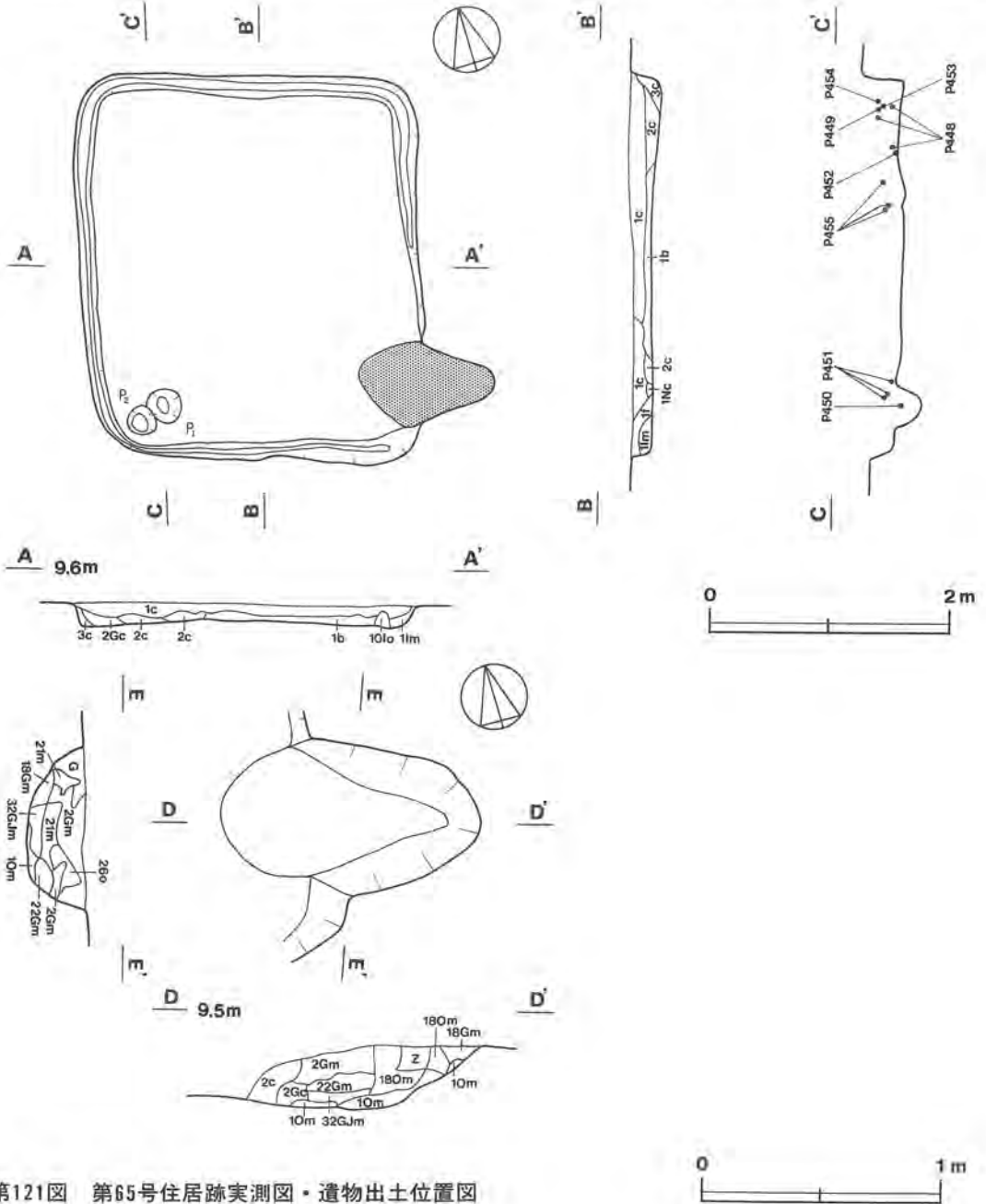
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第65号住居跡出土土器観察表

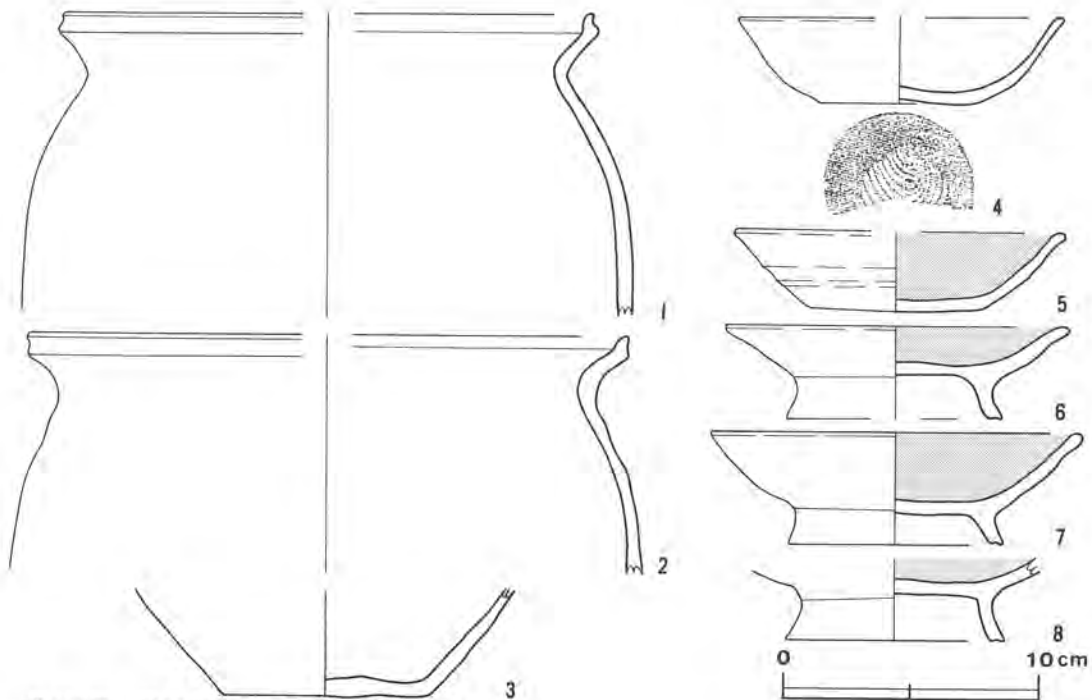
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	甕形土器 土師器	A (20.4) B (12.0)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面ナデ。	砂粒・礫 赤褐色 普通	P448 20%
2	甕形土器 土師器	A (22.2) B (9.4)	胴部はやや膨んで張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部は外反気味につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面横位のへラ削り。	砂粒・スコリア・ 雲母 橙色 不良	P449 10%
3	甕形土器 土師器	B (4.2) C 8.0	底部は平底で、胴部は直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部内面へラナデ、外面横位のへラ削り。	砂粒・礫 赤褐色 普通	P450 10%
4	坏形土器 土師器	A (12.4) B (3.4) C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫・スコリア 赤橙色 普通	P454 50%
5	坏形土器 土師器	A (12.9) B 4.1 C 6.8	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部は一定方向に手持ちへラ削り。体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫・雲母 橙色 普通	P453 内面黒色処理 45%
6	高台付皿形土器 土師器	A 13.4 B 2.7 D (8.6) E 1.7	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P455 内面黒色処理 70%
7	高台付坏形土器 土師器	A 14.5 B 3.1 D 8.5 E 1.3	体部は内彎しながら大きく開き、そのまま口縁部に至る。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転へラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P451 内面黒色処理 60%

第65号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	高台付坏形土器 土師器	B (3.3) D 8.5 E 1.7	高台は「ハ」の字状に外下方のびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母にぶい橙色普通	P 452 内面黒色処理20%



第121図 第65号住居跡実測図・遺物出土位置図



第122図 第65号住居跡出土遺物実測図

第66号住居跡（第123図）

本跡は、B4j6区を中心に確認され、第56号住居跡の北側1.0m、第67号住居跡の南側3.4mに位置している。

平面形は、長軸4.9m・短軸4.8mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-25°-Wを指している。壁高は60～65cmで、壁は暗褐色土で垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅18～24cm・深さ6～10cmの壁溝がカマドの下を通り、全周している。床面は暗褐色土で、中央部に多少凹凸がみられるが、全体的に平坦で、特にピットの内側は80～110cmの幅でドーナツ状に踏み固められて硬くなっている。カマドは、北壁中央部に付設されているが、天井部は崩れており、残存している袖部は山砂と粘土を混ぜて構築し、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分からみると、長さ130cm・幅120cm、壁外へ25cm掘り込んでいる。燃焼部は床面を10cmほど掘り込んでおり、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、径は30～40cm、深さは45～58cmの規模で、配置からいずれも支柱穴と思われる。

覆土は、上層にローム粒子を多量に含む暗褐色土、下層にはローム粒子を多量に含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって、多量の土師器とともに、須恵器、土製品、縄文式土器片が出土している。これらの多くは破片である。土師器は、カマドの北西寄りの覆土下層から伏せた状態

で鉢形土器（第124図6）・甕形土器（第124図5）、カマドの東側の床面直上から横位で甕形土器（第124図2）が出土している。その他、カマドの燃焼部から砥石（第124図7）が出土している。須恵器も少量出土しているが、すべて破片で、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第66号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 1	甕形土器 土師器	A (21.4) B (8.9)	口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・スコリアにぶい橙色 普通	P458 10%
2	甕形土器 土師器	A 15.6 B (19.9)	胴部は長胴を呈し、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 灰赤色 普通	P457 50%
3	甕形土器 土師器	A (15.5) B (14.8)	胴部は丸く張り、口縁部は直立した後、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫にぶい橙色 普通	P456 25%
4	坏形土器 土師器	B (3.0)	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	細砂・礫 灰黄褐色 普通	P460 内面黒色処理 40%
5	甕形土器 土師器	B (9.0) C (9.2)	底部は平底で、胴部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫にぶい赤褐色 普通	P459 10%
6	鉢形土器 土師器	A (14.3) B 7.9 C 7.9	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒・礫にぶい赤褐色 普通	P461 80%

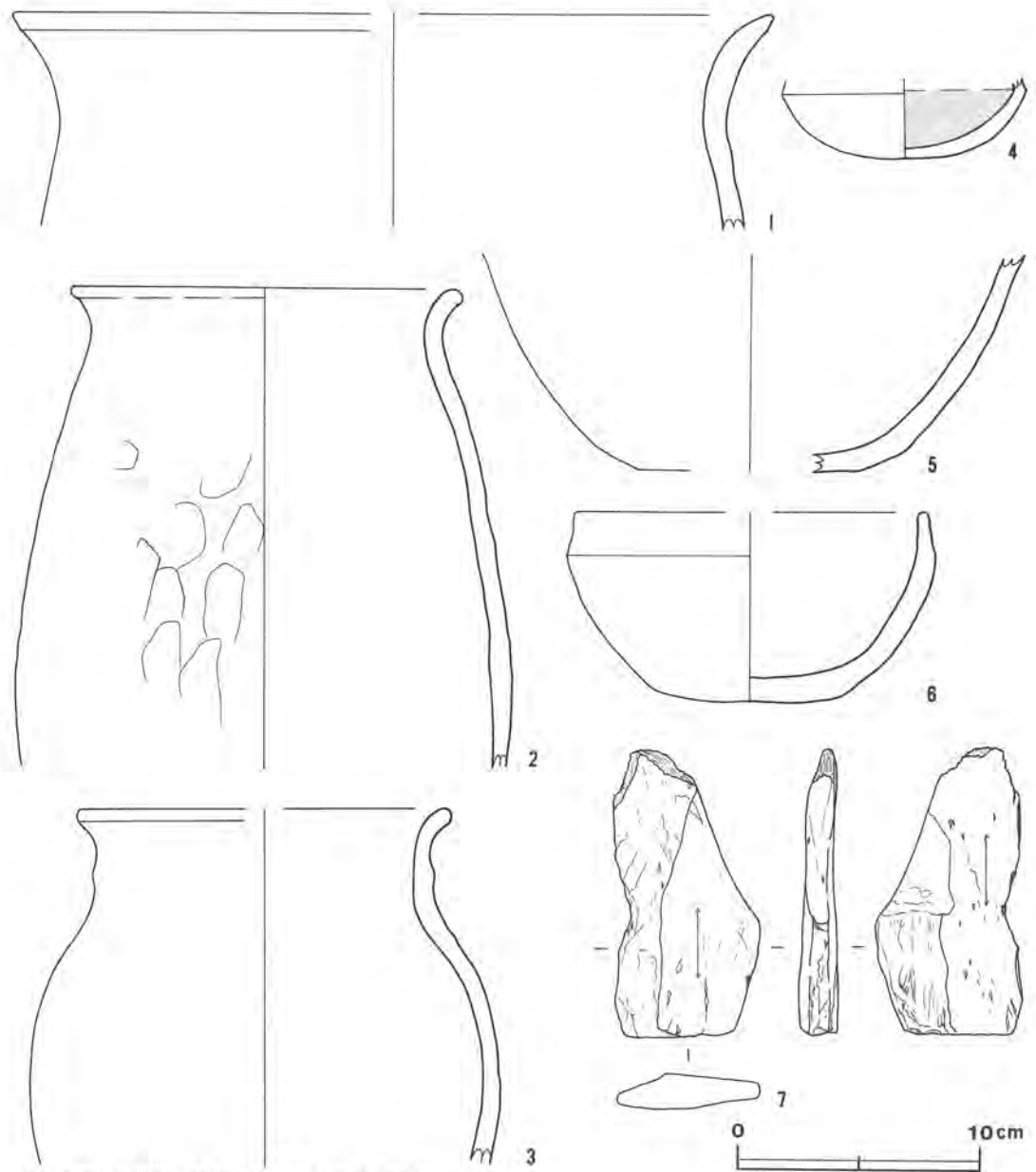
第66号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第124図 7	砥石	Q33	11.9	6.9	1.5	122.7	雲母片岩

第67号住居跡（第125図）

本跡は、B4h6区を中心に確認され、第68号住居跡の東側に接して位置している。本跡の北西コーナー部は第95号住居跡と重複しており、出土遺物から本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸5.1m・短軸4.7mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-5°-Eを指している。壁高は65～70cmで、壁は締めのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅12～20cm・深さ4～6cmの壁溝がカマドの下を通り、全周している。床面は、中央部に多少凸凹がみられるが、全体的に平坦で、ロームが硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩壊しているが、袖部は山砂と少量の礫を混ぜて構築しており、内側は熱を受けて焼土化している。長さは155cm、幅は105cm、壁外へ70cm掘り込んでいる。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子や焼土ブロックが含まれている。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、径は20～35cm、深さは38～55cmの規模



第124図 第66号住居跡出土遺物実測図

で、配置からいずれも支柱穴と思われる。

覆土は、粘土粒子を含む黒褐色土を主体とし、その他、上層には焼土粒子中量、中層には焼土粒子多量、木炭・焼土小ブロック極少量、下層には焼土粒子少量含み、自然堆積の様相を呈している。

床面に焼土や炭化材が散在しており、特にカマド付近に多量の焼土・炭化材が検出されている

状況から焼失家屋と考えられる。

遺物は、本跡全域から多量の土師器のほかに、須恵器、土製品、鉄製品が出土している。いずれも破片で、覆土中層から下層にかけて多く出土している。土師器は、カマドの手前から中央部にかけての床面直上から甕形土器（第126図17～19）・横位で小型甕形土器（第126図16）が出土している。また、須恵器も同所の床面直上から伏せた状態で高台付坏2点（第126図10・11）が出土し、さらに蓋3点（第126図2～4）・台付盤（第126図9）・小型短頸壺（第126図1）も出土している。その他、中央部の覆土下層から管状土錘2点（第126図20・21）・刀子（第126図23）・鉄製品（第126図22）や、覆土中層から須恵器の坏（第126図7）・蓋（第126図5）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

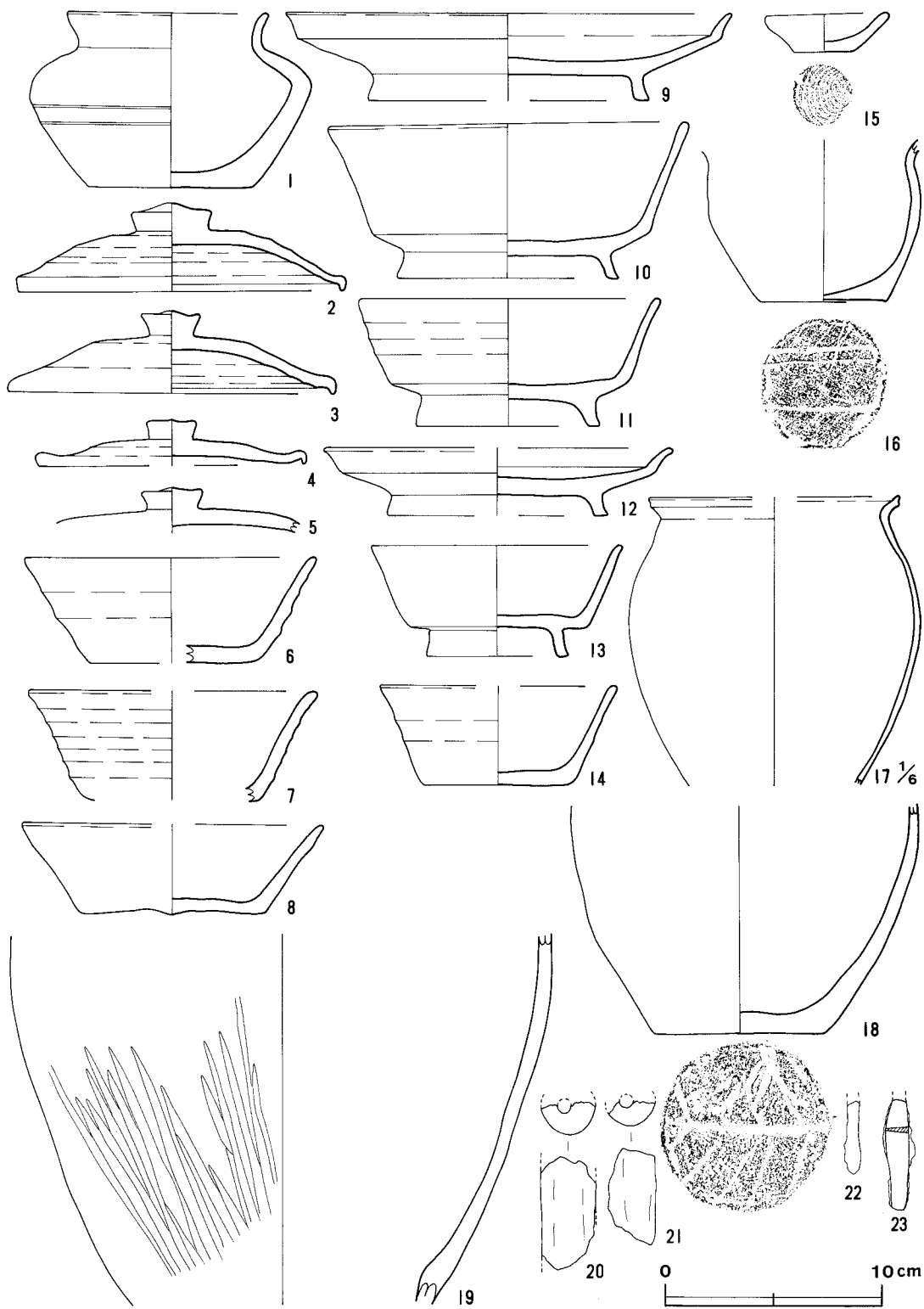
第67号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	小型短頸壺 須恵器	A 9.2 B 8.1 C 7.5	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、胴部上位から内傾する。口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちへら削り。 ロクロ回転方向右。	砂礫 黄灰色 普通	P467 100%
2	蓋 須恵器	A 15.0 B 4.1 G 3.6 H 1.3	つまみは擬宝珠状を呈し、天井部はなだらかに下降し、口縁部は外下方に屈曲する。口縁端部は尖る。	天井部の頂部は回転へら削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 黄灰色 普通	P477 95%
3	蓋 須恵器	A 15.2 B 3.8 G 2.7 H 1.1	つまみは擬宝珠状を呈し、天井部に向かってなだらかに下降し、口縁部は外下方に屈曲する。	天井部の頂部は回転へら削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P476 100%
4	蓋 須恵器	A (12.5) B 2.1 G 2.3 H 0.9	つまみは擬宝珠状を呈し、天井部は平坦となっている。身受け部が垂下する。口縁端部は尖る。	天井部の頂部は回転へら削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P478 50%
5	蓋 須恵器	B (2.1) G 2.8 H 1.0	天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。	水挽き成形。 ロクロ回転方向右。	細砂・長石粒 灰黄色 普通	P480 20%
6	坏 須恵器	A 13.5 B 4.9 C (7.4)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部手持ちへら削り。	砂礫 褐灰色 普通	P474 50%
7	坏 須恵器	A (13.4) B 5.1 C (8.2)	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部を丸くおさめている。	水挽き成形。 底部手持ちへら削り。	砂粒・礫・長石粒 灰色 普通	P479 50%
8	坏 須恵器	A (13.9) B 4.1 C 8.4	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転へら削り。 ロクロ回転方向右。	砂礫 黄灰色 普通	P473 30%
9	台付盤 須恵器	A 20.4 B 4.1 D (12.8) E 1.2	底部は平底で、体部は直線的に外上方に立ち上がり、短い口縁部は外反気味に立ち、口唇部は丸い。	水挽き成形。 高台貼り付け後、ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P468 50%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10	高台付坏 須惠器	A 16.3 B 7.3 D 10.0 E 1.1	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 高台貼り付け後、ナデ。	砂粒・細砂・礫 褐灰色 普通	P470 80%
11	高台付坏 須惠器	A 13.8 B 6.0 D 8.4 E 1.3	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 高台貼り付け後、ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 黄灰色 普通	P472 50%
12	台付盤 須惠器	A (16.0) B 3.1 D (10.0) E 1.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方に立ち上がり、短い口縁部は外反気味に立ち、口唇部は丸い。	水挽き成形。 高台貼り付け。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P469 35%
13	高台付坏 須惠器	A 11.5 B 5.2 D 6.5 E 1.2	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 高台貼り付け後、ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P471 100%
14	坏 須惠器	A (10.9) B 4.1 C 7.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P475 30%
15	皿 土師質土器	A 5.4 B 1.8 C 2.8	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P466 55%
16	小型甕形土器 土師器	B (7.5) C 5.7	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母 赤色 普通	P464 65%
17	甕形土器 土師器	A (23.0) B (26.8)	胴部は内彎しながらゆるやかに立ち上がり、胴上位から内傾する。口縁部は外反して、口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 一部黒色 普通	P462 30%
18	甕形土器 土師器	B (10.6) C 8.6	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P463 底部木葉痕 45%
19	甕形土器 土師器	B (17.0)	胴部は内彎しながらゆるやかに立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P465 15%

第67号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第126図 20	管状土錘	DP89	(5.2)	(2.5)	—	(16.6)	孔径0.6cm, 黒色, 30%
21	管状土錘	DP90	(4.5)	(2.2)	—	(10.0)	孔径0.6cm, 黒色, 20%
22	不明(鉄製)	M 32	(3.4)	0.6	—	(2.3)	
23	刀子	M 31	(5.2)	1.2	0.4	(5.8)	



第126图 第67号住居跡出土遺物実測図

第68号住居跡（第127図）

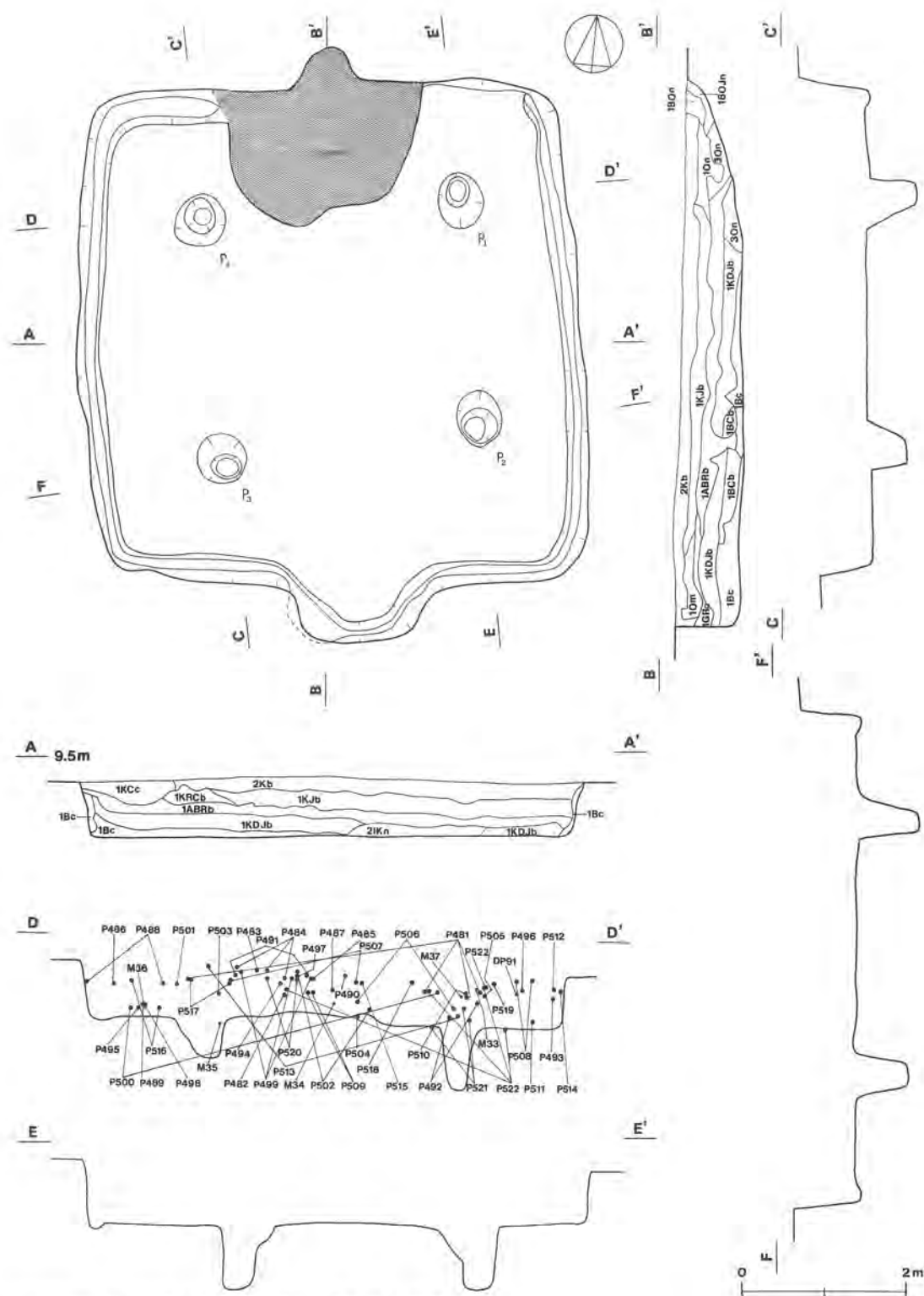
本跡は、B4h8区を中心に確認され、第67号住居跡の北東側に接して位置している。本跡の北東側は第69号住居跡と重複している。本跡が第69号住居跡の南東壁を切っていることや出土遺物から、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸7.0m・短軸6.2mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-5°-Wを指している。壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。南壁の中央部付近に、幅130cm・壁外へ80cmほどはりだした部分が付設されている。底面はよく踏み固められて硬いことから出入口部と思われる。壁下には、幅16~30cm・深さ5~8cmの壁溝が検出され、カマドの部分を除き周回している。床面はローム粒子・粘土粒子多量、ハードローム小ブロック・明黄褐色粘土の中ブロックを少量含む黒褐色土で床を貼り、カマドの手前からピットの内側を中心に硬く踏み固められている。床下は全面的に、凹凸がみられ、中央が10cm前後高くなっている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部は崩れているが、袖部は山砂と礫を少量混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子・焼土小ブロックが含まれている。調査した部分は、長さ130cm・幅190cm、壁外へ55cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁~P₄の4か所検出され、径は65cm、深さは50~80cmの規模を有し、配置からいずれも支柱穴と思われる。

覆土は、上層にはローム粒子多量、焼土粒子少量含む暗褐色土が、中層にはローム粒子中量、粘土小ブロック・焼土粒子少量、木炭粒子・ソフトローム小ブロック極少量含む暗褐色土が、下層にはローム粒子中量、焼土粒子・粘土小ブロック少量、ソフトローム小ブロック極少量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器と須恵器、土製品、鉄製品が出土している。これらの多くは破片で、覆土中層から下層にかけて集中している。須恵器は、中央部や東壁南寄りの床面直上から蓋6点（第130図24~26・29・34・35）、中央部南寄りの床面直上から坏（第129図13）が出土し、土師器は、中央部やカマド周辺・北東コーナー部の覆土中層から甕形土器8点（第129図1~8）が出土している。その他、中央部や東壁中央部の覆土中層から鎌（第130図42）・刀子（第130図45・46）が出土し、さらに、同所から須恵器の台付盤2点（第130図36・37）・坏6点（第129図11・12・14~16）・（第130図17）・蓋5点（第130図22・23・27・28・30）も出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第127图 第68号住居跡実測図・遺物出土位置図

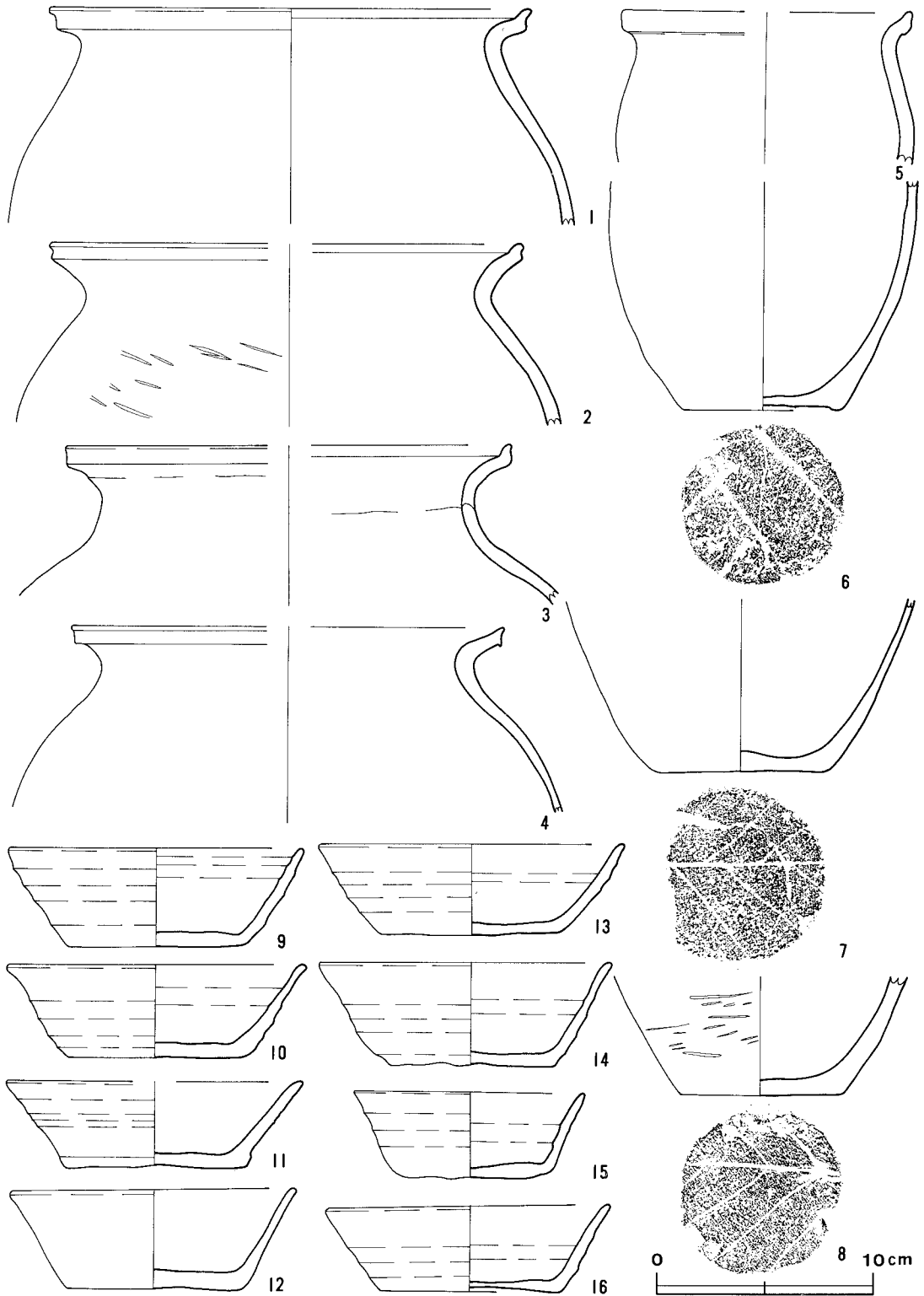
図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
7	甕形土器 土師器	B (8.1) C 8.0	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 487 底部木葉痕 10%
8	甕形土器 土師器	B (5.5) C 7.7	底部は平底で、胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫・石英 褐色 普通	P 486 底部木葉痕 5%
9	坏 須恵器	A 13.6 B 4.6 C 8.1	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて不定方向の手持ち削り。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P 499 90%
10	坏 須恵器	A 13.5 B 4.4 C 8.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 灰白色 普通	P 500 70%
11	坏 須恵器	A (13.7) B 4.0 C 8.5	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 黄灰色 普通	P 501 70%
12	坏 須恵器	A 13.0 B 4.8 C 8.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P 502 80%
13	坏 須恵器	A 14.2 B 4.1 C 8.3	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫・雲母・ 石英 褐灰色 普通	P 504 100%
14	坏 須恵器	A 13.6 B 4.9 C 7.5	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P 505 95%
15	坏 須恵器	A 10.7 B 4.0 C 7.5	底部は平底で、体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。	砂礫 灰色 普通	P 503 80%
16	坏 須恵器	A 13.1 B 4.1 C 8.4	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 灰色 普通	P 506 90%
第130図 17	坏 須恵器	A (14.2) B 4.7 C (7.5)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部は不定方向の手持ちヘラ削り。ロクロ回転方向右。	細砂・石英・雲母 灰色 普通	P 507 40%
18	高台付坏 須恵器	A (17.4) B 7.1 D 11.5 E 1.5	底部は平底で、体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 底部内面と高台内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 オリーブ黒色 普通	P 495 20%
19	高台付坏 須恵器	A (14.2) B 5.9 D 8.6 E 0.9	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P 496 75%
20	高台付坏 須恵器	A (15.0) B 5.4 D (8.5) E 1.2	体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反し、口縁端部は丸い。高台は「ハ」の字状に開き、外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・砂礫 黄灰色 普通	P 497 40%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
21	高台付坏 須恵器	B (3.6) D 9.4 E 1.4	底部は丸底気味で、高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 褐灰色 普通	P498 20%
22	蓋 須恵器	A (12.0) B 2.5 G 2.2 H 1.0	宝珠状のつまみを持ち、口径に比して器高が底く、天井部はやや平坦で、口縁部は下方に屈曲する。天井部と口縁部の境界に稜を持つ。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・長石粒・鉄分 灰色 普通	P517 30%
23	蓋 須恵器	A (15.9) B 3.2 G 3.2 H 0.9	天井部中央に、やや扁平なボタン状のつまみが付く。天井部はやや平坦で、口縁部は下方に屈曲する。天井部と口縁部の境界に稜を持つ。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石粒 灰色 普通	P518 30%
24	蓋 須恵器	A (16.0) B 4.0 G 3.5 H 1.2	つまみは擬宝珠状を呈し、天井部からなだらかに口縁部に下降する。口縁端部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。	砂礫 灰色 普通	P509 60%
25	蓋 須恵器	A 14.2 B 3.7 G 2.6 H 0.9	つまみは宝珠状を呈し、天井部から口縁部にかけてなだらかに張りを見せる。口縁部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。	細砂・礫・石英 褐灰色 普通	P511 95%
26	蓋 須恵器	A 15.7 B (2.4)	天井頂部は丸味を帯び、なだらかに下降し、口縁部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石粒・礫 黄灰色 普通	P521 70%
27	蓋 須恵器	A 16.2 B (2.8)	天井部からなだらかに口縁部へ移行する。口縁端部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部周辺は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P520 80%
28	蓋 須恵器	B (2.5) G 2.7 H 1.2	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部はやや丸味を帯びる。	水挽き成形。 天井部周辺は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・長石粒 褐灰色 普通	P519 20%
29	蓋 須恵器	A (19.3) B 4.3 G 2.6 H 1.3	つまみは擬宝珠状を呈し、天井部からなだらかに口縁部に下降する。口縁端部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 褐灰色 普通	P508 50%
30	蓋 須恵器	A (19.7) B 4.1 G 2.9 H 1.6	つまみは擬宝珠状を呈し、天井部からなだらかに口縁部に下降する。口縁端部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P510 35%
31	蓋 須恵器	B (4.8) G 3.1 H 1.4	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は丸味を帯び、なだらかに下降し、口縁部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部周辺は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石粒 褐灰色 普通	P514 40%
32	蓋 須恵器	A (16.9) B 4.0 G 2.8 H 1.1	天井部中央にやや扁平なボタン状のつまみが付く。天井部の頂部はなだらかな張りを見せ、肩から直線的に開きながら下がり、口縁部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。	細砂・礫・砂礫 灰色 普通	P515 40%

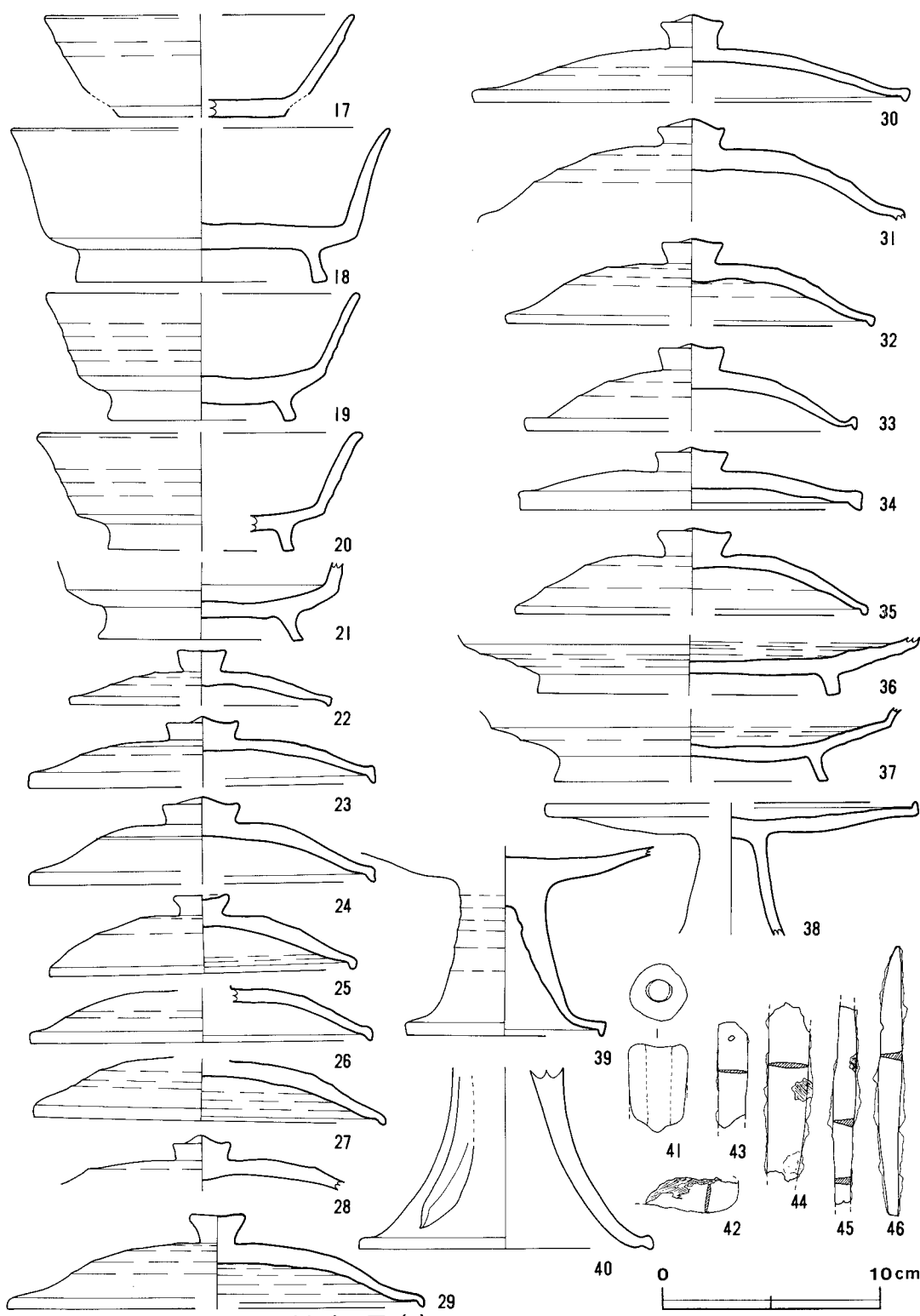
図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
33	蓋 須 恵 器	A (15.2) B 4.0 G 3.0 H 1.2	天井部中央に、やや扁平なボタン状のつまみが付く。天井部は丸味を帯び、なだらかに下降し、口縁部は下方に屈曲する。天井部の境界に明瞭な稜を持つ。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・長石粒・鉄分 褐灰色 普通	P 516 30%
34	蓋 須 恵 器	A 15.6 B 2.9 G 3.3 H 1.1	つまみは宝珠形を呈し、天井部より丸味をもって開き、口縁部は「く」の字状に屈曲する。	水挽き成形。 天井部周辺部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。	砂礫・雲母・石英 灰黄色 普通	P 512 100%
35	蓋 須 恵 器	A (16.2) B 4.0 G 3.4 H 1.3	つまみは宝珠状を呈し、天井部はやや丸味を帯び、なだらかに下降し、口縁部は下方に屈曲する。天井部と口縁部の境界にやや明瞭な稜を持つ。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫・長石粒 灰色 普通	P 513 30%
36	台 付 盤 須 恵 器	B (2.7) D (13.9) E 1.0	底部は平底で、体部は僅かに内彎して立ち上がり、高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 底部内面と高台内・外面横ナデ。	細砂・礫・黒雲母 褐灰色 普通	P 492 40%
37	台 付 盤 須 恵 器	B (3.3) D (12.6) E 1.2	平坦な底部から体部は外彎気味に外上方に開き、口縁部で屈曲して内傾する。高台は「ハ」の字状に開き、接地面は平坦である	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 底部内面と高台内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 灰黄褐色 普通	P 493 65%
38	高 盤 須 恵 器	A (17.2) B (5.6)	皿部は外上方に大きく開く。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部をやや丸くおさめている。脚部は「ハ」の字状に開いてのびる。	水挽き成形。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰色 普通	P 491 30%
39	高 坏 須 恵 器	B (8.4) D 8.9 E 7.0	透しのない脚部で、脚裾部は反る。	水挽き成形。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P 494 40%
40	高 坏 須 恵 器	D 13.5 E (7.9)	透し孔が4か所ある脚部で、端部は上方にのび、段をなす。	脚部内・外面横ナデ。	細砂・礫 暗赤灰色 普通	P 522 40%

第68号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

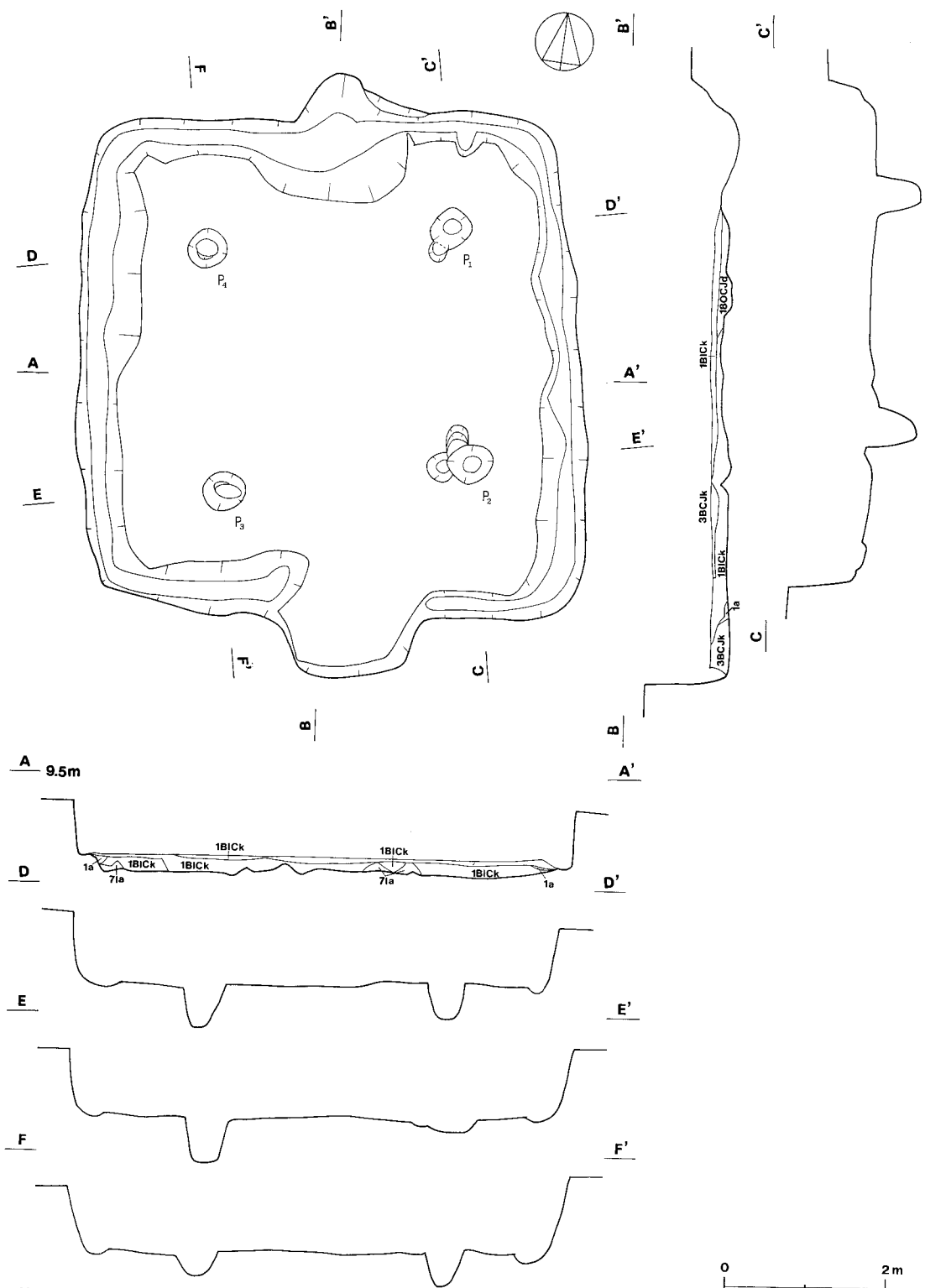
図面番号	名 称	台帳番号	大 き さ (cm)			重 量 (g)	備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
第130図 41	管 状 土 錘	D P 91	(4.1)	3.7	—	(27.4)	孔径1.2cm, 浅黄橙色, 40%
42	鎌	M 33	(4.2)	1.7	0.3	(2.6)	
43	不明(鉄製)	M 37	(5.0)	1.5	0.2	(2.9)	
44	不明(鉄製)	M 36	(8.2)	2.0	1.4	(14.3)	
45	刀 子	M 35	(9.1)	1.2	0.4	(12.5)	
46	刀 子	M 34	(12.5)	1.3	0.7	(16.0)	



第129图 第68号住居跡出土遺物実測図(1)



第130图 第68号住居跡出土遺物実測図(2)



第131図 第68号住居跡掘り方実測図

第69号住居跡 (第133図)

本跡は、B4gs区を中心に確認され、第67号住居跡の北東側3.5m、第17号住居跡の北西側4.3mに位置している。本跡の南東側は第68号住居跡と重複しており、出土遺物から本跡は第68号住居跡より古い遺構である。

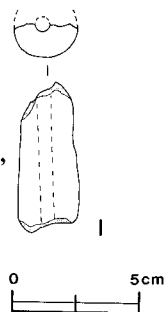
平面形は、長軸4.1m・短軸3.0mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-10°-Eを指している。壁高は10~18cmで、壁は縮まりのある暗褐色土で外傾して立ち上がっている。床面は暗褐色土で、やや軟らかい状態である。ピットとカマドは検出できなかった。

覆土は、ローム粒子を中量含む暗褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈している。

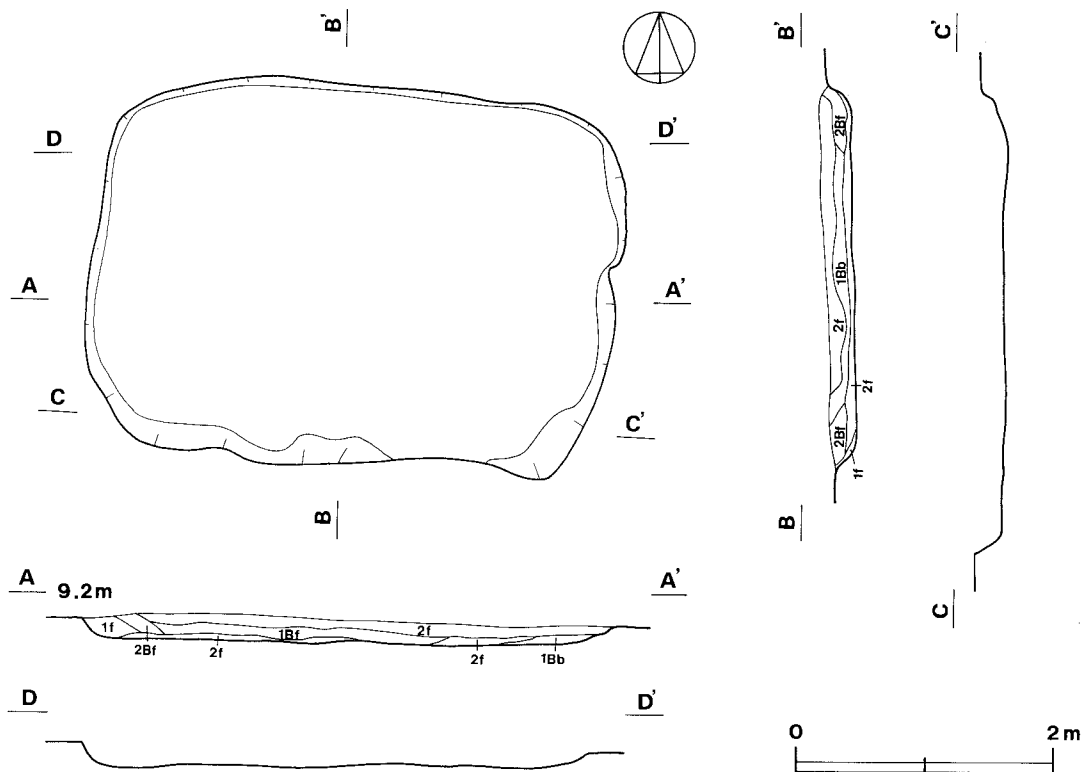
本跡は、床面も硬い部分がなく、柱穴やカマド(炉)も存在していないことから、当遺跡の住居跡群とは性格の異なる遺構と思われる。

遺物は少なく、南東コーナー部の壁際及び中央部の覆土下層から土師器の甕形土器や坏形土器、須恵器の坏、管状土錘(第132図1)が出土している。土器はすべて破片で、まとまった器形にならなかった。

本跡は、出土遺物から古墳時代の和泉期以降に比定されるものと思われる。



第132図 第69号住居跡出土遺物実測図



第133図 第69号住居跡実測図

第69号住居跡出土土製品解説表

図面番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第132図 1	管状土錘	D P 92	(6.0)	(2.5)	—	(15.1)	孔径0.7cm, 灰白色, 30%

第70号住居跡 (第134図)

本跡は、C3a0区を中心に確認され、第64号住居跡の西側6.5m、第57号住居跡の西側9.5mに位置している。本跡の南西コーナー部及び西壁は第5号溝・第362号土坑と重複しており、土層断面から本跡が第5号溝を切っているため、本跡の方が新しい遺構である。また、本跡の西壁を第362号土坑によって切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸4.25m・短軸3.8mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-5°-Eを指している。南西コーナー部から北西コーナー部にかけて重複しているため、壁の立ち上がりは不明であるが、その他の壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10~14cm・深さ6~8cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は全体的に平坦で、カマドの手前から南壁にかけての幅2.8mの範囲内は、ロームが硬く踏み固められている。また、東壁寄りの床面に焼土が径50cmの範囲で極薄く残存している。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部・袖部の大半は崩れている。残存している袖部は山砂と礫を混ぜた粘土で構築されており、内側は熱を受けて焼土化している。カマドの覆土は中量の焼土粒子を含む暗赤褐色土である。調査した部分は、長さ140cm・幅160cm、壁外へ85cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を13cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。ピットはP₁~P₂の2か所検出され、径は15~20cm、深さは15~20cmの規模を有し、配置からいずれも支柱穴と思われる。

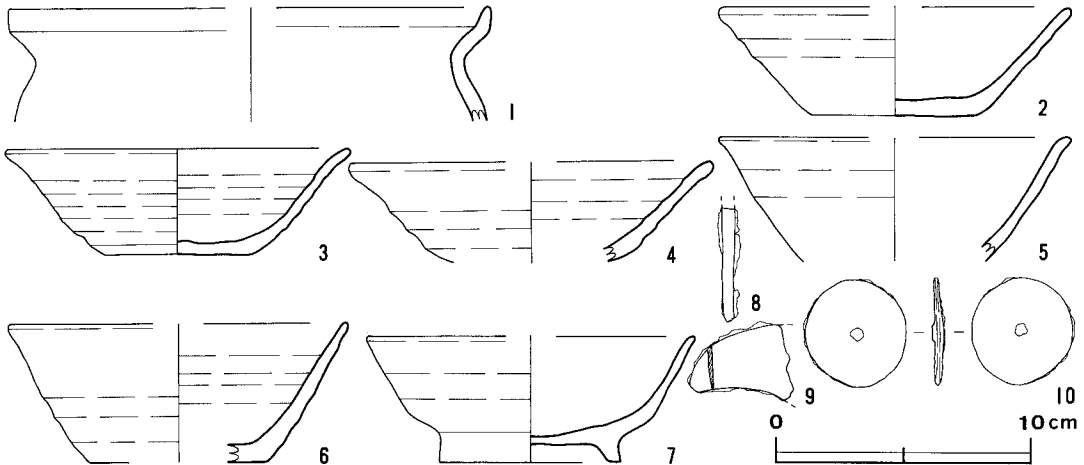
覆土は、暗褐色土を主体として自然堆積の様相を呈し、上層にはローム粒子多量、焼土粒子・木炭粒子極少量、下層にはローム粒子多量、木炭粒子・焼土粒子少量を含んでいる。また、壁際にはローム粒子多量、焼土粒子少量含む黒褐色土が堆積している。

遺物は、多量の土師器とともに、須恵器、鉄製品が出土している。これらの多くは破片で、本跡全域の覆土中層から下層にかけて集中している。中央部の覆土下層から土師器の坏形土器 (第135図2) が出土し、また、同所から斜位で須恵器の高台付坏 (第135図7) ・坏 (第135図4)、北東コーナー部の覆土中層から正位で須恵器の坏 (第135図3) が出土している。その他、東壁中央部の床面直上から鉄製の紡錘車 (第135図10) が出土し、中央部の覆土下層から須恵器の坏 (第135図6)、土師器の坏形土器 (第135図5) ・甕形土器の口縁部片 (第135図1)、鎌 (第135図9) も出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第70号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第135図 1	窠形土器 土師器	A (19.0) B (4.5)	口縁部は外反しながら立ち上がる。 口縁部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ナデ。	砂粒・礫・石英・ 雲母 明褐色 普通	P523 5%
2	坏形土器 土師器	A (13.9) B 4.3 C 6.5	底部は平底で、体部は直線的に外 上方へ立ち上がり、口縁端部は丸 い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて不 定方向の手持ちへら削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P526 30%
3	坏 須恵器	A 13.4 B 4.2 C 5.8	底部は平底で、体部は内彎気味に 外上方へ立ち上がり、口縁部は外 反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて不 定方向の手持ちへら削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫・雲母 黄灰色 普通	P525 100%
4	坏 須恵器	A (14.3) B (3.9)	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち 上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて不 定方向の手持ちへら削り。	細砂・礫 褐色 普通	P527 45%
5	坏形土器 土師器	A (13.8) B (4.9)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上 がり、口縁端部は僅かに外反する。	水挽き成形。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P529 35%
6	坏 須恵器	A (13.5) B 5.5 C (7.0)	底部は平底で、体部は直線的に立 ち上がる。	水挽き成形。 底部手持ちへら削り。	砂礫 褐色 普通	P528 30%
7	高台付坏 須恵器	A (13.0) B 5.0 C 7.1 E 1.0	体部は直線的に外上方へ立ち上 がり、口縁端部は丸い。高台は外下 方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回 転へら削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐色 普通	P524 70%



第135図 第70号住居跡出土遺物実測図

第70号住居跡出土鉄製品解説表

図面番号	名 称	台帳番号	大 き さ (cm)			重 量 (g)	備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
第135図 8	不明(鉄製)	M38	(4.6)	0.6	—	(3.3)	
9	鎌	M40	(4.2)	3.1	0.3	(7.4)	
10	紡 錘 車	M39	—	4.3	0.6	12.1	孔径0.5cm, 100%

第71号住居跡 (第136図)

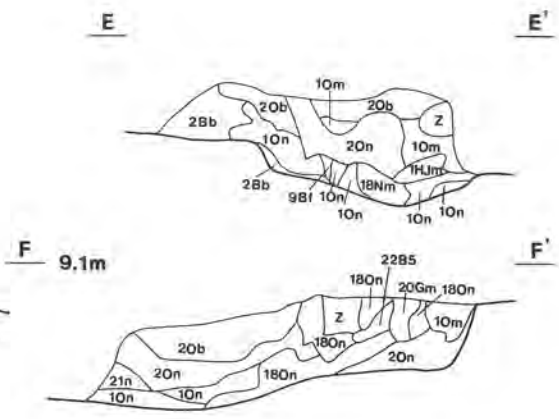
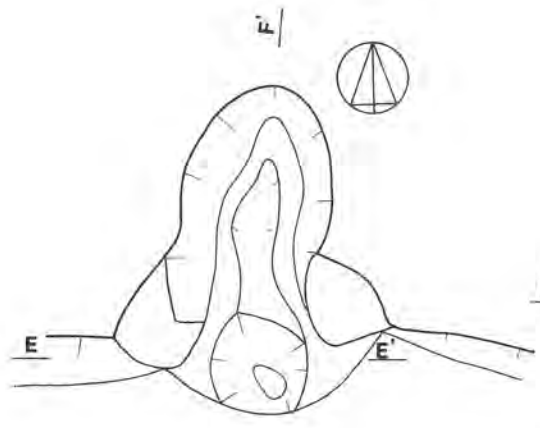
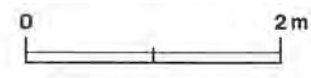
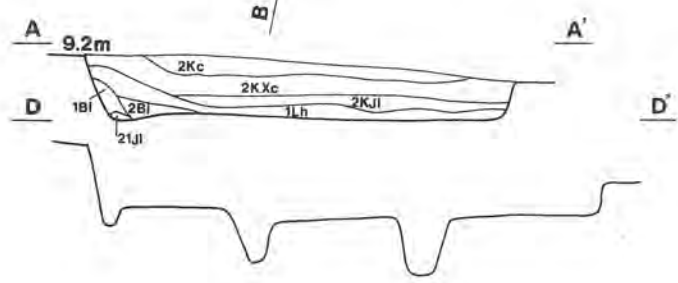
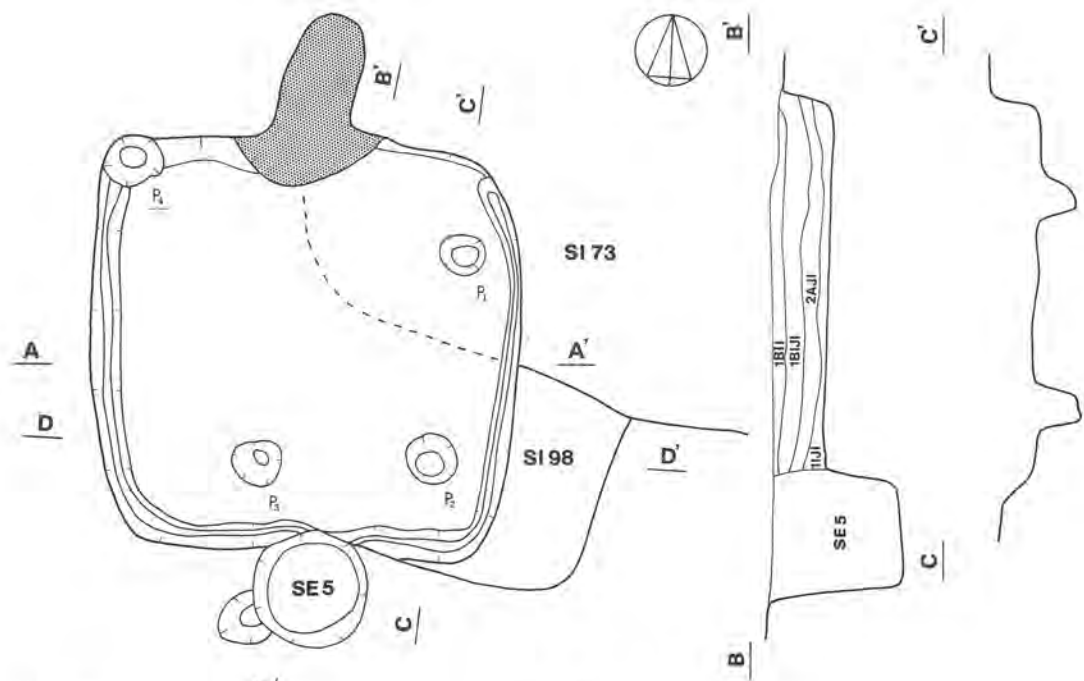
本跡は、B4e6区を中心に確認され、第11号住居跡の南側6.0m、第95号住居跡の北東側6.0mに位置している。本跡の北東側は第72・73・98号住居跡と重複しており、本跡が第72・73・98号住居跡を切ってカマドを構築していることから、本跡の方が新しい遺構である。なお、第5号井戸により本跡の南壁中央部が切られている。

平面形は、長軸3.35m・短軸3.25mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-3°-Wを指している。壁高は40cmで、壁は縮まりのある暗褐色土でほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅15~30cm・深さ6~12cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面はローム粒子や粘土粒子を中量含む暗褐色土で床を貼り、よく踏み固められて平坦である。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部・袖部は崩壊している。残存している袖部は山砂に礫を少量混ぜた粘土で構築されており、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ160cm・幅110cm、壁外へ100cm掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。

覆土は、上層にローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土、中層にローム粒子・焼土粒子・粘土小ブロック・小砂利を含む暗褐色土、下層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器、須恵器、鉄製品、土製品が出土している。これらは破片で、散在して出土している。土師器は、中央部の床面直上から甕形土器の口縁部(第137図3)が出土し、東壁中央部の壁際から正位で重なった状態で坏形土器2点(第137図6・7)、南西コーナー部の床面直上から横位で小型壺形土器(第137図9)、カマドの燃烧部から甕形土器の口縁部片2点(第137図2・5)・坏形土器(第137図8)が出土している。須恵器でも、中央部の床面直上から伏せた状態で高台付坏(第137図11)が出土している。その他、南西コーナー部の床面直上から釘(第137図13)が出土し、中央部の床面直上から球状土錘(第137図12)も出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



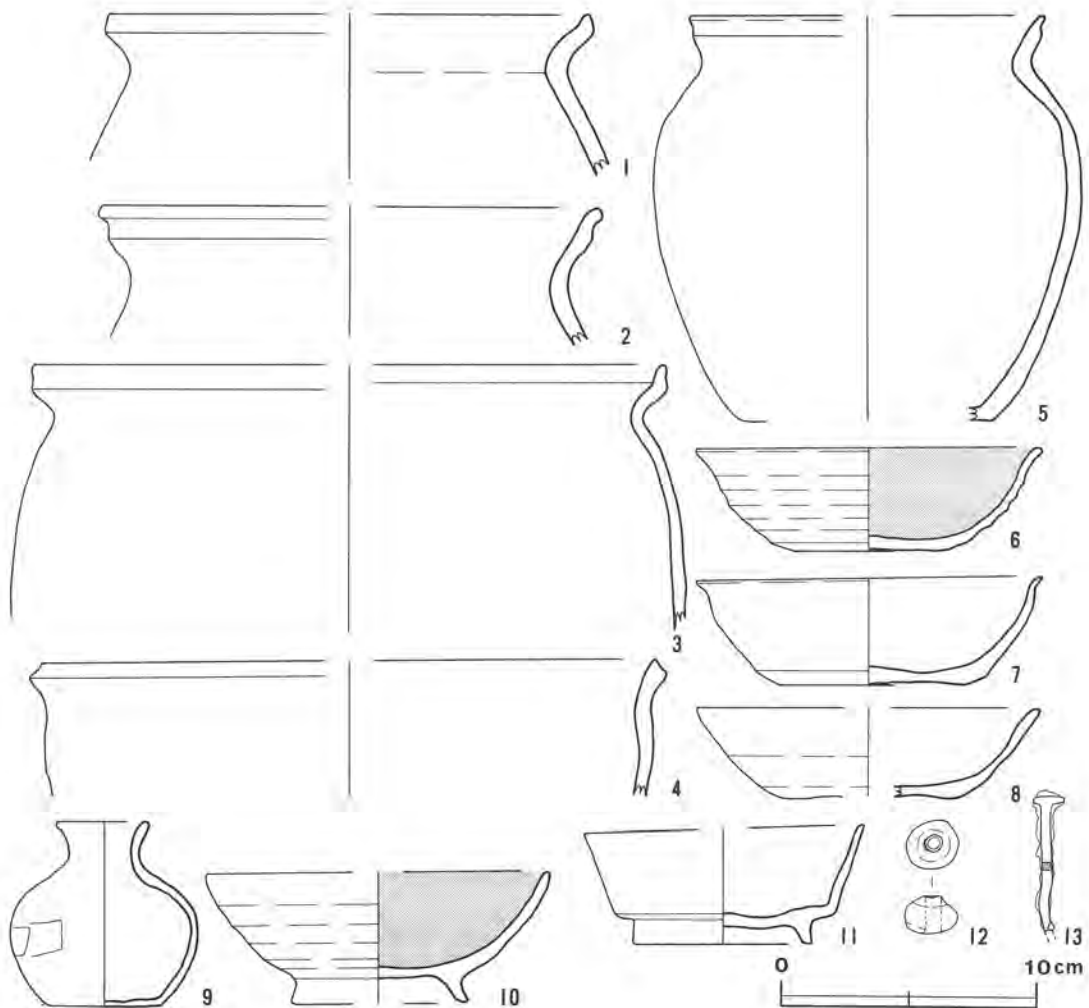
第136图 第71号住居跡実测图

第71号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第137図 1	甕形土器	A (18.8)	口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P533 10%
	土師器	B (6.4)				
2	甕形土器	A (19.4)	口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P531 5%
	土師器	B (5.2)				
3	甕形土器	A (24.8)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P530 10%
	土師器	B (10.0)				
4	甕形土器	A (29.1)	口縁部は僅かに外反している。	口縁部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色・黒色 普通	P532 10%
	土師器	B (5.2)				
5	甕形土器	A (13.9)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 にぶい褐色 普通	P534 30%
	土師器	B 16.0 C 9.8				
6	坏形土器	A 13.4	底部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P537 内面黒色処理 100%
	土師器	A 4.1 C 5.9				
7	坏形土器	A 13.4	底部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 内面明赤褐色 普通	P538 70%
	土師器	B 4.3 C 7.2				
8	坏形土器	A (13.5)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P539 50%
	土師器	B 3.6 C (6.8)				
9	小型壺形土器	A 3.6	底部は平底で、胴部は丸味を持つ。頸部は直立して、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面上位横ナデ。中位から下位にかけて横位のヘラ削り。	細砂 にぶい橙色・黒色 良好	P535 100%
	土師器	B 7.3 C 4.4				
10	高台付坏形土器	A (13.4)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。高台は「ハ」の字状に外下方にのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。	細砂 淡褐色 普通	P536 内面黒色処理 20%
	土師器	B 5.2 D (7.0) E 1.1				
11	高台付坏須恵器	A (11.0)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒 黄灰色 普通	P540 55%
		B 4.7 D 7.1 E 1.0				

第71号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

図面番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第137図 12	球状土錘	DP64	1.5	2.0	—	5.0	孔径0.6cm, 灰褐色, 100%
13	釘	M 41	(5.3)	0.5	—	(3.5)	



第137図 第71号住居跡出土遺物実測図

第72号住居跡 (第139図)

本跡は、B4e7区を中心に確認され、第12号住居跡の南西側1.2m、第11号住居跡の南東側3.5mに位置している。本跡の南側で第71・98号住居跡、東側で第73号住居跡と重複しており、本跡が第73号住居跡の西側半分を切っていることから、本跡の方が新しい遺構であり、第71・98号住居跡は本跡南側上層に構築していることから、本跡の方が古い遺構である。

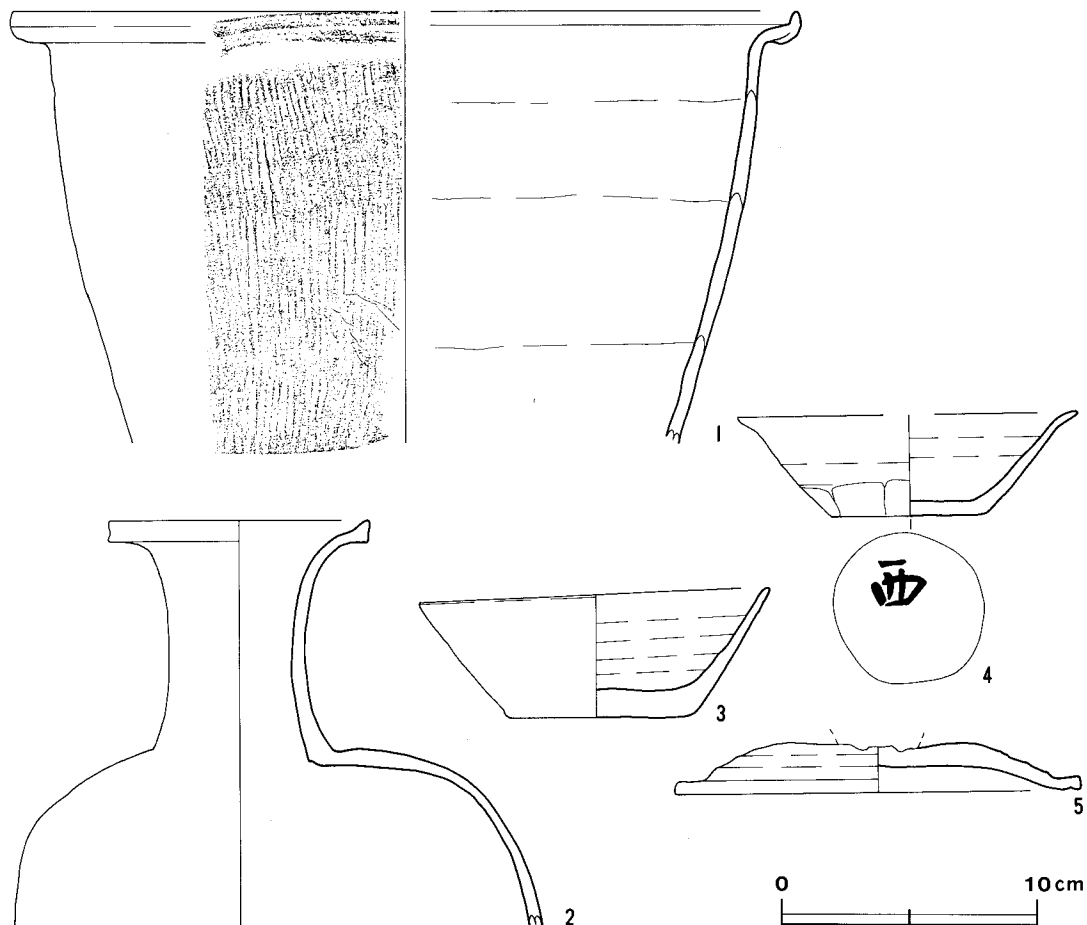
平面形は、長軸4.1m・短軸3.75mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを指している。壁は重複している部分を除いて締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。南東コーナーから北東コーナー壁下には、上幅10cm・深さ2cmほどの壁溝を検出した。床面は、重複している部分に粘土粒子を多量に含む黒褐色土で床を貼り、全体的に平坦で、カマドの手前から南壁にかけての幅130cmほどの範囲内は、特によく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されてお

り、天井部は崩壊しているが、袖部は山砂を含む粘土で構築されている。内側は熱を受けて焼土化している。カマドの覆土には多量の焼土粒子・焼土小ブロックが含まれている。調査した部分は、長さ140cm・幅130cm、壁外へ50cm掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。ピットは検出できなかった。

覆土は、上層にローム粒子を多量に含む暗褐色土、下層にはローム粒子を多量・ハードローム小ブロックを少量含む黒褐色土、壁際にもローム粒子を多量に含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器と須恵器で、本跡全域から散在的に出土している。いずれも破片で、覆土下層から多く出土している。東壁南側の床面直上から正位で須恵器の蓋(第138図5)・中央部の床面直上から土師器の甕形土器の口縁部(第138図1)、須恵器の長頸壺(第138図2)が出土し、また、カマドの手前の覆土下層から土師器の坏形土器(第138図4)と須恵器の坏(第138図3)が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第138図 第72号住居跡出土遺物実測図

第72号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	甕形土器 土師器	A (31.0) B (17.0)	底部から胴部中位欠損。胴部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は横に開き、口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位の平行叩き目。	砂粒 にふい黄橙色 普通	P541 10%
2	長頸壺 須恵器	A 10.3 B (16.0)	胴部は丸く張り、頸部は外反しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	頸部および口縁部は横ナデ。	細砂・砂礫 外面暗灰色、内面 褐灰色 普通	P544 30%
3	坏 須恵器	A 13.6 B 5.1 C 7.6	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部は手持ちヘラ削りで、切り離しは不明。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P542 100%
4	坏形土器 土師器	A (13.4) B 4.0 C 6.1	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒 褐灰色、内面一部 分黒色 普通	P543 底部外面墨書 「西」 70%
5	蓋 須恵器	A 16.0 B 2.1	天井部から口縁部に向かってなだかに下降し、口縁部は垂直に下方へのびる。	水挽き成形。 天井部周辺は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 灰白色 普通	P545 90%

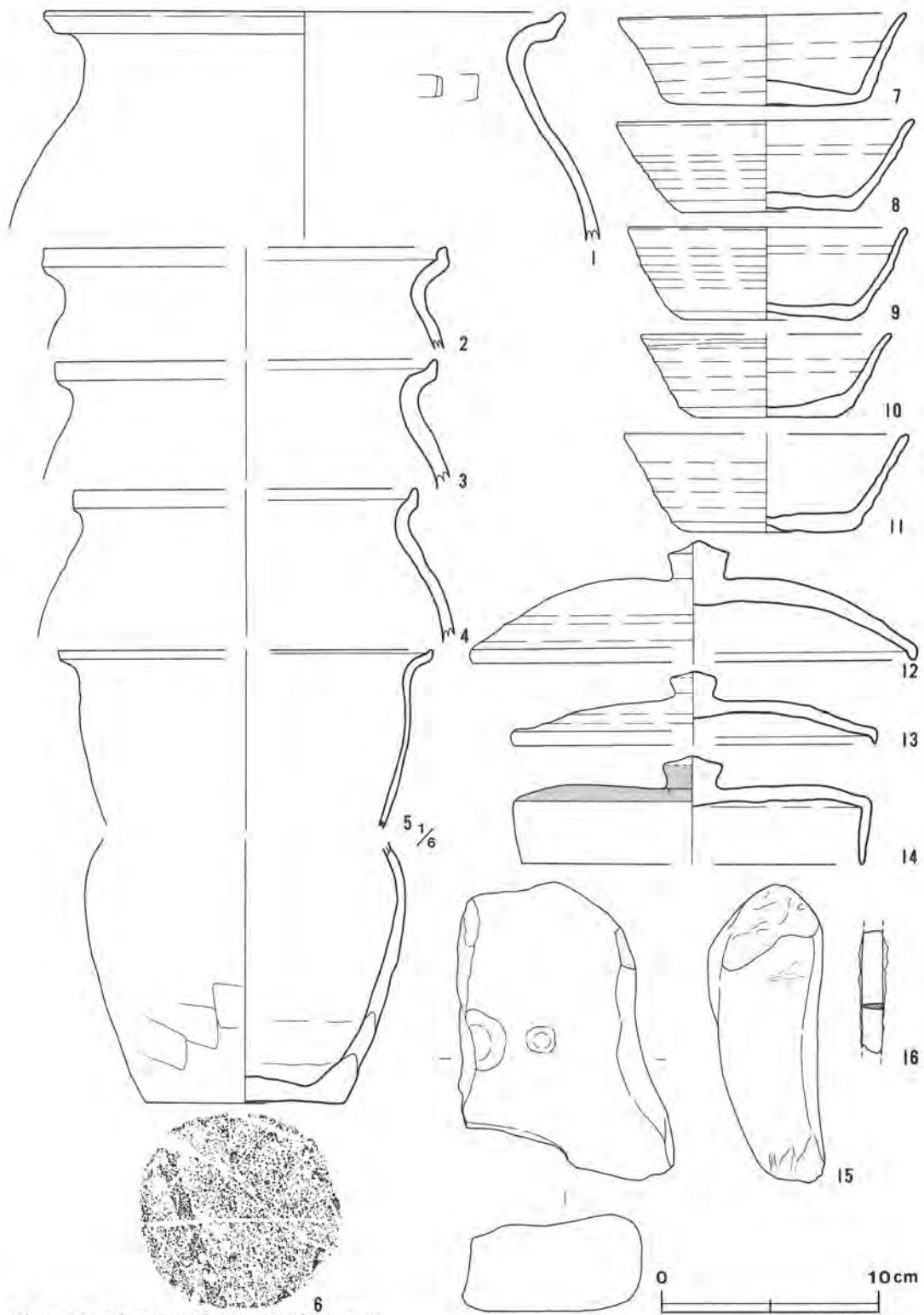
第73号住居跡（第140図）

本跡は、B4es区を中心に確認され、第12号住居跡の南側に接して位置している。本跡の南側は第71・98号住居跡と、西側で第72号住居跡と重複しており、土層断面から本跡が最も古い遺構である。

平面形は、長軸5.9m・短軸5.8mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-14°-Eを指している。壁高は50cmで、壁は重複している部分を除いて締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、北西壁コーナーから北壁にかけて第72号住居跡に切られている部分を除いて、上幅30cm・深さ4～10cmの壁溝が周回している。床面は平坦で、ロームをよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部・袖部の一部が崩壊しているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されており、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ140cm・幅130cm、壁外へ30cmほど掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の焼土粒子、中量の焼土小ブロック・木炭小ブロックが含まれている。ピットはP₁～P₄の4か所を検出した。径は33～44cm、深さは43～50cmの規模を有し、配置からいずれも支柱穴と思われる。

覆土は、上層がローム粒子多量、焼土粒子少量を含む黒褐色土、中層はローム粒子多量、粘土粒子・木炭粒子少量を含む黒褐色土、下層は粘土粒子多量、焼土粒子少量、壁際は焼土粒子多量、粘土粒子・木炭粒子少量を含む黒褐色土が堆積し、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器を主に、須恵器、鉄製品、凹石が散在している。これらの大半は破片で、覆土



第141図 第73号住居跡出土遺物実測図

下層から出土している。土師器は、東壁中央部の床面直上から甕形土器の口縁部片（第141図4）が出土し、また、カマドの燃焼部から甕形土器の口縁部片2点（第141図3・5）・須恵器の坏（第141図11）が出土している。須恵器は、南東コーナー部壁際や東壁中央部の床面直上から正位で坏3点（第141図8～10）が出土している。その他、中央部覆土中層から下層にかけて、須恵器の蓋3点（第141図12～14）・正位で坏（第141図7）、土師器の甕形土器の口縁部片2点（第141図1・2）、刀子（第141図16）も出土している。凹石は覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第73号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第141図 1	甕形土器 土師器	A 24.1 B (10.5)	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒にぶい橙色普通	P547 20%
2	甕形土器 土師器	A (18.7) B (4.7)	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒にぶい赤褐色普通	P550 5%
3	甕形土器 土師器	A (17.8) B (5.5)	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒にぶい橙色普通	P548 5%
4	甕形土器 土師器	A (15.8) B (6.8)	胴部は丸く張り、口縁部は外反して立ち上がる。口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒にぶい褐色普通	P549 5%
5	甕形土器 土師器	A (34.4) B (16.5)	胴部はほとんど張らず、口縁部は短く外反する。口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒にぶい橙色普通	P546 20%
6	壺形土器 土師器	B (12.2) C (9.2)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、中位から内傾する。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 外面灰赤色、内面 灰褐色 普通	P551 底部木葉痕 30%
7	坏 須恵器	A 13.1 B 4.4 C 9.1	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方にのび、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂 灰色 普通	P552 95%
8	坏 須恵器	A 13.5 B 4.1 C 8.0	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、不定方向の手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 明褐色 普通	P553 90%
9	坏 須恵器	A 12.6 B 4.3 C 7.7	底部は平底で、体部はやや内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反して端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 外面灰黄色、内面 灰黄褐色 普通	P554 50%
10	坏 須恵器	A (11.4) B 3.9 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめている。	水挽き成形。 底部手持ちヘラ削り。	細砂・長石粒 黄灰色 普通	P555 40%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
11	坏 須恵器	A (13.2) B 4.6 C 8.0	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒 灰色 普通	P560 50%
12	蓋 須恵器	A (20.4) B 5.6 G 2.8 H 1.7	天井部中央にやや扁平な宝珠形のつまみが付く。天井部は丸く、天井部と口縁部の境界に明瞭な稜を持ち、口縁部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部周辺は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂 灰黄色 普通	P558 40%
13	蓋 須恵器	A (16.7) B 3.3 G 2.1 H 1.1	天井部中央にやや扁平なボタン状のつまみが付く。口縁部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部周辺は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂 灰色 普通	P559 40%
14	蓋 須恵器	A (15.8) B 5.0 G 2.7 H 1.5	つまみは擬宝珠状を呈し、天井部はほぼ平坦で、端折部はやや内傾する。	水挽き成形。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂 褐色 普通	P557 つまみと天井部に自然釉が見られる。 35%

第73号住居跡出土石製品・鉄製品解説表

図面番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第141図 15	凹石	Q23	13.7	10.1	5.1	900.0	孔径0.6cm, 灰褐色, 100%
16	刀子	M42	(5.7)	1.1	0.4	(6.6)	

第74号住居跡 (第142図)

本跡は、B4f区を中心に確認され、第81号住居跡の南側1.2m、第76号住居跡の東側2.6mに位置している。

平面形は、長軸6.5m・短軸6.4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-2°-Eを指している。壁高は37cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、カマドの下を通り、上幅23cm・深さ6~8cmの壁溝が全周している。床面は平坦で、カマドの手前から南壁にかけてのピットの内側は、特にロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部の一部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂混じりの粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ135cm・幅130cm、壁外へ55cm掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の焼土粒子・木炭小ブロック、少量の木炭粒子が含まれている。ピットはP₁~P₉の9か所を検出した。P₁・P₃・P₅・P₇の径は20~40cm、深さは45~75cmの規模を有し、配置から主柱穴と思われる。P₂・P₄・P₆・P₈の径は20~30cm、深さは50cmの規模を有し、配置から補助柱穴と思われる。P₉は径30cm・深さ40cmでカマドの反対側に位置し、ピットのまわりが踏み固められていることから出入口施設に関連するピットと思われる。

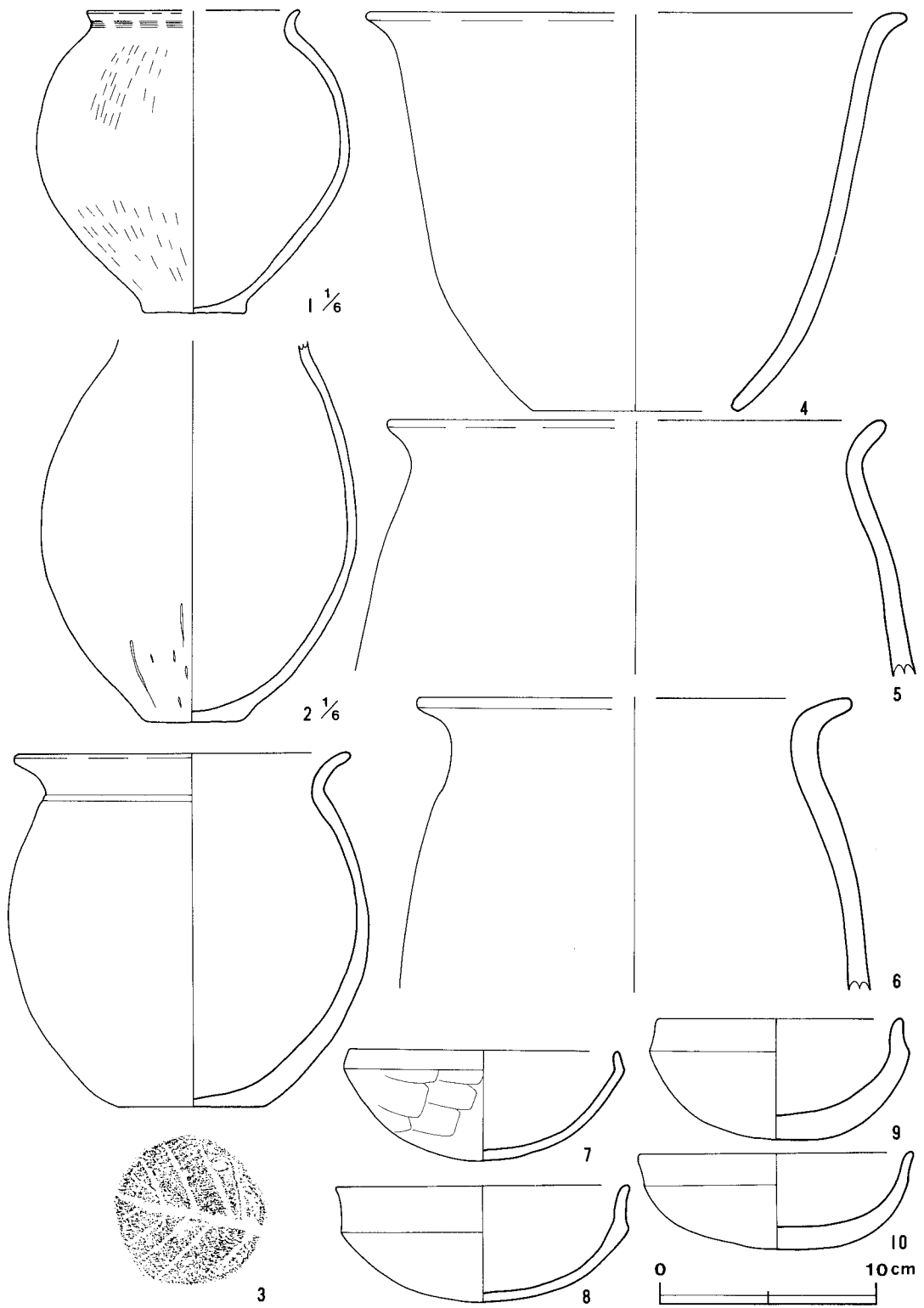
覆土は、上層にローム粒子を少量含む黒褐色土、中層にローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子を少量含む暗褐色土、下層にローム粒子・ローム小ブロック・炭化粒子を含む暗褐色土、壁際にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、多量の土師器とともに、須恵器、陶器が出土している。これらの多くは、本跡全域の覆土中層から下層にかけて出土している。土師器は、カマドの周辺から中央部にかけての床面直上から正位で、まとめて坏形土器15点（第143図7～10）・（第144図13～16・18～24）、カマドの手前の床面直上から鉢形土器2点（第144図11・17）が出土している。その他、中央部の覆土下層から支脚2点（第144図25・27）が出土している。須恵器と陶器は破片で、まとまった器形にはならなかった。

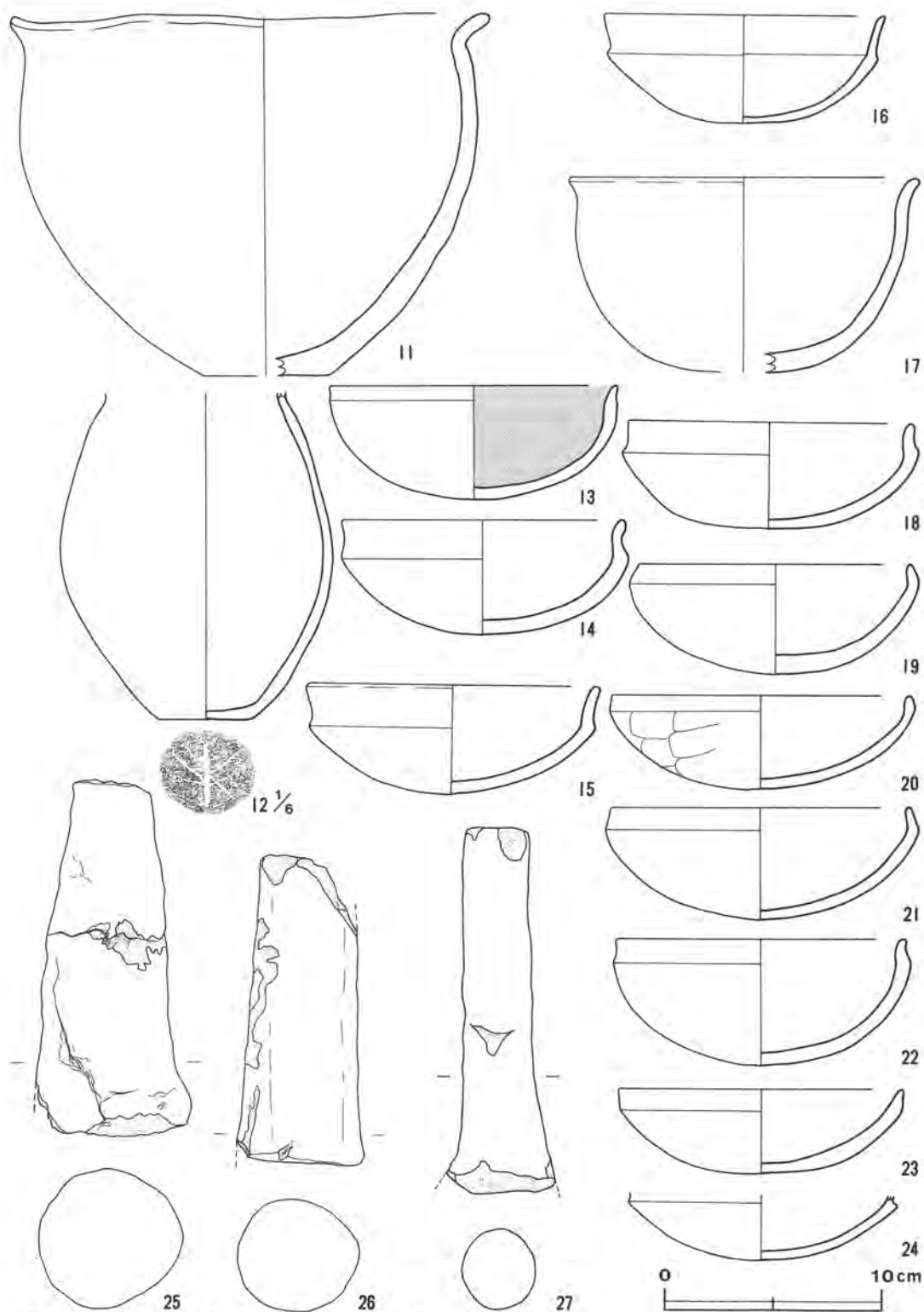
本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第74号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 1	壺形土器 土師器	A (19.8) B 28.2 C 9.5	底部は平底で、胴部は丸く張り、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・長石にぶい黄褐色普通	P566 60%
2	甗 須恵器	B (35.5) C 9.0	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、胴部中位に最大径を有する。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・長石灰白色普通	P565 60%
3	甗形土器 土師器	A 15.7 B 16.4 C 6.8	底部は平底で、胴部は丸く張り、口縁部は外反して大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫にぶい橙色・黒赤色普通	P561 80%
4	甗形土器 土師器	A (25.0) B (18.4) C 9.3	胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反しながら大きく開く。底部は正円状に抜ける。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面摩滅しているが、一部縦位のヘラ削り痕を残す。	砂粒・礫外面明赤褐色・黒色、内面にぶい橙色普通	P582 75%
5	甗形土器 土師器	A (23.0) B (11.8)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒明赤褐色普通	P563 20%
6	甗形土器 土師器	A (20.1) B (13.7)	胴部は僅かに張り、口縁部は外反しながら大きく開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒にぶい赤褐色普通	P562 15%
7	坏形土器 土師器	A 12.6 B 5.2	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短く内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒黒褐色普通	P567 100%
8	坏形土器 土師器	A 13.6 B 5.4	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒橙色普通	P568 口縁部の一部に指紋痕あり 100%
9	坏形土器 土師器	A 11.3 B 5.6	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は内傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒赤褐色普通	P569 100%



第143图 第74号住居跡出土遺物実測図(1)



第144图 第74号住居跡出土遺物実測图(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第143図 10	坏形土器 土師器	A 12.8 B 4.4	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く、僅かに外反する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 赤褐色 普通	P570 100%
第144図 11	鉢形土器 土師器	A 22.0 B 16.7 C (5.8)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 赤色 普通	P584 80%
12	甕形土器 土師器	B (30.2) C (8.7)	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、胴部中位に最大径を有する。	胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 にぶい橙褐色 普通	P564 75%
13	坏形土器 土師器	A 13.2 B 5.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 黒色 普通	P572 内面黒色処理 100%
14	坏形土器 土師器	A 13.0 B 5.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外反している。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒 赤褐色・黒色 普通	P573 100%
15	坏形土器 土師器	A 13.5 B 5.1	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒 灰褐色・黒褐色 普通	P574 100%
16	坏形土器 土師器	A 12.9 B 5.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 外面黒褐色、内面にぶい赤褐色 普通	P575 100%
17	鉢形土器 土師器	A 16.0 B 9.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒 外面にぶい橙褐色・黒色、内面浅黄橙褐色・黒色 普通	P585 80%
18	坏形土器 土師器	A 13.1 B 5.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒 浅黄橙褐色 普通	P571 100%
19	坏形土器 土師器	A 12.5 B 5.1	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く、僅かに内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 橙褐色 普通	P576 100%
20	坏形土器 土師器	A 13.8 B 4.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く、僅かに内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 黒褐色・暗赤褐色 普通	P577 100%
21	坏形土器 土師器	A 13.8 B 5.2	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く、僅かに内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 赤色 普通	P578 100%
22	坏形土器 土師器	A 13.4 B 5.9	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外反して短く外上方に立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒 赤黒色 普通	P579 90%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
23	坏形土器 土師器	A 13.2 B 3.8	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 淡橙色・黒褐色 普通	P580 90%
24	坏形土器 土師器	A (12.5) B (3.0)	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 外面赤褐色・黒色 内面赤色 普通	P581 80%

第74号住居跡出土土製品解説表

図面番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第144図 25	支脚	DP14	(16.4)	7.1	—	(593.2)	橙色
26	支脚	DP15	14.4	5.9	—	(454.3)	にぶい橙色
27	支脚	DP16	(17.0)	4.9	—	(254.5)	橙色

第75号住居跡 (第145図)

本跡は、B3d6区を中心に確認され、第102号住居跡の東側に隣接して位置している。第5号溝と重複しており、本跡は第5号溝の上層に構築していることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸4.6m・短軸4.4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-43°-Wを指している。壁高は90cmで、北東壁・南西壁は締まりのあるロームで、南東壁・北西壁は暗褐色土でいずれも垂直に立ち上がっている。壁下には、カマドの下を除いて、上幅14cm・深さ6cmほどの壁溝が周回している。カマドは北西壁中央部に付設され、袖部の一部と天井部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂を含む粘土で構築されている。内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ115cm・幅105cm、壁外へ15cmほど掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の焼土小ブロック・焼土粒子が含まれている。ピットは検出できなかった。

覆土は、ローム粒子を多量に含む暗褐色土を主体とし、その他、炭化粒子・焼土粒子少量を含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって土師器、須恵器、土製品が出土している。これらの多くは、覆土下層から床面直上にかけて出土している。土師器は、東コーナー部と中央部の床面直上から甕形土器片2点(第146図1・5)、北壁際から高台付皿形土器(第146図6)が出土している。須恵器は、カマドの北側の覆土下層から坏片4点(第146図7~10)が出土している。その他、カマドの燃焼部から正位で支脚(第146図11)が出土している。

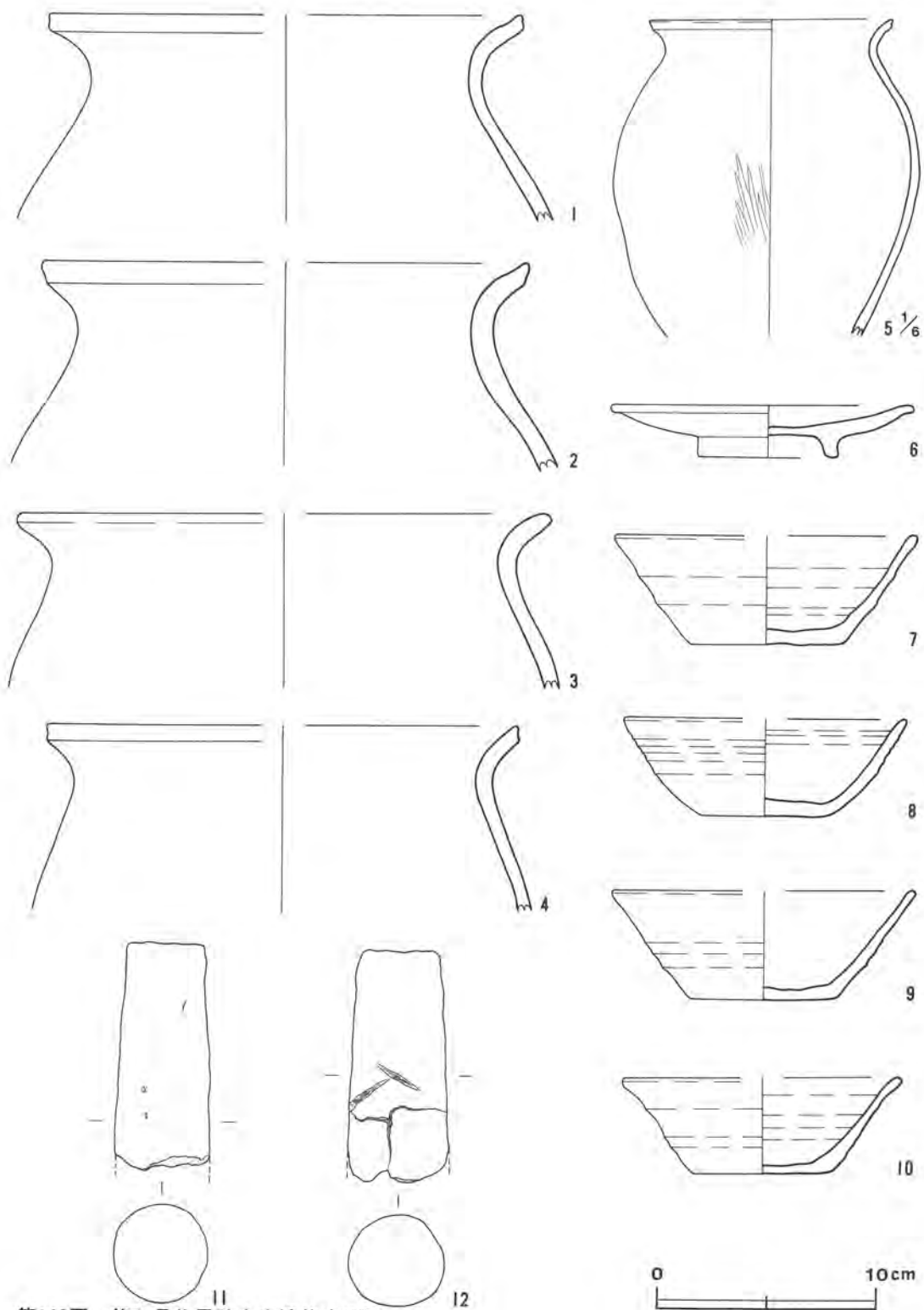
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第75号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第146図 1	甕形土器	A (21.7)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・礫 にぶい赤褐色 普通	P587 10%
	土師器	B (9.5)				
2	甕形土器	A (22.4)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・礫 外面橙色・黒褐色 内面暗赤褐色・明赤褐色 普通	P588 10%
	土師器	B (9.5)				
3	甕形土器	A (24.5)	胴部は僅かに張り、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P589 10%
	土師器	B (8.2)				
4	甕形土器	A (21.7)	胴部は僅かに張り、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P590 5%
	土師器	B (8.7)				
5	甕形土器	A (21.5)	胴部は内彎しながら上外上方へ立ち上がり、卵形を呈す。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面斜位のヘラ磨き。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色・黒褐色 普通	P586 40%
	土師器	B (29.2)				
6	高台付皿形土器	A 13.7	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は水平にのび、端部を丸くおさめている。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色・黒色 普通	P591 80%
		B 2.9				
		D 6.4				
		E 0.9				
		土師器				
7	坏須恵器	A (13.8)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・細礫 灰色 普通	P592 50%
		B 5.1				
		C 7.6				
8	坏須恵器	A (12.9)	底部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 褐灰色 普通	P593 50%
		B 4.5				
		C 6.8				
9	坏須恵器	A (13.9)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂 黄灰色 普通	P594 50%
		B 5.0				
		C 6.7				
10	坏須恵器	A (12.7)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反して端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・砂粒 暗灰黄色 普通	P595 50%
		B 4.5				
		C 6.4				

第75号住居跡出土土製品解説表

図面番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第146図 11	支脚	DP19	(10.6)	4.4	—	(235.4)	にぶい橙色
12	支脚	DP20	(10.8)	(4.8)	—	(202.1)	明褐灰色



第146图 第75号住居跡出土遺物実測図

第76号住居跡（第148図）

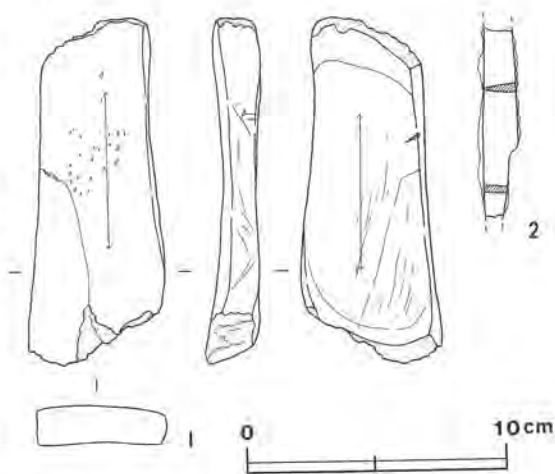
本跡は、B3e9区を中心に確認され、第80号住居跡の東側に隣接して位置している。本跡の中央部から北東側にかけて第77号住居跡と重複しており、土層断面から本跡が第77号住居跡を切っているため、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸4.83m・短軸4.35mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-8°-Wを指している。北壁・東壁の一部は前述したように第77号住居跡と重複しており、その部分の壁高は20~30cmで、その他の壁高は10cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は全体的に平坦で、重複しているところはハードロームを多量に含む暗褐色土で床を貼り、よく踏み固めている。その他の床面はロームで、やや軟らかい状態である。カマドは北壁中央部に付設され、袖部の大半と天井部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ160cm・幅130cm、壁外へ50cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を8cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットはP₁~P₄の4か所検出され、径は20~30cm、深さは10~20cmの規模で、配置からいずれも支柱穴と思われる。

覆土は、ローム粒子多量を含む暗褐色土を主体とし、その他、下層に焼土粒子・粘土粒子少量を含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、僅かに土師器片、須恵器片、鉄製品が出土している。土器片はまとまった器形にならなかった。北東コーナー部の床面直上から刀子（第147図2）と、中央部の床面直上から砥石（第147図1）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第147図 第76号住居跡出土遺物実測図

第76号住居跡出土石製品・鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第147図 1	砥石	Q34	13.7	5.5	1.6	179.4	砂岩
2	刀子	M43	(7.5)	1.6	0.5	(14.7)	

第77号住居跡（第149図）

本跡は、B3e0区を中心に確認され、第79号住居跡の南側に隣接している。本跡の中央部から南西側にかけて第76号住居跡と重複しており、本跡の上層に第76号住居跡の貼り床を検出していることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸4.7m・短軸3.8mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-15°-Eを指している。壁高は30cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、カマドを除いて、上幅14～20cm・深さ4～6cmの壁溝が周回している。床面はカマド手前付近に多少凹凸がみられるが、特にカマドの手前から南壁にかけてのピット内側は、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、袖部の大半と天井部は崩れているが、残存している袖部は山砂に礫を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ145cm・幅115cm、壁外へ65cm掘り込んでいる。燃焼部は床面を10cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットはP₁～P₄の4か所を検出した。いずれも径は20～40cm、深さは15～20cmの規模で、配置からP₁・P₂・P₄が支柱穴で、P₃はカマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。

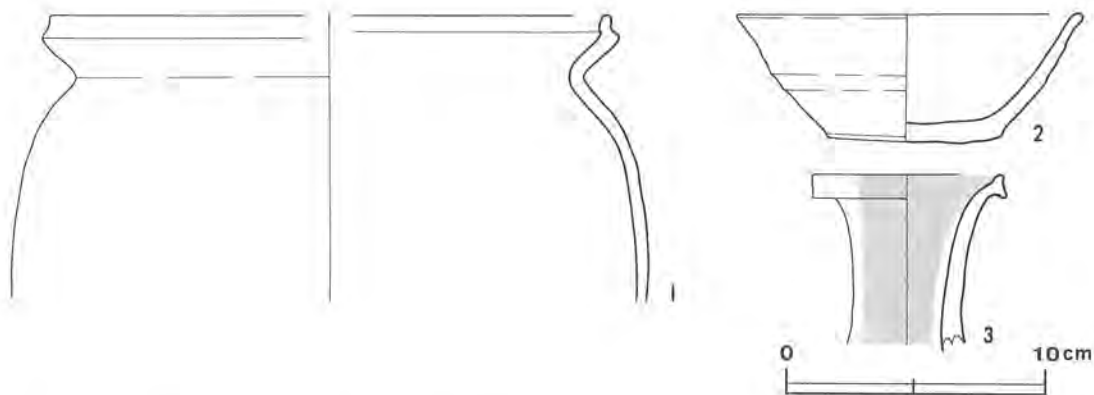
覆土は、黒褐色土を主体とし、上層にローム粒子多量、中層にハードローム小ブロック多量、下層にローム粒子多量、粘土粒子・焼土粒子少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって、土師器のほかに、須恵器、縄文式土器片が出土している。中央部の床面上から正位で須恵器の坏（第150図2）や長頸壺（第150図3）が出土している。その他、カマドの燃焼部から支脚として使用されたとと思われる土師器の環形土器片や須恵器の坏片が、粘土塊上に載って出土している。縄文式土器片は覆土上層からの出土で、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第77号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 1	甕形土器 土師器	A (21.8) B (11.3)	胴部は丸く張る。口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色・黒褐色 普通	P596 10%
2	坏 須恵器	A 13.4 B 5.1 C 6.7	底部は平底で、体部は内甕気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。	水挽き成形。 底部手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 暗灰黄色 普通	P597 100%
3	長頸壺 須恵器	A 7.4 B (6.8)	頸部は外反しながら外上方へのびて口縁部に至り、口縁端部は下方に広がって面をなす。	口縁部から頸部にかけて内・外面ナデ。	細砂 にぶい黄色・黒褐色 普通	P598 自然釉が見られる。 10%



第150図 第77号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡（第151図）

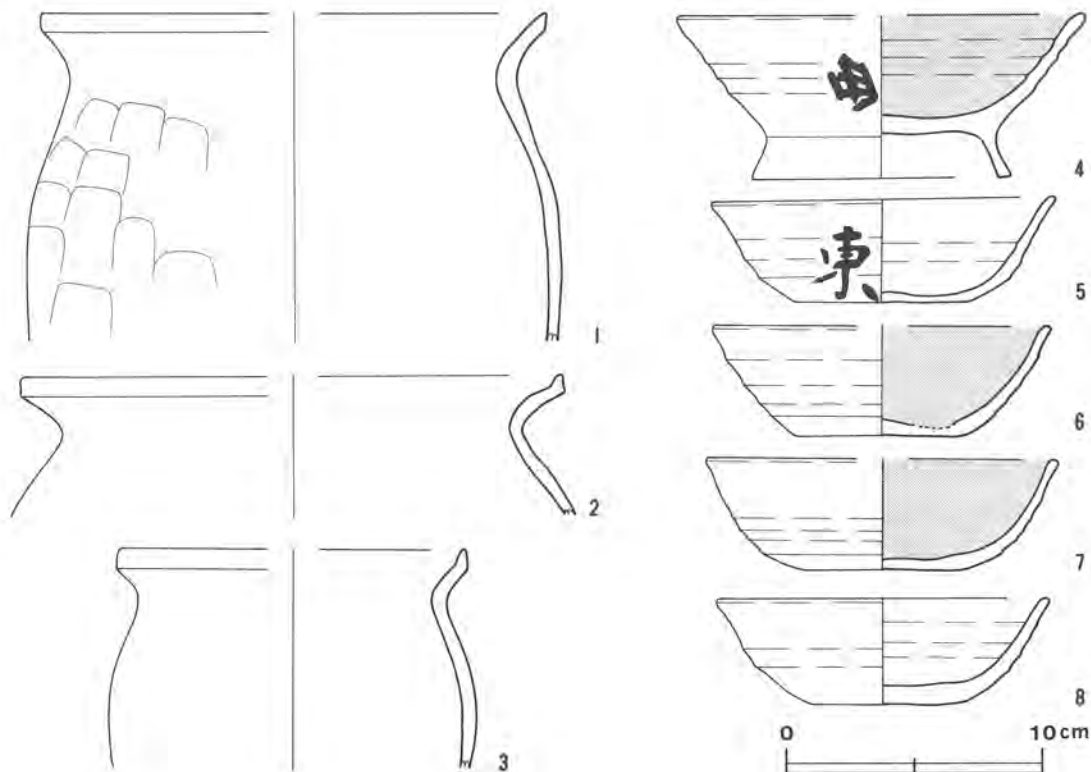
本跡は、B3d₉区を中心に確認され、第76号住居跡の北側1.5m、第81号住居跡の西側7.6mに位置している。本跡の中央部から西側にかけて第79号住居跡と重複しており、土層断面から本跡が第79号住居跡を切っているため、本跡の方が新しい遺構である。また、南東コーナー付近で第77号住居跡を切っている。

本跡は、重複している調査した部分から判断すると、平面形は長軸3.2m・短軸3.1mの方形を呈し、主軸方向はN-18°-Eを指すものと思われる。壁高は15cmで、東壁では縮まりのあるロームではほぼ垂直に立ち上がっている。その他の壁は重複のため検出できなかった。床面は重複している部分は、ローム粒子を多量に含む暗褐色土で床を貼り、北東壁付近はロームがよく踏み固められている。カマドは北東壁中央部に付設され、袖部の大半と天井部は崩壊しており、残存している袖部は山砂混じりの粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ120cm・幅110cm、壁外へ60cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を10cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットは1か所検出した。径は10cm、深さは20cmの規模で、配置から支柱穴の一部と思われる。

覆土は、黒褐色土を主体とし、上層にローム粒子多量、焼土粒子・木炭粒子少量、下層にローム粒子・焼土粒子中量、木炭粒子少量を含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器のほかに、須恵器片が出土している。土師器は、中央部の床面直上から正位で坏形土器3点（第152図5～7）・高台付坏形土器（第152図4）・甕形土器の口縁部片（第152図3）が出土し、カマドの燃焼部から伏せた状態で坏形土器（第152図8）・甕形土器片2点（第152図1・2）が出土している。須恵器片はまとまった器形にならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第152図 第78号住居跡出土遺物実測図

第78号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1	甕形土器	A (19.8)	胴部はやや張り、口縁部は外反しながら外上方に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒にぶい 橙色 普通	P599
	土師器	B (13.0)				10%
2	甕形土器	A (21.3)	口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P601
	土師器	B (5.6)				5%
3	甕形土器	A (13.6)	胴部は長胴を呈し、口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫にぶい 橙色 普通	P600
	土師器	B (8.7)				5%
4	高台付環形土器	A (15.9)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒にぶい 橙色 普通	P602
		B 6.3				体部外面墨書「西」 内面黒色処理75%
		D 10.5				
		E 1.8				
5	環形土器	A (13.4)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒にぶい 橙色 普通	P603
		B 4.2				体部外面墨書「東」 内面黒色処理75%
		C 6.8				
6	環形土器	A (13.4)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒にぶい 橙色 普通	P607
		B 4.4				内面黒色処理40%
		C 6.2				

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	坏形土器 土師器	A 13.7 B 4.4 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へ削り。 体部内面へ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫にふい橙色普通	P608 内面黒色処理 40%
8	坏形土器 土師器	A 13.2 B 4.2 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部手持ちへ削り。 ロタロ回転方向右。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P604 100%

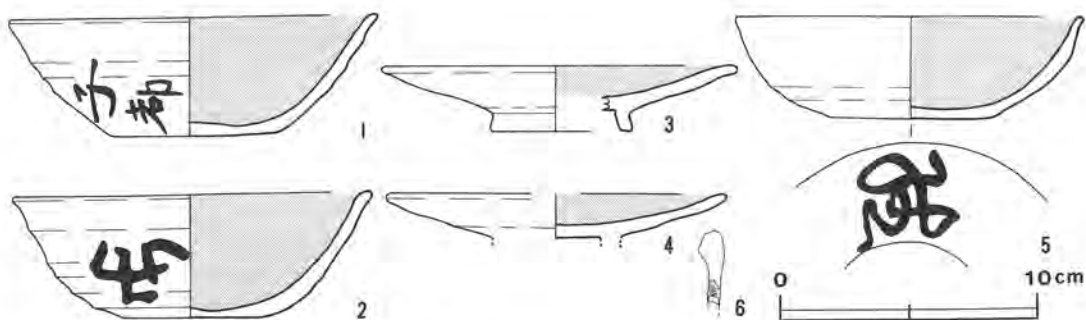
第79号住居跡（第154図）

本跡は、B3d9区を中心に確認され、第76号住居跡の北側2.0m、第77号住居跡の北側0.2mに位置している。本跡の中央部から東側にかけて第78号住居跡と重複しており、土層断面から本跡は第78号住居跡に切られているため、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸3.0m・短軸2.95mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-7°-Eを指している。壁高は25cmで、壁は縮まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。北壁下には、上幅10cm・深さ3cmほどの壁溝がある。床面は中央部付近に多少凹凸がみられるが、全体的に平坦で、よく踏み固められている。カマドは西壁中央部に付設され、袖部の大半と天井部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂混じりの粘土で構築され、内側は熱を受けて赤化している。調査した部分は、長さ130cm・幅95cm、壁外へ70cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を3cmほど掘り込み、火床は熱を受けている。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、P₂・P₃は、いずれも径は20～30cm、深さは25cmの規模を有し、配置から主柱穴と思われる。

覆土は、ローム粒子を多量に含む褐色土で、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、少量の土師器のほかに、鉄製品が出土している。これらは、ほぼ床面直上に点在している。北壁中央部の壁際や中央部の床面直上から高台付皿形土器2点（第153図3・4）、同所及びカマドの手前の床面直上から正位で坏形土器3点（第153図1・2・5）や鉄製品（第153図6）が出土している。



第153図 第79号住居跡出土遺物実測図

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第79号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第153図 1	坏形土器 土師器	A 14.3 B 4.7 C 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P605 体部外面墨書「子部」 内面黒色処理100%
2	坏形土器 土師器	A 14.0 B 5.0 C 5.4	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P606 体部外面墨書「西」 内面黒色処理100%
3	高台付皿形土器 土師器	A 14.0 B 2.6 D 5.5 E 0.7	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P609 内面黒色処理70%
4	高台付皿形土器 土師器	A (12.8) B 1.8 D (5.1)	体部は内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁部は僅かに水平にのび、端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P611 内面黒色処理30%
5	坏形土器 土師器	A 13.8 B 4.0 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P610 体部外面墨書「口」 内面黒色処理90%

第79号住居跡出土鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第153図 6	不明(鉄製)	M44	(3.0)	0.35	—	(2.0)	

第80号住居跡 (第155図)

本跡は、B3es区を中心に確認され、第76号住居跡の東側に隣接して位置している。本跡の中央部で第5号溝と重複しており、本跡が第5号溝を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸3.85m・短軸3.15mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-3°-Wを指している。壁高は35cmで、壁は北東コーナー部から東壁にかけてと、南西コーナー部は縮まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。その他の壁は重複のため検出できなかった。床面は重複している部分がローム粒子を多量に含む暗褐色土で床を貼り、他の床面は縮まりのあるロームで、特にカマド付近から南壁にかけて、幅150~160cmの範囲内はよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築

され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ190cm・幅130cm、壁外へ105cm掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、火床は赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。

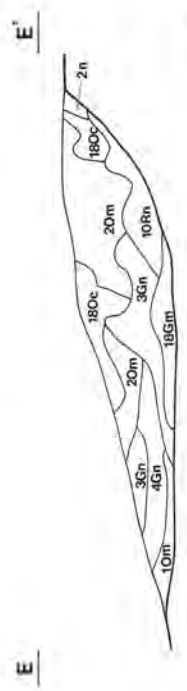
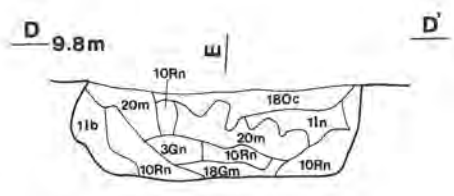
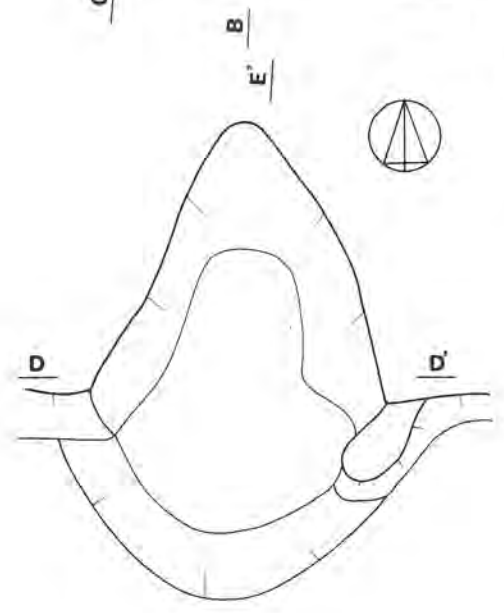
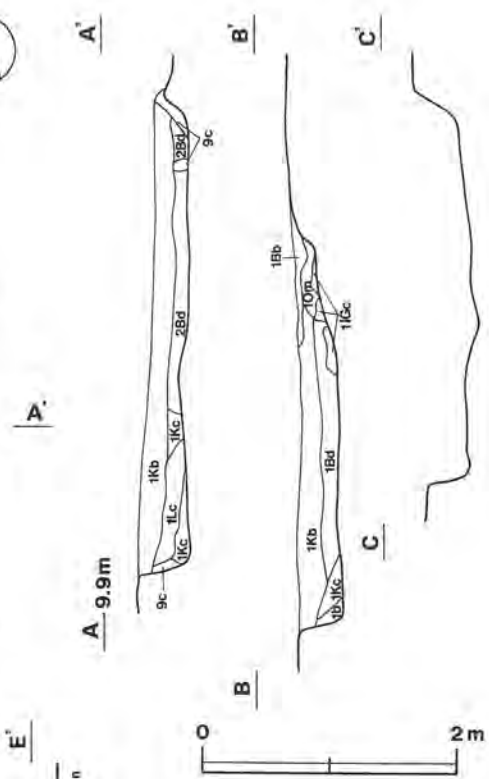
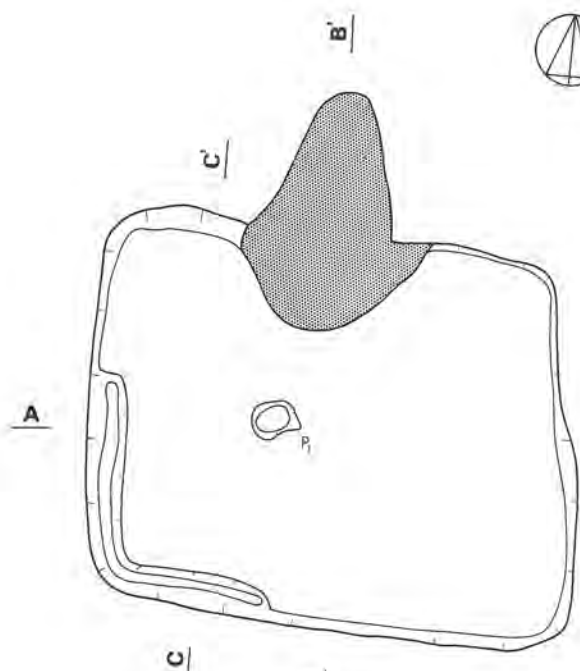
覆土は、上層にローム粒子多量、焼土粒子少量含む黒褐色土、下層に多量のローム粒子を含む暗褐色土、壁際にはローム粒子・焼土粒子中量、炭化物粒子極少量含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって、土師器を主にして、須恵器が出土している。これらの大半は破片である。土師器は、中央部の床面直上から伏せた状態で坏形土器（第156図1）、また、同所及び北東コーナー部の床面直上から正位で高台付皿形土器2点（第156図2・3）が出土し、南壁中央部の壁際から横位で高台付坏形土器（第156図4）が出土している。須恵器は、まとまった器形にならなかったものがあった。

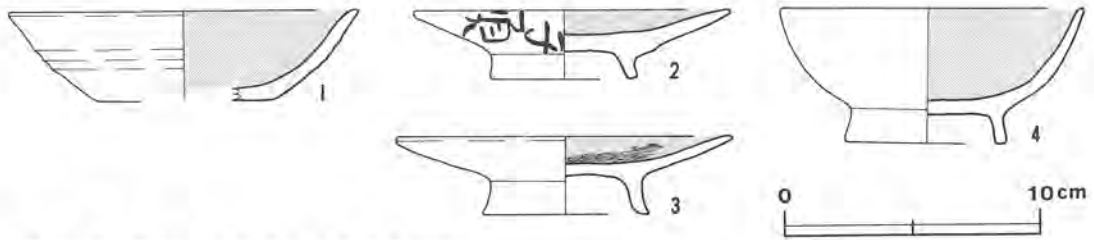
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第80号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第156図 1	坏形土器 土師器	A 13.6 B 3.6 C (6.8)	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒にぶい橙色普通	P613 内面黒色処理85%
2	高台付皿形土器 土師器	A 12.4 B 2.8 D 5.8 E 1.0	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部は丸い。高台は外下方にのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒にぶい橙色普通	P614 体部外面墨書「子児」 内面黒色処理100%
3	高台付皿形土器 土師器	A 13.2 B 3.1 D 6.5 E 1.3	体部は内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁部は僅かに水平にのび、端部は丸い。高台は「ハ」の字状に外下方にのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	細砂にぶい橙色普通	P615 内面黒色処理100%
4	高台付坏形土器 土師器	A 11.9 B 5.4 D 6.4 E 1.2	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒浅黄橙色普通	P612 内面黒色処理100%



第155图 第80号住居跡実測図



第156図 第80号住居跡出土遺物実測図

第81号住居跡（第157図）

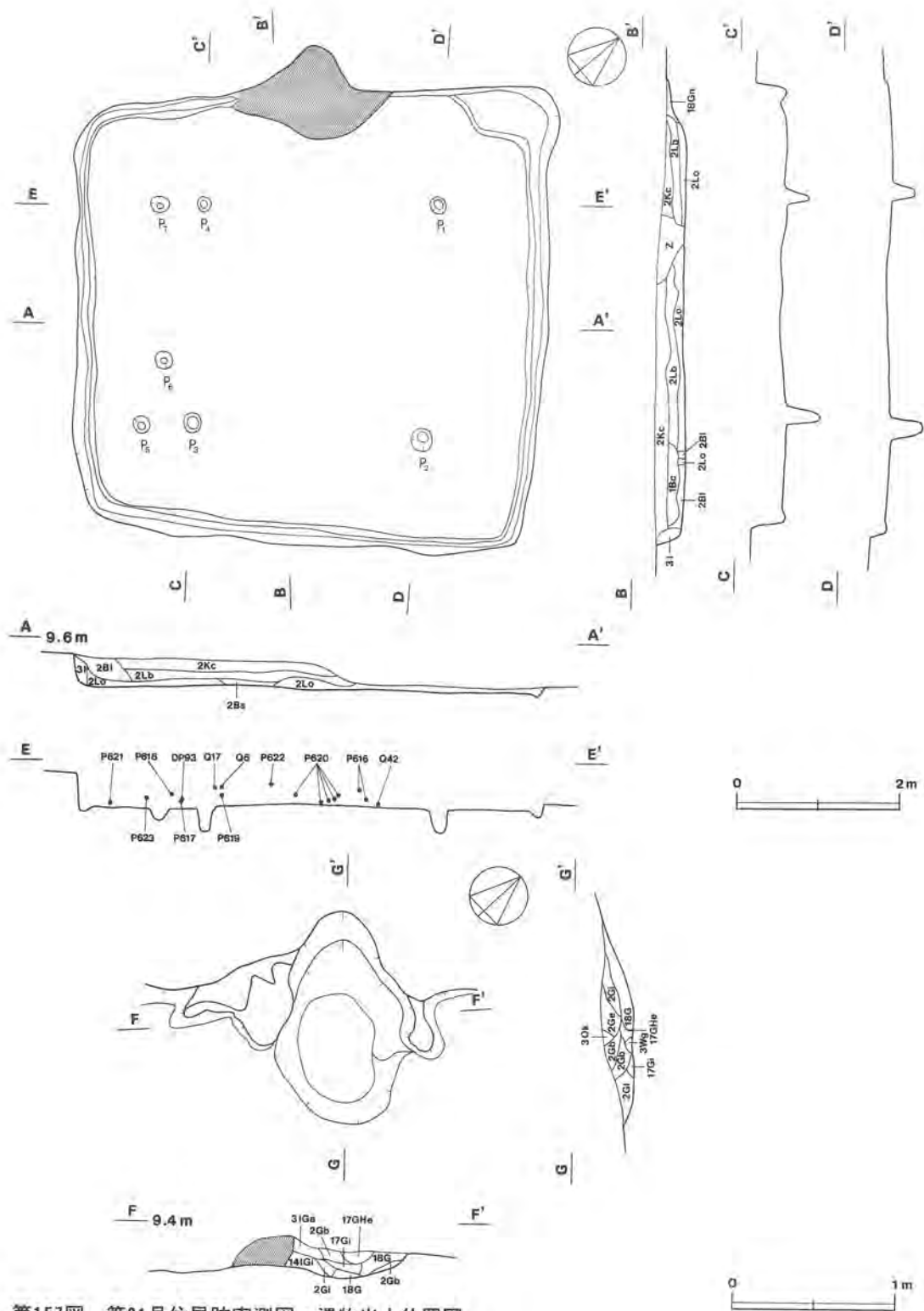
本跡は、B4d2区を中心に確認され、第74号住居跡の南側1.3m、第78号住居跡の東側7.6mに位置している。

平面形は、長軸5.8m・短軸5.45mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-41°-Wを指している。壁高は北西壁から北コーナー部にかけては13cm、その他の壁高は40cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、カマドを除いて、上幅10～12cm・深さ6cmほどの壁溝が周回している。床面は平坦で、よく踏み固められている。カマドは北西壁中央部に付設され、袖部の大半と天井部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ130cm・幅120cm、壁外へ50cmほど掘り込んでいいる。燃烧部は床面を10cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土は多量の焼土小ブロック・焼土粒子が含まれている。ピットはP₁～P₇の7か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄は、いずれも径は20～25cm、深さは30～40cmの規模を有し、配置から支柱穴と思われる。P₅・P₆・P₇の径は20cm、深さは15cmの規模を有し、配置と深さから補助柱穴と思われる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、上層にローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子少量、下層にローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量を含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって、多量の土師器、須恵器、石製品、縄文式土器片が出土している。これらの多くは破片で、覆土下層に集中している。カマドの手前から中央部にかけての覆土下層から土師器の小型甕形土器2点（第158図1・3）が出土し、また、同所から須恵器の台付盤（第158図5）・正位で小型短頸壺（第158図4）、同所及びカマドの西側の床面直上から須恵器の蓋3点（第158図6～8）が出土している。さらに、石製の紡錘車（第158図12）も同所から出土している。その他、磨石（第158図9）・敲石（第158図10）・縄文式土器片が覆土上層から出土しており、周囲から流れ込んだものと思われる。

本跡は、出土遺物から奈良時代の真間期に比定されるものと思われる。



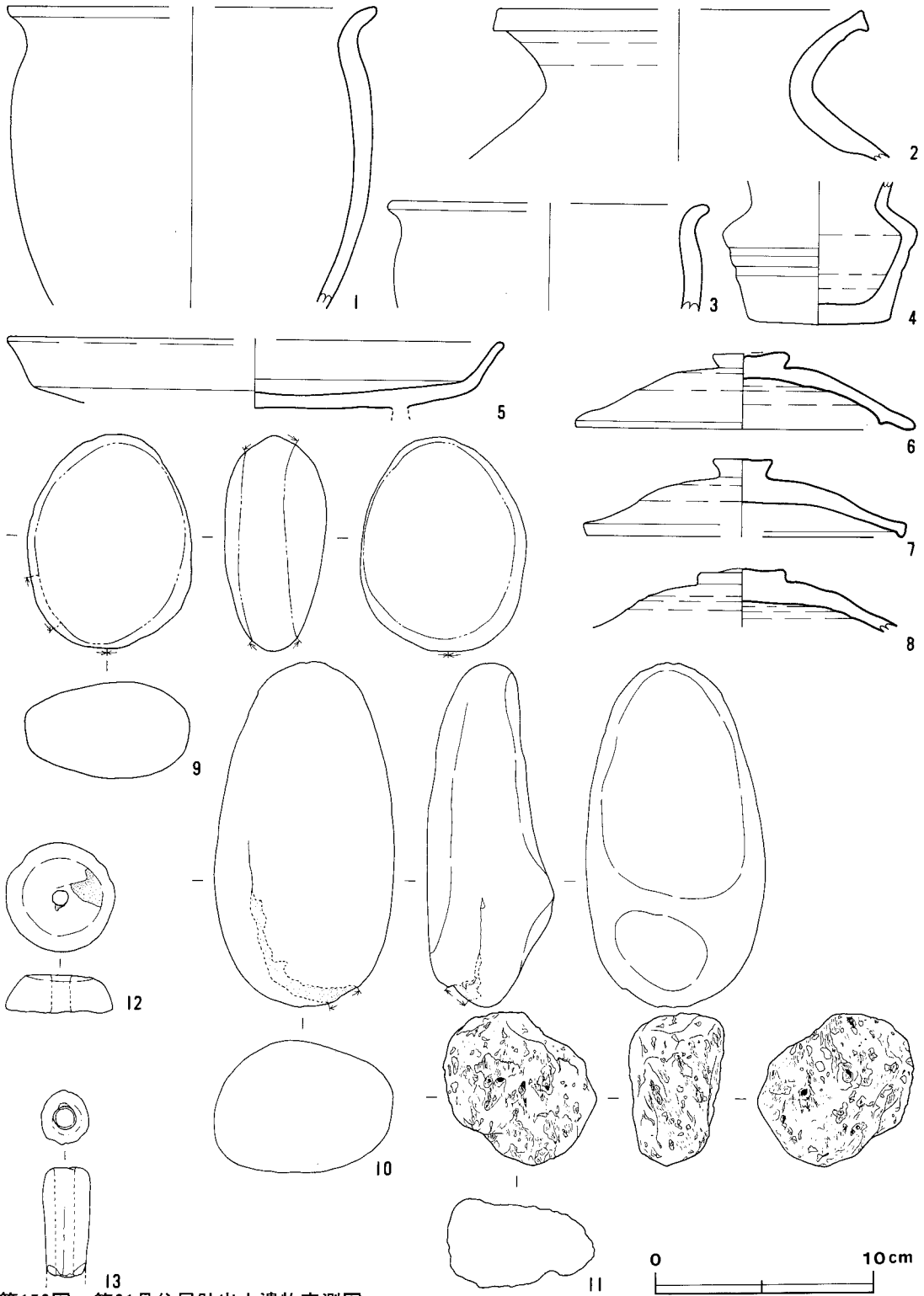
第157图 第81号住居跡実測図・遺物出土位置図

第81号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第158図 1	小型甕形土器	A (17.7) B (14.1)	胴部は上位でやや張り、以下ゆるやかにすぼむ。口縁部は短く外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P616 70%
	土師器					
2	甕	A (16.8) B (7.0)	大きく張った胴部から「く」の字状に屈曲し、外上方にのびる口縁部が付き、口縁端部は外下方に突出する。	口縁部内・外面ナデ。	砂粒・細砂・砂鉄 外面灰褐色、内面 灰黄褐色 普通	P618 器面に自然釉 附着 10%
	須恵器					
3	小型甕形土器	A (15.0) B (5.0)	胴部は上位でやや張り、口縁部は短く外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 灰褐色 普通	P617 15%
	土師器					
4	小型短頸壺	B (6.5) C 6.4	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方にのび、肩で鋭く内傾する。口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。	水挽き成形。 底部手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 褐灰色 普通	P619 90%
	須恵器					
5	台付盤	A (23.0) B 3.1	底部は平底で、体部は内傾気味に開く。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂礫 暗灰黄色 普通	P620 70%
	須恵器					
6	蓋	A 15.7 B 3.6 G 3.5 H 0.8	天井部中央に扁平な宝珠形をつまみが付く。天井部は丸く、口縁部は僅かに外反して外下方にのびる。口縁部にかえりを有する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P621 50%
	須恵器					
7	蓋	A (14.9) B 3.6 G 2.8 H 0.9	天井部中央に宝珠形をつまみが付き、頂部はなだらかな張りを見せ、肩からは直線的に開きながら下がる。口縁端部は内側に入り込む。	天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。	砂礫 褐灰色 普通	P622 50%
	須恵器					
8	蓋	B (2.6) G 4.0 H 0.5	天井部は弧状を呈し、つまみは扁平で、上部は平坦である。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 つまみと口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P623 50%
	須恵器					

第81号住居跡出土土製品・石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第158図 9	磨石	Q 6	10.0	7.7	4.5	509.3	流紋岩
10	敲石	Q 17	16.1	8.4	6.2	956.6	流紋岩
11	浮子	Q 25	7.2	7.1	4.2	55.7	軽石
12	紡錘車	Q 42	—	5.1	1.8	59.7	孔径0.8cm, 粘板岩, 灰色, 100%
13	管状土錘	DP93	5.1	2.5	—	(25.8)	孔径(0.9)cm, 灰褐色, 70%



第158图 第81号住居跡出土遺物実測図

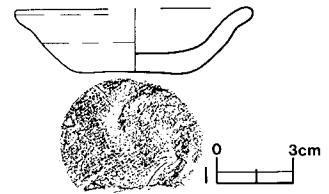
第82号住居跡（第160図）

本跡は、B4h4区を中心に確認され、第95号住居跡の南西側に接して位置している。

平面形は、長軸3.05m・短軸3.0mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-15°-Eを指している。壁高は30cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、カマドの手前から南壁にかけて、幅110～120cmの範囲内は、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、袖部の大半と天井部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ117cm・幅85cm、壁外へ80cmほど掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットは検出できなかった。

覆土は、黒褐色土を主体とし、上層に粘土粒子・粘土小ブロックを中量、焼土粒子少量、下層に粘土粒子少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器とともに、須恵器片が散在的に出土している。中央部の床面直上から正位で土師質土器の皿（第159図1）が出土している。その他は、坏形土器や甕形土器の破片で、まとまった器形にはならなかった。須恵器も同様である。



第159図 第82号住居跡

出土遺物実測図

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

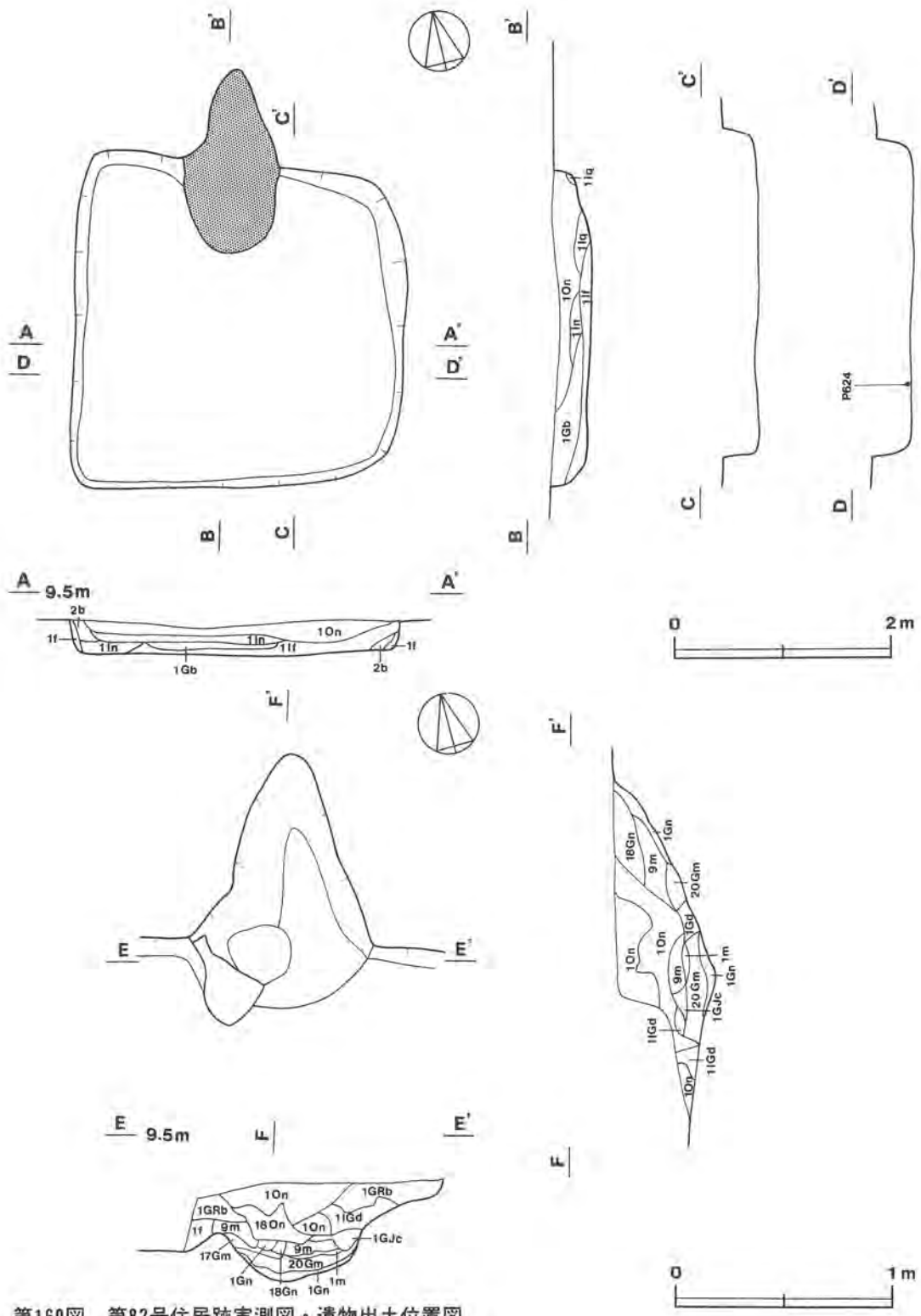
第82号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第159図 1	皿 土師質土器	A (9.4) B 2.5 C 4.8	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は外反している。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P624 70%

第83号住居跡（第162図）

本跡は、B4a0区を中心に確認され、第3号住居跡の南側1.8m、第13号住居跡の西側2.3mに位置している。本跡の南東側は第2号溝と、南西側で第84号住居跡と重複しており、本跡は第84号住居跡を切っており、第2号溝に切られている。したがって、第84号住居跡よりは新しく、第2号溝よりは古い。

平面形は、長軸3.60m・短軸3.47mの方形を呈し、主軸方向はN-8°-Eを指している。重複している部分を除いて、壁高は40～46cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は多少凹凸がみられるが、ロームをよく踏み固めている。カマドは北壁中央部に付設されており、袖部の大半と天井部は崩れているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ140cm・幅70cm、壁外へ90cmほど掘り込



第160図 第82号住居跡実測図・遺物出土位置図

んでいる。燃焼部は床面を10cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットは1か所検出され、径は30cm、深さは10cmほどで、カマドの反対側に位置し、周囲が硬く踏み固められていることから出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、上層に多量のローム粒子・焼土粒子、少量の粘土小ブロックを含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子、中量の粘土粒子を含む黒褐色土が、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から土師器、須恵器、土製品、鉄製品が出土している。土器は大半が破片で、覆土下層に集中している。北東コーナー部の床面直上から土師器の坏形土器（第161図1）、カマドの燃焼部からも土師器の高台付坏形土器（第161図2）、球状土錘（第161図3）が出土している。また、西壁中央部の床面直上から刀子（第161図4）も出土している。須恵器はすべて破片でまとまった器形にならなかった。

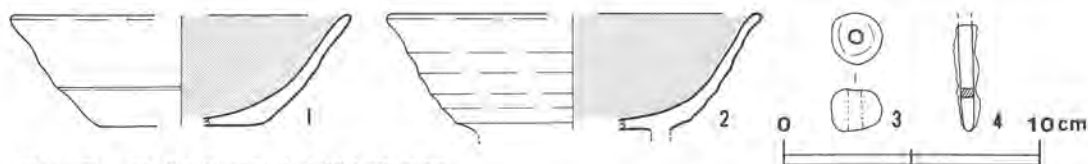
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第83号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第161図 1	坏形土器 土師器	A (13.2) B 4.3 C (6.4)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P625 内面黒色処理 45%
2	高台付坏形土器 土師器	A (14.6) B 4.5 D (7.4)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P626 内面黒色処理 15%

第83号住居跡出土製品・鉄製品解説表

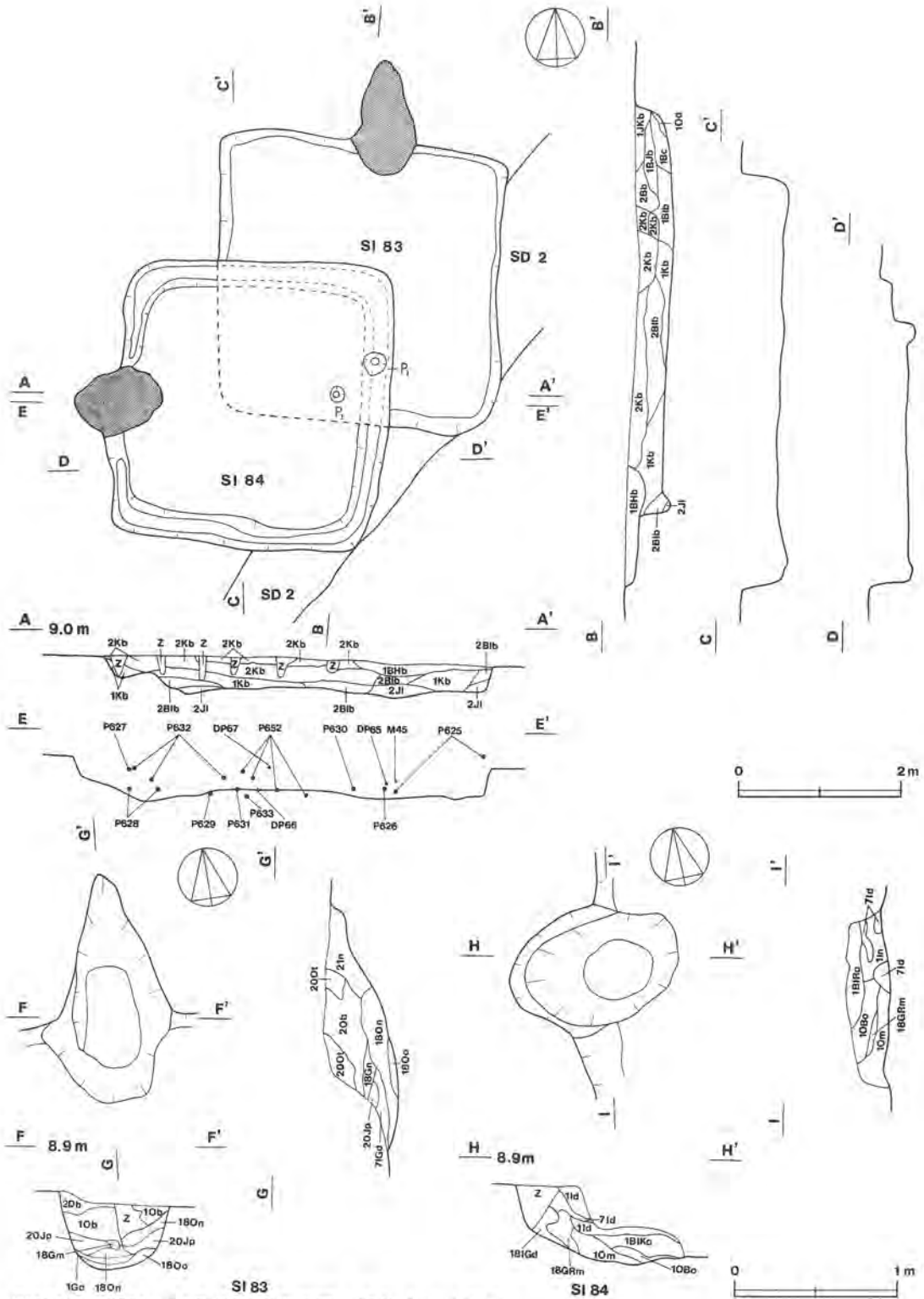
図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第161図 3	球状土錘	D P 65	1.6	2.0	—	6.0	孔径0.5cm, 橙色, 100%
4	刀子	M 45	(4.2)	0.7	0.5	(4.1)	



第161図 第83号住居跡出土遺物実測図

第84号住居跡（第162図）

本跡は、B4b0区を中心に確認され、第35号住居跡の北側3.0m、第12号住居跡の北東側3.4mに位置している。第83号住居跡・第2号溝と重複しており、本跡は第83号住居跡を切り、第2号溝によって切られていることから、第83号住居跡より新しく、第2号溝より古い遺構である。



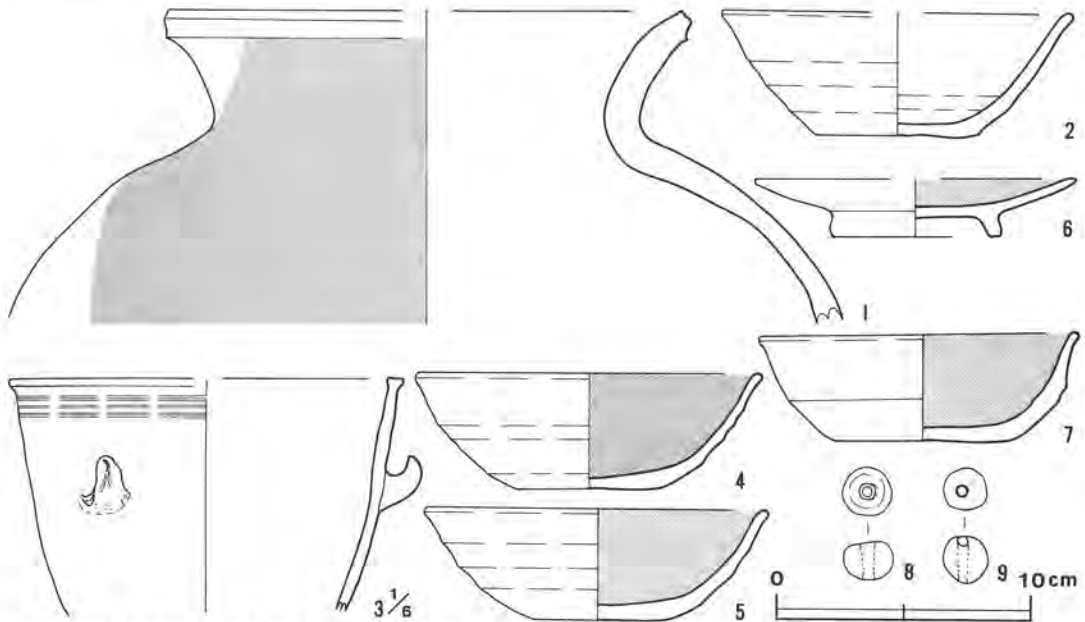
第162图 第83・84号住居跡実測図・遺物出土位置图

平面形は、一辺が3.45mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを指している。壁高は40~45cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、北東壁コーナー部を狭むように北壁半分と東壁半分を除いて、上幅20~25cm・深さ5~10cmの壁溝が周回している。床面は平坦で、よく踏み固められている。カマドは西壁中央部に付設されており、袖部の大半と天井部は攪乱されているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。調査した部分は、長さ90cm・幅80cm、壁外へ35cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、火床は、熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットは1か所検出され、径は20cm、深さは7cmほどで、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、上層にローム粒子多量、焼土粒子少量、下層にローム粒子中量、焼土粒子極少量含む黒褐色土が、壁際には粘土粒子・ローム粒子中量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって、多量の土師器のほか、須恵器、土製品が出土している。土器の多くは破片で、覆土下層に集中している。南西コーナー部の床面直上から伏せた状態で土師器の坏形土器2点（第163図4・7）や、南東コーナー部の床面直上から土師器の高台付皿形土器（第163図6）が出土している。また、中央部の床面直上から須恵器の甕の口縁部片（第163図1）や須恵器の甕（第163図3）、球状土錘（第163図8）が出土している。その他、カマドの手前の覆土下層から伏せた状態で土師器の坏形土器（第163図5）や須恵器の坏（第163図2）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第163図 第84号住居跡出土遺物実測図

第84号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第163図 1	甕 須恵器	A (19.7) B (12.4)	丸く張った胸部から、口縁部は「く」の字状に屈曲し、口唇部は肥厚し、僅かに下端に膨らみを見せる。	胸部内面ナデ。	砂礫・砂粒・鉄分 褐灰色 普通	P631 器面に自然釉 付着 10%
2	坏 須恵器	A (13.9) B 4.8 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 ロクロ回転方向右。	砂礫 褐灰色 普通	P632 80%
3	甗 須恵器	A (31.0) B (18.9)	胸部は、内彎気味に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 胸部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒・礫 にぶい黄橙色 普通	P633 25%
4	坏形土器 土師器	A 13.7 B 4.6 C 5.8	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい褐色 普通	P628 内面黒色処理 75%
5	坏形土器 土師器	A 13.6 B 4.4 C 5.0	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい橙色 普通	P627 内面黒色処理 95%
6	高台付皿形土器 土師器	A (12.6) B 2.3 D 6.6 E 1.1	体部は内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁端部は丸い。高台は「八」の字状に外下方にのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P630 内面黒色処理 50%
7	坏形土器 土師器	A 12.6 B 4.3 C 7.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P629 内面黒色処理 80%

第84号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第163図 8	球状土錘	D P66	1.5	2.0	—	5.2	孔径0.6cm, 橙色, 100%
9	球状土錘	D P67	1.9	1.7	—	4.5	孔径0.4cm, 橙色, 100%

第85号住居跡 (第164図)

本跡は、A3j9区を中心に確認され、第86号住居跡の南側2.0m、第88号住居跡の東側4.3mに位置している。

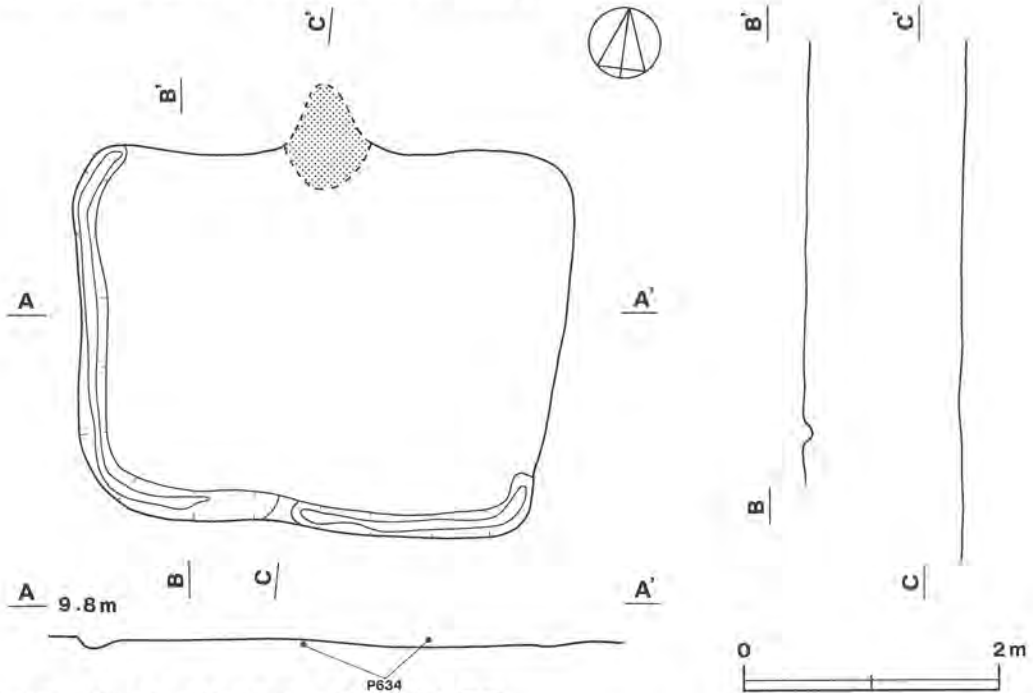
平面形は、トレンチャーによる攪乱のため推定であるが、長軸3.8m・短軸3.2mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-7°-Wを指すものと思われる。壁の立ち上がりは攪乱のため確認できなかった。ただ、上幅12~20cm・深さ6cmの壁溝が南側から西側にかけて周回している。床面は平坦で、特にカマド手前の西側幅130cmの範囲内は硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、袖部・天井部は崩壊し、僅かに山砂の混じった粘土を含む焼土が残っていた。ピット

は検出できなかった。

覆土は攪乱のため不明である。

遺物は、非常に少なく、北東コーナー部寄りの床面直上から土師器の甕形土器の口縁部(第165図1)が出土している。

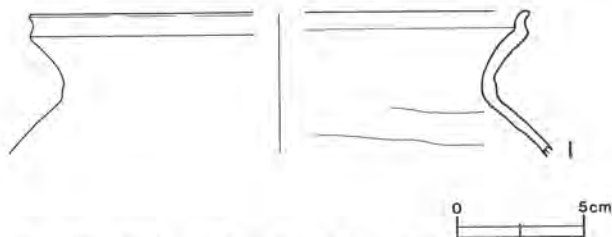
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第164図 第85号住居跡実測図・遺物出土位置図

第85号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 1	甕形土器 土師器	A (19.6) B (5.5)	口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面ナデ。	破粒・礫・雲母にふい橙色 普通	P634 10%



第165図 第85号住居跡出土遺物実測図

第86号住居跡（第166図）

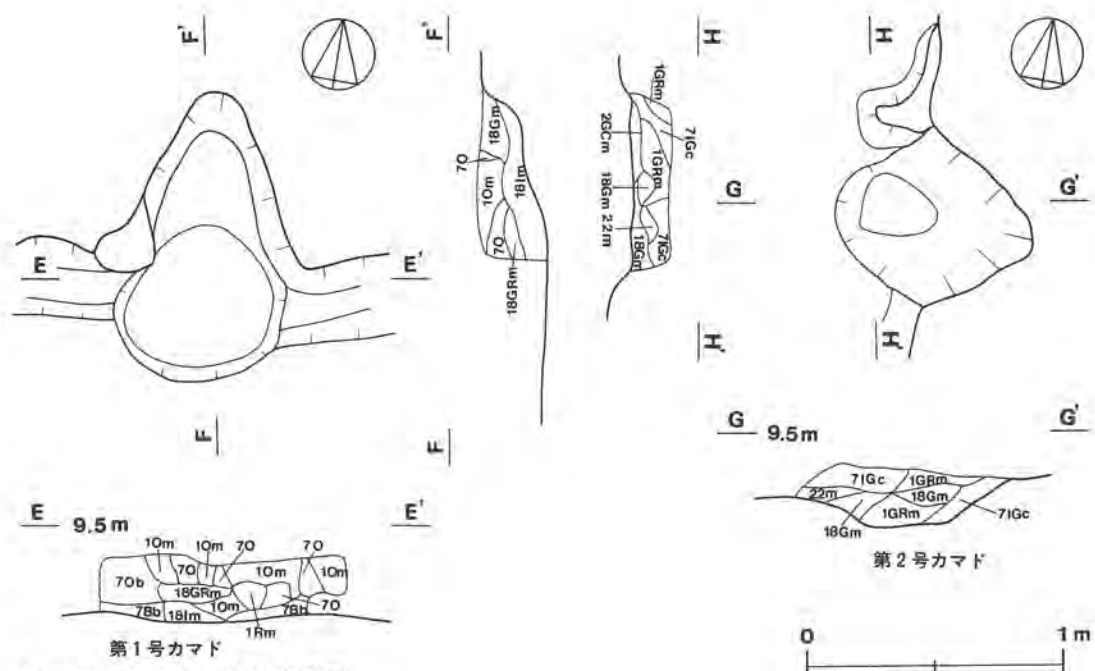
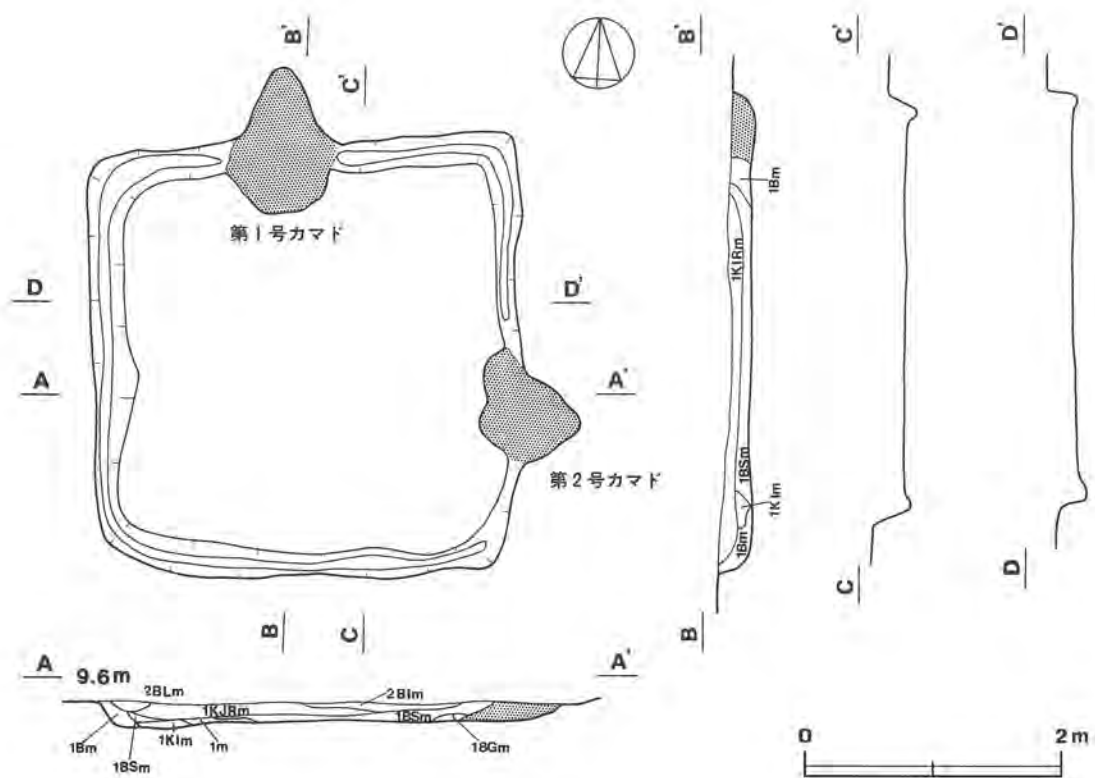
本跡は、A3i9区を中心に確認され、第94号住居跡の南側1.5m、第85号住居跡の北側1.8mに位置している。

平面形は、長軸3.4m・短軸3.4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-1°-Wを指している。壁高は20cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、カマドの部分を除いて、上幅10～20cm・深さ2～6cmの壁溝が周回している。床面はハードローム小ブロック・ローム粒子を多量に含む暗褐色土で床を貼り、よく踏み固められて平坦である。床下からは、ピット5ヶ所（P₁～P₅）と土坑1基が検出された。P₁は第1号カマドの東側に位置し、長径28cm・短径22cmの楕円形を呈し、深さは14cmである。P₂とP₃は第2号カマドの西端に位置し、それぞれの径は28・32cmの円形を呈し、深さは20・24cmである。P₄は第1号カマドの反対側に位置し、径35cmの円形を呈し、深さは30cmである。P₅は南西コーナー寄りに位置し、長径34cm・短径28cmの楕円形を呈し、深さは24cmである。さらに、土坑Aはカマド西側に位置し、長径130cm・短径86cmの不整楕円形を呈し、深さは40cmである。性格は不明である。カマドは北壁（第1号）と東壁（第2号）のそれぞれ中央部に付設されており、第1号カマドは袖部の大半と天井部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂の混じった粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分の長さは115cm、幅は80cm、壁外へ70cmほど掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の焼土粒子、少量の木炭粒子が含まれている。第2号カマドは袖部が削平されて焚口部から燃焼部にかけては硬い床面となっており、残存している覆土は焼土粒子中量、木炭粒子少量を含む暗褐色土が堆積している。調査した部分の長さは75cm、幅は75cm、壁外へ45cmほど掘り込んでいる。なお、第2号カマドの焚口部から燃焼部にかけては、第1号カマド構築のため削平されていることから、第1号カマドの方が新しいと思われる。

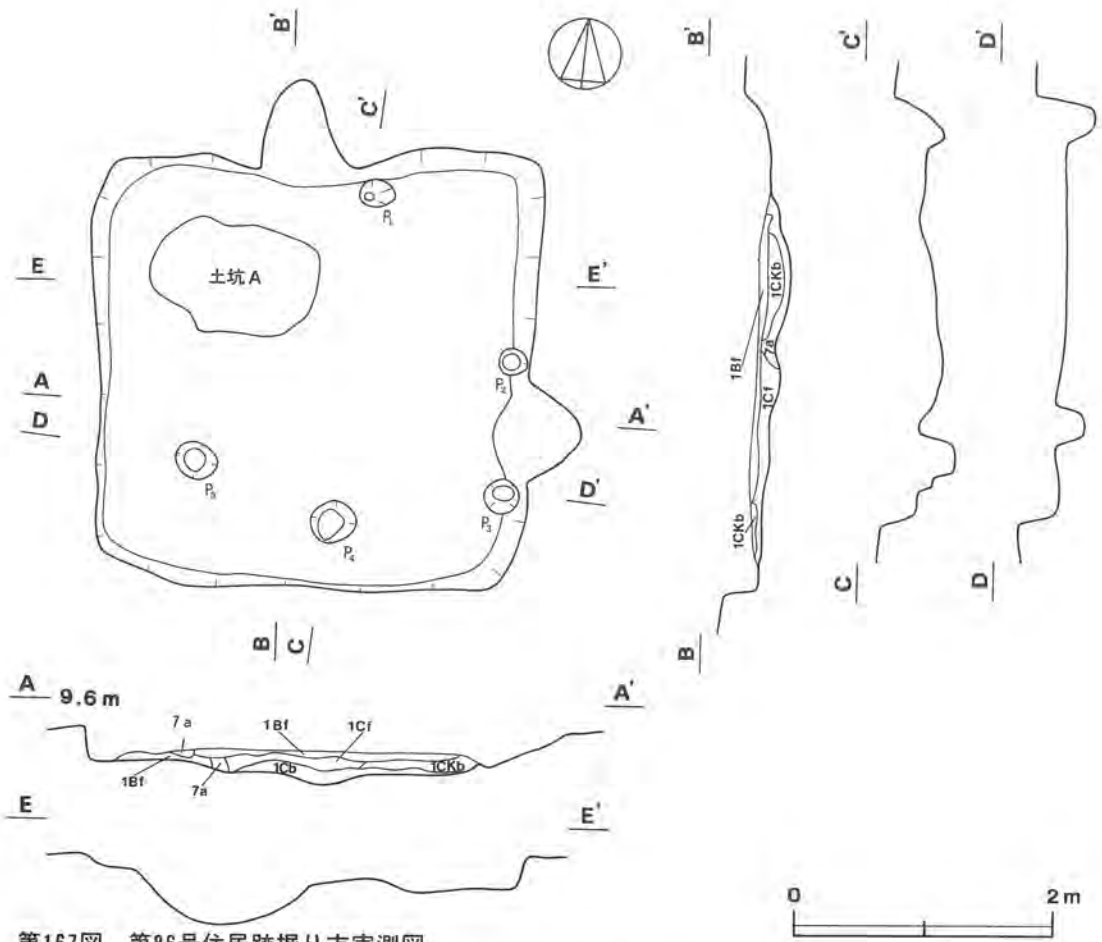
覆土は、やや砂質で、ローム粒子を多量に含む黒褐色土を主体とし、上層に木炭粒子・粘土粒子・焼土粒子少量、下層に木炭小ブロック少量を含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域にわたって多量の土師器のほかに、須恵器が出土している。土器の大半は破片で、覆土下層から出土している。第1号のカマドの覆土中から土師器の高台付坏形土器（第168図3）や横位で高台付皿形土器（第168図2）、P₅の覆土中から土師器の鉢形土器（第168図1）が出土している。その他、中央部の覆土下層から須恵器の甌（第168図5）が出土している。

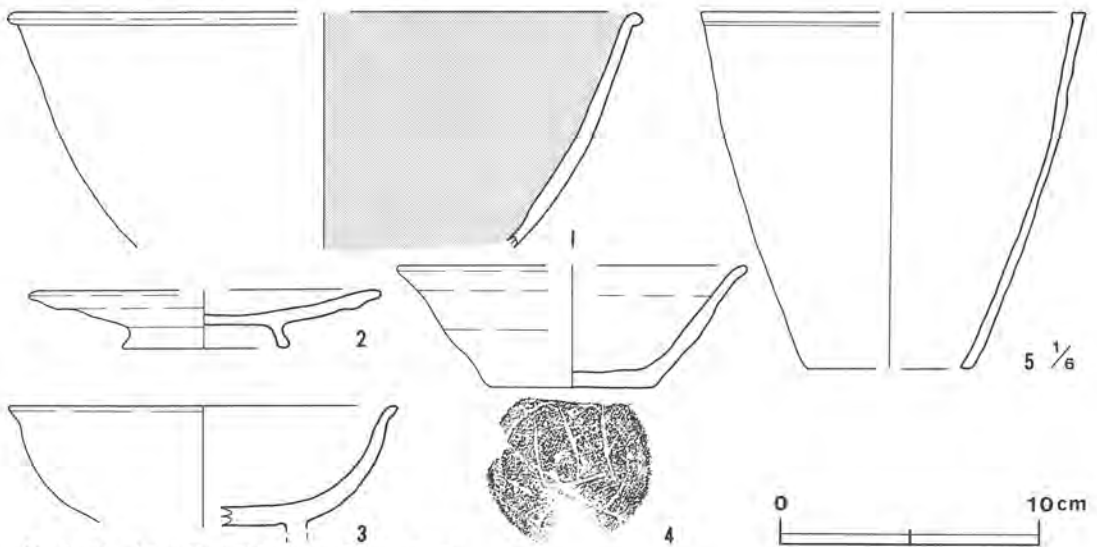
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第166図 第86号住居跡実測図



第167図 第86号住居跡掘り方実測図



第168図 第86号住居跡出土遺物実測図

第86号住居跡出土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第168図 1	鉢形土器 土 師 器	A (24.8) B (9.3)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁端部は水平につまみ出している。	水挽き成形。 胴部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 礫 にぶい褐色 普通	P639 内面黒色処理 10%
2	高台付皿形 土器 土 師 器	A (13.8) B 2.3 D 6.6 E 0.9	体部はやや内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁部は丸い。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P637 50%
3	高台付坏形 土器 土 師 器	A 14.8 B (4.6)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P635 40%
4	坏 須 恵 器	A (13.5) B 4.8 C 6.7	底部は平底で、本部は外傾気味に外上方へのび、口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。	水挽き成形。 底部手持ちへラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 褐灰色 普通	P636 底部に篋記号 40%
5	甗 須 恵 器	A (30.0) B 28.0 C (12.8)	胴部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 胴部外面下端手持ちへラ削り。	砂粒・礫 灰色 普通	P638 20%

第87号住居跡 (第169図)

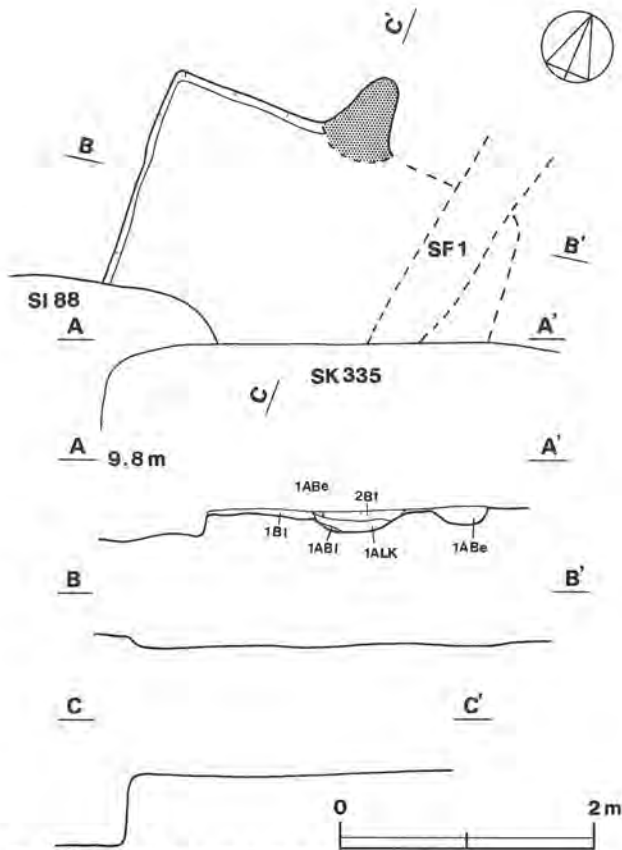
本跡は、A3j7区を中心に確認され、第86号住居跡の西側1.7m、第89号住居跡の南東側6.5mに位置している。本跡の南西側は第88号住居跡、中央部から南東側は第335号土坑、北東側は第1号道路と重複しており、本跡は第88号住居跡・第335号土坑・第1号道路に切られていることから、本跡が最も古い遺構である。

本跡は、重複によって中央から南側にかけては不明である。調査した部分から主軸方向はN-5°-Wを指すものと思われる。壁高は5cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、ロームが硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されていたが、攪乱されているため天井部・袖部は崩壊しており、僅かに焼土化した山砂混じりの粘土が残っていた。ピットは検出できなかった。

覆土は、重複しているため堆積状況は不明で、ローム大・小ブロックとローム粒子が混じり、やや締まりがある。

遺物は、かなり少なく、床面直上から土師器の坏形土器や甗形土器の破片が出土したにすぎない。

本跡は、出土遺物やカマドを有することなどから古墳時代の鬼高期以降に比定されるものと思われる。

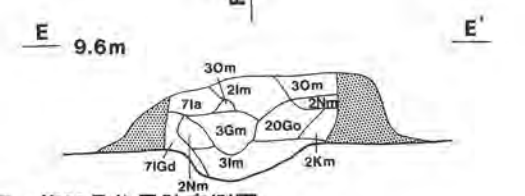
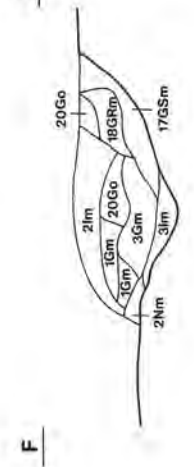
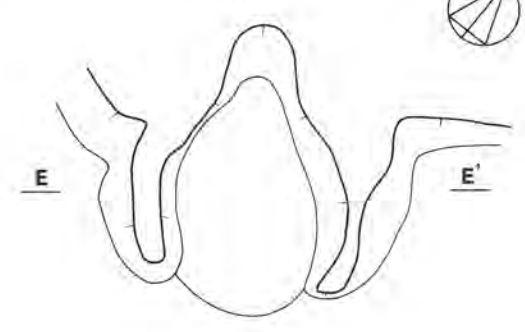
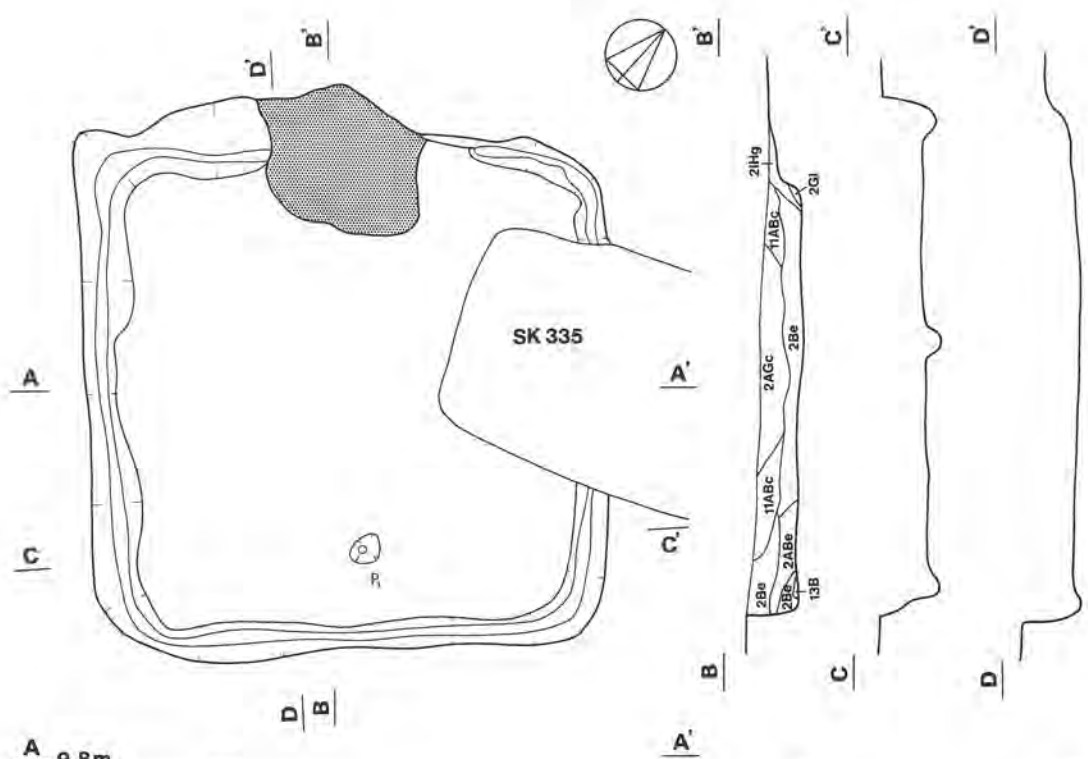


第169図 第87号住居跡実測図

第88号住居跡（第170図）

本跡は、A3j7区を中心に確認され、第85号住居跡の西側4.3m、第86号住居跡の南西側4.0mに位置している。本跡の北側は第87号住居跡・第335号土坑・第1号道路と重複しており、本跡が第87号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。なお、土層断面から第335号土坑・第1号道路よりは古い遺構である。

平面形は、長軸4.40m・短軸4.05mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-40°-Wを指している。壁高は35～43cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、カマドを除いて、上幅15～22cm・深さ6～10cmの壁溝が周回している。床面は平坦で、特にカマドの手前から南東壁にかけての幅120cmの範囲は硬く踏み固められている。カマドは北西壁中央部に付設されており、天井部は崩壊しているが、袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて赤化している。調査した部分は、長さ115cm・幅100cm、壁外へ30cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を13cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子、少量の木炭小ブロック・木炭粒子が含まれている。ピットは1か所検出され、径は23cm、深さは10



第170图 第88号住居跡実測图

cmの規模でカマドの反対側に位置し、周囲が硬く踏み固められていることから出入口施設に関連するピットと思われる。

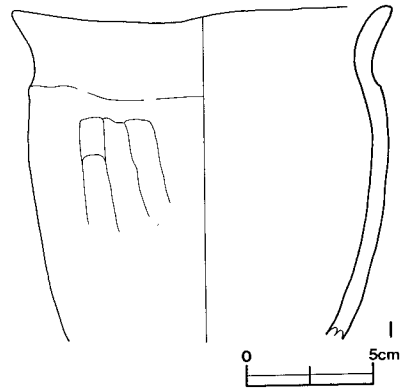
覆土は、上層にロームブロック・ローム粒子多量、焼土粒子極少量含む極暗褐色土、下層にローム粒子多量含む暗褐色土、壁際にはローム粒子を極少量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器片で、カマドの手前から中央部を中心に点在している。カマド手前の床面直上から正位で甕形土器（第171図1）が出土している。他にも、覆土下層から坏形土器や甕形土器の破片が出土しているが、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第88号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第171図 1	甕形土器 土師器	A 15.0 B (13.1)	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P640 60%



第171図 第88号住居跡出土
遺物実測図

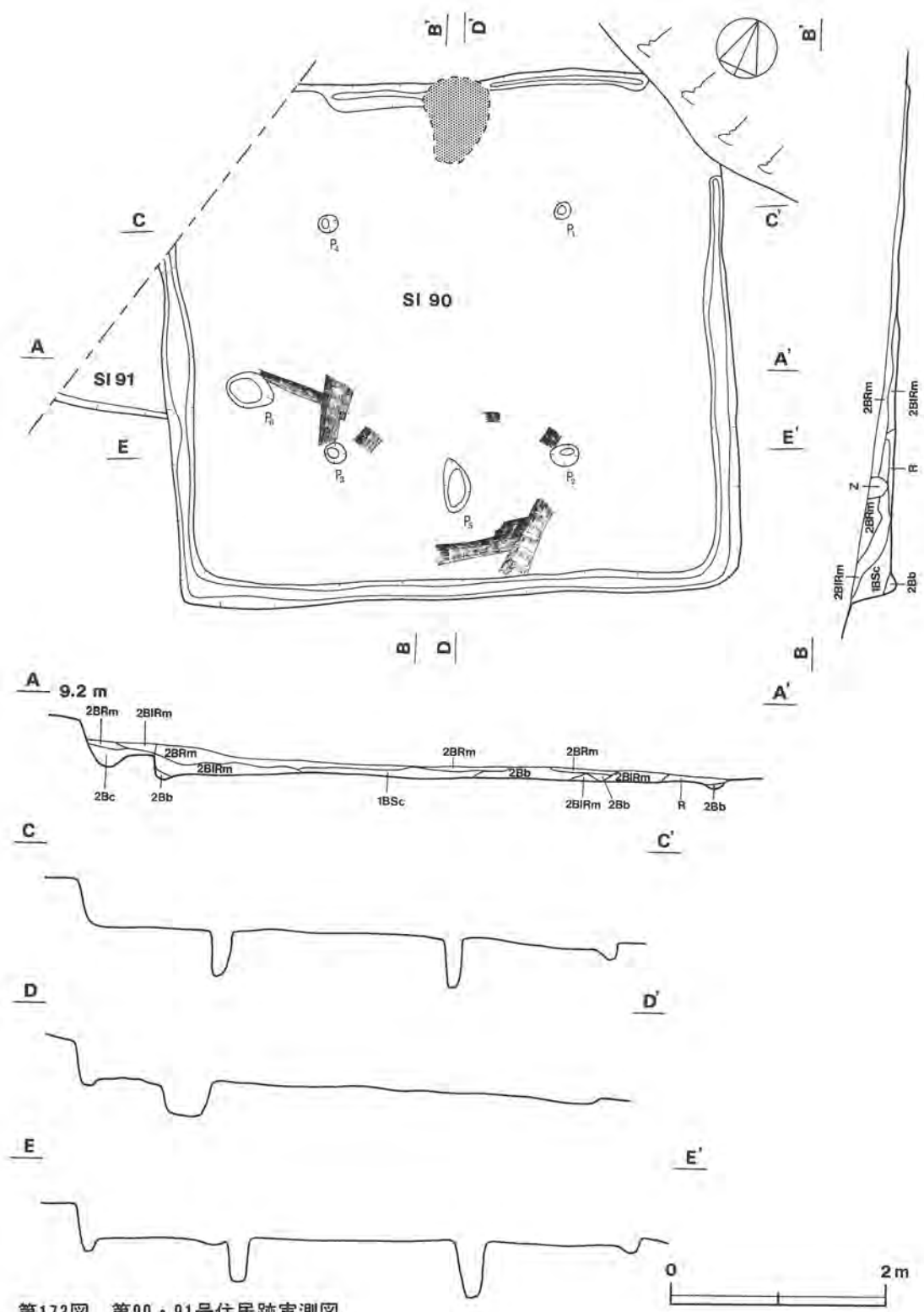
第89号住居跡（第172図）

本跡は、A3h5区を中心に確認され、第90号住居跡の南側に接して位置している。本跡の南西側は第334号土坑と重複しており、本跡が第334号土坑に切られている。

平面形は、長軸3.10m・短軸2.75mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-10°-Eを指している。壁高は6～10cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、特に中央部付近はロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部より東側に付設されていたと思われるが、天井部・袖部は崩壊して、僅かに山砂の混じった焼土が残っただけである。

覆土は、炭化粒子・ローム粒子を中量含む黒褐色土を主体とし、壁際には炭化粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は出土していないため、時期は不明である。



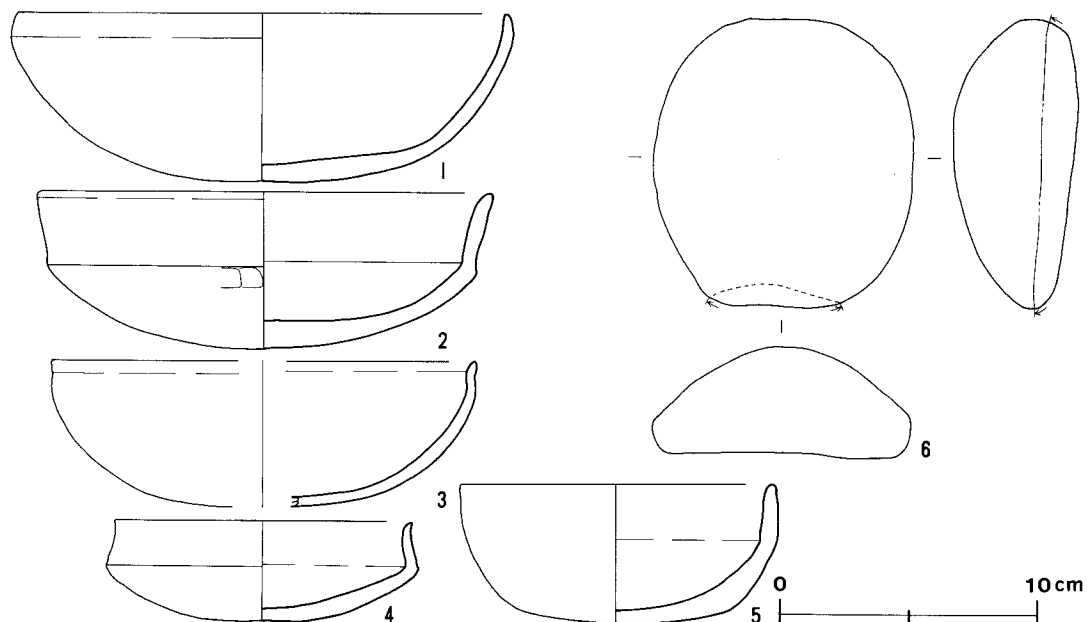
第173图 第90・91号住居跡実測図

を中心とする覆土下層からも坏形土器や甕形土器の破片が出土している。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第90号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第174図 1	坏形土器 土師器	A 19.2 B 6.7	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫・石英 にぶい褐色 普通	P643 75%
2	坏形土器 土師器	A 17.8 B 6.2	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P641 100%
3	坏形土器 土師器	A (16.8) B 5.8	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P645 40%
4	坏形土器 土師器	A 11.6 B 4.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 橙色・暗赤灰色 普通	P644 80%
5	坏形土器 土師器	A 12.4 B 5.6	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。	体部内・外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 にぶい橙色・一部 黒色 普通	P642 95%



第174図 第90号住居跡出土遺物実測図

第90号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第174図 6	磨 石	Q 7	11.4	10.2	4.3	638.9	

第91号住居跡 (第173図)

本跡は、A3h5区を中心に確認され、第89号住居跡の北側1.5mに位置している。本跡の東側は第90号住居跡と重複しており、第90号住居跡によって切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡の大半がエリア外のため、平面形・規模は不明である。検出できた南壁の一部分は、壁高が40cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。検出できた床面もロームがよく踏み固められている。ピットやカマド (炉) は検出できなかった。

覆土は、大半が重複とエリア外のため、堆積状況は不明である。残存する覆土はローム粒子を多量に含む暗褐色土が堆積している。

遺物は、非常に少なく、土師器の甕形土器や坏形土器の破片が床面直上から出土しているだけである。本跡の大半がエリア外に延びており、しかも重複しているため、これらの遺物が本跡に伴うかどうか不明である。

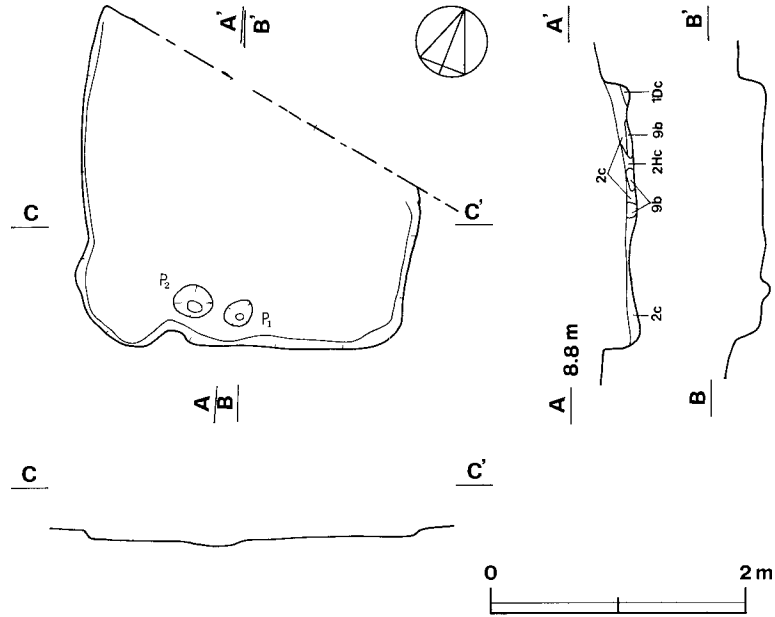
第92号住居跡 (第175図)

本跡は、A3g7区を中心に確認され、第90号住居跡の東側に接して位置している。

本跡は、北側がエリア外にかかっているため、平面形・規模等の詳細は不明である。調査した部分から南壁の長さは2.4mで、南東コーナーは隅丸形を呈し、南壁の方向はN-78°-Wである。壁高は4～20cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は全体的に平坦であるが、南壁側の長径110cm・短径80cmの楕円形の範囲は、ロームがよく踏み固められていて非常に硬く凹んでいる。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、径は20・32cm、深さは60cmの規模で、本跡に伴う柱穴と思われる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、焼土小ブロック中量、ソフトローム小ブロック少量含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、南壁の床面直上から土師器の甕形土器の胴部片が出土しているが、器形が不明確なため時期を決定することができなかった。



第175図 第92号住居跡実測図

第93号住居跡（第176図）

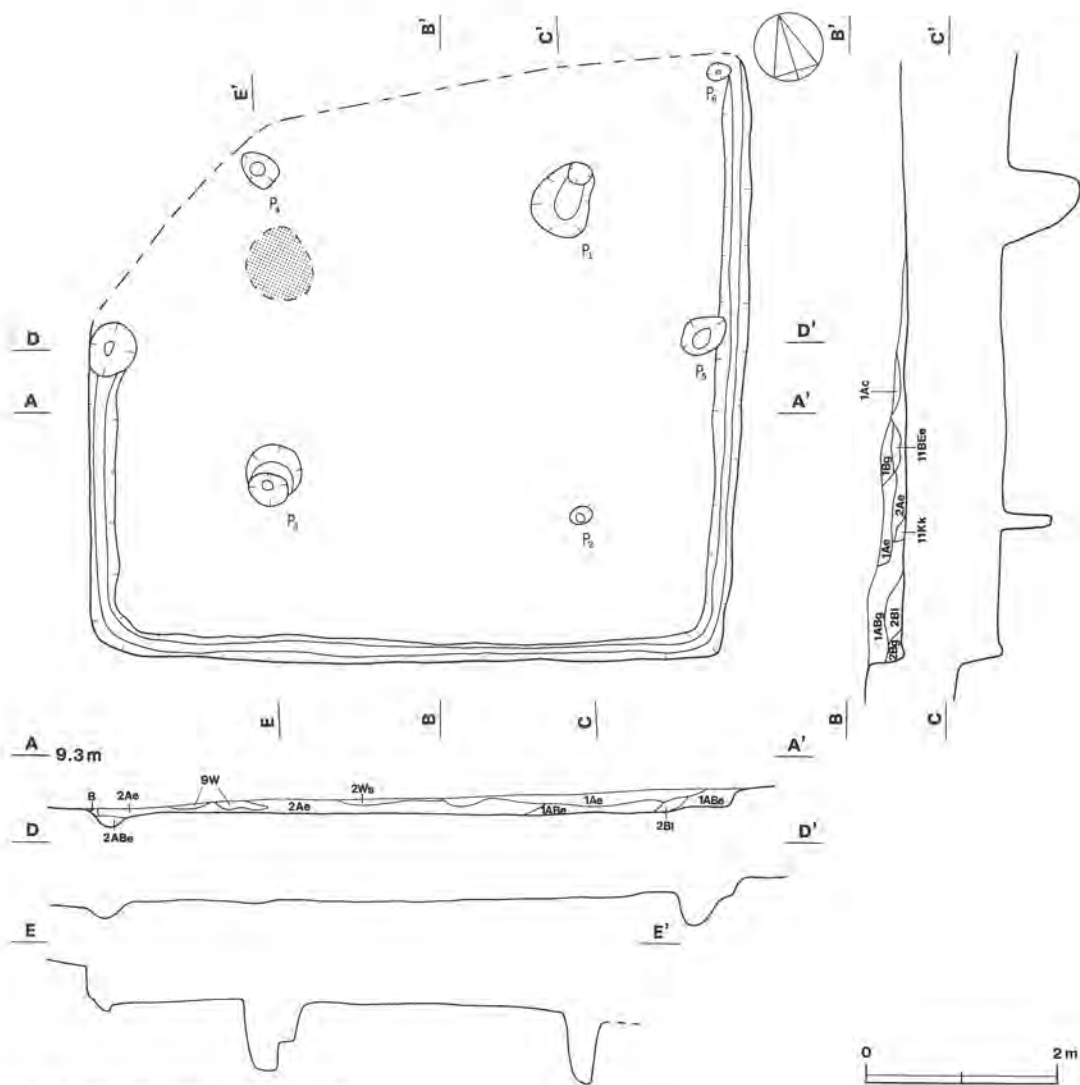
本跡は、A3g0区を中心に確認され、第94号住居跡の北東側1.0m、第97号住居跡の西側3.5mに位置している。本跡の南西側は第558号土坑と重複しており、本跡は第558号土坑によって切られている。

本跡は、北側がエリア外にかかっているため、平面形・規模等の詳細は不明である。調査した部分は、南壁の長さ6.6m、東壁の長さ6.3mで、平面形は方形を呈し、南北軸方向はN-20°-Eを指している。壁高は30cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅25cm・深さ10cmほどの壁溝が周回している。床面は全体的に平坦で、特に北東壁側長径2.9m・短径2.4mの範囲と南西コーナー下付近の径1.7mの範囲のロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されていたと思われるが、天井部・袖部は崩壊して、山砂混じりの焼土が極わずか残っていたにすぎない。ピットはP₁～P₆の6か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄は径25～60cm・深さ60～80cmの規模を有し、配置からいずれも支柱穴と思われる。P₅は径50cm・深さ35cmの規模を有し、配置から出入口施設に関するピットと思われる。

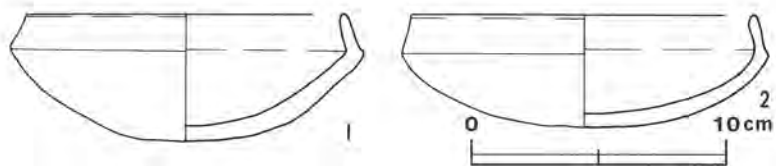
覆土は、上層にローム粒子少量、黒色土ブロックを含む黒褐色土、下層に黄褐色土ブロック・黄褐色土粒子・黒色土ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、僅かな土師器とともに、須恵器片が出土している。東壁中央部床面直上からつぶれた状態で坏形土器（第177図1）・同じく正位で坏形土器（第177図2）が出土している。その他、中

中央から東壁寄りの覆土下層からも須恵器片が出土しているが、まとまった器形にならなかった。
 本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。



第176図 第93号住居跡実測図



第177図 第93号住居跡出土遺物実測図

第93号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第177回 1	坏形土器	A 12.8	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面へラ削り。	砂粒・礫・雲母 黒褐色 良好	P647 100%
	土師器	B 5.0				
2	坏形土器	A 13.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はやや内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面へラ削り。	砂粒・長石・礫 褐色 良好	P646 85%
	土師器	B 4.4				

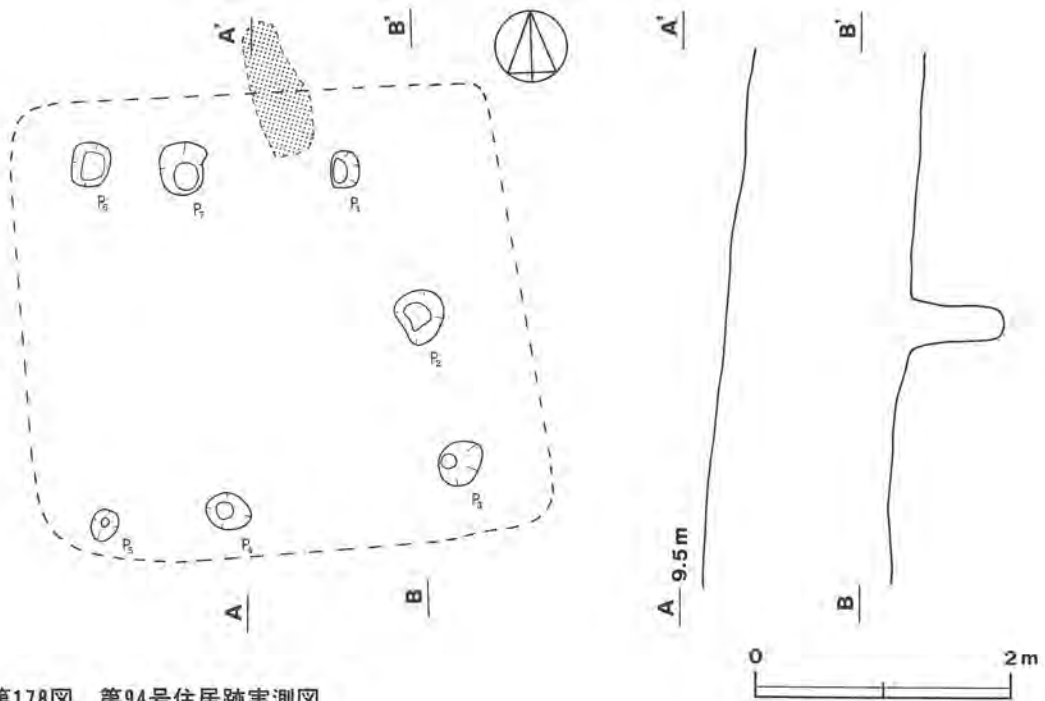
第94号住居跡（第178図）

本跡は、A3h₉区を中心に確認され、第93号住居跡の南西側に接し、第86号住居跡の北側2.0mに位置している。

本跡は、傾斜地に存在していたため表土等の流出が激しく、攪乱も受けており、平面形・規模・主軸方向等は不明である。また、壁やカマド等も検出できなかった。調査した部分は、床面とピットだけで、床面は平坦で、軟らかい状態である。ピットはP₁～P₇の7か所検出され、配置に規則性はないが、いずれも本跡に伴うものと思われる。

覆土は、攪乱のため堆積状況を把握できなかった。

遺物が出土していないので、時期は不明である。



第178図 第94号住居跡実測図

第95号住居跡（第179図）

本跡は、B4g5区を中心に確認され、第82号住居跡の北東側に接し、第68号住居跡の西側6.0mに位置している。本跡の南東コーナー部で第67号住居跡と重複しており、出土遺物を検討した結果、本跡の方が古い遺構である。

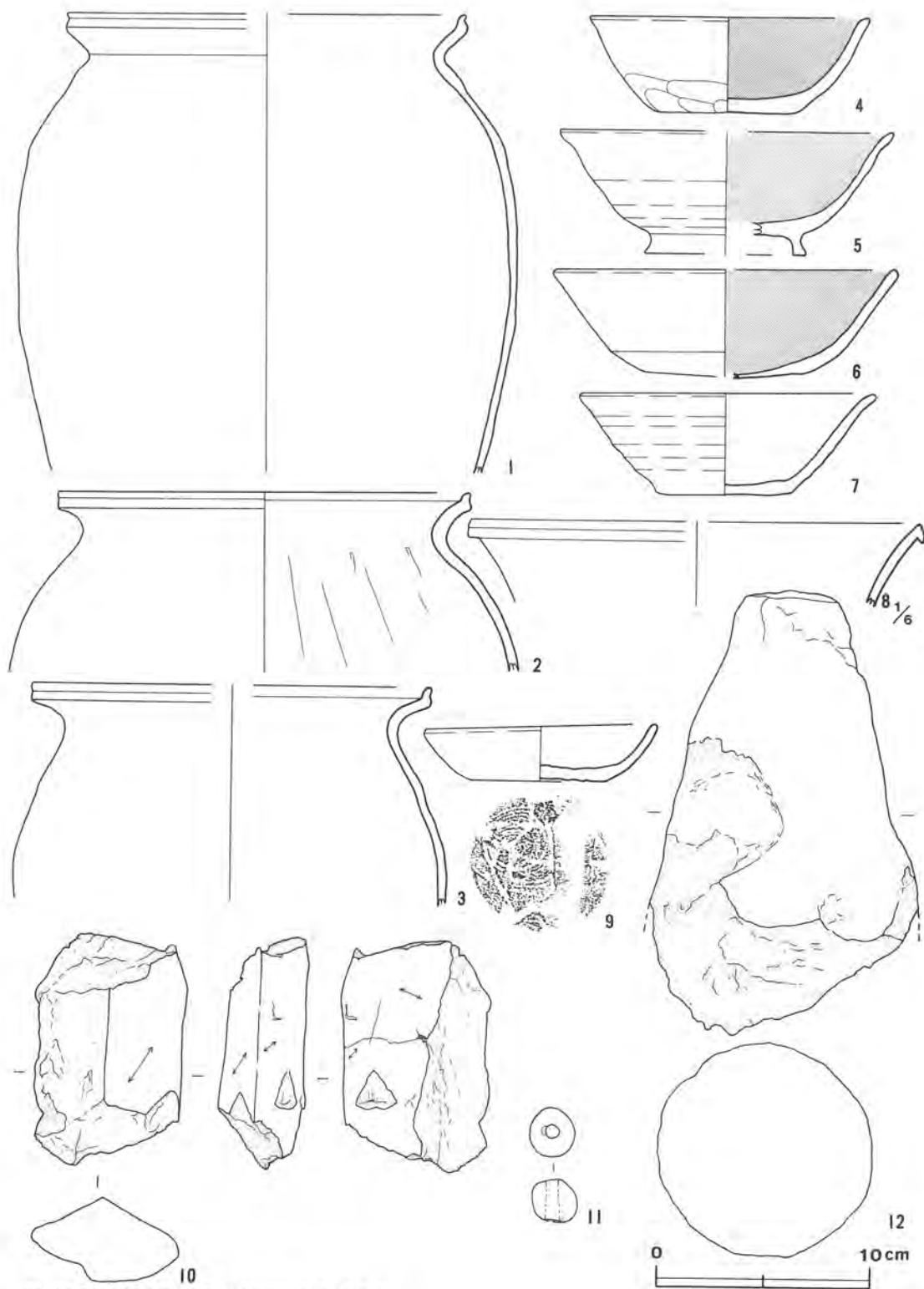
平面形は、長軸3.7m・短軸3.6mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-18°-Eを指している。壁高は60～70cmで、壁は暗褐色土でほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅20～30cm・深さ6～10cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で、ロームが硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、袖部の一部と天井部は崩壊しているが、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて赤化している。調査した部分は、長さ160cm・幅110cm、壁外へ90cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を8cmほど筒状に掘り込んでいる。火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土は多量の焼土粒子・木炭小ブロックが含まれている。ピットは検出できなかった。

覆土は、上層にローム粒子を中量含む暗褐色土、中層にローム粒子多量、木炭粒子を少量含む黒褐色土、下層に焼土粒子・ローム粒子を多量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

本跡は、覆土に多量の焼土粒子、少量の木炭粒子が含まれていることや、南壁寄りの床面上に多量の焼土粒子が検出されることから焼失家屋と考えられる。

遺物は、散在的に本跡全域から多くの土師器のほかに、須恵器、土製品が出土している。土器の大半は破片で、まとまった器形になったものは少ない。土師器は、東壁南寄りの壁際から高台付坏形土器（第180図5）や同所及びカマドの燃烧部から甕形土器の口縁部3点（第180図1～3）・カマドの覆土中から坏形土器（第180図6）が出土している。その他、北東コーナー部寄りの床面直上から球状土錘（第180図11）、西壁中央部の壁際から砥石（第180図10）が出土している。また、南東コーナー部の覆土下層を中心に須恵器の坏（第180図7）も出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第180图 第95号住居跡出土遺物実測図

第95号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第180図 1	甕形土器	A (18.8)	胴部は長胴を呈し、胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がり、上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P648 15%
	土師器	B (21.5)				
2	甕形土器	A 19.4	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 赤色 普通	P649 30%
	土師器	B (8.4)				
3	甕形土器	A (18.8)	胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・雲母 赤色 普通	P651 15%
	土師器	B (10.1)				
4	坏形土器	A 13.2	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・長石 にぶい赤褐色 良好	P653 内面黒色処理 85%
		B 4.5				
		C 6.6				
5	高台付坏形土器	A (15.6)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P652 内面黒色処理 40%
		B 5.8				
		D (7.6)				
		E 1.0				
		土師器				
6	坏形土器	A 16.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P654 内面黒色処理 40%
		B 5.1				
		C (7.8)				
7	坏	A 14.0	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 灰色 普通	P657 75%
		B 4.8				
		C 6.4				
8	甕	A (40.8)	口縁部は外反しながら大きく開き、端部は面をなして下方へ屈曲する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・細砂・礫 灰色 普通	P656 5%
		B (7.9)				
9	皿	A 10.8	底部は平底で、体部内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P655 80%
		B 2.8				
		C 6.4				
土師質土器						

第95号住居跡出土土製品・石製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大 小 (cm)			重量(g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第180図 10	砥 石	Q 35	10.9	7.1	4.0	325.3	粘板岩
11	球 状 土 錘	DP68	2.0	2.3	—	8.3	孔径0.5cm, 浅黄橙色, 100%
12	支 脚	DP21	(21.1)	12.5	—	(1752.4)	にぶい橙色

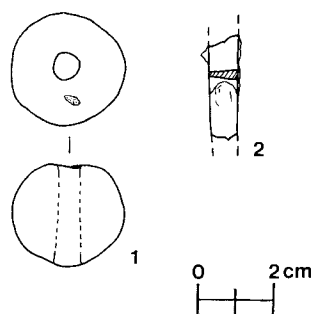
第96号住居跡（第182図）

本跡は、A3j0区を中心に確認され、第85号住居跡の北東側1.0m、第93号住居跡の南側6.2mに位置している。本跡の中央で第369号土坑、北東側で第368号土坑、南東側で第371号土坑と東側で第412号土坑、北西側で第367号土坑と重複しており、本跡はこれらの土坑に切られていることから、本跡が最も古い遺構である。

本跡は、重複・攪乱等を受けているため、壁の立ち上がりは確認できず、床面が露出して検出された。このため、規模・平面形・主軸方向等は不明である。床面は前述したように重複しているため、南西コーナー付近しか検出できなかったが、よく踏み固められている。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、P₁・P₃・P₄は長径33～55cm・短径28～50cmの楕円形を呈し、深さは70～85cmである。規模や配置から支柱穴と思われる。P₂は長径40cm・短径28cmの楕円形を呈し、深さ80cmで、配置から出入口施設に関連するピットと思われる。その他検出したピットは、規模や配置から本跡に伴うピットではないと思われる。

覆土は、重複や攪乱のため不明瞭で、明確には把握できなかった。

遺物は少なく、土師器片とともに、球状土錘(第181図1)や須恵器片が点在して出土している。すべて破片で、まとまった器形にはならなかった。また、これらの遺物は、攪乱を受けて移動しているため、本跡に伴うかどうか明確にできなかった。



第96・97号住居跡出土
遺物実測図

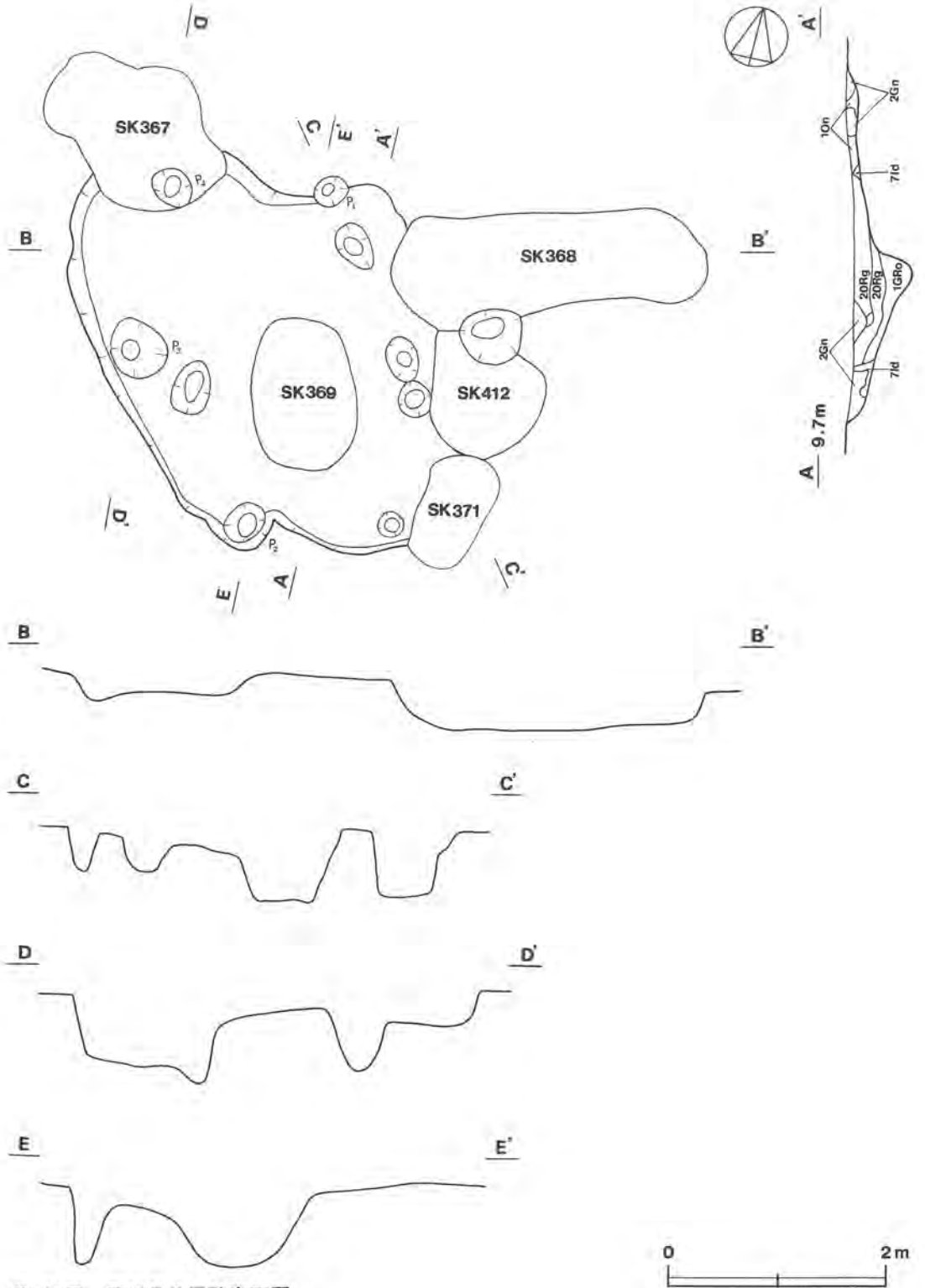
第96・97号住居跡出土土製品・鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第181図 1	球状土錘	DP69	2.7	3.1	—	23.0	孔径0.5cm, 浅黄橙色, 100%
2	刀子	M 46	(2.8)	0.7	0.2	(1.6)	

第97号住居跡（第183図）

本跡は、A3g9区を中心に確認され、第93号住居跡の西側1.5m、第94号住居跡の北側1.5mに位置している。本跡の中央部から北側は第26号地下式坑、西側は第1号道路と重複しており、本跡は土層から第26号地下式坑・第1号道路によって切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、北側約2分の1が調査エリア外になっているため、平面形・規模等の詳細は不明である。調査した部分から南壁の長さは3.98mで、南壁の方向はN-7°-Wを指している。壁高は32cm

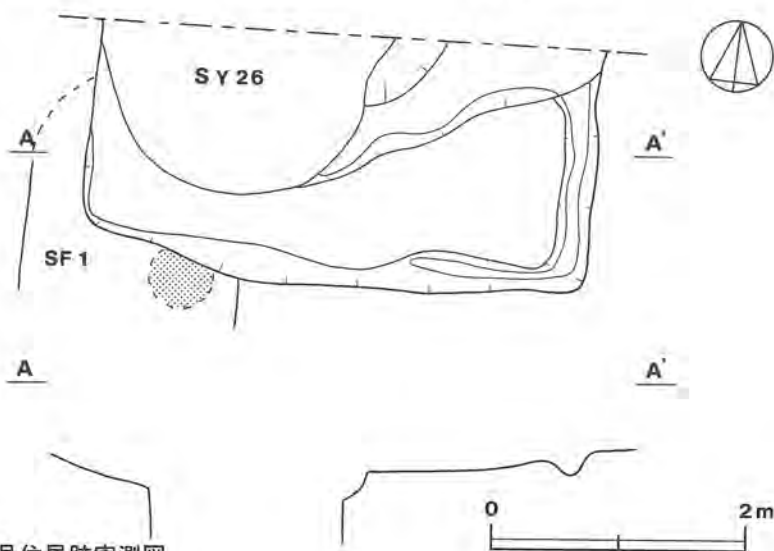


第182图 第96号住居跡実測図

で、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、土幅20cm・深さ10cmの壁溝が東壁から南東壁コーナー付近にかけて掘られており、現状から推定すると、周回しているものと思われる。

覆土は、攪乱が著しく、堆積状況は不明である。

遺物は、比較的少なく、土師器の坏形土器や甕形土器とともに、須恵器片や刀子（第181図1）が覆土下層から出土している。すべて破片で、まとまった器形にならなかった。また、これらの遺物は、耕作による攪乱を受けて移動しているため本跡の時期を明確にすることはできないが、出土した土器形式から判断すると、奈良時代の真間期以降と思われる。



第183図 第97号住居跡実測図

第98号住居跡（第184図）

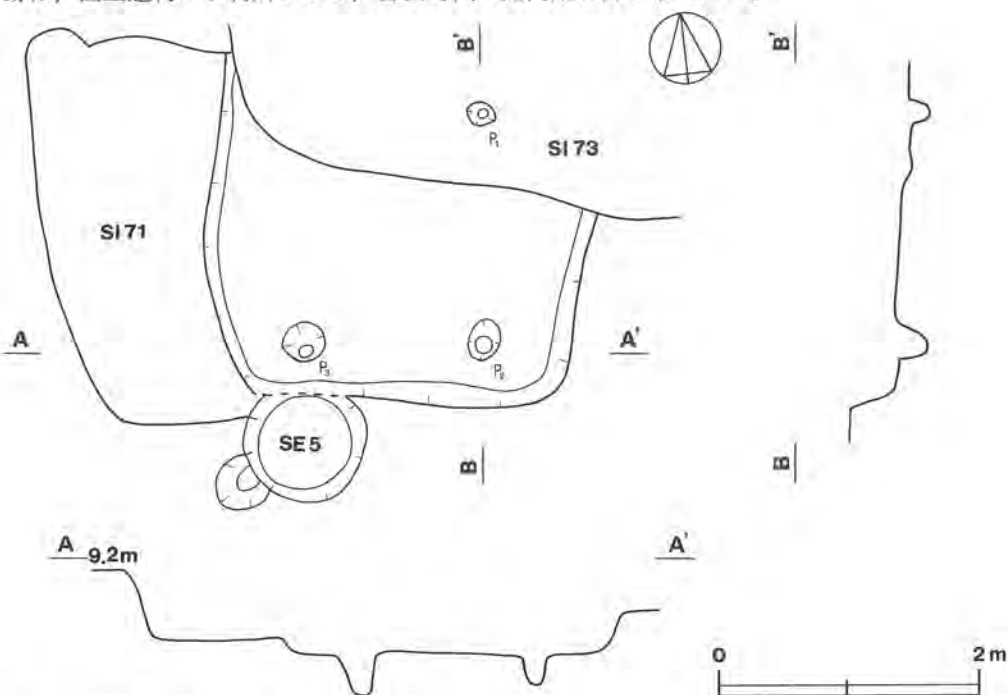
本跡は、B4e7区を中心に確認され、第67号住居跡の北側8.5mに位置している。本跡の中央部から北側は第71・73号住居跡と重複しており、本跡は第71号住居跡によって切られていることから、本跡の方が古い遺構であるが、土層断面から第73号住居跡より新しい遺構である。

本跡は、重複のため平面形・規模等の詳細は不明であるが、調査した部分から南壁の長さは2.9mで、南東コーナー部は隅丸形を呈している。壁高は25cmで、壁は南・東壁の一部及び南東コーナー部のみしか残存せず、締まりのある暗褐色土で垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、暗褐色土がよく踏み固められている。ピットはP₁～P₃の3か所検出され、径は20～25cm、深さは20～30cmの規模で、配置からいずれも主柱穴と思われる。

覆土は、黒褐色土を主体とし、粘土粒子・ローム粒子・焼土粒子多量、木炭粒子少量を含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器片と須恵器片で、覆土下層から出土している。いずれも破片で、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から判断すると、古墳時代の鬼高期以降と思われる。



第184図 第98号住居跡実測図

第99号住居跡 (第185図)

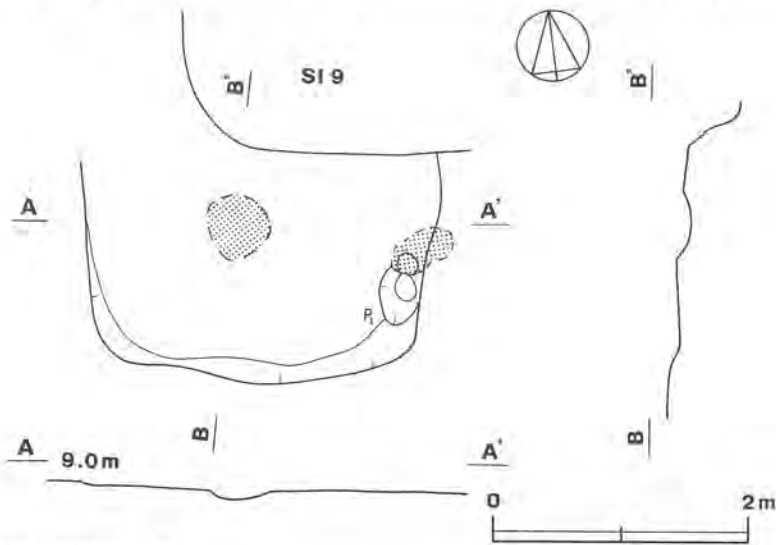
本跡は、A4g₄区を中心に確認され、第10号住居跡の北西側6.0m、第100号住居跡の南西側6.3mに位置している。本跡の北側は第9号住居跡と重複していたが、第9号住居跡から先に調査を行ったので新旧関係をとらえられなかった。

平面形は、調査した部分から推定すると、方形状を呈し、南壁の長さは2.5mで、長軸方向はN-9°-Eを指している。壁高は5cmで、壁は南壁から南西コーナー部にかけてしか確認できなかったが、締まりのある暗褐色土である。床面は平坦で、暗褐色土が硬く踏み固められている。また、焼土が南壁から北側へ90cm、西壁から東側へ100cmの床面に、長径60cm・短径50cmの楕円形状に堆積し、床面を8cmほど皿状に掘りくぼめているので地床炉と思われる。炉床はロームが熱を受けて赤化し、多量の焼土粒子が堆積している。ピットは1か所検出されたが、配置から本跡に伴うものではないと思われる。

覆土は、攪乱のため堆積状況は不明である。

遺物は、すべて土師器の破片で、覆土下層から僅かに出土しているだけである。これらの土器

は、攪乱を受けて移動しているため、本跡に伴うかどうか明確にすることはできなかった。



第185図 第99号住居跡実測図

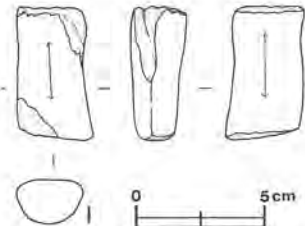
第100号住居跡 (第187図)

本跡は、A4f7区を中心に確認され、第7号住居跡の南東側に隣接している。本跡内で第453・454・455・468・469号土坑と重複しており、土層断面からこれらの土坑によって切られているので、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、重複や攪乱のため平面形・規模・主軸方向等は不明である。調査した部分から西壁の長さは3.4mで、南東・南西・北西コーナー部は隅丸形を呈している。西壁高は10cmで、壁は締まりのあるロームではほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、ロームをよく踏み固めている。ピットはP₁～P₅の5か所検出され、径は15～25cm、深さは15～20cmの規模で、配置に規則性はないが、規模からいずれも本跡に伴う柱穴と思われる。

覆土は、暗褐色土を主体とし、ローム粒子を中量含み、自然堆積の様相を呈している。

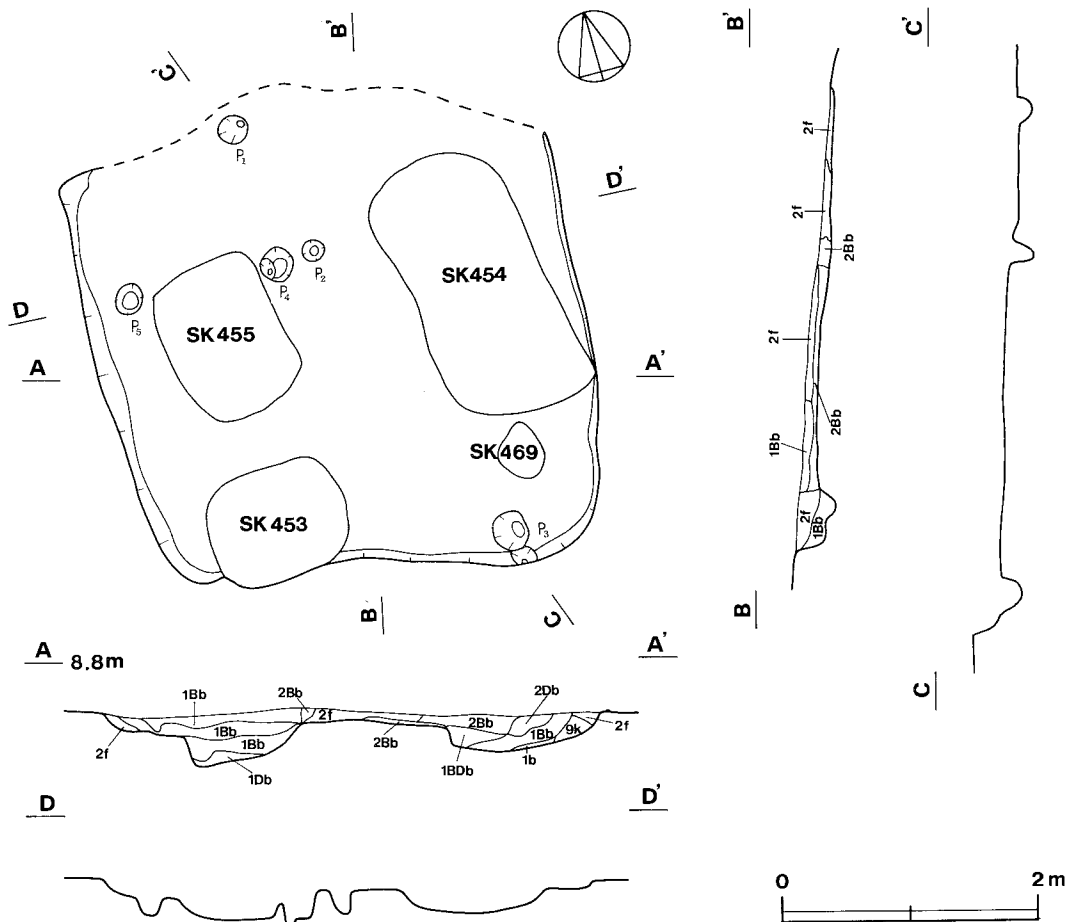
遺物は、攪乱のため破片となった縄文式土器片と、砥石 (第186図1) が出土している。これらの遺物はすべて移動している状況なので、本跡に伴うかどうか明確にできなかった。



第186図 第100住居跡出土遺物実測図

第100号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第186図 1	砥石	Q36	5.3	3.0	1.8	45.6	砂岩



第187図 第100号住居跡実測図

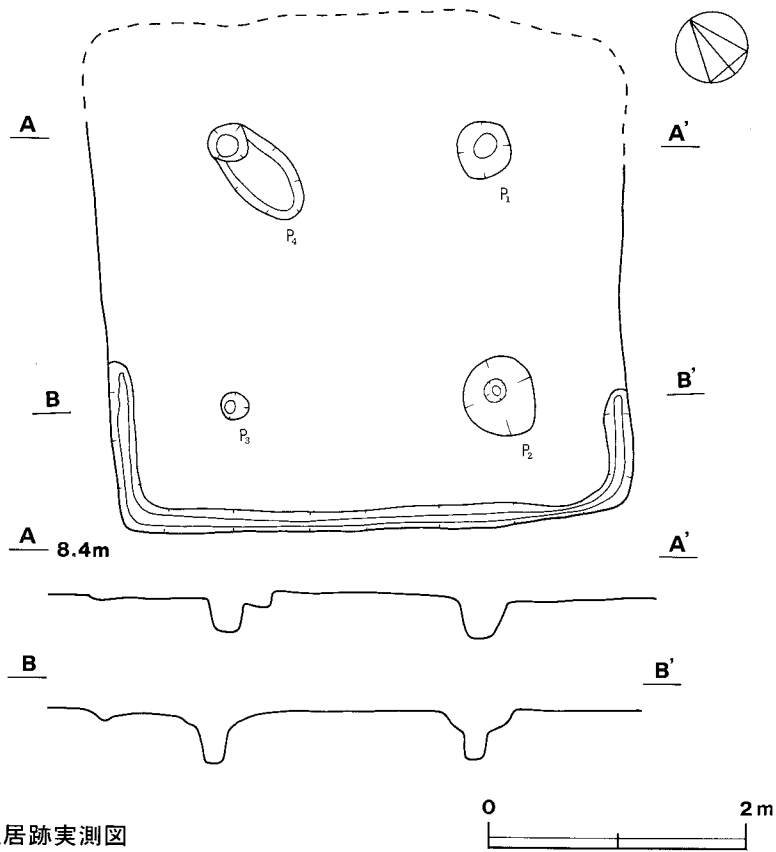
第101号住居跡 (第188図)

本跡は、A4h0区を中心に確認され、第3号住居跡の北側と接しており、第4号住居跡南東側1.6mに位置している。

本跡の北コーナー部から東コーナー部にかけて攪乱されているため、平面形や規模等の詳細は不明である。調査した部分から南西壁の長さは4.1mで、南・西コーナー部は隅丸形を呈し、長軸方向はN-52°-Wを指している。壁は攪乱されているため、南コーナー部から西コーナー部しか検出できず、残存している壁高は5cm前後で、ロームが極わずかに立ち上がっている。壁下には、上幅15cm・深さ3cmほどの壁溝が南コーナー部下から西コーナー部下にかけて周回している。床面はほぼ平坦で、ロームをよく踏み固めている。ピットはP₁~P₄の4か所検出され、いずれも径は23~60cm・深さ33~35cmの規模で、配置に規則性があることから支柱穴と思われる。

覆土は、攪乱のため検出できなかった。

遺物は、床面直上から土師器の坏形土器や甕形土器の破片が僅かに出土している。これらの土器は、攪乱のためすべて移動している状況なので、本跡に伴うかどうか明確にできなかった。



第188図 第101号住居跡実測図

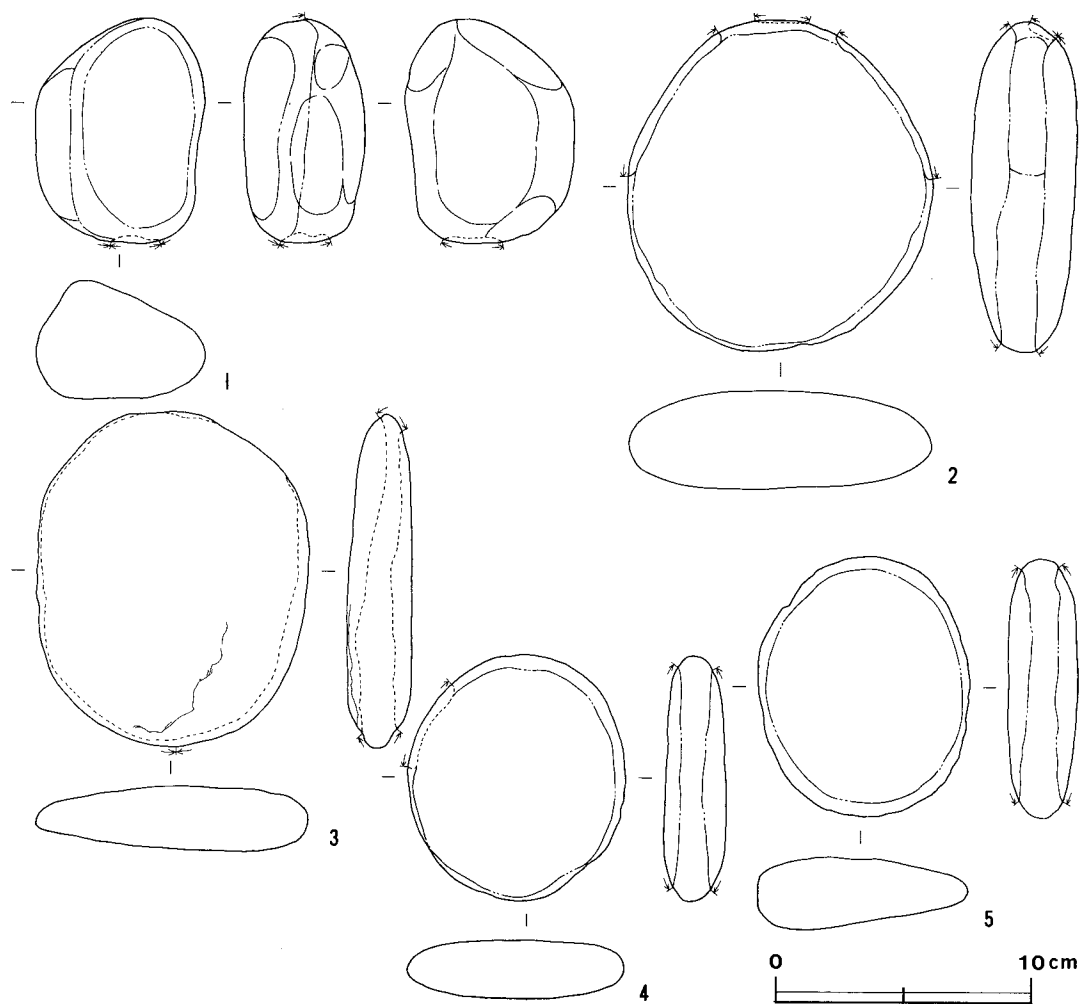
第102号住居跡 (第190図)

本跡は、B3d5区を中心に確認され、第75住居跡の西側に隣接し、第62号住居跡の南側3mに位置している。本跡の北側で第5号溝と重複しており、本跡は第5号溝に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

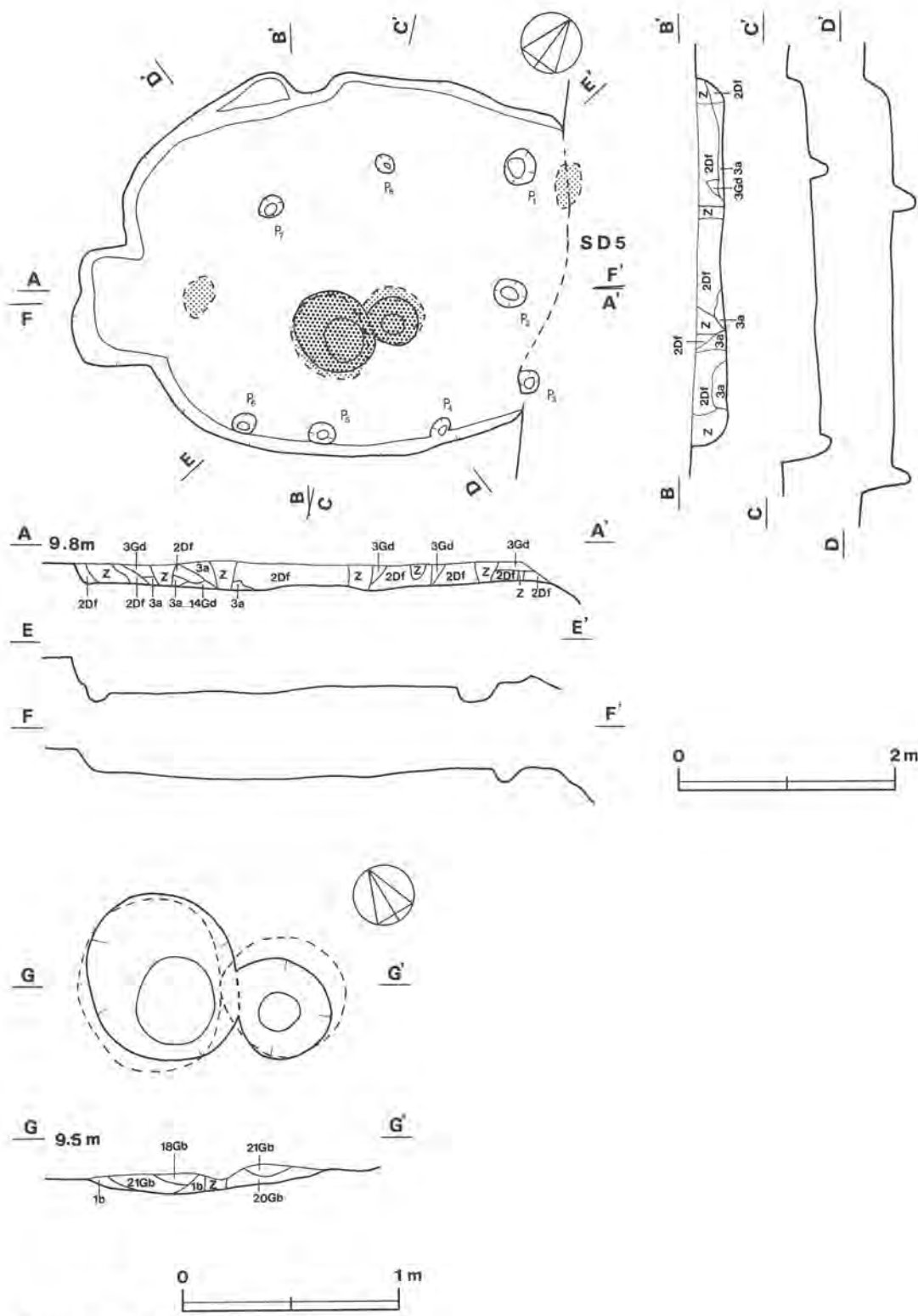
本跡は、重複しているため調査した部分は、長径4.6m・短径3.5mの楕円形を呈し、長径方向はN-54°-Eを指している。壁はトレンチャーによって攪乱されているが、壁高は32cm前後で、締まりのあるロームではほぼ垂直に立ち上がっている。床面もトレンチャーによって格子状に攪乱を受けているが、残存している床面はロームをよく踏み固めている。また、南西側壁に長さ110cm・幅50cm・深さ20cmのはりだし部が付設されており、底面はよく踏み固められていることから出入口施設に関連するものと思われる。炉跡は中央から南東側に2基検出された。炉跡aの東端は、炉跡bの西端と重複しており、平面形は長径80cm・短径65cmの楕円形を呈し、床面を18cmほど掘りく

ほめた地床炉である。炉内には多量の焼土粒子を含むにぶい赤褐色土が堆積している。炉床は、ロームが熱を受けて赤く焼けている。炉跡bの平面形は長径50cm・短径40cmの楕円形を呈し、床面を15cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には多量の焼土粒子を含む赤褐色土が堆積している。炉床は熱を受けて赤化している。新旧関係を土層断面で見ると、炉跡bが炉跡aを切っていることから、炉跡bの方が新しいと思われる。ピットはP₁～P₈の8か所検出され、いずれも径は18～30cm、深さは16cmである。規模・配置等から本跡の支柱穴と思われる。

覆土は、トレンチャーによる攪乱のため堆積状況は不明であるが、ソフトローム小ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土が堆積しており、軟らかい状態である。



第189図 第102号住居跡出土遺物実測図



第190图 第102号住居跡実測图

遺物は、出入口施設と思われる箇所・壁際・炉跡付近から磨石4点（第189図1・2・4・5）・敲石（第189図3）を含めて石21点が出土しているだけである。

本跡の時期を判定する出土遺物はないが、形状や規模から時期を判断すると縄文時代中期以降と思われる。

第102号住居跡出土石器解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第189図 1	磨 石	Q 8	8.9	6.7	4.7	387.1	砂岩
2	磨 石	Q 9	13.1	12.0	3.9	892.5	流紋岩
3	敲 石	Q18	13.2	10.7	2.6	546.5	流紋岩
4	磨 石	Q10	9.7	9.6	2.3	293.4	流紋岩
5	磨 石	Q11	10.3	8.3	2.9	330.5	安山岩

第103号住居跡（第191図）

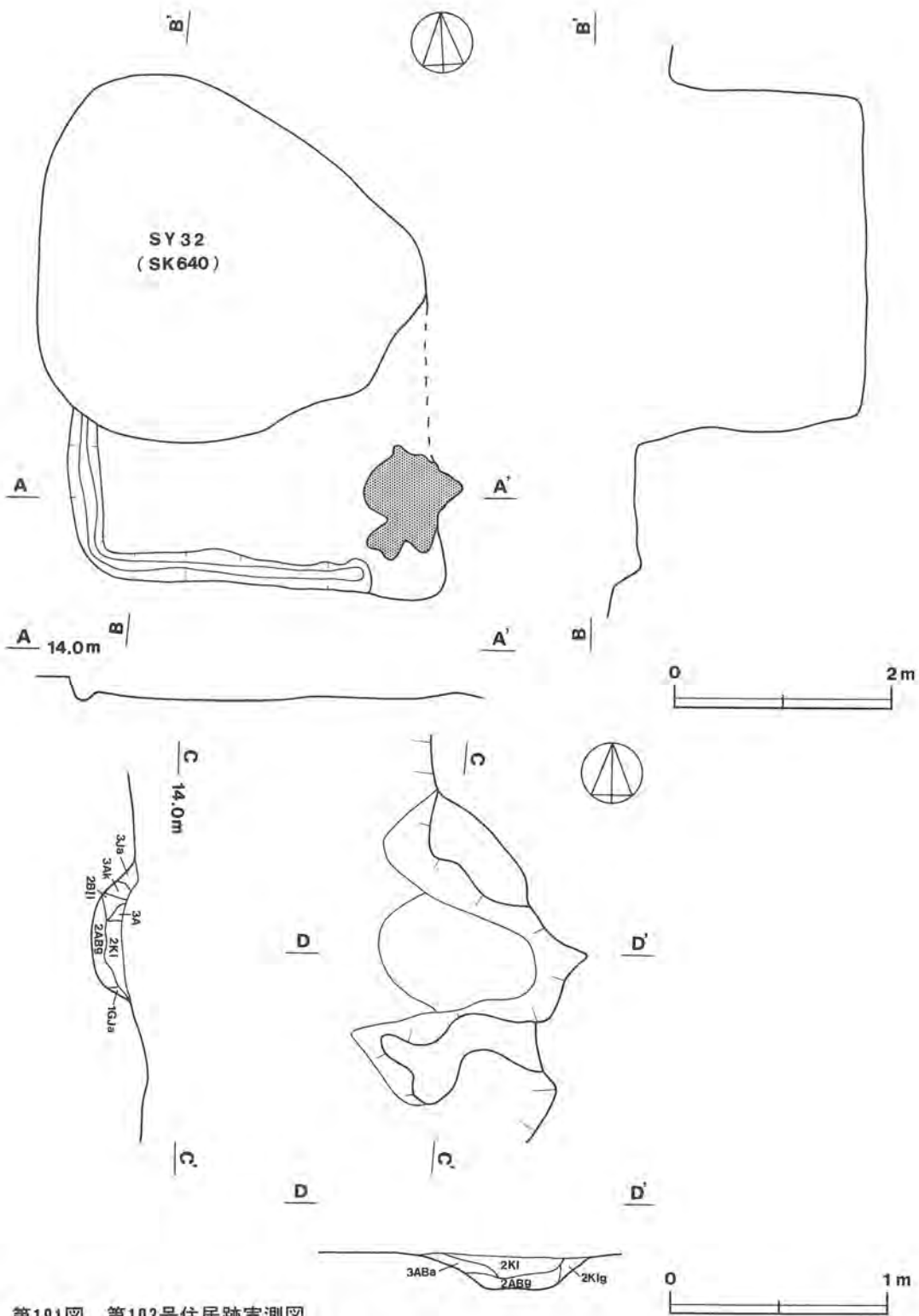
本跡は、D4is区を中心に確認され、第111号住居跡の南西側5m、第10号住居跡の南東側11mに位置している。本跡の中央から北側は第32号地下式坑と重複しており、本跡は第32号地下式坑に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、重複や攪乱のため規模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分から南壁の長さは3.45mで、南西コーナーは隅丸形を呈し、南壁の方向はN-3°-Eを指している。壁は攪乱のため、南西コーナー付近から南壁かけてしか検出できず、壁高は20cm前後で、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅18cm・深さ5cmの壁溝が周回している。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。カマドは東壁南側寄りに付設されており、天井部・袖部の一部は崩れているが、残存している袖部は山砂混じりの粘土で構築されている。内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ110cm・幅140cm、壁外へ30cmほど掘り込んでいいる。燃烧部は床面を15cmほど掘り込んでいいる。カマド内の覆土には、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子が含まれている。ピットは検出できなかった。

覆土は、重複のため堆積状況は不明であるが、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土で、軟らかい状態である。

遺物は、点的に土師器のほかに、須恵器が出土している。カマド手前の床面直上から土師器の高台付皿形土器（第192図3）と南東コーナー部の床面直上から甕形土器（第192図2）が出土し、須恵器も南壁中央部の床面直上から高台付坏（第192図1）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



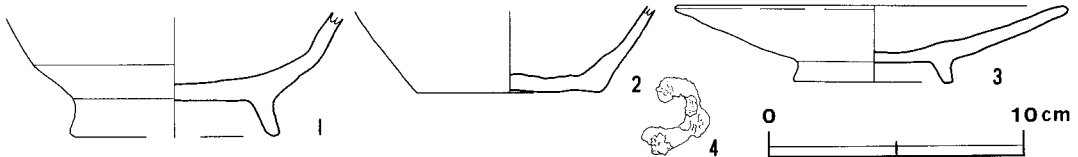
第191图 第103号住居跡実測図

第103号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第192図 1	高台付坏 須恵器	B (4.7) D (8.2) E (1.2)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂 浅黄色 普通	P660 10%
2	甕形土器 土師器	B (3.2) C 7.3	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面へラナデ、外面横位のへラ削り。	礫 外面にぶい赤橙色 内面赤橙色 普通	P658 15%
3	高台付皿形土器 土師器	A 15.4 B 3.0 D 6.2 E 0.8	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は丸い。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P659 60%

第103号住居跡出土鉄製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第192図 4	不明(鉄製)	M47	(3.1)	0.9	0.8	(3.9)	



第192図 第103号住居跡出土遺物実測図

第104号住居跡 (第193図)

本跡は、E4d1区を中心に確認され、第105号住居跡の北側10mに位置している。

平面形は、長軸3.5m・短軸3.2mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-3°-Eを指している。壁はトレンチャーによって攪乱されているが、残存している壁高は45cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面も格子状に攪乱されているが、カマドの手前から南壁下にかけて、長さ2.6m・幅1.4mの範囲内はロームを硬く踏み固めている。カマドは北壁中央部に付設されているが、攪乱のため天井部・袖部の大半が崩壊しており、僅かに山砂の混じった粘土ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子を検出したただけである。調査した部分は、長さ100cm・幅70cm、壁外へ45cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を8cmほど皿状に掘り込んでいる。カマド内の覆土には、少量の焼土粒子が含まれている。ピットは1か所検出され、カマドの反対側に位置し、径は26cm前後、深さは20cmで、配置から出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、上層にローム粒子・焼土粒子を多量に含む黒褐色土、下層にローム粒子多量・木炭粒

子・ソフトローム小ブロックを少量含む暗褐色土が堆積しているが、攪乱のため堆積状況は不明である。

遺物は、カマドの手前の覆土下層から土師器の坏形土器と甕形土器の破片が僅かに出土しているが、いずれも攪乱を受けてまとまった器形にはならなかった。

本跡は、時期を判定する出土遺物は見られないが、カマドを有することなどから古墳時代の鬼高期以降に比定されるものと思われる。

第105号住居跡（第194図）

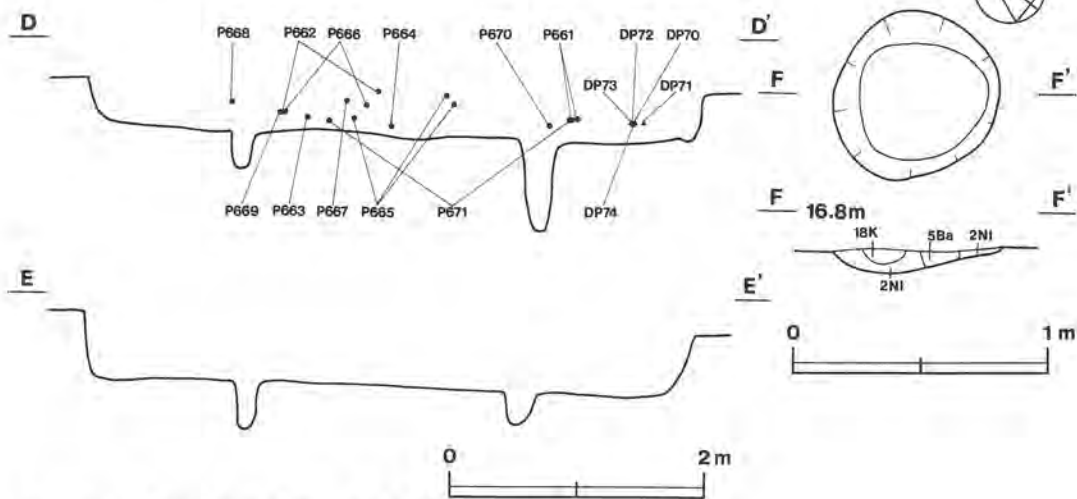
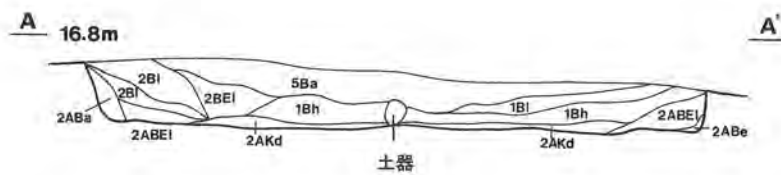
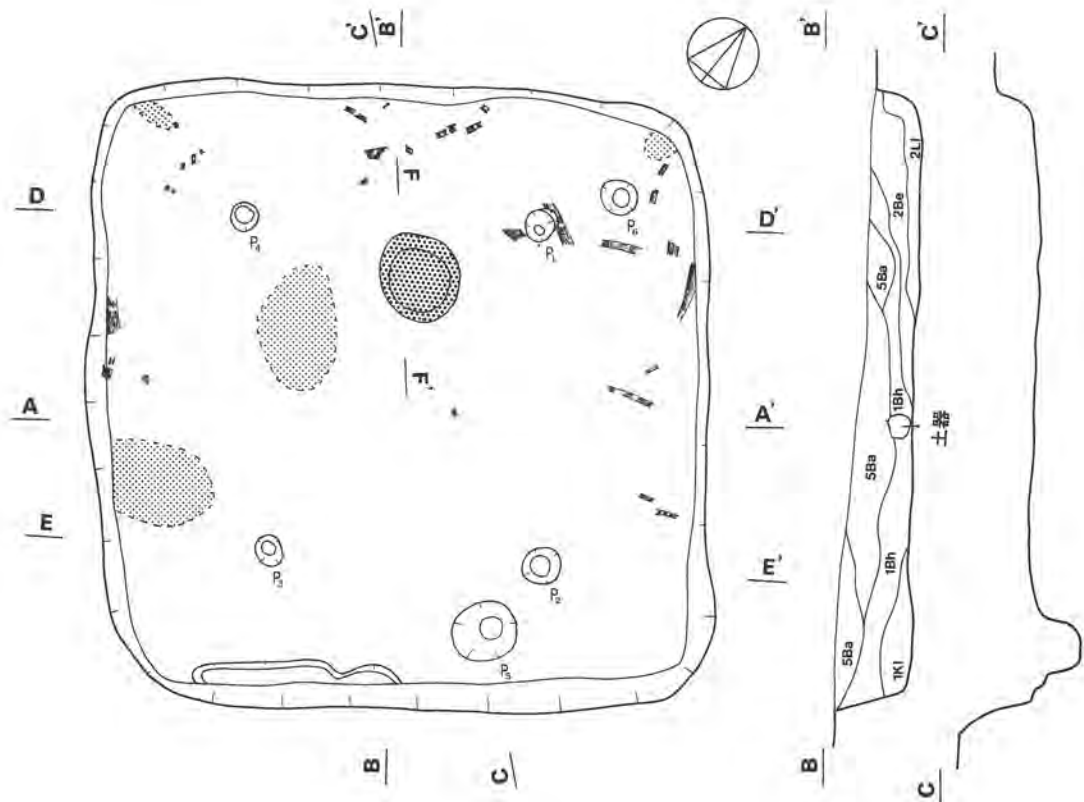
本跡は、E4g2区を中心に確認され、第104号住居跡の南側9.0m、第106号住居跡の東側9.4mに位置している。本跡の北側で第16号掘立柱建物跡と重複しており、本跡は土層断面から第16号掘立柱建物跡に切られていることがわかり、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、一辺が4.9mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-36°-Wを指している。壁高は45cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。中央より西側と南西壁下の中央に、長径90～100cm・短径60cmの範囲で焼土が薄く床面を覆っている。その他、北・西コーナーに極わずかの焼土を検出した。炉跡は中央から北西寄りに位置し、平面形は径70cmの円形を呈し、床面を18cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。炉床は熱を受けて赤化している。ピットはP₁～P₆の6か所検出され、P₁～P₄は配置から主柱穴と思われる。P₁・P₂・P₃は長径25～34cm・短径20～30cmの楕円形を呈し、深さは70・25・38cmの規模である。P₄は径22cm・深さ30cmの円形を呈している。P₅は長径52cm・短径45cm・深さ40cmの規模で、配置から出入口施設に関連するピットと思われる。P₆は径30cm・深さ24cmの規模で、配置から補助柱穴と思われる。

覆土は、上層にローム粒子を中量含む黒褐色土、下層にローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を中量、炭化粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から土師器を主に、土製品が出土している。多くの土器は破片で、覆土下層から出土しているものが多い。中央部や北コーナー寄りの床面直上から正位で甕形土器3点（第195図1・3・4）が出土し、また、同所及び南コーナー部寄りの覆土中層から下層にかけて甕形土器（第195図2）・埴形土器4点（第195図6～9）・埴形土器2点（第195図5・11）・高坏形土器（第195図10）、球状土錘5点（第195図12～16）が出土している。

本跡は、出土遺物から古墳時代の五領期に比定されると思われる。



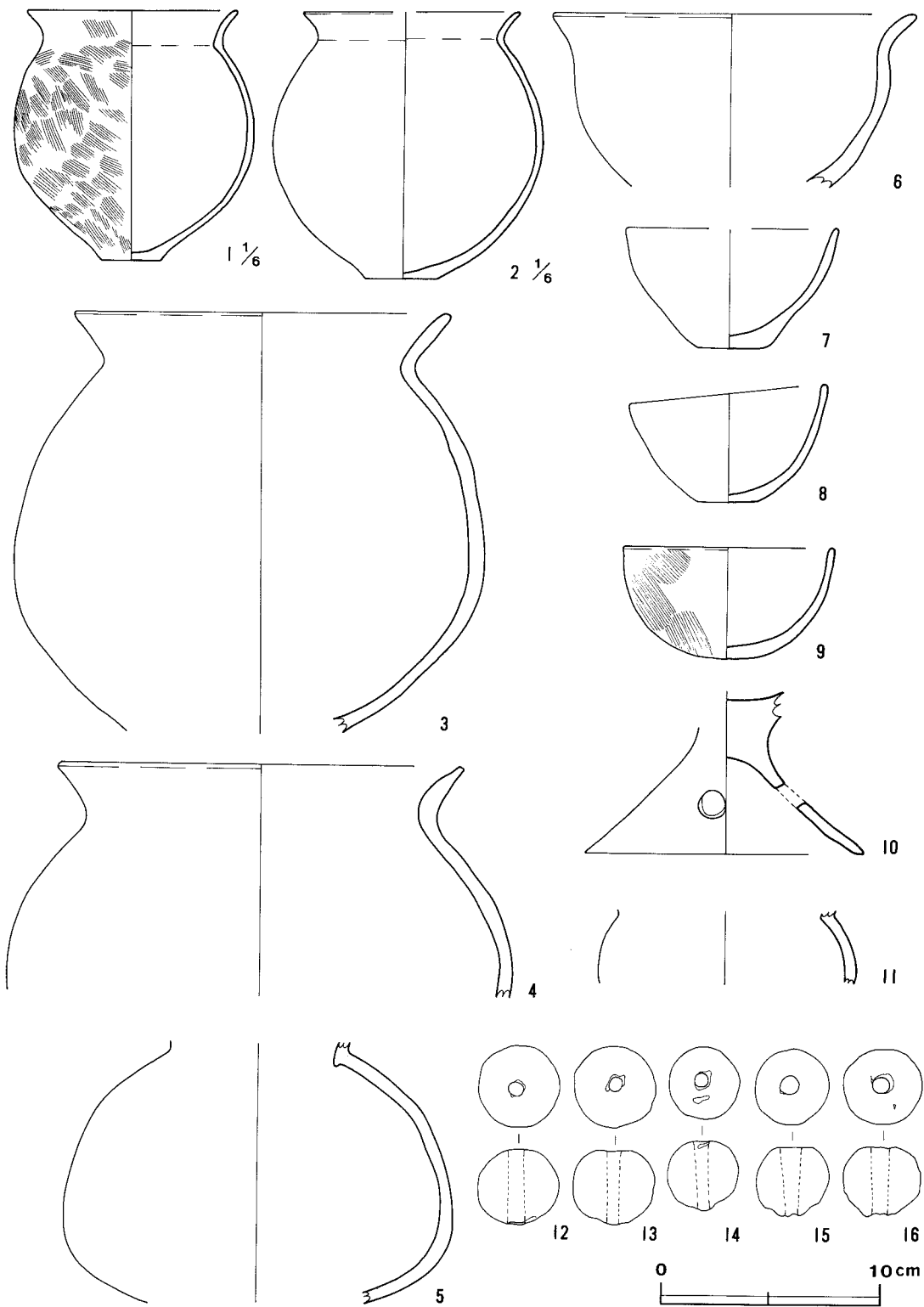
第194图 第105号住居跡実測図・遺物出土位置図

第105号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第195図 1	甕形土器	A 19.3	底部は平底で、胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部内面ヘラナデ、外面斜位のハケ目。	砂粒・長石・礫 にぶい橙色・黒褐色 普通	P663 80%	
	土師器	B 23.0					胴部内面ヘラナデ、外面斜位のハケ目。
		C 5.4					
2	甕形土器	A (19.9)	底部は平底で、胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部内面ヘラナデ、外面横ナデ。	砂粒・礫・長石 黄褐色 普通	P664 70%	
	土師器	B 24.6					胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り後、ナデ。
		C 6.5					
3	甕形土器	A 17.2	胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面斜位のヘラ削り後、ナデ。	砂粒・礫 黒色、内面にぶい 橙色 普通	P661 60%	
	土師器	B (19.5)					
4	甕形土器	A 18.7	胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がる。	口縁部内面ヘラ削り、外面ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P662 10%	
	土師器	B (10.7)					
5	埴形土器	B (12.6)	胴部は扁平な球形を呈する。	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色、内面 橙色 普通	P665 30%	
	土師器						
6	埴形土器	A 16.4	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く外傾する。口縁部と体部との境の内面に稜を有する。	口縁部内面ヘラ削り、外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P670 80%	
	土師器	B (7.9)					
7	埴形土器	A (9.7)	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部内面ヘラ磨き、外面横位のヘラ削り。	砂粒 にぶい黄橙色・褐 灰色 普通	P667 60%	
	土師器	B 5.5					
		C 3.4					
8	埴形土器	A 9.2	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P668 100%	
	土師器	B 5.5					
		C 2.7					
9	埴形土器	A 9.7	底部は丸底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色・褐灰 色 普通	P669 70%	
	土師器	B 5.2					
10	高坏形土器	B (7.5)	脚部は「ハ」の字状に開き、脚部中位に3孔が穿たれている。	脚部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	細砂 浅黄褐色 普通	P671 60%	
	土師器	D 12.8					
11	埴形土器	B (3.4)	胴部は扁平な球形を呈する。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P666 10%	
	土師器						

第105号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第195図 12	球状土錘	DP70	3.5	3.8	—	47.9	孔径0.7cm, 褐灰色 100%
13	球状土錘	DP71	3.4	3.9	—	47.6	孔径0.6cm, 黒褐色 100%
14	球状土錘	DP72	3.2	3.4	—	34.2	孔径0.6cm, 黒褐色 100%
15	球状土錘	DP73	3.2	3.6	—	35.8	孔径0.9cm, 黒褐色 100%
16	球状土錘	DP74	3.2	3.4	—	39.2	孔径0.8cm, 黒褐色 100%



第195图 第105号住居跡出土遺物実測図

第106号住居跡（第196図）

本跡は、E3g⁹区を中心に確認され、第108号住居跡の北東側11.4m、第105号住居跡の西側9.4mに位置している。

平面形は、長軸3.2m・短軸3.2mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-2°-Wを指している。壁はトレンチャーによって攪乱されているが、壁高は45cmで、ロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅20cm・深さ5cmほどの壁溝が西壁から南東コーナー付近にかけて周回している。床面はトレンチャーによる攪乱を受けて凹んでいるが、攪乱されていないローム面はよく踏み固められている。カマドは北壁中央に付設されているが、トレンチャーによる攪乱を受けているため、天井部・袖部の大半は崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されており、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ100cm・幅100cm、壁外へ50cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を3cmほど皿状に掘り込んでいる。カマド内の覆土には焼土粒子・灰・焼土小ブロックが含まれている。ピットは1か所検出され、径は24cm、深さは18cmの規模で、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。

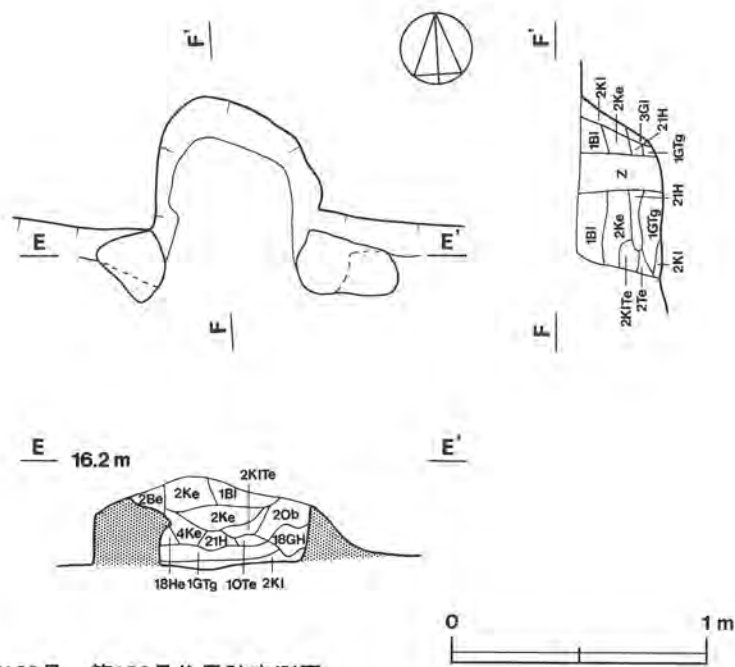
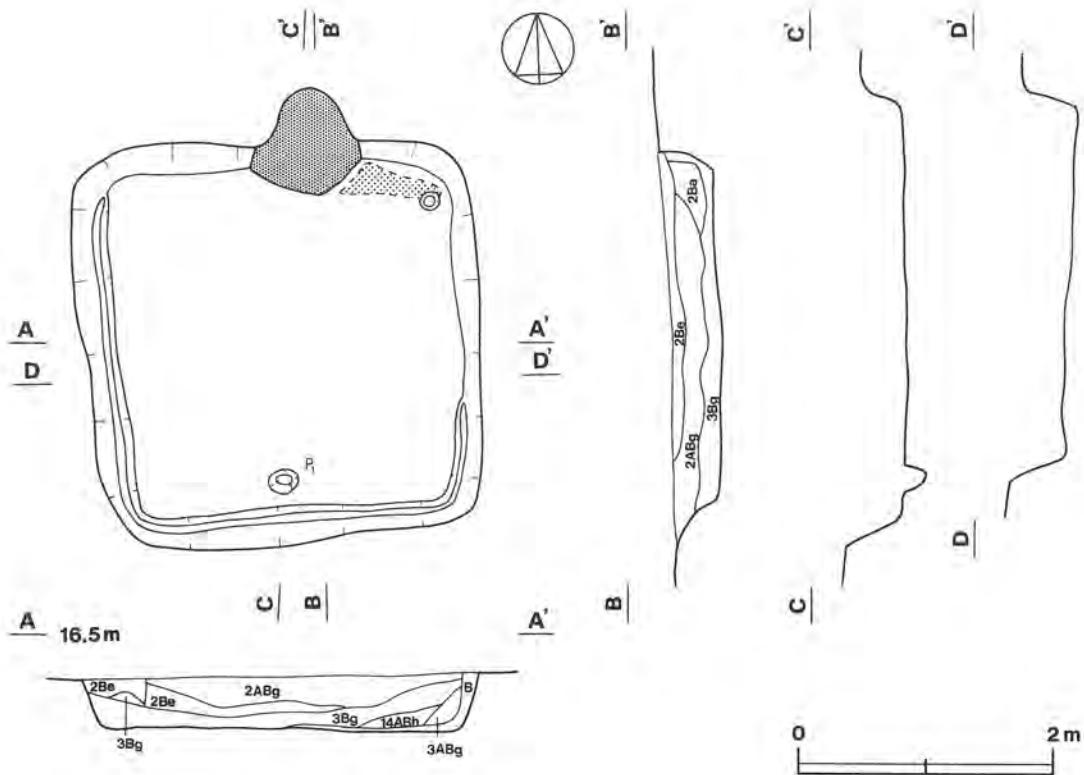
覆土は、上層にローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土、下層にローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。トレンチャーによる攪乱を受けているが、全体的に自然堆積の様相を呈している。

遺物は、僅かな土師器と須恵器が出土している。北東コーナー部の床面直上から伏せた状態で重なりあって須恵器の坏2点（第197図1・2）と、同所の壁際から斜位の状態で須恵器の蓋（第197図3）が出土している。その他、覆土下層から土師器も出土しているが破片で、まとまった器形にはならなかった。

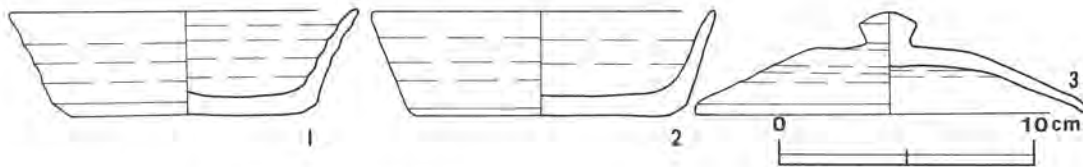
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第106号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第197図 1	坏 須恵器	A 13.7	底部は平底で、体部は外反気味に立ち上がる。口縁部は外反して端部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り後、軽手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・長石 黄灰色 普通	P672 100%
		B 4.1				
		C 8.8				
2	坏 須恵器	A 13.5	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰黄色 普通	P673 100%
		B 4.2				
		C 9.8				
3	蓋 須恵器	A 15.4	天井部中央にやや扁平な宝珠形をつまみが付き、天井部は丸く、天井部と口縁部の境にやや明瞭な稜を持つ。口縁部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂 灰白色 普通	P674 50%
		B 4.0				
		G 2.3				
		H 1.2				



第196号 第106号住居跡実測図



第197号 第106号住居跡出土遺物実測図

第107号住居跡（第199図）

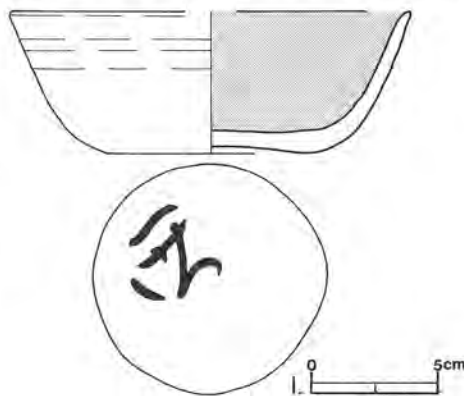
本跡は、D4d4区を中心に確認され、第103号住居跡の北西側16.5mに位置している。

本跡の大半が北側の道路にかかっているため、平面形・規模等の詳細は不明である。残存している南壁の長さは8.0mで、南壁の方向はN-10°-Wを指している。壁高は16cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は凹凸で、ロームが硬く踏み固められている。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、P₁・P₂・P₃は長径35～48cm・短径30～40cm・深さ70～80cmで、規模・配置等から支柱穴と思われる。P₄は長径36cm・短径30cm・深さ85cmの規模で、配置・方向等から出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土が堆積している。堆積状況は攪乱されているため不明である。

遺物は、土師器片、須恵器片で、P₃の縁に伏せた状態で土師器の坏形土器（第198図1）が出土している。須恵器も覆土下層から出土しているが破片で、まとまった器形にはならなかった。

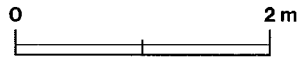
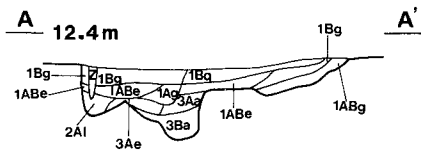
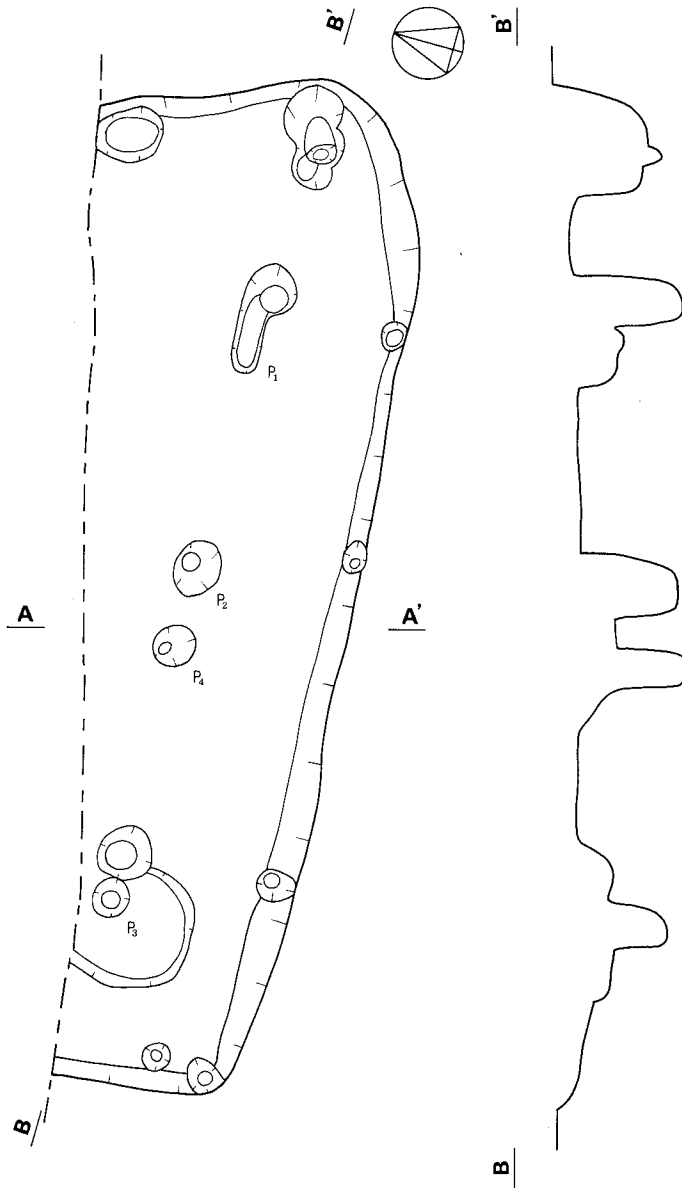
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されると思われる。



第198図 第107号住居跡出土遺物実測図

第107号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第198図 1	坏形土器 土師器	A (15.7) B 5.6 C 8.2	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 に ぶ い 橙 色 普 通	P675 底部外面墨書 「西」 内面黒色処理 60%



第199图 第107号住居跡実測図

第108号住居跡（第200図）

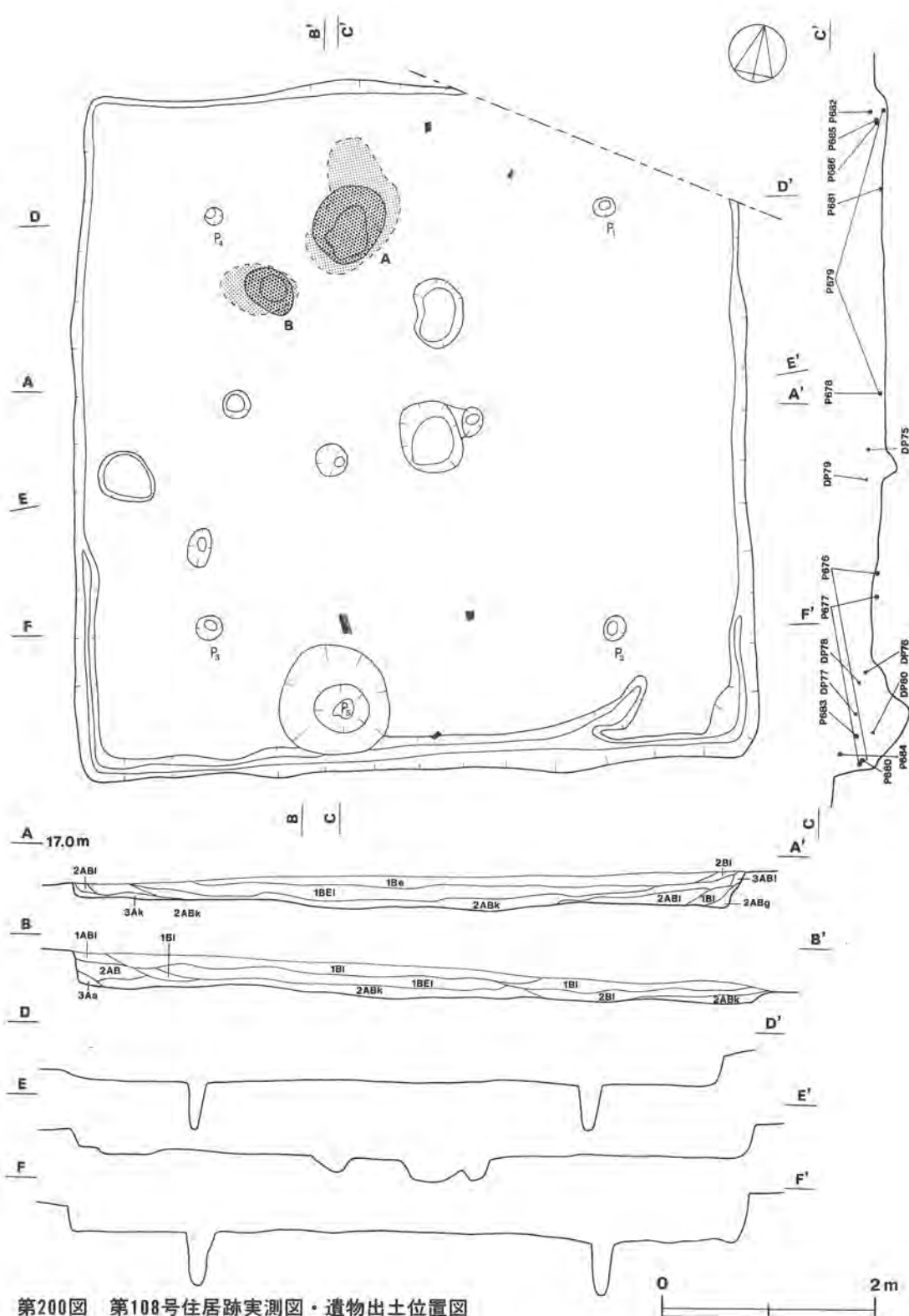
本跡は、F3a6区を中心に確認され、第128号住居跡の北西側7m、第109号住居跡の西側12mに位置している。

本跡の北東コーナー付近は道路にかかっている。平面形は、西壁の長さが8.5m、南壁の長さが8.4mの方形を呈し、主軸方向はN-11°-Wを指している。西壁北西側から北壁にかけての壁高は10cm前後であるが、その他の壁高は45～50cmである。壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。上幅30cm・深さ6～8cmの壁溝が南壁南東コーナー部下から西壁南西側にかけて検出されている。床面は平坦で、ロームをよく踏み固めている。炉跡は床面中央部から北西側に2基検出された。炉跡Aは、炉跡Bの南西側に位置し、平面形は長径70cm・短径50cmの楕円形を呈し、床面を14cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には少量の焼土粒子を含む褐色土が堆積している。炉床は熱を受けて赤く焼けている。炉跡Bの平面形は長径100cm・短径80cmの楕円形を呈し、床面を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉内には多量の焼土粒子・焼土小ブロックを含む極暗褐色土が堆積している。新旧関係は不明であるが、覆土の状況からすると、炉跡Bの方がよく使用されたと思われる。ピットはP₁～P₅の5か所検出され、P₁～P₄は径25～30cm、深さ58～75cmの規模で、配置からいずれも支柱穴と思われる。P₅は後世の土坑に切られているため径は不明であるが、深さは50cmで、配置から出入口施設に関連するピットと思われる。

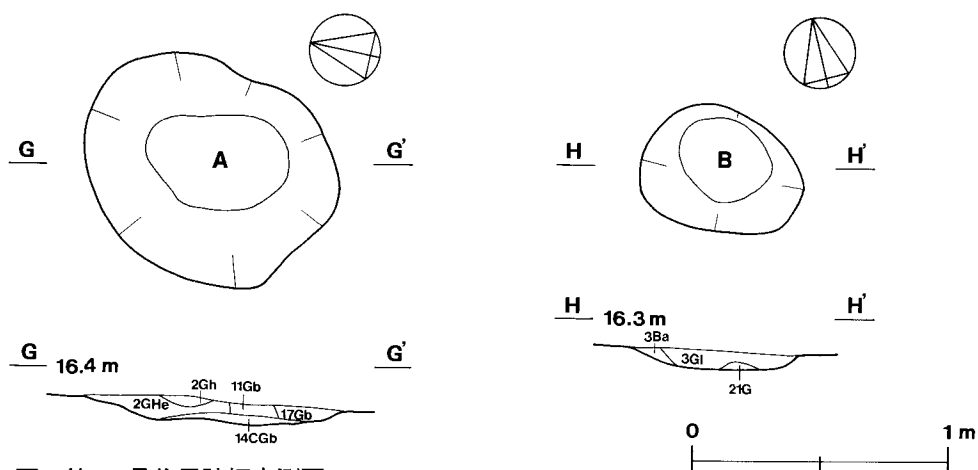
覆土は、上層にローム粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土、下層にローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器のほかに、須恵器、陶器、土製品が出土している。北壁中央部寄りや南壁中央部の床面直上や、中央部の床面直上から伏せた状態で埴形土器2点（第202図6・7）・坏形土器5点（第202図2・4・8～10）が出土し、また、中央部と南壁中央部の床面直上から球状土錘6点（第202図12～17）が出土している。その他、中央部を中心とする覆土下層から伏せた状態で坏形土器（第202図11）・甕形土器片2点（第202図1・5）が出土している。陶器は破片で、覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から古墳時代の和泉期に比定されるものと思われる。



第200图 第108号住居跡実測図・遺物出土位置図

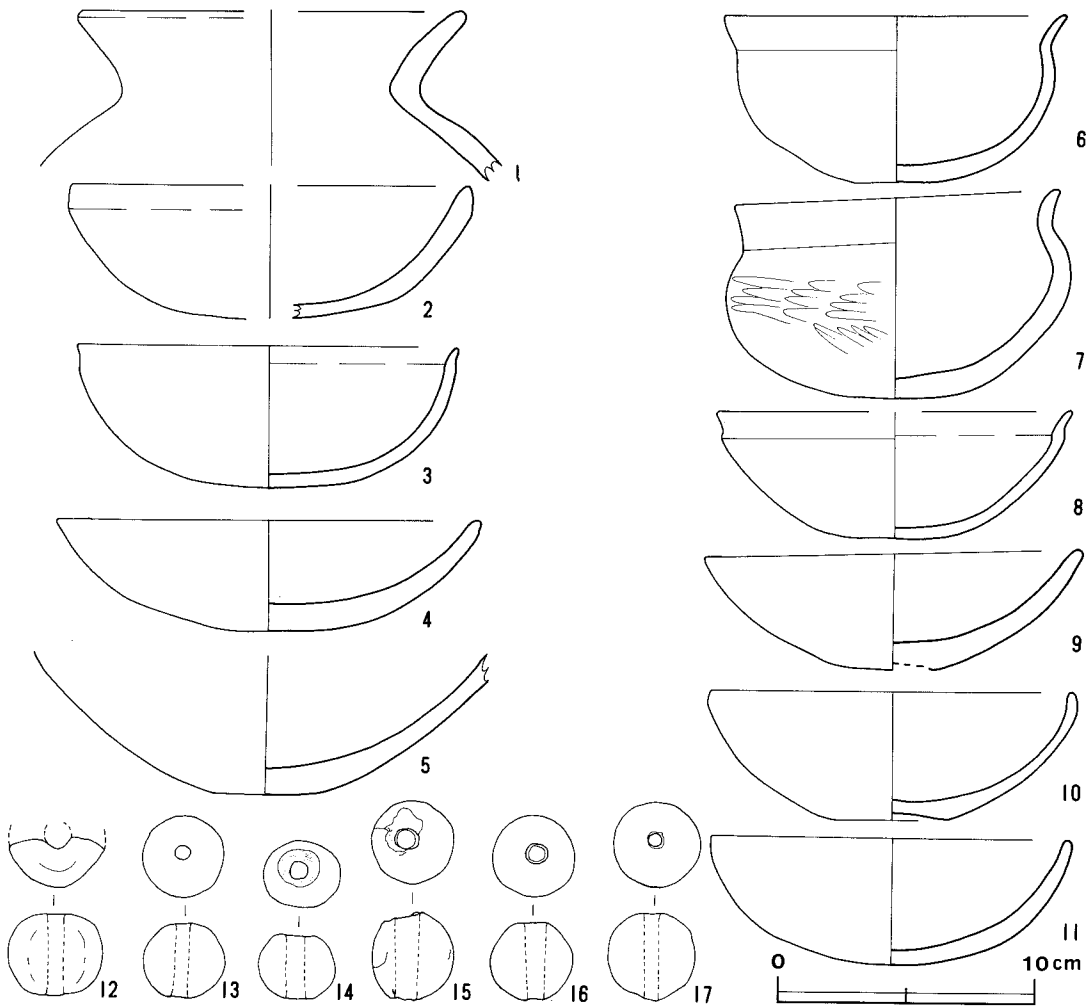


第201図 第108号住居跡炉実測図

第108号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第202図 1	甕形土器 土師器	A (15.0) B (6.2)	口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 におい橙色 普通	P676 15%
2	坏形土器 土師器	A (15.6) B 5.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へら磨き、外面へら削り。	砂粒・礫・雲母 におい橙色・黒色 普通	P686 30%
3	坏形土器 土師器	A 14.8 B 5.7	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へら磨き、外面横位のへら削り。	砂粒 橙色 普通	P678 100%
4	坏形土器 土師器	A 16.5 B 4.4	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部から体部内面へら磨き、外面へら削り。	砂粒 橙色・黒色 普通	P683 60%
5	甕形土器 土師器	B (5.5) C 4.3	底部は平底で、胴部は内彎して外上方へ立ち上がる。	胴部内面へらナデ、外面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P677 5%
6	碗形土器 土師器	A 13.4 B 6.5 C 3.2	底部は平底で、体部はやや内彎し、口唇部は丸い。体部は扁平な半球状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へら磨き、外面へら削り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P684 85%
7	碗形土器 土師器	A 12.6 B 8.2	底部は丸底で、体部はやや扁平な球形を呈し、口縁部は、「く」の字状に開く。	口縁部内面へら磨き、外面横ナデ。胴部内面へら磨き、外面へら削り。	砂粒・雲母 橙色・黒色 普通	P685 100%
8	坏形土器 土師器	A (13.8) B 5.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部は外反気味である。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へらナデ、外面横位のへら削り。	砂粒 赤褐色・赤黒色 普通	P681 40%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	坏形土器 土師器	A 14.7 B 4.7	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部から体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 682 95%
10	坏形土器 土師器	A 14.2 B 5.1 C 4.5	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 普通	P 679 内・外面に赤彩 100%
11	坏形土器 土師器	A 14.0 B 5.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁端部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 赤橙色 普通	P 680 85%



第202図 第108号住居跡出土遺物実測図

第108号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第202図 12	球状土錘	DP75	3.2	3.7	—	20.5	孔径0.6cm, 灰黄褐色, 100%
13	球状土錘	DP76	3.0	3.2	—	28.7	孔径0.6cm, にぶい黄褐色, 100%
14	球状土錘	DP77	2.5	3.0	—	(19.6)	孔径0.7cm, にぶい黄褐色, 95%
15	球状土錘	DP78	3.5	3.3	—	32.8	孔径1.0cm, にぶい橙色, 100%
16	球状土錘	DP79	3.1	3.3	—	31.2	孔径0.9cm, 橙色, 黒色, 100%
17	球状土錘	DP80	3.4	3.4	—	39.1	孔径0.6cm, 灰黄褐色, 100%

第109号住居跡 (第204図)

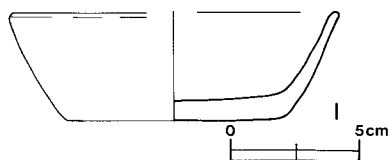
本跡は、F4a1区を中心に確認され、第108号住居跡の北東側12m、第105号住居跡の南側11mに位置している。

本跡は、北側が道路にかかっている。平面形は南壁の長さが3.3mで、南東・南西コーナー部は隅丸形を呈し、南壁の方向はN-14°-Eを指すものと思われる。壁高は30cmで、壁は縮まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。上幅10cm・深さ5cmの壁溝が東壁下から南壁下南東側にかけて検出されている。床面は播鉢状に低くなっていて、ロームがよく踏み固められている。ピットはP₁～P₃の3か所検出した。P₁・P₂は径20・25cm・深さ10・15cmで、少し差があるが、配置から主柱穴と思われる。P₃は径15cm・深さ10cmで、周囲が硬く踏み固められていることや位置から出入口施設に関連するピットと思われる。カマドは道路下に付設されているものと思われる。

覆土は、上層にローム粒子少量を含む黒褐色土、中層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量を含む暗褐色土、下層にローム小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック・炭化粒子を少量含む黒褐色土が堆積している。トレンチャーによる攪乱を受けているが、自然堆積の様相を呈している。

遺物は少なく、土師器のほかに、須恵器、鉄製品が出土している。土器の多くは破片で、覆土下層からの出土が多い。西壁南寄りの床面直上から須恵器の坏(第203図1)が出土している。土師器は、坏形土器や甕形土器であるが、すべて破片で、まとまったものにはならなかった。

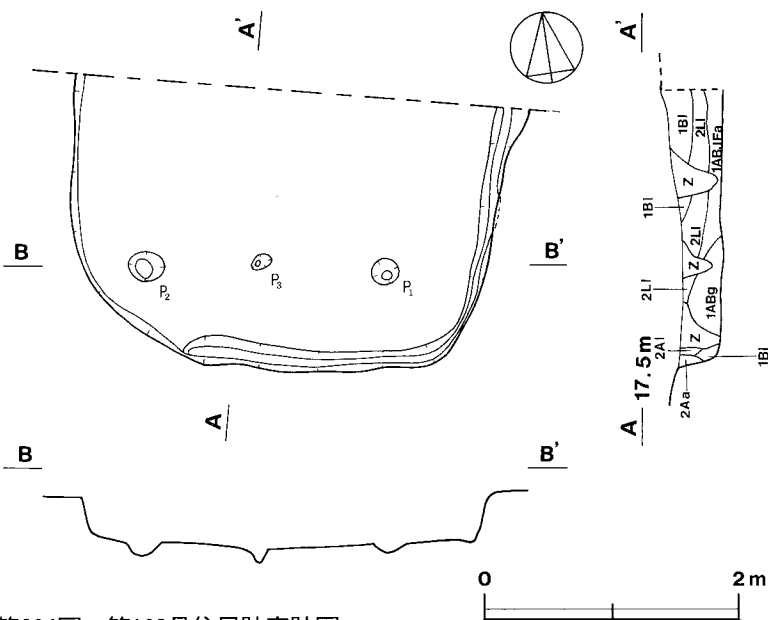
本跡は、出土遺物から奈良時代の真間期に比定されるものと思われる。



第203図 第109号住居跡出土遺物実測図

第109号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第203図 1	坏 須恵器	A (12.9) B 4.2 C 8.5	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は尖る。	水挽き成形。 底部不定方向の手持ちへら削りで、切り離しは不明。	細砂・礫 灰白色 普通	P687 40%



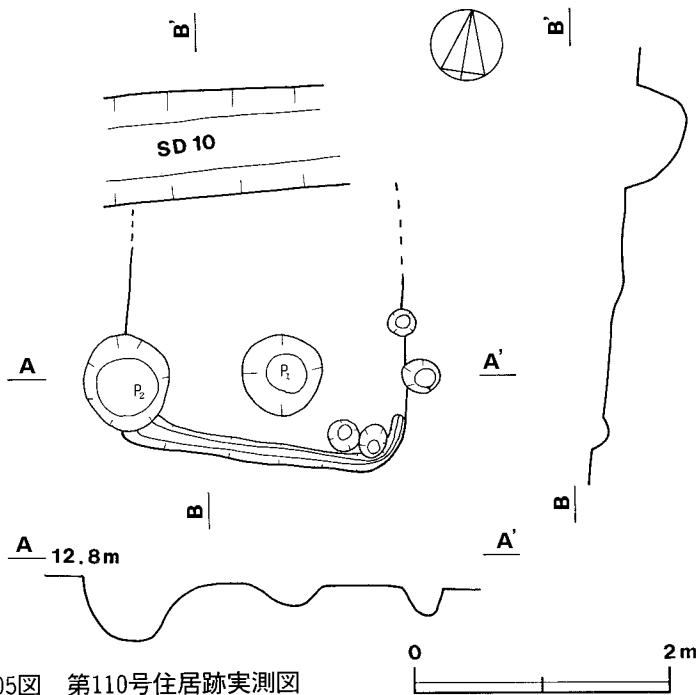
第204図 第109号住居跡実跡図

第110号住居跡 (第205図)

本跡は、D4c4区を中心に確認され、第107号住居跡の南側2.0m、第103号住居跡の北側5.5mに位置している。本跡の中央で第10号溝と重複しており、本跡が第10号溝に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は重複のため、規模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分から南壁の長さは2.4mで、南東コーナー部は隅丸形を呈し、長軸方向はN-17°-Wを指している。壁は攪乱のため南壁しか検出できず、壁高は5cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。南壁下には、上幅20cm・深さ5cmの壁溝が検出された。床面は土坑状ピット2基に切られているが、ほぼ平坦で、ロームがよく踏み固められている。ピットはP₁・P₂の2か所検出されたが、覆土から後世に掘られたものと思われる。炉跡やカマドは検出できなかった。

覆土は、全面にわたり攪乱を受けているため堆積状況は不明である。



第205図 第110号住居跡実測図

遺物は、南西コーナー部から南壁にかけての床面直上から土師器の坏形土器や甕形土器の破片、須恵器片が出土しているが、いずれも攪乱のため移動している出土状況である。

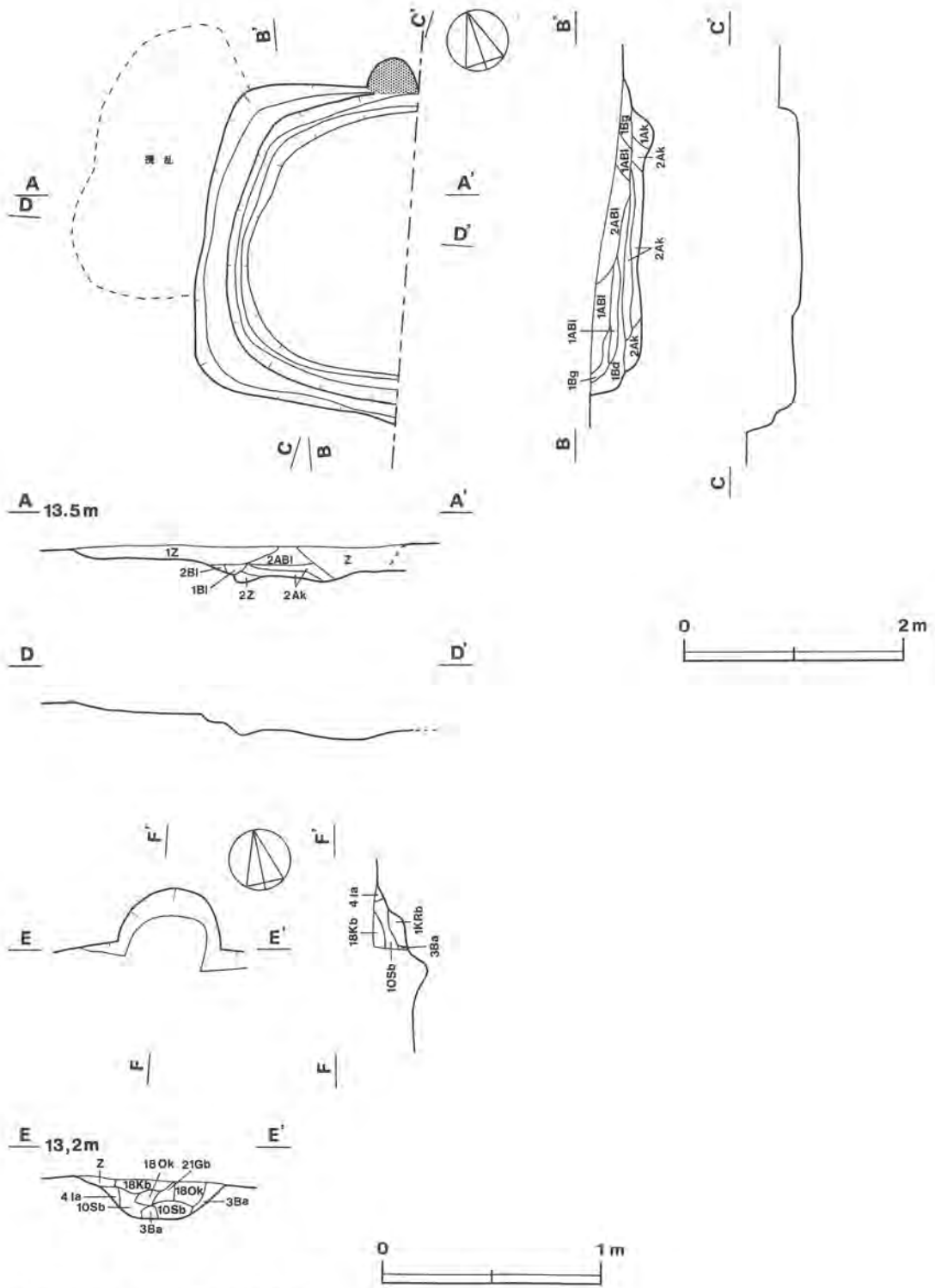
本跡の時期は、遺物が移動しているため不明である。

第111号住居跡 (第206図)

本跡は、D4g6区を中心に確認され、第103号住居跡の北東側4.5m、第110号住居跡の南東側6.5mに位置している。

本跡の東側がエリア外に延びているため、規模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分から西壁の長さは2.8mで、南西・北西コーナーは隅丸形を呈し、主軸方向はN-30°-Eを指している。北壁は北西側が攪乱されているため、立ち上がりは不明である。南壁は26cmで、縮まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。また、西壁の上層は攪乱されているが、検出できた壁高は10cmで、やはり、縮まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。床面は南壁下を除いて、多量のローム小ブロックを含む黒褐色土で床を貼り、硬く踏み固められ、中央付近に多少凹凸がみられる。カマドは北壁中央部と思われる部分に付設され、天井部・袖部は攪乱のため崩壊して、山砂混じりの粘土が残存している。残存している部分は熱を受けて赤化している。調査した部分は、長さ60cm・幅50cm、壁外へ25cm掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の焼土粒子・粘土、極少量の木炭を含む暗赤褐色土が堆積している。ピットは検出できなかった。

覆土は、黒褐色土を主体とし、上層にローム小ブロック・ローム粒子を少量、下層にローム小



第206图 第111号住居跡実測図

ブロック少量，ローム粒子を多量含み，攪乱されている部分を除いて，自然堆積の様相を呈している。

床下から上幅15cm・深さ5cmの壁溝が周回している床を検出した。西壁の長さは2.4mで，南西・北西コーナーは隅丸形を呈し，長軸方向はN-30°-Eを指している。壁高は17cmほどで，締めりのあるロームで垂直に立ち上がっている。床面は平坦で，ロームがよく踏み固められている。北西コーナーから南壁下にかけて，幅50~70cmの範囲は5cmほど高くなっている。ピットは検出できなかった。

覆土は，ローム小ブロックを少量含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

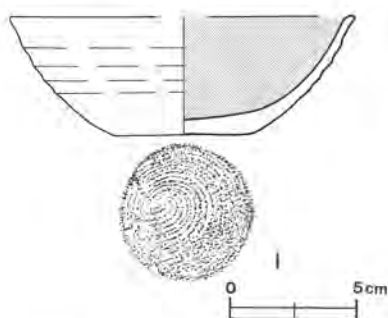
本跡は2軒の住居が同じ位置で重複していることから，拡張され建て替えが行われたか，あるいは最初の住居跡が廃絶されたあと新しい住居跡が構築されたものと思われる。

遺物は，少量の土師器と須恵器片が出土している。中央部の床面より若干浮いた状態で土師器の坏形土器（第207図1）が出土し，須恵器片も覆土下層から出土しているが，まとまった器形にはならなかった。

本跡は，出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第111号住居跡出土土器観察表

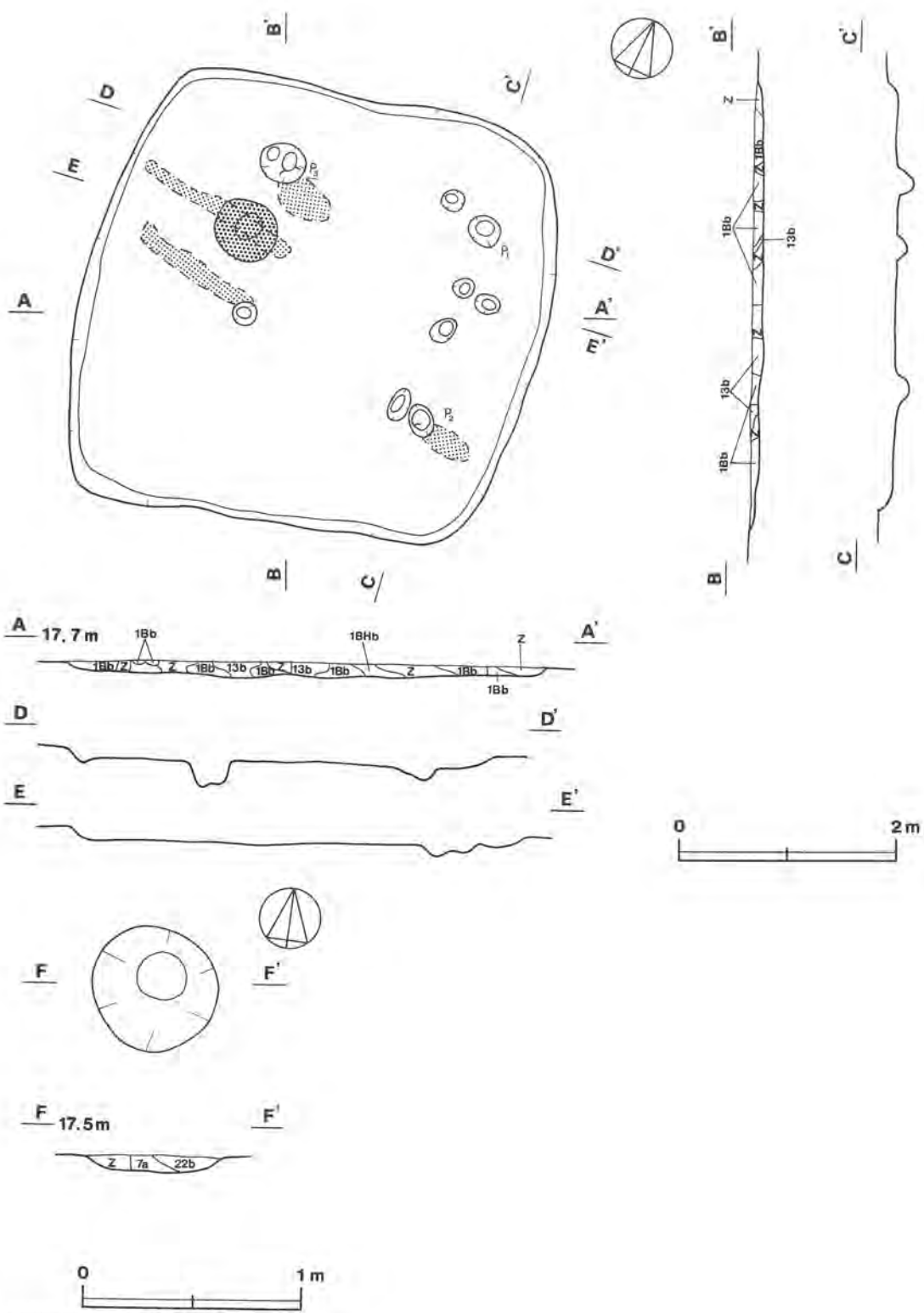
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第207図 1	坏形土器 土師器	A 13.5 B 4.7 C 5.5	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内面へラ磨き，外面下端手持ちへラ削り。	砂粒・礫にふい橙色 普通	P 688 内面黒色処理 50%



第207図 第111号住居跡出土遺物実測図

第112号住居跡（第208図）

本跡は，F4d₁区を中心に確認され，第129号住居跡の東側1m，第128号住居跡の東側5mに位置している。



第208图 第112号住居跡実測図

平面形は、長軸4.25m・短軸4.0mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-13°-Wを指している。壁はトレンチャーによって攪乱されているが、壁高は14cmで、締まりのあるロームで外傾して立ち上がっている。床面もトレンチャーによって格子状に攪乱されて凹んでいるが、攪乱されていないロームはよく踏み固められている。炉跡は床の中央から北西側に位置し、やはり、トレンチャーによって带状に攪乱されている。調査した部分から長径60cm・短径55cmのほぼ円形を呈し、床面を12cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内には焼土粒子が多量に堆積している。炉床は熱を受けて赤化している。ピットはP₁～P₃の3か所検出され、径は30cm前後で、P₁・P₂の深さは15cm、P₃の深さは24cmで、配置からいずれも支柱穴と思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱されているため堆積状況は不明であるが、ローム粒子多量、焼土粒子少量含む黒褐色土で、軟らかい状態である。

遺物は、土師器の坏形土器と甕形土器の破片が床面から若干浮いた状態で出土している。いずれも攪乱のため移動していると思われる。

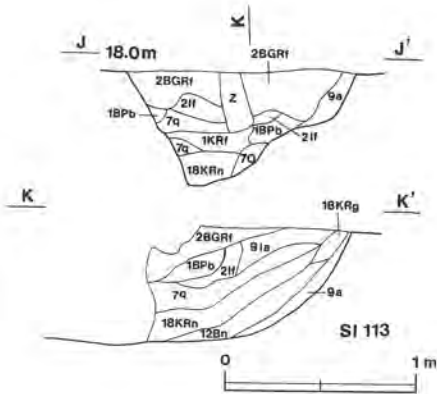
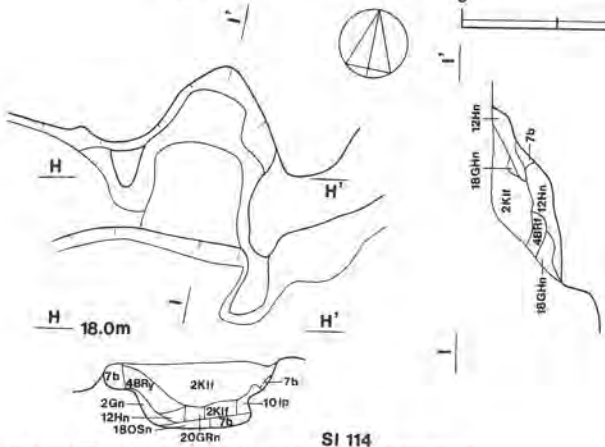
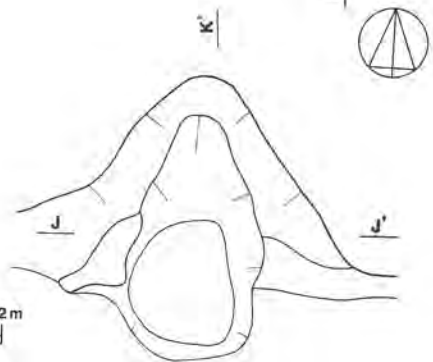
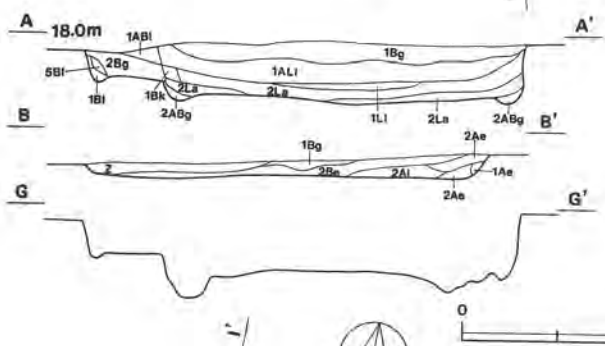
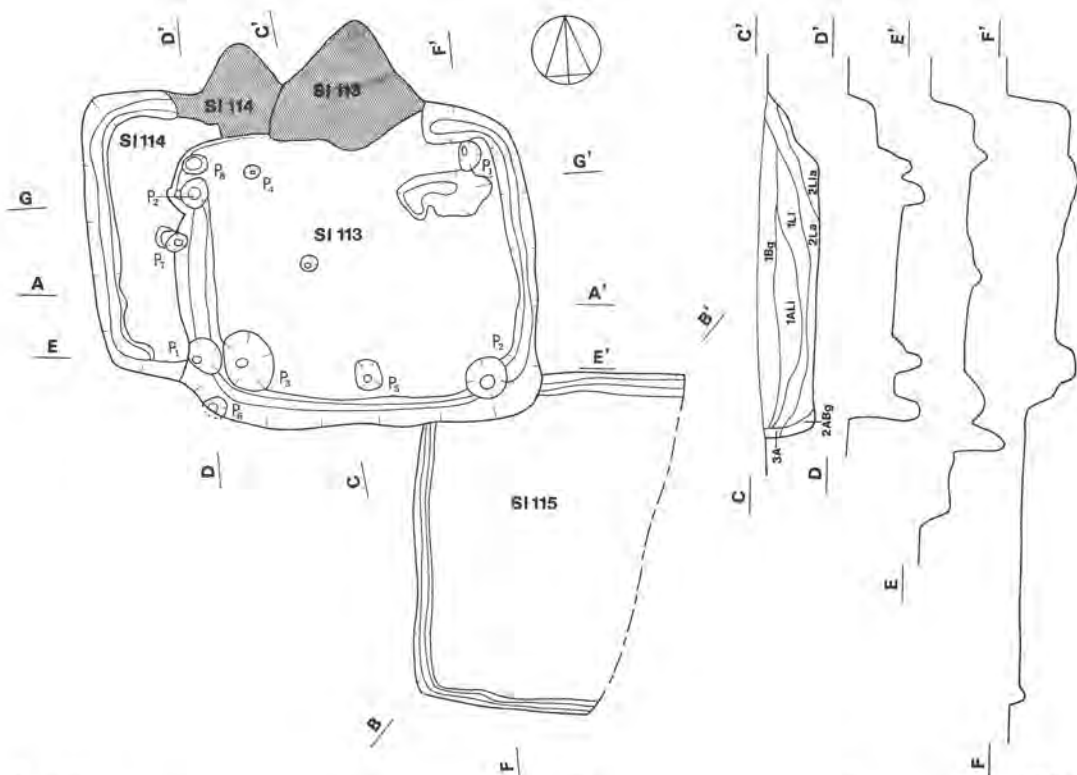
本跡の時期は、土器片が移動しているため不明である。

第113号住居跡（第209図）

本跡は、F3h9区を中心に確認され、第116号住居跡の北東側に隣接し、第117号住居跡の北側3.2mに位置している。本跡は中央から西側で第114号住居跡、南東コーナー付近で第115号住居跡と重複している。本跡が第114・115号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸3.8m・短軸3.35mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-4°-Wを指している。重複している西壁・南東コーナー部を除いて、壁高は65cmで、締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅16cm・深さ5cmの壁溝がカマド付近を除いて周回している。床面はほぼ平坦で、カマドの手前からピットの内側は、ロームが硬く踏み固められている。カマドは北壁中央に付設されており、天井部・袖部の大半は崩れている。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分の長さは150cm、幅は150cm、壁外へ75cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を3cmほど掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の焼土粒子、少量の木炭粒子が含まれている。ピットはP₁・P₈の8か所検出され、P₁～P₄は配置から支柱穴と思われる。P₁・P₃は長径30・60cm・短径26・50cmの楕円形を呈し、深さは18・20cmである。P₂・P₄は径44・14cmの円形を呈し、深さは20cmである。P₅は長径33cm・短径25cmの楕円形を呈し、深さは12cmで、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。P₆～P₈はいずれも長径25cm・短径20cmの楕円形を呈し、深さは28・12・15cmで、配置から補助柱穴と思われる。

覆土は、上層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、下層にローム粒子・焼土粒

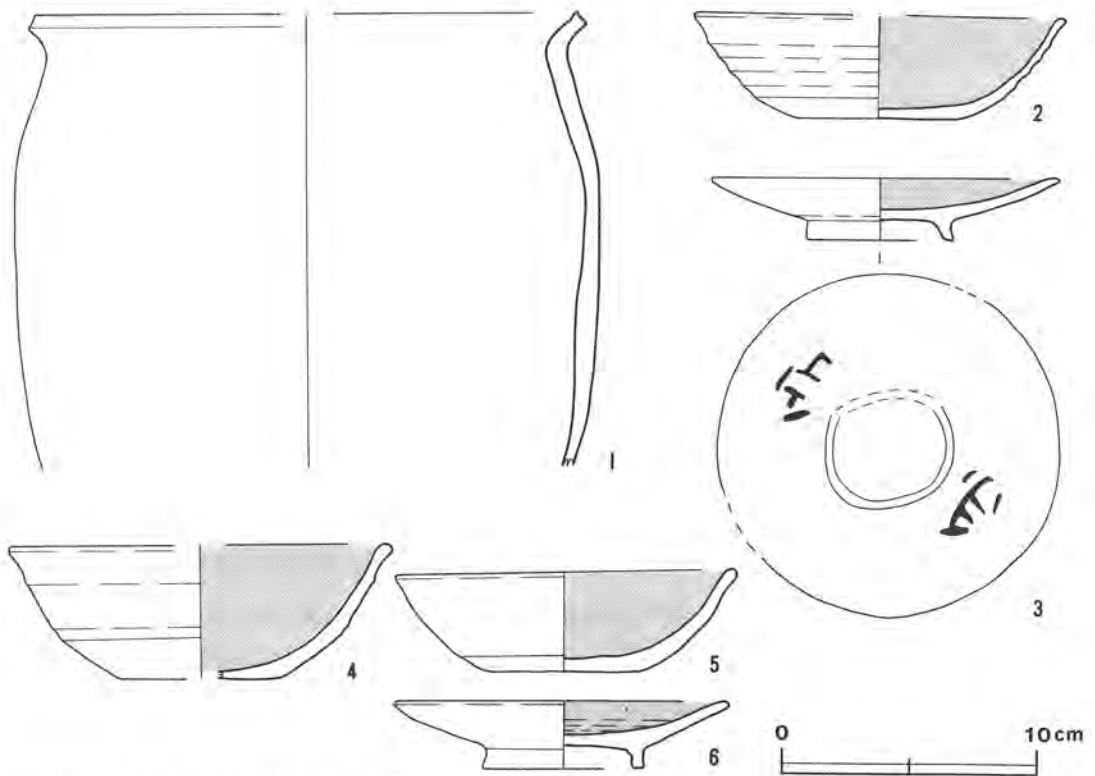


第209图 第113·114·115号住居迹实测图

子・炭化粒子を含む暗褐色土，壁際に多量のローム小ブロック・ローム粒子を含む褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は，多量の土師器のほか，須恵器，陶器が出土している。いずれも破片が多く，また，覆土下層からの出土も多い。中央部の床面直上から伏せた状態で土師器の高台付皿形土器(第210図6)・甕形土器の口縁部片(第210図1)，南壁南西コーナー寄りの床面直上から正位で坏形土器(第210図4)が出土している。須恵器や陶器も覆土下層から出土しているが，まとまった器形にはならなかった。

本跡は，出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第210図 第113号住居跡出土遺物実測図

第113号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第210図 1	甕形土器 土師器	A (21.8) B (17.9)	胴部上位は内彎し，口縁部は外反して外上方に開く。口縁端部に面をなす。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ，外面縦位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P 689 10%

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
2	坏形土器 土 師 器	A (14.5) B 4.1 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P 692 内面黒色処理 50%
3	高台付皿形 土 師 器	A 13.7 B 2.5 D 5.8 E 0.8	体部は内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部は丸い。高台は外下方にのびる。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 灰白色 普通	P 694 体部外面墨書 「西」 内面黒色処理 90%
4	坏形土器 土 師 器	A (15.0) B 5.3 C (6.3)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は外反し、端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P 690 内面黒色処理 45%
5	坏形土器 土 師 器	A 13.4 B 4.1 C 5.7	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P 691 内面黒色処理 95%
6	高台付皿形 土 師 器	A 13.2 B 2.7 D 6.0 E 0.9	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部は丸い。高台は「ハ」の字状に外下方にのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 褐灰色・黒褐色 普通	P 693 内面黒色処理 90%

第114号住居跡（第209図）

本跡は、F3h8区を中心に確認され、第116号住居跡の北東側に接し、第117号住居跡の北側4mに位置している。本跡の大半が第113号住居跡と重複しており、本跡は第113号住居跡に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、重複のため南西コーナー付近から北壁東側寄りにかけてしか検出できなかったため、規模・平面形等の詳細については不明である。検出できた西壁の長さは2.95mで、南西・北西コーナーは隅丸形を呈し、主軸方向はN-6°-Wを指している。残存している西壁高は34cmで、締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅15cm・深さ5cmの壁溝が検出された。残存している床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部付近に付設されており、天井部は崩れ、袖部の一部は重複のため切られている。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて暗赤褐色を呈している。調査した部分は、長さ95cm・幅100cm、壁外へ50cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を10cm掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には中量の焼土小ブロック・焼土粒子が含まれている。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、長径40・32cm・短径30・27cmの楕円形を呈し、深さは55・48cmで、配置から支柱穴と思われる。

覆土は、重複のため全体的な堆積状況を十分観察できなかった。残存している覆土は、上層に

ローム小ブロック・ローム粒子を含む黒褐色土、下層に多量のローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。

遺物は少なく、土師器の坏形土器と甕形土器の破片が床面より若干浮いた状態で出土し、その他、覆土上層から陶器片や縄文式土器片が出土している。陶器片と縄文式土器片は出土状況から周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第115号住居跡（第209図）

本跡は、F3i₉区を中心に確認され、第117号住居跡の北東側1.1m、第116号住居跡の東側2.5mに位置している。本跡の北西コーナー部は第113号住居跡と重複しており、本跡は第113号住居跡に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡の中央部から東側半分がエリア外にかかっているため、規模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分は、南北軸の長さが3.55mで、南西コーナーは直角状を呈している。壁高は10cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10cm・深さ8cmの壁溝が北西コーナーを除いて周回している。床面は平坦で、よく踏み固められている。ピットや貯蔵穴は検出できなかった。カマドはエリア外に付設されているものと思われる。

覆土は、攪乱部を除き、自然堆積の様相を呈し、ローム小ブロックを含む暗褐色土を主体に、一部ローム粒子を含む黒褐色土が堆積している。

遺物は、中央部と南西コーナー部の床面直上から少量の土師器の坏形土器と高台付坏形土器及び甕形土器が破片となって出土し、その他、覆土下層からも土師器、須恵器、陶器片が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第116号住居跡（第211図）

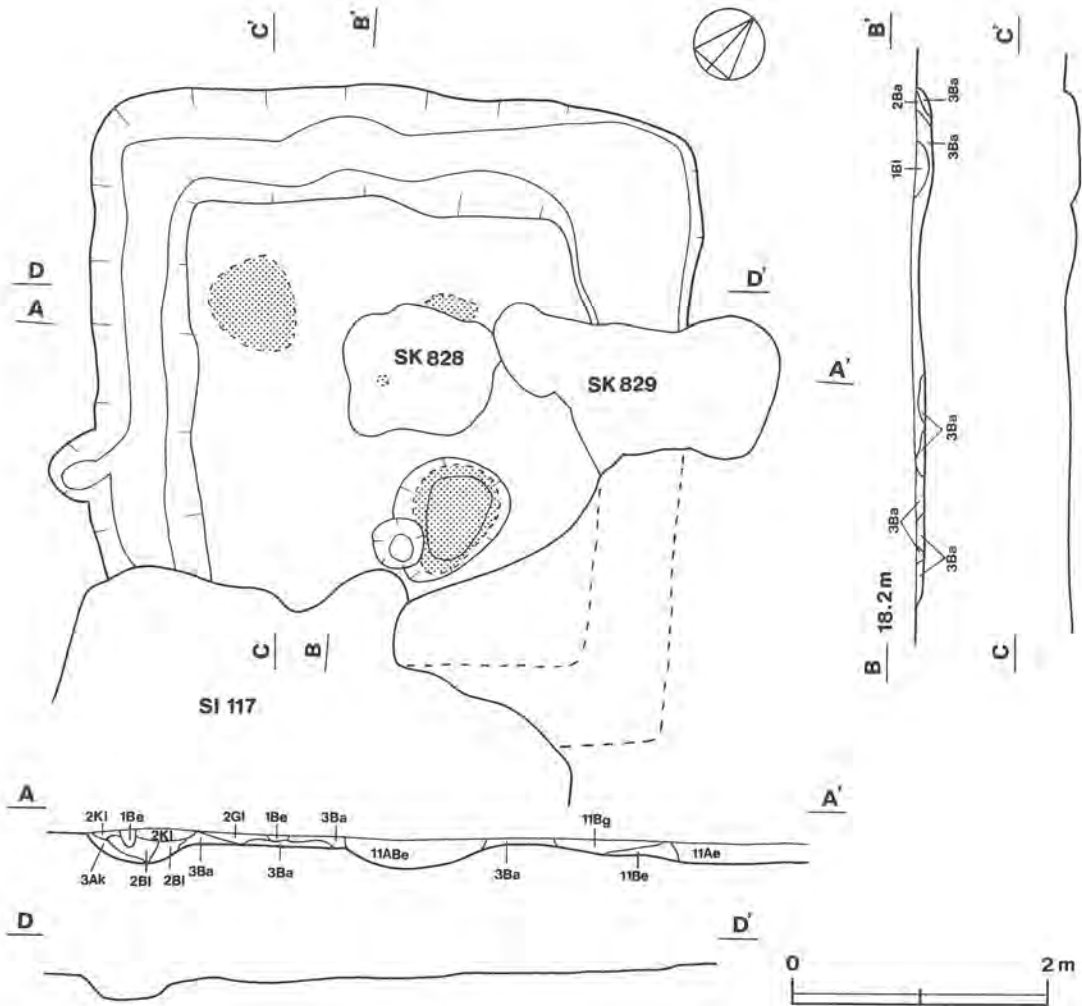
本跡は、F3i₈区を中心に確認され、第122号住居跡の東側5.3m、第114号住居跡に接して位置している。本跡の南側で第117号住居跡、中央で第828号土坑、北東壁北側で第829号土坑と重複しており、本跡は第117号住居跡・第828・829号土坑によって切られていることから、本跡が最も古い遺構である。

本跡の北東壁から南東壁にかけて、重複や全面に攪乱を受けているため規模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分から北壁の長さは4.7mで、北・西コーナーは隅丸形を呈し、長軸方向はN-50°-Eを指している。床面も南東側から南側にかけては攪乱のため検出できなかった。南西壁から北コーナー下壁際の床面は80~90cm幅で、ローム粒子を含む暗褐色土で床を貼り、そ

の内側は地山を床面をしている。全体的によく踏み固められているが、中央付近には凹凸がみられる。貼り床の掘り方は北西側から南西側にかけて12cm、北東側は6cmほど掘り込んでいる。また、中央から東寄りと西寄りに長径75cm・短径65cmの不整楕円形に焼土が極薄く堆積している。焼けている痕跡もなく、炉跡としては認められない。ピットは検出できなかった。

覆土は、重複や攪乱を受けているため堆積状況は不明であるが、ローム粒子を含む暗褐色土が堆積し、軟らかい状態である。

遺物は、僅かな土師器の破片が床面直上から出土しているが、これらは重複や攪乱のため移動しているため、本跡の時期判定はできなかった。



第211図 第116号住居跡実測図

第117号住居跡（第212図）

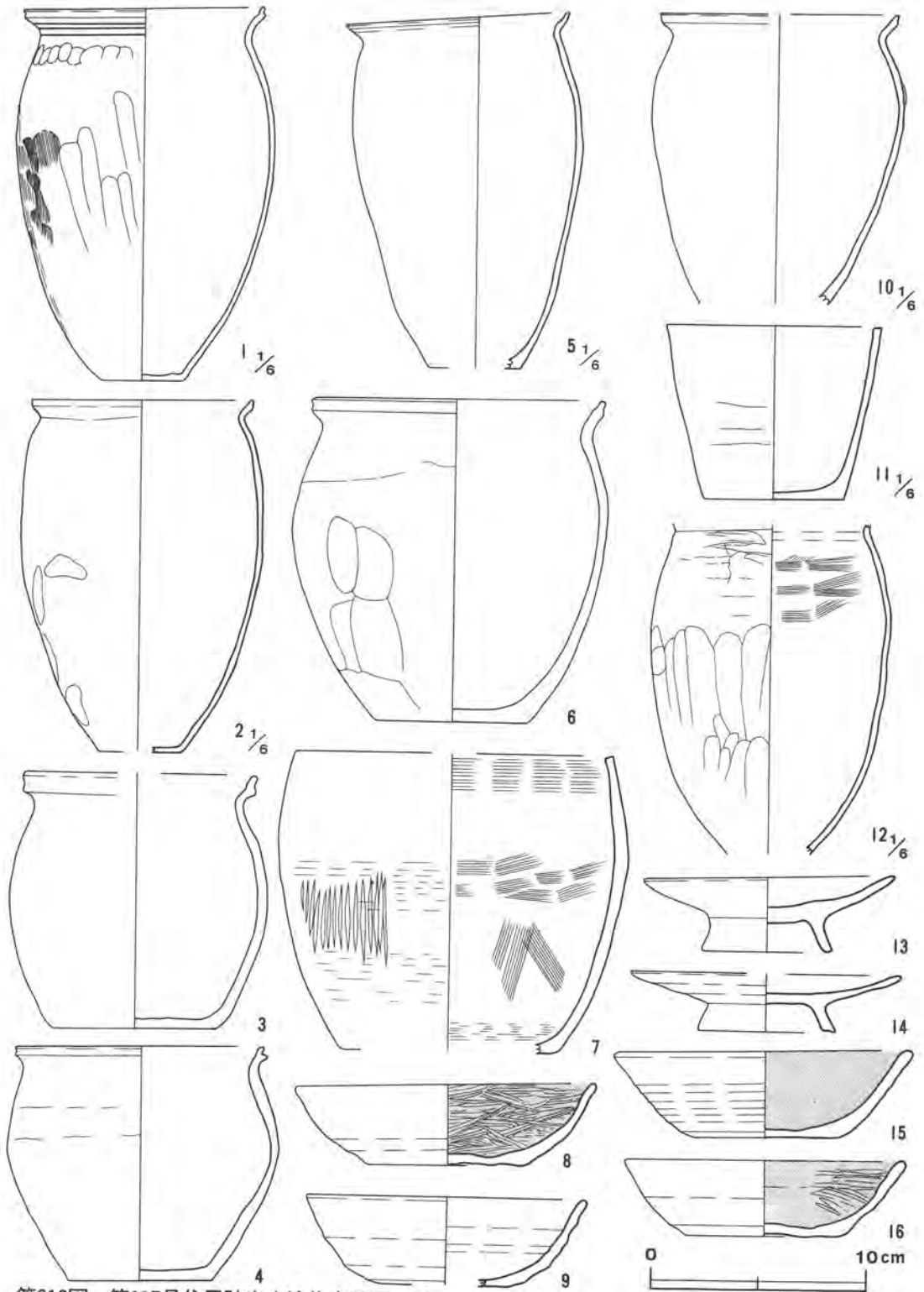
本跡は、F3j₈区を中心に確認され、第115住居跡の南西側1.2m、第131号住居跡の北側に隣接して位置している。本跡の北西側は第116号住居跡と重複しており、本跡が第116号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸4.0m・短軸3.3mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-27°-Wを指している。重複しているため北西壁の上部は確認できなかったが、残存している壁高は20cm、重複していない壁高は35cmほどで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、北壁を除いて、上幅10cm・深さ5cmの壁溝が検出された。床面はカマドの手前から南壁下にかけて、幅1.8m・長さ2.4mの範囲が硬く踏み固められて凹んでいる。その他の床面は平坦である。カマドは北壁中央部に付設されていたが、攪乱のため天井部・袖部は崩壊している。残存している袖部の一部は山砂混じりの粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ143cm・幅90cm、壁外へ60cmほど掘り込んでいる。カマド内の覆土にはロームブロック・ローム粒子・炭化粒子・木炭等が含まれている。ピットは検出できなかった。

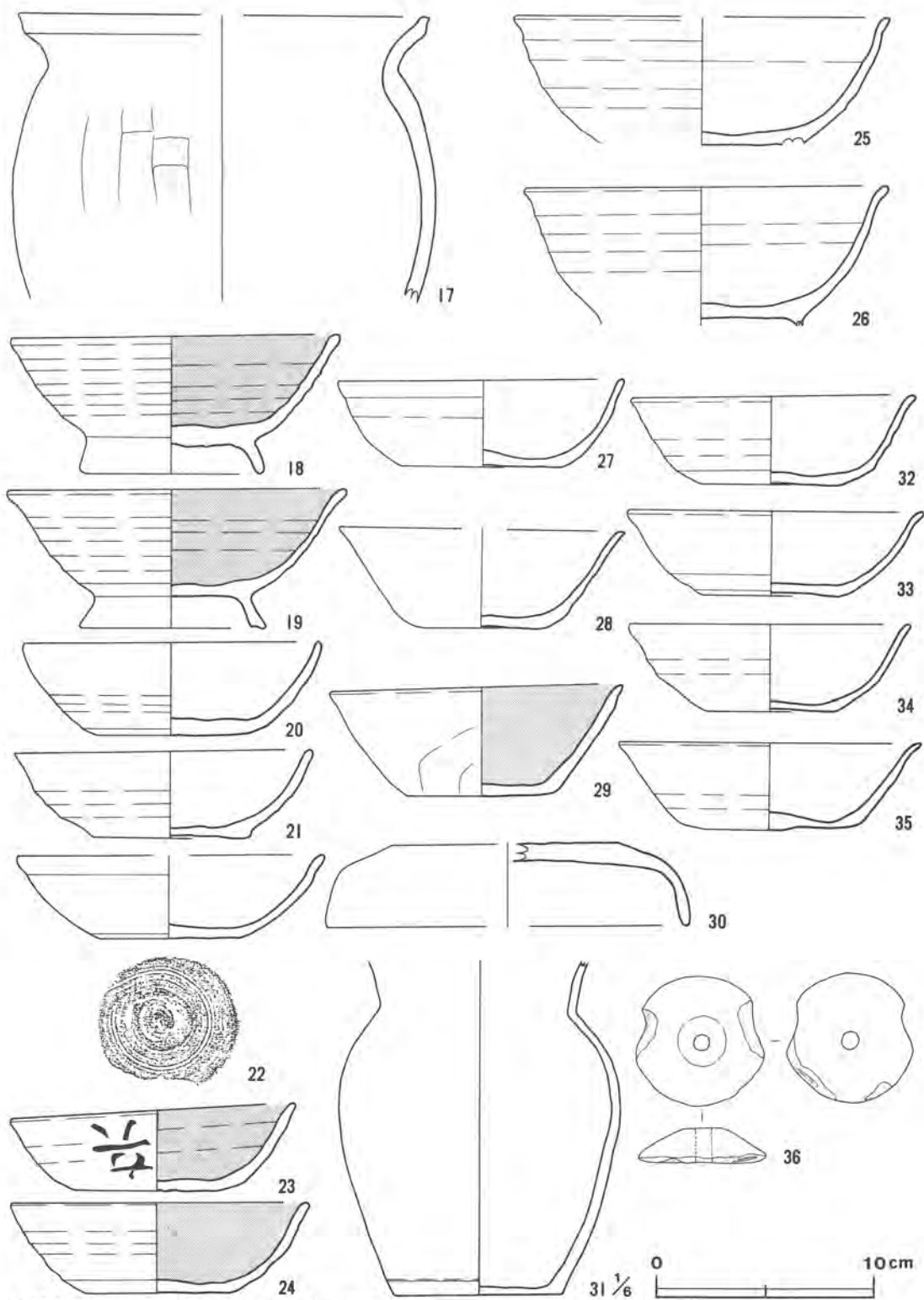
覆土は、黒褐色土を主体とし、上層に多量のローム粒子・焼土粒子と少量の木炭粒子、下層に多量の焼土粒子と少量の木炭小ブロックを含み、人為的堆積の様相を呈している。また、床面からやや浮いた状態で多量の炭化材の散布が認められていることと、覆土中から多量の焼土粒子・木炭を検出していることから焼失家屋と思われる。

遺物は、多量の土師器のほか、須恵器、土製品、陶器片が出土している。多くの土器が床面から若干浮いた状態で出土している。土師器は、カマドの手前から中央部にかけて、北東コーナー部から正位で坏形土器13点（第213図8・15・16）・（第214図20～24・27～29・32・33）、同所から正位や横位で高台付皿形土器（第213図14）、中央部と東壁の中央部から甕形土器9点（第213図1～6・10・12）・（第214図17）、南壁中央部とカマドの西側から正位で高台付坏形土器2点（第214図19・25）、東壁中央部から鉢形土器（第213図7）が出土している。その他、カマドの燃焼部からも横位で鉢形土器（第213図11）・高台付皿形土器（第213図13）・伏せた状態で高台付坏形土器（第214図18）が出土している。また、同所から正位で須恵器の壺（第214図31）も出土している。土製品は、中央部の床面直上から紡錘車（第214図36）が出土している。陶器片も覆土下層から出土しているが、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第213图 第117号住居跡出土遺物実測図 (1)



第214图 第117号住居跡出土遺物実測图 (2)

第117号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第213図 1	甕形土器 土 師 器	A 22.4 B 35.0 C 7.5	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・長石 橙色 普通	P 701 80%
2	甕形土器 土 師 器	A 20.8 B 32.9 C (7.6)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英・ 雲母 橙色・黒色 普通	P 699 75%
3	甕形土器 土 師 器	A (10.9) B 12.1 C 7.5	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 赤黒色・にぶい赤 褐色 普通	P 702 50%
4	甕形土器 土 師 器	A 11.6 B 11.1 C 6.7	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、中位から内傾する。口縁部は外反しながら開き、端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面上位は横ナデ、中位は縦位のヘラ削り、下位は横位のヘラ削り。	砂粒・礫・長石 灰褐色 普通	P 703 100%
5	甕形土器 土 師 器	A 20.8 B 33.2 C (8.5)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 浅黄橙色 普通	P 696 85%
6	甕形土器 土 師 器	A 13.7 B 15.1 C 7.0	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、中位から内傾する。口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部から胴部上位にかけて内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面中位は縦位のヘラ削り、下位は横位のヘラ削り。	砂粒・礫・石英 褐色 普通	P 697 100%
7	鉢形土器 土 師 器	A (14.8) B 14.0 C (10.3)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、上位で僅かに内傾しながら口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒・礫・長石 にぶい褐色・赤褐色 普通	P 726 40%
8	坏形土器 土 師 器	A 14.0 B 3.9 C 7.6	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 722 内面黒色処理 100%
9	坏形土器 土 師 器	A 13.1 B 4.2 C (6.0)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P 889 40%
10	甕形土器 土 師 器	A (22.1) B (27.3)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P 700 80%
11	鉢形土器 土 師 器	A 20.0 B 16.3 C 13.1	底部は平底で、胴部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。	胴部内面ナデ、外面上・中位にかけてナデ、下位横位の回転ヘラ削り。	砂粒・礫・長石・ 石英 褐灰色 普通	P 725 100%
12	甕形土器 土 師 器	B (32.0) C (7.5)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、長胴を呈する。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 橙色・黒褐色 普通	P 698 75%

図版 番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
13	高台付皿形 土器 土 師 器	A 11.7	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁端部は丸い。高台は「ハ」の字状に外下方にのびる。	水挽き成形。 底部は回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい赤褐色 普通	P 723 85%
		B 3.7				
		D 6.1				
		E 1.6				
14	高台付皿形 土器 土 師 器	A (12.6)	体部はやや内彎気味に外上方に大きく開き、口縁部は僅かに水平にのび、端部は丸い。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 橙色 普通	P 724 55%
		B 2.7				
		D 6.4				
		E 1.3				
15	坏形土器 土 師 器	A 13.9	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 灰褐色 普通	P 708 内面黒色処理 100%
		B 4.1				
		C 6.8				
16	坏形土器 土 師 器	A 13.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部に至る。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい褐色 普通	P 709 内面黒色処理 100%
		B 3.6				
		C 7.3				
第214図 17	甕形土器 土 師 器	A (19.0)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P 695 10%
		B (13.3)				
18	高台付坏形 土器 土 師 器	A 15.7	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのび、端部に面をなす。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 黒褐色、外面一部分 浅黄褐色 普通	P 706 内面黒色処理 95%
		B 6.6				
		D 8.6				
		E 1.6				
19	高台付坏形 土器 土 師 器	A 15.6	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。高台は「ハ」の字状に外下方にのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色 普通	P 707 内面黒色処理 60%
		B 6.6				
		D 8.6				
		E 1.5				
20	坏形土器 土 師 器	A 13.8	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 716 80%
		B 4.4				
		C 7.0				
21	坏形土器 土 師 器	A 13.8	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色・黒色 普通	P 717 70%
		B 4.2				
		C 7.4				
22	坏形土器 土 師 器	A (14.4)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P 718 50%
		B 3.9				
		C 6.4				
23	坏形土器 土 師 器	A 13.3	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部に至る。	水挽き成形。 底部回転ヘラ切り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 710 体部外面墨書 「口」 内面黒色処理 100%
		B 4.2				
		C 7.8				
24	坏形土器 土 師 器	A 13.9	底部は平底で、体部はやや内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色 普通	P 711 内面黒色処理 100%
		B 4.2				
		C 6.8				

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
25	高台付坏形 土器 土 師 器	A (17.4) B (6.0)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 橙色 普通	P705 30%
26	高台付坏形 土器 土 師 器	A 16.9 B (6.6) D (9.3)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。高台は短く下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 赤褐色・にぶい橙色、内面赤色・黒色 普通	P704 80%
27	坏形土器 土 師 器	A 13.3 B 4.2 C 7.2	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい黄褐色・黒色 普通	P719 70%
28	坏形土器 土 師 器	A (13.3) B 4.6 C 6.2	底部は平底で、体部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	細砂・礫 褐色 普通	P720 60%
29	坏形土器 土 師 器	A 13.5 B 5.2 C 7.0	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部不定方向の手持ちヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P721 内面黒色処理 100%
30	蓋 須 恵 器	A (17.0) B (3.9)	天井部はほぼ平坦で、口縁部は外傾する。	天井部の頂部は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	細砂 褐灰色・灰褐色 普通	P728 25%
31	壺 須 恵 器	B (31.0) C 15.6	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり、上位から内傾する。頸部は外反しながらそのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面ナデ。 胴部内・外面ナデ。	砂粒・礫・長石 黄灰色 普通	P727 90%
32	坏形土器 土 師 器	A 13.1 B 4.3 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・スコリア 黄褐色 普通	P712 95%
33	坏形土器 土 師 器	A 13.6 B 4.0 C 6.3	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反して端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 外面赤色、内面にぶい褐色 普通	P713 90%
34	坏 須 恵 器	A 13.0 B 4.1 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 明赤褐色・赤黒色 普通	P714 100%
35	坏 須 恵 器	A 13.9 B 4.1 C 8.1	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部不定方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 灰黄色 普通	P715 90%

第117号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大 き さ (cm)			重 量 (g)	備 考
			長 さ	幅	厚 さ		
第214図 36	紡 錘 車	D P99	—	5.9	1.6	(49.9)	孔径0.7cm, 橙色, 95%

第118号住居跡（第215図）

本跡は、F3i₂区を中心に確認され、第119号住居跡の北東側に隣接して位置している。

平面形は、長軸3.1m・短軸3.0mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-15°-Wを指している。壁高は40cmで、壁はトレンチャーによる攪乱を受けているが、締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅15cm・深さ10cmほどの壁溝がカマドから東壁を除いて周回している。床面はトレンチャーによって攪乱されて帯状にくぼんでいる。中央から東壁下にかけて6cmほど高くなっている。また、攪乱されていない床面は、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部・袖部の大半はトレンチャーによって攪乱されている。残存している袖部は、山砂混じりの粘土で構築されている。内側は熱を受けており、多量の焼土粒子を含み赤化している。調査した部分の長さは107cm、幅は80cm、壁外へ45cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤褐色化している。カマドの覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、P₁は径22cm・深さ12cmで、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。P₂は径30cm・深さ12.5cmの規模で、位置から出入口施設に関連するピットの補助柱穴と思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱を受けている部分も多いが、上層にローム小ブロック・ローム粒子少量を含む黒褐色土、下層にローム小ブロックを多量に含む褐色土、壁際にローム小ブロック少量を含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

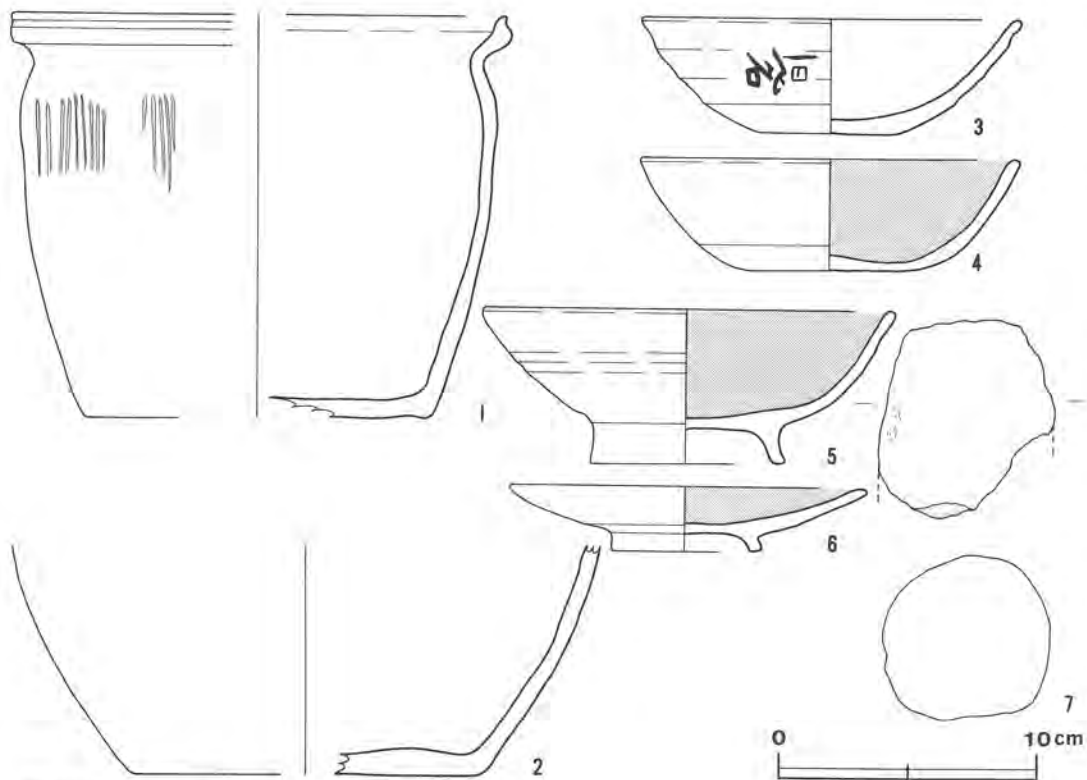
遺物は、本跡全域から土師器のほか、須恵器、土製品が出土している。多くの土器は破片で、床面から若干浮いた状態で出土している。土師器は、カマドの手前の床面直上から伏せた状態で高台付皿形土器（第216図6）・坏形土器2点（第216図3・4）、北東コーナー部の床面直上から甕形土器2点（第216図1・2）が出土し、南西コーナー部寄りの覆土下層から高台付坏形土器（第216図5）が出土している。その他、カマドの燃焼部から支脚（第216図7）が出土している。須恵器も覆土下層から破片で出土しているが、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第118号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第216図 1	甕形土器 土師器	A (19.4) B 15.9 C (13.4)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。頸部でくびれ、口縁部は短く外反する。端部は上方につまみ出している。外面の頸部と胴部の境に明瞭な稜を有する。	□縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面上位縦位のへら削り、中・下位横位のへら削り。	砂粒・礫 橙色 普通	P729 20%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	甕形土器 土師器	B (9.0) C (13.7)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面下位横位のヘラ削り。	砂粒 灰赤色 普通	P 730 20%
3	坏形土器 土師器	A 14.8 B 4.5 C 5.3	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい橙色・黒色 普通	P 733 体部外面墨書 「口」 60%
4	坏形土器 土師器	A 14.8 B 4.4 C 6.0	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 橙色 普通	P 732 内面黒色処理 70%
5	高台付坏形土器 土師器	A 13.1 B 6.1 D 7.6 E 1.5	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 橙色 普通	P 731 内面黒色処理 80%
6	高台付皿形土器 土師器	A 13.8 B 2.6 D 5.8 E 0.7	体部は内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁端部は丸い。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	P 734 内面黒色処理 80%



第216図 第118号住居跡出土遺物実測図

第118号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第216図 7	支 脚	DP22	(7.9)	6.8	—	(251.9)	黄橙色

第119号住居跡 (第217図)

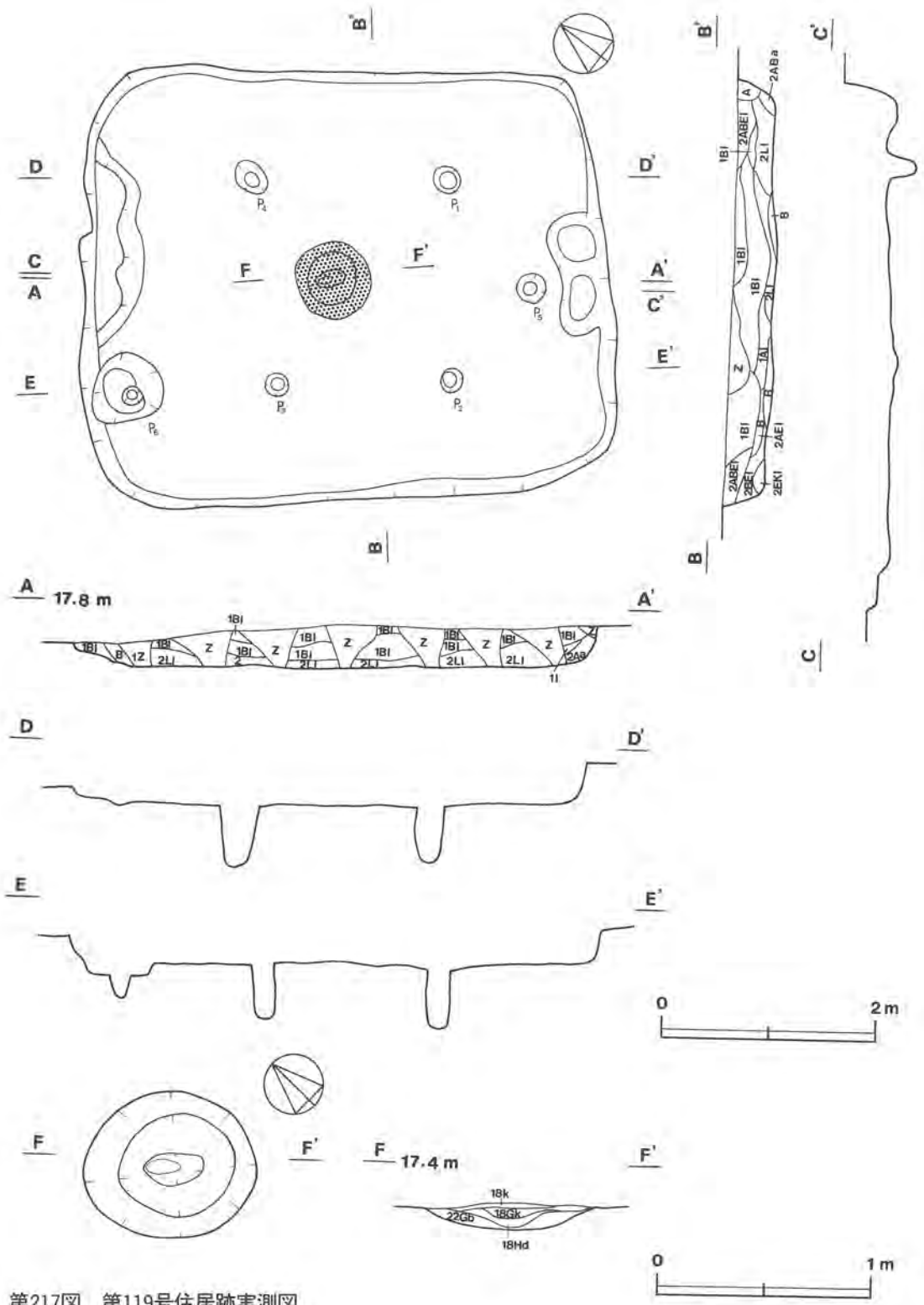
本跡は、F3j1区を中心に確認され、第118号住居跡の南西側に隣接し、第123号住居跡の北西側3.40mに位置している。

平面形は、長軸4.95m・短軸3.95mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-42°-Wを指している。壁高は40cmで、壁はトレンチャーによる攪乱を受けているが、締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。床面はトレンチャーによって攪乱されて帯状にくぼんでいる。残存する床面は、炉を中心にピットの内側は、特によく踏み固められており、凹凸がみられる。北西壁と南東壁下には、それぞれ上幅20cm・深さ10cm・長さ160cm・110cmのくぼみが検出されている。炉跡は床の中央に位置し、平面形は長径80cm・短径68cmの楕円形を呈し、床面を20cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉内に多量の焼土小ブロック・焼土粒子を含む暗赤褐色土が堆積している。炉床は熱を受けて赤化している。ピットはP₁～P₆の6か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄が配置から支柱穴と思われ、長径24～38cm・短径22～24cmの楕円形を呈し、深さは50～58cmである。P₅は径28cm・深さ28cmで、ピットの周囲は硬く踏み固められており、配置から出入口施設に関連するピットと思われる。P₆は土層断面から後世に掘られたものと思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱を受けている部分も多いが、上層にローム粒子を少量含む黒褐色土、下層にローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、北壁と南壁中央部の床面直上から極少量の弥生式土器の甕あるいは壺が攪乱のため破片で出土している。いずれもまとまった器形にはならなかった。その他、覆土上層から土師器片や弥生式土器片が少量出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から弥生時代後期以降に比定されるものと思われる。



第217图 第119号住居跡実測图

第120号住居跡（第218図）

本跡は、F3j5区を中心に確認され、第116号住居跡の南西側8m、第130号住居跡の北側に隣接して位置している。本跡の中央から北西側で第121号住居跡、中央から北側で第122号住居跡と重複している。土層断面から判断すると、本跡が第121・122号住居跡を切っているため、3遺構の中で最も新しい遺構である。

本跡の西側から北側にかけて重複しているため、規模・平面形等の詳細は不明である。調査した部分から南壁の長さは2.6mで、南西・南東コーナーは隅丸形を呈し、主軸方向はN-6°-Eを指している。壁は南壁から東壁にかけてしか検出できなかったが、壁高は18cmで、締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅20cm・深さ5cmの壁溝が南壁下から東壁下にかけて検出された。重複している部分の床面はローム粒子多量・木炭粒子少量含む黒褐色土で床を貼り、その他の床面はロームで、カマドの手前から東壁下にかけて凹凸がみられ、全面的によく踏み固められている。カマドは西壁南側寄りに付設されており、天井部・袖部の大半は崩れている。残存している袖部は河原石と山砂を混ぜた粘土で構築されており、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ135cm・幅90cm、壁外へ95cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子と少量の木炭粒子が含まれている。ピットは南東コーナー下に1か所検出され、径50cm・深さ35cmである。

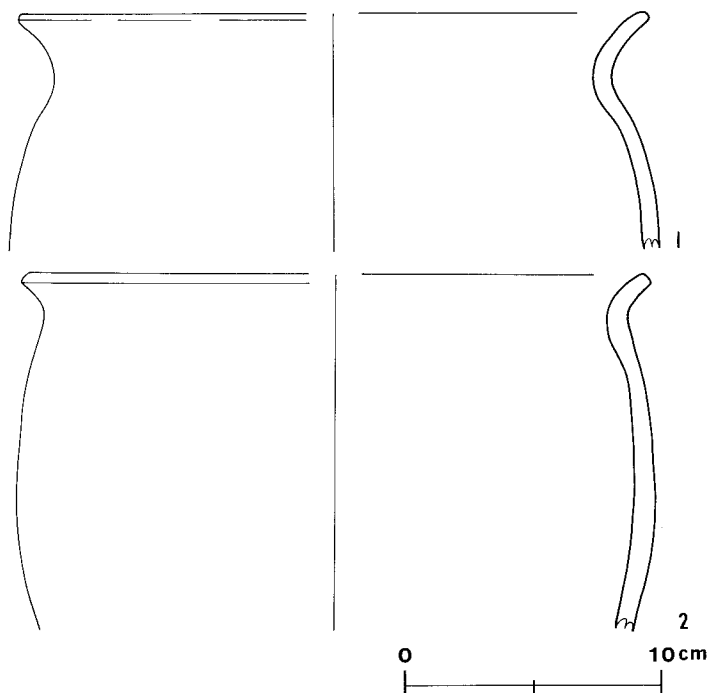
覆土は、黒褐色土を主体とし、上層に中量のローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子、下層に少量のローム粒子と多量の焼土粒子・ローム小ブロックを含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は、多量の土師器とともに、須恵器、貝殻、石が出土している。カマドの燃烧部から土師器の甕形土器の口縁部2点（第219図1・2）が出土している。その他、カマド周辺の床面直上から袖部の補強材として使用されたとと思われる河原石6点が出土し、南壁南西コーナー部寄りの床面直上から多量の貝殻がまとまって出土している。すべてシジミである。須恵器も破片で出土しているが、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第120号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第219図 1	甕形土器 土師器	A (24.6) B (9.4)	胴部の張りは弱く、口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい橙色・黒色 普通	P735 10%
2	甕形土器 土師器	A (24.5) B (14.1)	胴部は丸く張り、口縁部は短く外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 にぶい黄橙色・黒色 普通	P736 20%



第219図 第120号住居跡出土遺物実測図

第121号住居跡 (第220図)

本跡は、F3j₅区を中心に確認され、第118号住居跡の北東側6.6m、第130号住居跡の北側2.2mに位置している。本跡の中央から南東側で第120号住居跡、中央から北東側で第122号住居跡と重複している。本跡は土層断面から第120号によって切られているため、本跡の方が古い遺構であり、本跡が第122号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸4.00m・短軸3.75mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-10°-Wを指している。壁高は40cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、カマド付近を除いて、上幅20cm・深さ5cmの壁溝が周回している。カマドの手前から南壁下のピットにかけて、幅1.0m・長さ2.2mの範囲の床面は硬く踏み固められて4cmほどくぼんでいる。その他の床面も

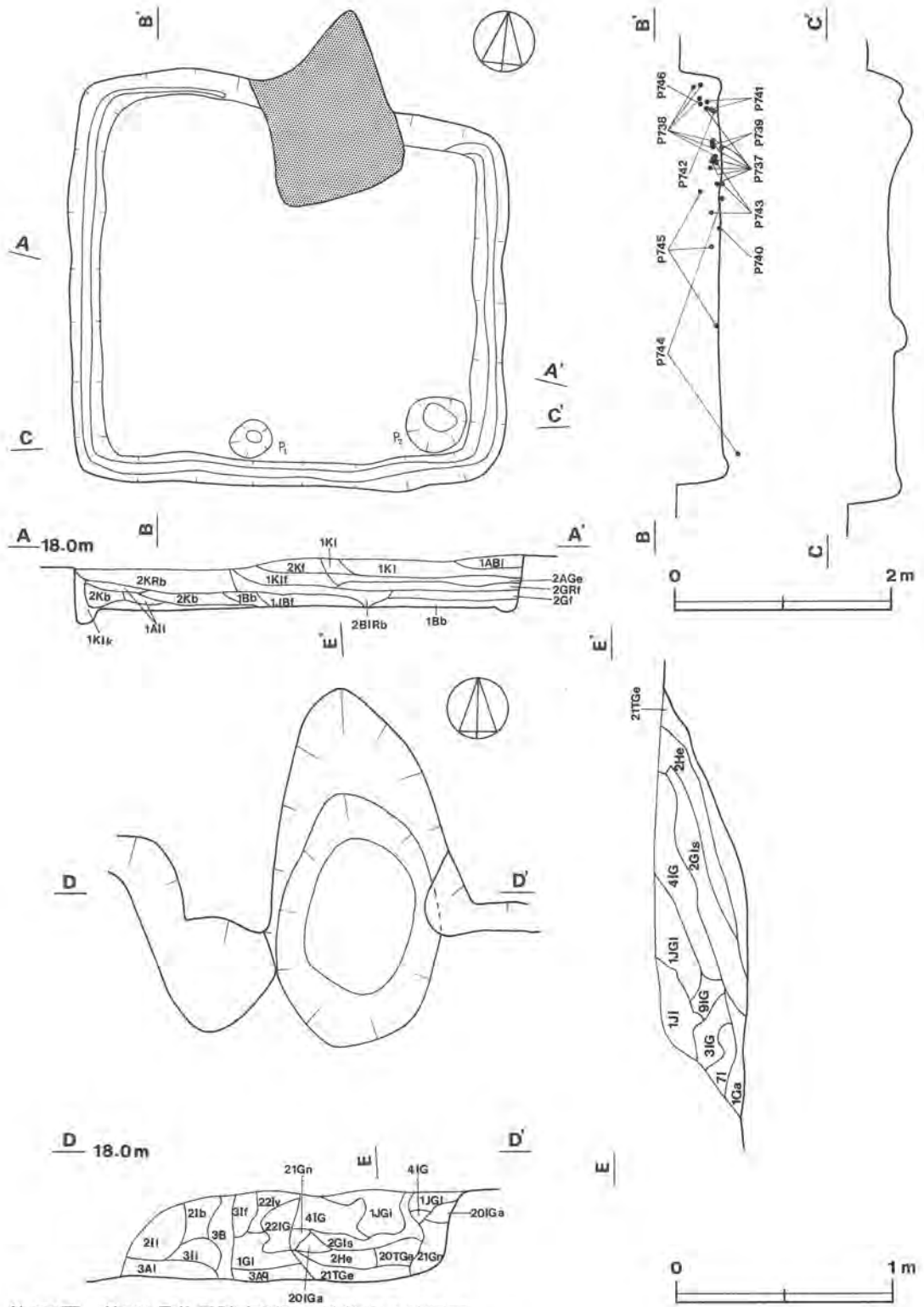
ロームがよく踏み固められて平坦である。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部・袖部の一部は崩れている。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分の長さは168cm、幅は160cm、壁外へ70cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には焼土小ブロックや焼土粒子が含まれている。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、P₁は長径40cm・短径34cmの楕円形を呈し、深さは15cmで、カマドの反対側に位置していることから出入口施設に関連するピットと思われる。P₂は南東コーナー下に位置し、長径58cm・短径50cmの楕円形を呈し、深さは24cmで、性格は不明である。

覆土は、上層にローム粒子多量、焼土粒子中量、木炭粒子少量を含む暗褐色土、下層に焼土粒子多量、ローム粒子・粘土粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、多量の土師器のほかに、須恵器、鉄製品が出土している。これらの土器は破片が多く、覆土下層に集中して出土している。カマドの手前から中央部にかけての床面直上から正位で坏形土器2点（第221図5・6）・横位で甕形土器2点（第221図4・7）が出土し、北東コーナー部寄りの床面直上からも甕形土器（第221図2）が出土している。また、カマドの燃烧部から甕形土器（第221図1）・斜位で坏形土器（第221図3）・正位で須恵器の坏（第221図10）が出土している。本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第121号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第221図1	甕形土器 土師器	A (20.4) B (22.6)	胴部は長胴を呈し、胴部上位に最大径を有する。口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 橙色 普通	P 739 30%
2	甕形土器 土師器	A (13.8) B (9.5)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がり、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P 740 25%
3	坏形土器 土師器	A 14.2 B 4.6 C 7.5	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・長石・雲母 浅黄橙色・黒褐色 普通	P 742 100%
4	甕形土器 土師器	A 19.8 B (17.2)	胴部はやや長胴を呈し、口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・長石・礫・石英 明赤褐色 普通	P 737 20%
5	坏形土器 土師器	A 14.0 B 3.9 C 5.8	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁端部はやや外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 745 内面黒色処理 40%



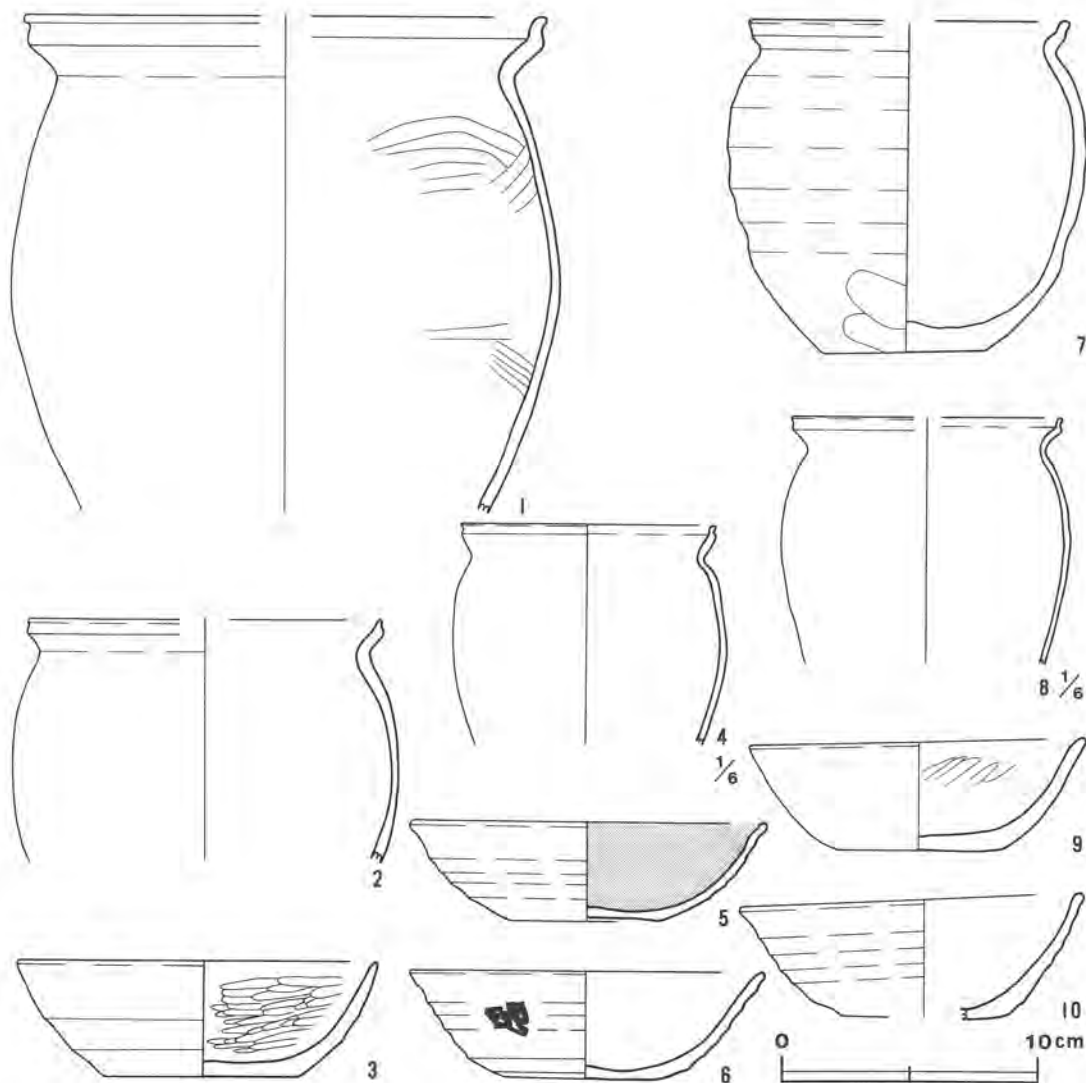
第220図 第121号住居跡実測図・遺物出土位置図

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
6	坏形土器 土師器	A 13.8 B 4.2 C 5.6	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P743 体部外面墨書 「口」 60%
7	甕形土器 土師器	A (12.6) B 13.1 C 6.3	底部は平底で、胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面横位のへら削り。	砂粒・礫・雲母 橙色・褐灰色 普通	P741 60%
8	甕形土器 土師器	A (21.1) B (19.6)	胴部はやや長胴を呈し、口縁部は外反して立ち上がり、口縁端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へらナデ、外面縦位のへら削り。	砂粒・礫・長石 橙色・浅黄橙色 普通	P738 10%
9	坏形土器 土師器	A 13.2 B 4.5 C 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P744 60%
10	坏 須恵器	A 13.4 B 4.9 C (6.4)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部不定方向の手持ちへら削り。 体部内面ナデ、外面横ナデ。	砂粒・細砂・礫 灰色 不良	P746 50%

第122号住居跡（第222図）

本跡は、F3is区を中心に確認され、第118号住居跡の北東側8.4m、第130号住居跡の北側3.0mに位置している。本跡の南西コーナー付近で第121号住居跡、南側で第120号住居跡と重複している。本跡は第120・121号住居跡によって切られていることから、本跡が最も古い遺構である。

平面形は、長軸5.3m・短軸5.1mの方形を呈し、主軸方向はN-3°-Eを指している。南西コーナー付近から南側の壁は重複しているため検出できなかったが、重複していない部分の壁高は40cmを測る。壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10~15cm・深さ5~10cmの壁溝が重複している部分及びカマドを除いて検出された。床面はほぼ平坦で、カマドの手前からピットの内側は、ロームが硬く踏み固められて幾分くぼんでいる。また、重複している南西コーナー付近は第121号住居跡に床面を5cmほど掘り込まれている。カマドは北壁中央部に付設されており、天井部・袖部の一部は崩れている。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ100cm・幅90cm、壁外へ35cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットはP₁~P₇の7か所検出され、P₁~P₄が配置から支柱穴と思われ、長径30cm・短径18~26cmの楕円形を呈し、深さは55~98cmである。P₅は長径25cm・短径18cmの楕円形を呈し、深さは24cmで、カマドの反対側に位置することから出入

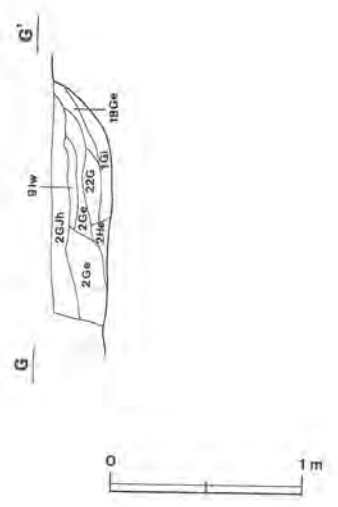
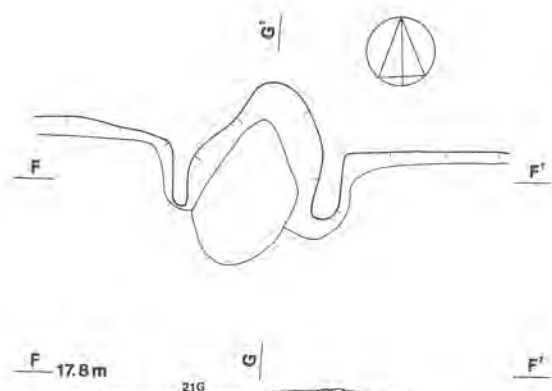
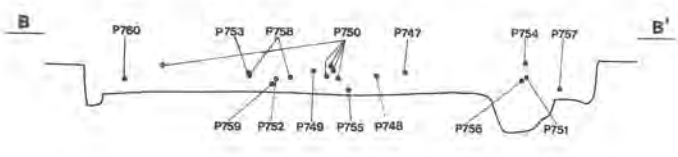
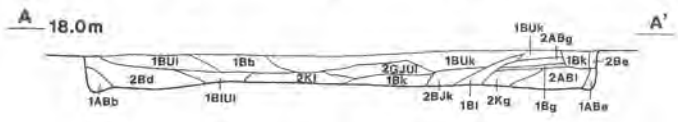
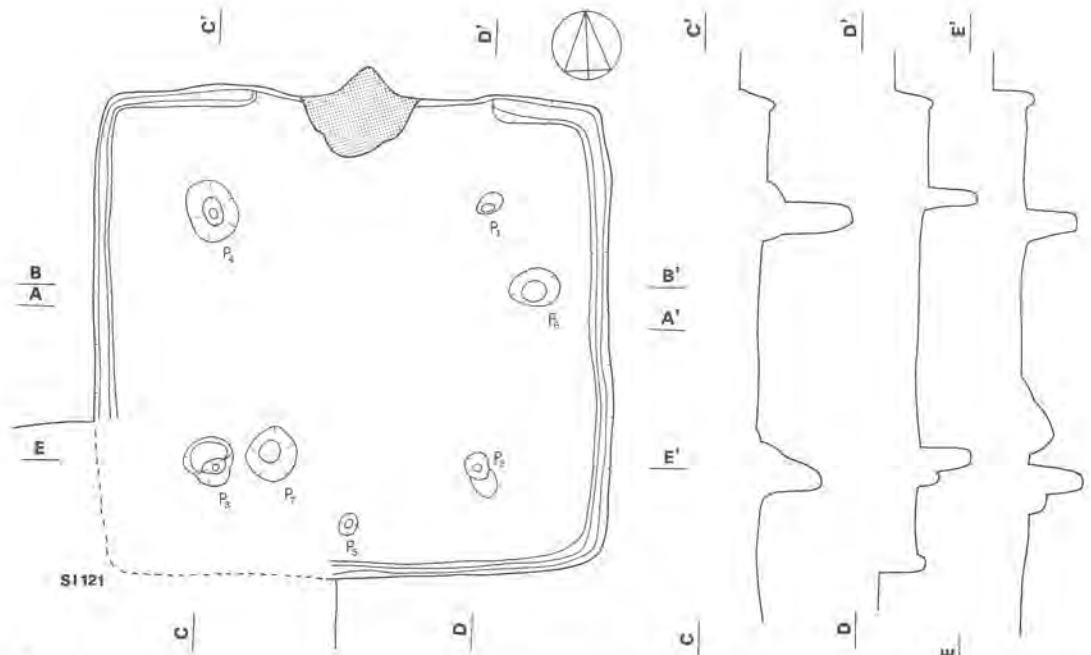


第221図 第121号住居跡出土遺物実測図

口施設に関連するピットと思われる。P₆・P₇は長径54・60cm・短径40・55cmの楕円形を呈し、深さは40・35cmで、配置から補助柱穴と思われる。

覆土は、上層にローム粒子・オレンジスコリアを含む黒褐色土、下層に多量のローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、多量の土師器のほかに、須恵器、鉄製品が出土している。いずれも破片が多く、大半が覆土下層からの出土である。土師器は、カマドの燃焼部から甕形土器（第223図1・3）が出土し、カマドの東側の床面直上から甕形土器の胴部片（第223図4）が出土している。また、須恵器



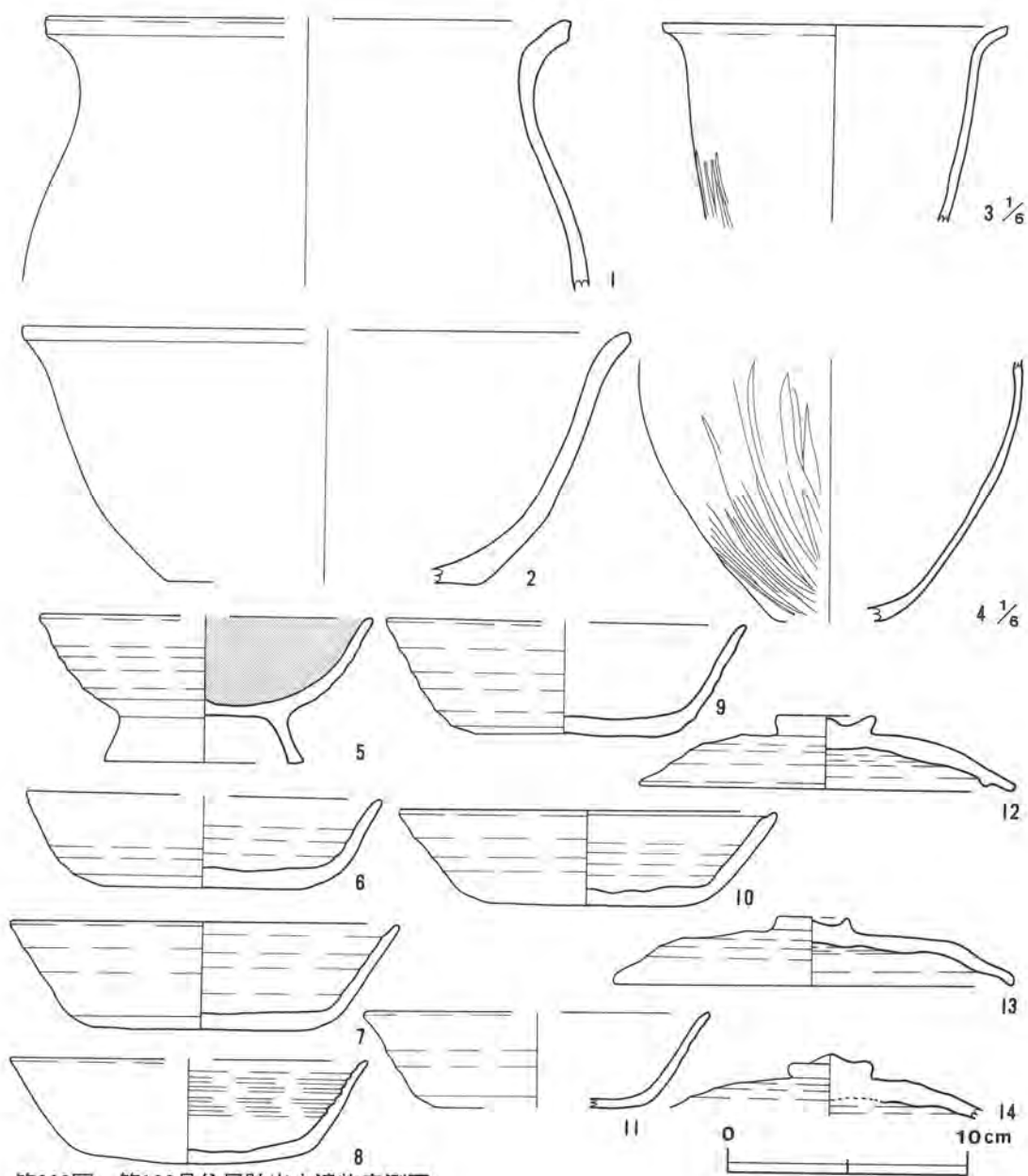
第222図 第122号住居跡実測図・遺物出土位置図

第122号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第223図 1	甕形土器	A (22.0) B (11.1)	丸く張った胴部から口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部外面ヘラナデ, 外面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 748 15%
	土 師 器					
2	鉢形土器	A (25.5) B 10.6 C (13.0)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面ナデ。 胴部内面ヘラナデ, 外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 751 10%
	土 師 器					
3	甕形土器	A 28.8 B (16.5)	胴部はほとんど張りがなく、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ, 外面上位ナデ, 中位ヘラ磨き。	砂粒・礫・雲母 にぶい褐色 普通	P 750 50%
	土 師 器					
4	甕形土器	B (21.6) C (9.0)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ナデ, 外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 747 40%
	土 師 器					
5	高台付坏形土器	A (14.0) B 6.2 D 8.4 E 1.8	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き, 外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 749 内面黒色処理 50%
	土 師 器					
6	坏	A (14.8) B 3.9 C 8.4	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部はほぼ直線的に外上方に立ち上がる。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・雲母 灰黄色 普通	P 757 30%
	須 恵 器					
7	坏	A 16.3 B 4.5 C 9.4	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	細砂・礫 灰白色 普通	P 752 80%
	須 恵 器					
8	坏	A (14.9) B 4.4 C 5.3	底部は扁平な丸底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部不定方向の手持ちヘラ削り後、切り離しは不明。	砂粒・礫 灰白色 普通	P 756 50%
	須 恵 器					
9	坏	A (15.0) B 5.0 C 7.5	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 灰黄色 普通	P 755 60%
	須 恵 器					
10	坏	A 15.9 B 4.0 C 8.2	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、雑な手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 灰白色 普通	P 754 95%
	須 恵 器					
11	坏	A (14.4) B 4.0 C (8.4)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	細砂 灰白色 普通	P 753 30%
	須 恵 器					
12	蓋	A 15.8 B 3.0 G 4.2 H 0.8	天井部中央に扁平なつまみを有し、天井部から口縁部にかけて下降し、口縁部は劣る。	天井部付近は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫・石英 灰黄色 普通	P 759 95%
	須 恵 器					
13	蓋	A 16.8 B 2.9 G 3.0 H 0.5	天井部中央に扁平なつまみを有し、天井部は全体的に低く扁平で、口縁部は下方向に屈曲する。	天井部付近は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰白色・灰色 普通	P 758 80%
	須 恵 器					
14	蓋	B (2.6) G 3.6 H 1.0	天井部中央に宝珠形を呈するつまみを有し、天井部は丸味をおびる。	天井部付近は回転ヘラ削り。	砂粒・細砂・雲母 灰黄色 普通	P 760 45%
	須 恵 器					

も南壁中央部の床面直上から正位で坏（第223図9）が出土し、カマドの西側の床面直上からも横位で蓋2点（第223図12・13）坏（第223図7）が出土している。その他、中央部を中心とする覆土下層から土師器の高台付坏形土器（第223図5）、東壁寄りの覆土下層から須恵器の坏（第223図8・10）、西壁北側寄りの覆土中層から伏せた状態で須恵器の蓋（第223図14）等が出土している。

本跡は、出土遺物から奈良時代の真間期に比定されるものと思われる。



第223図 第122号住居跡出土遺物実測図

第123号住居跡（第225図）

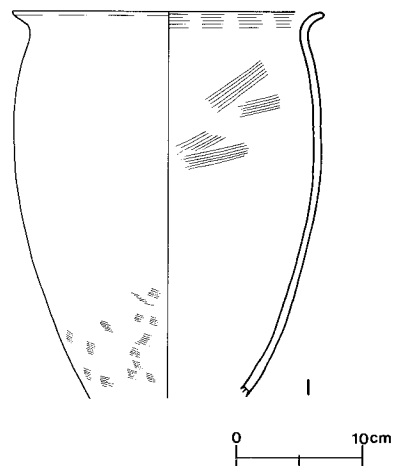
本跡は、G3a1区を中心に確認され、第125号住居跡の西側7.0m、第124号住居跡の北西側6.3mに位置している。本跡の中央から西側は第858号土坑と重複しており、本跡は第858号土坑に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸3.0m・短軸2.9mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-61°-Eを指している。壁高は16~20cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、硬く踏み固められている。カマドは北東壁南側寄りに付設され、天井部・袖部は崩壊しているが、袖部の補強材として使用された石が南側袖部付近から検出され、また、北側袖部付近から、やはり、補強材として使用した石の痕跡を確認した。調査した部分は、長さ80cm・幅75cm、壁外へ55cmほど掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の木炭粒子・焼土粒子が含まれている。ピットはP₁~P₆の6か所検出され、P₁・P₂・P₃が配置から支柱穴と思われる。P₁・P₂・P₃は長径35~45cm・短径30~40cmの楕円形を呈し、深さは14~23cmである。P₄・P₅・P₆は長径25cm・短径15~22cmの楕円形を呈し、深さは16~23cmで、性格は不明である。

覆土は、上層にローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土、下層にローム粒子、多量の炭化粒子を含む黒褐色土、壁際にローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は少なく、土師器と須恵器が出土しているにすぎない。南東コーナー部の覆土下層から土師器の甕形土器（第224図1）が出土している。須恵器は破片で、器形は窺えなかった。

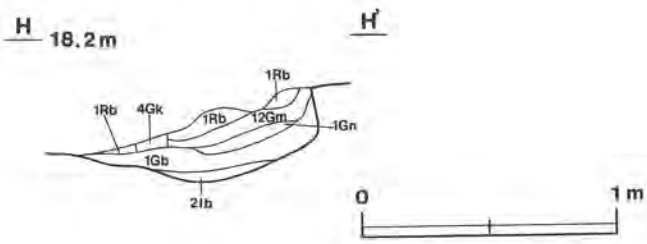
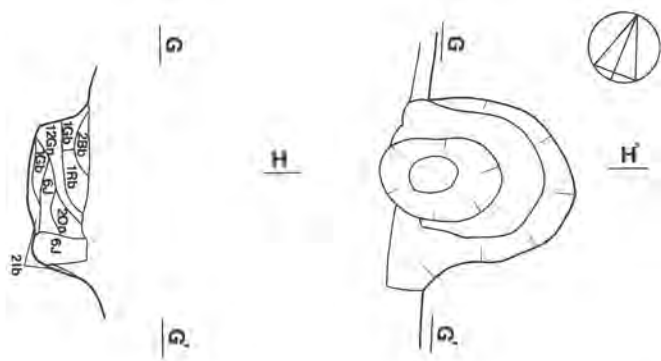
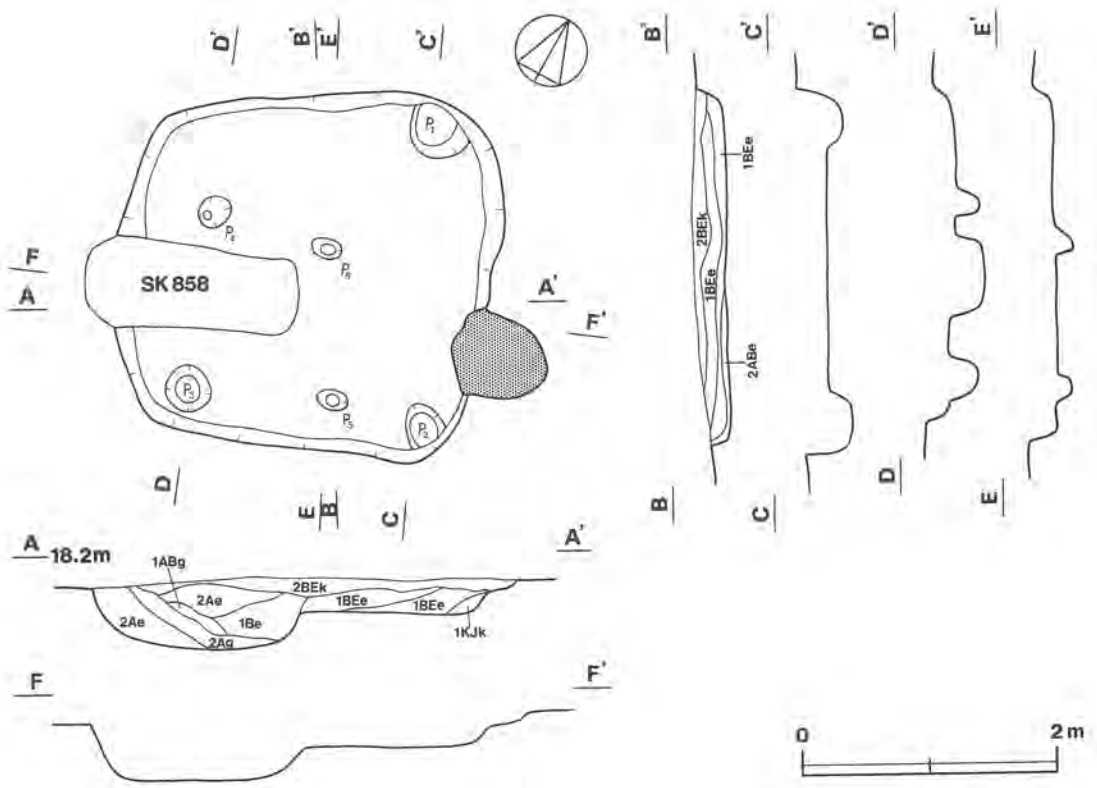
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第224図 第123号住居跡
出土遺物実測図

第123号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第224図 1	甕形土器 土師器	A 24.6 B (30.7)	胴部は長胴を呈し、中位がやや張る。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面横ナデ、外面上・中位縦位のヘラ削り後、ナデ、 下位横位のヘラ削り。	砂粒・長石・礫・ 雲母 黄橙色 普通	P761 80%



第225图 第123号住居跡実測図

第124号住居跡（第226図）

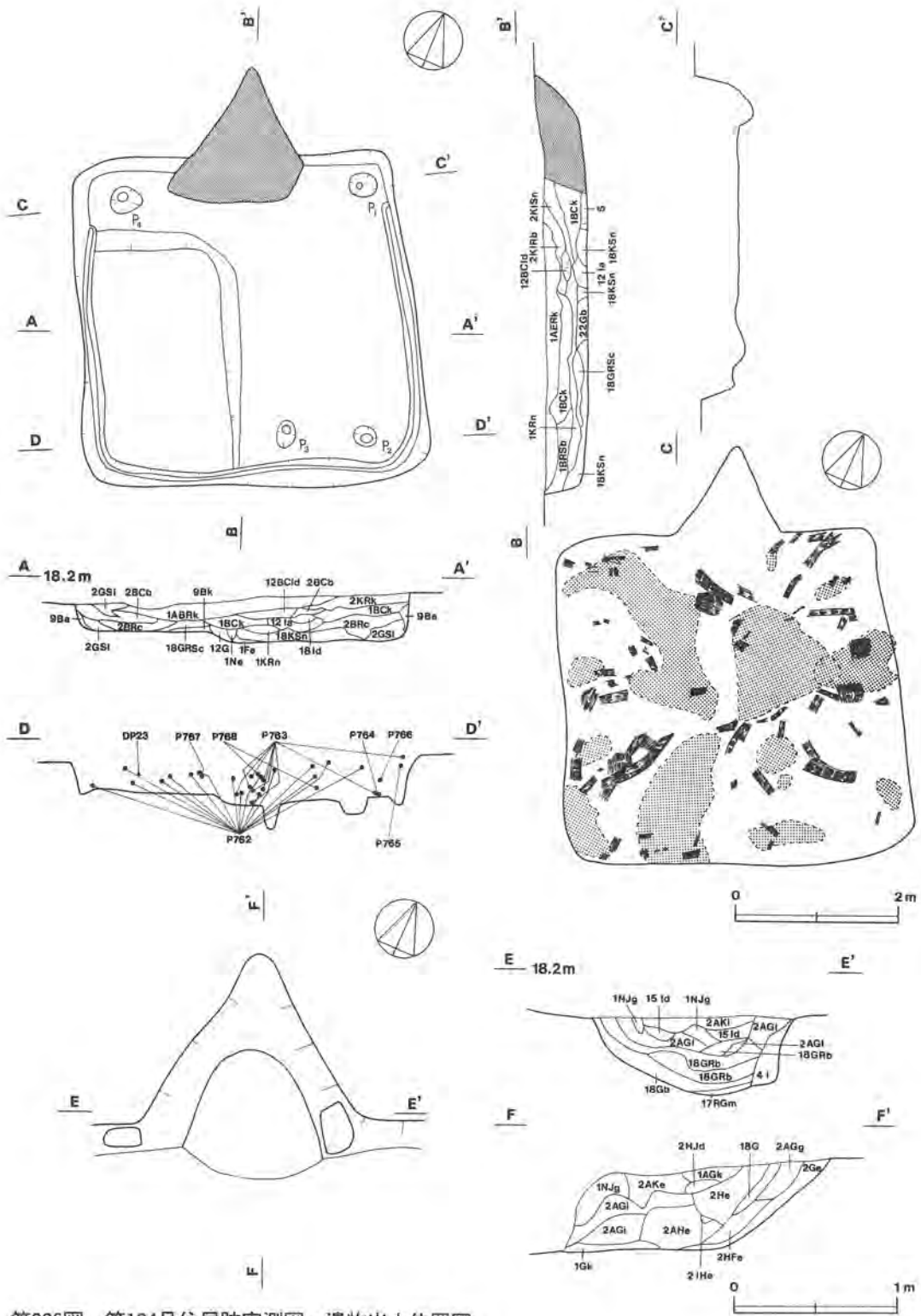
本跡は、G3c3区を中心に確認され、第125号住居跡の南側3.0m、第123号住居跡の南東側6.2mに位置している。

平面形は、長軸4.1m・短軸3.95mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-28°-Wを指している。壁高は50～55cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅12cm・深さ10cmの壁溝が北西コーナー下から北東コーナー下を除いて検出されている。床面はほぼ平坦で、カマドの手前からピットの内側は硬く踏み固められている。また、中央から西壁下にかけての幅1.5m・長さ2.7mの範囲は床面より10cmほど高くなっている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部の大半は崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ150cm・幅150cm、壁外へ105cm掘り込んでいる。燃焼部は床面を7cmほど掘り込み、熱を受けて暗赤褐色を呈している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子・少量の木炭粒子が含まれている。ピットはP₁～P₄の4か所検出した。P₁・P₂・P₄が配置から支柱穴と思われる、P₁・P₂・P₄は長径30～38cm・短径25～30cmの楕円形を呈し、深さは15～20cmの規模である。P₃はカマドの反対側に位置することから出入口施設に関するピットと思われる。

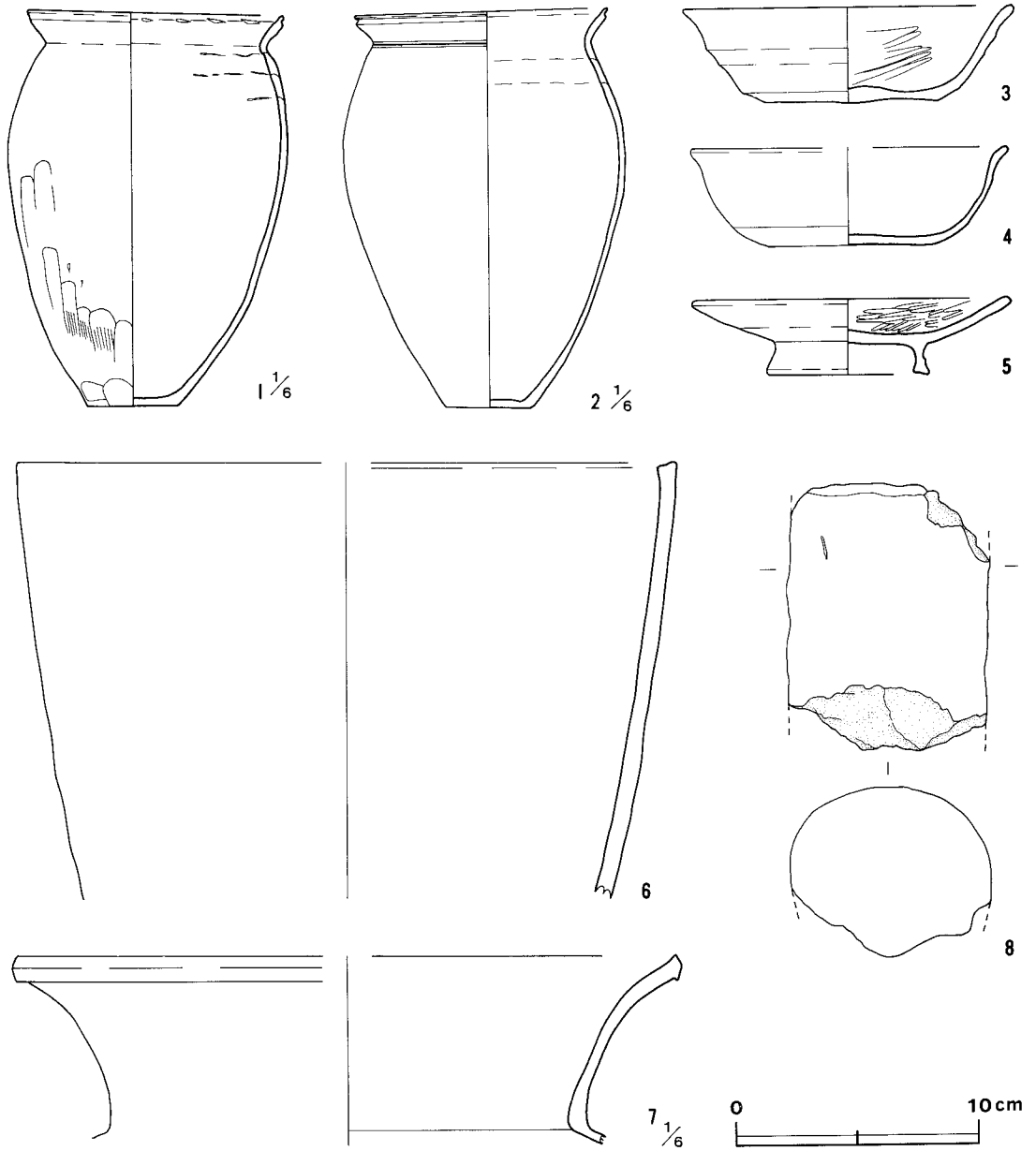
覆土は、黒褐色土を主体とし、上層に多量のローム粒子と少量のハードローム小ブロック・焼土粒子・木炭粒子・粘土粒子を含む灰黄褐色土、中層に多量の焼土粒子・木炭と少量のローム粒子・木炭粒子を含む暗褐色土、下層に多量のローム粒子・焼土粒子、少量の木炭・木炭粒子を含む暗・明赤褐色土が堆積している。特に中層から下層にかけて、多量の炭化材や焼土粒子が検出されていることから焼失家屋と考えられる。

遺物は、本跡全域にわたって多量の土師器のほか、須恵器、土製品が出土している。土器の大半は破片で、覆土下層から出土しているものが多い。土師器は、東壁中央部の覆土下層から坏形土器2点（第227図3・4）・高台付皿形土器（第227図5）が出土し、北東コーナー部の覆土下層から甕形土器（第227図1）が出土している。また、土師器の甕形土器片（第227図6）もカマドの燃焼部からつぶれた土師器の甕形土器（第227図2）とともに出土している。その他、中央部の覆土下層から支脚（第227図8）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第226図 第124号住居跡実測図・遺物出土位置図



第227図 第124号住居跡出土遺物実測図

第124号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第227図 1	甕形土器 土師器	A 21.4 B 33.2 C 7.5	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、 中位がやや張る。口縁部は外反し ながら開き、口縁端部を上方につ まみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦位のヘ ラ削り。	砂粒・礫・長石・ 小石 にふい赤褐色 普通	P762 70%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	甕形土器 土師器	A 20.4 B 33.5 C 7.2	底部は平底で、胴部は長胴を呈し、中位がやや張る。口縁部は外反しながら開き、口縁端部を上方につまみ出している。頸部に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ナデ。	砂粒・長石・礫 赤褐色 普通	P 763 60%
3	坏形土器 土師器	A 13.8 B 4.0 C 7.2	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にぶい橙色・黒褐色 良好	P 764 100%
4	坏形土器 土師器	A (13.0) B 4.1 C (7.5)	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 765 50%
5	高台付皿形土器 土師器	A 13.2 B 3.2 D 6.5 E 1.3	体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がり、口縁部に至る。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P 766 100%
6	甕形土器 土師器	A (27.6) B (18.3)	胴部はほとんど張りがなく、そのまま口縁部に至る。	胴部内・外面横ナデ。	砂粒 淡黄色 不良	P 768 30%
7	甕 須恵器	A (54.6) B (16.0)	口縁部は、外反しながら大きく開き、端部は面をなして下方へ屈曲する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・礫・細砂 灰色 普通	P 767 10%

第124号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第227図 8	支脚	DP23	(11.2)	8.4	—	(556.8)	にぶい橙色

第125号住居跡 (第228図)

本跡は、G3b₄区を中心に確認され、第124号住居跡の北側4 m、第126号住居跡の西側に接して位置している。

平面形は、長軸3.5m・短軸3.2mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-18°-Wを指している。壁高は60cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がり、壁下には、上幅20cm・深さ5~10cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で、各コーナー下を除いて硬く踏み固められている。カマドは北(第1号)・西壁(第2号)のそれぞれ中央部に付設されている。第1号カマドは天井部・袖部の大半が崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ130cm・幅125cm、壁外へ75cm掘り込んでいる。カマド内の覆土には多量の焼土粒子と少量の木炭粒子が含まれている。火床は熱を受け

て赤化している。第2号カマドも、天井部・袖部の大半は崩壊している。残存している袖部は山砂混じりの粘土で構築され、内側は熱を受けており、焼土化している。調査した部分は、長さ140cm・幅140cm、壁外へ85cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を10cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子・炭化粒子・灰が含まれている。なお、第1号カマドと第2号カマドの新旧関係は不明であるが、土層断面から、第1号カマドの方が比較的多く使用されたと思われる。

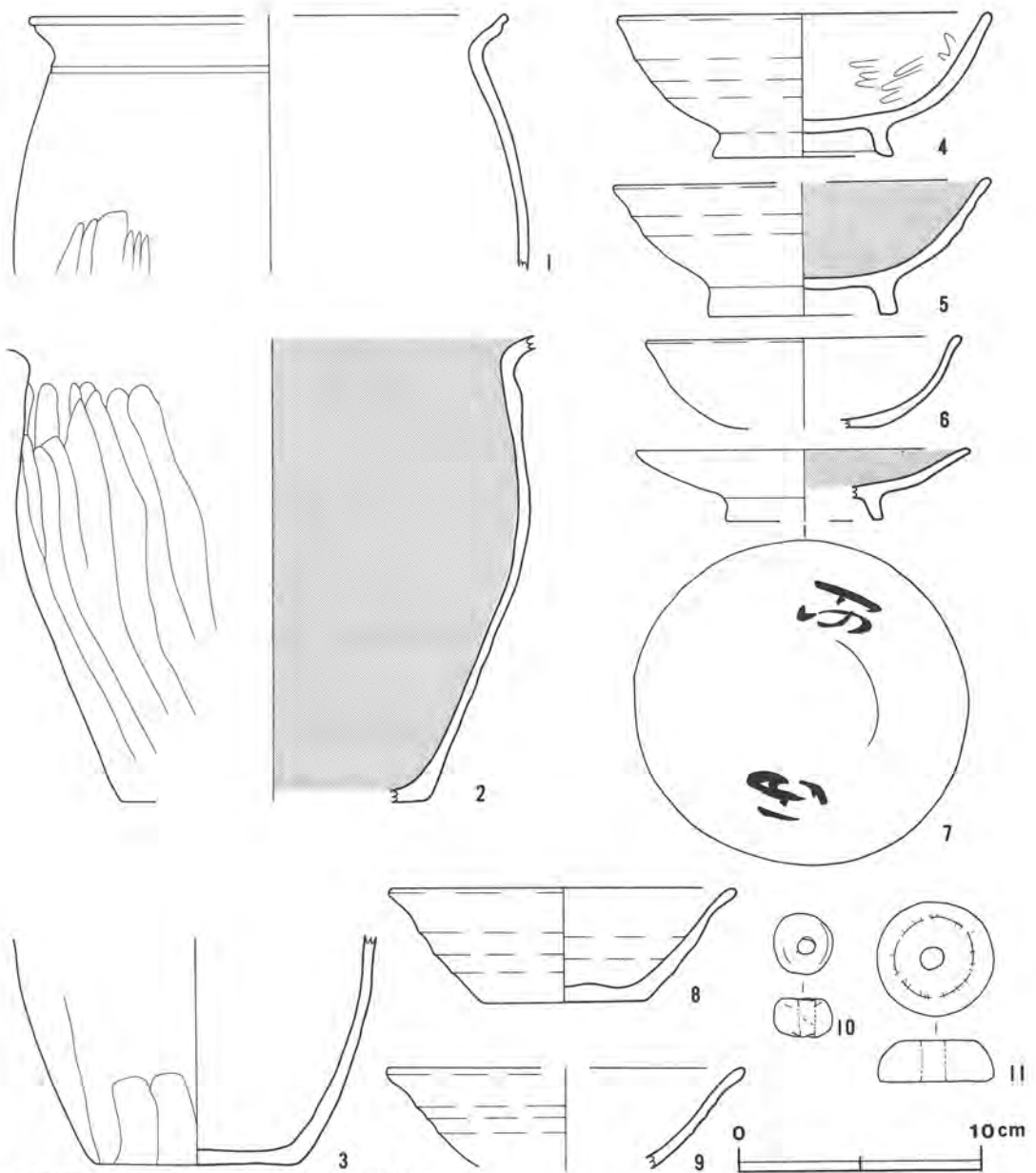
覆土は、上層にローム粒子多量、下層に粘土小ブロック中量、ローム粒子・木炭粒子少量を含む黒褐色土、壁際にローム粒子多量、焼土粒子・木炭粒子少量、粘土粒子極少量を含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器のほか、須恵器、鉄製品、土製品が出土している。土器の大半は破片で、覆土中層から下層にかけて出土しているものがほとんどである。土師器は、第1号カマドの燃烧部から甕形土器3点（第229図1～3）、第2号カマドの燃烧部からは伏せた状態で高台付壙形土器（第229図4）が出土している。さらに、その上に伏せた状態で坏形土器（第229図6）と須恵器の坏（第229図9）が重なって出土している。その他、中央部と南東コーナー部の覆土下層から土師器の高台付坏形土器（第229図5）と高台付皿形土器（第229図7）が出土し、また、石製の紡錘車（第229図11）と球状土錘（第229図10）も出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第125号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第229図 1	甕形土器 土師器	A (19.8) B (10.6)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 770 20%
2	甕形土器 土師器	A (21.8) B (19.2) C (13.0)	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、頸部でくびれる。	胴部内面横位のヘラ磨き、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P 769 内面黒色処理 25%
3	甕形土器 土師器	B (9.5) C 8.4	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫 明赤褐色 普通	P 771 40%
4	高台付壙形土器 土師器	A 15.5 B 5.8 D 7.5 E 1.1	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 明褐色 普通	P 772 80%
5	高台付坏形土器 土師器	A (15.5) B 5.5 D 7.8 E 1.2	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P 773 内面黒色処理 30%



第229図 第125号住居跡出土遺物実測図

第125号住居跡出土土製品・石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第229図 10	球状土錘	DP81	1.6	2.6	—	10.3	孔径0.7cm, におい黄橙色, 100%
11	紡錘車	Q 43	—	4.8	1.7	43.5	孔径1.0cm, 砂岩, 灰黄褐色, 100%

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
6	坏形土器 土師器	A 13.1 B 3.8 C (6.0)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P774 50%
7	高台付皿形土器 土師器	A 13.8 B 2.9 D (6.5) E 1.1	体部は内彎気味に大きく開き、口縁部に至る。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色・黒色 普通	P777 体部外面墨書 「西」 内面黒色処理 70%
8	坏 須恵器	A 14.5 B 4.7 C 6.9	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。	水挽き成形。 底部回転へら切り後、手持ちへら削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 灰黄褐色 普通	P775 70%
9	坏 須恵器	A (14.7) B (4.4)	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は外反する。	水挽き成形。 体部内・外面横ナデ。	細砂 灰黄褐色 普通	P776 40%

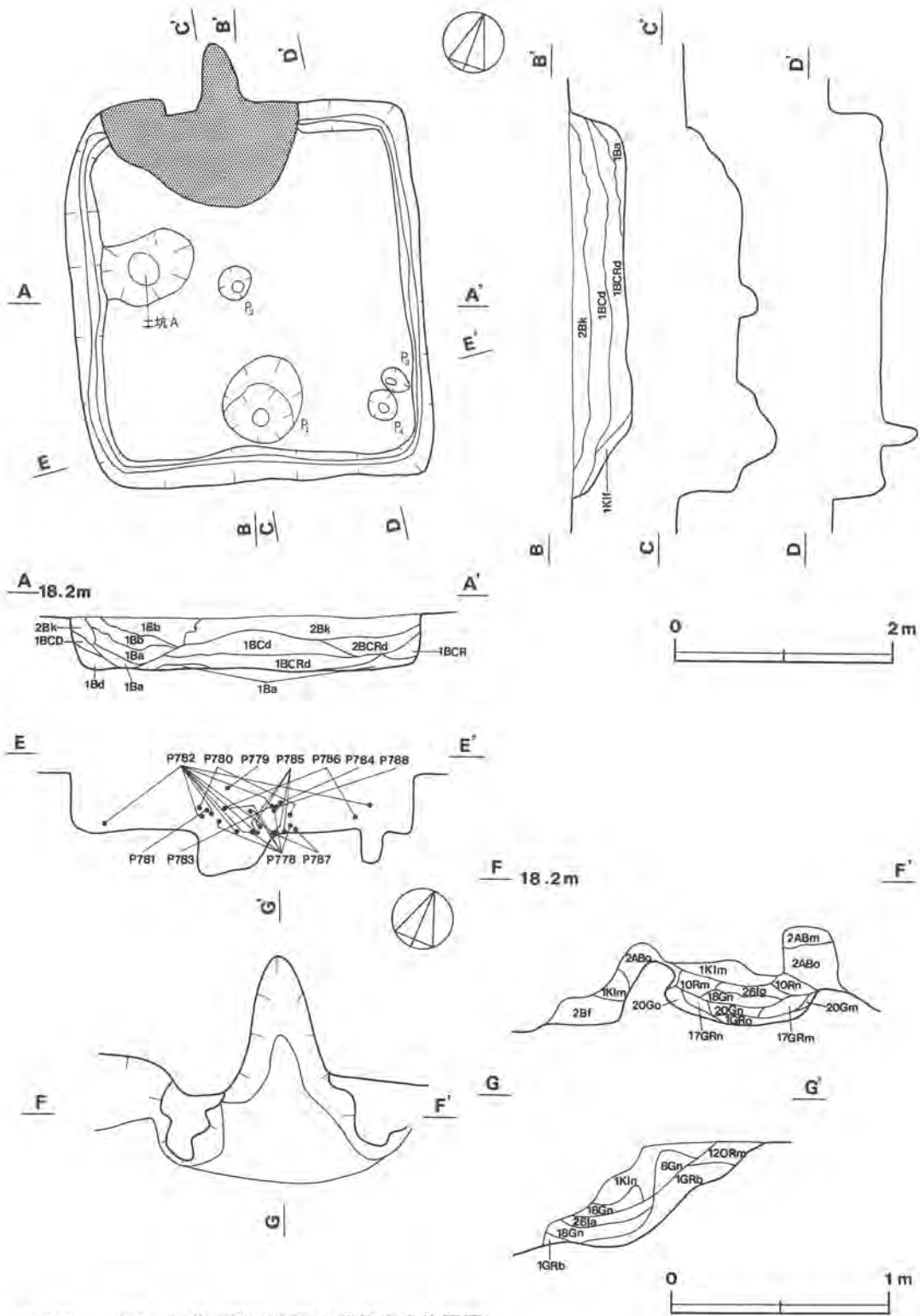
第126号住居跡（第230図）

本跡は、G3b₅区を中心に確認され、第125号住居跡の東側に接し、第133号住居跡の西側1.7mに位置している。

平面形は、長軸3.5m・短軸3.3mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-22°-Wを指している。壁高は50cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10～15cm・深さ3cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部の大半は崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜて構築され、内側は熱を受けて暗赤褐色を呈している。調査した部分は、長さ170cm・幅120cm、壁外へ50cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には中量の焼土粒子・少量の木炭粒子が含まれている。ピットはP₁～P₄の4か所検出した。P₁は長径70cm・短径55cmの楕円形を呈し、深さは35cmで、カマドの反対側に位置していることから出入口施設に関するピットと思われる。P₂・P₄は径30cm・深さ20・30cmで、配置から主柱穴と思われる。P₃は長径30cm・短径20cmの楕円形を呈し、深さは30cmで、配置から補助柱穴と思われる。また、P₂の西側で、西壁下に長径90cm・短径60cmの不整楕円形を呈する土坑Aが位置している。深さは13cmで、皿状を呈する。覆土は多量のローム粒子を含む黒褐色土が堆積している。性格は不明であるが、土層断面から後世に掘られたものと思われる。

覆土は、上層にローム粒子多量、ハードローム小ブロック少量を含む暗褐色土、下層にローム粒子中量、ハードローム小ブロック・木炭粒子少量を含む黒褐色土、壁際にローム粒子中量を含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器とともに、須恵器がカマドの手前から中央部にかけて出土している。南壁中央



第230图 第126号住居跡実測図・遺物出土位置図

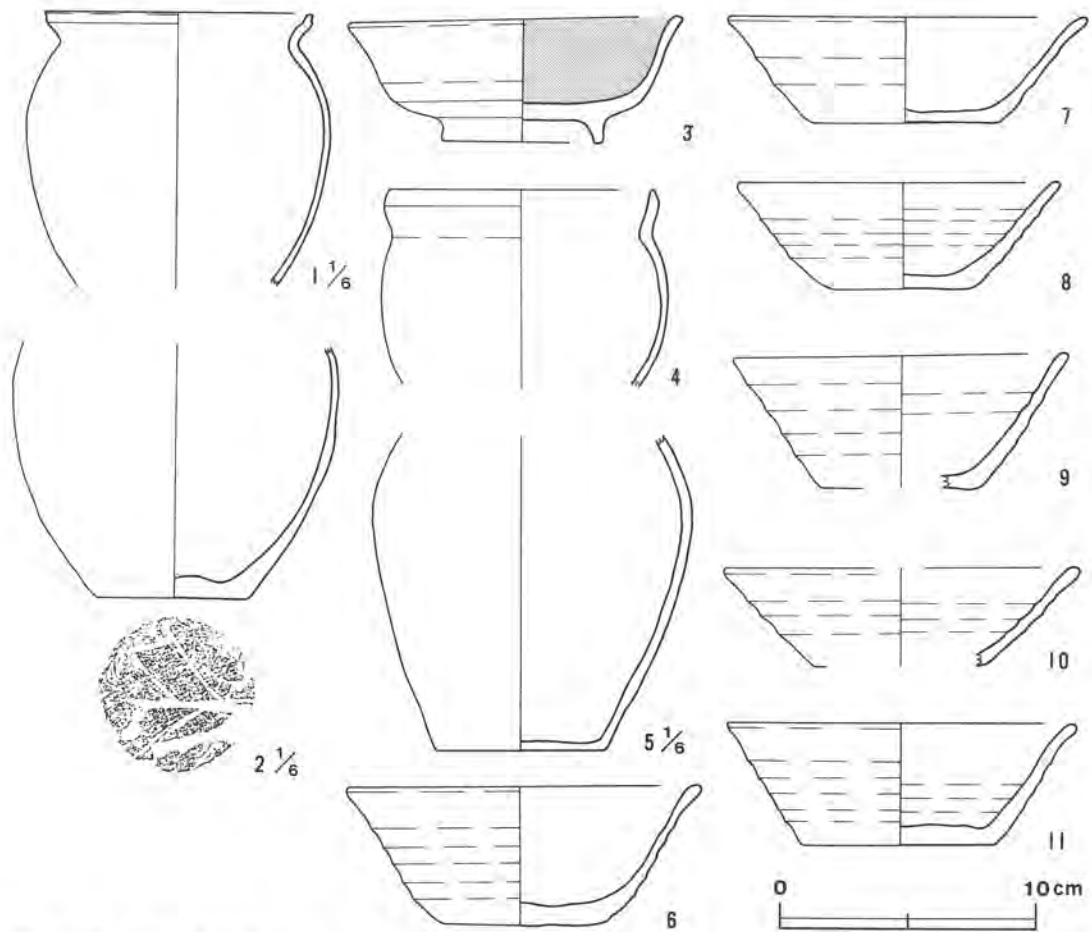
部の壁際から正位で土師器の高台付坏形土器(第231図3)が出土し、中央部の床面直上から伏せた状態で須恵器の坏2点(第231図8・10)が出土している。また、カマドの燃烧部及びカマドの手前から土師器の甕形土器2点(第231図2・4)と、伏せた状態の須恵器の坏2点(第231図6・7)が重なって出土し、その他、同所から伏せた状態で須恵器の坏2点(第231図9・11)が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第126号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第231図 1	甕形土器 土師器	A 20.8 B (22.0)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を外上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ナデ。	砂粒・礫・雲母 にぶい褐色 普通	P 778 20%
2	甕形土器 土師器	B (20.0) C 6.0	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部内面へラナデ、外面横位のへラ削り。	砂粒・礫・雲母 赤色 普通	P 780 30%
3	高台付坏形土器 土師器	A 13.1 B 5.1 D 6.4 E 1.0	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 橙色 普通	P 781 内面黒色処理 80%
4	甕形土器 土師器	A 10.4 B (7.9)	胴部は丸く張り、口縁部は外反しながら立ち上がり、口縁端部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面へラナデ、外面横位のへラ削り。	砂粒・礫・雲母 赤色 普通	P 779 50%
5	壺 須恵器	B (24.7) C 13.4	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、上位で内傾する。	胴部内面ナデ、外面横位の平行叩き目で、下端にかけて横位の手持ちへラ削り。	砂粒・礫・雲母・ 長石 灰黄褐色 普通	P 782 60%
6	坏 須恵器	A 13.9 B 5.5 C 7.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転へラ切り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 緑灰色 普通	P 783 65%
7	坏 須恵器	A 14.1 B 4.3 C 7.4	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転へラ切り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫・スコリア・雲母 にぶい褐色 不良	P 784 95%
8	坏 須恵器	A 12.8 B 4.3 C 5.2	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転へラ切り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 雲母 黄灰色 普通	P 785 95%
9	坏 須恵器	A 13.6 B 5.3 C (6.4)	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部回転へラ切り。 体部内・外面横ナデ。	細砂・礫 にぶい赤褐色 底部内・外面褐灰色 普通	P 786 40%

図版 番号	器 種	法量(cm)	器形の特 徴	手法の特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
10	坏 須 恵 器	A (13.9) B 3.9 C (6.5)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り。体部内・外面横ナデ。	細砂 灰黄色 普通	P787 75%
11	坏 須 恵 器	A 13.7 B 4.8 C 7.7	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転へら切り後、不定方向の手持ちへら削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫・小石 灰色 良好	P788 95%



第231図 第126号住居跡出土遺物実測図

第127号住居跡（第233図）

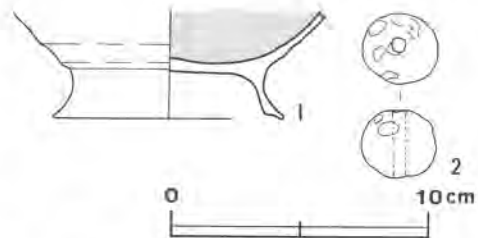
本跡は、G3e6区を中心に確認され、第134号住居跡の南側6.4 m、第138号住居跡の北東側8.2mに位置している。

平面形は、長軸2.8m・短軸2.6mの方形を呈し、主軸方向はN-22°-Wを指している。壁高は

55cmで、壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅15cm・深さ8cmの壁溝が北壁を除いて周回している。床面は平坦で、全面的に硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、トレンチャーによって攪乱されているため天井部・袖部の大半が崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ110cm・幅90cm、壁外へ75cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子と少量の木炭粒子が含まれている。ピットはP₁～P₆の6か所検出され、P₁は径30cm・深さ15cmで、配置から主柱穴と思われる。P₃は径20cm・深さ18cmで、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。P₂は長径27cm・短径20cmの楕円形を呈し、深さ12cmで配置から補助柱穴と思われる。P₄・P₅・P₆は南東・南西・北西コーナー部の壁外に位置し、長径30～40cm・短径20cmの楕円形を呈し、深さは48・50・46cmで、本跡に伴う主柱穴と思われる。なお、北東コーナー部の壁外にも柱穴はあったと思われるが、トレンチャーの攪乱のため検出できなかった。P₇は土層断面から後世の攪乱坑と思われる。

覆土は、トレンチャーによる攪乱を受けている上層部を除いて自然堆積を呈している。上層にローム粒子多量、木炭粒子・焼土粒子極少量を含む暗褐色土、下層にローム粒子多量、木炭粒子・焼土粒子少量を含む黒褐色土が堆積している。

遺物は、多くの土師器のほかに、須恵器、土製品が出土している。土器の大半は破片で、覆土中層から下層にかけて出土しているものが多い。南西コーナー部寄りの床面直上から土師器の高台付坏形土器(第232図1)が出土し、中央部の覆土下層から球状土錘(第232図2)も出土している。その他、須恵器も出土しているが、破片でまとまったものにはならなかった。



第232図 第127号住居跡
出土遺物実測図

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第127号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第232図 1	高台付坏形 土器 土師器	B (4.1) D 9.0 E 2.0	体部は外反気味に外上方へ立ち上がり、高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部回転へう削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へう磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	P789 内面黒色処理 20%

第127号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第232図 2	球状土錘	DP82	2.7	3.0	—	19.5	孔径0.5cm, にぶい橙色, 100%

第128号住居跡 (第234図)

本跡は、F3c₉区を中心に確認され、第129号住居跡の北側 3 m、第108号住居跡の南東側 7 m に位置している。

平面形は、長軸3.46m・短軸3.05mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-8°-Wを指している。壁高は10cmで、壁はトレンチャーによって攪乱を受けているが、残存している壁は締まりのあるルームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面もトレンチャーによって帯状に攪乱されて凹んでいるが、残存している床面は、ルームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されていたが、トレンチャーの攪乱によって天井部・袖部は崩壊している。調査した部分は、長さ85cm・幅85cm、壁外へ45cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土にはやや砂質で多量の焼土粒子・粘土粒子を含む黒褐色土が堆積していることから、天井部・袖部は山砂混じりの粘土で構築されていたと思われる。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、長径46・40cm・短径35cmの楕円形を呈し、深さは25・30cmで、配置から支柱穴と思われる。

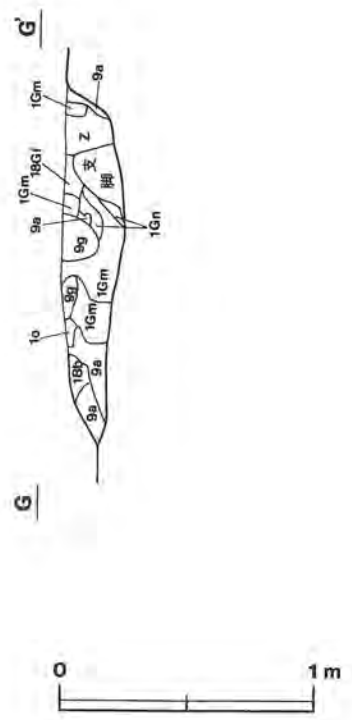
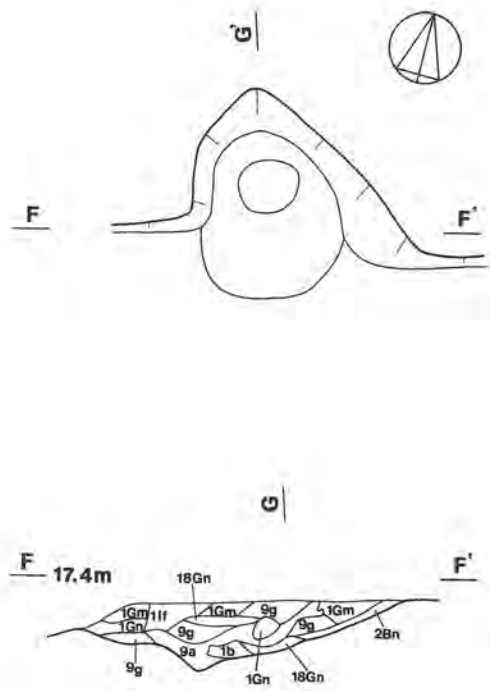
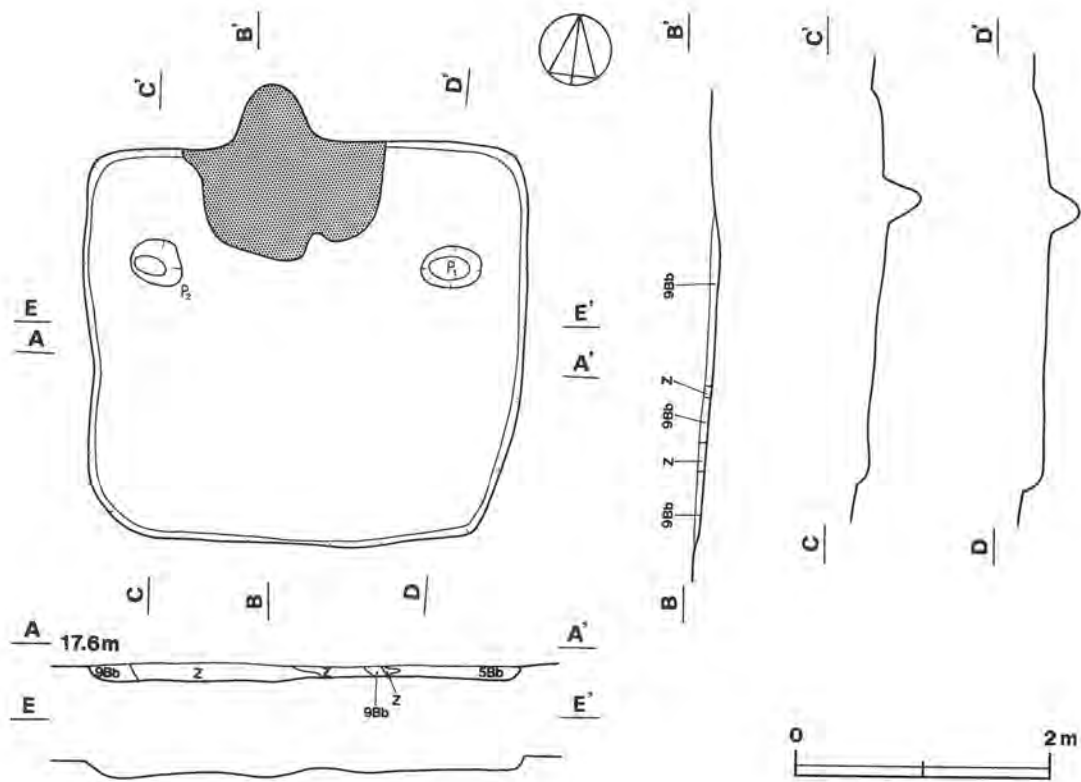
覆土は、トレンチャーの攪乱がひどく、堆積状況は不明である。

遺物は、土師器とともに、僅かに須恵器が出土している。いずれも覆土下層からの出土である。カマドの燃烧部や両袖部付近から坏形土器4点(第235図3・5~7)・甕形土器(第235図1)・甕形土器の口縁部(第235図2)が出土し、カマドの手前の床面直上から高台付碗形土器(第235図4)が出土している。また、カマドの覆土中に周囲から流入したと思われる砥石(第235図8)も出土している。須恵器も出土しているが破片で、まとまった器形にならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第128号住居跡出土土器観察表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第235図 1	甕形土器	A (23.6)	口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦位のへら削り。	砂粒にぶい赤褐色普通	P790 10%
	土師器	B (7.8)				
2	甕形土器	A (24.3)	胴部は上位でやや張り、口縁部は短く外反して開き、端部を上方につまみ出している。胴部上位にこぶ状の把手が一对付く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ナデ、外面縦位のへら削り。	砂粒・礫・雲母明赤褐色普通	P796 30%
	土師器	B (16.0)				



第234图 第128号住居迹实测图

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	坏形土器 土師器	A (16.5) B 7.0 C 8.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P795 内面黒色処理 50%
4	高台付碗形土器 土師器	A (17.0) B 6.9 D 7.7 E 1.2	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部内は丸くおさめている。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。 底部は回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P791 内面黒色処理 30%
5	坏形土器 土師器	A 13.0 B 3.9 C 6.4	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P794 内面黒色処理 30%
6	坏形土器 土師器	A (13.0) B 4.4 C (6.8)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。端部は丸くおさめている。	水挽き成形。 底部静止ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 外面橙色、内面 にぶい橙色 普通	P793 40%
7	坏形土器 土師器	A (13.0) B 3.6 C (6.8)	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P792 30%

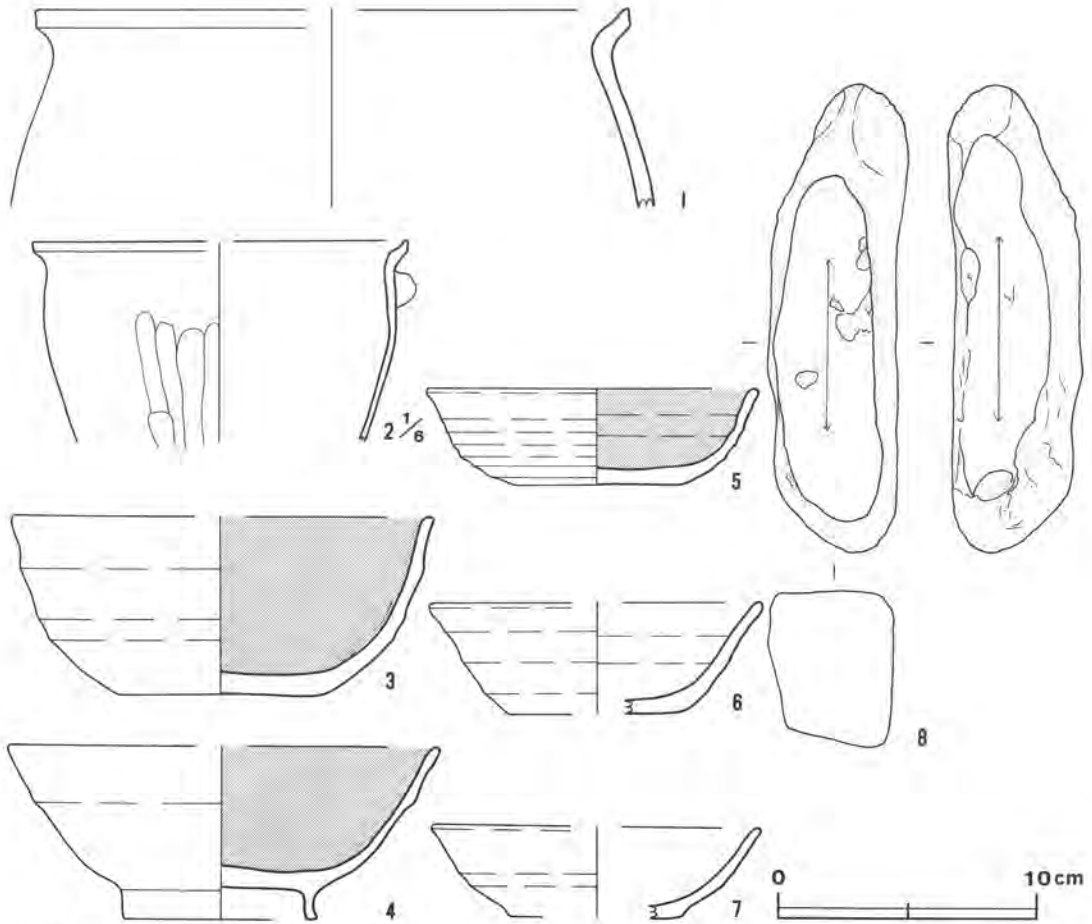
第128号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第235図 8	砥石	Q37	18.5	5.4	6.2	1066.2	砂岩

第129号住居跡（第237図）

本跡は、F3e0区を中心に確認され、第128号住居跡の南側3m、第114号住居跡の北側8mに位置している。

平面形は、長軸6.85m・短軸6.60mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-23°-Wを指している。壁高は20~25cmで、壁はトレンチャーによって攪乱されているが、残存している壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面もトレンチャーによって格子状に攪乱されているが、残存している床面は、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されているが、やはり、トレンチャーによって攪乱されているため天井部・袖部は崩壊している。焼土粒子を多量に含む山砂の混じった暗赤褐色土が僅かに残存していた。調査した部分は、長さ105cm・幅85cm、壁外へ30cmほど掘り込んでいる。ピットはP₁・P₂の2か所検出され、配置から支柱穴と思われる。規模は長径30・25cm・短径20cmの楕円形を呈し、深さは20・80cmである。



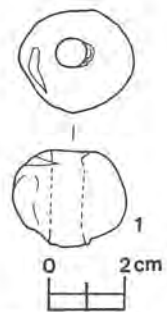
第235図 第128号住居跡出土遺物実測図

覆土は、トレンチャーの攪乱がひどく、堆積状況は不明であるが、多量のローム粒子・ハードローム小ブロックが混じり、軟らかい状態である。

遺物は、土師器、須恵器、土製品、鉄製品が出土している。これらの土器は破片で、攪乱のため移動していると思われる。中央部の床面直上から球状土錘（第236図1）が出土している。

本跡の時期は、出土した土器片から判断すると古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第129号住居跡出土土製品解説表



第236図
第129号住居跡
出土遺物実測図

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第236図 1	球状土錘	DP83	2.5	3.0	—	17.6	孔径1.0cm, にぶい黄橙色, 100%

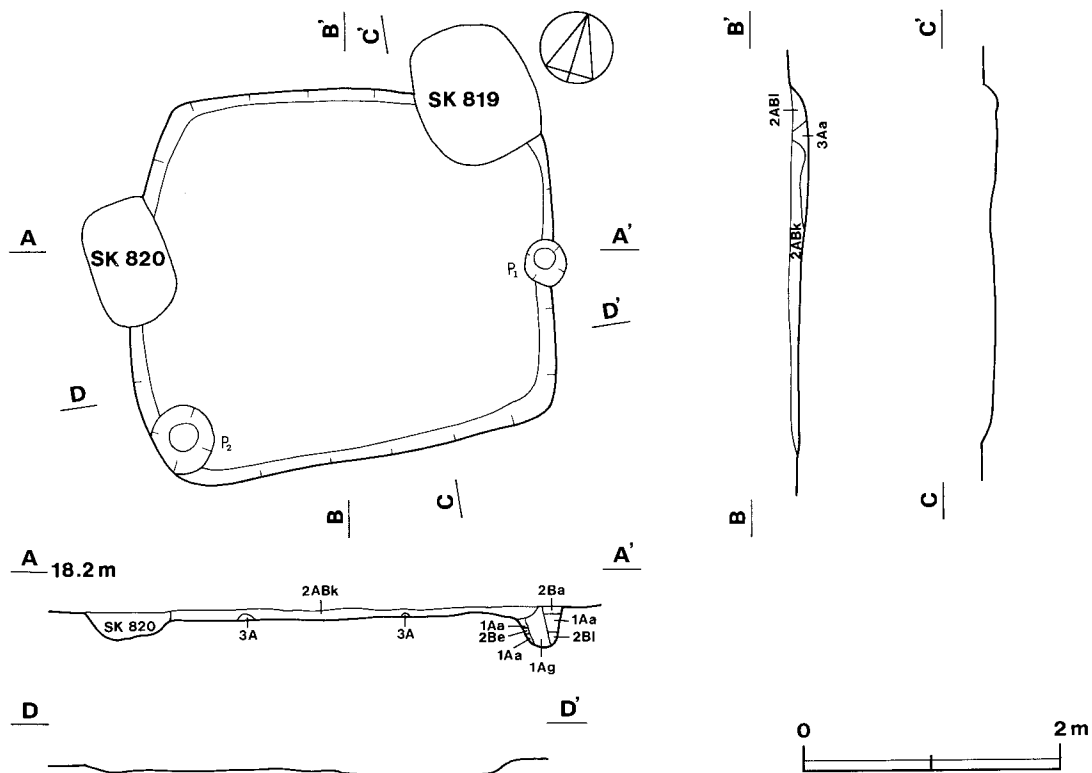
第130号住居跡（第238図）

本跡は、G3a₄区を中心に確認され、第120号住居跡の南側・第125号住居跡の北側に隣接して位置している。本跡の北東コーナー部に第819号土坑、西壁中央部で第820号土坑と重複しており、本跡は第819・820号土坑によって切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、一辺が3.0mの隅丸方形を呈し、長軸方向はN-18°-Wを指している。壁高は10cmで、壁は縮まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。ピットはP₁・P₂の2か所検出した。P₁は東壁下中央部に位置し、長径35cm・短径30cmの楕円形を呈し、深さは25cmである。東壁を切っており、性格は不明である。P₂は南西コーナー下に位置し、長径50cm・短径45cmの楕円形を呈し、深さは20cmである。南西コーナー部を切っていることから本跡に伴うピットではないと思われる。カマドや炉跡は確認できなかった。

覆土は、ローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土を主体とし、壁際にローム小ブロックを含む褐色土が自然堆積の様相を呈している。

調査した部分からは、カマド（炉）や柱穴も検出されず、しかも、ピットも本跡に伴うものが検出できなかったことから、本跡は、他の住居跡群とは性格の異なる遺構と思われる。



第238図 第130号住居跡実測図

遺物は、中央部の覆土下層から少量の土師器の坏形土器や甕形土器、須恵器が破片で出土しているだけで、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第131号住居跡（第239図）

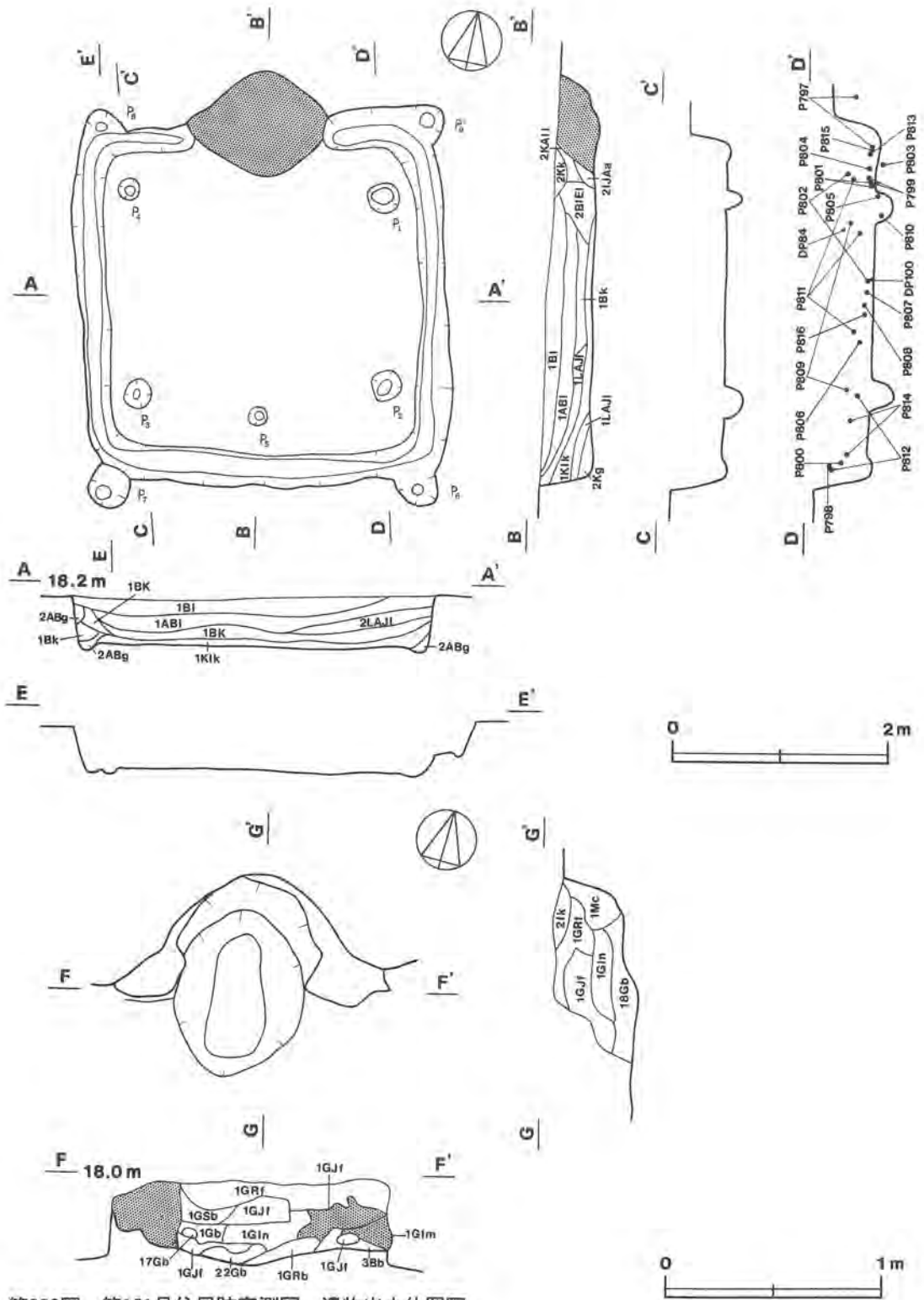
本跡は、G3a8区を中心に確認され、第117号住居跡の南側に隣接し、第134号住居跡の北側1.3mに位置している。

平面形は、長軸3.4m・短軸3.25mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-18°-Wを指している。壁高は48cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅15~20cm・深さ5cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で、カマドの手前から南壁下にかけての幅2.0m・長さ2.3mの範囲は硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部の大半は崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ95cm・幅120cmで、壁外へ50cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を5cmほど掘り込み、熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には、多量の焼土粒子・少量の木炭粒子が含まれている。ピットはP₁~P₉の9か所を検出した。P₁・P₂・P₃・P₄はいずれも径は20~30cm・深さ15~20cmで、配置から支柱穴と思われる。P₅は径15cm・深さ16cmで、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関するピットと思われる。P₆・P₇・P₈・P₉は壁外の南東・南西・北西・北東コーナー部に位置することから、補助柱穴と思われる。いずれも長径25~40cm、短径20~35cmである。

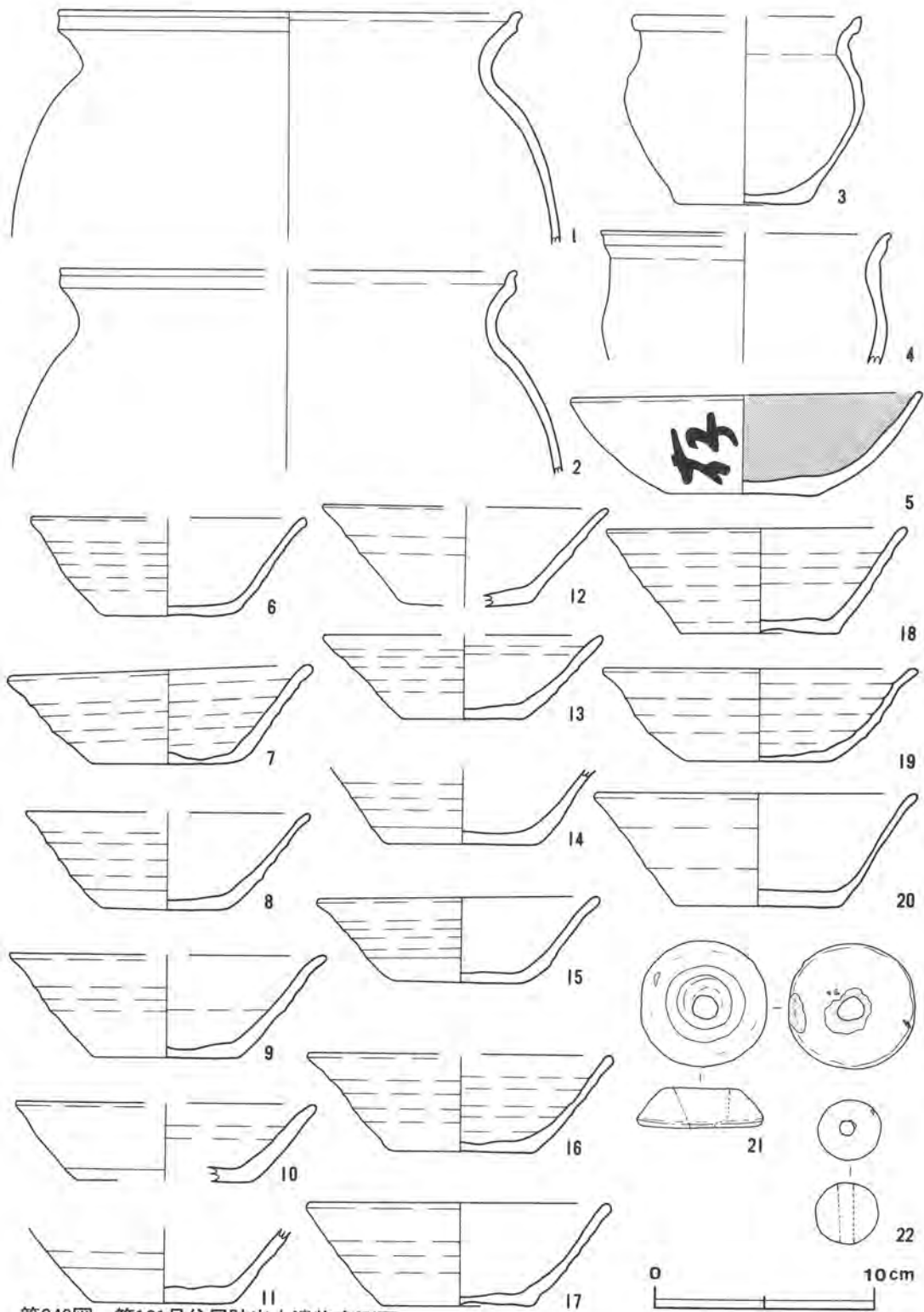
覆土は、黒褐色土を主体とし、上層にローム粒子少量、ローム小ブロック中量、下層にローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子中量を含み、自然堆積の様相を呈している。

遺物は多く、土師器とともに、須恵器、石製品、鉄製品、土製品が出土している。いずれの土器も破片が多く、大半が覆土下層から出土している。カマドの手前の床面直上から土師器の甕形土器（第240図2）・小型甕形土器（第240図3）や、伏せた状態で須恵器の坏7点（第240図7~9・13~15・19）が出土し、中央部と東壁北寄り及び北西コーナー部寄りの床面直上から伏せた状態で須恵器の坏3点（第240図6・11・20）、北東コーナー部寄りの床面直上から伏せた状態で土師器の坏形土器（第240図5）が出土している。また、カマドの手前の床面直上から球状土錘（第240図22）が出土し、東壁北寄りの床面直上からも土製の紡錘車（第240図21）が出土している。その他、カマドの手前から中央部及び南東コーナー部を中心とする覆土下層から須恵器の坏4点（第240図10・16~18）や土師器の甕形土器の口縁部片2点（第240図1・4）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第239图 第131号住居跡実測図・遺物出土位置図



第240图 第131号住居跡出土遺物実測図

第131号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	股土・色調・焼成	備 考
第240図 1	甕形土器 土師器	A 21.4 B (10.6)	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状を呈する。口縁端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ,外面ナデ。	砂積・雲母 におい褐色・灰褐色 普通	P798 20%
2	甕形土器 土師器	A (21.0) B (9.3)	口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ,外面ナデ。	砂粒 におい橙色 内面黒褐色 普通	P799 10%
3	小型甕形土器 土師器	A (10.3) B 8.7 C 6.0	底部は平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、中位に最大径を有し、口縁部は「く」の字状を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面横ナデ,外面横位のヘラ削り。	砂粒 赤褐色 普通	P797 75%
4	甕形土器 土師器	A (13.2) B (6.0)	胴部は僅かに張り、口縁部は外反しながら僅かに開き、端部は上方へつまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ,外面ナデ。	砂粒 橙色 普通	P800 10%
5	坏形土器 土師器	A 16.0 B 4.8 C 6.8	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部中位にかけて手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き,外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P801 体部外面墨断存 内面黒色処理 75%
6	坏 須恵器	A (12.8) B 4.6 C 6.4	底部は平底で、体部は外反気味に外上方へのび、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部不定方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P802 40%
7	坏 須恵器	A 13.9 B 4.7 C 7.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。	細砂 褐灰色 普通	P803 100%
8	坏 須恵器	A (13.2) B 4.6 C 6.0	底部は平底で、体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P804 30%
9	坏 須恵器	A (14.6) B 4.8 C (6.8)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	細砂 灰黄色 普通	P805 20%
10	坏 須恵器	A (13.8) B 3.7 C (8.2)	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 黄灰色 普通	P806 30%
11	坏 須恵器	B (3.5) C 6.5	口縁部欠損。底部は平底で、体部は外反気味に外上方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部に下端にかけて手持ちヘラ削り。 ロクロ回転方向右。	細砂 灰褐色 普通	P807 40%
12	坏 須恵器	A (13.2) B 4.6 C (6.0)	底部は平底で、体部は外反しながら外上方へのび、口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちヘラ削り。	細砂・礫 灰黄褐色 普通	P808 40%

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
13	坏 須恵器	A (12.8) B 3.9 C 5.4	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちへら削り。 ロクロ回転方向右。	細砂 灰褐色 普通	P809 40%
14	坏 須恵器	B (3.5) C 7.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちへら削り。 ロクロ回転方向右。	砂粒 黄灰色 普通	P810 70%
15	坏 須恵器	A 13.0 B 4.2 C 6.3	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちへら削り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 褐灰色 普通	P811 60%
16	坏 須恵器	A (14.1) B 4.6 C 7.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部静止へら切り。 ロクロ回転方向右。	細砂 褐灰色 普通	P812 60%
17	坏 須恵器	A 14.2 B 4.8 C 7.0	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部静止へら切り。 体部内・外面横ナデ。	礫 灰黄色 普通	P813 65%
18	坏 須恵器	A 13.8 B 5.0 C 7.2	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部静止へら切り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰色 普通	P814 70%
19	坏 須恵器	A 14.4 B 4.3 C 6.7	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちへら削り。 体部内・外面横ナデ。	細砂・礫・雲母 灰白色・黄灰色 普通	P815 100%
20	坏 須恵器	A 14.7 B 5.3 C 7.4	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部静止へら切り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂 灰黄褐色 普通	P816 90%

第131号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第240図 21	紡錘車	DP100	—	5.8	1.9	52.4	孔径0.7cm, におい橙色, 100%
22	球状土錘	DP 84	2.9	2.9	—	20.8	孔径0.7cm, におい黄色・黒色, 100%

第132号住居跡 (第242図)

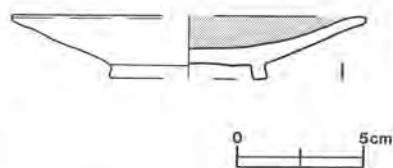
本跡は、G3c7区を中心に確認され、第131号住居跡の南側3m、第127号住居跡の北側7mに位置している。本跡の中央から東側で第134号住居跡、中央から西側で第133号住居跡と重複しており、本跡は第133・134号住居跡の床面より約10cm上面に床を貼り、更に本跡のカマドも存在していることから、最も新しい遺構である。

平面形は、重複しているため推定であるが、長軸3.55m・短軸3.20mで、南西壁コーナー部は隅丸形を呈し、主軸方向はN-5°-Eを指すものと思われる。壁も大半は重複しているが、残存している南西壁コーナー付近の壁高は24cmで、縮まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。その他の壁は暗褐色土で、やはり、垂直に立ち上がっていたと思われる。床面はほぼ平坦で、重複している部分はローム粒子を中量含む黒褐色土で床を貼り、カマドの手前から南壁下にかけての幅2.0m・長さ2.20mの範囲は、特に硬く踏み固められている。カマドは北壁の東側寄りに付設されており、天井部・袖部の大半は崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。調査した部分は、長さ120cm・幅110cm、壁外へ65cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を10cmほど掘り込み、熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットは検出できなかった。

覆土は、上層にローム粒子多量、木炭粒子・粘土粒子少量を含む暗褐色土、下層にローム粒子多量、木炭粒子少量を含む黒褐色土、壁際にローム粒子中量、木炭粒子少量、焼土粒子極少量を含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器のほか、須恵器が出土している。これらの大半は破片で、まとまった器形になったものは中央部の覆土下層から出土した土師器の高台付皿形土器（第241図1）だけである。

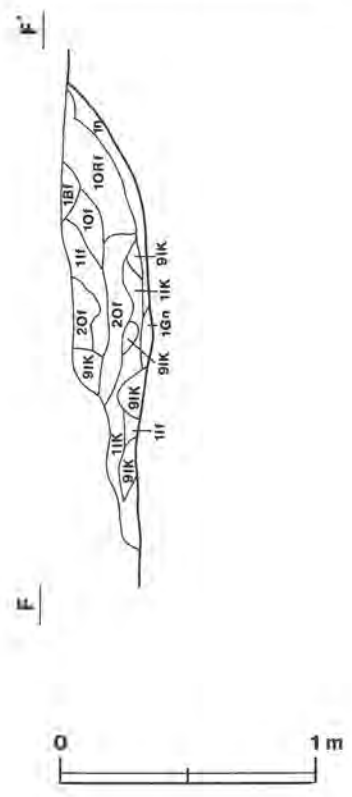
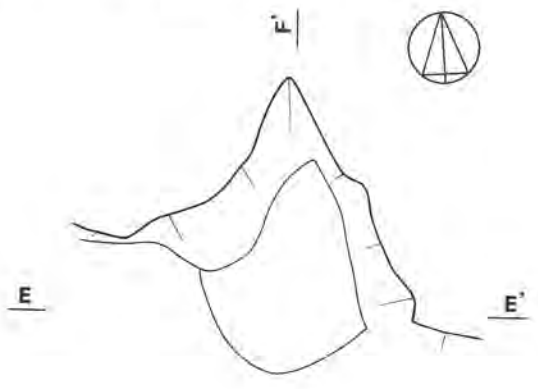
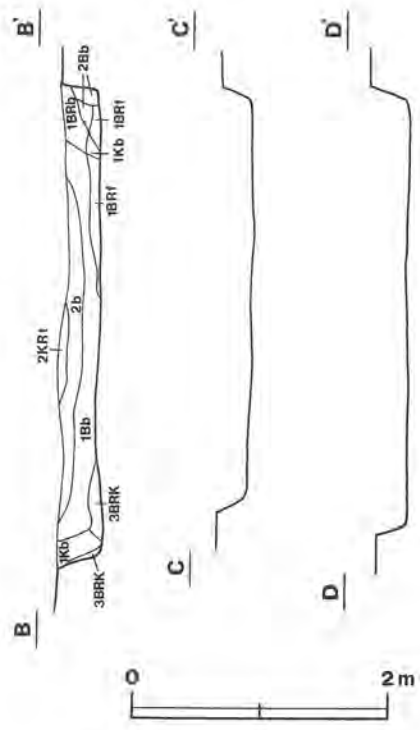
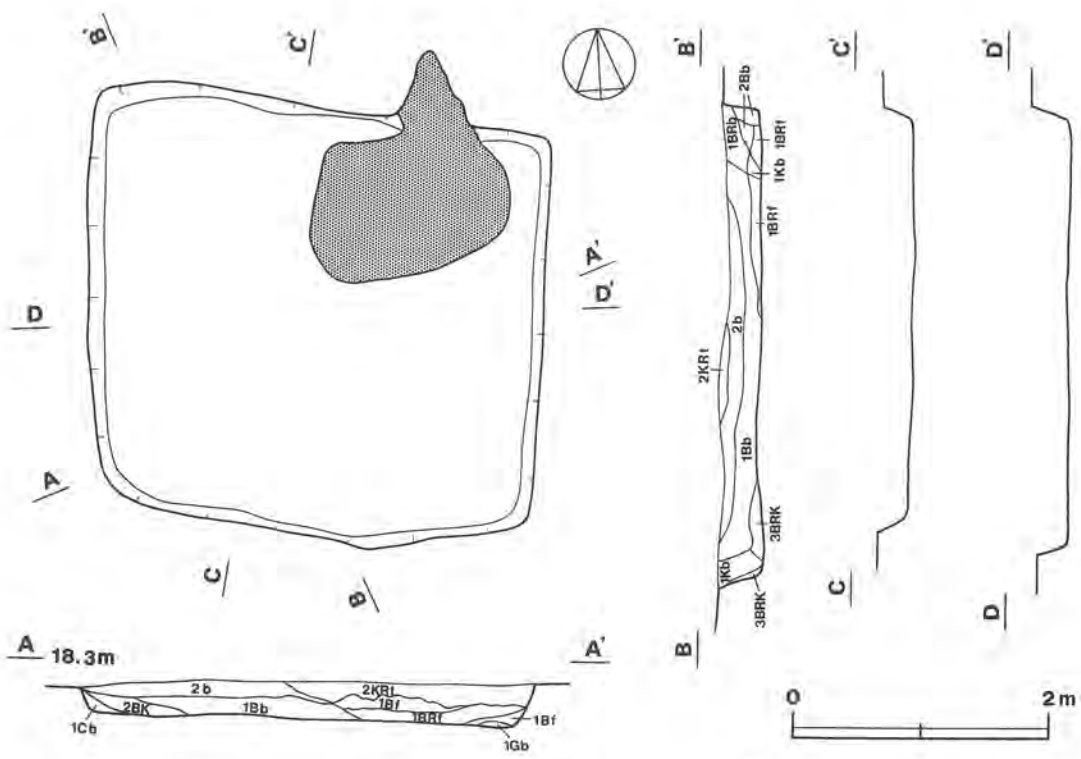
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第241図 第132号住居跡出土遺物実測図

第132号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第241図 1	高台付皿形 土器 土師器	A (13.8) B 2.5 D (6.2) E 0.6	体部は内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁部は僅かに水平にのび、端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面へラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 に お い 黄 橙 色 普 通	P818 内面黒色処理 20%



第242图 第132号住居跡実測图

第133号住居跡（第243図）

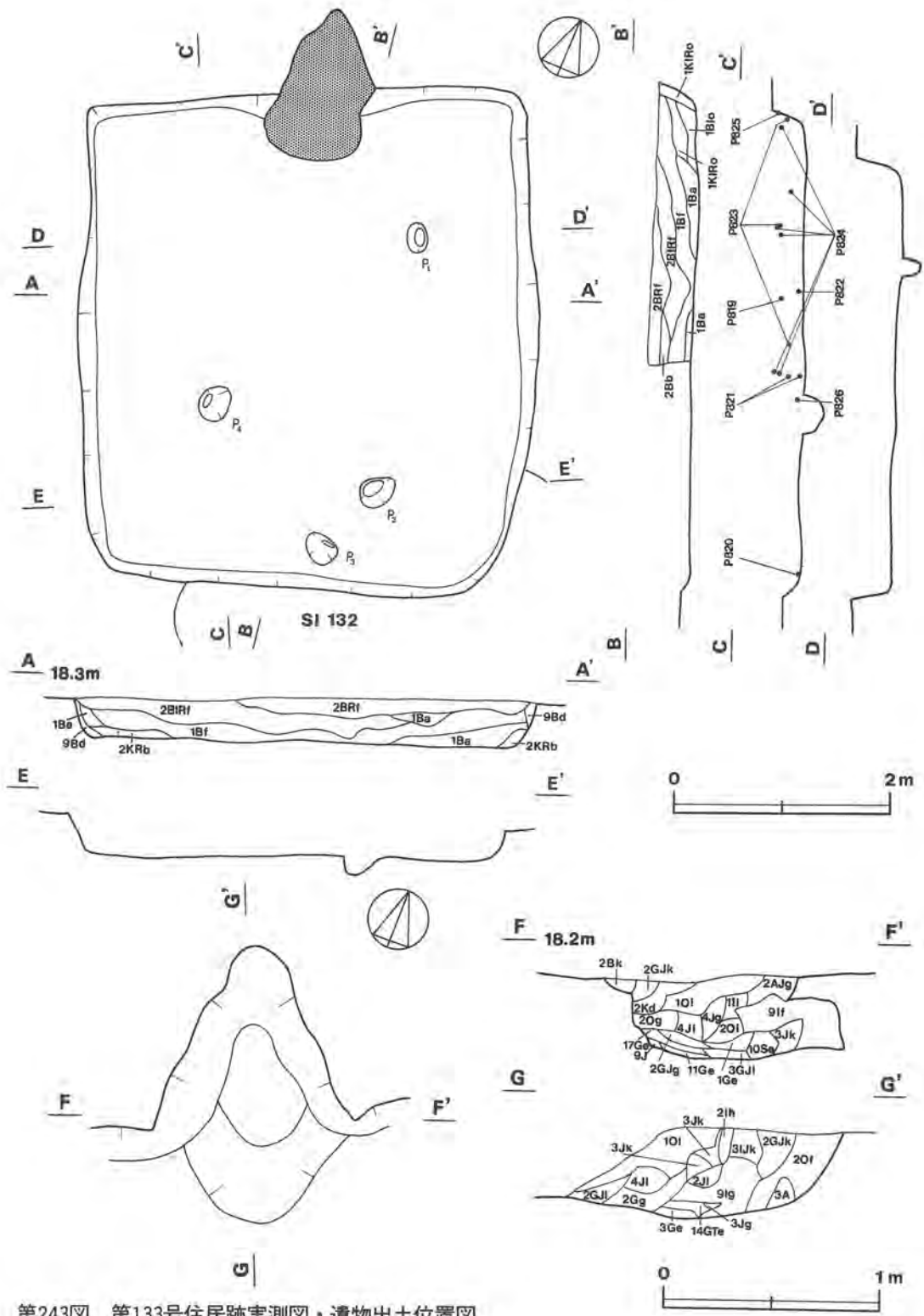
本跡は、G3b₆区を中心に確認され、第126号住居跡の東側1.2m、第131号住居跡の南西側2.8mに位置している。本跡は中央から東側で第132・134号住居跡と重複しており、本跡の上面には第132号住居跡の床を貼っていることから、第132号住居跡より本跡の方が古い遺構である。また、本跡は第134号住居跡の北西コーナー付近を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、長軸4.3m・短軸4.2mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-28°-Wを指している。壁は重複のため南東壁コーナー付近から南壁にかけての上層が切られて検出できなかったが、その他の壁高は35cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、カマドの手前から南壁下にかけての幅1.7m・長さ3.5mの範囲は、特に硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付認され、天井部・袖部の大半は崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ130cm・幅100cm、壁外へ80cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を15cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には焼土粒子と多量の灰が含まれている。ピットはP₁～P₄の4か所検出され、P₁・P₂・P₄は長径25・30・35cm・短径20・25・30cmの楕円形を呈し、深さは18～23cmで、配置から支柱穴と思われる。P₃は長径30cm・短径25cmの楕円形を呈し、深さは15cmで、カマドの反対側に位置し、周囲が踏み固められていることから出入口に関連するピットと思われる。

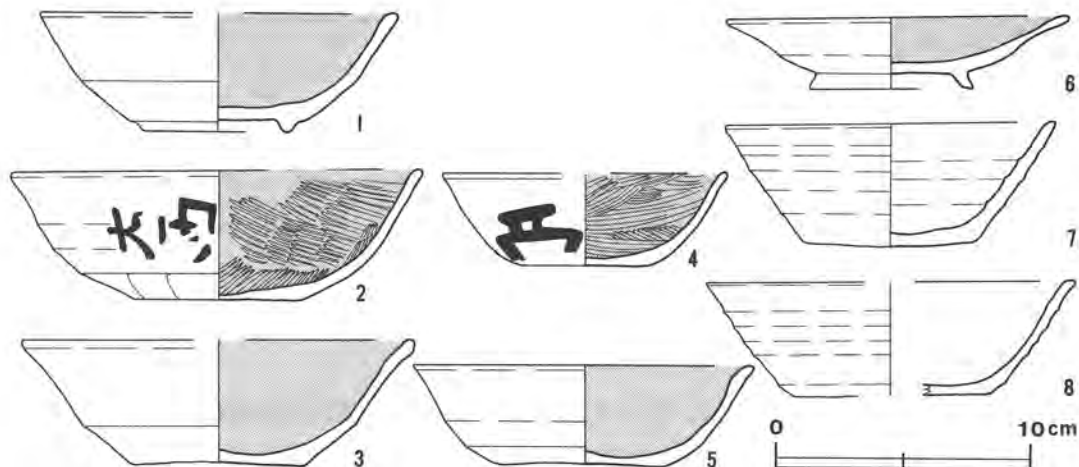
覆土は、上層にローム粒子多量、木炭粒子・粘土粒子少量含む暗褐色土、下層にローム粒子多量、壁際にローム粒子多量、木炭粒子・焼土粒子少量含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器とともに、須恵器、鉄製品が出土している。土器の大半は破片で、覆土中層から下層にかけての出土が多い。中央部の床面直上から伏せた状態で土師器の坏形土器2点（第244図2・4）や正位で須恵器の坏（第244図7）が出土し、カマドの東側袖部付近から伏せた状態で土師器の坏形土器2点（第244図3・8）が出土している。その他、中央部の覆土下層から伏せた状態で土師器の高台付坏形土器（第244図1）、南壁西寄りの覆土下層から正位で土師器の坏形土器（第244図5）が出土している。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第243图 第133号住居跡実測図・遺物出土位置図



第244図 第133号住居跡出土遺物実測図

第133号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第244図 1	高台付坏形 土器 土 師 器	A (14.0) B 4.7 D 5.7 E 0.4	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開く。口縁部は僅かに外反し、端部は丸い。高台は短く外下方へのびる。	水挽き成形。 底部から体部中位にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にふい橙色 普通	P819 内面黒色処理 30%
2	坏形土器 土 師 器	A 16.2 B 5.3 C 6.6	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にふい赤褐色 普通	P822 体部外面墨書 「大西」 内面黒色処理 70%
3	坏形土器 土 師 器	A (15.4) B 5.0 C 6.6	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反している。口縁部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にふい橙色 普通	P824 内面黒色処理 60%
4	坏形土器 土 師 器	A (10.2) B 3.7 C (5.0)	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反している。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にふい橙色 普通	P821 体部外面墨書 「西」 内面黒色処理 60%
5	坏形土器 土 師 器	A 13.4 B 4.0 C 6.5	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫 にふい橙色 普通	P820 内面黒色処理 60%
6	高台付皿形 土器 土 師 器	A 13.5 B 2.8 D 6.4 E 0.7	体部は内彎気味に外上方へ大きく開き、口縁部は僅かに水平にのび、端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 にふい褐色 普通	P825 内面黒色処理 70%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	坏 須恵器	A 13.0 B 5.0 C 6.8	底部は平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部手持ちへら削り。 体部内・外面横ナデ。 ロクロ回転方向右。	細砂 に お い 黄 橙 色 普 通	P826 100%
8	坏形土器 土師器	A (14.6) B 4.5 C (7.7)	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 底部静止へら削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・礫 に お い 赤 色 普 通	P823 30%

第134号住居跡（第245図）

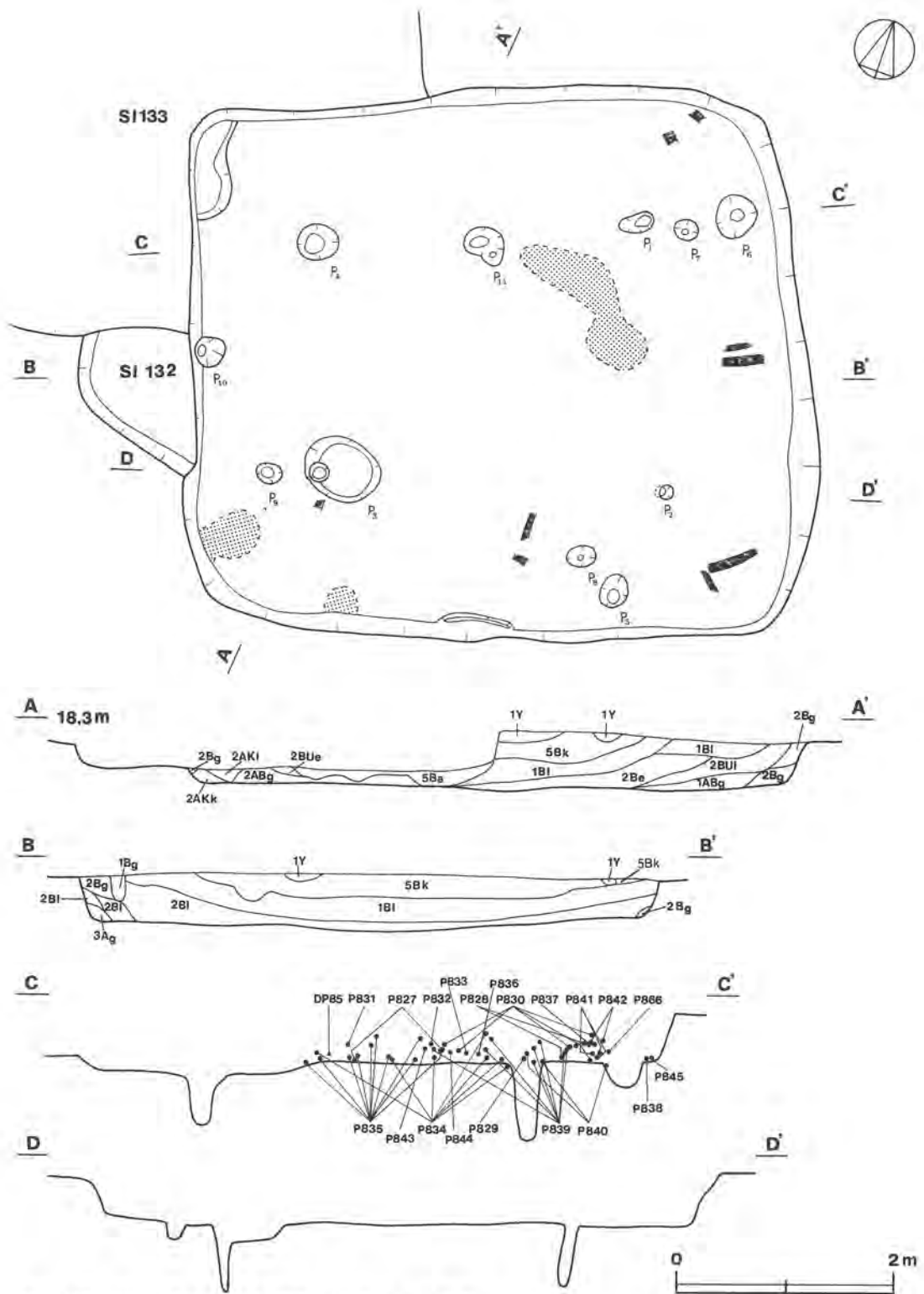
本跡は、G3c7を中心に確認され、第131号住居跡の南側1.4m、第127号住居跡の北側6.4mに位置している。本跡の西側で第132・133号住居跡と重複しており、本跡は第132・133号住居跡に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸5.80m・短軸5.15mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-27°-Wを指している。壁は南壁南西側から西壁南西側の上層は重複しているため検出できなかったが、その他の壁高は45cmで、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、よく踏み固められているが、東壁下から南壁東側寄りの範囲は、特に硬く踏み固められている。炉跡は検出できなかったが、床面の中央から北東寄りに極薄く不整形を呈して焼土が堆積している。ピットはP₁～P₁₁の11か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄が配置から支柱穴と思われる。いずれも長径35・15・20・40cm・短径20・10・15・35cmの楕円形を呈し、深さは75・60・65・50cmである。P₅・P₆は長径30・40cm・短径25・35cmの楕円形を呈し、深さ65・25cmで、いずれも周囲はよく踏み固められており、配置から出入口施設に関連するピットと思われる。P₇・P₈・P₉・P₁₀・P₁₁は長径25～37cm・短径20～25cmの楕円形を呈し、深さは15～25cmで、配置から補助柱穴と思われる。

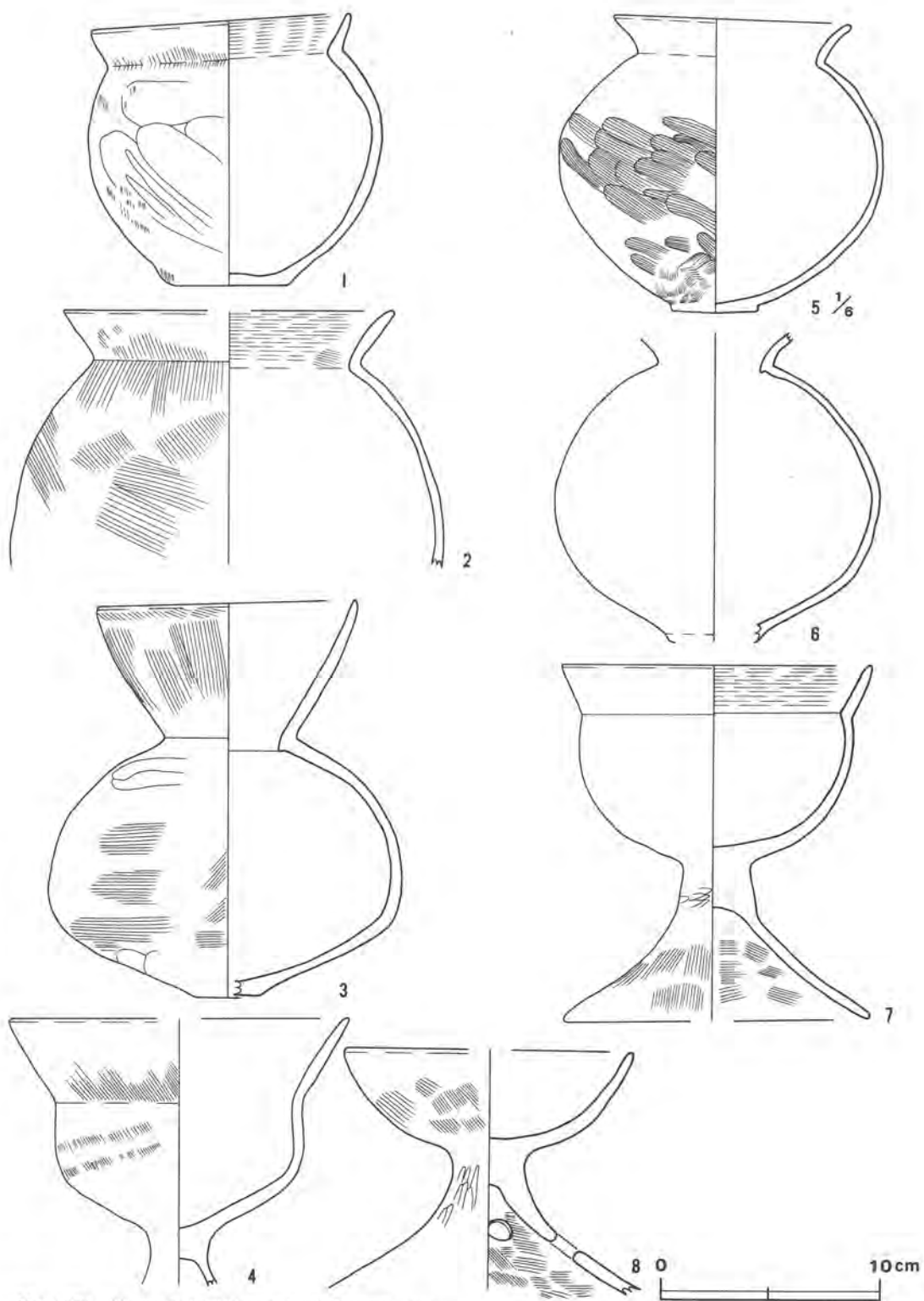
覆土は、上層にローム粒子・オレンジパミスを中量含む黒褐色土、下層にローム粒子を中量含む暗褐色土、壁際にローム粒子を多量含む暗褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、本跡全域から多量の土師器のほか、須恵器、土製品が出土している。土器の大半は破片で、覆土中層から下層にかけて集中している。南東壁際から伏せた状態で土師器の高坏形土器2点（第246図4・8）・広口壺形土器の口縁部片（第247図11）、中央部の床面直上から横位で土師器の甕形土器（第246図1）、東壁中央部の床面直上から伏せた状態で土師器の器台形土器（第247図18）、西壁中央部壁際から土師器の甕形土器片（第246図2）が出土している。また、中央部の覆土中層から須恵器の甕片（第247図20）や伏せた状態で土師器の碗形土器（第247図15）・坏形土器（第247図17）・甕形土器片（第247図13）・壺形土器（第247図9）も出土している。

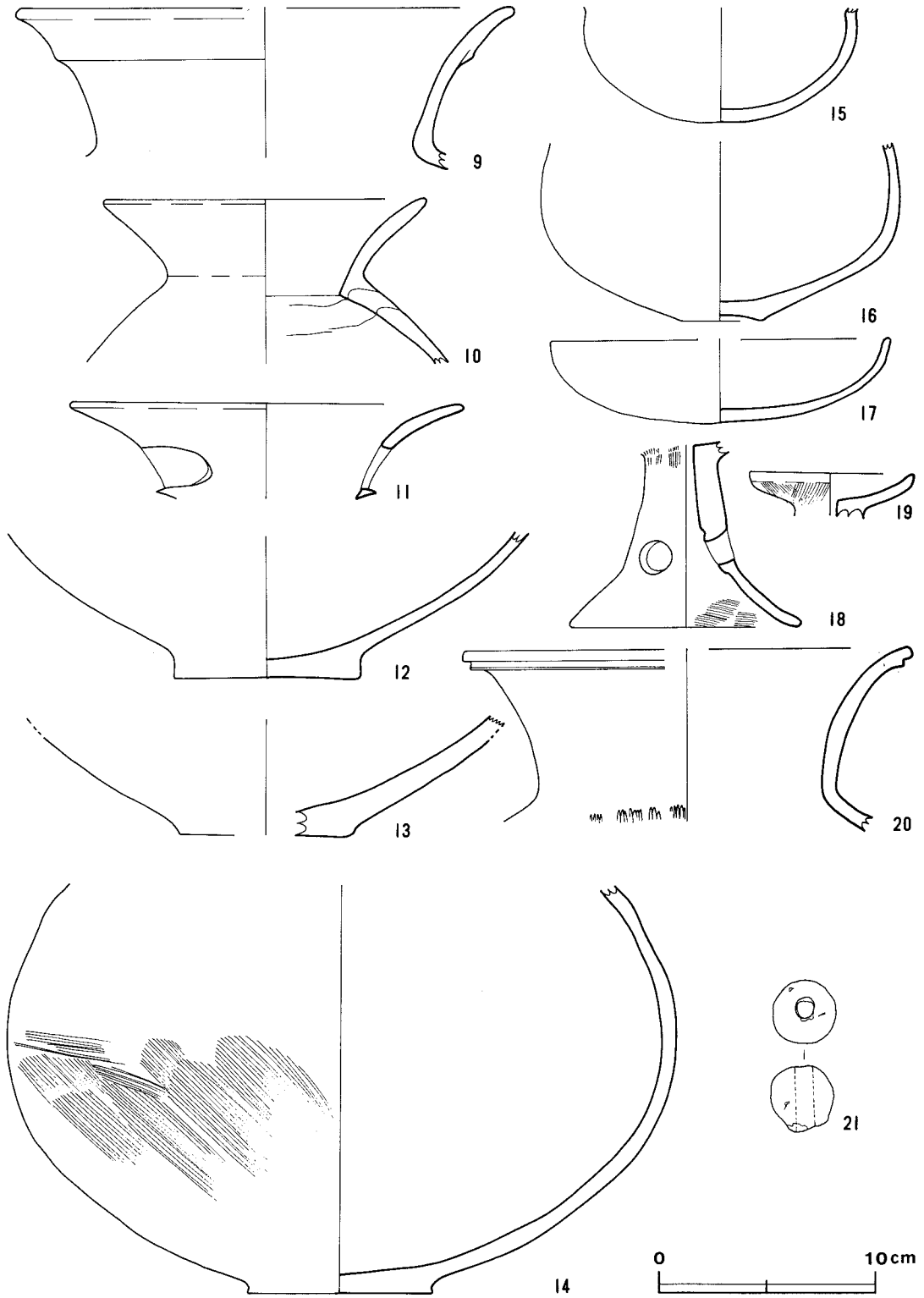
本跡は、出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものと思われる。



第245图 第134号住居跡実測図・遺物出土位置図



第246图 第134号住居迹出土遗物实测图 (1)



第247图 第134号住居跡出土遺物実測图 (2)

第134号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第246図 1	甕形土器 土 師 器	A 12.0 B 12.7 C 5.5	底部は平底で、胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は外反して開く。	口縁部内面横位のハケ目、外面ハケ目後、横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面斜位のハケ目。	砂粒・礫・石英・雲母 黒褐色 普通	P 829 90%
2	甕形土器 土 師 器	A (15.4) B (12.0)	胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内面横位のハケ目、外面ハケ目後、横ナデ。 胴部内面ナデ、外面ハケ目。	砂粒・礫・長石 にぶい橙色 普通	P 827 40%
3	埴形土器 土 師 器	A 12.2 B 18.3 C (3.0)	胴部は扁平な球形を呈し、口縁部は直線的に外上方へ立ち上がり、先端部はやや内傾する。	口縁部内面ヘラナデ、外面横ナデ後、雑な縦位のハケ目。 胴部内面ナデ、外面横位のヘラ削り後、横位のハケ目。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 839 70%
4	高坏形土器 土 師 器	A (15.7) B (12.5)	坏部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ヘラナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ハケ目後、ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 841 40%
5	甕形土器 土 師 器	A 21.7 B 27.8 C 8.0	底部は平底で突出し、胴部はほぼ球形を呈する。口縁部は「く」の字状に開いている。	口縁部内・外面ヘラナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面斜位のハケ目後、上位ナデ。	砂粒・礫・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P 834 70%
6	壺形土器 土 師 器	A (14.0) B 28.8 C (8.5)	胴部はほぼ球形を呈し、口縁部は「く」の字状に開いている。	口縁部内面横位のヘラ磨き、外面縦位のヘラ磨き。 胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・礫 明黄褐色 普通	P 835 70%
7	高坏形土器 土 師 器	A 14.2 B 16.4 D (14.0)	坏部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反する。脚部は「ラッパ」状に開く。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 脚部内面横位ハケ目、外面縦位のハケ目。	砂粒・礫・長石 にぶい赤褐色 良好	P 842 75%
8	高坏形土器 土 師 器	A (13.4) B (11.1) D (6.5)	坏部は直線的に外上方へ立ち上がり、脚部は「ラッパ」状に開き、中位に4か所の穿孔が見られる。	体部内面ヘラナデ、外面斜位のハケ目。 脚部内面横位のハケ目、外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・礫・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 840 70%
第247図 9	壺形土器 土 師 器	A 23.0 B (7.5)	口縁部片で、「く」の字状に開いている。	口縁部内面横ナデ、外面上位横ナデ・中位から頸部にかけて縦位のヘラ削り。	砂粒 にぶい橙色・灰褐色 普通	P 836 30%
10	壺形土器 土 師 器	A 15.0 B (7.6)	口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内面横位のヘラ磨き、外面縦位のヘラ磨き。	砂粒 赤色 普通	P 837 20%
11	広口壺形土器 土 師 器	A 18.2 B (4.5)	口縁部片で、朝顔状に大きく外反する。下位に2か所の穿孔が見られる。	口縁部内面横位のヘラ磨き、外面ナデ。	砂粒・礫 明赤褐色・赤黒色 普通	P 838 10%
12	甕形土器 土 師 器	B (6.6) C 8.7	底部は突出気味の平底で、胴部は丸く張っている。	胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色、内面 灰褐色 普通	P 832 50%
13	甕形土器 土 師 器	B (5.3) C (7.9)	底部は平底で、胴部は内彎気味に大きく開いて立ち上がる。	胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒 赤黒色 普通	P 833 25%

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
14	甕形土器 土 師 器	B (19.0) C 8.7	底部は平底で突出し、胴部はほぼ球形を呈している。	胴部内面ヘラナデ、外面斜位のハケ目。	砂粒・礫 外面灰褐色、内面にぶい橙色 普通	P 830 40%
15	甕形土器 土 師 器	B (5.3)	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	体部内面ヘラナデ、外面横位のヘラ削り。	砂粒 赤褐色、内面にぶい赤褐色 普通	P 843 30%
16	甕形土器 土 師 器	B (8.3) C 3.8	底部はあげ底を呈し、胴部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色・黒色 普通	P 828 70%
17	坯形土器 土 師 器	A (15.7) B (3.9)	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	体部内面ヘラナデ、外面ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P 844 50%
18	器台形土器 土 師 器	B (8.5) D 10.8	脚部は「ハ」の字状に開き、脚部中位に3孔、接合部に中央孔が穿たれている。	脚部内面横ナデ、外面縦位のヘラ磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 845 50%
19	器台形土器 土 師 器	A 7.5 B (2.0)	器受部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は丸くおさめている。接合部に中央孔が穿たれている。	器受部内面ヘラナデ、外面ハケ目後、ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P 866 30%
20	甕 須 恵 器	A (24.8) B (8.4)	口縁部は外反しながら開き、口縁端部は段をなす。	口頸部内・外面横ナデ。	砂粒・細砂 褐灰色 良好	P 831 5%

第134号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第247図 21	球 状 土 錘	DP85	3.1	2.9	—	22.5	孔径0.8cm, にぶい橙色, 100%

第135号住居跡 (第248図)

本跡は、G3i₄区を中心に確認され、第136号住居跡の北側3.4m、第127号住居跡の南西側13.5mに位置している。本跡の中央から東側で第137号住居跡と重複しており、本跡が第137号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい遺構である。

平面形は、一辺3.5mほどの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-12°-Wを指すものも思われる。壁はカマドの東側から東壁にかけて第137号住居跡と重複しているため検出できなかった。その他の壁も耕作によるトレンチャーによって大半が攪乱されており、僅かに残っている壁面だけがロームで垂直に立ち上がり、壁高は15~20cmである。南壁下から西壁下にかけて、上幅15cm・深さ10cmの壁溝が検出されている。床面もトレンチャーによって帯状に攪乱されているが、残存している床面はロームがよく踏み固められている。また、第137号住居跡と重複している部分はハードローム小ブロックを多量に含むにぶい黄褐色土で床を貼っている。南壁下西側から西壁下にか

て、幅1.5m・長さ2.0mの範囲は床面より15cm高くなっている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部はトレンチャーによって攪乱されている。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて赤化している。調査した部分は、長さ95cm・幅120cm、壁外へ75cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を10cmほど掘り込み、焼土粒子・灰を中量含み、火床は熱を受けて焼土化している。ピットは南壁下に1か所検出された。長径40cm・短径30cmの楕円形を呈し、深さは15cmである。配置から出入口施設に関連するピットと思われる。また、規模・位置から貯蔵穴と思われる施設が2か所検出された。貯蔵穴1は南壁下東側寄りに位置し、長径70cm・短径55cmの楕円形を呈し、床面から35cmほど掘り込んでいる。覆土は、上層にローム粒子を多量に含む黒褐色土、下層にローム小ブロックを中量含む褐色土が堆積しており、底面は硬いロームである。貯蔵穴2は北西コーナー下に位置し、長径65cm・短径55cmの楕円形を呈し、床面を15cmほど掘り込んでいる。覆土は、上層にローム粒子を多量含む暗褐色土、下層にローム粒子・粘土粒子を多量含む黒褐色土が堆積しており、底面は軟いロームである。

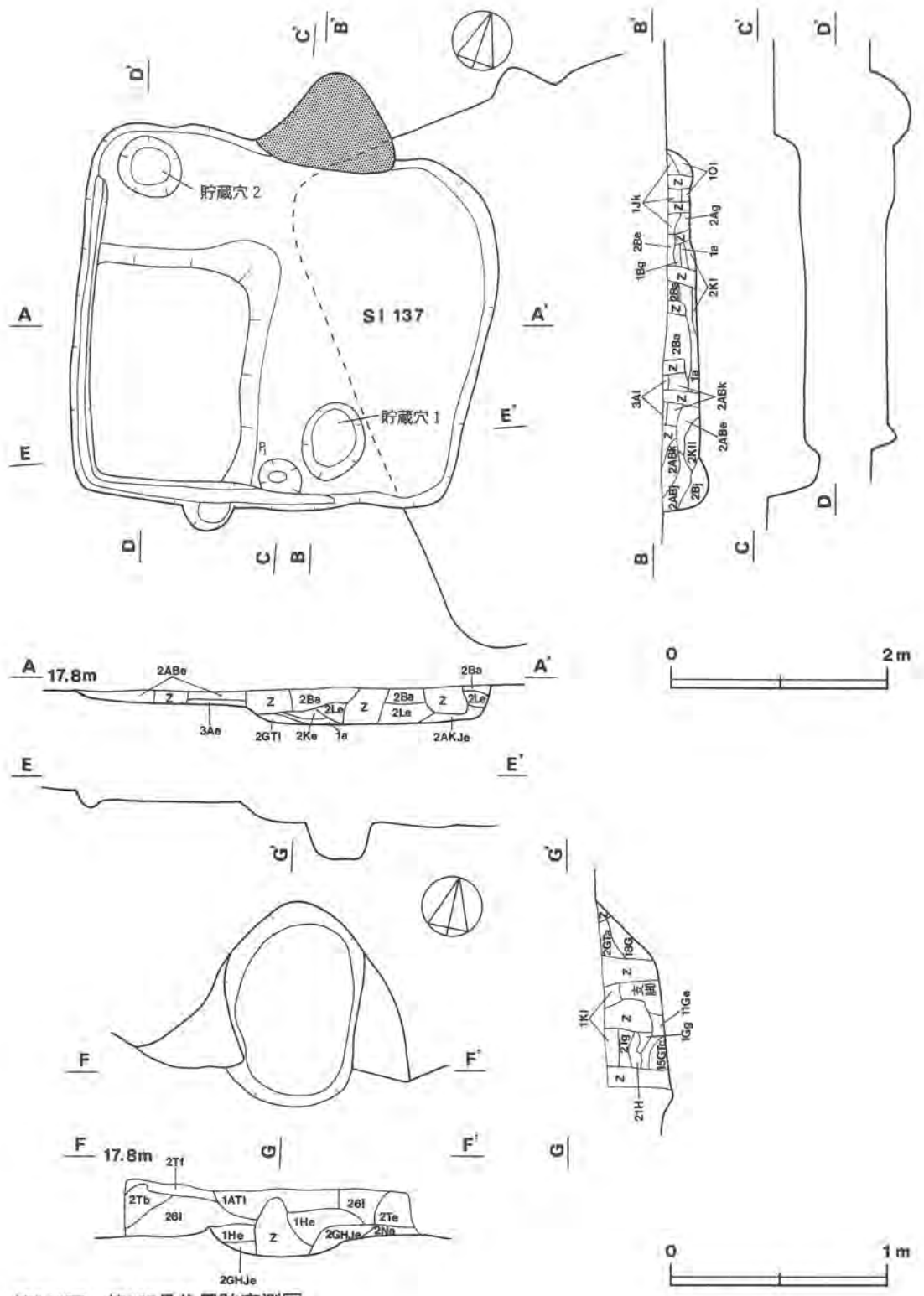
覆土は、トレンチャーによって攪乱されているため堆積状況は不明であるが、上層にローム小ブロック・ローム粒子を多量含む暗褐色土、下層にローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を中量含む暗褐色土が堆積している。いずれも軟らかい土である。

遺物は、土師器を主に、土製品、須恵器が出土している。南東コーナー部の床面直上から伏せた状態で高台付皿形土器（第249図3）・甕形土器（第249図1）が出土し、東壁中央部の壁際から管状土錘（第249図6）、カマドの燃烧部から支脚（第249図7）が出土している。その他、中央部の覆土下層から土師器の坏形土器（第249図5）や須恵器片が出土している。須恵器はすべて破片で、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第135号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第249図 1	甕形土器 土師器	A (13.6) B 29.5 C 9.6	底部は平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、長胴を呈する。口縁部は「く」の字状に開き、端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色 普通	P846 30%
2	台付鉢形土器 土師器	A (30.5) B 14.6 D 19.0 E 4.1	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	体部内面ナデ、外面縦位のヘラ削り後、高台貼り付け。高台内面ナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・長石 橙色 普通	P850 70%
3	高台付皿形土器 土師器	A (12.6) B 3.5 C 6.5 D 2.0	体部は内彎気味に外上方へのびる。高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台付・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	細砂 にぶい橙色 普通	P848 内面黒色処理 70%

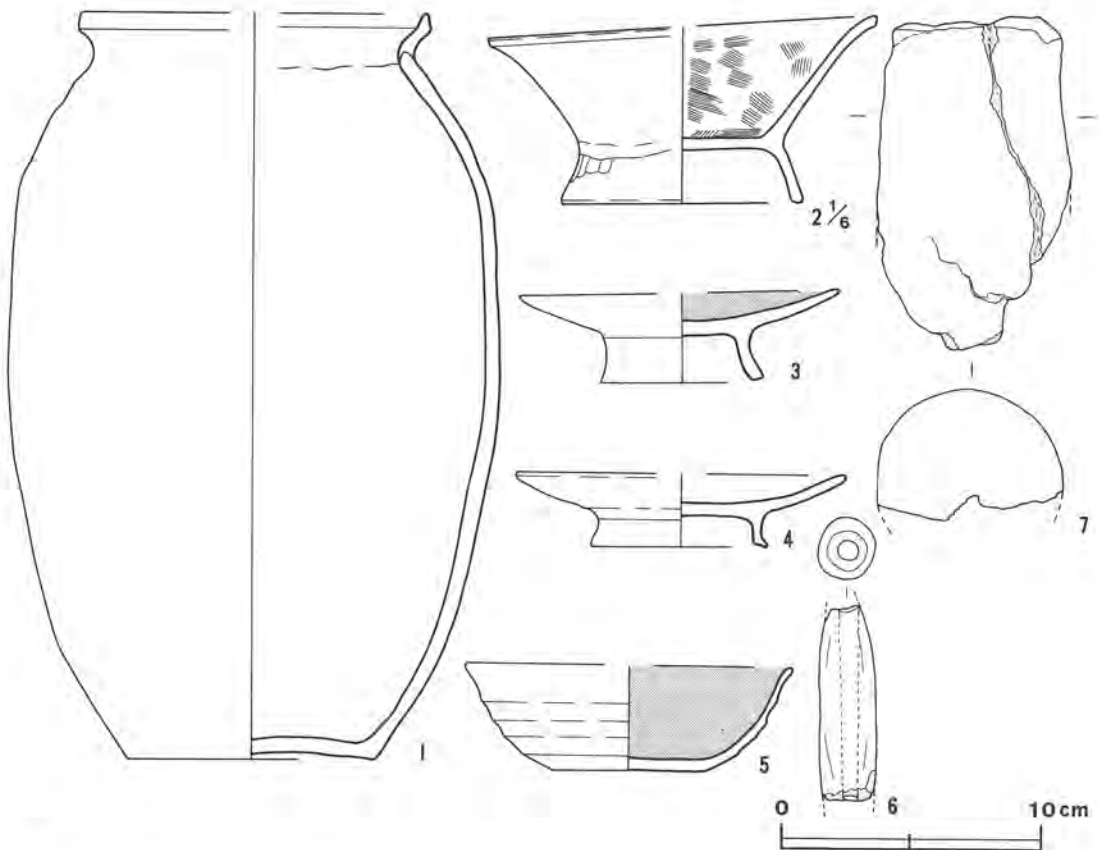


第248图 第135号住居跡実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手挽の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	高台付皿形土器 土師器	A (13.0) B 2.9 D (7.0) E 1.3	体部は内彎気味に外上方へのびる。口縁端部は丸くおさめている。高台は外下方へのびる。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母にふい橙色普通	P849 60%
5	坏形土器 土師器	A (12.8) B 4.2 C 6.0	底部はやや丸味を帯びた平底で、体部は内彎気味に外上方にのび、口縁部は僅かに外反し、端部を丸くおさめている。	水挽き成形。底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・スコリア浅黄橙色普通	P847 内面黒色処理30%

第135号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第249図 6	管状土錘	DP94	7.7	2.4	—	(38.0)	孔径0.7cm, 橙色, 95%
7	支脚	DP24	(13.2)	(7.5)	—	(410.1)	橙色



第249図 第135号住居跡出土遺物実測図

第136号住居跡（第250図）

本跡は、H3a3区を中心に確認され、第135号住居跡の南側3.4m、第140号住居跡の北西側4.6mに位置している。

平面形は、長軸3.95m・短軸3.65mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-28°-Wを指している。壁高は30cmで、壁はトレンチャーによって攪乱されているが、残存している壁は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、カマドを除いて、上幅20cm・深さ10cmの壁溝が周回している。床面は平坦で、全面的にロームがよく踏み固められている。カマドの手前から南壁下にかけての幅1.65m・長さ2.0mの範囲は、特に硬く踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部の大半はトレンチャーによって攪乱されている。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。調査した部分は、長さ150cm・幅135cm、壁外へ90cm掘り込んでいる。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には、焼土粒子を多量に含む黒褐色土が堆積している。ピットはP₁~P₉の9か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄が配置から支柱穴と思われる。いずれも長径30~40cm・短径20~30cmの楕円形を呈し、深さは10~15cmである。P₇は長径25cm・短径20cmの楕円形を呈し、深さは10cmで、カマドの反対側に位置することから出入口に関連するピットと思われる。P₅・P₆・P₈・P₉は長径20~40cm・短径17~35cmの楕円形を呈し、深さは10~20cmで、配置から補助柱穴と思われる。

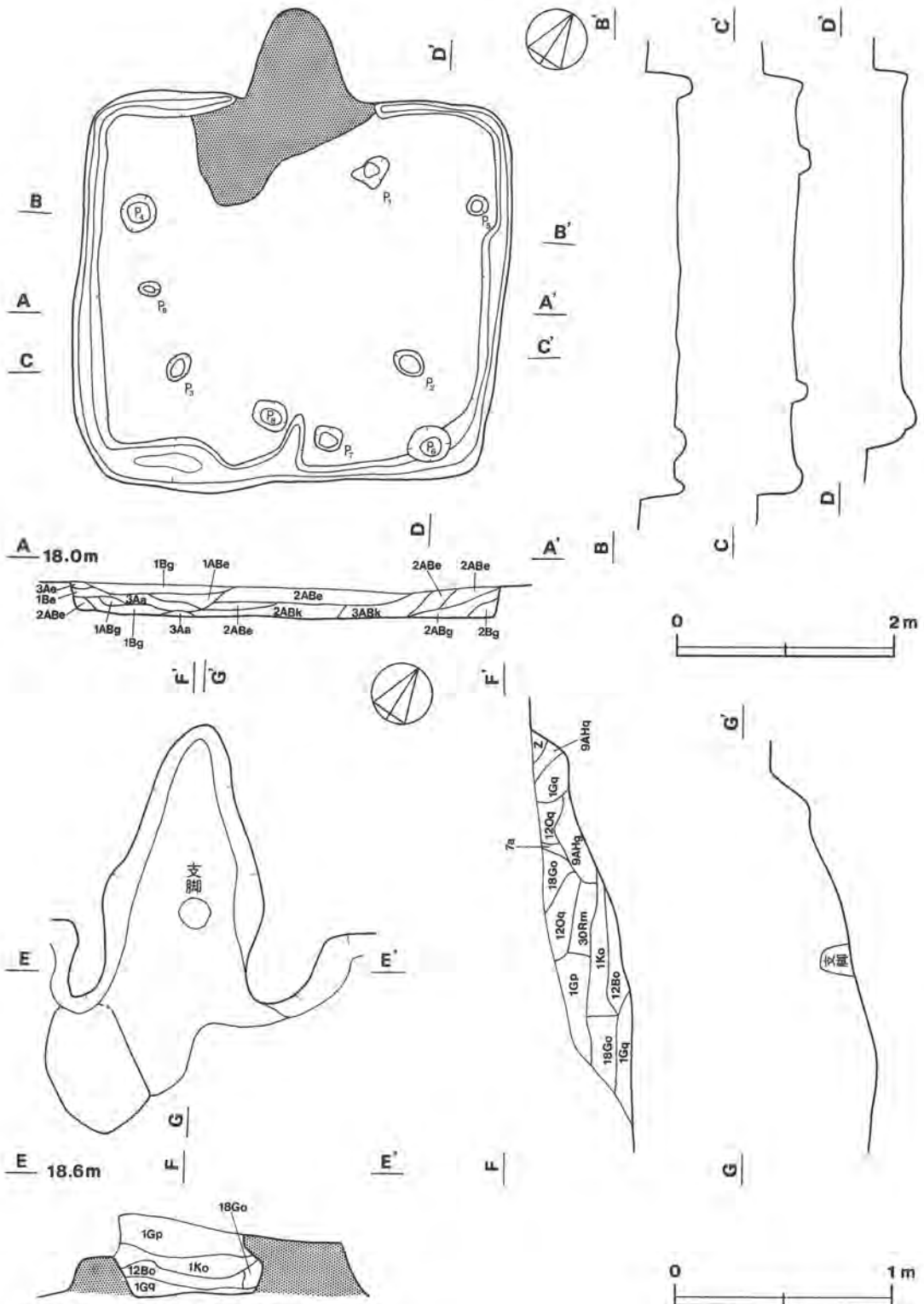
覆土は、上層にローム小ブロック・ローム粒子を多量に含む暗褐色土、下層にローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を中量含む暗褐色土、壁際にローム粒子を中量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、カマド付近から西寄りを中心に、多量の土師器のほか、須恵器が出土している。土器の多くは破片で、覆土下層からの出土が多い。カマドの東側の覆土下層からつぶれた状態で須恵器の坏（第251図2）と、中央部の覆土下層から須恵器の蓋（第251図1）・鉄片が出土している。土師器の坏形土器や甕形土器片も同所から出土しているが、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第136号住居跡出土土器観察表

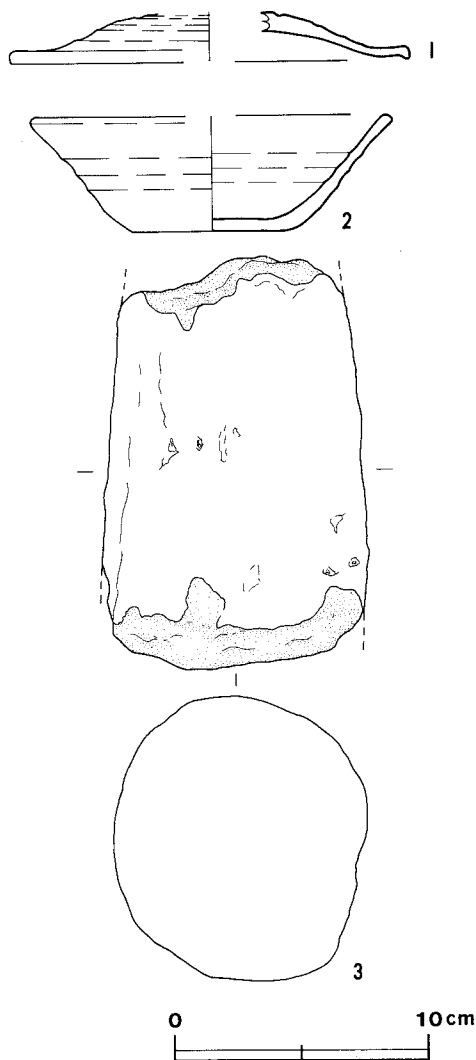
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第251図 1	蓋 須恵器	A (15.7) B (1.9)	天井部から口縁部へなだらかに下がり、口縁端部は下方に屈曲する。	水挽き成形。 天井部の頂部は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	細砂・礫 灰色 普通	P852 30%
2	坏 須恵器	A (14.2) B 4.6 C 6.6	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて不定方向の手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・雲母 灰色・オリーブ色 普通	P851 50%



第250图 第136号住居跡実測図

第136号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名 称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第251図 3	支 脚	DP25	(16.4)	10.6	—	(1843.6)	橙色



第251図 第136号住居跡出土
遺物実測図

第137号住居跡 (第252図)

本跡は、G3is区を中心に確認され、第136号住居跡の北東側4.6m、第127号住居跡の南側13.0mに位置している。本跡の南西壁北西側で第135号住居跡と重複しており、本跡が第135号住居跡に切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸4.7m・短軸4.4mのほぼ隅丸方形を呈し、主軸方向はN-38°-Wを指している。壁は重複のため南西壁北西側から西コーナー付近の上層は検出できなかったが、その他の壁高は60cmで、壁面はトレンチャーによって攪乱されているが、残存している壁面は締めりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10~28cm・深さ15cmの壁溝がカマド付近を除いて周回している。床面は平坦で、全面的によく踏み固められているが、カマドの手前からピットの内側にかけて、特に硬く踏み固められている。カマドは北西壁北東側寄りに付設され、天井部・袖部の大半はトレンチャーによって攪乱されている。残存している東側の袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。調査した部分は、長さ130cm・幅90cm、壁外へ30cmほど掘

り込んでいる。燃烧部は床面を10cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子、中量の木炭粒子を含む暗赤褐色土が堆積している。ピットはP₁~P₅の5か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄は配置から支柱穴と思われる。いずれも長径30~50cm・短径

25～40cmの楕円形を呈し、深さは65～75cmである。P₅は長径55cm・短径40cmの楕円形を呈し、深さは22cmで、カマドの反対側に位置していることから出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱されているが、上層にローム粒子多量、木炭粒子・焼土粒子少量を含む暗褐色土、下層にローム粒子多量、焼土粒子少量を含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、多量の土師器といっしょに、須恵器、石製品が出土している。これらの多くは破片で、覆土中層から下層にかけての出土が大半である。土師器は、多量に出土している割には、ほとん

第137号住居跡出土土器観察表

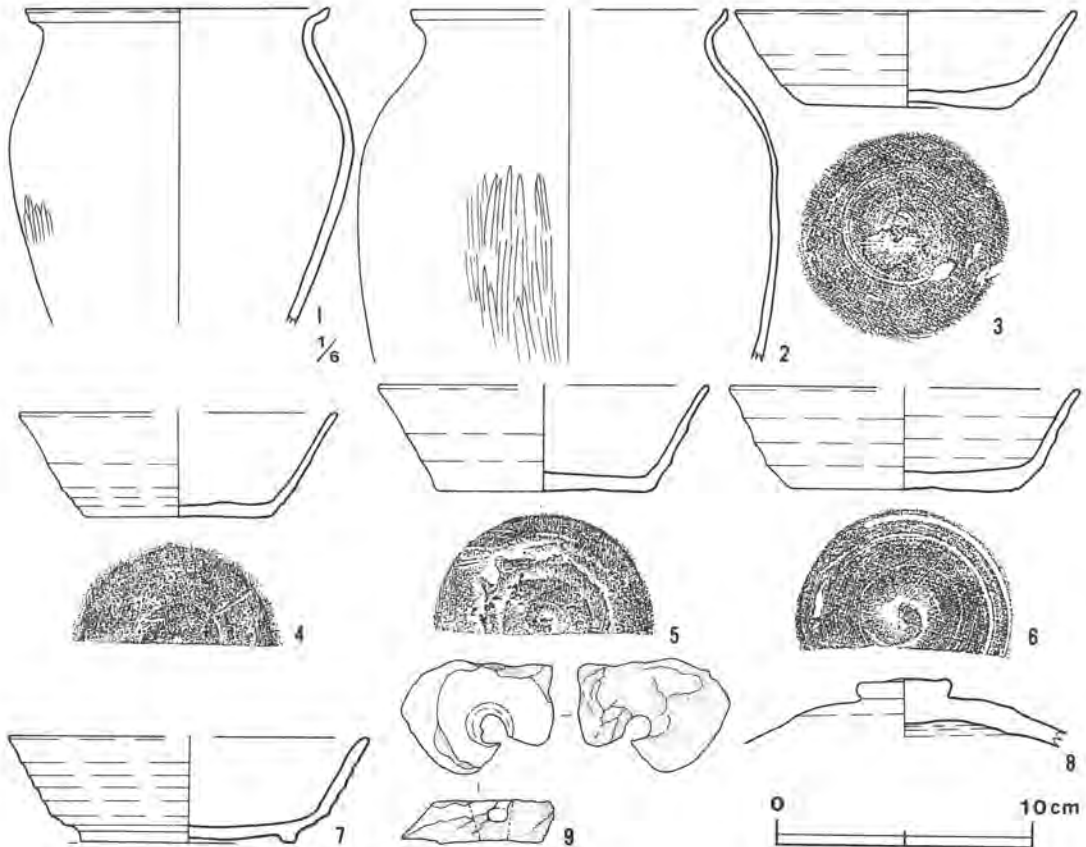
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第253図 1	甕形土器	A 24.2	胴部は丸く張り、口縁部は「く」の字状に開き、端部は上方につまみ出している。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面上位ナデ、中位縦位のヘラ磨き。	砂粒・礫・雲母にぶい橙色普通	P853 40%
	土師器	B (25.0)				
2	甕形土器	A (25.0)	胴部は丸く張り、口縁部は短く外反する。口縁外端部に凹線をめぐらしている。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒・雲母・礫にぶい橙色普通	P854 30%
	土師器	B (27.8)				
3	坏形土器 土師器	A 13.5	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。	水挽き成形。底部回転ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・礫にぶい褐色普通	P856 95%
		B 3.8				
		C 8.0				
4	坏 須恵器	A (12.6)	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。	水挽き成形。底部手持ちヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂 灰色 普通	P857 45%
		B 4.1				
		C 7.4				
5	坏 須恵器	A (13.0)	底部は平底で、体部は外傾気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。	水挽き成形。底部手持ちヘラ削り。体部内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂 灰色 普通	P858 50%
		B 4.2				
		C 8.6				
6	坏 須恵器	A (13.8)	底部は平底で、体部はやや内彎気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。	水挽き成形。底部回転ヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒・細砂・礫 黄灰色 普通	P859 50%
		B 4.1				
		C 9.0				
7	高台付坏 須恵器	A (14.3)	体部は外傾気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。高台は短く外下方へのびる。	水挽き成形。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。ロクロ回転方向右。	細砂 灰黄色 普通	P855 40%
		B 4.2				
		D 8.5				
		E 0.4				
8	蓋 須恵器	B (2.8)	天井部中央にやや凹んだつまみが付く。天井部は丸い。	水挽き成形。天井部の頂部は回転ヘラ削り。ロクロ回転方向右。	砂粒 褐灰色 普通	P860 60%
		G 3.7				
		H 0.8				

第137号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第235図 9	紡錘車	DP101	—	6.0	1.7	(34.6)	孔径1.0cm, にぶい橙色, 40%

どが破片で、まとまった器形になったものは数少ない。中央部の床面直上から伏せた状態で坏形土器（第253図3）と須恵器の坏（第253図4）が出土している。また、須恵器も中央部から西コーナー部寄りの床面直上から坏（第253図5）が出土し、さらに、同所の覆土下層から高台付坏（第253図7）・坏（第253図6）・蓋（第253図8）が出土している。その他、同所から土製の紡錘車（第253図9）も出土している。

本跡は、出土遺物から奈良時代の真間期に比定されるものと思われる。



第253図 第137号住居跡出土遺物実測図

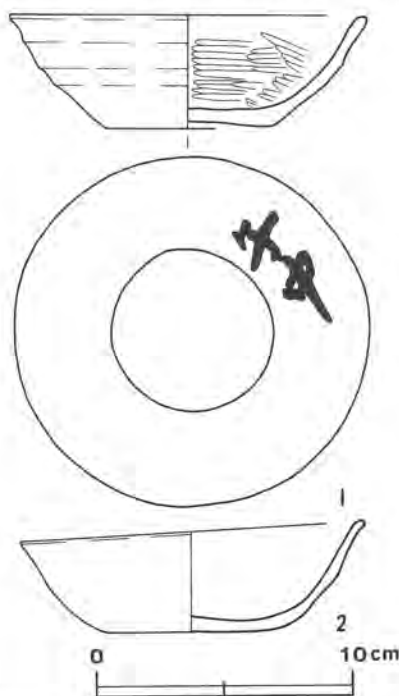
第138号住居跡（第255図）

本跡は、G3g3区を中心に確認され、第124号住居跡の南東側9.5m、第127号住居跡の南西側8.4mに位置している。本跡の中央から南側にかけて第1号堀と重複しており、本跡は第1号堀によって切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、重複や攪乱のため規模・形状等は不明である。残存している北壁の長さは3.25mで、北東コーナー部は隅丸形を呈し、主軸方向はN-16°-Wを指すものと思われる。壁高は34cm、壁

は締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部の大部分は攪乱されている。残存している袖部の一部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。調査した部分は、長さ100cm・幅130cm、壁外へ80cmほど掘り込んでいる。燃烧部は床面を10cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には粘土小ブロック・粘土粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・灰・ローム粒子を含む暗褐色土・褐色土・黒褐色土・黄褐色土が入り混じって堆積している。カマドの手前も焼土が覆っている。ピットは1か所検出され、長径30cm・短径25cmの楕円形を呈し、深さは54cmの規模である。規模・位置から支柱穴の一部と思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱されていたり、重複しているため堆積状況は不明であるが、



ローム小ブロックを含む暗褐色土が堆積し、軟らかい状態である。

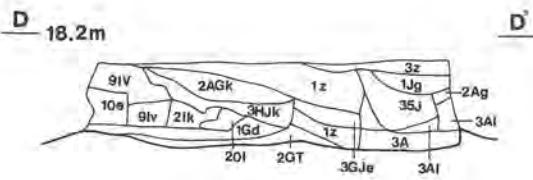
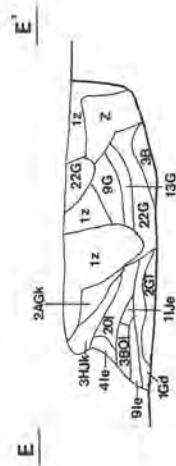
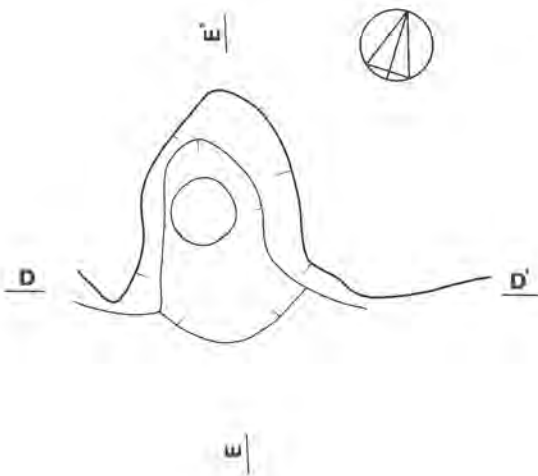
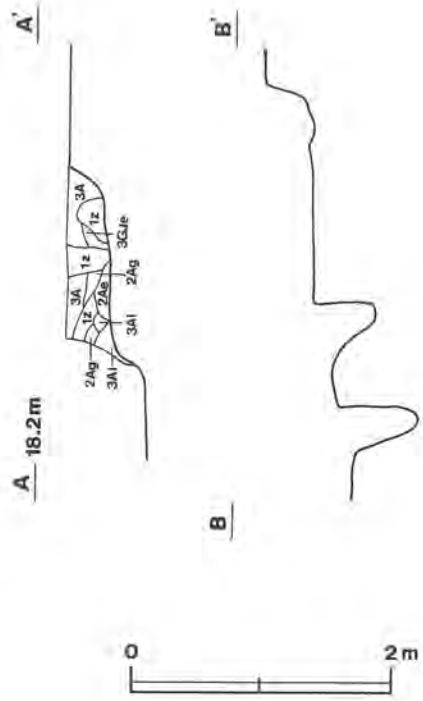
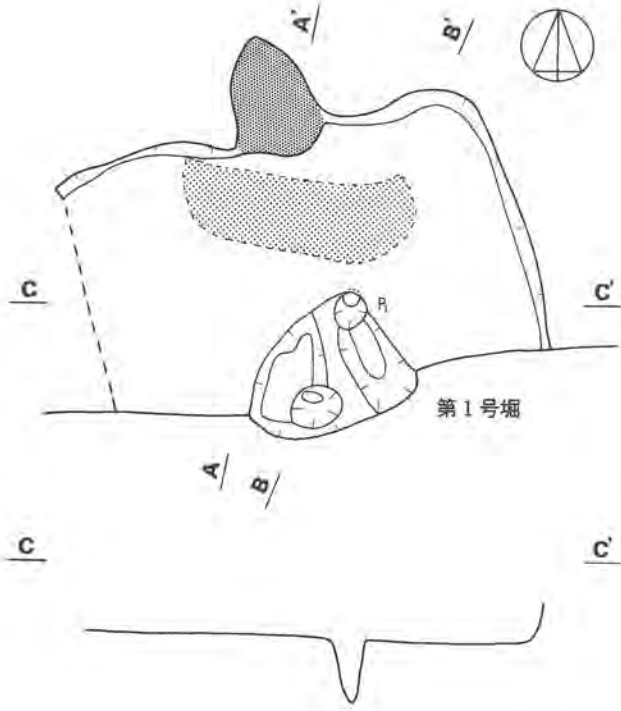
遺物は、土師器を主に、須恵器が出土している。土器はほとんど破片で、覆土下層から出土している。カマドの手前の覆土下層から土師器の坏形土器2点（第254図1・2）が出土しているだけである。須恵器も破片で、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第254図 第138号住居跡出土遺物実測図

第138号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第254図 1	坏形土器 土師器	A 14.0	底部は平底で、体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は僅かに外反して端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転ヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・礫・雲母 浅黄褐色 普通	P861 体部外面墨書 「子中」 100%
		B 4.4				
		C 6.5				
2	坏形土器 土師器	A 13.5	底部は平底で、体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	水挽き成形。 底部手持ちヘラ削り。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P862 90%
		B 4.5				
		C 6.0				



第255图 第138号住居跡実測图

第139号住居跡（第256図）

本跡は、H3f₁区を中心に確認され、第141号住居跡の西側6.5m、第136号住居跡の南西側16.5mに位置している。本跡の西壁の中央部は第815号土坑と接し、南西コーナー下では第816号土坑と重複している。本跡はいずれの土坑にも切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

平面形は、長軸3.50m・短軸2.90mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-88°-Wを指している。壁高は25cmで、壁は縮まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅15cm・深さ5cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。カマドの手前から南壁・西壁下にかけての範囲は、特に硬く踏み固められている。カマドは東壁南寄りに付設され、天井部・袖部は崩壊しており、残存している袖部の一部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。調査した部分は、長さ175cm・幅90cm、壁下へ140cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて焼土化している。カマド内の覆土には木炭粒子を含む暗赤褐色土や黒褐色土が堆積している。ピットは検出できなかった。

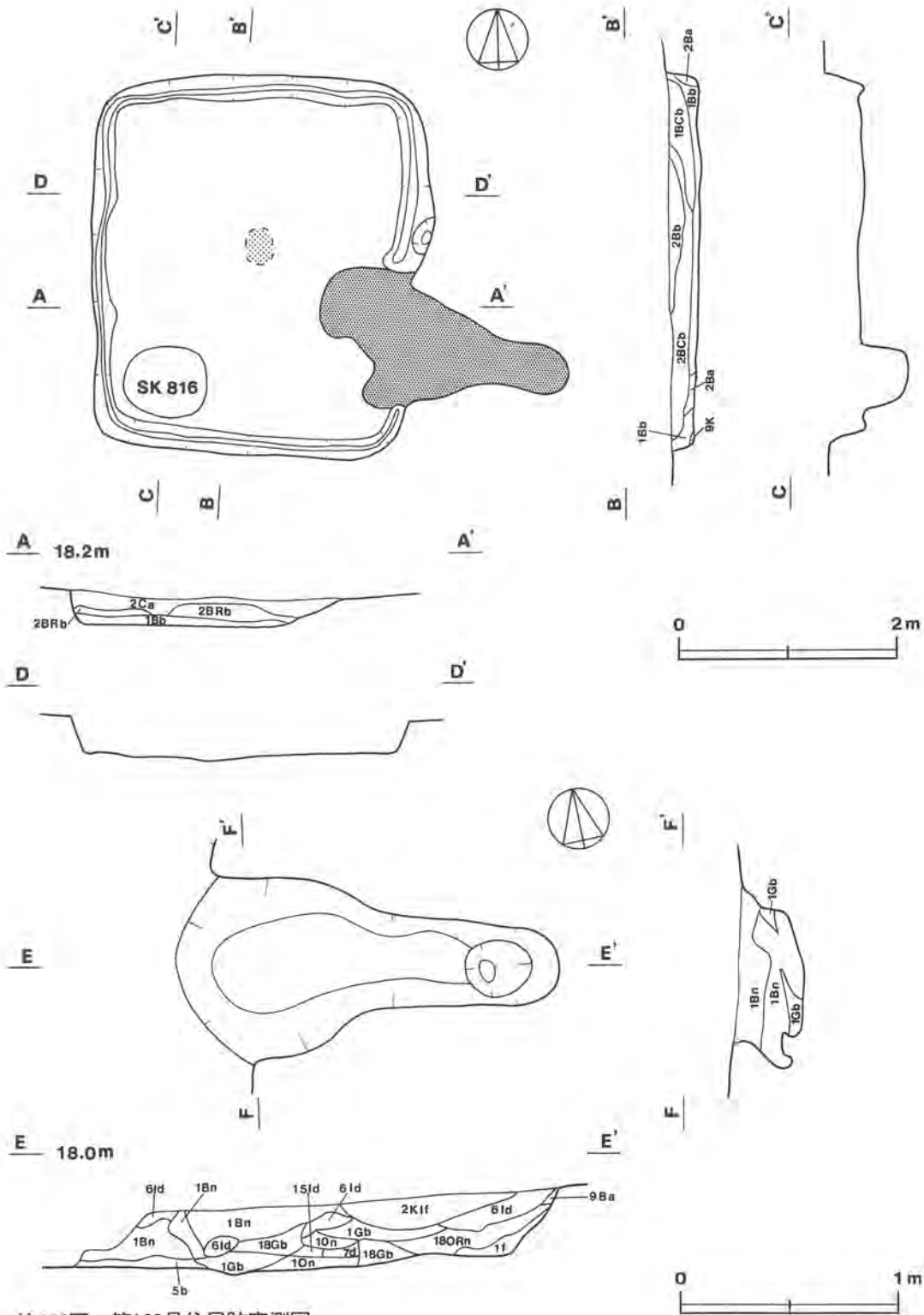
覆土は、上層にローム粒子を多量、木炭粒子を少量含む暗褐色土、下層にローム粒子を多量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、土師器が出土している。中央部の床面直上から高台付坏形土器（第257図1）、南壁中央部の床面直上から坏形土器（第257図2）が出土し、カマドの燃焼部から伏せた状態で坏形土器（第257図4）と鉢形土器（第257図3）も出土している。

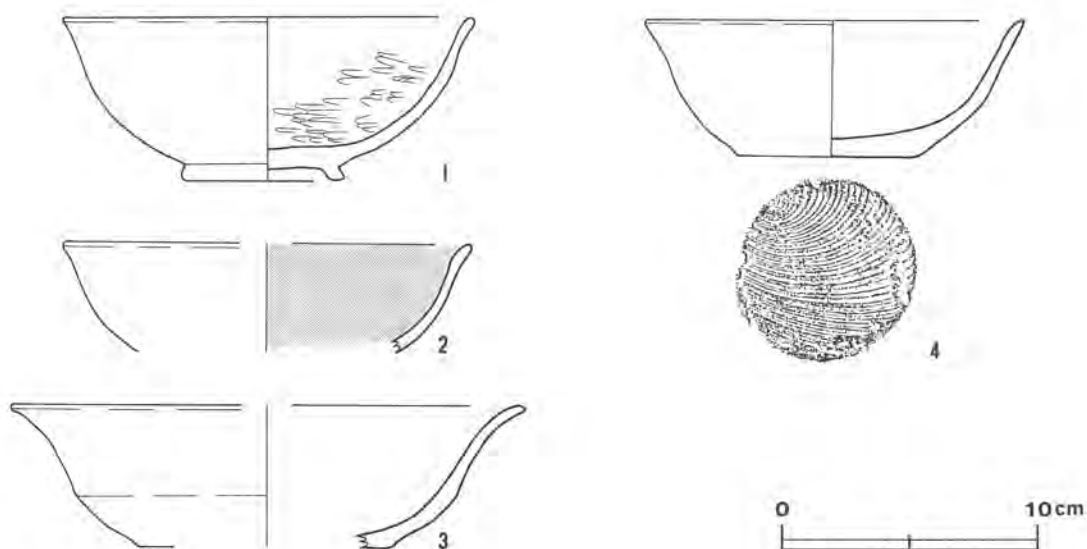
本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。

第139号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第257図 1	高台付坏形土器 土師器	A 16.0 B 6.5 D 6.4 E 0.5	体部は内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。高台は外下方へのび、端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転へら削り後、高台貼り付け。 高台内・外面横ナデ。 体部内・外面へら磨き。	砂粒・礫・石英 黒褐色 普通	P864 60%
2	坏形土器 土師器	A (16.0) B (4.3)	仕部は内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。	水挽き成形。 体部内・外面へら磨き。	砂粒 にぶい橙色 普通	P865 内面黒色処理 10%
3	鉢形土器 土師器	A (20.0) B 5.6 C (9.8)	底部は平底で、胴部は内彎しながら大きく開き、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P867 20%
4	坏形土器 土師器	A 14.8 B 5.6 C 7.0	底部は平底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内面ナデ、外面横ナデ。	砂粒 外面黒褐色、内面にぶい橙色 普通	P863 95%



第256图 第139号住居跡実測図



第257図 第139号住居跡出土遺物実測図

第140号住居跡（第258図）

本跡は、H3c1区を中心に確認され、第136号住居跡の南東側4.7m、第141号住居跡の北側7.0mに位置している。

平面形は、本跡の中央から東側がエリア外にかかっているため不明確である。調査した部分から南北の長さは4.85mで、方形状を呈し、主軸方向はN-7-Wを指している。壁高は70cmで、壁は縮まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅35cm・深さ10cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部の一部は崩壊しており、残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築されている。カマドの東側がエリア外にかかっているため、平面形・規模等は不明確である。燃焼部は床面を10cmほど掘り込み、火床は熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には焼土粒子を中量、木炭粒子を少量含む灰褐色土が堆積している。ピットは1か所検出され、長径35cm・短径25cmの楕円形を呈し、深さは50cmで、位置から支柱穴の一部と思われる。

覆土は、上層がトレンチャーによって攪乱を受けており、中・下層は自然堆積の様相を呈し、多量のローム粒子、少量の焼土粒子・木炭粒子・オレンジパミスを含む黒褐色土や暗褐色土で、軟らかい状態である。

遺物は、土師器といっしょに、須恵器、鉄製品、土製品が出土している。土師器は、出土量が最も多い割には、まとまった器形になったものは少なく、中央部の床面直上から横位で坏形土器（第259図2）や甕形土器（第259図1）が出土しているだけである。その他、同所の覆土下層から管状土錘（第259図3）が出土している。須恵器も同所付近から出土しているが、破片でまとまっ

た器形にはならなかった。

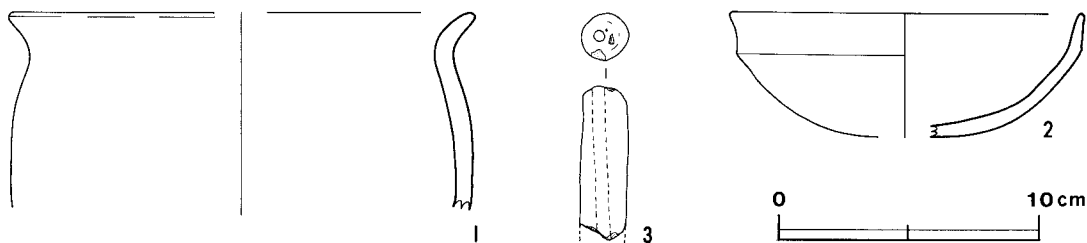
本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第140号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第259図 1	甕形土器 土師器	A (18.2) B (8.0)	胴部はやや張り、口縁部は短く外反しながらか開く。口縁部と胴部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ヘラナデ、外面縦位のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P868 10%
2	坏形土器 土師器	A 13.9 B (4.9)	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ナデ、外面ヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 にぶい橙色・褐灰色 普通	P869 60%

第140号住居跡出土土製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第259図 3	管状土錘	DP95	6.1	1.9	—	(20.5)	孔径0.5cm, にぶい赤褐色, 80%



第259図 第140号住居跡出土遺物実測図

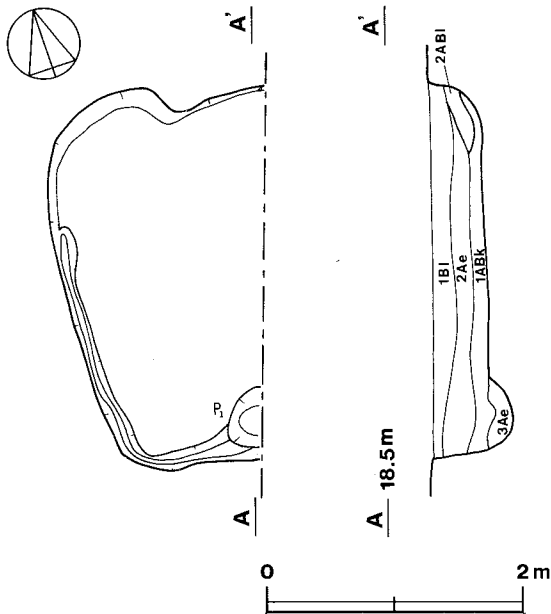
第141号住居跡 (第260図)

本跡は、H3f₃区を中心に確認され、第139号住居跡の東側6.8m、第140号住居跡の南側6.7mに位置している。

平面形は、本跡の中央から東側がエリア外にかかっているため不明確である。調査した部分から南北の長さは2.65mで、南西コーナーは隅丸形を呈している。壁高は20cmで、壁は締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。西壁下から南西コーナーにかけて、上幅13cm・深さ5cmの壁溝が掘られている。床面は平坦で、ロームがよく踏み固められている。南壁際にピットが1か所検出され、径50cm・深さ20cmで、位置から出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、上層にローム粒子を少量含む黒褐色土、中層にロームブロックを中量含む暗褐色土、下層にローム小ブロック・ローム粒子を少量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は、西壁寄りの覆土中層から土師器の破片1点が出土しているだけであるが、出土状況が



第260図 第141号住居跡実測図

ら見て、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、時期判定する出土遺物がなく、また、規模も明確にできなかったので時期不明である。

第142号住居跡（第261図）

本跡は、H2c3区を中心に確認され、第144号住居跡の北側14.7mに位置している。

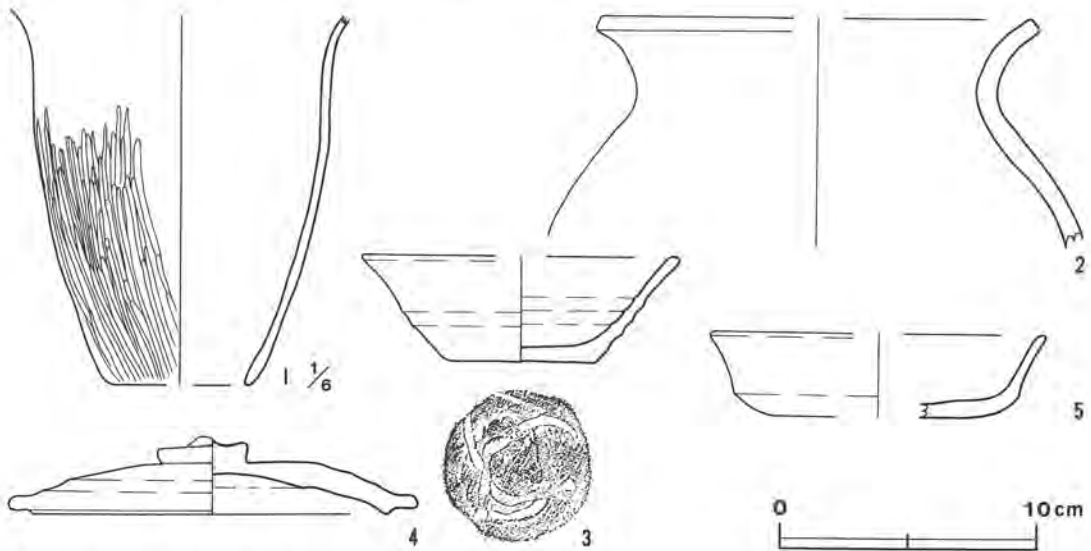
平面形は、一辺5.4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-12°-Wを指している。壁高は70cmで、壁は締めりのあるロームで、トレンチャーによって攪乱されている部分を除いてはほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅18cm・深さ5cmほどの壁溝がカマドを除いて周回している。床面はカマドの手前からピットの内側の範囲にかけて、凹凸がみられ、ロームが硬く踏み固められている。その他の床面もよく踏み固められ、平坦である。カマドは北壁中央部に付設され、天井部・袖部の一部は崩壊している。残存している袖部は山砂の混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ160cm・幅135cm、壁外へ45cmほど掘り込んでいる。カマド内の覆土には中量の焼土粒子が含まれている。ピットはP₁～P₅の5か所検出され、P₁・P₂・P₃・P₄は径25～30cm・深さ40～45cmで、配置から支柱穴と思われる。P₅は径27cm・深さ10cmで、カマドの反対側に位置することから出入口施設に関連するピットと思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱を受けている部分があるが、自然堆積の様相を呈し、上層にローム小ブロック・ローム粒子・オレンジパミス・炭化粒子を中量含む黒褐色土、中層にローム粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土、下層にローム小ブロックを少量含む暗褐色土、壁際にローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子を中量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は、本跡全域から多量の土器器のほかに、須恵器、弥生式土器片が出土している。これら

の大半は覆土中層から下層にかけて出土しており、ほとんどが破片である。土師器は、出土量が多い割には、まとまった器形になったものは少なく、中央部の覆土下層から甕形土器(第262図2)と甔形土器(第262図1)が出土しているだけである。須恵器も、カマドの手前の床面直上から伏せた状態で蓋(第262図4)が出土しており、また、中央部の覆土下層から坏2点(第262図3・5)が出土している。弥生式土器片は覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から奈良時代の真間期に比定されるものと思われる。



第262図 第142号住居跡出土遺物実測図

第142号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第262図 1	甔形土器 土師器	B (29.0) C 11.0	口縁部欠損。底部は正円状に抜ける。胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部内面ナデ、外面縦位のへら磨き。	砂粒・礫・雲母・長石 橙色 普通	P871 20%
2	甕形土器 土師器	A (16.8) B (9.0)	胴部は丸く張り、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内・外面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P870 10%
3	坏 須恵器	A (12.5) B 4.2 C 6.0	底部は平底で、体部はほぼ直線的に外上方へのび、口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁端部は丸い。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて手持ちへら削り。 ロクロ回転方向右。	細砂・雲母 灰色 普通	P872 70%

図版 番号	器 種	法量()	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
4	蓋 須 恵 器	A 16.0	つまみは中央が外周よりも高く、 外周部が接合部よりも大きい。天 井部は外下方へなだらかにのび、 口縁部は外反気味に開く。口縁部 にはかえりがみられる。	水挽き成形。 天井部付近は回転ヘラ削り。 口縁部内・外面とつまみ横ナ デ。 ロクロ回転方向右。	細砂・礫 灰白色 普通	P874 100%
		B 3.1				
		G 3.5				
		H 1.1				
5	坏 須 恵 器	A (13.0)	底部は平底で、体部は内彎気味に 外上方に立ち上がり、口縁部は僅 かに外反する。	水挽き成形。 底部から体部下端にかけて回転 ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。	細砂 灰黄色 普通	P873 20%
		B 3.3				
		C (9.5)				

第143号住居跡（第263図）

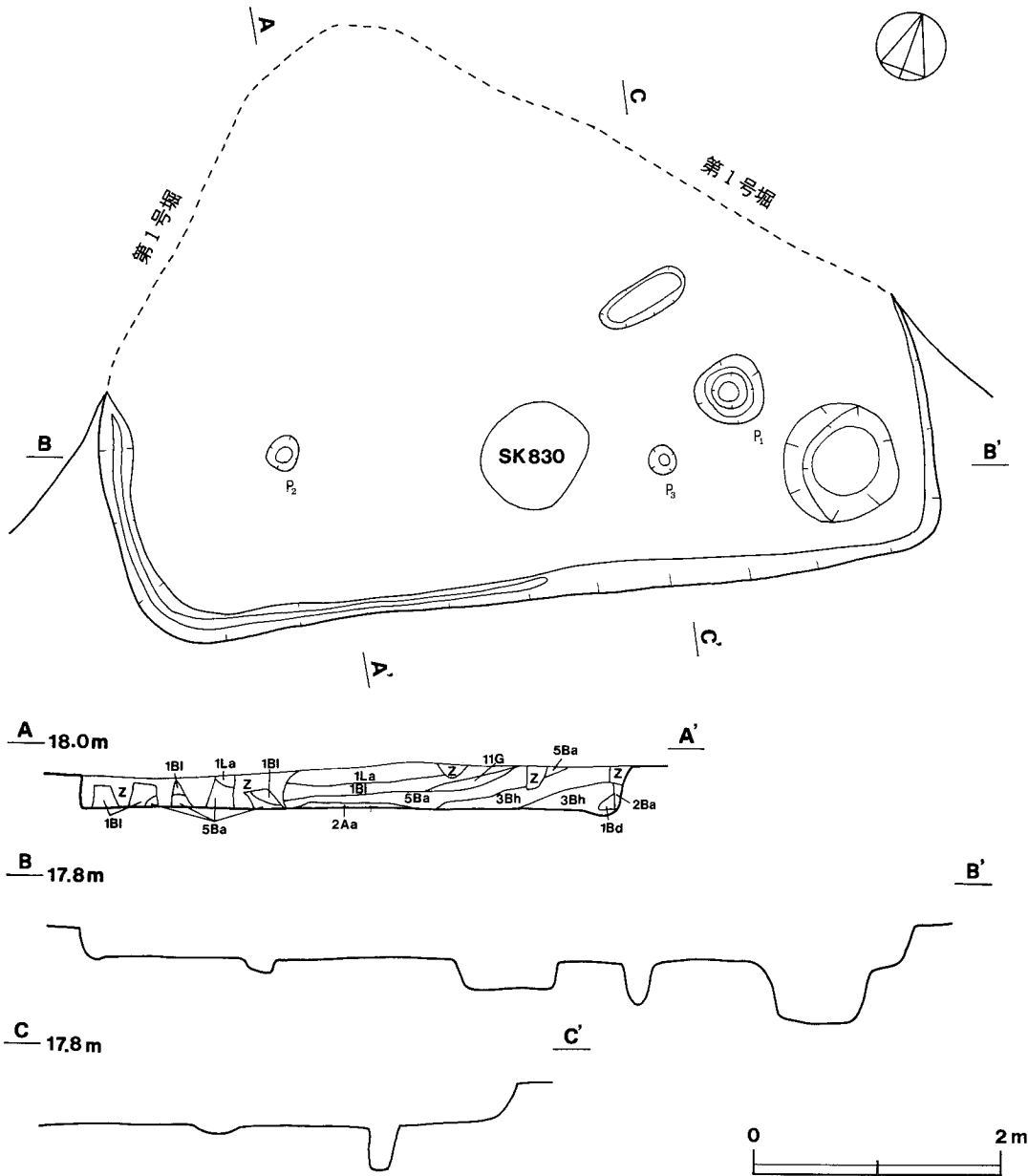
本跡は、G2i₀区を中心に確認され、第135号住居跡の西側8mに位置している。本跡の中央から北側にかけて第1号堀と重複しており、本跡は第1号堀によって切られていることから、本跡の方が古い遺構である。

本跡は、北側が重複のため切られており、平面形・規模等の詳細は不明である。調査した部分から南壁の長さは6.6mで、南東・南西コーナーは隅丸形を呈し、長軸方向はN-29°-Wを指している。壁高は32cmで、壁はトレンチャーによって攪乱されているが、残存している壁は締めりのあるロームで垂直に立ち上がっている。南壁西側下から西壁南側にかけて、上幅16cm・深さ3cmの壁溝が周回している。床面もトレンチャーによって帯状に攪乱されているが、残存している床面は、ロームがよく踏み固められている。規模・位置から貯蔵穴と思われる施設が南東コーナー下に1か所検出された。貯蔵穴の平面形は長径100cm・短径90cmの楕円形を呈し、床面から底面までの深さは45cmで、覆土は黒褐色土が堆積している。ピットはP₁~P₃の3か所検出した。P₁・P₂は長径60・30cm・短径55・20cmの楕円形を呈し、深さは15・10cmである。配置から支柱穴と思われる。P₃は径20cm・深さ34cmで、位置から出入口施設に関連するピットと思われる。

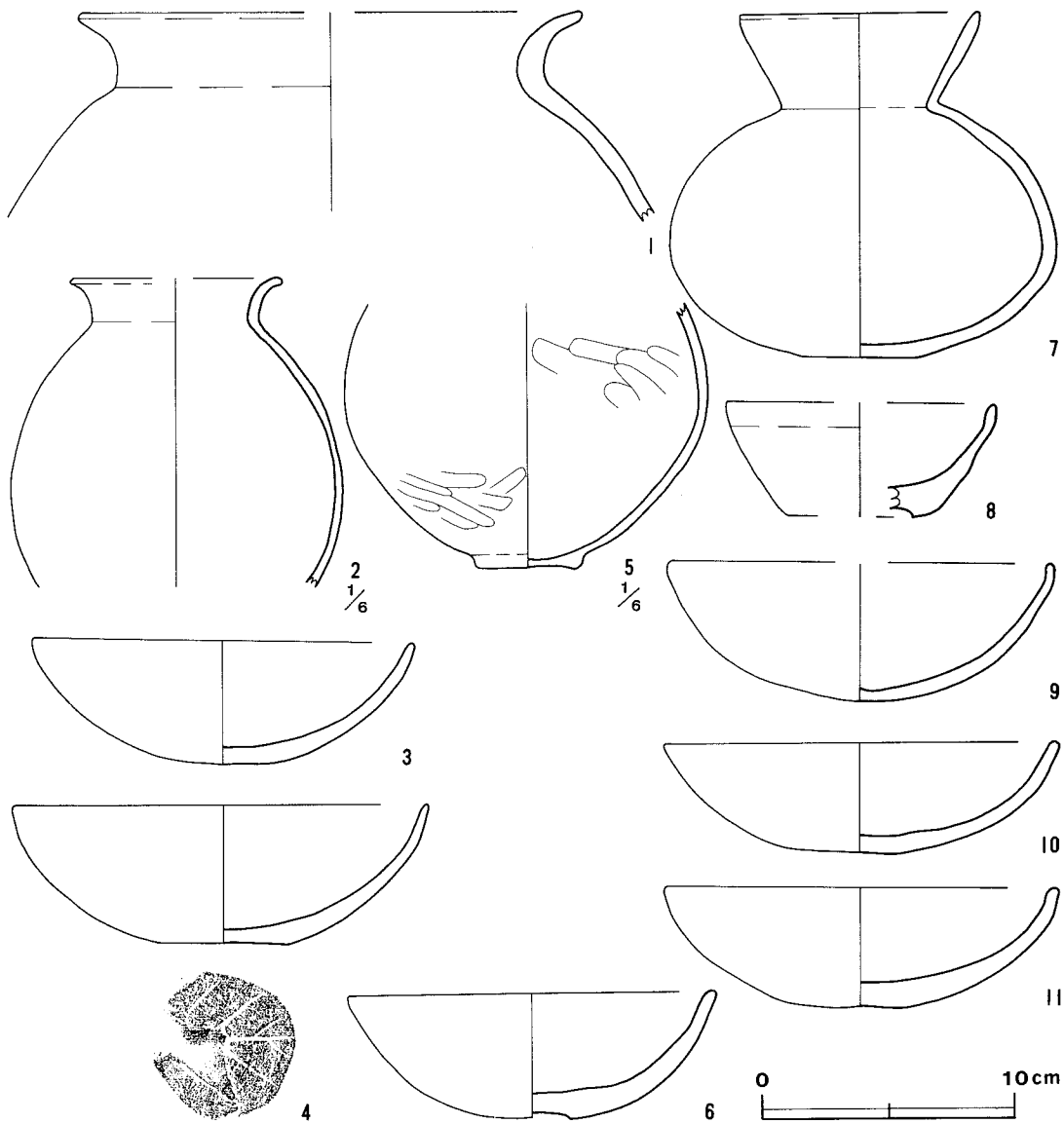
覆土は、トレンチャーによって攪乱されている部分はあるが、自然堆積の様相を呈し、上層にローム粒子多量・焼土粒子・炭化粒子・オレンジパミスを少量含む黒褐色土、下層にローム粒子・オレンジパミスを中量含む黒色土、壁際にローム粒子・オレンジパミスを多量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は、土師器を主に、僅かに須恵器が出土している。土器の多くは破片である。南壁西寄りの床面直上から埴形土器（第264図7）・甕形土器（第264図5）、南壁東寄りから中央部にかけての床面直上とP₁の覆土中から横位で坏形土器4点（第264図3・6・10・11）・甕形土器片（第264図2）が出土している。その他、中央部の覆土下層から坏形土器3点（第264図4・8・9）が出土し、甕形土器の口縁部が出土している。須恵器も同所から出土しているが破片で、まとまった器形にはならなかった。

本跡は、出土遺物から古墳時代の五領期に比定されるものと思われる。



第263图 第143号住居跡実測图



第264図 第143号住居跡出土遺物実測図

第143号住居跡出土土器観察表

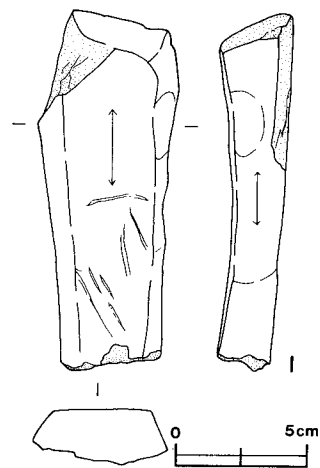
図版 番号	器 様	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第264図 1	甕形土器	A (20.6)	胴部は丸く張り、口縁部は「コ」 の字状を呈し、端部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面縦位のヘ ラ削り。	砂粒 明赤褐色 普通	P876
	土師器	B (8.6)				15%
2	甕形土器	A (17.2)	胴部は丸く張り、口縁部は外反し ながら立ち上がり、端部は丸い。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P875
	土師器	B (25.0)				30%

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	坏形土器 土師器	A 15.4 B 5.0	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 赤色 普通	P884 80%
4	坏形土器 土師器	A 16.8 B 5.5 C 5.4	底部は平底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラナデ、外面ヘラ削り。	砂粒 外面赤黒色、内面赤褐色 普通	P882 底部木葉痕 70%
5	壜形土器 土師器	B (21.5) C 8.5	底部は平底で突出し、胴部はほぼ球形を呈する。	胴部内・外面ヘラ削り。	砂粒・礫・長石 浅黄橙色 普通	P878 50%
6	坏形土器 土師器	A 14.8 B 5.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部内面ヘラナデ、外面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・礫 にぶい橙色 普通	P885 90%
7	埴形土器 土師器	A 9.5 B 14.0 C 4.4	底部は平底で、胴部は大きく張った扁平な球形をなす。口縁部は直線的に外上方へ立ち上がり、先端部はやや内彎する。	口縁部内面横ナデ、外面横ナデ後、雑なヘラ磨き。 胴部内面ナデ、外面ヘラ削り後、ナデ。	砂粒・雲母・礫 浅黄橙色 普通	P877 90%
8	坏形土器 土師器	A (10.8) B 4.5 C (6.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内・外面ナデ。	砂粒・長石粒 浅黄橙色 普通	P879 40%
9	坏形土器 土師器	A (15.5) B 5.6	底部は中央が凹んだ丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて外上方に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面ヘラナデ。	砂粒・礫・雲母 褐灰色 普通	P880 45%
10	坏形土器 土師器	A 15.8 B 4.3	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P881 60%
11	坏形土器 土師器	A 15.7 B 4.8	底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P883 90%

第144号住居跡（第266図）

本跡は、H2h₁区を中心に確認され、第142号住居跡の南側14.7m、第145号住居跡の北西側8.5mに位置している。

本跡は、北西側がエリア外に延びているため、平面形・規模等は不明確である。調査した部分から東壁の長さ4.80m・南壁の長さ4.75mの方形を呈し、主軸方向はN-13°-Wを指すものと思われる。壁高は70cmで、壁はトレンチャーによって攪乱されている部分を除いて、締まりのあるロームで垂直に立ち上がっている。壁下には、上幅10cm・深さ4cmの壁溝がカマドを除いて周回している。床面もトレンチャーによって帯状に攪乱されているが、残存している床面は、ロームがよく踏み固めら



第265図 第144号住居跡出土遺物実測図

れている。カマドは北壁中央部に付設されているが、西側がエリア外に延びているため、平面形・規模等は不明瞭である。調査した部分では、天井部・袖部の一部がトレンチャーによって攪乱され崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ115cm・幅140cm、壁外へ20cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、熱を受けて赤化している。カマド内の覆土には中量の焼土粒子が含まれている。ピットはP₁～P₇の7か所検出した。P₁・P₂・P₃が配置から主柱穴と思われる。いずれも長径25～30cm・短径20～25cmの楕円形を呈し、深さは63・66・45cmである。P₅は径20cm・深さ17cmの規模で、カマドの反対側に位置し、周囲が硬く踏み固められていることから出入口施設に関連するピットと思われる。P₄・P₆・P₇は長径25cm・短径18～20cmの楕円形を呈し、深さは18・11.5・13cmで、規模や配置から補助柱穴と思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱されているが、自然堆積の様相を呈し、上層にローム小ブロック・ローム粒子を中量含む黒褐色土、中層にローム小ブロック・ローム粒子を中量含む暗褐色土、下層にローム小ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロックを中量含む黒褐色土、壁際にローム粒子・焼土粒子中量、ローム小ブロックを微量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は、土師器の坏形土器や甕形土器片のほかに、須恵器片、鉄片が出土している。これらは破片で、まとまった器形にはならなかった。唯一、実測できたものは、南東コーナー部寄りの床面直上から出土している砥石（第265図1）だけである。

本跡は、出土遺物から古墳時代の鬼高期に比定されるものと思われる。

第144号住居跡出土石製品解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第265図 1	砥石	Q38	14.2	5.6	2.3	239.8	凝灰岩

第145号住居跡（第267図）

本跡は、I2b₁区を中心に確認され、第144号住居跡の南東側9m、第146号住居跡の北東側3.7mに位置している。本跡の中央から東寄り第859・860号土坑と、南西コーナー寄り第861号土坑と重複しており、土層断面からいずれも本跡の床面を切っているため、本跡が最も古い遺構である。

平面形は、長軸6.4m・短軸5.0mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-42°-Wを指している。壁高は20～35cmで、壁はトレンチャーによって攪乱されているが、残存している壁はロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面もトレンチャーによって帯状に攪乱されているため凸凹になっている。残存している床面はロームでよく踏み固められている。ピットはP₁～P₂₃の23か所検出した。P₁・P₂・P₃・P₄・P₅が配置から主柱穴と思われる。いずれも長径35～45cm・短径30～40cmの

楕円形を呈し、深さは50・53・49・55・40cmである。P₆～P₂₂は支柱穴に沿って縦横に並んでおり、P₆～P₁₁は長径25～40cm・短径15～30cmの楕円形を呈し、深さは40～60cmである。P₁₂～P₂₂は長径30～40cm・短径15～35cmの楕円形を呈し、深さは16～40cmである。P₆とP₁₇、P₇とP₁₆、P₁₃とP₁₀、P₁₅とP₁₂、P₉とP₁₈が対の関係になっていることから、これは補助柱穴と思われる。P₂₃は径60cm・深さ24cmの規模で、性格は不明である。また、P₁₀・P₁₂付近やP₄・P₅の北側から極少量の焼土を検出しているが、状況から炉跡ではないと思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱されているため堆積状況は不明で、多量のローム粒子、少量の木炭粒子・焼土粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が混じり、堆積している。

遺物は、本跡全域から縄文式土器を主に、石器、須恵器が出土している。縄文式土器は、ほとんど破片で、まとまった器形になったものは、中央部の床面直上から深鉢形土器(第268図1)が出土しているだけである。その他に、石皿(第268図10)、打製石斧(第268図8)・磨石(第268図9)などが出土している。

第268図2～7は本跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。2・3・4は口縁部片である。2は口縁端部に刺突文と3条の平行沈線を交互に巡らし、その下に弧状文が施されている。3は沈線による波状文を巡らし、その下に爪形文が施されている。4は沈線による木葉状文が施されている。5・6・7は胴部片である。5は木葉状文の間に円形竹管文が施されている。6は波状貝殻文が施されている。7は爪形文が施されている。須恵器も、覆土上層から出土しているが、周囲からの流れ込みと思われる、本跡には伴わないものと思われる。

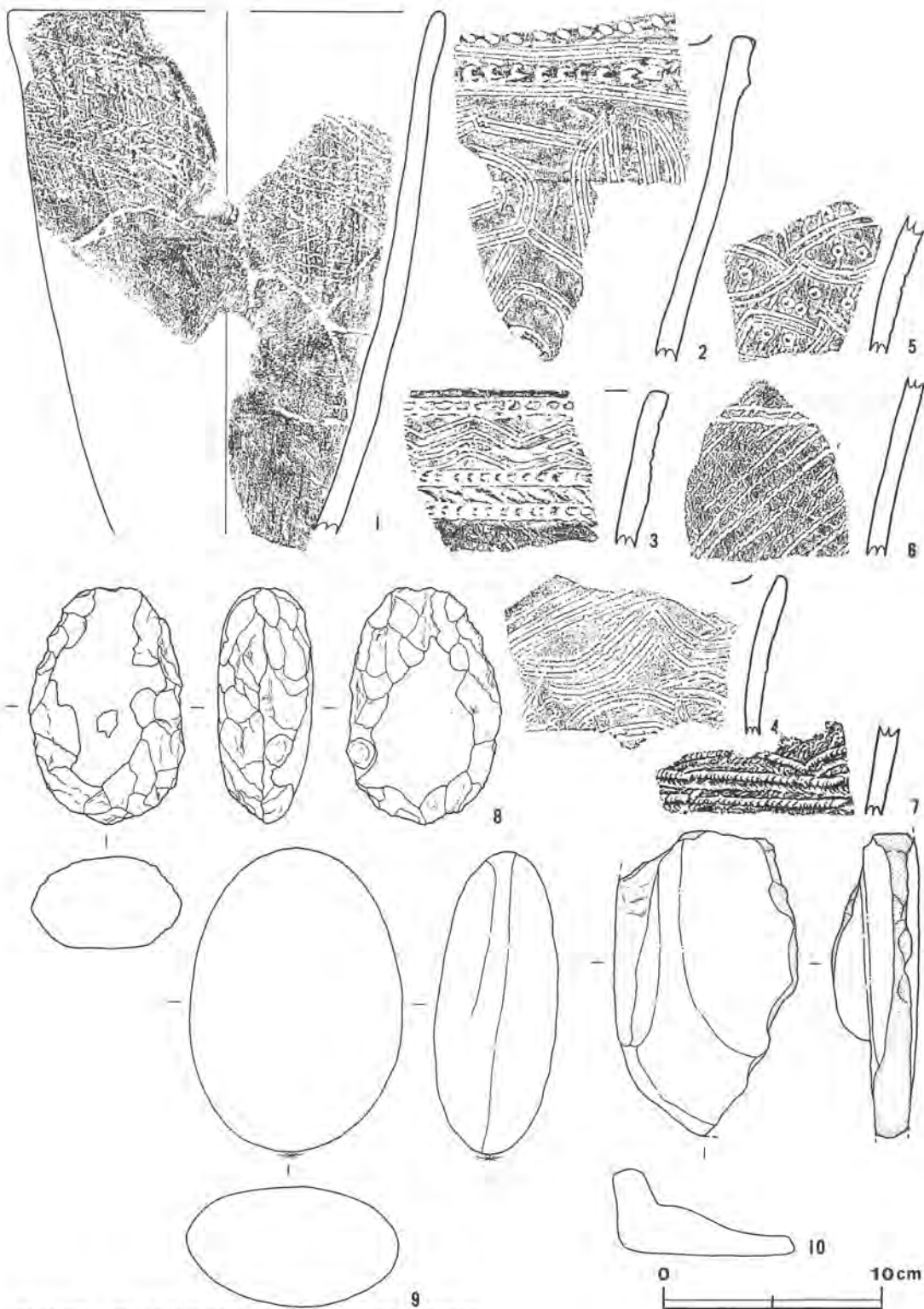
本跡は、出土遺物から縄文時代の浮島式期に比定されるものと思われる。

第145号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第268図 1	深鉢形土器 縄文式土器	A (21.8) B (24.1)	胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は丸味を帯びた平口縁である。胴部中位から口縁部にかけて、竹串状の工具による沈線を横位・斜位に施し、さらに、斜方向から刺突を施して無造作な文様帯を構成している。	砂粒・礫 橙色 普通	P886 50%

第145号住居跡出土石器解説表

図版番号	名称	台帳番号	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
第268図 8	打製石斧	Q2	10.9	7.3	4.3	408.4	流紋岩
9	磨石	Q12	14.1	9.8	5.6	1023.8	砂岩
10	石皿	Q19	14.1	8.5	4.0	229.8	安山岩



第268图 第145号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第146号住居跡（第270図）

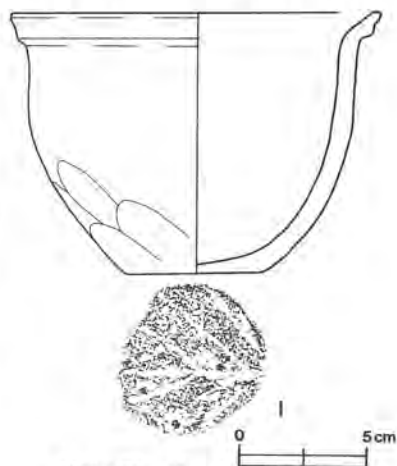
本跡は、Ild₀区を中心に確認され、第145号住居跡の南側4m、第144号住居跡の南側17.5mに位置している。

平面形は、長軸3.60m・短軸3.25mの隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-65°-Wを指している。壁高は54cmで、壁はトレンチャーによって攪乱されている部分を除いて、締まりのあるロームでほぼ垂直に立ち上がっている。床面もトレンチャーによって帯状に攪乱されているが、残存している床面はロームで、カマドの手前から南東壁下にかけての幅1.5m前後・長さ2.7mの範囲は硬く踏み固められている。カマドは北西壁中央部に付設されているが、トレンチャーによって攪乱されているため天井部・袖部の一部は崩壊している。残存している袖部は山砂を混ぜた粘土で構築され、内側は熱を受けて焼土化している。調査した部分は、長さ95cm・幅115cm、壁外へ25cmほど掘り込んでいる。燃焼部は床面を5cmほど掘り込み、火床は熱を受けて暗赤褐色を呈している。カマド内の覆土には多量の焼土粒子が含まれている。ピットは1か所検出され、径27cm・深さ18cmの規模で、カマドの反対側に位置し、周囲が硬く踏み固められていることから出入口施設に関するピットと思われる。

覆土は、トレンチャーによって攪乱されているため堆積状況は不明確で、ローム粒子中量、木炭粒子少量を含む暗褐色土を主体とし、下層にハードローム小ブロックを極少量含み、軟らかい状態である。

遺物は少なく、土師器のほかに、須恵器、縄文式土器が出土している。これらはほとんど破片で、器形の窺えるものは、中央部の床面直上から土師器の鉢形土器（第269図1）が横位で出土しているだけである。縄文式土器片は覆土上層から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。

本跡は、出土遺物から平安時代の国分期に比定されるものと思われる。



第269図 第146号住居跡
出土遺物実測図

第146号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第269図 1	鉢形土器 土師器	A 14.4 B 10.3 C 5.0	底部は平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 胴部内面ナデ、外面上位ナデ、中・下位縦位のヘラ削り。	砂粒・礫・雲母 橙色・黒褐色 普通	P887 底部木葉痕 95%

第147号住居跡（第271図）

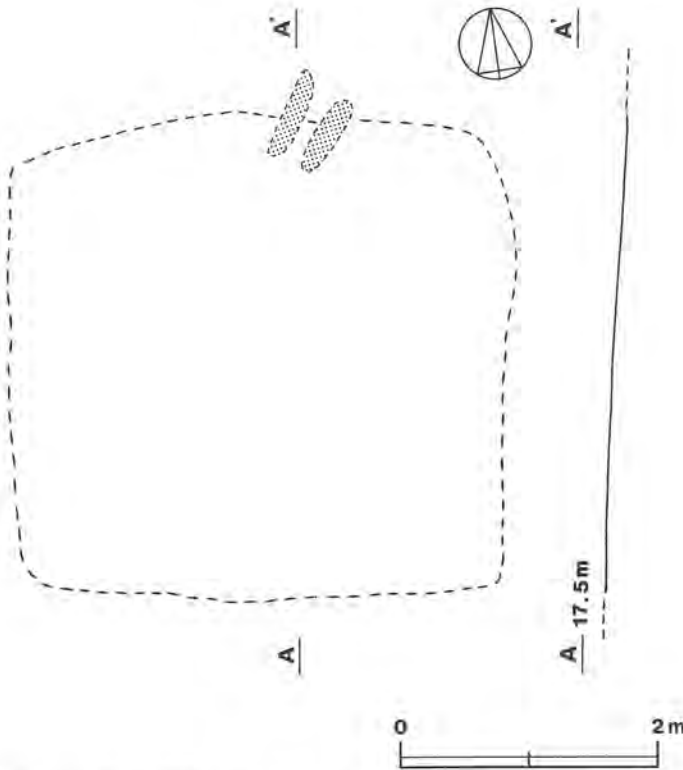
本跡は、F2i₀区を中心に確認され、第119号住居跡の北西側に隣接し、第118号住居跡の西側4.8mに位置している。

本跡は、表土除去の際、削平してしまったため床面しか検出できず、平面形・規模の詳細は不明である。検出できた床面の範囲は東西3.9m・南北3.9mで、方形状を呈し、主軸方向は不明である。床面はロームがよく踏み固められている。ピットは検出できなかった。北側の中央付近に極薄く焼土が堆積している。

覆土は、削平してしまったため検出できなかった。

遺物は、床面直上から石1点が出土しているだけである。

本跡は、時期判定する出土遺物がなく、規模も明確にできなかったので時期は不明である。



第271図 第147号住居跡実測図

表2 住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規 模		床面	主柱 穴数	炉・ カマド	覆土	出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							
1	A5h2	N-29°-W	(隅丸方形)	(5.80)×(5.35)	3~7	平坦	4	カマド	攪乱	石		
2	A5j3	N-1°-W	(隅丸方形)	5.8×(5.8)	41	やや 起伏	2	カマド	自然	土師器・石製品	IV	
3	A4i0	N-7°-W	隅丸方形	6.7×6.7	10~40	平坦	4	カマド	自然	土師器・土製品 石製品	V	
4	A4g9	N-1°-W	隅丸長方形	3.30×2.75	10~20	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器	X	
5	A4f8	N-5°-E	(長方形)	5.3×(4.5)	28	平坦		カマド	自然	土師器・土製品	VII	SI6と重複
6	A4e8	N-10°-E	隅丸方形	3.55×3.50	9	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器 石製品	X	SI5と重複
7	A4e6	N-24°-E	方 形	4.4×4.2	35~60	平坦	4	カマド	自然	土師器・土製品	V	SI8・50と重 複
8	A4e5	(N-2°-E)	(方形)	(3.25)	45	平坦			自然	土師器・石製品	IV	SI7・50・SK72 と重複
9	A4g5	N-8°-E	方 形	5.1×5.0	10~45	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 縄文式土器	IV	SI99と重複
10	A4h7	(N-2°-E)	(方形)	3.9×(3.9)	11	凹凸	2		攪乱	土師器・須恵器		SK442・443・ 550と重複
11	B4c6	(N-8°-E)	(方形)	(3.45)×(3.45)	22	平坦	1		自然	土師器・鉄製品	X	SX1・SK2と 重複
12	B4c8	N-5°-E	隅丸方形	5.85×5.50	25~35	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	X	SK3・4・5・ 45と重複
13	B5b1	N-25°-E	方 形	3.5×3.4	31	平坦	1	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	X	SI14と重複
14	B5b2	N-21°-W	隅丸方形	5.2×5.2	52	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 石製品	VIII	SI13・15と 重複
15	B5c2	N-3°-E	隅丸長方形	6.0×4.8	55	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 陶器・鉄製品	X	SI14と重複
16	B4i0	N-7°-E	隅丸方形	3.3×3.2	22	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 縄文式土器	X	SI17・SK25 と重複
17	B4h0	N-7°-E	隅丸長方形	3.75×3.30	42	やや 起伏	1	カマド	自然	土師器・須恵器 縄文式土器・土製 品	XI	SI16・SK25 と重複
18	B4j9	N-13°-E	隅丸長方形	3.6×3.0	72	やや 起伏		カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	VIII	
19	C4b0	N-4°-E	(隅丸方形)	4.1×(4.1)	25	凹凸	2	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	X	
20	C4d9	N-32°-W	隅丸方形	5.3×5.0	28	平坦	4	炉	自然	土師器・須恵器・石製 品・鉄製品・縄文式土 器・弥生式土器	I	SI21と重複
21	C4e8	N-6°-E	隅丸長方形	3.8×3.2	65	平坦		カマド (2基)	自然	土師器・須恵器 鉄製品	X	SI20と重複
22	C4d7	N-4°-E	隅丸方形	3.95×3.85	15	凹凸	4	カマド	自然	土師器・須恵器 縄文式土器	X	SI32と重複
23	C4c7	N-20°-E	隅丸長方形	2.7×2.1	20	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器 弥生式土器	X	
24	C4h9	N-10°-W	(隅丸方形)	4.4×(4.4)	40	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器 陶器・鉄製品	X	SB2と重複
25	C4h0	(N-42°-E)	(隅丸方形)	4.7×(4.7)	65	平坦	2		自然	土師器・須恵器・土 器・縄文式土 器	V	
26	C4j9	N-2°-E	(隅丸長方形)	(3.5)×(2.5)	18	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	X	SI27と重複
27	C4j9					平坦			自然	土師器・須恵器		SI26・28と 重複
28	C4j8					平坦			自然	土師器・須恵器	X	SI27・29と 重複
29	C4j7	N-12°-W	(隅丸方形)	(4.0)	40	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	X	SI28と重複

住居跡番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模		床面	支柱 穴数	炉・ カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							
30	C4g4	N-4°-E	隅丸長方形	3.50×3.05	30	凹凸	1	カマド	自然	土師器・須恵器 縄文式土器	IX	SB4と重複
31	C4f4	N-21°-W	隅丸方形	5.15×4.90	55	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	IX	
32	C4c7	N-11°-E	隅丸長方形	5.5×4.6	15	平坦	6	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	X	SI22と重複
33	B4d0	N-12°-E	隅丸長方形	3.6×3.3	25	凹凸	4	カマド	自然	土師器・須恵器・ 縄文式土器・鉄製 品	IX	SI34・35・ SX1と重複
34	B4d0	N-15°-W	方形	5×5	47	凹凸	4	カマド	自然	土師器・須恵器・ 縄文式土器・土製 品	VI	SI33・35・ SY1と重複
35	B4c0	(N-24°-W)	(隅丸長方形)	5×(4)	15	平坦			自然	土師器・石製品	II	SI34・45と重 複
36	C4b8	N-16°-W	(方形)	(3.2)		平坦	4		攪乱			
37	C4i5			(3.45)	20	平坦			自然	土師器・須恵器		SI38と重複
38	C4i5	N-2°-E	(隅丸方形)	3.6×(3.6)	29	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器	IX	SI37・39と重 複
39	C4j6	N-8°-W	隅丸方形	(4.7)×4.6	45	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器・縄文式 土器・石製品・鉄製品	X	SI38・SY11と 重複
40	D4a1	N-7°-W	(隅丸方形)	2.6×(2.6)	35	やや 起伏		カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	X	SI41・42・43と 重複
41	D4a1	N-22°-W	(長方形)	(5.6)×(4.8)	20	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器・ 縄文式土器・土製 品・金属製品	X	SI40・43と重 複
42	D4a1					平坦						SI40・41・43 と重複
43	D4a1	N-15°-W	隅丸長方形	6.2×5.7	25~40	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	X	SI40・41・42 と重複
44	D3b6	N-33°-W	(方形)	6.7×(6.6)	5	平坦	4	カマド	攪乱	土師器	IV	SK62・169・ 179と重複
45	D3b0	N-2°-E	(隅丸方形)	3.15×(3.15)	45	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・石製品 鉄製品	IX	SI43と重複
46	D3c2	N-16°-W	(隅丸方形)	6.3×(6.3)	55~60	凹凸	4	カマド	攪乱	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	X	SE3と重複
47	D2c0	N-15°-W	(隅丸方形)	(4.3)×4.0	30	凹凸	3	カマド	攪乱	土師器・須恵器・ 弥生式土器・鉄製 品・土製品	IX	SI49・51と重 複
48	D2c9	N-8°-W	(隅丸方形)	3.7×(3.7)	40	平坦	3	カマド	攪乱	土師器・須恵器 弥生式土器・土製 品・鉄製品	X	SI49・51と重 複
49	D2d0	N-19°-W	隅丸方形	4.20×3.95	50	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器・ 弥生式土器・陶器	VI	SI47・48・51と 重複
50	A4e5					平坦		炉	自然	縄文式土器・石 器	縄文	SI7・8と重複
51	D2c0					平坦		カマド	攪乱	土師器・須恵器	X	SI47・48・49と 重複
52	D4a3	N-17°-W	隅丸方形	3.2×3.0	15	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	XI	SI53と重複
53	D4a3	N-18°-W	(隅丸長方形)	(4.4×4.0)	5	平坦	2	カマド	攪乱	土師器・須恵器	X	SI52と重複
54	C3i8				22	平坦			攪乱	土師器		
55	C4h5					平坦			攪乱	土師器・須恵器 土製品		SK244・SD6と 重複
56	C4b6	N-10°-E	隅丸長方形	3.5×3.1	33	凹凸	2	カマド	自然	土師器・須恵器・ 縄文式土器・鉄製 品	X	SI61と重複
57	C4b3	N-72°-E	隅丸方形	3.2×3.1	15~25	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器 石製品	X	SI58・SB6・ SK264と重複
58	C4b4	N-2°-W	隅丸方形	3.00×2.80	25~30	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器	IX	SI57・SB58と 重複
59	C3g0	(N-10°-W)	(隅丸方形)	3.1×(3.0)	10~14	平坦			攪乱			

住居跡 番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規 模		床面	主柱 穴数	炉・ カマド	覆土	出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							
60	C3f9	(N-6°-W)	(長方形)	5.25×(4.4)	15	平坦			攪乱	土師器・須恵器 縄文式土器	X	
61	C4c6	N-12°-W	隅丸方形	4.4×4.3	20~30	平坦	3	炉	自然	土師器	II	SI56と重複
62	B3f4	N-40°-W	隅丸方形	4.1×3.9	28	平坦	2	カマド	攪乱	土師器	V	
63	B3g4	(N-30°-W)	隅丸長方形	3.1×2.6	25	凹凸			攪乱	土師器	V	
64	B4j3	N-87°-E	隅丸方形	(2.6)×2.5	10~25	凹凸	1	カマド	攪乱	土師器	X	
65	B4j3	N-15°-E	隅丸方形	3.45×3.35	18~30	平坦	1	カマド	自然	土師器・須恵器 縄文式土器	X	
66	B4j6	N-25°-W	隅丸方形	4.9×4.8	60~65	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器・ 縄文式土器・土製 品	V	
67	B4h6	N-5°-E	隅丸長方形	5.1×4.7	65~70	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	X	SI95と重複
68	B4h8	N-5°-W	隅丸長方形	7.0×6.2	70~90	凹凸	4	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	VIII	SI69と重複
69	B4g8	(N-10°-E)	隅丸長方形	4.1×3.0	10~18	平坦			自然	土師器・須恵器		SI68と重複
70	C3a0	N-5°-E	隅丸長方形	4.25×3.80	30~50	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	IX	SK362・SD5と 重複
71	B4e6	N-3°-W	隅丸方形	3.25×3.25	40	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	IX	SI72・73・98と 重複
72	B4e7	N-10°-E	隅丸方形	4.10×3.75	50~70	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器	X	SI71・73・98と 重複
73	B4e8	N-14°-E	隅丸方形	5.9×5.8	50	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	VIII	SI71・72・98と 重複
74	B4f1	N-2°-E	隅丸方形	6.5×6.4	37	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 陶器	IV	
75	B3d6	N-43°-W	隅丸方形	4.6×4.4	90	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	VIII	
76	B3e9	N-8°-W	隅丸長方形	4.83×4.35	10~20	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	X	SI77と重複
77	B3e0	N-15°-E	隅丸長方形	4.7×3.8	30	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器 縄文式土器	X	SI76と重複
78	B3d9	N-18°-E	方 形	3.2×3.1	15	平坦	1	カマド	自然	土師器・須恵器	X	SI79と重複
79	B3d9	N-7°-E	隅丸方形	3.00×2.95	25	平坦	2	カマド	自然	土師器・鉄製品	X	SI78と重複
80	B3e8	N-3°-W	隅丸長方形	3.85×3.15	35	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器	X	SD5と重複
81	B4d2	N-41°-W	隅丸方形	5.80×5.45	13~40	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器・ 縄文式土器・石製 品	VI	
82	B4h4	N-15°-E	隅丸方形	3.05×3.00	30	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器	XI	
83	B4a0	N-8°-E	方 形	3.60×3.47	40~46	凹凸		カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	X	SI84・SD5と重 複
84	B4b0	N-10°-E	隅丸方形	3.45×3.45	40~45	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	X	SI83・SD2と重 複
85	A3j9	N-7°-W	隅丸方形	3.8×3.2	5	平坦		カマド	攪乱	土師器	XI	
86	A3j9	N-1°-W	隅丸方形	4.0×3.8	20	平坦		カマド (2基)	自然	土師器・須恵器	X	
87	K3j7	N-5°-W	(隅丸方形)	(3.0)	5	平坦		カマド	自然	土師器		SI88・SK335・ SF1と重複
88	A3j7	N-40°-W	隅丸方形	4.40×4.05	35~43	平坦		カマド	自然	土師器	V	SI87・SK335・ SF1と重複
89	A3h5	N-10°-E	隅丸長方形	3.10×2.75	6~10	平坦		カマド	自然			SK334と重複

住居跡 番 号	位 置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規 模		床面	主柱 穴数	炉 ・ カマド	覆土	出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							
90	A3g6	N-35°-W	方 形	5.2×4.8	30~40	凹凸	4	カマド	自然	土師器	IV	SI91と重複
91	A3h5				40	平坦			自然	土師器		SI90と重複
92	A3g7	(N-78°-W)	(隅丸方形)	(2.7)×2.4	4~20	平坦	2		自然	土師器		
93	A3g0	N-20°-E	(方形)	6.6×(6.3)	30	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器	V	SK558と重複
94	A3h9		(長方形)	(4.0)×(3.7)		平坦	4		攪乱			
95	B4g5	N-18°-E	隅丸方形	3.7×3.6	60~70	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	X	SI67と重複
96	A3j0					平坦	1		攪乱	土師器・須恵器 土製品		SK412・367・ 368・369・371と 重複
97	A3g9	(N-7°-W)	(方形)	(4.00)×3.98	32	平坦			攪乱	土師器・須恵器 鉄製品		SY26・SF1と 重複
98	B4e7	(N-20°-E)	(隅丸方形)	2.9×(2.9)	25	平坦	3		自然	土師器・須恵器		SI71・73と重 複
99	A4g4	N-9°-E	(方形)	2.5×(2.5)	5	平坦		炉	攪乱	土師器		SI9と重複
100	A4f7	(N-4°-W)	(隅丸方形)	(3.6)×3.4	10	平坦	4		自然	縄文式土器 石製品		SK453・454・ 455・468・469と 重複
101	A4h0	N-52°-W	(隅丸方形)	4.1×(4.1)	5	平坦	4	カマド	攪乱	土師器		
102	B3d5	N-54°-E	楕 円 形	4.6×3.5	32	平坦	4	炉 (2基)	攪乱	石器	縄文	SD5と重複
103	D3i5	N-3°-E	(隅丸方形)	(3.60)×3.45	20	平坦		カマド	攪乱	土師器・須恵器	X	SY32と重複
104	E4d1	N-3°-E	隅丸方形	3.5×3.2	45	平坦		カマド	攪乱	土師器		
105	E4g2	N-36°-W	隅丸方形	4.9×4.9	45	平坦	4	炉	自然	土師器・土製品	I	SB16と重複
106	E3g9	N-2°-W	隅丸方形	3.2×3.2	45	凹凸		カマド	自然	土師器・須恵器	VIII	
107	D4d4	(N-10°-W)	(隅丸方形)	8×(8)	16	凹凸	3		攪乱	土師器・須恵器 古銭	X	
108	F3a6	N-11°-W	方 形	8.5×8.4	10~50	平坦	4	炉 (2基)	自然	土師器・須恵器 土製品・陶器	III	
109	F4a1	(N-14°-E)	(隅丸方形)	3.3×(3.3)	30	襜 鉢状	2		自然	土師器・須恵器 鉄製品	VI	
110	D4e4	(N-17°-W)	(隅丸方形)	2.4×(2.4)	5	平坦			攪乱	土師器・須恵器		SD10と重複
111	D4g6	N-30°-E	(隅丸方形)	(3.0)×2.8	10~26	凹凸		カマド	自然	土師器・須恵器	XI	
112	F4d1	N-13°-W	隅丸方形	4.25×4.00	14	凹凸	2	炉	攪乱	土師器		
113	F3h9	N-4°-W	隅丸長方形	3.80×3.35	65	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 陶器	IX	SI114・115と 重複
114	F3h8	N-6°-W	(隅丸長方形)	(3.40)×2.95	34	平坦	2	カマド	攪乱	土師器・縄文式 土器・陶器	IV	SI113と重複
115	F3i9	(N-11°-E)	(方形)	(3.6)×3.55	10	平坦			自然	土師器・須恵器 陶器	X	SI113と重複
116	F3i8	(N-50°-E)	(隅丸方形)	(4.9)×4.7	5	凹凸			攪乱	土師器		SI117・SK828・ 829と重複
117	F3j8	N-27°-W	隅丸長方形	4.0×3.3	20~35	凹凸		カマド	人為	土師器・須恵器 土製品・陶器	IX	SI116と重複
118	F3i2	N-15°-W	隅丸方形	3.1×3.0	40	凹凸		カマド	攪乱	土師器・須恵器 土製品	IX	
119	F3j1	N-42°-W	隅丸長方形	4.95×3.95	40	凹凸	4	炉	自然	土師器・弥生式 土器		

住居跡 番 号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規 模		床面	主柱 穴数	炉・ カマド	覆土	出土遺物	時期	備 考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							
120	F3j5	N-6°-E	(隅丸長方形)	(3.5)×2.6	18	凹凸		カマド	自然	土師器・須恵器 貝殻・石	IV	SI121・122と 重複
121	F3j5	N-10°-W	隅丸方形	4.00×3.75	40	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	X	SI120・122と 重複
122	F3i5	N-3°-E	方 形	5.3×5.1	40	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	VI	SI120・121と 重複
123	G3a1	N-61°-E	隅丸方形	3.0×2.9	16~20	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器	X	SK858と重複
124	G3c3	N-28°-W	隅丸方形	4.10×3.95	50~55	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	X	
125	G3b4	N-18°-W	隅丸長方形	3.5×3.2	60	平坦		カマド (2基)	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	X	
126	G3b5	N-22°-W	隅丸方形	3.5×3.5	50	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器	X	
127	G3e6	N-22°-W	方 形	2.8×2.6	55	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品	XI	
128	F3c9	N-8°-W	隅丸長方形	3.46×3.05	10	凹凸	2	カマド	攪乱	土師器・須恵器	X	
129	F3e0	N-23°-W	隅丸方形	6.85×6.60	20~25	凹凸	2	カマド	攪乱	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	V	
130	G3a4	(N-18°-W)	隅丸方形	3×3	10	平坦			自然	土師器・須恵器	X	SK819・820と 重複
131	G3a8	N-18°-W	隅丸方形	3.40×3.25	48	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・石製品 鉄製品	X	
132	G3c7	N-5°-E	隅丸方形	3.55×3.20	24	平坦		カマド	自然	土師器・須恵器	X	SI133・134と 重複
133	G3b6	N-28°-W	隅丸方形	4.3×4.2	35	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	X	SI132・134と 重複
134	G3c7	N-27°-W	隅丸長方形	5.80×5.15	45	平坦	4	炉	自然	土師器・須恵器 土製品	I	SI132・133と 重複
135	G3i4	N-12°-W	隅丸方形	3.5×3.5	15~20	凹凸		カマド	攪乱	土師器・須恵器 土製品	X	SI137と重複
136	H3a3	N-28°-W	隅丸方形	3.95×3.65	30	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器	X	
137	G3i5	N-38°-W	隅丸方形	4.7×4.4	60	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 石製品	VII	SI137と重複
138	G3g3	N-16°-W		(3.25)	34	平坦	1	カマド	攪乱	土師器・須恵器	X	1号堀と重 複
139	H3f1	N-88°-W	隅丸長方形	3.5×2.9	25	平坦		カマド	自然	土師器	XI	SK816と重複
140	H3c4	N-7°-W	(長方形)	(5.6)×4.85	70	平坦	1	カマド	自然	土師器・須恵器 土製品・鉄製品	IV	
141	H3f3	(N-4°-W)	(隅丸方形)	2.65×(2.60)	20	平坦			自然	土師器		
142	H2c3	N-12°-W	隅丸方形	5.4×5.4	70	凹凸	4	カマド	自然	土師器・須恵器 弥生式土器	VI	
143	G2i0	(N-29°-W)		6.6	32	凹凸	2		自然	土師器・須恵器	II	1号堀と重 複
144	H2h1	N-13°-W	方 形	4.80×4.75	70	凹凸	3	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄製品	IV	
145	I2b1	(N-42°-W)	隅丸長方形	6.4×5.0	20~35	凹凸	5		攪乱	須恵器・縄文式 土器・石器	縄文	SK859・860・861 と重複
146	I1d0	N-65°-W	隅丸長方形	3.60×3.25	54	凹凸		カマド	攪乱	土師器・須恵器 縄文式土器	VIII	
147	F2i0		(方形)	(3.9)		平坦						焼土

不明の箇所は空欄とする。

茨城県教育財団文化財調査報告第50集

一般国道6号改築工事地内
埋蔵文化財発掘調査報告書(上)

奥谷遺跡

小鶴遺跡

平成元年3月25日印刷

平成元年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印刷 三栄印刷

水戸市谷津町1-50

